# 山岳



Vol.94／1999

KAMOSHIKA.

# 山岳テントをリードしてきた エスパース・シリーズに、

## 究極のプライベートテント

# 「エスパース・ソロ」誕生。

最小限の軽さ[1.5kg]で、広いスペース[間口210×奥行110×高さ100cm]を確保。



スリーシーズン1人用

**エスパース・ソロ**(フライシート付き) **¥35,000**

●カラー：本体・フライシート／ライトグリーン



オールシーズン1人用

**エスパース・ソロ ゴアテックス ¥43,000**

●カラー：本体／グリーン　●重量：1.54kg

[収納サイズ]




[エスパース・ソロ ゴアテックス用オプション]

オールシーズンいっそう快適に使用できるように、前室フライと吹き流し入口(本体側はゴアテックス)がオプションとして用意されています。

**前室フライ ¥6,500**(0.24kg)

**吹き流し入口 ¥9,400**(0.27kg)

カモシカスポーツは登山家の信頼に応えます。

**カモシカスポーツ** ホームページ http://www.kamoshika.co.jp/

山の店・本　店 ☎03(3232)1121　〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-28-6・2F

山の店・横浜店 ☎045(212)2044　〒231-0062 神奈川県横浜市中区桜木町 3-11

●AM10:30～PM8:00(月～金)／AM10:30～PM7:00(土・日・祝)

●定休日／日曜日(6月・7月・8月・12月は定休日なし。他の月は最初と最後の日曜日は営業します)

山の店・本店 移転しました

山の店・穂高店 ☎0263(82)1511　〒399-8302 長野県南安曇郡穂高町北穂高 2827-18

●AM10:30～PM7:00●定休日／月曜日(祝日、振替休日は営業。6月・7月・8月は定休日なし)

第九十四年（通巻一五二号）

# 山岳

一九九九年

# 山岳　一九九九年　目次


ワルテル・ボナッティに聞く
「たての冒険」から「横の冒険」へ……江本嘉伸……7
田部重治の登山と英文学（下）……五十嶋一晃……23
第1回「秩父宮記念山岳賞」受賞記念講演
『ネパール語辞典』編纂のあれこれ……三枝禮子……78
第1回「秩父宮記念山岳賞」受賞記念講演
『ヒマラヤ文献目録』ができるまで……薬師義美……90

西ネパール北部国境の知られざる山群
——カンティ・ヒマールの踏査とチャングラ峰の登山……吉永定雄・大西保……101
厳冬期の東カンツァーリ峰（六一六七メートル）初登頂……増山茂……114
東南チベットの空白部
——岡日嘎布山群を探る——……中村保……125
北極圏の巨大な壁……名越實……145
海外登山基金の十年……「山岳」編集委員会……151

図書紹介
『タクラマカン周遊』（渡辺義一郎）、『外国人と日本の山』（高遠　宏）、『机上登山』（柳下棟生）、『川よ』（関塚貞亨）、『川喜田二郎著作集』（千葉重美）、『山想　第九号』（成川隆顕）、『東海山岳　第八号』（中村　進）、ERIC SHIPTON Everest and Beyond（大島輝夫）、The Duke of the Abruzzi——An Explorer's Life（江本嘉伸）、Wildlife of Tibetan Steppe（児玉　茂）、Meeting the Mountains（児玉茂）、『台灣山岳傳奇』（木村俊博）、会報「山」図書紹介一覧……163

＊

追　悼
村田數之亮氏（宇都木慎一）、田口二郎氏（村山雅美・平井吉夫）、青木　昇氏（織内信彦）、安江安宣氏（梅棹忠夫・水野　勉）、佐藤一栄氏（筑木　力）、新井　清氏（向井裕彦）、中島　寛氏（倉知　敬）、鈴木敏雄氏（井出秀雄）、久野英一郎氏（松本憲庚）、大内幸雄氏（西條好廸）、根津皖一氏（池田錦重）、三和裕信氏（高澤光雄）、椎名厚史氏（松原尚之）、赤坂謙三氏（亀山　哲）、佐野　崇氏（吹田佳晴）、会報「山」訃報・追悼文一覧……195

＊

支部だより……236
会務報告（一九九八年六月～一九九九年五月）……255

山岳図書目録（一九九八年）……A77
はかなさゆえに美しい山上湿原と池塘——白神・田代岳高層湿原自然環境調査報告——……小岩清水……A59
人工改変の進む上高地の自然……岩田修二……A41
英文梗概……A19

写　真
海外登山の記録……128〜129
追悼……208〜209
地　図
NORTH WESTERN NEPAL……112〜113

表紙挿絵・本文中カット　宮下啓三

ワルテル・ボナッティに聞く

# 「たての冒険」から「横の冒険」へ

江本嘉伸

ワルテル・ボナッティが、一九九八年九月から十月にかけて日本山岳会の招きでロッサーナ夫人とともに初めて来日した。東京、大阪などで講演するとともに、東北、京都、富士山麓などを訪れ、日本の登山家たちと交流した。

「ワルテル・ボナッティ」という名に畏敬の思いを抱くクライマーは少なくないだろう。グラン・カピュサン東壁、プティ・ドリュの南西岩稜単独、プトレイ大岩壁、グランド・ジョラス北壁ソロ、ガッシャブルムⅣ峰などなど、一九五〇年代から六〇年代にかけて数々の難ルートの初登攀をやったイタリアの登山家。まさに一世を風靡したクライマーだった。しかし、一方で、ボナッティ？…どんな人？と首をかしげる人々も最近では増えてきているに違いない。ヨーロッパ・アルプスやヒマラヤで活躍したワルテル・ボナッティは、三十五歳になった一九六五年、突如アルピニズムの世界から身を引いてしまったのだから。

ボナッティは、一九三〇年六月二十二日、イタリア北部、ロンバルディア州の県都ベルガモで生まれた。十九歳の時から登山を始め、挑戦の精神に溢れた青年は困難な未踏の壁に魅せられ、たちまち有数のクライマーに成長した。

一九五一年のグラン・カピュサン東壁の初登攀、一九五五年のプティ・ドリュの南西岩稜の単独登攀などアルプス

を中心に先鋭的な登攀を続け、K2やガッシャブルムⅣ峰などヒマラヤやアンデスでも活躍した。二十三歳の年、最年少隊員として参加したK2では、アタック隊員のために八千㍍までフンザ人ポーターとともに酸素ボンベを担ぎ上げたが、テントを発見できずビバークを強いられた。この時の行動が隊から批判され、ボナッティは以後「大遠征登山」を嫌うようになる。

ボナッティが、山の生活を通じてもっとも親しんだのはモンブラン山塊だった。しかし、一九六一年、そのモンブランで悲劇が起きた。フレネイ中央岩稜をフランス隊とともにアタックし、頂上直下で嵐に襲われ、下山途中、アンドレア・オッジョーニら四人を失う、という事態となったのだ。ロベルト・ガリエーニ、フランス隊のピエール・マゾーは生還した。ボナッティは仲間たちを救出しようと奮闘したが、結果的にこの登山は手厳しい批判を受けた。

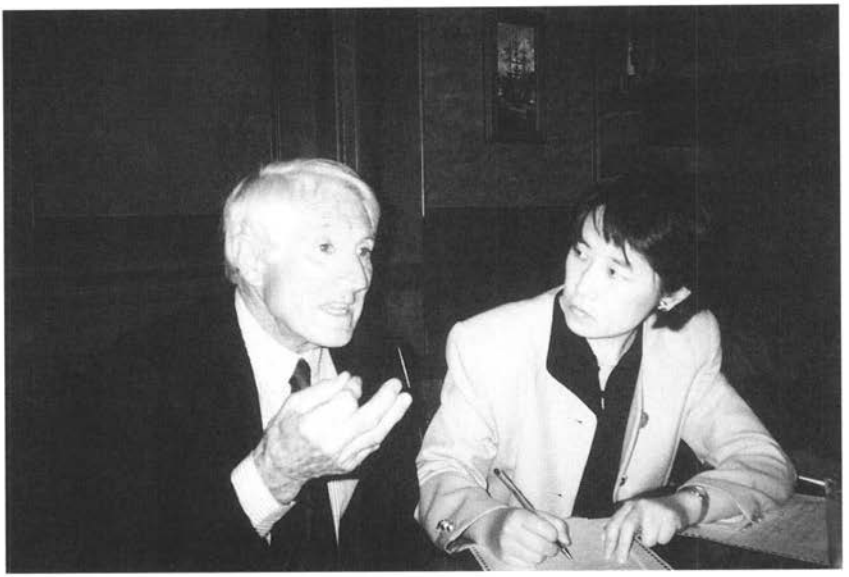
一九六五年冬、マッターホルン初登頂百年を「祝って」ボナッティは、大胆な挑戦をした。この山の北壁の冬季単独初登攀をやってのけたのである。

しかし、この挑戦は、単に勇敢な「たての冒険」の行為というだけではなかった。ワルテル・ボナッティは、この登攀を最後に、三十五歳でアルピニズムの世界から離れ、挑戦の対象を「横の冒険」へと変えてゆくのである。

山岳の世界でボナッティの名は年々遠ざかってゆき、その輝かしい登攀を知る者は、比較的ふるい世代か、ボナッティから登攀の哲学と心理学を学びとりたい、と願う現役クライマーに限られるようになった。

いまや文字通り〝伝説のクライマー〟となったボナッティにインタビューをするにあたり、過去のさまざまな体験についてではなく、現在どのような生き方をしているか、を中心に聞きたい、と思った。ボナッティの一九六五年までの行動については、さまざまな著作、インタビューを通じて伝えられてきたが、いま、どのように生きているか、についてはほとんど知られていない、と考えたからだ。

なお、インタビューは、富士山などいくつかの場所を一緒に動き、さまざまな話題について率直な会話をかわした後、あらためて都内で行われた。ロッサーナ夫人も同席した。映画「トロイのヘレン」などで主演した有名なイタリ



**「横の冒険」を語るボナッティ氏**（右は通訳の堂裏さん。江本嘉伸撮影）

アの女優、ロッサーナ・ボデスタである。通訳をお願いした堂裏律子さんの正確、誠実な仕事ぶりに感謝したい。

（江本嘉伸）

――このインタビューは、日本山岳会の年報『山岳』に掲載するつもりです。私としては、ボナッティという人、その生き方、登山家として、あるいは冒険家として、また普通の市民として、どういう人間であるかをできるだけ詳しく伝えたい。

いきなり、日本について。あなたは世界中いろいろなところを旅してきたが、日本に来てどんな印象を持ったか？　来る前と変わったか？

「日本という国そのものについては、滞在した前と後で、そんなに変わってはいない。でも日本人、人については印象は変わった。日本人が非常に繊細であること、やさしく、親身になって相手に何かをしようという気持ちを持っている人たちであることを知ったが、これは私にとっては信じられないことだった。

イタリアにいる日本人を何人か知っているが、そういう人たちは、皆イタリア人の影響を受けているので全くの日

本人とは違う。今回の滞在はその意味で貴重な体験だった。家族の中にいるような感じを受けている」

――たとえば、そういうふうに親身になってくれる、という意味で、地球上のどこかに似た民族はいるか？

「まず、よく言われるように、日本人はある意味でドイツ人と似ている。秩序とか正確さとかきっちりしている、とかそういう意味で。でも、そういってしまっては、まったく違ってしまう面もある。日本人はラテン系民族のあたたかさも同じにもっている。そのことが私が日本にいて家族の中にいるような気持ちになる理由だと思う。ラテン系のあたたかさを日本人は持っているし、それと同様にドイツ人のきちんとした部分をあわせもっている、と。

私はイタリア人だが、個人的にはドイツ人の秩序正しさ、きちんとしている性格に似ている部分があると思う。私の個人的資質と、イタリア人の血が日本人への親しみを生み、日本にいて家族といるような感じになるのだろう」

――そういう見方をされると、日本人は嬉しいだろう。ところで、ロッサーナ夫人はどちらかというと、ドイツ的ではなく、ラテン的ではないですか？

「妻は、典型的なラテン人だと思う。彼女がそうであることによって、私と彼女は非常に調和のとれた関係ができている。互いに違うところはあるけれど、それが非常にポジティブに作用していると」

## 自分の力を測る場所を山から別な場所に

――今回、あちこちご一緒して、調和という点で見事なご夫婦との印象を持った。ご家族のことはあとでふれることにして、本題に。

モンブランのフレネイ岩稜の登攀、冬のマッターホルン北壁単独登攀などアルピニズムの世界でもっとも挑戦的な登山をやっておられたあなたが、三十五歳で山から別の冒険の分野へ踏み出した経緯について、聞きたい。「たての冒険」から「横の冒険」に移られたきっかけは、何だったのか？結構勇気のいる決断だったのではないか？

「まず最初に私の性格として、非常に好奇心が強く、想像力が旺盛で、冒険心が強い、ということがある。こうい

う性格が私をまずアルピニズムに向かわせた。いわゆる登山家としての活動をずっとある期間やったが、自分自身の基準とか自分の立っている位置からみていわゆるアルピニズムができなくなった、それが合わなくなった。そのことによって自分の力をはかる基準がぐらついてしまった、そういうことが起きた。それで、別のてだてが必要になったわけです。

新しいものを選ぶ勇気は確かに必要だったが、私は自分自身がその経過のなかで変わった、とは思っていない。自分自身を知るとか、自分の力を測るとかそういう場所を山から別な所に変えたというふうに自分はとらえている。アルピニズムというものは私に多くのものを与えてくれたが、そこで求めたと同じものを場所を変えて求めているわけだ。

確かに、同じことをする、繰り返すこともメリットはあるし、よいことではあると思うが、繰り返すのでなく、新しいことをやることを私は求めた」

――新しい場所を求めようとした時に、具体的にはどんなふうにやろうと？ひとりでやってもいいわけですが、それでは表現の場が持てない。

「私はある時期、アルプスのガイドとして働いたことがある。ガイドというのは山に人を連れて登り、それによって収入を得る職業だ。難しい登山の仕事は私のところに来る。しかし、山に登ることは、命に関わる行為だ。人が死ぬとか生きるとかいってるときに、その価値は金銭ではかれるものではない。そういったことで収入を得ることが、心理的にもモラル的にも、受け入れられないようになってしまったわけだ。それで何か別のかたちにしたい、と考えて、その結果、ジャーナリズムを選んだ。

ジャーナリズムというのは、読者をどこかに案内していろいろなものを見せる、いわば一種のガイドだね。すでに一九六〇～六五年の間、まだ山に登っていた時期に新聞・雑誌の仕事もやった。『エポカ』という雑誌もそのひとつだったが、山をやめたときにその『エポカ』が自分を特派員として及び写真家として雇ってくれることになったので、

そこから始まったわけだ。

山岳ガイドをしていたときはモラルの上でも心理的にも自分の中に矛盾があった。そうかといって、生活してゆくためには何か職業を得なくてはならない。そういう自分の心の中の葛藤に折り合いのつく仕事としてジャーナリズムを選んだのだ。ジャーナリズムにおいては、自分が登山の時に持っていた理想とか心とかを、それほど矛盾なく移すことができた、と思う」

――実際に山のガイドとして仕事したのは、いつからいつまで？

「一九五四年から六〇年までの六年間」

――おっしゃる通り山が好きだ、でも仕事もしなくてはいけない、という人は日本にもいる。山のプロフェッショナリズムというものをどのように可能と考えているか、あるいはいま現在、山登りしながら生活したい若い登山家にどういうアドバイスをしたいか？

「自分自身のことは今言った通りだが、こういう問題は非常に主観的なことと思う。それぞれの人生にかかわることなので自分で決めるべきことでしょう。私のケースは参考にはなるだろうが、アドバイスという形では何も申し上げられない」

――では、登山を仕事として生活することはあってはならない、もしくは、そうしない方がいいと考える？

「そのご質問についても非常に主観的なことですので、私がどうのこうのと指導したり、これはダメだ、これはいい、というふうに日本の登山家の皆さんに言うことはできない。実際にアルプスでガイドをしている人たちはいろんな考えを持っていていろんなふうに行動している。現実的にはそれぞれの登山家が自分がいいと思ったふうに行動しています。

ただ、ひとつだけ、私が不快に思うのは、理想を語りながら一方では全く別のことをビジネスとしてやっている、そういうやり方だ。

自分自身というのは、他人の目にうつっている自分というのも、自分自身であると思う。他人にとって、自分がある模範だとする。人が自分を判断の基準として自分を選ぶとするね。そうすると、自分が望まなくとも、モラルという点からも、社会的に見た場合からも、他人の目にうつる自分というのが自分であるわけだ。だから、そういう他人の信頼を裏切るということは自分自身を裏切ることになる、と思うんだ」

――ボナッテイさんの以前のインタビューをいくつか読んで、同じイタリア人のラインホルト・メスナーのことを当初は自分の後を継ぐ存在と、高く評価していたのが、近年は批判的になっているのだ、ということを感じた。いま言われた、「あまり好きでない生きかた」にラインホルト・メスナーもはいるか？

「まず言いたいのは、メスナーは私とはまったく別の世界に属する人なので私とは関係ないということだ。しかし、ご質問があったのでお答えする。

『大いなる山の日々』（江本注：一九七一年の著作。冒頭「偉大にして古典的な山登りの若き最後の希望であるラインホルト・メスナーに」との献辞が添えられている。邦訳は白水社から刊行）を書いた当時は、メスナーは私の後継者と考えていた。けれども彼は違う道をとった。私の後継者ではなくなったのだ。しかし、そのことで彼を批判したわけではない。私が批判したのは、彼が言うこととやることが全く違うという点だ。彼は理想を語り、非常に純粋なことを言う。でも、実際にやっ



富士山五合目でロッサーナ夫人と（江本嘉伸撮影）

ていることはビジネスだ。実業家だ。彼がビジネスマンであることは構わない、とやかくは言いません。しかし、山の理想を言い、きれいなことを言いながら私たちを巻きこんでいる、そのことが私の批判の対象となっているのだ。

強調しておきたいのは、メスナーのような人と私は、まったく反対の極に位置する、ということだ。彼は、人々の関心を惹きつけるため、というよりスポンサーがそのように仕向けていった、ということもあるのだが、ヒマラヤに雪男がいるというようなことを言って、人々の関心をひくために新聞や雑誌にそのようなことを発表し、雪男を見つけに探検に行く、と声明し、スポンサーの側もそういう彼をまつりあげて、ずうっと何年間もやってきたわけだ。

で、最近彼が発表したところによると、ヒマラヤの雪男というのは、実は雪男ではなくて、熊だった、と。そんなことは昔から言われていることだ。でもメスナーと彼をまつりあげるスポンサーは、ビジネスのために、人々の関心を惹きつけて利益を得るために、何年も何年もやっていたわけです。

こういったことを言ったのも、二種類の人間がいるということを申し上げたいからだ。アルピニストとしては最早なくて、人間として全く違うところに属する人たち、つまりメスナーのタイプ、もう一つが理想を持ち、なおかつそれを実践しているアルピニストたちです。その二つは、全く対極にある」

## 人間としてのボナッティを見て欲しい

――ほんとうならあまり話したくないかもしれない質問に、率直にお答えくださってありがとう。もし言えるのであれば、では、理想をもって山に向かっている人は、たとえば誰ですか？そういう人をいま見つけられますか？

「メスナーのことにお答えしたのは、おっしゃるように、まさに質問があったからであって、メスナーのことは自分とは全く別の世界の人間で関係ない、と考えている。けれどもご質問があったのでお答えしたわけだ。

で、理想を持って、なおかつその理想と矛盾しない行動をとっている人たちがいる、と申し上げたが、そういう人は沢山いる。しかし、新聞、雑誌などのマスコミにとりあげられることはない。というのは、彼らは表にあらわれる

ことはないから。ただし、これはヨーロッパの話で、日本では山は神聖なのでこういう問題はあまりないと思う。ヨーロッパというのは、山を神聖視することはないので、いろんな世俗的なものがからんでくるわけだ。そのなかでも、アルピニズムの規範というものはあるが、規範というのはもともと存在していたものではなく、人間が作ったものだ。

私自身に関していえば、そういったことでアルピニズムの規範について矛盾を感じたことはあるけれども、自分のやったことで、人は自分を判断すると思っている。たとえば、今回日本に来たことによって日本の人々はより私のことをお知りになったかもしれないが、私はそのことをビジネスとは考えていない。まずはじめに、アルピニストとしてではなく、人間としてのボナッティを見てほしい、と思うし実際そうしてもらっている。一番嬉しいのは自分が書いたものを人々が感動を覚えてくれたり、夢見てくれたり、自分の経験を人々が共有してくれることだ。人々に知られることが大事なのではなく、人々が私の経験を共有してくれることに、喜びを感じている」

――私も人間ボナッティが、いまどうしているか、を知りたくて、こうしてお会いしている。アルピニストとしてのあなたは、これまで多くの本や記事に出ている。あのボナッティは、いまどう生きているのか、ということが私にとっては一番関心のあることです。

「その言葉が私にとってとても嬉しい。というのは、仕事も芸術も山も、何もかも、すべてのことの上にあるのは、人間だからだ。人間の下にあるものは、人間を成長させるものであって、上にあるのは、あくまでも人間ですから」

――登山の世界でいうと、輝かしい登山を終えると、そこで「過去の人」になる。メスナーの場合は、彼は栄光のある人生をもうちょっと続けるために、今度は話題性のあるテーマを多分見つけたのでしょう。しかし、今回ボナッティさんにお会いして、いまを充実して生きている人間、という印象を強く持った。その秘訣はどこにあるんだろう?

「まず私は、自分自身であり続けることを非常に大事と思っている。自分自身であり続けることは別に場所は山でなくともいい。人間としての経験を積み重ねてゆくことが大切なのだ。境界線を押し広げてゆくことが私にとって重

要だったわけで、それはほかでもない、私が人間として成長し続けるということなんです。それは、別に人の関心を惹くようなことでなくてもいい。あくまで自分自身が成長し続けてゆくことが大切なんだ」

――自分のその境界線を広げるために、一番最初にどんなことをした？ユーコン川での冒険？それともその後の寒極に行ったこと？そしてどんな場所が最も印象的だった？

「ユーコンはそこでも山に登ってはいますが、今までと同じやり方ではなかったので、言い方によっては〝横の冒険〟の最初といえるかもしれません。しかし、私自身は、『寒極』に行ったのが、私にとって最初の〝横の世界の冒険〟と考えている。私はジャック・ロンドンの小説とかヘミングウェイの小説とか過去のそういうものにインスピレーションを得て過去の冒険家たちの跡をたどって同じ思いを再現するために冒険をし、そのことを本に書いてきた。カナダとかアフリカとかソ連（当時）のオイミャコン付近（注：マイナス七六度の記録がある）。それからカナダ、アフリカ、極東、ニュージーランドなどいろんな場所、メルビルの小説の舞台、イースター島とかいろいろな島、あらゆる所を見てきたが、一番強い印象を受けたのは、南米大陸だ。そこは、私にとっては、魔法の場所といえるような、強い印象を受けた場所だった」

――なぜでしょう、そして具体的に、どんな地区？

「いくつか要因があるが、ラテン民族なので、私とは波長があうのだろう。マヤとかインカとかふるい文明が私に夢を見せてくれるし、自然についてだが、コントラストが大きいことが私にとっては魅力だ。たとえばチリにしてもペルーにしても太平洋に沿って二〇〇キロ行くとする、砂漠もあれば非常に高い氷に閉ざされているような山もあり、森もある、というふうに、いろんなコントラストに満ちた自然がそこには見られる。

私は先住民族に人間の原点を見た。彼らは貧しい、シンプルな生活をしている。けれども人間としての尊厳に満ち溢れる暮らしをしていた。彼らは自然と調和して生きている。それは文明人の失ったものだと思う。野蛮とか人に危害を与えるかのようなイメージを持つ人がいるが、私にとってはミラノのような大都会こそ危険で野蛮です。研究者

が研究と称して、先住民族のことを調べている。彼らは服を着ないとか、化粧を真似するとかしているが、生活そのものはアメリカ式。私も生活を共にしたことがあるが、文明を教えるというのではなくて彼らの生き方を学びたい、と思い、そういう姿勢で生活した。生活の中で彼らが体験している危険も共有した。それによって彼らと同化できたし、そのことを誇りに思っている。ほんとうの意味での人間的な価値を彼らは持っている」

——いま言ったことは、アマゾンの流域の人たち、たとえばヤノマミ族ですか？

「そう、ヤノマミ。他にもペルー、ボリヴィアなど多くの地に行ったが」

——最初の冒険であるシベリアの寒極の体験について。寒さそのものは、ヒマラヤやアルプスでも体験していたと思うが、何が新鮮だったか？自分の生き方を変えた、境界線を広げた、ことへの感動があったのか？

「まず、水がない。冬、川は二メートルぐらいの厚さに凍っているから。それをどうするか。農家で薪を外に置いておくのと同じように、川の氷が少ないうちに切りとって積み重ねておく。タイガの家の中ははだかでいられるくらい暖かい。熱を身体に貯めておいて、身体が温まった状態に毛皮を着ると、外に出ても大丈夫になる。以前、『エポカ』でどうしてそんな寒いところで生きていけるのか調査したことがある。雪は降らない。けれども地面には雪が積もっている。これは何かというと、空気中の水分が結晶となって落ちたのが積もっているわけ。それは、雲みたいな感触で、軽くてふわふわしている。

家から三〇キロぐらいのところでトナカイを飼っているんだが、三人ぐらいずつ一五日から二〇日間交代でトナカイの世話をしに行く。大陸性気候なので非常に寒い。しかし風はない。タイガだから木は沢山ある。ここがテントです。火をこうやって（テントを中心に三箇所の焚き火を図に描きながら）三箇所で焚く。毛皮を敷いて、風がないので、温まった空気が壁のようになって、外の冷たい空気を遮断してくれる」

——面白い。それは、いつのことですか？

「六二年から六三年にかけての冬。フルシチョフの時代ですよ」

――へえ。フルシチョフ。それでは、この地域に入る許可を取るのは大変だったんじゃないか？当時は外国人はまず入れなかったが。

「面白い話がある。『エポカ』はどちらかというと、右寄りの雑誌なんだ。でもソ連の雑誌『ノーボスチ』といい関係を持っていた。『ノーボスチ』の編集長がフルシチョフの個人的な友人だったんだ。そのおかげでイタリアの共産主義者でさえも行けなかった場所に私たちは行けた」

## 自然と対話する力を取り戻したい

――なるほど。よくわかります。私も社会主義国内のエクスペディションでいろいろ交渉した経験があるので。

「ソ連のそういう場所にはいるためには、コネとか友人関係を使うことが唯一の方法だった。エポカの三人、二人のロシア人ジャーナリスト、ヤクーチヤに五人が着いたんだが、そこは二人のロシア人にとっても外国だった。十五年の間、私たちがその場所に入れた唯一のジャーナリストだった。どういうふうにコミュニケーションをとっていたかというと、ロシア人の通訳がヤクート語からロシア語へ、もう一人の通訳が、ロシア語からフランス語へ。私たちはフランス語はわかるから。

水がない、ことだけでなくトイレも大変だった。唯一きれいに色を塗った建物がトイレなんです。それが一〇〇㍍から一五〇㍍離れた外にある。それで、テントを出る前にタマネギみたいに重ね着して行くんだが、たどり着いたら今度は一枚、二枚、三枚、と脱ぐ儀式をやらねばならない。終えたらまた一枚、二枚、三枚、とひきあげる。それからあたたかいテントに戻るのです。

呼吸もひと仕事です。決して口で息をしてはいけない。気管が凍りつくから。鼻でしないと」

――そういう経験を『エポカ』に何回ぐらい連載したのですか？

「八〇回ぐらい。写真と文章を含めて一回一六ページから二二ページほどだった」

――これは一冊の本になっているんですか？

「一冊だけではない。なぜ私がこういうことをやったか、どんなふうにやったか、についても本の中で書いた。私のやったことのすべて、戦って勝つためではなく、調査の視点に立って先住民と共に暮らしたり、動物と一緒に暮らしたり、火山の火口にはいってみたり、という、いろいろな体験が凝縮された結果を書いた。

――動物との関わりについて聞きます。ライオンなど野生との出会いについて話してください。

「話せば長くなる。いろいろ話すと頭がおかしい、と言われそうだが、私と野生動物との関係は北米のアラスカやカナダで、始まった。ユーコン川を二五〇〇キロほどひとりでカヌーで下ったんだ。身を守るために銃を持っていた。はじめのうちは、クマやオオカミに出会うと、まず恐怖感が来た。発砲することはしなかったが。

でも、何日もたって、銃は次第にカヌーの奥深くにしまったままになっていることに、気づいた。日々自分が自然に同化していったんだ、と思う。そういう自分がおそらく動物の側もわかるのだろうか、危害を加えない。

先住民の人々についても、はじめは通訳を通して話していたんだが、だんだん自然に同化してゆくと、その関係も変化していった。そういう中から、本で知ったことと、現実は一致しない、ということがわかった。本には野生動物は危険である、と書いてある。しかし、私にとっては危険なものではなかった。

カヌー下りをはじめて二日目の夜、とても疲れて川岸にテントを張り、毛布をかぶって寝た。起きてみると、自分のまわりにグリズリーの足跡がいっぱいある。無事だったからなんて運がいいんだろう、と思ったのだが、よく考えると、それは運、不運の問題ではなかった。それからもクマに出会った時、二時間ぐらい静かにして見ていると、クマは去ってゆく。多分お互い信頼関係ができたのだと思う。

こうした体験を通して、自分の動物性に目覚めた。野生から離れた文明人というのは、野生動物と関係はないので、互いを敵視したりするが、関係があれば、わかりあう部分がある。文明人は、理解しようとせずに拒否しようとする。私の中のそういう動物性の目覚めに気づいたことによって、私は銃なしに、ライオンとかスマトラトラとかサメとか

いわゆる野獣といわれている動物たちと接するようになったわけだ。

冒険を通して、人はもともと動物性を持っていて、自然と対話する力が眠っている、と気づかされた。その力を取り戻したい、という気持ちから本を書いたわけです。それが取り戻せれば、先住民や野生に対する誤解が減って自然への理解が深まると思う」

――エコロジーということが登山の世界でも大きな問題になってる。ボナッティさんのご意見は。

「個人の責任だ。エコロジーというのは、あれはダメ、これをしてはいけない、というふうに禁止事項で守るべきものではなく、個人の責任だ。自然を傷つけないというのは、個人の責任です。自然が好きだ、自然を愛している、と言いながら、ものを捨てることはよくあるが、そのように矛盾に満ちている。ヨーロッパではエコロジー運動が非常に盛んだが、きれいなことを言っても、行動が伴わない。一方で消費主義が強いから。

個人の責任でエコロジーはとらえるべきで、ヨーロッパでやっているように大々的な運動というのは疑問に思う。人間の価値というのは、自然破壊などの問題を解決するんだ、ということではなく、極端に走らずにできることを現実的な方法で実行しなくてはいけない、と思う。責任とか人間性とかいった人間の価値によって人間そのものを救うということが、自然を救うのだ、と思う。それは禁止ではなく、あくまで個人のレベルで行われるべきだと」

――最後に私的なことを。ロッサーナ夫人との出会いについてですが、ロッサーナさんが、雑誌のインタビューで、「離れ小島にひとり着いてそこで一生暮らさなければならない時、どんな男と暮らしたいか」、と聞かれた時、ボナッティさんの名をあげた、という話ですが、ほんとうですか?

「大体は、その通り。砂漠で迷うようなことがあれば、誰と一緒にいたいか?というような質問だった、と思う。ただ私はインタビューの記事は読んでいなかった。ある日、友人が教えてくれ、そのような内容と知り、会いたい、と思った」

**ロッサーナ夫人**（笑いながら）「海で遭難して離れ小島にたどり着き、そこで一生過ごさなければならないとして、

誰と一緒にいたいか？　という質問でしたよ。『グラッチア』という女性雑誌のインタビューで。で、ボナッティ、と答えました。実は、それ以前にも似たような質問があって、やはりボナッティの名をあげたのに、グラッチア誌のものが大きく取り上げられたのです」

――なぜ、そう思ったんですか？

**ロッサーナ夫人**「なぜかって、勿論彼の登山については知っていました。でも、それより強い印象があったのは、『エポカ』に連載していた彼の記事で、ああ、こういうことを私もやりたい、と思ったんです」

――それを聞いて、嬉しかったでしょうね、ボナッティさん。

「インタビューについて知った時には、男ですからとても気分がよかった。彼女は女優で美しいし、有名人なのに、なぜ私のことを？　ほかにも何千もあげるべき男の名があるだろうに、どうして自分の名を？　と思い、もしかすると何かフィーリングがあうかもしれない、共通点があるのかもしれない、と考えた。実際に会って、そうであることがわかったんだが。今でこそ、二人とも年をとりましたが、当時は彼女はそれこそ引く手あまただったんです」

――貴重な時間を、どんなことにもお答えくださり、ありがとう。最初に申し上げた通り、ボナッティさんが現在をどう生きているかが、私には一番関心あることでした。おふたりが互いに自然に生きている、というのが強く印象に残ります。なお聞きたいことばかりですが、今回はこのへんで。

**「インタビューを終えて」**

ワルテル・ボナッティは、表現力のある人だ。常に質問の真意を考え、それにもっともふさわしい言葉を発しようとする。もし、質問を一九六五年以前の彼の〝登攀期〟の事柄にしぼったとしたら、ボナッティは長い時間をかけて誠心誠意、自分のクライミング人生について語るだろう。

ボナッティが言いたいことは「仕事も芸術も山も、何もかも、すべてのことの上にあるのは人間だ」という言葉に

集約されるように思う。彼はいままでも、いまも、明日も「現役の」人間であり、その意味で「引退した元クライマー」という表現は、ボナッティの本質を誤解することにつながるだろう。

アルピニズムについても、ボナッティは、別にやめたわけではない、と言っている。来日中、ほかにもいくつかの講演をこなしたが、その際彼のスライドの中に、一九七六年頃に撮ったグラン・カピュサンの写真があった。この写真について、ボナッティは『山と渓谷』誌での須田義信、能崎和宏との会談の中で、「グラン・カピュサン登頂二十五周年を記念して肉体的精神的に自分がどれほど耐えられるか、ということに挑戦した」と語っている。一九七六年といえばボナッティ四十六歳の年であり、三十五歳で完全に山の世界から離れてしまったわけではなかったわけである。

同じイタリアのラインホルト・メスナーについての批評は、近年になってはっきり口にするようになったようだ。一九九三年に出たニコラス・オコネルの「ビヨンド・リスク」での対談では「若い世代のクライマーでアルピニズムのクラシックな伝統を継承したのは誰か」と聞かれ、メスナーの名をあげている。最近の雪男探検をめぐるメスナーの行動と発言がボナッティにはよほど許しがたいものだったのかもしれない。

ワルテル・ボナッティの「横の冒険」について私が惹かれたのは、あのボナッティがその後の人生をどう生きているかを知りたかったのと、クライマーが星霜を経て他の世界にどのように転進していくか、興味を持ったからだ。

一流をなした登山家が選ぶ次の道は南北両極点への到達、少年少女たちの野外環境教育、というふうに相場が決まっている。その選択の幅は意外に狭い。その意味でボナッティが表現者として地球のあちこちを彷徨った経緯、さまざまな新しい挑戦についてはさらに時間をかけて聞きたい、と思った。

# 田部重治の登山と英文学（下）

五十嶋　一　晃

## 六、法大山岳部初代部長としての二十一年間

田部重治は一九二二年、法政大学に法文学部が新設されると同時に、夏目漱石門下の一人として英文学教授に迎えられた。三十八歳である。そして十九年に創設されていたスキー部が、二三年四月に学友会の一部に承認されると同時に、その部長にも就任した。スキー部が翌年四月スキー山岳部に改組し、法政大学内に組織的な山岳活動が開始されたが、部長を継続している。

二五年五月スキー山岳部から独立した法政山岳会（二六年十一月山岳部に改称）の部長にもなった。その後四五年十月に、桂田利吉が山岳部の部長を継ぐまでの二十一年間就任している。田部が四十歳から六十歳までで、大正末から昭和の第二次世界大戦終戦直後の間であった。その期間は、日本の山岳界においては大学山岳部を中心に、積雪期の山々の初登や岩場の開拓がなされた時代である。その間にあって、田部は山岳部の部員や山想会会員と山や渓を歩き、法大山岳部の個性ある部風の創造に大きな影響を与えた。

### (一) 山岳部部員・山想会会員との交流

法大山岳部の機関誌『山想』およびそのOB会である山想会の旧機関誌『山想會々報』から田部重治と部員や会員が親しく交流をおこなっていた様子をたどってみよう。田部は部員や山想会会員の懇談会に出席して、山登り以外の人生訓なども多く話していたことがよくわかる。

一九二六年十一月五日の部員懇談会では「食後田部、平野両先生を中心として歓談に時の過ぐるを知らなかった」と記されており、二八年一月二十一日のスキー合宿懇談会に「田部先生の御馳走のビールに皆いゝ氣持に酔い乍ら牛鍋を圍んで愉快に語り合った。先生始め氣の早い連中はもう二月の計畫について夢中だった」。あるいは同年六月三十日の講演会では「御岳から乗鞍への森林の美を説かれる田部先生の御話し振りは、まるで先生のウァールズウァースの詩の講義をされる時とそつくりだ」（当時文学部の学生ではない部員が田部の講義に出席していた）などと載っていて、田部は部員とはよく話をしたようである。

二九年三月十三日から二十一日の間に行われた信州熊の湯スキー合宿では「田部先生十七日入山。十八日志賀山……夜は田部先生を中心に、山と藝術と社會問題に就いて大いに語りつゝスキーの手入れ」「十九日横手山、夜は前夜より引き續き田部先生の話し、妖氣朦朧たる話に比すべくもあらぬ高く、美しく清き活（ママ）して更け行く」との記録があり、山以外の芸術や人生についても田部が部員に語り、その語らいによって部員は教養を高めた。

田部が著した「雪の熊ノ湯」の一文でスキー合宿のことをこう書いている。「宿にはひつて炬燵に入れば、流石に嬉しいやうな氣がする。夕暮になつて滞在してゐる知人達が山から歸つて來る。一緒に溫泉にはひる。ぬるいやうではあるが、あとのほてりがよくて氣持がよい。夜、皆で、炬燵のめぐりに久しぶりで寛ぎながら話す」。知人達とは部員のことであるが、ここでも田部と部員の親しみのある、ほのぼのとした温かい関係が描かれている。

山想会の例会が一九二九年から三六年まで、年に四・五回行われていた。田部はほとんどの例会に出席していたが、出席の度に山想会会員に山や人生についての話をしていた。三七年の山想会新年会において「田部先生より今春卒業

する人達に餞として述べられた言葉の中『吾々山岳人は山を生涯の友として熱愛するものでなくてはならない』の一言は吾々にとつて味はふ可き言葉であつた」と記され、つづいて三七年十二月発行の『山想會々報』には「會員消息」欄に「田部先生　歳も口も筆も相變ず達者ですから諸兄心配なく、先生が山を歩くと日本一が一つゞつ増して行きますが、最近の日本一など一夕御伺ひ致し度いものです。尚先日（十二月二日）先生の奥様の母上が八十歳の高齢で亡くなつたので今冬は山へも行かずに謹慎するさうです」と載っており、とにかく話好きで部員と会えばよく話していた様子が描かれている。

『山想』二号の「山男は嘯く」の中に「田部部長と味噌汁」と題して「昨夏先生と一緒に南アルプスに行つた時の事、北澤小舍で東京の味噌で作つた汁を先生一口呑んで『之は甘くて駄目だ、僕はからい汁でないと飲めないんだが』地元連よし之が甘ければ鹽をうんと入れてやれ。今度は先生一口飲んで『むゝ之はからくて飲めない』」といった滑稽な話までが載っている。

同じ『山想』に小林三郎の「熊の湯斷片」と題する一文の中から「今年（編者注…一九二九年）の三月、田部先生がスキーで始めて此處へ來られて、まるで雪の海の大洪水と驚かれたさうだ」「田部先生が今年初めて参加下さつて別にお小言も出なかつたやうであるから熊の湯も案外待遇が悪い方でないのかも知れぬ」など、部員は田部に親しいなかにも相当気を使っていた様子がよくわかる。『山想』三号の「山男は嘯く」に角田吉夫は「田部部長と刀」と題して「私達が未だ赤ん坊の時分に、先生は既に槍だ、薬師だといつて山を這ひあがつてゐたのだ。時折話してくれる昔話は興味深いものばかりである。秩父大黒茂谷で遭難した時の事は既に『日本アルプスと秩父巡禮』で有名である。然し今でも先生はあの時食べた歯磨粉はおいしかつたと言つてゐる。先日或機會に珍談を一つ話してくれた。それは先生が大昔に薬師へ行つた時の事だと思ふ。熊の襲來を恐れてか、家傳の名刀を一振腰にさして山を歩いた事である。蓋し珍談中の珍談ではないか。今迄は誰にも話さなかつたそうである。恐らく今度發行される先生の『山と溪谷』にも發表される事はなかろう」という一文を見つけた。その後に田部は紀行文の中で、父が刀を持参するよう勧めたと

発表しているが、田部と部員とのユーモアあふれる話である。そして、一九二九年六月に刊行された『山と溪谷』の「自序」には「本書に挿入せる寫眞は、日本山岳會會員及び法政大學山岳部員諸君の手になるものを、それぞれ好意あるゆるしを得て掲げたものである」と記されているが「法政大學山岳部所蔵」として七葉が載っており、部員がその出版に協力を惜しまなかったことがうかがえる。

以上その一部を紹介した。部員との山行は略年譜に記したので、ここではあえて取り上げない。

田部重治の著作には、法大山岳部が発行した『山想』や山想会会員が執筆した『スキーの山旅』、会員が個人的に執筆刊行した著書以外には、法大山岳部に関しての記述が少ない。田部とよく山行を共にした山想会会員の田中菅雄は四五年フィリッピンで戦死し、田部と部員の関係をもっともよく表す人が若くして亡くなった。

角田吉夫著『上越國境』（三一年八月大村書店発行）の「序」において、田部は「角田君は新進の登山家である。……君は夏山に於てのみならず、冬山にも通じている。否な私の知る限りに於ては、君の登山はスキー登山に始まってゐる。君は凝り性である。一たび事に従事すれば、其事に徹しなければ止まない性格をもつている。スキー登山に於ても、岩登りに於ても、山岳寫眞に於ても、君は決して人後に落ちるものではない」と述べているが、田部は角田の登山に対して相当信頼していたことがよくわかる。もっとも田部が日本山岳会の評議員であったときの二七年九月に角田が入会して、『山日記』には七ヵ年編集代表として尽力したり、『山岳』の編集に貢献しているが、田部の強力な指導があったのだろう。田部は一九三五年に発行した著書『山と溪谷』の戦時體制版に、「昔と今との登山道路の變化には、注を加えて注意を與えることに努めた。……『登山行程表』や『五萬分の一陸地測量部地圖參照表』などにも多少の訂正を加えた。……是等の訂正は角田吉夫君の援助によるところが多い」と述べ、角田に感謝の意を表している。

菅沼達太郎著『東京近郊の山と溪』（三一年九月大村書店発行）の「序」において、「菅沼君は登山家としては可なり古い歴史をもち、『山想會』創立者の一人である。夏山に就いても、スキー登山に就いても、君の知識は豊富なも

のである」と述べて登山家として高く評価している。菅沼は田部のことを「田部先生の健脚振りと、お酒に強いのに驚きました。また奥秩父の惣小舎谷へ行った時も、さながら雲に乗っている如き早さに、山岳部員一同驚き、かつ閉口しました。今日では登山靴にアイゼン、ピッケルを使って登るような雪渓をワラヂのまま、金剛杖だけで登降される雪上技術には大いに敬服しました。登山はスポーツではないと云われますが、実際には先生のこの技術こそスポーツ的であると存じます」（六三年筆者あての私信）と述べている。

このように先生と親しい間柄の人々はすでにこの世にいなく、現時点での山想会の田部評は高橋榮一郎（一九三〇年度ＯＢ）の話が中心になる。

高橋は田部の紀行文集『日本アルプスと秩父巡禮』を読んで大変感銘を受け、田部が法政大学の教授であり、山岳部の部長であることを知って法政大学に入学した人である。高橋は「先生は我々とは違った雲の上の人であった。巷間流行のものと混ざらない立場の人であった。山登りや哲学的思考、何一つ取っても雲の上であった。田部先生の甥にあたる島田（貴堂）武時（法大山岳部三四年度ＯＢ、元日本山岳会富山支部長）は美男子で、皆に親しまれていたいい男であったが、彼はヒマラヤのことをよく調べており、私にもヒマラヤへ行くことをけしかけてきた。先生のパイオニア精神を受け継いだのだろうか。当時の学生の山登りは、ヒマラヤへの準備のためであったと言ってもいいだろう。

法大山岳部の部員章は田部先生が度々訪れていた信州野沢の毛無山の地形図を彫ったものである。先生はスキーで行く毛無山が大変お気に入りで、野沢温泉桐屋旅館をベースに部員や山想会会員とよく出かけ、夜は旅館の炬燵にあたりながら雄大な尾根の良さなどを度々部員に話された。この先生の毛無山に対する思慕を、私が部員章に盛り込んだ」と話す。

田部はスキー山岳部の部長として初めて参加した合宿が野沢でのスキー合宿でもあったので毛無山は思い出深い山であったのだろう。田部の一文に「毛無山から高原へ派出せる雄大なる斜面の雪は、鏡のやうな光澤をもち、ところ

どころ巨人のやうな枯木が立つてゐる。ここから小屋へ下るスキーの輕快なる滑走は矢のやうに早い。小屋に入つて焚火しながら、ココアや紅茶をわかして飲む心持は、又とない愉快なものである」（一九二八年「野澤温泉の冬」）と毛無山のよさがうたわれている。ただし、法大山岳部の部員章は昭和四年ごろに、田部が開拓した剱岳北方の毛勝山の地形図に変わっている。

そして高橋は「先生の随筆は何回読んでもフレッシュだ。思索が深い。先生と山へ同行すると、先生はどこへ行っても感動されていた。すなわち感激性を持っていた。それを何時までも失いたくないと言っていた。先生は万葉集を好んで読まれていた。ワーズワースの詩集を翻訳されているが、万葉調で現されている。

先生は昭和四十二年駒形山想会に出席され、私の隣に座って色々話された。私に『山へ行っているか』と尋ねられたので、私は先生に『山登りは一生行い、山登りそのものが人生の縮図だと思っております。一生を省みて悔いのないシュプールを残したいと思っております。そうゆう生き方をしています』と言ったところ、先生は『君の今の言葉の中に人生観があるな』と言われたのは感慨深い。その言葉が先生の私に対する最後の言葉で、それから三・四年して入院された」などと田部の話が続く。このように田部と山岳部部員・山想会会員との関係は非常に愛情に満ちたものであった。

なお、法大山岳部の機関誌『山想』という名付けは、部員の田中菅雄他四名が各自思い思いのものを持ち寄り田部が決定している。

### ㈡ 野澤温泉での初スキー

田部重治がスキーを初めて行ったときのきっかけにふれよう。田部にスキーの醍醐味を教えた現法大スキー部の功績でもある。

山想会会員の菅井達雄が「野澤温泉と毛無山」の一文に「スキー場としての歴史は大正十三年の暮から、法政大學スキー山岳部の合宿を以てその第一頁を書き起こされねばなりません。……前記の場所の地形（筆者注：関、赤倉、

田口、高田）では何んとなく物足らなさを感じて居た部員に依つて此の地が卜されたのでありました。そして雪質が比較的に好い事。地形の變化に富んで居る事、尚その上に人情に純朴等の好印象を受けて、愈々法政のホーム・グラウンドと決まつたのでした。……その頃、野澤の人々はスキーと云うものに就いて、充分理解がなくて、私達が練習に出ると、輪樏を履いて見物に來たものでした」と野沢温泉と法政の関わりを述べている。

田部は温泉とはのんびり湯につかるところであるという認識で、スキー山岳部が合宿を行っている野沢温泉へ友人と出かけた。田部四十歳である。

「私がスキーを始めたのは、大正十四年一月のことで、場所は信州野澤温泉であつた。……その前に私は法政大學のスキー山岳部長になつて呉れといふ依頼をうけて承諾したのが、大正十二年の暮頃で、翌十三年の三月から、法政大學のスキー山岳部は今迄のスキー練習場であつた赤倉温泉を都合により引上げることになり、野澤温泉に移ることになつた。しかしその時には私はただ名儀上の部長であるに止まり、スキーやスキー場に就いて何の關心ももたなかつたと言つても差支ない。十四年の一月に、初めて私は野澤温泉へ行つて見る氣になつた。それは一つは自分の關係してゐる部の練習場へ行つて見ないのも、餘りに無責任であると思つたのと、も一つは正月に集まつた友人二三人と私との間に冬の雪深い温泉場が却つて温かく趣致が多いといふ話が出て、一つ野澤へ行つて見ようかといふことになつたからだ。しかし未だその時にはスキーをやらうといふ氣持はてんでなかつた。ただガラス越しに温かい湯に浸りながら、ちらちら降る雪でも眺めようといつた氣持で一つばいだつた。……同行三人は中西濱太郎君、谷岡義賢君、女流作家の野溝七生子であつた。……東京へ歸つてから、野澤に遊んだ光景がありありと浮んで、次の三月が待たれた。そしてスキーは、到底、私とは切つて離すことの出來ないものとなつてゐることに氣附いた。三月の休みが來ると共に、私は再び野澤へ急いだ」（三〇年「スキーの想い出」）とスキーを始めた感想を漏らしている。

そして「一夜を經ると、翌日、時のマネージャーをしてゐた市川君が部屋へやつて來て、私のほか三人に是非スキーをはくようにと無理に手を取つて引き立てた。私は厄介なことを始めなければならぬと思つたが、勸誘の仕方が猛烈

なのに壓倒されて、遂に同行三人とスキーをはくことに決した。そして夏の山でさへもてあましてゐるのに、また、仕事が一つ殖えたとこぼしながらスキーをはいた。しかしスキーをつけて見た氣持ちは、特別なものであつた。轉がりながらも何とも云へない快感があつた。初めは止むを得ないと思ひながらはいたのだが、今度は夕暮遅くまで滑つて見たいと云ふ氣持になつた。そして身體が痛くなるほど轉んだ。其晩歸つてからの心持は、今までに經驗したことのない快よいものであつた。痛い思ひをしながらも、新しい希望に充ちた世界にはいつたと云ふ感じで胸がわくわくするやうな氣がした。床についてねがへりするにも一通りならず困難を感じたが、明日の愉快さを胸に描きながら寝りに就いた。翌日も熱心に練習した」と記して、その喜びを現している。つづいて「桐屋の主人に貰つて飲んだ甘酒の甘さや山想會々員がこしらえる『法政焼』の風味をスキー場としての野沢を語る最初のものである」と、その時の珍しく味わったものを述べ、「冬になつても自然に對する感情を積極的ならしめ、從つて人生に對する考察を多少なりとも明るくするに力あつたのはスキーであると私はいつも思つてゐる」とスキーの効用を強調し、多くのスキー礼讃の文章を残した。

その後「最初にここへやつて来た時、無理にすすめられてやつてみると、それが奇妙にも、自分の頭や身體によい結果を與えることを感ずるようになつた。それが自分の心を大きく豐かにすること、及びそれによつて山に登る氣持が、夏に於けるよりも、神々しいものであることを經驗するようになった」（二八年「野澤温泉の冬」）という感想を述べ、三七年頃まで毎年野沢を中心にスキーを行っていた。

### ㈢　教授辞職後の山岳部との関わり

田部が法政大学を辞職したのは一九四一年戦時体制中であった。それ以降の山岳部・山想会との関係は駒形山想会が中心になる。山想会の大橋公一（三三年度ＯＢ）が経営する鰻屋「前川」が浅草の駒形にあり、その「離れ」で鰻を食べながら山を語る会「駒形山想会」が四三年に発足した。これは戦争で山へ行きにくくなったので、田部と山想會々員との親睦をはかるために始めたもので、この会は田部や山想会の角田、大野両元会長が亡くなっても九二年五

月二十四日まで続いた。

辞職後は名誉教授として、山岳部の部長を継続した。当時部員であった秋元、関口などが、戦時中に阿佐ヶ谷の田部宅に山岳部の「合宿計画書」を時々届けていたが、それはほとんどの部員が学徒出陣するまでつづいていた。

戦後の山想会の会合には六〇年に山想会が組織化された第一回目の総会や、六一年五月の山想会総会につづいて十一月十一日に行われた山岳部創立三十五周年記念祝賀会などへ出席した。田部は七十七歳である。総会などのレクチャーでは越中（富山）に生まれ育ち、薬師岳へは上滝（越中弁の「かんだき」と発音していた）から歩いて登ったことなど明治・大正初期の探検的登山を楽しく話していた。部員や若い山想会会員は、この時の話す内容や姿勢には田部の重厚さと思索に満ちた偉大な登山家の姿を感じとっている。

その後駒形山想会には出席していたが、それも六七年九月十六日に行われた会合への出席がおそらく最後であろう。山想会会員大野俊夫は法政大学に入学する前から田部とは親しい間柄であったが、当時フランス大使館に勤めており、フランス山岳会会員、スイス山岳会会員にもなっていた。その大野あてに送った「パキスタン遠征」への願いを込めた出席者の寄せ書きに田部、角田、高橋などの名前が記されている。私も名前を書いているが、田部が山への思慕を独特な語り口で話していたなつかしい一時が思い出される。

山岳部への会合の案内は六八年二月に部員総会および納会の通知をしたところ「欠席　寒い頃の夜の会には一切出席しておりません。あしからず」との返事を受け取り、田部が八十三歳の時でもあり、その後会合などへの案内をしていない。

この節の締めくくりとして法大山岳部創立五十周年記念誌『わらじ　ナーゲル　ビブラム』の中に元山想会会長の大野俊夫が「初期の山岳部」と題して「大学山岳部にはそれぞれの特色が見られたがこの中にあって法政はまことにユニークな存在であったといえる。これは初代の部長が優れた英文学者であると同時にわが国でのパイオニヤー登山家であった故田部重治先生（一八八四―一九七二）の影響が可成りあったと思われる。田部部長の山に寄せるひたむ

きな心情と先生の哲学的思索とは部員達の山に接する態度に幾多の啓発と影響を与えた。最近の山登りの傾向が集中合宿と岩登りに集約されているやに見受けられる部活動と初期山岳部の在り方との間には時代の変遷があるとはいえ可成り異なるものがあり、われわれの時代にはもっと個性的な山歩きに打込んでいたよう思われる」と述べているが、この主張は田部から影響を受けた法大山岳部の初期の姿を的確に表している。

## 七、秩父を讃える田部の歌碑

田部重治の登山観をさらに探究したいと思い田部の歌碑を訪ねた。

日本の登山界においては、日本アルプスの探検登山のあと秩父時代ともいえる時代を形成し、田部、木暮理太郎、中村清太郎が秩父開拓に多くの足跡を残している。そのうえ田部が登山の対象としての秩父を世に紹介した功績はすこぶる大きい。著書『日本アルプスと秩父巡禮』において、秩父の特色を次のように著している。

「美はしい溪谷と深林とを有して、私の生活に多大の影響と、或る場合には危険とを與へた奥秩父は、私には大なる意義を有するものゝ一つである。奥秩父の美を形成する主要分は、荒川の上流と、笛吹川の上流と、十文字峠と雁坂峠と、千曲川の上流と此等の間に屹立する深林に豊かな山岳とである。私は之等の悉くの主要なる溪谷と、其絶頂とを究め、其幽暗なる深林に香ひ高き氣を思ふまゝ吸ひ、其間に幾多の露營を試みた」（一九一八年七月「深林と溪谷」）あるいは「緑の色濃い葉陰に白雲低迷する幽林、今出たばかりの流れが落葉や苔むす岩を走りつつ、やがては青葉の谷を脚下にとよもす瀑布の響き、樹間奥深いかなたに叫ぶ怪鳥の聲、ときどき幽林がまばらになつて、思はぬ前面に屹立する峯頭、ぶくぶくする苔深い樹間を草鞋もて輕くふむ氣持、秩父を思ふ時、かうした印象が爽やかな涼風と共にあたりに浮んで來る」（三〇年「秩父を憶ふ」）と記して秩父の印象を浮き彫りにした。

秩父の紀行文はどの一編を取り上げてもよどみのない文体で、秩父の魅力をあますところなく引き出しており、田部が秩父のとりこになった一端も窺える。

田部の歌碑は秩父に三ヵ所ある。他に母校富山市の山室小学校に歌碑が建立されているので順次それらを紹介しよう。

### ㈠ 重量感にあふれる雲取山のレリーフ

秩父電鉄（現秩父鉄道㈱）が、田部重治を秩父草分けの恩人としてレリーフと歌碑を建立した。雲取山荘から三十メートルぐらい山頂寄りに建っており、それは秩父の山々から一山に一個ずつの石を集めて石山を築き、その中央にレリーフと歌が彫ってある。

除幕式は一九六三年十一月三日に催されたが、田部は降雪と低血圧のため欠席した。翌年八月に孫の和、曾孫の廸子、幸子たちと三峰口から雲取山に登り、レリーフと対面して七ッ石山を経て鴨沢に下っている。田部七十九歳の時であった。

当時秩父には秩父宮殿下と木暮理太郎と田部の碑が建立されていたが、生前に建てられたのは田部のみであり、田部はそのことを相当自慢にしていた。

雲取山の紀行文のうち「私に取つて秩父が最も魅力をもつように感ぜられたのは、明治四十二年五月半ば過ぎ雲取山から奥秩父方面を遠望した時である。天氣がよく殘雪があつた。雲取山から飛龍山へとつづく國境尾根が信州、甲州、秩父の三國境に近づくにつれ段々高まつて黒々とした力強い輪郭を描くと共に、それには殘雪が班々と光つて見えた。それが何と力強い大地の生命力を暗示していたことか」（一九五〇年「奥秩父の美しさ」）と著して、雪取山を紹介している。

レリーフと歌碑がある石山は、高さ二七〇センぐらい、幅が中央で二〇〇センのもので重量感があり、登山者にはよく目につく場所に堂々と建っている。石山の上半分に、直径四五センの円の中に田部の顔が彫ってある。このレリーフは一九四九年に文化勲章を受章した彫刻家の北村西望氏の長男である北村治禧（はるよし）氏が彫ったもので、石山の下方には縦五〇センx横三六センの碑面に次のような歌が刻まれている。

奥秩父先蹤者　田部重治先生記念碑

奥秩父はるか眺めて雲取に
　立ちたるわれは若人なりし
　　明治四十二年五月十五日　初めて雲取に登る
田部重治先生を讃えて

全日本山岳連盟

## (二)　気品のある栃本の歌碑

埼玉県秩父郡大滝村栃本に歌碑が建っている。秩父山岳連盟は、田部がこよなく秩父を愛していたことを顕彰するために建碑したもので、一九七三年六月吉日に秩父宮妃殿下をお迎えして除幕式を行った。

秩父山岳連盟理事で、三十三年間甲武信小屋を管理経営していた栃本の千島兼一氏（日本山岳会会員　五八一三番）は、史跡である栃本関所跡（国が七〇年十一月に指定）の三〇〇㍍くらい手前で、山奥に向かって右側に歌碑建立の土地を提供した。千島氏は阿佐ヶ谷の田部宅に度々そば粉や山菜を届けるなど、田部との親交が深かった。

栃本は秩父では最奥の山里で、現在約六十軒の家が山腹の斜面に建っている。かつては宿場町、つまり江戸時代には甲州と関東を結ぶ重要な街道で、秩父往還と呼ばれ、荷物をかかえた馬や商人が往来したときの山越えの宿となっていた村落である。

田部の栃本をよく現している一文を紹介しよう。「なつかしい橡本、あこがれて居た橡本、此村のあるが故に六ケ敷い荒川の深き水源をも雑作なく考へさせた橡本、水清き橡本、五月の若葉のやうに深い眼の乙女の多い橡本へ到頭到着した。大村與一方の玄關へはいると、木暮君が足を洗つて居る所で、私を見て『風呂が出來るよ』と云つて、嬉

しさうに笑ふ。……秩父の最奥の村と云へば如何にも山奥のやうなれど、言葉付の雅びやかさ、一擧一動のしとやかさ、山奥には見られぬゆかしさは、之を秩父の橡本に見ることが出來る」（一九一六年「笛吹川より荒川へ」）

この文章で「栃本」という表現が繰り返し繰り返し書かれている。田部の文章には他に見られない特色のある表現であり、栃本を憶う心が文章の中に率直に現れた特徴ある表現だ。これはよほど栃本を好んだ証左であろう。文中に出てくる大村さんについては、二九年十月の十文字峠より栃本に着く紀行文の中に「栃本の大村さんのお婆さんの達者な顔が私達を迎えて呉れた。私は生みの母にあつたような氣持ちで家に這入つた」と書いている。

『山想　創刊号』で菅沼達太郎は「大村さんの家」と題して「田部先生の『秩父巡禮』が発行せられて、秩父の山々の美しさが紹介せらるゝや先生の跡を慕ふ登山者等が大分入り込んで來るやうに成り、大村さんの家はいつ行つても大抵一組や二組位の登山者に出逢つた。……昔しながらのいろりの前で先生とおばあさんの懐舊談を心ゆくまで聽くことが出來た」と書いて大村さんのお婆さんと田部との大変親しい間柄を表している。田部は「秩父が好きになつたのも、大村さんの泊り心地がよかつたのに負うてゐると私は思つてゐる。……ここを足場として秩父の山を歩いた想ひ出を辿れば、それは、縷として盡きない。毎年かかさず行つた。特に五月には必らず行つて炬燵に這入り、イハナや生椎茸のご馳走になつた」（四〇年「秩父栃本の宿」）と、この上なく栃本を好んだ心情が目に浮かぶ一文である。もっとも田部は山村も山旅の一環として位置づけている。

碑文は写真家であり登山家でもある秩父の清水武甲氏の父が、田部が書いた色紙を写真拡大して秩父のネブカワ石に刻んだものである。氏は彫刻や篆刻を行っていたので、自らの希望と強い意志で九十一歳の時に彫った。

石は横が一七〇㌢ぐらいで、縦は一一〇㌢と九五㌢の二つの山波のある石で、甲武信岳・雁坂峠方面を向いて建っている。「奥秩父の最深部を究めようと栃本へ行つて雁坂峠方面を眺めた時、雪のない黒々とした秩父山脈の秋空に描いた輪郭の力強さに感嘆せずにはいられなかった」（五〇年「奥秩父の美しさ」）と著した場所である。

碑の回りには〝れんげつつじ〟がきれいに植えられており、気品のある碑である。

横八一㌢、縦五四㌢の碑面には次の詩が刻まれている。

栂の尾根
いくつか越えて
栃本の
里えいそぎし
旅を忘れじ

田部重治　柏翁刻　九十一才

### ㈢　国語の教科書に採択された笛吹川の文学碑

山梨県東山梨郡三富村広瀬地区に三富村によって建てられた文学碑がある。一九九〇年五月二十七日除幕式が行われ、田部和（孫）、南日英子（新劇女優村松英子、隆次の孫）らの親族も出席した。

この碑は八九年度における三富村の「自然と健康あふれる笛吹の里づくり」の推進事業の一環として建碑されたもので、田部が笛吹川から受けた感動と、自然愛護の精神を後世に伝えるためのものである。

笛吹川について「果然、笛吹川の神祕は俄かに其端を開いた。そして此神祕は永遠に開き盡すことの出來ないものであつた。峻嶮なる山相と凄慘なる溪谷は、絶えず此事あるを暗示はして居たが、斯の如き優秀な形式と、斯の如き高邁な姿態とを以て、それが顯はるゝとは思はなかつた。……（後述の碑文と同じ）……此疑問が私等の胸中に幾度も繰り返された。そして當分は先づ、河原を行く見込のないことが明らかになつて來た。其故は、見上ぐる限り遙々と鶏冠山と國師からの分脈とが抱き合つて作つて居る東澤の溪谷は益ゝ峻しく、そして鶏冠山の主峯を通り抜けるには未だ程遠くて、其間の流れが殆んど全部深潭を形つてゐることが想像さるゝからである。

私達は一たびは悲んだが、又嬉しいやうな氣がした。秩父の山（私等の考による秩父の山）の美は、寧ろ溪谷にある。しかし之ほど壯絶な、而もアルプスに見られぬ潤ひを有する溪谷は、何處に見出すことが出來るだらうか。私達は秩父に誇るべき一景を加へたことを喜ばずには居られなかつた」（一九一五年「笛吹川を遡る」）と、笛吹川をうたいあげている。

この紀行文は、できうれば全文を取り上げたい位どの部分も感動的ではあるが、一応「果然、笛吹川の神祕は俄かに其端を開いた」に始まる文章が「見よ笛吹川の溪谷は」と、この景観に出会った感動を力強く現しているのでこの部分のみを抜粋した。

この東沢渓谷の美しさを讃えた不朽の名作「笛吹川を遡る」は国語の教科書にも採択され、日本の多くの人々に親しまれた。

文学碑は西沢山荘の笛吹川寄り三〇メートルくらいのからまつ林の中にどっしりと構えており、形は自家用車がタイヤ付きで横向きになっている感じだ。横が四四五センチ、高さ一一五センチ、奥行きが五〇センチぐらいの立方体の中に車が置かれているようで、車の天井部分にあたる横幅が一九〇センチである。

石は笛吹川流域から採集した花崗岩で、一見、車の形にみえるが、それを選択した意図は登山靴に類似していたことからであった。しかし、碑台となる石を据えつけてみると、結果的に車に似てしまったようだ。

車に例えれば、人が座る部分に横一二五センチ、縦七〇センチの碑面がある。碑の銘文は次のとおり。

笛吹川を遡る

見よ　笛吹川の溪谷は
狹り合つて上流の方へ

見上ぐるかぎりの峭壁をなし
其間に湛へる流れの紺藍の色は
汲めども盡きぬ深い色をもつて
上へ上へと續いて居る
流れはいつまで斯の如き峭壁に
さしはさまれてゐるのだろうか

田部重治

裏面には横一〇〇㌢、縦五五㌢の版面に次の解説文が刻まれている。

山の紀行家田部重治先生は
明治十七年八月、富山県の生
まれ、東京大学に学んだのち
東洋大学、法政大学等にあつ
て英文学を講じられた。若き
日より登山を好み、日本アル
プス、甲武信国境山脈をはじ
め各地の山にわけいり、こと
に大正四年以降、三次にわた
って笛吹川源流の東沢を溯行

その紀行「笛吹川を溯る」は
自然愛好者、登山者はもとより、国語教科書に採りいれられて、広く世に知られた
山と渓谷の美しさに感動した
先生の自然愛護の精神を後世に伝えるべく本碑を建立する
碑面の筆蹟は、先生自筆稿
本より得た

三富村長　日原競捷

### ㈣　母校を想う富山市立山室小学校の歌碑

秩父の歌碑とは異なるが、田部の歌碑がもう一点建立されているので、合わせて簡単に紹介しよう。

田部重治が亡くなる前年の一九七一年に、母校の富山市立山室小学校（元上新川郡）校舎の正面玄関横に歌碑が建立され、三月十六日に除幕式が行われた。除幕式には田部は入院中で出席していない。歌碑の書は青柳石城氏で、氏は北陸書道院代表を歴任したことのある富山市立呉羽中学校校長であり、歌碑建立時の山室小学校校長と懇意にしていた関係で筆をとった。

この歌碑は一九七〇年度卒業生が寄贈した。石は山型で、中央の一番高いところの高さは一六五㌢、横幅の中央が一三〇㌢のものに、碑面は高さ七六㌢、横五一㌢に彫られている。

田部が校歌の作詞者であったことから学校関係者に招聘され、久しぶりに母校を訪れた際に詠んだものの一つであ

る。

もの皆の変りしときく
ふるさとの
わが学び舎は
いかにあるらん
田部重治　作歌
青柳石城　書

なお、校歌は一九〇九年、田部二十五歳のときに作詞し、野口米太郎氏が作曲した力強い歌である。

## 八、英文学者としての研究領域

私自身英文学は門外漢であり、田部の研究領域を紹介するには力量が足りない。しかし、研究の底流には、田部の「人生は旅である」という考えが脈々と流れており、研究領域の随所に山旅が述べられている。そこで田部の著書・翻訳書を多く集め、その要約を行うとともに論者の評の一部を紹介することとした。

### (一)　英文学への道

田部重治は夏目漱石や上田敏から教えをうけ、十九世紀末の英文学、特に上田敏からはウォルター・ペーターをすすめられたという見方が圧倒的に多い。しかし田部は「私はペィターを熱心に読み出したのが、上田、平田両先生の影響というよりも、早稲田大学教授田中喜一（王堂）さんの影響に負うところが多いと信じている。大学を出て二、三年たってから、私は何となく英文学に失望を感ずるような気持になった。それは私が英文学に思想を求めようとし

たところ、英文学にはそれがないことを感じたからであった」（一九六五年「ペィターの作品と思想」）と述べ、田中王堂先生からの影響が大であったことを吐露している。

このきっかけを他の著書から重ねて求めてみよう。

田部の自伝『わが山旅五十年』において、土居君や市河君と英詩の勉強をしていたものの、田部にはだんだん英文学に飽き足らぬものを感ずるようになり始めた。つまり、英文学には人間の悩み、それへと解決の努力といったふうなものが見出せず、何となく初めから悟りすましたような態度や常識、そこから出るユーモア、こうしたものがあまりにも多いという感じを受けたことであった。田部はそのことを当時、親しくしていた哲学者紀平正美のところへ行って訴えた。紀平から田中王堂を紹介され、紀平に述べたことと同じことを率直に田中に言った。田中は静かな口調で英国のウォルター・ペィターほどの思想家はめったにいるとは思われない。彼の作品をもう少し突っ込んで読んだら、満足するだろうといって田部を励ました。その後度々田部は田中を訪れたが、田中はいろいろな問題を解釈するうえで田部の目を開かせ、田部にとって大きな学問の転回点となった。その後、田部は英文学を捨てることなくもっと視野を広くして研究する気持ちになり、合わせてペィターをもっと深く研究することにもなった。ペィターの研究によって、人生を積極的に生きなければならぬという信念を持つようになった、と要約できる。

田部と知己の一人であった土居光知の「田部重治君を偲ぶ」（『英語青年』一九七三年二月号）によると、東大英文科の卒業論文にはキイツ（一七九五―一八二一年、二十五歳四ヵ月の短い生涯を閉じたイギリスのロマン派詩人）の詩を選んだ。卒業してからはヘルンの著書を愛読し、散文詩的な作品を集めて英語の教科書を編んだこともあった。兄隆次が筆記したヘルンの講義ノートを読み観照することを学んだ。このようにヘルンに導かれ、ロゼッティ、ブラウニングなどの研究を経て、ペーターを読み始める。

そして前述の経緯でウォルター・ペーターの統一的性格に共感をおぼえ、次いでイギリスの自然詩人ワーズワースの観照的詩境へ深く入っていった。その関心は遠源たるルネサンスおよび中世欧州文学に及び、文芸の表現は自発的、

自照的でなければならないと考えていた、と要約できる。また、土居氏は一九六八年十二月発刊の日本岳人全集『ふるさとの山々』（日本文芸社発行）に「田部重治のことども」と題して田部の研究領域にふれている。その一部を追記的にピックアップすると「田部君はセミナーには出ず、『難解なところを先生に質し』卒論を書いて卒業したといっている」と暴き「ロレンス先生が仰せられるには、『南日（筆者注：田部の旧姓）君は熱心にキーツを研究し、卒論はなかなか優秀であった」と紹介し、「田部君は瞑想に耽りがちであり、詩を熱愛していたが、詩人になりきれなかったのは、思索の道にも心をひかれがちであったからであろう」と評し、「ヘルン以降の英文学の伝統を保持し、断層を跳び越えて、卒業後はロゼッチ、スウインバーン、ブラウニングそしてペィタァを愛読」などと述べている。

英文学に対峙した気持ちを経て、さらに深くその分野に没頭していった経緯がよくわかる。

### ㈡　研究の概要

田部重治の英文学を中心とした研究領域の著書・翻訳書・詩集などを出版の順に列挙し、若干コメントを加える。

①訳書　ペィーター著『文藝復興』一九一五年（北星堂書店）発行

くわしくは「ペーター著『文芸復興』の全訳」と題して後述しよう。

②訳書　ペィーター著『全一生活』一九一六年（不老閣出版）発行

「譯者序」に「本書の内容は、ペィターの比較的一般的な且つ彼の中心的な思想を反映して居ると想はるゝものを包括したもので、之に『全一生活』の名を冠したのは、彼はゲーテと等しく人生の全体を把持して、其統一の上に生きることを理想として居たからであつて、彼の書いたものは多方面に渉つて居るにも拘はらず、悉く其内には、雄大なる統一が存することは、彼の作品を読むものは誰しも知るところである」と評している。

のちに「アミエルの日記」「ブラウニング研究の序」「フローベルの生涯と手紙」「フローベルの手紙」を増補し、『ペーター論集』と改題して一九三一年岩波書店から文庫本として再刊された。

『ペーター論集』の「譯者序」で、「元來、ペーターのものは悉く難解である。彼の一言一句は、到底、飜譯によつ

て傳へることの出來ない幽微な氣分を有し、之を讀むことにより會得することすら容易のことではない。そして彼の文章の妙味は分かり易く飜譯することで無くなつて仕舞ふところが多い。これ彼の文章を理解するには六ケ敷く、よし理解し得ても、之を飜譯することの容易でない所以である。私の経験によれば、ペーターの作は、平素、分つてゐる積りで何心なく讀んで居ても、愈々、飜譯にとりかかると、難問百出して、一頁を譯了するにも容易でない」と評し、この邦訳には特に多くの努力を費やしたことを訴えている。

③『渾沌より統一へ』一九二〇年（博文館）発行

「二十代から四十代の思想を『心の行方を追うて』に著す」と題して後述しよう。

④訳書　ジョン・アディングトン・シモンヅ著『ダンテとプラトーとの愛の理想』一九三〇年（人文書房）発行

John Addington Symonds（一八四〇―九三）イギリスの著述家。

田部の解説に「茲に翻譯された論文は一八九三年に刊行せる "In the key of Blue" の内の "The Dantesque and Platonic Ideals of Love" と云ふ一篇である。其は彼がダンテとプラトーとの愛の精神に關して與へた考察及び其の比較であつて、歐州のロマンティックな文學を理解する上に、また歐州文化を研究する上に重大なる寄與として見遁がすことの出來ないものである」また「此の研究はたしかに古典的精神や中世的精神を研究する人に取つて、また、ひろく歐州文學を研究する人に取つて最も有益なる文献であることを失はないほどに、よく當時の愛の精神把握し、其に對する理解と見識とをもつてゐると見ることが出來る」と書いて愛の本質を説いている。

⑤訳書　ジョン・アディングトン・シモンヅ著『歐州文藝復興史』一九三一年（人文書房）発行

「譯者序」において田部は「翻譯された原著は彼が大英百科全書のために書いた『ルネッサンス』と云ふ一篇であつて、ルネッサンスに關する著述としては最も統一ある最もよくまとまつたものである。由來、ルネッサンスに關する著述は頗ぶる多い。しかし其等は多くは歐州の一部分のルネッサンスの研究に限られるか、或はルネッサンスの運動の或る部分に限られている。彼の "Renaissance in Italy" も、ルネッサンスに關する詳細な研究として有名なも

のであるが、其の研究の範圍は伊太利に限られ、其の書きぶりは可なり冗漫な嫌ひがある。此の翻譯の原書は歐州全體のルネッサンスに就て述べたもので、此の運動に含まれた凡ゆる問題、凡ゆる現象を要領よくのべ、統一的に觀察したる點に於て、殆んど比類を見ないほどに完全なものである」と述べ欧州全体のルネサンスを研究する好書として評価している。

なお、一九三四年に第一書房から『文藝復興』として発刊しているが、これは『歐州文藝復興史』に『ダンテとプラトーの愛の理想』を加えたものである。

⑥『中世歐州文學史』一九三二年（第一書房）発行

「五・六世紀から十四世紀までを取り扱った『中世歐洲文學史』」と題して後述しよう。

⑦『英國の自然詩人』一九三三年（岩波講座世界文學第九巻）（岩波書店）発行

田部のいう「英国詩人の作品に自然詩と称せられるべきものの多いこと、また優れたものの多いことでなくして、英国の古代から十九世紀の初めに至までの詩に於いて、自然観がどういうふうに推移し、その間の主なる自然詩人がどうゆうふうに自然を取り扱つたか」ということが書かれ、田部が大きく影響をうけた英国の自然詩人を時系列的に具体的に詩を紹介し、その背景や比較解説を行っている。

⑧『英文學と大陸文學』一九三四年（英語英文學講座第九回）（英語英文學刊行會）発行

二十八頁の小論ではあるが、冒頭に「英文學が大陸文學と如何なる交渉をもつたか、如何なるものを大陸文學から吸収し、大陸文學の如何なるものにより影響されるに至つたか、その何が英文學の骨となり肉となるに至つたかを見るのが是の篇の目的である」と述べて、英国民族の始まりからワーズワース、コールリッジ時代までを論述している。

⑨訳書　シモンヅ著『アルプスへの思慕』一九三四年（第一書房）発行

『山への思慕』の一篇として掲載された。シモンヅの『伊太利とギリシアに於けるスケッチと研究』の一篇の翻訳である。

⑩『ペーター』一九三六年（研究社英米文學評傳叢書六〇）（研究社）発行
後に、この研究は㉒の『ペィターの作品と思想』へと発展する。その項で述べる。

⑪『涯てしなき道程』一九三六年（第一書房）発行
田部は「これは随筆集であって詩集ではない。しかし書かずにはいられない気持ちで書いた随筆であったと云っていい。人生は旅であるという意味に於て、これも一つの旅行記かも知れない」といい、「序」において「一つには『心の行方を追うて』以降に書いた続編と云ふべきもの、二つには或る雑誌のために連続的に書いた月々の感想、三つには私の登山紀行である」と三部から構成されていることを解説しているが、主に『心の行方を追うて』以降に書いた四十四篇から成り立っている。

三八年に『人生の旅』と改題し第一書房より発刊され、その後五五年に角川書店より再刊された。それは九篇を削除し、新しいものを六篇加え、その「あとがき」に「著者の思想的遍歴の記録であるが、また、事実において旅をやった幾つかの叙述をも含んでいる。人生は旅であるとは私のいつも考えるところである。人生の行路に喘ぎながら私はそう思う。その意味においてこの書の叙述は人生の旅の記録であるといっていい」と記されており、発表した年代は一九二二年から四七年にまたがっている。

⑫訳書　ディ・クィンシー著『阿片常用者の告白』一九三七年（岩波書店）発行
Thomas De Quincey（一七八五―一八五九）イギリスの批評家、小説家。
ディ・クィンシーについて田部は「彼は文學を『知識の文學』と『力の文學』とに分け、前者は人に教えるものであるとし、後者は人を動かすものであるとしてゐるのが有名な事實である。その意味から云ふと、彼自身の作品は後者に属する。彼の散文が獨特の音樂をもち想像力に富み、驚くべき迫力をもつてゐる意味に於て、彼は十九世紀に於ける最も偉大なる散文作家の一人であると云つても差支ない」と位置づけ「一八〇八年か九年かに彼はコールリッジ、ワーズワース及びサウジーと深い知合いになり、もとワーズワースのゐたグラスミーアの小屋に居をとつた。彼はグ

ラスミーアにゐること殆ど二十年間、一八一六年にマーガレット夫人と結婚し、文學的生活を送った」と述べて、その人的背景を加えて解説している。

『阿片常用者の告白』は「ウェールズにおける少年時代の放浪とロンドンでの窮乏生活、その間にアヘンを覚えたいきさつとそれにまつわる恐るべき体験とが、告白体の美しい文章で写実的に語られている。やがて主人公は死の恐怖から一大決心のすえ、ついにこの『呪うべき鎖』から解放される。これは当代散文の典型的傑作の一つであり、われわれにとっての興味ももっぱらその点にある」と英文学者前川祐一氏が説明している。

⑬訳書　『ワーズワース詩集』一九三八年（岩波書店）発行

「ワーズワースの自然に対する融合の態度を説き詩集を翻訳」の項で述べよう。

⑭『萌え出づる心』（随想）一九三九年（第一書房）発行

「序」より「本書は『人生の旅』以来の私の随想集である。しかし随想集と云つても、そこには學術的研究に近いものもあれば、旅の記録も這入つてゐる。ただ系統的な研究を入れることだけは見合せた」など『萌え出づる心』は、今年（注：三九年）になって書いた。それ以下は年月の順序に並べたなどの解説がある。

⑮訳書　ワイルド著『獄中記』一九四〇年（新潮社）発行

Oscar Fingal O' Flahertie Wilde（一八五四―一九〇〇）イギリスの詩人、小説家、劇作家。

オスカ・ワイルドについて「おりから『ルネサンス』によって新しい審美主義的芸術観・人生観を唱道したW・ペィターの影響を受け、この本は彼にとって生涯の黄金の書となった。若くして華々しい才気と派手なふるまいによって世間の注目を集め、当時復興の兆しのあったダンディの典型の一人として世紀末の社交界に君臨した。一八九五年、同性愛的性癖が原因でクインズベリ候との訴訟に敗れ、二年の実刑。刑期を終えたあとは、獄中で書いた匿名の詩『レディング監獄のバラード』（一八九八）、獄中からアルフレッド・ダグラスに書いた弁明の書『獄中記』（一九〇五）などがある。同性愛に対する社会的禁忌が緩んだ今日、倫理的批判を離れた再評価がなされて当然であろう」（前川

祐一）と要約されている。

「譯者序」において「ペィターの影響の大きいことに驚いたが、本書を読んでも同様の感を抱く。ペィターからワイルド、これが譯者の関心を一通りならず動かしたことがある」とペーターがワイルドに与えた影響の強さを述べている。五〇年角川文庫として再刊された。

⑯訳書　テニスン著『イノック・アーデン』一九四〇年（新潮社）発行

Alfed Tennyson（一八〇九―九二）イギリスの詩人。

「一八五〇年、彼の半生にわたる苦難の時代が終わり、同年ワーズワースの後を受けて桂冠詩人に任命された。八三年にはビクトリア女王から男爵の位を授けられた。詩としては『イノック・アーデン』（一八六四）も高評を博した」（戸田基）との説明がある。五一年角川文庫として再刊された。

この書は家族を幸福にするため最愛の妻子を残して遠洋航海にでたイノックは、十年の歳月便りをしなかったが、その間に妻は想いを寄せるフィリップと結婚して幸せにくらす。そこへ突然イノックが帰ってくるというものであるが、悲劇的なテーマを牧歌的にうたい上げ広く愛唱されたテニスンの代表作である。

⑰訳書『ギャスケル夫人短篇集』一九四二年（改造社）発行

Elizabeth Cleghorn Gaskell（一八一〇―六五）イギリスの女流小説家。

短編集は「十九世紀の社会問題や世相を、いかにも牧師の娘、妻らしく人間と宗教への信頼を失うことなく描いている」（小池滋）「《従妹フィリス》（一八六五）をはじめ、巧みな話術を駆使した情緒的な短編小説をのこし、イギリス小説史の上で短編作家として画期的な存在になっている」（海老池俊治）などと評されている。

「譯者序」において「彼女の作品を讀んで感ずることは、作品の内容に變化の多いことである。それが一つは現實性の豊かなことに起因するやうに思われる。例へば本書に抜萃されたものだけに就いて見ても、宗教的情熱を有するもの、大衆的な興味をもつもの、哀感に豊かなもの、劇的な緊張味を有するものなどとりどりである。そして物語る

技術に於ては殆んど比類がないと云へる」と述べて幅広い題材を取り扱い、それを短編小説に著した作者に敬服している。

⑱『わが散文詩』一九四二年（第一書房）発行

百四十二篇の短文随想。「序」に「本書は著者の幼時を育んだ家庭、環境、自然、農民生活、及び上京して以來、著者に影響を與へた自然、心打つた出來事。更にまた、大東亜戦争が始まつてから、著者の更新されつつある心持などに就いて、日々変化して行く自然に関する感想と合せて表現したものである」と解説し、多くの想い出と新しい時代に処して行こうとする著者の心持ちとが現れている。田部は山岳関係以外の自著のうち最も推奨する著がこの『わが散文詩』と『心の行方を追うて』であることを常にあげている。

⑲『詩と斷章』一九四二年（七丈書院）発行

詩が二十一篇、随想四十三篇。随想のうち五篇は一九四〇年、四篇は四一年、残りが四二年三月以降に書いたもので山に関するものが多い。

⑳『文藝の理念』一九四七年（八雲書房）発行

多年東洋大学や法政大学において講義した文学概論である。

文学という言葉を用いる代わりに、文芸という言葉を使っている。「言語による藝術といふ意味に於て、文藝が文學よりも遙かに適切であると信じたからである」という前提で概括論の一部を取り上げると「叙事文藝は與へられた材料の上に立つ文藝であるが、若しそれが單に與へられたままを述べるものであるならば、文藝とは成り得ない。それが文藝として價値ある所以は、作者の個人性と結びついて、獨得な表現により劇的な中心點をもち、讀む人の心をそそるからである。随筆は作者の性格、教養、體驗の三つが集まつて、それを魅力あるものとせしめることが明らかで、批評に至つては、最も理智的であり、作者の性格と縁が遠いやうに見えるが、文藝としての批評は、批評家の個人性と結びつき、個性がそれに發揮されることにより、初めて創造されうるものである」あるいは「人生を表現する

仕方を二つに分けて考へることが出來る。一つは具體的な人間生活の姿として表現する仕方で、もう一つは、人間の抱く情操として表現する仕方である。前者は叙事詩、小説、劇、叙事文藝の仕方で、後者は叙情詩、随筆、批評のそれである」などと説き文芸を明快に七つの部門に分類している。

㉑訳書　アーヴィング著『スケッチ・ブック』一九五三年（角川書店）発行

Washigton Irving（一七八三―一八五九）アメリカの小説家、随筆家。

田部はその解説で、「アーヴィングは若くして婚約したが、婚約者は十八歳で亡くなったため一生結婚することはなかった」ので、「彼の作品はユーモアに富んでいるが、何となく人生にあわれを見出している点のあるのを感ずるのは、そうした先入観のあるためではあるまいかと思う。確かに彼は人生に物のあわれを感じたに相違あるまいと思う」と説き、「彼の書いたものは常識的ではあるが、人間を見る目にユーモアはあるが、ヒューマニスティックであり、自然描写においてもすぐれ、何によらず一切の叙述は精細であり、叙情的である」と評し、アーヴィングの著作の一つ『英国における田園生活』を次のように要約している。「アーヴィングは英国人の気質をよく理解して、彼らは自然の美に対して鋭敏なる感覚を有し、また、最もよく田園的感情をもっていると述べる。他の国では人里離れた場所で自然の与える魅力を、英国では人が常に出入りする家庭生活のめぐりに与えられる。したがって英国の公園の風致ほど立派なものはない。どんなに見込みのない貧弱な土地も英国人の手にかかれば、小さな公園となる。アーヴィングはまた、こうした英国人の自然愛は、何を意味しているかをかなり鋭く追求しているのが興味ある。十九世紀の文学者兼歴史家シモンズが英国人とフランス人とを比較して、英国人の自然愛の目立っていること、アルプスをほとんど登りつくしたのも英国人であるといっているのが、アーヴィングの考えと相通ずるように思われる。この一編は優れた英国観察記であるといっていい」と、田部がアーヴィングの自然観に着目した。六九年に角川文庫として再版された。

㉒『ペィターの作品と思想』一九六五年（北星堂書店）発行

田部は「ペィターの略伝」の冒頭に「英国の有名なる学者センツベリの『批評史』に十九世紀英国の最も重要なる批評家として三人が挙げられてある。年代の順序からいって、コールリッジ、アーノルド、ペィターである。英文学史にもそう特筆大書されていないペィターが『批評史』にかくも重要視されていることは、多くの人々にとって意外なことと思われるかも知れない。しかし、ペィターの作品によく親しんでいる人には、それは何事驚くべきことではなく、極めて当然のこととして認めなければならない」と述べ、「そして彼はワーズワースを崇拝し、その詩をいつも愛読していた。そして彼自らも詩人としての盛名を博することを夢見ていたが、それは決して実現されないように運命づけられていた」。また、「ペィターの創作は小説という範疇に属すると見るよりも、むしろ叙事文学といったものに属すると見る方が正しいのではあるまいか」と述べ、結語において「ペィターは一方に於て文学、絵画、彫刻、建築などの問題を取扱い、また、哲学、宗教に関する問題にも触れているが、世の所謂批評家とは異なっている。……彼は小説家といわれうる型の人間ではない。……堂々なる哲学書を書いているに拘わらず、哲学者と限定することもできない。最も適当に彼を名付けうる言葉は、ヒュマニストではあるまいかと思う」。そして「彼の作品の与うる創作的な快感である。彼の書いたものは余りにも含蓄的で難解である。しかし、この困難なる関所を突破して、その真髄に徹すると、それから得られる快感は一通りではない。……次にペィターの作品を読むと、思想的に考えさせるものの多いことに気がつく。それは暗示的なのである。……特にペィターの場合に於てそう考えさせられるのは、作家の心理を鋭く分析する心理的解剖と、時代精神を綜合的に眺める歴史的な見解とに於てである」などと評し、ペィターは一般的には批評家、小説家と位置づけられているが、特定のジャンルにとらわれない、それを抱擁するヒューマニストではあるまいかという。

㉓田部重治詩歌集『わが詩わが歌』一九七四年［田部重治先生詩歌集刊行委員会］（教育出版センター）発行

田部の没後に主な詩歌を選んで発行された。田部が折々に書き留めた詩歌が二冊のノートにまとめられていた。その中から百十首を選んで収められている。詩歌集前口絵に「最後のページの筆蹟（亡くなられる直前まで読書をされ

ておりました)」と説明のある写真には「雨桶の中に巣を作りいる親雀　くわえ来るもの見ればいじらし」と「悲しみの思い出多く深くして　花やぎ知らぬ生命なりけり　八十八翁(入院中)　田部重治」と書かれている。しかし、筆が乱れていてその句を書きとどめたあと、数日後に死去したようだ。

「あとがき」に渡辺正知氏は「日本英文学界に於ける長老として、幾多の学問的著作を残され、また数十年に亘る教壇生活を終生続けられた田部重治先生は、同時にまた実に長い間、登山、山岳開拓、高原跋渉等に歓びを見いだされ、その時々の随筆を世に贈られ、日本に於ける最高の山岳随筆家として広く世に知られていたことは、われわれが今更申すまでもありません。……先生は折々に書きとめられた詩歌を二冊のノートにまとめておかれました。そして生前(亡くなられた二、三年前と記憶しますが)『どこかでわしの詩歌集を出してくれるところはないかしら』と言われたことがあります。それを聞いたわれわれは、先生のご希望が実現されることを熱望しながらも、先生がご逝去になるまで、その様な機会を持つことができず、ご支援もなし得なかったことを残念至極に思っております」と出版が没後になったことを悔いている。

以上列挙したが、田部の研究領域の概要がいくらか把握できたことと思う。

### ㈢　ペーター著『文芸復興』の全訳

Walter Horatio Pater(一八三九―九四)イギリスの批評家、小説家。

ペーターについて「彼は瞑想と研究に専念する学園生活のかたわら、六七年ドイツの古代美術研究家ヴィンケルマンを論じた評論を発表し、ついで《レオナルド・ダ・ヴィンチ論》(一八六九年)をはじめ、ルネサンス期の美術と文学の独自のけんらんたる文章で論じた評論をあいついで書き、これらをまとめた評論集《ルネサンス(原題はルネサンス史研究)》(一八七三)で批評家としての名声を確立した。彼の批評は印象主義の批評といわれる。……本書において、彼は芸術作品や人間生活のもつ美から受けた印象をありのままに認識し、これを分析・総合する、いわゆる印象主義の批評をイギリスではじめて実践した。この印象主義は美的経験の集積によって人生を充実せねばならぬと

いうペーターの芸術的人生観に裏打ちされている。……」（青木雄造）と評されている。この芸術評論集「ルネサンス」を田部が翻訳し『文芸復興』と題して発表した。一九二八年に全訳を完成し、同年北星堂書店より四六判三一七頁のものを刊行している。

田部はペーターの『文芸復興』の「訳者序」において「われわれはよく外部的に現れた生活の輪郭により、人を推測して、彼には異常なる経験がないと云う。しかし経験の大小は外部的に現れた輪郭の大小によって決せられるのでなくして、刺激を享受する人が如何にこれから経験を創造するかによって定まる。平凡なる現象にも深刻なる意義を見出しうる人は偉大なる哲人と云わなければならない。ペーターはこの意味に於いて偉大なる哲人であったと云うことが出来る。……ペーターの時代は華やかな幻想的な浪漫的思潮が衰へて、著しく實證的傾向を帯び、歐洲大陸には自然主義が唱導された時である。彼の如き些細な現象にも深刻なる刺激を見出すことの出來る性格は、矢張りこの影響をうけずには居られなかった。彼は一方に於ては浪漫的思潮を深めると共に、他方に於て實證的精神を最も合理的な最も深化された意味に於て取り入れることが出來た。……彼の意味する文芸復興運動は、欧州に於ける人間自覚の精神的発現であり、従って中世時代のキリスト教権の圧迫から遁れて、人間の本姓に還えろうとする努力を含んでいた」と述べ「『文芸復興』はこうした意味に於いて英文学史上最も優れた創作の一つとなっている。……『文芸復興』を熟読すれば、暗示と思想的宝玉との無尽蔵なのに、驚嘆せざるを得ない心持を切に感ずる」（一九三八年七月）と説いている。

田部は一九六一年ペーター協会の会長に推されているが、イタリーの文芸復興期の美学には共鳴しているがギリシャの快楽主義にまで感心しているわけではなかった。

### ㈣　二十代から四十代の思想を『心の行方を追うて』に著す

田部のいう文芸に重きを置いた随筆や論文で、『渾沌より統一へ』以降あちこちの雑誌に書いたものに『渾沌より統一へ』の一部を加え、さらにそれ以前に、また以降に作った二、三の詩を網羅したのが本書である。著書の「序」

に「月々の感想を充す積りであったが、書き終つて見ると、自敍傳的な意味を多分にもつてゐることを發見した。之は私が多くの煩悶と躊躇と不安とを感じた時代のもので、現在の私から見れば多少の排斥すべき要素をもつてゐるにも拘はらず、之を再び公けにする所以は、それは此の時代の私の眞劍なる思想的記録であり、私の性格の表現であり、其の他、色々の意味に於て私を最もよく現はしてゐると思はれるからである」と述べ『渾沌より統一へ』時代の思想には、多少、無理な統一と理想主義的な思想や人道主義的精神が餘りにも繰返されてゐることを見出す。それにも拘はらず、私はそれらを捨てなかつたのは、是等は私の最初の努力の成果であり、今讀んでも考えさせるところが少なくないからである」と唱え、その真劍さが伝わってくる力強い主張である。

初版の『渾沌より統一へ』の「自序」において、「本書に現はれた諸篇の思想は、作者が英文學の研究によりペィター、ワイルドの作物に見出した感觸から出立して、哲學の關心を感じ始めたまでの間のものに属する。されば作者の越えなければならない峰々は、却つて今後に属するものが多いと知りながら、之等の諸篇を捨つることの出來なかつた故は、作者の進む道には順序があり、峯によづるには先づ麓からはじむべきで、從つて之等を公にすることは、作者の現在を整頓し完全にする所以であると信じたからである」といい、「作者の個性の奥底から吐き出されたもので」あると書いて、その取り組んだ姿勢を率直に語っている。

三三年と五一年に『心の行方を追うて』と改題し、十三篇の再録に断想、エッセイ、詩を追補して、第一書房より出版し（三四年に第一書房より普及版も出ている）、また、五二年角川文庫より再刊された。再刊されたものは「人生」で始まるが、その冒頭に「私達は何の為めに生きなければならないのか、私達は果して生きる必要があるのかといふことが、屡々、現代人の口に上る」と人生を論ずる問題を先ず提起している。その「あとがき」には「内容は著者の二十代から三十代までの思想が中心となる。（筆者注：四十代のものもかなりある）この書物の中心的なものは、「随想」「人生」「その後」等で、そこに現れた思想は、当時の著者に取っては最も真劍なものであり、著者はこの思想を握りしめ、それを表現することにより、当時、母と愛人とを失った煩悶と戦い、それによりひしがれることなく

今日に至っている意味に於いて著者に取ってこの上もない、尊い記録である」と解説し、田部のそれまでの思想を集約したもので、この思索的なエッセイが田部の内的告白でもある。

なお、『忘れえぬ山旅』で「自分が書いた本で一番よいものは?」という質問に対して「『心の行方を追うて』と『わが散文詩』をあげ、やむにやまれぬ気持で書いた」と答えている。

### (五) 五・六世紀から十四世紀までを取り扱った『中世歐洲文學史』

十年間の研究をまとめて一九三二年に出版した。六六年『中世ヨーロッパ文学史』と改題し、法政大学出版局より再版されている。

土居光知は『英語青年』(一九七三・二号)において「これを書くにはトルウバドール、ミンネジンゲルの詩人たち、アベラールなどから読みはじめ、中世の重要な文学を渉猟し、かたわら中学生の頃から古今集、中世物語に親しみ、その後俳諧に至る詩歌、謡曲、物語、随筆、宗教書までも味読したことを考えると、決して日本人として中世ヨーロッパ文学史を書く資質に欠けていたとは言いえないであろう」と書き、この著を書き著すのは田部が日本における最も適した人であると評している。

一九三二年に発行された著書の「序」において田部は「本書は紀元五、六世紀から十四世紀末までの文學を主に取扱つたものであるが、その方法として私は先づ時代の文化全體を見、次に文學と平行して流れる哲學や藝術思潮を見、最後に文學に觸れるといふ仕方を取つて進んだ。中世時代は今日の歐洲の最も興味ある文化が芽生えた時である。従つて歐洲の言語、法律、組合、大學、哲學、建築、彫刻、繪畫、文學等は、この時にその最も未来ある姿を取つて現れた。歐洲文化の如何なる方面を徹底的に知らうとしても、この時代に溯らなければ、到底、不可能であることは、誰しも知るところである。……遺憾なことは、中世文學の思潮を統一的に取扱はんとするには、エスパニアの作品を除外してはならないことを知りつつ、そこまで手をひろげることの出來なかつたことである」と述べ、欧州文学史にエスパニアが抜けていることを田部は非常に残念に思っていた。内容は「暗黒時期の概観」に始まり、カール大帝時

代から「中世の詩形」まで二十九章にわたり五百頁くらいに著している。

### ㈥ ワーズワースの自然に対する融合の態度を説き詩集を翻訳

William Wordsworth（一七七〇―一八五〇）はイギリスの詩人。十九世紀前半のロマン派の代表的詩人の一人。

ワーズワースは「ケンブリッジの校長ウィリアム・テイラーによって詩作の手引きをうけ、大自然のなかに生きる生活とともに、自国の詩や小説のほか『ドン・キホーテ』や『千夜一夜物語』などによって空想の世界を広めた。……一七九〇年夏から秋にかけて当時ようやくヨーロッパに高まり始めたアルプス熱に刺激されて友人ロバート・ジョーンズとアルプスへ徒歩旅行をする。……ドイツ文学に刺激されたバラッド形式への関心を踏まえてコールリッジとともに創作した物語詩をまとめた『リリカル・バラッズ』を一七九八年九月に五〇〇部出版したが、予想以上の好評を博した。擬古典主義に対して新しい詩歌の素材・主題・文体ならびに詩人の使命などを論じてイギリス・ロマン主義文学の指標となる。……一八二〇年ごろから選集が出版され始め、四三年には桂冠詩人に選ばれている。その詩の特徴は、田舎の清純質朴な子供や大人、不幸な境遇の女性を多く取り上げ、簡潔な筆致で描くとともに、外界と内面との照応を幻想的に叙述し、対象の核心に迫る深味のある表現に達している点にある」（岡三郎）。桂冠詩人とは、イギリス王室の宮内官として、王室と国家の慶祝葬祭のときに慶弔の詩を詠進することを職務とする詩人の称号 Poet Laureate のこと。首相の指名によって選ばれる終身官で、その数は一名、ワーズワースは十一人目である。ワーズワースは慶弔の詩はつくらないことを条件に桂冠詩人になった。以来、この任務は義務的なものではなくなっている。

『ワーヅワース詩集』（田部重治選譯）は五十六篇の作品が載っている。そのうち「七人の姉妹」は、兄の南日恒太郎の訳出であるが、五十五篇は田部重治の選訳による。その解説に田部はワーズワースをこう評している。「彼は英國の生んだ最も偉大なる自然詩人であつた。恐らくは自然のために自然を歌つた唯一の詩人であつたらう。多くの詩人は自然を生けるものとして歌つてゐるが、彼ほど眞にそれを信じてゐた詩人はないやうに思はれる。そして彼の自然への愛は人間をも愛せしめた。何となれば、彼には人間は自然の一部であつたから。従つて彼の最も愛した人間は

自然の間に生きた最も自然的な人間であつた」（三八年八月）と述べて、自然に対する親しみのある態度は、田部の山に対する静観的態度と合い通ずるものがあり、自然を愛する日本人の共感をよんだ。

田部は「英国の自然詩人」において「ワーヅワースの詩にいたつては、想像的な活動の成果ではあるが、対象に対する態度は観照的で、外界は自己と離れた、一つの魂をもつ客観的な存在である。であるからワーヅワースをロマンチックな詩人とみることはできない」と評しているが、もっとその本質を理解する意味で説明を加えると、「ワーヅワースこそ本當の自然詩人と云はるべきであろう。詩人にして美はしき自然を題材としてゐないものはない。然し多くの詩人は自然のために自然を歌つてゐるのではなくして、一つの出來事の背景として自然を取入れてゐるか、或は自然を主題とするにしても、彼等は人生に疲れ、愛につかれ、時には愛の悩み人生の不平を自然によつて慰めんが爲めに、或は自らの氣分の象徴として自然を取扱つてゐる傾きがある。つまり彼等の自然に對する態度は消極的である。ワーヅワースは之に反して積極的な氣持をもつて自然を求め、自然を歌ひ、人事の背景として自然を求めたのでなくして、人間自身をも自然化して見ようとした」といい「ワーヅワースは静かに自然を観察し、その活動を細かく捉えようとして、そのために自己をすら没却することを是認しているかのように見える。自然を活けるものとし、それには人間を幸福にし、人間を善良ならしめる力のあることを認めた」と評価し、ワーズワースの自然に対する態度の積極的な気持に共感を示している。

十三世紀当時の民謡に現れた自然観は、英国詩人にとって「英国の詩人は他の国の詩人に比し、自然に対する愛着の深かったことを示している」あるいは「英国のエリザベス朝の文学は、その意味に於いて自然に対して驚異の眼を開いた時代の産物をもっていたとみることができる。そしてこの時代を歌った詩を探ろうとする人は、誰しもまづシェークスピアの自然描写は如何なる種類のものであったかを知ろうと思うに違いない」との田部の解説が加わっている。

田部は一九三〇年「山を憶ふ」にこうも書いている。「山に入る心は先ず廣く自然を愛する心から出立したい。自然を愛する心、そして山という特殊なものによつて條件づけられた自然を愛することは、ひろく藝術的精神を愛する

心と、個々の藝術を愛好するそれとに異ならない。さうした意味に於て、私達は廣く自然という偉大な藝術に對して心を開き、それに融合を求めたい。私達は山を遠望する時、哲學者アミエルが瑞西のジュネーヴからアルプスを見た心持と同じものを山に對して體驗し、詩人コールリッジがシャモニーの谷からモンブランを頌したと同じやうな緊張と憧憬と心のとどろきとを感ずる。しかし私達の山を觀ずる態度は、浪漫的な詩人或は象徴的な詩人がするように、自己を歌はんが爲めに自然を主觀的な材料として取り上げるのでなくて、山を山として客觀的に眺めつつ、自己との一致を見出すことでなければならない。さうすることに最も自由な最も自然的な氣持を感ずると共に、山を山としての個性をも容認することが出來る。この態度は英國の詩人ワーヅワースが凡ゆる自然に對して取つた態度である。彼は如何なる自然に對しても客觀的な態度をもつやうに見えて、しかも他の如何なる詩人も爲し得ないほどに、自然と全人的に融合することが出來た。この態度に於てのみ、私達は全人的に山と同化することが出來る。しかもまた、そこには凡てが融け合ひ、自然と人生とがほほゑむ、願はくはかくの如き境地を自然に於て私達は永久につかんでゐたい。さもなければ、私達の生命は何と生き甲斐のないものであらう」と、浪漫派あるいは象徴派とワーズワースとを対立させ、自己中心的なものから自然との融合を説いていることに注視しなければならない。

なお、田部の著書『心の行方を追うて』には「私は自然に關して、英詩人ワーヅワースと最も共鳴することを感ずる」と述べているが、そのことが著書の随所に描かれている。

## 九、教壇の履歴

一九〇八年七月、東京帝国大学英文学科卒業後の教壇に立った履歴を、著書・文献から整理したところ不明の箇所が多々あり、八校の大学へ問い合わせを行ったり、数校の大学の年史を調査したが、最終的には不明箇所が残ってしまった。しかしこれ以上は確認の手だてがない。不明な点、特に就任したが辞職がわからないなど、記録としては不完全ではあるが、判明していることを年代順に列記すると次のとおりである。

## (一) 教官・教授の略歴

①一九〇八年十一月　明治大学夜間部の英語専修科教師。一週六時間講す。
②一九〇九年　一月　郁文館中学の英語教師。
③一九〇九年　四月　天台宗大学中等部（後の本郷中学）の英語教師。
④一九〇九年　四月　中央大学夜間部の英語講師。
⑤一九一〇年　國學院大学に出講。一九一三年英語講師辞職。
⑥一九一一年　日蓮宗大学に出講。
⑦一九一二年　四月　東洋大学の教授に就任。英語、後に文学概論や欧州文芸思潮をも講ずる。一九四二年三月辞職。
一九四六年　四月　辞職の四年後再度講師、後に教授に就任。一九五九年三月、定年制施行により七十五歳で退職。翌四月東洋大学の名誉教授第一号となる。一九六八年三月まで非常勤講師として主に大学院を担当。
⑧一九一二年十一月　海軍経理学校の英語教師（文官教授）。心理学、論理学も講ずる。大東亜戦争開戦前まで就任。
⑨一九二一年　府立第一高等女学校高等科に出講。
⑩一九二二年　四月　法政大学に法文学部（法学部に文学部が併設）が設置され、英文学の教授に就任。一九四一年三月辞職。
一九六七年　四月　大学院に出講、一九七二年三月出講を終了。
⑪一九二四年　六月　東京女子大学に英語の教員として就任。一九二八年三月辞職。
⑫一九三九年　日本大学に出講。
⑬一九五〇年　四月　武蔵野女子学院に出講。
⑭一九六一年頃　日本ルーテル神学大学の教授を勤める。

⑮一九六六年　四月　実践女子大学に新設の大学院で文学部教授として就任、英文学科において英文学特殊研究を担当し、ペーターの「ルネッサンス」などを講義。一九七一年三月辞任。

一九四五年以前の新潮社発行のものには著者紹介として「大東文化學院講師」がとりあげられているが、在籍が確認できず、このリストからは除外した。

### ㈡　東洋大学英米文学科創設の父

東洋大学での略歴は前項㈠⑦のとおり。

『東洋大学百年史』（一九九三年発行）には、田部について「早くからワーズワースを中心とした英文学研究、中年以降はウオルター・ペーター研究のスペシャリストとして令名高い第一級の英文学者であったばかりではなく、ワーズワース直伝の自然観を、荘重典雅な文体で綴られた随筆に投影せしめて、『心の行方を追うて』『高原の明け暮れ』『山と渓谷』などの著書により、戦前戦中の日本において多くの愛読者を持つ文人でもあった。かかる文人肌の第一級の英文学者を創立者として持ったことは、本学英米文学科の幸としなければならない。……（昭和二十七年）田部重治が主任となった。……草創期の英米文学科は、田部重治を中心として昭和三十四年まで運営されていくのである。田部重治の持論『ワーズワース研究』や『抒情民謡集』の講読、ウオルター・ペーターの作品の講読や演習は多くの学生を魅了し、……創立から満十年を経て昭和三十一年は、英米文学科にとって一つのエポックを画する年となった。まず田部、瀬川の、とりわけ瀬川の文部省との折衝、その他万般の実務面における奔走尽力によって、大学院の文学研究科に、英文学専攻の修士過程の設置が認可され、……白山英米文学会は発足の二年後、昭和三十三年に至って、ついに自らの機関誌を持つまでに成長した。すなわち学会誌『白山英文学』の発刊である。その創刊第一号の巻頭言で『この機関誌を持つことを、誰よりも念願し、その刊行を誰よりも悦んだのは、学科主任の田部重治にほかならなかった。田部重治をもって、わが英米文学科創建の父と讃称したいからであり、『白山英文学』発刊の頃までを、英米文学科の歴史の草創期、『田部重治の時代』として区分したいからである。……荘重典雅なその風姿と名講義によっ

て、また研究室においては、東西の学問、芸術にかかわる尽きることなき座談によって若い講師、助教授を啓発し、多くの学生に仰慕された。『白山英文学』発刊の翌三十四年に定年制が施行され、佐藤利吉とともに退職した後も、大学院の非常勤講師として在籍し、『白山英文学』には毎号、秀れたペーター研究の成果を発表してその巻頭を飾り、この学会誌の存在感を重からしめた。昭和三十六年に、東洋大学英米文学科研究室を本部として『日本ペーター協会』が設立され、田部はその初代会長に推されたが、日本におけるペーター研究の自他ともに許す権威であった。……英米文学科の研究室の壁面に、創設の父として田部の肖像写真が掲げられているのは、決してゆえなきことではないのである。……不利な諸条件をよく克服し、修士過程の開設にまで漕ぎつけた中心人物は、田部重治であった。……長老教授の田部重治は、本専攻発足と同時に、推されて本学の大学院委員長に就任、……本専攻の生みの親、田部重治は昭和三十四年四月、本学最初の名誉教授の称号を贈られて退職するに至った」などと掲載され、東洋大学に貢献した多大な功績が讃えられている。

東洋大学は第二次世界大戦の痛手により再建は困難を極め、紆余曲折して進まなかったが、一九四六年七月に、やっと戦後はじめての専任教授会が開かれた。教授会に出席したなかに英文学を担当する田部重治、加藤猛夫、佐藤清教授の名を見出すことができる。四六年四月、旧制の文科の単科大学であった東洋大学の文学部文学科に英吉利文学専攻として、社会学科とともにはじめて英文学科が創設された。この英文学科創始の親として田部、加藤、佐藤の名が残っている。田部の教科目は英語を担当し、一九二一年より文学、文芸思潮のちに英文学、文学概論、英米文学を担当、五七年から大学院で英文法演習、比較文学を講じた。

教えた対象は文学部、専門学部文化学科、大学部、予科、専門部、新制文学部、短大と大学院である。

その間、大学の役職として協議員会協議員を始め、戦後は財団維持員、大学評議員、図書館長、五二年六月より五六年三月まで文学部長兼文学部二部長、五六年四月より五八年三月まで大学院委員長、五二年四月より五九年三月まで文学部英米文学科主任であった。

サークル活動などの経歴は一九年文芸研究会顧問、三二年山岳部顧問、六一年日本ペーター協会会長などの任にあたった。

同じ百年史で田部が「英文学科創始の頃」と題して、「英語廃止論者の藤村作さんを誉て学長に頂き、英米打倒の声がさかんで、遂には英米文学研究者打倒の声が醸成されそうな空気の学校では、英語を教えることが、だんだん不愉快になりつつあった。……（一九四二年）三月末に辞表を速達により学校へ送った。理事の朝原君がやって来て辞職は認めるが、戦争が終わったら、また、出講して呉れるようにと云ったが、私は今の幹部の居る限り、出講する意志はないし、君も止める方がいいと云って置いた」と書いている。この状況は法政大学辞任の様子と全く同じである。続いて「東洋大学をやめてから三年もたって帰って見ると、見知らぬ先生の多いのに驚いた。……しばらくして私は教授になったことを覚えている。……私が東洋大学を初めて教えたのは明治四十五年四月であり、その時は東洋大学は既に宗教学校ではなく、宗教を専門に研究している学神はほんの一部に過ぎなかった。……恐らく東洋大学に英文学科のあることを知っている人は少ないだろう。もう少しそのことを世間に具体的に示す必要があるのではないかとわれわれは考え、一年に一回か若しくば二回、英文学科の機関誌を出すべきだと考えるに至った。その結果として昭和三十二年に『白山英文学』を刊行するに決し、翌年一月に第一号を発行した。私はその後、それに殆ど毎号書いた。それは如何にも英文学科の為のように見えたかも知れないが、実は自分の研究をまとめる為にすぎなかった。しかしこの雑誌が他の大学のそれと交換される間に、他の大学に東洋大学に英文学科の存在を知らせるに至ると共に、東洋大学の英文学科の教師に毎号ペィターの研究を発表している物好きがいると云うことを知らせるに至り、それが日本ペィター協会を発会させるに至った動機となるに至ったことは、慥かである」などと回想録を載せ、結語として「各教授、助教授は学校を真に自分のものとして愛しきることにあると思う。その意味に於て本当の教育は、私立学校に於て行われるべきだと思っている」と述べて私立の独自性を強く願っている。

また、『東洋大学百年史　部局史編』では「五　英米文学科　1創設前後――田部重治の時代」と題して田部の功

績が載っている。それを要約すると「戦前は田部重治ら数多くの英語、英文学の学者、研究者が外国語の一つとして英語を教え、欧米の文学や思想を研究し講じ続けていた。その業績には見るべきものがあり、大学図書館に収蔵されている英文学関係図書のリストから窺うことができるのであるが、……文学部英米学科は、一九四六年四月文字どおり焦土と化した敗戦直後の白山台上の瓦礫の中から生まれ出たといってよい。三年後の四九年に東洋大学が旧制の文科単科大学から総合大学へと移行した時に、英文学科の名称に『米』の一字を加え、文学部第一部英米文学科として新しく出発することになる」などと記されている。

東洋大学で田部に教わり、同大学の講師でもある柴田恭子氏が『とやま文学』第十一号（一九九三年三月㈱富山県芸術文化協会発行）に「田部重治先生の晩年と私」と題して田部のエピソードを多く書いている。田部の人柄を偲ばせる部分を紹介しよう。田部は「『ぼかぁね、官学は大嫌いで私立ばかり教えて来たよ。若い時からね。私学はいい』学部学生時代・院生・助手時代を通じて何度聞いた言葉だろう」と、東洋大学をこよなく愛していた田部の心情をよく現している。

また、柴田氏が学部の卒業式後の謝恩会の模様をこう書いている。席上田部は「にっこり笑って『では、そろそろぼくが出なくちゃなるまい』と長々と馬子歌をうたわれた」が数分後、またしても「そろそろ、馬子歌でも……」、そしてドッと歓声があがりヤンヤの拍手、「おつむを下から上へ何度もなであげ、ズボンのすそを、二、三段折りまげ、すこしテレながら、三度目の熱唱がはじまった」と、田部の硬い表情とは全く異なった一面をかいま見ている話であり、その情景が目に映るようだ。院生の食事会などでは細い脚を冷たい水入りのバケツに入れ「夏はこれが一番！」といたずらっぽい目をしてグラスを傾けていたことが書かれているが、田部は八十を過ぎている歳である。ユーモアのあった田部の人柄を彷彿させる記述である。

### ㈢　漱石門下による法政大学文学部の創設

法政大学での略歴は前項㈠⑩のとおり。

「法政大学に教授として就任する直前に東京女子高等師範学校（現：お茶の水女子大学）からの勧誘があった。しかし、官学であったので法政大学を選んだ。それは私立ならば学問と山へ行くことが両立できるということであった」と田部の実弟英三の長男幸夫氏が話す。

田部重治は著書『わが山旅五十年』（一九六四年）に法政大学との関係を「大正十一年になって私は法政大学の教授となった。法政大学に漱石門下が集って文学部をこしらえようというわけで、漱石の教えをうけた私も加わったのである。私は英文学を教える傍、スキー山岳部長になれと学校から頼まれた。そのために学生たちと山に這入る機会が多くなった」と就任時の説明があり、「昭和十六年三月になって、私は法政大学を辞職した。二十年間、同校に務めた。漱石門下の一人として英文学科を創設することに努め、二十年間も主任教授をやったのであるが、戦争が始まって以来、心よからぬことが多く、山岳部やスキー部にも深い関係をもっていたにも拘わらず、軍人総長を迎えるに至って、英文学科廃止が決せられ、心ならずも辞職するに至ったのである。法政大学を辞して、私は幾らか身の軽さを覚えたが、生活の苦しさを感ずることにもなった。それでも好きな山旅をつづけた」と退任の背景を語っている。

戦争が始まって以来、どこの大学も状況は同じであったであろうが、大学の軍事一辺倒の方向と田部の考えが一致せず、いくらか相剋があり冷やかな関係になったと推察される。止むなく大学は退いたが、好きな山岳部の面倒はみていた。もっとも法政大学の資料によると一九四一年一月には「法政大学学友会を法政大学報国会と改称」していた時代である。

その頃山岳部は大学の配属将校から、山岳部の名称を「行軍山岳会」に、部員章を「富士山」に変えるよう指導があった（部員であった関口の言）ように、田部の自然と人との融合の精神とは程遠い状況であったのだろう。

田部が専門的に研究を行っていたペーターやワーズワースの研究とは相容れないものであったと察せられる。

『法政大学百年史』（一九八〇年発行）の田部に関係ある事項を要約すると、「法政大学に於ける文学部は一九二二年法学部の中に文学科と哲学科設置によって法文学部と呼称された。法学部と文学部が独立の学部となったのは、四

七年である。しかし、法文学部は、創設以来、法学部、文学部と通称し、それぞれに法科主任、文科主任がおかれ、教授会も別々に運営され、独自性をもっていた。主任も学部長と呼ばれていた。文学部は初代予科長となった夏目漱石門下気鋭の英文学者で、田部の大学時代の最も親しい友人である野上豊一郎があたった。野上は安倍能成らと相談して、まず森田米松（草平）、内田栄造（百閒）、和辻哲郎、小宮豊隆ら漱石系の文学者、哲学者を迎え入れ「個性の強い多彩な人材が集まりはじめた」のである。そして開講前後から、さきに記した諸教授のほか野上の同窓の英文学者で「山と渓谷」（筆者注：『山と渓谷』は一九二九年に発刊されたので、一九一九年発刊の『日本アルプスと秩父巡禮』の間違い）などで知られる近代的登山の普及者、山の詩人田部重治なども出講することとなった。

こうして二二年の年頭に安倍能成が文学科、哲学科の初代主任教授（学部長）として発令された。田部重治は英語学・文芸史の専任講師（筆者注：教授とは異なっており、資料によってまちまちである）であった。教授の顔ぶれをみると、当時の状況から官学出身者が多かったが、「自由な批判的学風をもっている人が多く、こんにちの法政大学の自由な学風の第一歩にふさわしい構成であり、世間の注目を集めた」と、文学部の草創期が記されている。

ここで田部が法政大学や山岳部、スキー部に愛着を持ちながら大学を辞職した。それをあえて詳しく百年史に記されている範囲で載せておきたい。ただし、山岳部との関係は前述したので省略する。

「三三年頃、いわゆる『法政騒動』といわれている事件があった。この騒動の真相はいまだにあきらかにされていない。表面上は財政再建、学長推戴、人事問題などで野上豊一郎と同じ夏目漱石門下の森田草平との間の学内に於ける権力争いの様相を呈したという。この時の騒動の調停に一役買って力があった校友の竹内賀久治（筆者注：四三年三月から四六年二月まで総長）とその一派を学内に引き入れる結果となったことはたしかである。予科の四十七人の教授の辞職によって一応収まったが、法政の進歩と自由の学風は、時代の趨勢とはいえ竹内らの超国家主義者によってふみにじられてしまった。野上の解職と入れ代わって三三年十月に陸軍大将荒木貞夫が法政の顧問として迎えられた。荒木は日本ファシズム確立期の陸軍大臣、文部大臣を歴任し、小山松吉（筆者注：三四年七月から竹内の就任前

までの総長）や竹内賀久治らとともに国本社の中心人物であった。これらの人が法政から一高、東大、それから漱石門下のような者は出ていくべきだ、と主張した。

学内紛争に直接関係のあった森田、小山教授は三四年六月に文学部教授を辞任した。このため英文学専攻は田部主任教授（筆者注：三四年六月時点で主任教授になっているが、就任時期は不明）一人が残り、危機にみまわれた。小山松吉総長が四〇年四月文学部学部長兼務に至って軍人色が一段と強まった。漱石門下の野上豊一郎は四一年四月に文学部長に復帰したが、田部辞任の直後である。

田部は三四年二月より四〇年九月まで、四代目の図書館長を兼任しているが、館長時は日中戦争が長期化し、新体制運動の名による軍国主義化の傾向が強まるなかで、政府の思想・言論に対する統制もしだいに強化され、マルクス主義関係の図書を麹町警察署に提出している」と記され、田部が述べている「戦争が始まって以来、心よからぬことが多く」という状況が、法政大学史にまざまざと描かれている。

## 十、むすび

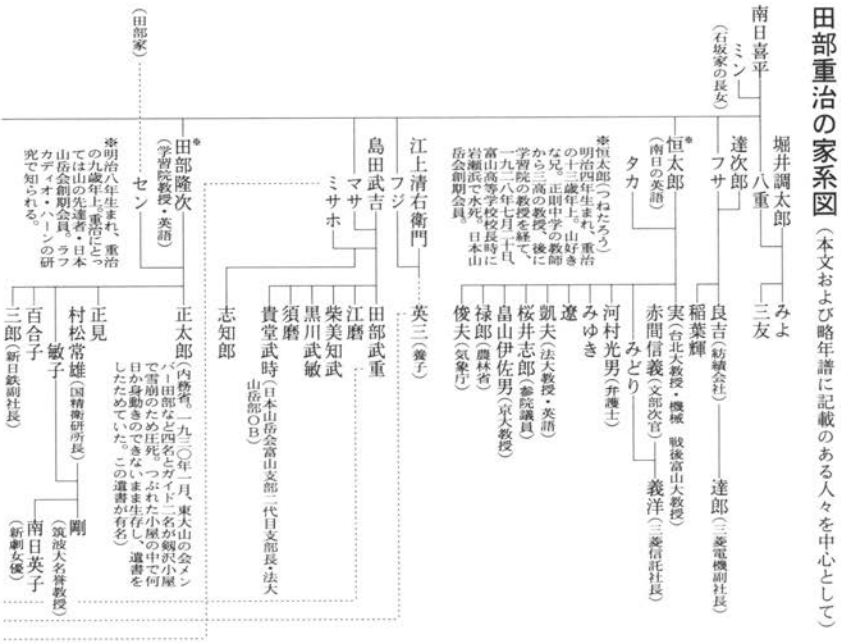
田部重治は「たなべ　じゅうじ」と読むが、日本山岳会の機関誌『山岳』第五年第三号などには南日（田部の旧姓）重次と書かれている場合がある。「じゅうじ」と呼んでいたので、「治」を「次」と間違えたのであろう。

田部の著書を読み返していると、田部が山と融合した真摯な情熱がよく伝わってくる。山へ登ることのうれしさが、心の底からこみ上げてくる感じがよくわかり、山登りについての精神的な変化がよく理解できる。

冒頭にも述べたが一九一九年の慶應義塾山岳会の講演で、田部の山に対する感情を三段階にまとめることができるとし、それぞれの段階を説明したが、それを「或は人は私の話をきいてそれは人間性の意識を三段に分けて之を私の山の生活にあてはめたものに過ぎないと云ふ人があるかも知れません。しかし之は偽りない私の山の信仰の告白であります」と第一段階は登山をはじめる以前を回顧し、第二段階である一九〇八年、二十四歳の夏に妙高山に登ってか

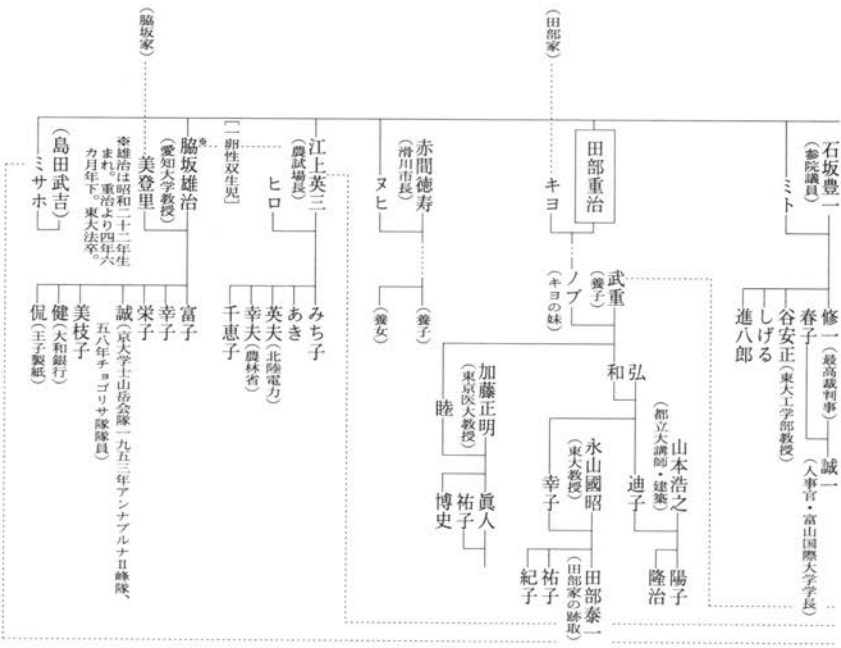
## 田部重治の家系図

（本文および略年譜に記載のある人々を中心として）




ら、熱狂的な山の猛者になった。それは非常に激しい、動的な、冒険的なものであり、登山は絶頂に登ることに意義を見いだしていた頃であった。そして第三段階はこれを二つに区分した方がよい。前期では自然との融合の世界で、後期は宇宙的なものに心を開いた段階である。

その間一九四四年田部が六十歳で山友木暮理太郎が亡くなった年までは、登山することなく過ごした年はほとんどない。登山という行動がなくとも例えば一九一四年は上高地に三週間滞在してペーターの『ルネッサンス』の翻訳および研究に没頭したり、二一年、妻や甥と中房温泉に滞在し、帰途追分の油屋に寄ったりしている。その間に、山に対する田部の嗜好は大きく変化したばかりではなく、人間に対する関心も増加した。「大自然の悠久を想い、人間のやっていることの如何にはかなく小さなものであるかを感じる」（一九三九年「高原の想い出」）と言う。この変化も積み重ねによって豊穣なものとなる。わくわくするような心の状態は、その時代時代によって伸縮の差こそあれ、登山という行為によって成し




遂げられた。その充実感が、田部の文章からよく読み取れる。

田部重治の山への考え方は五十歳ぐらいから更に少しずつ変わっていった。「山から得た体験により自分の生活や学問を統一していきたい。常識的な態度を捨てて人間性の奥から力強く動かなければならない。因襲を捨ててもっと自然な態度をとること、すなわち自然に還ることを山から教えられたものと感得した」と言う。この時点において田部は狭い自己を超越した第三段階の時期に入る。田部はさらに言う、「山が自分であるという意味は、山が普遍的な人間性の理想の表現でなければならないと考えるようになった。私達は依然として弱小な人間である。然し此の弱小な人間を刻々鍛えてこの理想的な人間性に高め、それに接触せしめるところに私達の生活の意義が存すると思った」（慶應講演）と田部のヒューマニストな面をものぞくことができる。

最後に田部重治の実弟江上英三氏の三男である江上幸夫氏に、伯父である重治と、その家系について語ってもらった。登山および英文学に関することは



**母・ミン死亡（明治36年5月4日）直後の父と兄弟姉妹の写真**　後列左から江上英三（四男）、南日恒太郎（長男）、南日喜平（父）、田部重治（三男）、田部隆次（次男）、脇坂雄治（五男）、前列左から赤間ヌヒ（六女）、石坂ミト（五女）、江上フジ（三女）、堀井八重（長女）、南日フサ（次女）、島田マサ（四女）、島田ミサホ（七女）

若干それぞれの項に述べたが、ここでは重治の人柄を知るうえでのエピソードを補足しよう。

まず重治から色紙を数枚貰っている。その一つを紹介すると「ひとり静か　しづかに咲ける　峠路に　憩ひて居れば　筒どりのなく」という作品で、「峠」をうたう心情が読み取れる。

その他の話を要約すると、

①伯父が「博士号をとらなかったのは、夏目漱石がとらなかった影響もあるようだ。漱石の弟子と称しながら博士号をとっている者がいる。博士号をとらないのが本当の弟子である」と言っていたという。どうりで田部の著書や日本山岳会の文献には「文学士　田部重治著」となっている。

②伯父は「人生は一〇〇～九〇点をとることを考えてはいけない。人生は六〇点でいいんだ」とよく言われていた。この言葉は「あまり欲張らずにほどほどで満足せよ」

あるいは「完全主義ということを考えるな」くらいに受け取っていた。

③庭木は一般的には常緑樹が多いが、伯父は「武蔵野らしいのは秋に葉っぱが落ちる落葉樹の方が季節感があってよい。関東地方はその方がいい」と言って自分の阿佐ヶ谷の家の庭はほとんど落葉樹を植えていた。

④私は戦争中埼玉県の上尾に住んでいたが、東京の親戚（伯父のほか、田部隆次の長女村松とし子、村松剛、英子の母親とその妹の内田百合子）の買い出しの基地になった。伯父の重治がリックを背負って買い出しにくると、近くの大きな農家では特に歓迎され、手打ちうどんを打ってくれた。伯父はいつも腹一杯食べ大変満足していた。

⑤私は小・中学生のころ山の映画と伯父の話の催しをやるときには姉によく連れられて行った。ある時、映画で二匹の蛇が出てきたところ伯父は「アベックだね」と解説したので皆が笑っていたが、私はその時まだ小学生で、アベックという言葉を知らず、どうしておかしいのかわからなかった。今でもアベックという言葉を聞くと、その時のことを思い出す。

⑥伯父はタバコの灰を上衣の胸のあたりにこぼしながら吸っていた。タバコを吸うときは首を左右に振って、フーフーと吹きながら吸っていたが、あの姿は今でも思い出す。

⑦年に一回「南日会」をやっている。今年（平成十年）も四月十八日に立食パーティーを行った。南日恒太郎の子でただ一人存命している南日俊夫をはじめ石坂誠一、村松英子なども常連として出席している。

⑧伯父は「穂高へ行きたいな！」とよく言っていた。

伯父は徳本峠から眺めた「穂高山」の文章や詩歌を書いている。しかし、穂高岳には登っていない。何時でも行けると思っていたようであるが、そのうち年をとってしまったと告白している。伯父が穂高岳だけは頂上を踏まずに残しておいたのは、ワーズワースがモンブランに幻滅の悲哀を嘆いたとする幻滅の意識と何らかのつながりがあるのかも知れないという説がある。決してそのようなことではないと明言できる。

⑨母の実家である石坂家で、母ミンの妹ツルの長男豊一（妻は重治の姉で五女のミト）は参議院議員であった。豊一の長男に修一（重治とかなり山に登っている）が最高裁判所の判事。修一の長男誠一が人事官で富山国際大学学長

であった。三氏とも勲一等を受章している。文官で三代にわたって勲一等の受章は初めてのようだ。

以上、田部重治の人柄とか親戚の状況がいくらか理解できる情報を掲げた。

私はこの小論を書き終わってから、頁数があまりにも多くなったので、ある程度整理した。その段階で、ある点には詳し過ぎた箇所や、あるいは疎略に扱っているのではないかと思ったところがある。それは私自身、特に力説しなければならないと考えたところに多くの紙数をさいたことによるもので、そのためアンバランスな感じを受けるかもしれないが了解願いたい。

また、『山岳』第九十三年のこの稿の（上）に記述したうち、次の追加説明または訂正を加えたい。

一、田部が深林美を最初に見い出したと述べている登路は現在の折立から太郎兵衛平に至る新道ではない。田部が歩いたのは有峰集落の十五歳から五十歳までの男子が薬師岳頂上の御堂に参詣したときに通った登山道であり、有峰の東谷から小畑尾峠に至り、眞川に下って、そこから太郎兵衛平に向かう山道である。今の新道とは比べることができないほど唐檜や白檜曾が林立している。しかし、現在は廃道になっている。

二、二三頁四行目⑥の一九一〇年八月、「二人の弟」と記したが、正確には「弟の南日雄治（後に脇坂雄治）と甥の南日良吉（姉フサの長男）である。A七六頁の年表も同じ。

三、二四頁一八行目「二人用の特製軽テント」は「三人入る特性軽テント」である。

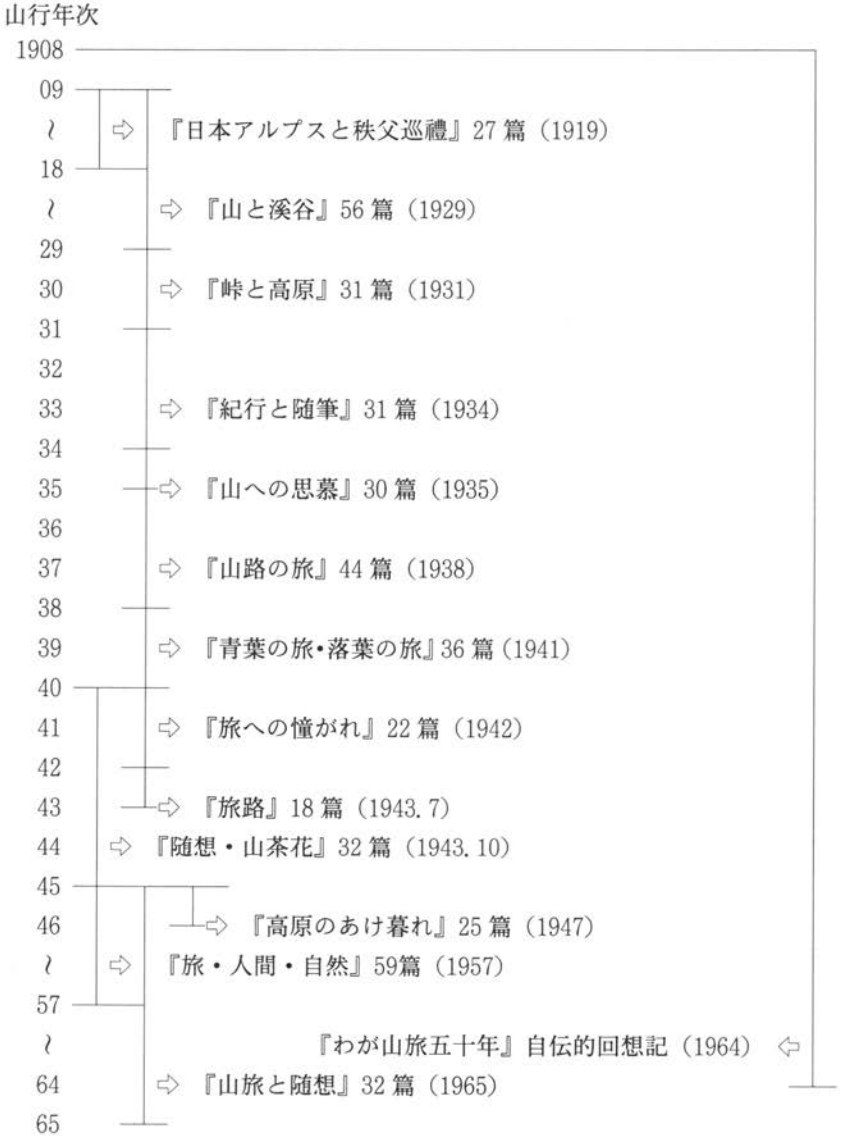
四、印刷所のミスにより次の脱落があった。①一一頁一九行目「登山精神」の「神」、②一四頁一三行目「藝術的精神」の「神」、③二〇頁一四行目「平湯溫泉」の「溫」、④同「白骨溫泉」の「溫」。

五、A七九頁四四行目「1931年」は「1922年」の誤り。

六、A八〇頁二九行目「（注6）」は「（注7）」の誤り。

七、A八四頁四五行目「および東京女子大学」を削除。

山岳関係　山行年次別　主な初出著書名（発行年次）




注　①　著書の題名に関連して，例外的に山行年次の範囲以外の作が入っている。
　　②　既刊のものを選集によって再録した著書には、若干の初出篇が追加されている。

# 田部重治　山岳関係著書関連表

凡例

㈠　単行本（自著および共著）単独編集本を中心とし、次のものは除いた。

①監修本、②一九七二年九月田部死去以降再録、復刻版

㈡　符号

・☆＝初出著書または初出篇の多い著書。

・★＝編著。

・□＝既刊書の内容を選択し、削除、増補を加えて再録した選集。

・♣＝既刊のもので叢書の一冊あるいは共著。ただし初出が多い場合は☆♣とした。

・○＝学術的研究に重きを置いた論評、詩、随筆に山岳関係が一部入っているもの。

㈢　改題などの取り扱い

①篇の題目を分割し新しい題目を設定したり、単行本のタイトルを改題したものが多々ある。本の改題はその旨表示したが、その他は特に指摘していない。

②版を重ねるごとに文章に加筆推敲が施されているので、同じ題目の文章でも版によっては部分的に差異がみられる。ただし、特にそれを指摘していない。

㈣　未見の著書については次の文献を参照にした。

①『とやま文学』第十一号（一九九三年三月　㈳富山県芸術文化協会発行）

八木光昭氏の「田部重治著作目録」

②『忘れえぬ山旅』（一九六八年十二月　三笠書房発行）

安川茂雄氏の「解題・文献ノート」

③田部重治の著書の解説（英文学関係を含む）などに記されている内容

☆**『日本アルプスと秩父巡禮』**一九〇九年より一八年までの紀行と随想。初めての山岳文集で序文は木暮理太郎の有名な一文。二十七篇と登山行程表など。一九一九・六。北星堂。B6変形（新書）判、三四二頁。──→**『日本アルプスと秩父巡禮』**「日本山岳名著全集」第二巻。『山の憶い出』（木暮）との合著。一九六二・五。あかね書房。フールス判、三〇三頁。

○**『渾沌より統一へ』**十五篇。一九二〇・五。博文館。四六判、二六六頁。──→**『心の行方を追ふて』**『渾沌より統一へ』の改

題増補版。増補二十九篇、再録十三篇。一九三三・八。第一書房。四六判、三六七頁。→**『心の行方を追うて（普及版）』**一九三四・三。第一書房。同前→**『心の行方を追うて』**一九四三・十。朱雀書林。B6判、三六七頁。→**『心の行方を追うて』**原本の根幹をなす「随筆」や他の感想、詩のみとし大幅に改変。一九四九・七。白玉書房。B6判、三一五頁。→**『心の行方を追うて』**一九五一・二。第一書房。未見→**『心の行方を追うて』**一九五一・四。角川書店。A6判、二七七頁。

☆□**『山と溪谷』**『日本アルプスと秩父巡禮』の増補版であるが、田部の代表的著書で、敢えて独立した著作として区分した。前著以降の十年間二十五篇を増補、削除一篇、五十六篇。一九二九・五。第一書房。四六判、五七二頁。→**『山と溪谷』**一九二九・六。第一書房。四六判、五七二頁。→**『山と溪谷　普及版』**一九三一・六。第一書房。四六判、五七四頁。→**『山と溪谷　戦時體制版』**著作当時と発刊時の相違点を欄外に注記してある。一九三九・六。第一書房。四六版、四三八頁。→**『山と溪谷（随筆篇）』**一九四四・三。新潮社。A6判、二五八頁。→**『山と溪谷（紀行篇）』**二十九篇。一九四四・九。新潮社。A6判、三八〇頁。→**『山と溪谷（紀行篇）』**一九四八・五。東西出版社。B6判、三〇六頁。→**『山と溪谷・随筆篇』**八篇削除、九篇追加。三十六篇。一九四八・十一。萬葉出版社。B6判、二三八頁。→**『山と溪谷（紀行篇）』**一九五一・八。角川書店。A6判、二六六頁。→**『山と溪谷（随筆篇）』**一九五一・八。角川書店。A6判、二〇八頁。→**『山と溪谷』**「世界教養全集」二十二。『山行』（槇有恒）、『エヴェレストへの長い道』（E・シプトン）、『アルプス登攀記』（E・ウインパー）との合著。一九六一・八。平凡社。B6変形判、四八九頁。

★**『スキーの山旅』**田部重治編。執筆は田部を含め山想会会員十四名。一九三〇・十一。大村書店。四六判、四三四頁。

☆**『峠と高原』**三〇年、三一年の作、三十一篇。一九三一・七。大村書店。四六判、二四六頁。→**『峠と高原　普及版』**一九三四・四。大村書店。四六判、二四六頁。→**『峠と高原』**三七年の作、四篇追加。一九三八・八。新潮社。四六判、二七二頁。→**『峠と高原』**四篇削除、一篇増補、三十二篇。一九四〇・七。新潮社。A6判、二三九頁。→**『峠と高原』**四篇削除。四篇復活、一篇追加、三十三篇。一九五〇・八。角川書店。A6判、一九四頁。

☆**『紀行と随筆』**三一年より三四年の作三十一篇。一九三四・六。大村書店。四六判、二〇九頁。→**『山を語る』**『紀行と随筆』改題。一九三七・五。大村書店。四六判、二〇九頁。→**『山と随想』**『紀行と随筆』改題。『山を語る』に三九年の作四篇を増補。一九三九・七。新潮社。四六判、二七一頁。→**『山と随想』**『山と随想』から二篇削除、三八年～四一年のもの七篇増補、四十篇。一九四二・五。新潮社。A6判、二五四頁。→**『山はふるさと』**『山と随想』改題。十一篇削除、七篇増補。一九五四・七。三笠書房。A6判、二一四頁。

☆**『山への思慕』**三四年五月～三五年八月の作二十九篇とシモンズ「アルプスへの思慕」訳文一篇。一九三五・十。第一書房。四六判、二六一頁。→**『山への思慕』**一篇削除、三篇改題。一九四六・十一。鳳文書林。B6判、二五六頁。

☆♣**『山の文学』**「山岳講座」第4巻。六名の共著。田部は五篇掲載。一九三六・二。共立社。菊判、四六八頁。

○**『涯しなき道程』**『心の行方を追うて』以降に書いた随筆。四十七篇。一九三六・十一。第一書房。四六判、三四六頁。→**『人生の旅』**『涯しなき道程』改題。「序」を変える。一九三八・十二。第一書房。四六判、三四六頁。→**『人生の旅』**九篇削除、六篇増補。二二年～四七年の作。一九五五・三。角川書店。A6判、二二六頁。

☆**『山路の旅』**三六年から三八年の作。四十四篇。一九三八・十。新潮社。四六判、二七五頁。→**『ふるさとの山々』**『山路の旅』改題。三篇削除。四一年の作七篇を追加した四十八篇。一九四一・八。第一書房。B6判、三〇〇頁。→**『ふるさとの山々』**一九四四・七。六合書院。三三一頁。→**『ふるさとの山々』**「日本岳人全集」第6回配本。『ふるさとの山々』五十五篇（二篇削除、九篇増補）、『高原のあけ暮れ』二十五篇、『涯てしなき道程』四十二篇（五篇削除、解説二篇追加）を既刊三冊の中から選集。一九六八・十二。日本文芸社。A5判、五八四頁。

□**『山に入る心』**既刊の随筆集四冊から抜粋。二十篇。一九三八・十二。新潮社。A6変形判、一九四頁。

□『四季の随想』『心の行方を追うて』、『人生の旅』から抜粋。二十三篇。一九三九・五。新潮社。A6判、二一七頁。→『四季の随想』一九四八・二。松和書房。B6判、二六九頁。

○『萌え出づる心』『人生の旅』以来の随筆集。五十篇。一九三九・八。第一書房。四六判、三〇六頁。

★『渓谷・随想と紀行』田部重治篇。小島烏水、木暮理太郎、中村清太郎、冠松次郎、黒田正夫、高畑棟材、角田吉夫の作を編集。田部は三篇を再録。一九四〇・七。三省堂。四六判、二六五頁。

☆『青葉の旅・落葉の旅』三九年、四十年の作が主で三十六篇のうち旅行記十七篇、随筆十八篇で再録四篇。一九四一・五。第一書房。B6判、三〇一頁。→『青葉の旅　落葉の旅』一九四四・一。六合書院。四六判、三一五頁。→『青葉の旅・落葉の旅』十二篇削除、四篇増補。一九四八・三。東西出版社。B6判、二五〇頁。→『青葉の旅・落葉の旅』初版に三篇削除、四篇増補。一九五二・九。角川書店。A6判、二五二頁。

○『わが散文詩』一四二篇。一九四二・七。第一書房。B6判、二七〇頁。→『わが散文詩』一九四三・十二。朱雀書林。B6判、二七〇頁。→『わが散文詩』五篇削除、五篇増補。一九四九・六。白塔書院。B6判、二七〇頁。

☆『旅への憧がれ』四一年、四二年の旅日誌で二十二篇のうち旅行記十一篇、随想十一篇。一九四二・十。新潮社。B6判、二七七頁。

○『詩と断章』六十三篇のうち二十一篇は詩。一九四二・十一。七丈書院。B6判、二四八頁。

★『北アルプス』熊沢復六との共編で研究・紀行・随筆の三部仕立て。三十篇うち田部一篇。一九四三・二。文藝社。B6判、

三七五頁。

☆**『旅路』**四二年十一月～四三年四月の旅日誌と随想が主で十八篇のうち再録三篇。一九四三・七。青木書店。B6判、二八〇頁。

○**『随想・山茶花』**『わが散文詩』発刊以前に書いた三十二篇。一九四三・十。七丈書院。B6判、二九四頁。→**『山茶花の咲く頃』**『詩と断章』『随想・山茶花』のうち四〇～四三年を中心に戦後の四七・四八年のもの七十五篇の散文と詩を収録。一九四八・六。鳳文書林。B6判、二一六頁。

☆♣**『日本の山』**「日本叢書」七六。「山国日本」、「旅と人生」、「登山と個性」の三章。一九四六・八。生活社。B6判、三一一頁。

♣**『山ゆく心』**「養徳双書」23。十六篇。一九四六・十二。養徳社。B6判、一八三頁。

♣**『山路の旅』**「山溪山岳叢書」6巻。十五篇。一九三八・十の新潮社発行『山路の旅』とは内容が異なる。著者自身が過去の著作から選んだもの。一九四六・十二。山と溪谷社。B6判、一七八頁。

☆**『高原のあけ暮れ』**四五年八月から四六年秋の間の信州追分の生活文集。二十五篇。一九四七・七。東海書房。B6判、二〇〇頁。

□**『憧れの旅路』**紀行を中心として再録。一九四七・八。地平社。A6判、一二六頁。→**『憧れの旅路』**「民族教養新書」7。再録五篇と四七年以降のもの十六篇。一九五四・四。元々社。新書判、一九一頁。

♣『山をたたえる心』「山溪山岳新書」の一冊として絶版の各書中二十篇再録。一九五五・七。山と溪谷社。新書版、一五八頁。

♣『わが山旅』「コマクサ叢書」第二巻。編者大悟利雄。二十篇再録。一九五六・八。朋文堂。B6判、二七三頁。

□『若き日の山旅』山・溪谷・峠・高原・湖沼・温泉・山村と分けて四十篇再録。一九五六・十一。河出書房。新書版、二〇八頁。

☆♣『旅・人間・自然』「東京選書」四六。大多数は終戦以降に書き、公にされていない作品か書き下ろし十篇で旅・人間・自然に分けた随筆が主で五十九篇。一九五七・二。東京ライフ社。新書版、二三〇頁。

□『忘れえぬ山山』主として『山への思慕』、『ふるさとの山々』から山・峠・溪谷・高原・随筆に分けて再録。一九五九・一。第二書房。B6判、二三〇頁。

☆『わが山旅五十年』自伝的回想記を通史的に綴った四十九篇。一九六四・五。桃源社。菊判、三八六頁。→『わが山旅五十年』「山岳名著シリーズ」。一九七一・八。二見書房。四六判、二九二頁。

☆『山旅と随想』終戦直後から六五年までに書いた紀行十篇、随筆二十二篇。うち一篇再録のほか短歌もあり。一九六五・四。世界文庫。B6判、二三五頁。→『山旅と随想』自筆短歌および著名入り、百部限定。一九六五・五。世界文庫。B6判、二三五頁。

□『忘れえぬ山旅』論叢九篇、紀行十七篇、随想十一篇の三十七篇再録。岳人素描、年譜、文献ノートなど田部重治小伝的なものが載っている。一九六八・十一。三笠書房。A5判、三三五頁。

◇第1回「秩父宮記念山岳賞」受賞記念講演◇

# 『ネパール語辞典』編纂のあれこれ

三枝禮子

ヒマラヤ登山隊に加わって三十年ほど前に、たまたまネパールへ行ったのがきっかけで始まったネパール語熱が長引いて、語学とか民族学は専門外のくせにネパール語の勉強会の仲間に入ったり、ネパールの民話や短編集の翻訳をとりとめもなく試みたりしているうちに、とうとうネパール語の辞書作りというお鉢が私にまわって来てしまった。八年余りかかって一九九七年秋に何とか『ネパール語辞典』の出版に漕ぎ着け、ひとまずほっとしていたところ、思いがけず本書が、一九九八年に創設された秩父宮記念山岳賞の第一回目の受賞対象の一つに選ばれるという光栄に浴した次第である。

## ネパール語との出会い―P二九登山

ネパールと私との最初の出会いは、一九六九年秋に大阪大学山岳会の第三次P二九登山隊に加わった時で、当時ネパールはまだ「秘境」であり「神秘の王国」であって、得られる情報は限られていた。また、現在に比べれば外国へ

出掛ける機会は少なく、私にとって初めての海外でもあった。

最初のうちはただ、何もかも全てが鮮烈でびっくりしているばかり、半ば夢のようなもうろうとした気分のまま、人の後ろについて稜線を上り下りしているうちに、冬のジェット気流の吹き出しが始まってしまった。帰る頃、それから翌一九七〇年秋に同じルートを辿っての第四次P二九登山隊に加わった頃にようやく少し落ち着いて来て、遙かな頂上とすぐ目の前のステップだけでなく、周りが少しずつ目に入るようになって来た。道みち茶店などがあれば入り込んで、聞きかじりの現地の言葉で何やら話しかけたりすることも覚えた。

それまでは、外国語と言えば英語かドイツ語の学術文献を読むばかりであったから、うろ覚えの片言と身振り手まねだけで何とかやり取りが出来るということは、まことに新鮮な驚きであった。山麓の風物やそこに暮らす人々の様子もまた、限りなく心を惹きつけるものであった。そこで帰国時に、カトマンズのバザールの本屋でネパール語の入門書らしい本を探して、英語―ネパール語日常会話集とか、インド人向けに英語で書かれたネパール語解説書などを買って来た。

ネパール語は、言語学の分類ではインドヨーロッパ語族に入る。インドの古典語であるサンスクリット語や現代国語であるヒンディー語と同じグループに属し、文字も同様にデーヴァナーガリー文字を用いる。

ネパール王国の総人口（一九九一年の調査では一八五〇万人）の約半分がネパール語を母語としており、王国内のほぼ全域で通用するほか、ブータン王国の中南部、シッキム地方、アッサム地方でもかなり使われていると

## 「秩父宮記念山岳賞」の創設について

本会は、一九九六年八月、秩父宮家より遺贈金一千万円を拝受し、これまで、その有効な使途について検討を重ねてきた。その結果、故秩父宮殿下及び同妃殿下と本会との長い間のご縁を考えたとき、本会としては「山」に関する諸業績に対する「秩父宮記念山岳賞」を創設し、永く両殿下のご事蹟を記念することが最も適切であるとの結論に達したので、一九九八年度より下記の実施大綱に基づく「秩父宮記念山岳賞」を創設し、表彰を行うこととした。

## 「秩父宮記念山岳賞」実施大綱

一、目的

「山」に関しご造詣の深かった故秩父宮殿下及び同妃殿下のご事蹟を永く記念するため、「山」に関連する顕著な業績に対して、これを表彰し、もって登山活動の奨励と山岳関連諸文化の高揚に資することを目的とする。

二、名称

「秩父宮記念山岳賞」

三、表彰の対象分野及び受賞者

(一)表彰の対象分野

イ．優れた登山活動

ロ．「山」に関する人文・社会・自然諸科学の研究成果

ハ．「山」を対象とした芸術作品

(二)受賞者

イ．(一)の各分野において顕著な業績のあった個人又はグループ

ロ．受賞者は、本会の会員又はその業績に関して本会の会員が顕著な貢献を行った本会以外の団体、若しくは学会のグループに限定する

四、運営委員会（略）

五、募集、審査、表彰（略）

六、その他（略）

のことである。ネパール王国内では、ネパール語のほかにもさまざまな言語が母語として話されている。一九九一年の国勢調査の中では三十二種類の言語が母語の統計項目として取り上げられており、言語学的に見ると七十種余りの言葉が話されているとも言われる。ネパールにおけるヒマラヤ登山やトレッキングの主な舞台である北部山地に住む人々は、概ね、ネパール語とは別の語族に入るチベット・ビルマ語族の諸語を母語としている。高所ガイドとか高所ポーターとして馴染み深いシェルパもその例で、母語はチベット語に近いシェルパ語である。

一九九〇年のネパール王国憲法は、ネパール語が王国の国語であり公用語であると明記すると共に、王国内でこれ以外に母語として話されている各種の言語を国民語として認めている。この新憲法施行以前は、政策の一環としてネパール語の普及と高揚に力が注がれていたのだが、ここ十年ばかりはそれぞれの母語の復権活動が高まりつつある。

こうした政治的あるいは社会的な背景がどうあるにせよ、私から見ると、ネパールの暮らしの中には実にさまざまな言語が飛び交っている。母語のほかに複数の言語

を日常的に使う人は珍しくないし、時と場合に応じてこれらを立ちどころに使い分けることにも慣れているように思われる。かと思えば、そのような生活の中で頑強に母語しか解さない老人がいたりする。が、たいていは家族の誰彼がバイリンガーとかトリリンガーだから、老人自身の暮らしに不都合は無いらしい。

都市部では近年特に英語教育が盛んで、それをうたい文句にする私立学校がカトマンズ周辺に増えている。ラジオやテレビの放送はネパール語で構成されているが、番組、時間帯、および地域によってネパール語のほかに英語、ネワール語、あるいはマイティリー語などでも繰り返して放送され、また娯楽番組ではインドとかパキスタンの劇映画のフィルムが、ヒンディー語やウルドゥー語のまま放送されて人気番組になっている。日本の「おしん」は英語版が流され、好評だった。

ネパールのようにさまざまな言語に溢れた国では、それぞれの暮らしに必要な言語をそれぞれ必要なレベルで身につけることが常識なのだ、と感じ入ってしまうことがしばしばである。

このような王国内の言語事情は、ヒマラヤ登山から帰ったあとネパール語の勉強を始めてから少しずつ理解したことで、三十年前に初めてネパールへ行った時には思いも及ばなかった。ネパールの国内で耳に入る言葉はネパール語だろう、ぐらいの考えだった。当時聞き覚えた片仮名書きの単語帖を見ると、ネパール語あり、チベット語ないしはシェルパ語あり、インドなまりの英語あり、という具合にごちゃまぜである。片言で「これ何?」と質問する私自身に、「何語で」という観念が無かったのだから、前後の事情、場所、回答者次第でいろんな言語での答えが返って来たわけである。それらを私は、押しなべてネパール語だと思っていたのだけれど、そんなごちゃまぜの片言のつなぎ合わせでも何とか日常の用が足せたりする、というのも多民族多言語の国だからだろう。

帰国後、ぼつぼつネパール語とチベット語の勉強を始めた。再度のヒマラヤ登山を志す人や、文化人類学の調査に行こうとする人たち数人の中にまぎれ込んで輪読会を続けたり、在日ネパール大使館館員の家族の方々と親しくなって、お互いの会話練習の中でネパールと日本の生活ぶりを話し合ったり、ネパールの出版物の翻訳を試みたりしてい

た。

そうこうするうちにヒマラヤを取りまく状況が様変わりして来た。一九七〇年代に入るとヒマラヤ登山の形態の多様化が一段と進み、比較的小編成の登山隊の数が増え、トレッキングが盛んになり、「東洋の秘境」をキャッチフレーズにする観光旅行が急増するなど、観光産業部門は王国の最大の外貨収入源となった。また、政府間レベルの技術協力や経済援助に加えて、NGOの活動が広がり、留学生や研究者の交流も頻繁になって来た。

そんな状況の中で、出版社の側から「そろそろネパール語の辞書を作りませんか」という話が持ち出された。今から十年ばかり前、一九八九年頃のことで、研究調査とか業務のためにネパール語を読んでいる人はまだ少なかった。それぞれ辞書の必要性は痛感していたが、辞書作りのチームを組んで組織的に作業に着手するような状態ではなかった。辞書作りなんていう仕事は手間ひまがかかることは誰でも想像がつくから、ネパール語輪読会の仲間は互いに譲り合い、押し付け合いをしたあげく、「さしあたり、山岳部出身なら体力と持久力はあろうし、フリーで医薬文献の翻訳をしながら油画など描いているなら暇なんだろう、それに語学が専門ではないから、少々の的外れを仕出かしても元もとじゃないか」という程のことから、とうとう私が引き受けるはめになってしまった。たまたまその頃、以前から知り合いの若いネパール人夫婦が留学とアルバイトを目的に東京に来ており、都合のよいことにネパール語を母語とするブラーマンであったから、私にとっては願っても無いインフォーマントが身近にいた、ということもあった。

### ネパール語の辞典

当時、日本にはまだネパール語の辞書が無いと言っても、王国内にはすでに、ネパール語で書かれた幾種類もの国語辞典が出版されていた。王立ネパール学士院発行の「ネパール語大辞典」（註1）とか「ネパール語小辞典」（註2）を始め、信頼の置けそうな充実したものを入手することが出来た。ネパール語―英語辞典も数種類出されていた。すでに一九三一年に専門的な比較言語学的語源学的な辞書がロンドンで出版されており（註3）、外国人学習者の実用

的な目的に添うようローマ字転写法で編集された、ポケットサイズのネパール語↑↓英語辞典（註4）もあったし、ネパール語―ネパール語―英語辞典（註5）は、英語訳と同時にネパール語の同義語を知ることも出来るので大そう役に立った。ネパール語―ロシア語辞典もすぐれたものがあったが（註6）、残念ながら、私がロシア語を解さないためにこれは利用出来なかった。その後、現在までにさらに何種類かのネパール語―英語辞典が出版されている。英語―ネパール語辞典も各種ある。

そういうわけで、ネパール語―日本語辞典を作ると言っても、これから未開の地へ出掛けて未知の言語の語彙収集から始めるというのではない。ごく大雑把に言ってしまえば、既存の信頼出来そうな辞書をもとにして、日本人が使い易いように編纂すればよろしい、ということである。

それまでに少しネパールの本や新聞を読んだり、現代文学作品の翻訳を試みたりした経験から、「専門書は別として、現在のネパール語の出版物を読むには、見出し語数二万語程度の現代語の辞書があれば何とか間に合う。それに載っていない単語は、それを使ってネパール語の国語辞典を引けば、大体は理解出来る」と見当をつけていた。そこで、今回は初めてのことでもあるから、まずは一般によく使われている単語二万語弱を選んで見出し語とし、その語義は「ネパール語大辞典」を拠り所に記述して、単語帖よりは幾らか詳しい実用向きの小辞典を作ろう、という方針を立てた。

## ネ―日辞典への取り組み

作業の進め方は、見出し語ごとにカードを用意して必要事項を記載し、これをそのまま辞書の本文の原稿とすることにした。見出し語の配列は、ネパール語国語辞典にならってデーヴァナーガリー文字の文字表順にした。当初の気がかりの一つにデーヴァナーガリー文字の印字という問題があったが、作業を開始して数年たつうちに、ワープロのデーヴァナーガリー文字フォントが開発され改良されたことで、この点はほぼ解決した。

最大の難関は、現在六、七万語余りとも言われるネパール語の語彙の中からどの語を選び出すかであった。目下のところ最も充実しており信頼が置けると思われる「ネパール語大辞典」には、七万語あるいはそれ以上の語彙が収載されており、その中には古語とか、韻文にしか使わない語とか、占星術などの特殊な専門用語など、「実用向き」の見地からは省けそうな語がかなり含まれている。これらは省くとしても、「実用的」で王国全域にわたって広く使われる「標準的」な語だけをうまく選び分ける「ふるい」があるものだろうか。

王国内には確かに、ネパール語で書かれた手頃な見出し語数の「簡約ネパール語辞典」とか「ネパール語小辞典」という書名の辞書が何種類か出版されているが、これらはネパール人が国語辞典として使う上での「簡約」であり「小」なのであって、ネパール語を学習する外国人にとっての基礎的なネパール語辞典として適切だとは限らない。ネパール人にとってはこれら小形の辞書に載せる程のことは無い「ごく自然で普通」の語形変化の類や間投詞などであっても、われわれ外国人にとっては「自然で普通」ではない。むしろ、そのような「ネパールではごく当たり前」の用語例は、われわれがまず最初に間違いなく知っておきたい類のものであろう。一方、ネパール人がわざわざ国語辞典を引いて確かめたくなるというのは、一般的には余り使わない語だからかも知れない。手頃な小形の辞書にも載っているからと言って、必ずしも「実用的で標準的」だとは限らない。

何とかして二万語程度の適切な見出し語を選び出す方法として、それまでに自分が使い慣れていた「ネパール語大辞典」と「ネパール語―ネパール語―英語辞典」を中心に、数種の辞書を見比べながら単語を拾い出していったのだが、いや、拾い出すと言うよりも、特殊あるいは難解で使いそうも無い語彙をふるい落としていったのだが、辞書の目的にとって必要かつ十分な見出し語の選定法は、今後の重要課題として残っている。

語義の記述の仕方もまた、ネパール人にとっての国語の字引きと、日本人にとってのネパール語の辞書とでは違って来る。ネパール人にとってはその「語釈」が知りたいような単語であっても、われわれにとっては対応する日本語への「言い換え」だけで充分だということが多い。例えばサンスクリット語由来の少々堅苦しい単語で、話し言葉の

中では殆ど使わないけれども文書の中では見かける、というような語がある。このような語を「ネパール語大辞典」で引くと、たいていは語義が詳しく説明してあるのだけれども、われわれの側では、その説明内容が理解できさえすれば、それにぴったりの日本語（大方は文語的、漢語的な語）を思い付いて、その日本語だけで充分、ややこしい説明は不要、ということがある。専門用語の中にもこのような例がしばしばある。日本語の専門用語に言い換えることが出来れば、あとは各人の必要に応じて日本の辞書なり参考書なりで調べれば足りるわけである。

他方、ネパール人が日常の字引きとして使うためには、長たらしい語義の説明よりも、同義語の列挙つまり、同じような意味で使われる「別のネパール語への言い換え」が書いてあれば充分という場合が多い。このタイプの記述方針で編集された簡約ネパール語国語辞典をわれわれが使うと、「ある単語を引いた場合、記されている語を引き直していったら、また元の単語に戻ってしまった」という堂々めぐりになりかねない。

あるいはまた、「ネパール語大辞典」に列挙されている幾通りもの語義の中には極めて稀な状況下でしか該当しない意味もある、という場合がある。「実用向き」の立場からは、これら全ての語義を列挙するのは必ずしも適切ではない。そのような場合には、幾種類かの大小のネパール語国語辞典を見比べて記載の範囲を決めたのだが、この線引きのための明快な基準を定めることは不可能だった。

ネパール人は日常よく口にしているけれど国語辞典には出ていない、というような表現はわれわれ外国人にはまことに厄介である。このような例はどの国の言葉にもあるのだろうが、実用的な辞書ということになれば何とかして取り上げておきたい。こんな時には、日頃から親しくしていて遠慮無用のネパール人の友が頼みの綱で、何回もあれこれと気長に用例を聞き出し、そのうち自分の方から使って見たりして確認する。

ネパールの歴史や文化について充分な知識の無いわれわれには、ネパール人なら必要の無い補足説明が欲しいことも多い。「語釈」と「言い換えの日本語」と「補足説明」とが必要だと思うこともしばしばである。「ネパール語大辞典」を丹念に忠実に翻訳しただけではネパール語―日本語辞典にならないゆえんである。

辞書であるから、ネパール語が網羅する全ての範囲から一様に見出し語を取り上げ、自分の興味の有る無しにかかわらず一律に、あらかじめ定めた方式に従って記述していく。自分が少しばかりネパール語に慣れて来たからと言って、勝手に「もうわかり切っているから」なんて記述をはしょるわけにはいかない。ネパール語という山脈に引かれた稜線を端から端まで、一通り丹念に辿る。何回も登ったピークだからとか、つまらなそうなこぶだからとか言って飛び越えてしまうわけにはいかない。似たような見出し語のカードを何枚も作りながら、山岳部に入った頃の北アルプス全縦走をつくづくと思い出したことである。

ネパール語で記述された語釈を解読する要領も段々と身につき、カードの書き方にも慣れて来るに従って、それまでは予定外としていた単語も取り上げたくなって来る。当初は気が付かなかった表記上のこまごました問題が持ち上がって来る。記載内容についても欲が出て来る。実用性の立場から言えば省略して差し支えないけれども、ネパールの歴史や文化の背景としては興味深いと思われる説明が気にかかって、「とりあえずこの程度で良しとしよう」と考えていた線では気が済まなくなって来る。その度にカード作成マニュアルに手直しを加えて、最初のカードから見直しをするという具合で、辞書の本文となる見出し語カードの作成に六年余りかかり、その数も予定を越えて二万六千余りとなってしまった。

自分が本を読むために「ネパール語大辞典」を引く場合には読み飛ばしてしまうような箇所も、辞書作りが目的となれば丁寧に全部読まなければならない。お蔭で非常に勉強になり、思いがけない発見が多々あって愉快だった。今回の辞書の記載内容からは外れるのだが、おもしろそうだから別の本まで引っぱり出して調べてみる、という道草は数知れずであった。道草をくわなければもう少し早く作業が進んだかも知れないが、こうした野次馬的な楽しみのお蔭で辞書作りの作業が続けられたことも確かである。

「ネパール語大辞典」の説明を読みながら、つい何やら嬉しくなってしまうのが擬態語や擬声語の箇所である。ネパールの短編小説や民話集を読んでいるとたびたびこれらに出会うのだが、小形のネパール語国語辞典やネパール語

―英語辞典には余り載っていない。「ネパール語大辞典」には数多く収載されており、説明が具体的でわかり易く、たいていはすぐ、「日本語ならこう言うところだ」と思い浮かぶ。月光はタハタハ（ta ha ta ha）と照り渡り、星はチャムチャム（cam•cam）とまたたき、風はサラサラ（sar•sar）とそよぎ、青草はラハラハ（la ha la ha）と茂るし、今は小雨がシムシム（sim•sim）と降っているが雨期には大降りの雨がザムザム（jham•jham）と降り続いて増水した川はグヮーングヮーン（ghwāṅ•ghwāṅ）と流れる。台所の方から旨そうな匂いがマグマグ（mag•mag）と漂って来る。大盛りのごはんをカパーカパ（kapā kap）と平らげ、仰向いて水差しの水をガトガト（ghaṭ•ghaṭ）と飲む。娘はムスムス（musumusu. にこにこ）笑っている、という具合で、音が日本語の場合と似ているのも多いし、似ていないけれど言われて見れば確かにそんな感じだと思うことも多い。もちろん中には思いがけない例もあり、さほど一般的ではないのもある。日本語で話している時と同じ感覚で使ってみると通じないこともあって、油断は出来ない。ついでながら、カッコウはコホ、コホ（ko ho. ho ko. 誰か？ 誰か？）と啼く。この鳥に托卵の習性があることを思い合わせると、民間説話なんかを探ってみたくもなる。

語義の説明にネパールの暮らしがうかがわれて、成る程と感じ入ることもある。小さい子供の頃に、「箸を持つのが右手、茶碗を持つのが左手」と教え込まれたせいで、今でも私は無意識のうちにその仕種をしながら右左を確認していることがあるくらいだが、「ネパール語大辞典」を引くと、右手（dāhinehāt）は「①食べる手、右の手。②無くてはならない人……。」とある。ネパールの習慣では右の手指で食べ物を口に運び、箸やスプーンは使わない。左手（debre hāt）には「左の手」とあるだけである。

料理名とその調理法の説明も興味深い。実際に自分が食べたり、教わったりしたのと少し違っていようものなら、むきになって調べ直したりしてしまう。

人口の約八五パーセントがヒンドゥー教徒の国であるから、国語辞典にも、ヴェーダとか二大叙事詩（マハーバーラタとラーマーヤナ）の神話や伝説にかかわる事柄の記述が多く、これらもまた、全て道草の種となる。

山岳会々員としては、ヒマラヤの山々がネパールの国語辞典の中でどのように扱われているか、ちょっと気になる。王国の北側の国境近くには、グレート・ヒマラヤの中心地帯とも言える部分が横たわっているのに、国語辞典にはこれらの山名の記載が少ない（八千メートル級はほぼ全部載っているが）。ヒマラヤの山地にはチベット・ビルマ語系の諸語を母語とする人々が居住しており、山々の現地名はそれら言語に由来するものが多いからだろうか。ネパール語を母語とする人々は、伝統的に、王国の西部と南部の低地および山地低部に住んでいて、ヒマラヤの個々のピーク名には関心がうすいようにも思われる。近年ネパール政府が、主に現地名に基づいて「ネパール名」と決定し公表したいくつかの山名は、一九八三年発行の「ネパール語大辞典」にはまだ収載されていない。

偶然の事情が重なって、私はネパール語との縁が永くなってしまったが、辞書作りは、自分の研究のための語彙集とか単語帖を作るのとは違う。対象とする言語にたんのうな言語学者を中心にチームを組んで作業を進めるのが妥当だろうし、編集上不可欠なノウハウもあるに違いない。このたびの辞書作りは、大胆不敵にもこうした配慮を全て棚上げにして始められた。自分の語学力や知識経験の不足はよく承知していたが、諸条件をすっかり整えた上で完璧なものをと言っていては、誰もいつまでたっても着手出来ないだろう、チャンスが与えられたのを幸いにこの際、ネパールと日本の相互理解と友好促進の足場の一つとするための叩き台を作っておこうという考えで、何とかまとめてしまった。何年かのうちに、学識経験豊かな方々の手で改訂されることを願っている。

印刷が上がると見落としていた誤植が見つかる、とはよく言われることだが、全くその通りで、何回も校正を繰り返した筈なのに、出来上がった辞書をざっとめくって見ると、たちまち誤記・誤植の見落としが目に入ったり、説明不足に気付いたり、その上、辞書の記述というのは「文脈から判断すれば間違いだと分かるでしょう」なんてうそぶいてはいられないところもあって、責任は重大、身の縮む思いを重ねている。

なお本書のネパール語名は「ネパール語―日本語小辞典」（註7）とした。

（註1）「ネパール語大辞典（nepāl　bṛhat śabdakoś）」バーラクリシュナ・ポカレル（bālakṛṣṇa pokharel）他編、王立ネパール学士院（nepāl rājak　ya prajñāpratiṣṭān）発行、一九八三年カトマンズ

（註2）「ネパール語小辞典（nepāl　saṃkṣipta śabdakoś）」スルヤビクラム・ギャワリ（sūryawikram jñawālī）編、王立ネパール学士院発行、一九八三年カトマンズ

（註3）「A Comparative and Etymological Dictionary of the Nepali Language」Turner, R.L.、一九三一年ロンドン、一九八〇年ボンベイ

（註4）「Basic Gurkhali Dictionary」Meerendonk, M.、一九六〇年

（註5）「Nepali-Nepali-Egnlish Dictionary」パラスマニ・プラダン（pāras mani pradhān）他、一九七一年カリンポン

（註6）「ネパール語―ロシア語辞典（nepāl　-rūs　śabdakoś）」一九六八年モスクワ

（註7）nepāl　-jāpān　saṃkṣipta śabdakoś

◇第一回「秩父宮記念山岳賞」受賞記念講演◇

# 『ヒマラヤ文献目録』ができるまで

薬師義美

すべては、一九五一年に高等学校に入ってはじめた山登りから始まりました。時あたかも、ヒマラヤ登山が黄金時代を迎えた時期です。一九五〇年のフランス隊のアンナプルナ、五三年のイギリス隊のエヴェレスト、五四年のイタリア隊のK2など、そして五六年の日本のマナスルの初登頂が続きます。それらの登山の報告書も次々に刊行され、もともと本の好きな私は熟読しながら、北アルプスの北部をホーム・グラウンドにして、いつかは自分もヒマラヤへ、という思いを強くしていました。私はその北麓で、朝日岳（二四一八㍍）、白馬岳（二九三三㍍）、剱岳（二九九八㍍）、立山（三〇一五㍍）などの山々を眺めて育ちました。

## 一、GJとの出会い

ヒマラヤやチベット、中央アジアの登山や探検の文献を読んでいると、引用・参考文献に“The Geographical Journal”略して“GJ”がよく出てきます。ロンドンのThe Royal Geographical Society の機関誌です。それが

大学の学部を終わるころに、一八九三年の第一巻から大揃いのセットで学科研究室に購入されました。もちろん、登山に限れば、イギリスの伝統ある山岳会アルパイン・クラブの“The Alpine Journal”があり、また時代は新しくなるものの、ヒマラヤを中心にしたものにはインドのヒマラヤン・クラブ、そこの“The Himalayan Journal”があります。しかし、残念ながら、どちらも戦前の号が自分の手元にありませんでした。

およそ六十年分の、ひと山もあるGJを前にして、これはチャンスと、製本前に複写しようと考えました。当時、GJの完全なセットはわが国の大学・研究機関のどこにもありません。また、複写機はいまのようなものがなく、マイクロ・フィルム化することにしました。そこで全巻に目を通し、関係記事のリスト・アップをしたら、約四〇〇〇ページ。これは数か月かけてマイクロ化しました。一方、関係記事の一覧リストを一人で楽しむには惜しいと、自分でタイプ謄写印刷し、山の関係者に配布しました。最初は一九五九年一月で、B5判二〇ページ。ついで六〇年六月、五二ページに増補改訂して、国内外の有識者に一〇〇部を送りました。タイトルは次のようです。

“Selected Index of Reports on Himalaya, Tibet, and Central Asia to the Geographical Journal : Vol.1 (1893)—Vol.125 (1959)”

続いて、HJの総目次と索引を大阪の故諏訪多栄蔵さんと共編で作成しました。

“Contents and Index to the Himalayan Journal : Vol.1 (1929) to Vol.21 (1958)”

（一九六〇年八月、B5判七二ページ、タイプ謄写印刷、二〇〇部）

そのあと、AJの索引も予定しましたが、総合索引が数冊刊行されており、バック・ナンバーも容易に入手できることがわかったので、やめました。しかし、GJやHJの索引はヒマラヤの研究者に大いに喜んでもらい、当時の碩学たち、スイスのM・クルツ、G・O・ディーレンフルト、スイス山岳研究財団などから、礼状やら文献が送られてきました。

## 二、九山山房

ＧＪのインデックスを作った五九年一〇月に、はじめて故深田久弥さんのお宅を訪ねました。ご存じのように、深田さんは一九五八年にジュガール・ヒマール（レンポ・ガン）に小遠征隊を率い、また、『岳人』に「ヒマラヤの高峰」のシリーズを連載していました。のちに、このシリーズは一九六四～六六年に五巻本にまとめられ、没後の七三年には完全本が三巻で白水社から刊行されています。

ともあれ、初対面の若僧にもかかわらず、私は旧知のごとくに遇してもらい、ヒマラヤの話、本の話が大いにはずみました。それ以来、上京するたびにお邪魔することになります。お伺いするたびに蔵書が増えて、書斎兼応接間は、ヒマラヤや中央アジアの本で床が抜けそうになっていきました。最後には、深田さんが山登りにお出掛けの間に、奥さんがとうとう庭の一隅に、深田さん自称、「ウナギの寝床」風の『九山山房』を作られました。このライブラリーは深田さんの没後、洋書は国立国会図書館に収蔵されました。いまでは『日本百名山』の深田さんですが、私にとっては『ヒマラヤの高峰』の「久（九）」（きゅう）さんです。

山岳雑誌『岳人』の関西編集分室であり、ヒマラヤ研究家の諏訪多さんのところには、ドイツ・ヒマラヤ遠征隊（Willy Merkl）編集の目録『Himalaja Bibliographie（1801―1933）』（ミュンヘン、一九三四年）がありました。文庫判、四八ページの小冊子で、図書・雑誌記事・地図を合わせて八〇〇余点を収録していました。これを下敷きに、諏訪多さんは戦前の雑誌『探検』に「ヒマラヤ山岳文献抄」をＡからＭ項まで、日本のものを加えて四六七点、くわしい解説をつけて紹介されていました。Ｎ項以降は雑誌廃刊のために完結しませんでした。諏訪多さんの蔵書は、死後に富山県の立山博物館に買い取られ、収蔵されています。

諏訪多さんや深田さんのところに出入りしているうちに、雑誌よりも単行本が一番だと思うようになりました。もちろん、記録・報告を雑誌に書いても、本にしない人もたくさんあります。ＧＪとＨＪの索引を作った私は、つぎに

ヒマラヤの登山と探検を中心にして、チベットと中央アジアを加えた単行本のリストを作ろうと考えました。自分の手元に原書がないという悔しさもありました。そしてB6のカードに記録をはじめました。六二年五月末には深田さんの九山山房に泊まり込んで、全蔵書の調査をさせてもらい、そのあとは、奥さんの手書きで新入荷の本のリストを送ってもらいました。外国の山岳、地理学関係の雑誌からも書評・図書紹介をピックアップし、六四年にはカードが一六〇〇枚になりました。すると、深田さんからは、それを一冊の目録にしてほしいな、と時どきいわれていました。

## 三、『ヒマラヤ関係図書目録』

そのうちに自分自身に火がついて、六五年と六九年の二度、ネパール・ヒマラヤに出かけ、文献調査は中断。カードはロッカーに放りこんだままになりました。私は仲間たちと、一九六四年にネパール・ヒマラヤの処女峰、ティリツォ・ヒマール（七一三四㍍）の登山を計画したのです。しかし、ネパール当局は一九六四年に登山を禁止しました。それでやむなく、六五年に偵察隊を組織し、アンナプルナ山群からクーンブ山群など、六か月間にわたってトレッキングをしました。ティリツォ・ヒマールは地元のタカリー族の郡長の同意を得て、命名したものです。

ネパールは一九六九年に登山を再開しました。さっそくに登山隊を組織しましたが、ティリツォは許可されず、かわってグルジャ・ヒマール（七一九三㍍）に向かい、その初登頂に成功しました。ティリツォが許可されなかったのは、内政問題といいながら、多分、チベットのカンパ族ゲリラの問題があったように思います。ちなみに、ティリツォは一九七八年にフランス隊によって登られ、私たちは翌七九年春に第二登しました。

このはじめの二度の遠征では、その準備と後始末、さらに一九六九年と七二年に報告書を出版したりして、カードを目録化する時間はありませんでした。

ところが、一九七一年三月、深田さんが登山中に急逝されました。その報を耳にして、〝しまった〟というわけです。遅きに失したけれどもと、たまっていた数年分の資料を整理し、一気に目録の作成に入りました。山に関係する

二、三の出版社に当たりましたが、どこも駄目で、結局は自費出版です。いまのようにワープロがなく、自分でタイプライターをたたくことになります。英文タイプを独・仏語もできるように改造し、リボンはプラスチック・フィルムを使い、和文は本職に写植、貼り込みをしてもらって、原稿をそのままオフセット印刷しました。また、わかるものには英文解説をつけ、邦文図書には英訳を併記して、世界に通用させようと考えました。

資料の整理に十か月、タイプに十か月。発想してから十二年、ようやく七二年の暮れにB5判、三四三ページの私家版を完成させ、深田さんのご霊前に捧げることができました。欧文図書は約一九〇〇点、邦文は約二五〇点を収録しましたが、当時の情報事情と自分の語学不足から、ロシア語と中国語の文献は最初から除外していました。範囲は自分の趣味から、ヒマラヤを中心にしてチベット、中央アジアの登山と探検をもっとも重視しました。しかし、私には書誌学とか司書学的な素養はなく、まったくの我流の目録です。専門家からすれば、笑止千万なものであろうと思いました。いずれにしろ、終わってみると、指先が腱鞘炎になったような感じでした。

そして一九七三年二月四日の夜、深田さんの九山山房で志げ子夫人のお手を煩わして、私の目録の出版記念会を催していただきました。ちょうど、八王子での日本山岳協会の海外登山技術研究会を終わっての帰りです。勧進元の深田夫人と諏訪多栄蔵さんに、小林義正、望月達夫、山崎安治、高橋　照、雁部貞夫、近藤信行、中馬敏隆、横山厚夫、のちに改訂版で大変お世話になる白水社の藤原一晃、の十一人の諸氏が集まってくださり、労をねぎらっていただきました。それから四半世紀が経過すると、深田夫人や諏訪多さんをはじめ、いく人もの方が鬼籍に入られて、ご同席のみなさんの、寄せ書きの色紙を見るにつけ、感慨もひとしおです。

## 四、ついで『ヒマラヤ文献目録』

心配した頒布（送料共で三五〇〇円）は、山の友人たちの支援で好調でした。欧米の山岳図書店・大学・研究所・図書館からも注文がきました。国内では国会図書館の納本リストに掲載されていたのですが、国内の図書館ではT県

立図書館の一件のみ、数ある大学図書館はゼロです。しかし、印刷した五〇〇部も半年ほどで出てしまい、黒字になって道楽冥利に尽きるというものでした。

しかし、できあがった目録を見直すと、ミスタイプが気になります。また内外の友人・知人が何枚もの追加・訂正リストを送ってくれると、さらに気が滅入ってきました。なかには、早々に改訂版を、という友人もいましたが、印刷と製本だけを業者にまかせ、あとのすべてを一人でやるのは、たいへんシンドイことです。それで、こういう苦しいことはもうやめたと宣言し、カードの補充もやめてしまいました。

それから八年たった一九八〇年の二月、目録の再版あるいは改訂版の話を、さる出版社からだがと、知人の堀内章雄さんが持ち込んできました。度重なる要請で、いつの間にか本気になり、どうせやるなら全面改訂だと、カードの補充と整理をはじめました。欧米の新刊書や古書のカタログは保存していましたから、カードはどんどん増えます。コンピューターの導入も考えましたが、経済的なこと、作業の時間的なことから、原始的な手書き原稿にしました。これに一年ほどかけました。

ところが、仕事を進めてゆくうちに、状況がかわってきました。入稿しても本になるのが怪しくなってきたのです。そこで八二年の秋、旧知の白水社に救いの手をさしのべてもらうことになりました。八三年三月に原稿を入れると、すぐに清打ちが始まりましたが、校正はしばらくお預けとして、索引の作成を急ぎました。初版の索引は書名も事項もいっしょにしていたので、使いづらく、今回はそれを分離させました。B7のカードを約二万枚使い、手作業で三か月かかりました。

私家版の欧文図書一九一六点が三七五二点、邦文の二五六点が八五五点、合計約四六〇〇点と件数はほぼ倍増し、ページ数も七五九頁となりました。書名は英文名が同じですが、和文は『ヒマラヤ関係図書目録』から『ヒマラヤ文献目録』になりました。出版社の希望と、量的にも内容が一新したからです。そして八四年一月に発行となります。話が出てからちょうど四年かかりました。発行は一〇〇〇部（そのうち外国向けが三〇〇部、洋書に準じて奥付はな

し）、定価は一万九千円です。のちに二〇〇部を増刷しましたが、数年かけて完売となりました。用紙は保存を考慮して、中性紙を使用しています。

## 五、〝Not in YAKUSHI〟そして大改訂増補の『新版』目録

白水社版がでたら、またも内外の友人たちから追加訂正の資料が送られてきました。アメリカのN・クリンチ、J・ボイル、スイスのA・ボリンダー、イタリアのF・マライーニ、スペインの山岳情報資料センターなどです。

また、欧米の古書店の何軒かは、カタログに掲載した売物の末尾に、Yakushi ナンバーをいれて、格付けに使いはじめました。ところが、私の目録にない稀覯書には〝Not in YAKUSHI〟と大きく記してあります。癪にさわるじゃありませんか。そんなことから、カードの作成は続けていました。白水社版に取りかかってから十年ほどすると、新しいカードは四〇〇〇枚になりました。中国の奥地、新疆・チベット・四川・雲南の登山や旅行が自由化されて、その地域の新刊書も続々と出てきます。自家用の『目録』も赤字の記入がいっぱいです。

私家版から二十年余り、第二版から十年をひと区切りとして、九一年八月に大増補改訂を白水社に申し入れました。その無理難題を聞き入れてもらい、九四年十一月に「新版」として刊行にこぎ着けました。索引には四万枚のカードを使い、第二版のフロッピーが保存されていなかったため、コンピューターには最初から入力されました。欧文七六〇一点、邦文一七九七点、合計九三九八点。調査の不十分さから欠番が一四〇ほど出ましたが、今回は田村俊介さんのご協力でロシア語文献を八三点加えました。一三二〇ページ、重さ二㌔ほど。ある友人にいわせると、「昼寝の枕」にちょうどよいボリュームです。第二版の約二倍、価格も五万八千円です。発行部数は七〇〇ですが、まだ三〇〇部ほど残っているようです。

## 六、最後に

新版を出して一年ほどすると、実質二年分のカードがたまり、また、多数の訂正が出てきます。そこで今度は、自分でワープロを使い、追加訂正の冊子を九五年十月に作りました。B5判、一六九ページ、製本だけを業者に頼みました。追加はほとんどが新刊書で、欧文九七七点、邦文一四〇点です。「追加訂正」版のあと、四年間で新しいカードが現在約二〇〇〇枚あります。年に四〜五〇〇枚のペースで増えています。これらを含め、今後どうするか。十年を節目にして、『目録』の第四版を二〇〇四年をメドに考えるか。それは当然に分厚いものになります。欧文図書と邦文図書に分冊するか、CD—ROMか。収録範囲を当初の登山と探検に限るか。それより、出してくれる所があるのか、もうこれまでか。

これまで多くの人達にお世話になりました。日本では故深田久弥、故吉沢一郎、故諏訪多栄蔵、その他の方々です。先のお三方は日本のヒマラヤ研究の三御所です。先に述べたように、深田さんと諏訪多さんの蔵書は、それぞれの所を得ましたが、吉沢さんのは、和書は親友であったニック・クリンチさんを通じて、アメリカ山岳会へ寄贈され、洋書は山と溪谷社の図書室に収蔵されました。吉沢さんと先代社長は親友だったのです。

さらに、欧米の識者、友人にもたいへん世話になりました。

Late Mr. Louis Baume (Bloxham, England), Gaston Alpine Books の経営者

Late Mr. Anders Bolinder (Ronco, Switzerland)、スウェーデン生まれの山岳文献コレクターで、東欧に知人が多かった。

Late Mr. Mario Mingardi (Bologna, Italy), Libreria Alpina の経営者。

Late Mr. Jack Baines (Anglesey, North Wales)、もとはイギリス空軍に属し、退役後、Anglesey Books の経営者。筆者の古い友人。

Mr. Nicholas Clinch (Palo Alto, Calif., USA)、元アメリカ山岳会会長で、世界的な山岳文献収集家。

Mr. John Boyle (Santa Fe, New Mexico, USA)、アメリカ山岳会会員でヒマラヤ文献の収集家。

Prof. Fosco Maraini (Firenze, Italy)、ヒマラヤの登山家であり、日本学の権威。
Prof. Dr. Jürgen Aschoff (Ulm, Germany)、医学者であり、チベット医学の権威。
Dr. Reinhard Furtner (Wien, Austria)、ヒマラヤの文献学者。
Mr. Hans-Dieter Greul & Mrs. Aree Greul (Frankfurt, Germany)、山岳図書店。
Servei General d'Informació de Muntanya (Sabadell, Spain)、山岳情報資料センターとしての山岳文献収集。

そして一九九七年十一月、雄松堂（東京）の第一回ゲスナー賞（目録・索引部門）の銀賞を受賞しました。名前のコンラード・ゲスナーは、十六世紀のスイスの医師兼書誌学者です。そして九八年十二月には日本山岳会の第一回秩父宮記念山岳賞を受賞しました。まさに道楽事の極致というところです。しかし、これもひとえに、白水社、そして故深田さん、故諏訪多さん、さらに上に述べた多くの方々のおかげと、記して謝意を表するものです。

［一九九八年十二月五日「第一回秩父宮記念山岳賞」受賞記念講演の資料に加筆］

［追　記］

この九九年の六月のはじめ、スペインの「山岳情報資料センター」に招かれて行って来ました。それはバルセロナの北方約二五㌔、サバデルという地方都市にあります。正式の名称はServei General d'Informació de Muntanya, Centre de Documentació Alpina という、長いものですが、当事者は最初の「セルヴェイ」（カタルーニャ語でservice の意味）だけをいって、略しています。そこが今年、創立二十五周年を迎え、その記念行事の一環として、私に『ヒマラヤ文献目録』の話をしてくれというのです。この招待はゲスナー賞や秩父宮賞の受賞が大いに与かっていたと思いますが、かねてから文献や資料の交換を通じて、付き合いはありました。

数年前にこのセルヴェイが、事務所としてサバデル市から建物を借りたと聞いていました。だから、日本山岳会の

ような、法人格を持った、公的な機関かと思っていましたところ、驚いたことには、四人のメンバーが「ホビー」として、私的にやっているのでした。ホセ・パイトゥビ氏をチーフに、彼の妻アナ・ロングエラ、その弟のチャビ・ロングエラ、カルレス・カペラです。パイトゥビ氏は一九七一年にヒンドゥー・クシュ山脈のウルゲント東峰、八二年にはカラコルムのディスタギル・サールに出かけており、チャビ氏は九四年にディラン峰、九六年にティリチ・ミールに登山隊を組織していました。ほかにアフリカや南米にも行っています。

六月三日、今回のスポンサーになっていた地元のサバデル市とサバデル銀行を表敬訪問したあと、町の郊外にあるセルヴェイに出かけました。建物は廃屋になっていた中世の教会を、市から無償貸与され、それを改修したものでした。外観は白壁造りの倉庫みたいですが、面積は二〇〇平方メートルほど（一〇×二〇メートルの長方形）で石積み壁。間仕切りがなくて二、三階部分までの吹き抜けだから、小さな小学校の、天井の高い体育館のような感じです。必要経費は光熱費や電話などの実費だけといいます。

中央部には書架が並び、そこに書籍が約一万冊、雑誌・会報類が五〇〇種、地図類が二五〇〇枚。ほかにビデオテープ三〇〇本、隅っこの中二階にはビデオ・ルームがあり、各方式に対応するデッキが置かれていました。さらにロッカーには、多数のスライド・写真や書簡類が整然と収納されていました。書架には日本語の本や報告書、『山岳』『岩と雪』『岳人』『山と溪谷』なども若干並んでいます。資料収集の範囲は全世界の高山に及んでいますが、書架を見る限りでは、重点は登山活動に置かれています。

年間予算は二〇〇万ペセタ（日本円で約一六〇万円）、これはメンバー四人の拠出金と賛助会員（年会費五〇〇〇ペセタで現在一一〇人）の会費で賄われ、今度のような特別事業には、サバデル市、サバデル銀行、カタルーニャ自治州政府、スペイン山岳連盟、カタルーニャ山岳連盟などの援助を受けるそうです。しかし、営利団体ではなく、四人はそれぞれ本業を持っており、専任の事務員もいません。そのために、ルームが開くのは平日の夕方からか、休日だけですが、登山記録の調査や資料のコピー請求はファックスで受け付けており、年間のアクセスは国内外から五〇

○件ほどあるそうです。また、不定期ながら、収集した図書や地図の目録を作成し、研究報告書も出しています。最近では『アコンカグア』の登山史と地図（一九八七年と一九九三年）、『カラコルム』の地図（一九九五年）、この秋には『ヒンドゥー・クシュ』の地図の刊行が予定されています。

私の話は七日の夜に行いました。本稿の「ヒマラヤ文献目録ができるまで」に手を加えたものです。バルセロナ在住三〇年の鈴木重子さんに、スペイン語の同時通訳をしていただき、一時間足らずの講演も無事に終えることができました。そして、打ち上げの、遅い夕食会でほっとしたものです。

最後に、遠征登山の報告書の残部・余分をお持ちであったり、これから報告書の公刊を予定されている隊は、セルヴェイに一部送ってやってほしいものです。彼らは喜んで受け入れ、しっかり保存してくれることでしょう。宛先は次のようです。

Servei General d'Informació de Muntanya,
Centre de Documentació Alpina.
P.O. Box 330, E-08200 Sabadell, SPAIN.
(International : Tel.34-3-723-8413／Fax 34-3-723-7489)

# 西ネパール北部国境の知られざる山群

## ——カンティ・ヒマールの踏査とチャングラ峰の登山

大阪山の会
吉永定雄
大西保

一九七一年秋、当時まだ地形的概念も明らかにされていなかったカンジロバ・ヒマールの北東部分に、関西の紫岳会と大阪山の会が合同で登山隊を送り、それまで謎の多かった周辺の地形を明らかにするとともに、その地の一高峰（六五五六㍍）に登頂して、ツォカルポ・カンと命名した（註1）。

そのとき持ち帰った頂上からの三六〇度のパノラマ写真は、カンジロバ山塊北方のムグ地方から、東のトルボやムスタンにかけての、山岳重畳する複雑なネパール・チベットの国境山脈を写し出していた。その山脈の大部分は、標高六〇〇〇㍍前後の鋭い岩峰によって占められているが、ほぼ北の方角、地図上パルチュン・ハムガ・ヒマールと表示されている国境山脈の中には、標高が六五〇〇㍍以上はあると思われる顕著なピークが数座望見された。しかし、古いインド測量局の地図（二十五万分の一、一九二五～六年測量）では、それを同定することは非常に困難だった。

そしてその中に、特に目立って、頂上部分を氷雪に覆われた鋭く顕著な岩峰があって、頂上部分はガスがかかって明瞭ではなかったが、その標高は、ほぼカンジロバ・ヒマール山群の主峰（六八八二㍍）に匹敵するピークだと思われた。それ以来、その山が気になったまま、十年以上の年月が過ぎていた。それが、現在カンティ・ヒマールと呼ばれているこの山群の主峰（六八五九㍍）であることがわかったのは、ネパール政府が新しい中国国境協定（一九七九年）を結んで以後、その国境ラインと測量資料をもって作成されたネパール全図（五十万分の一、

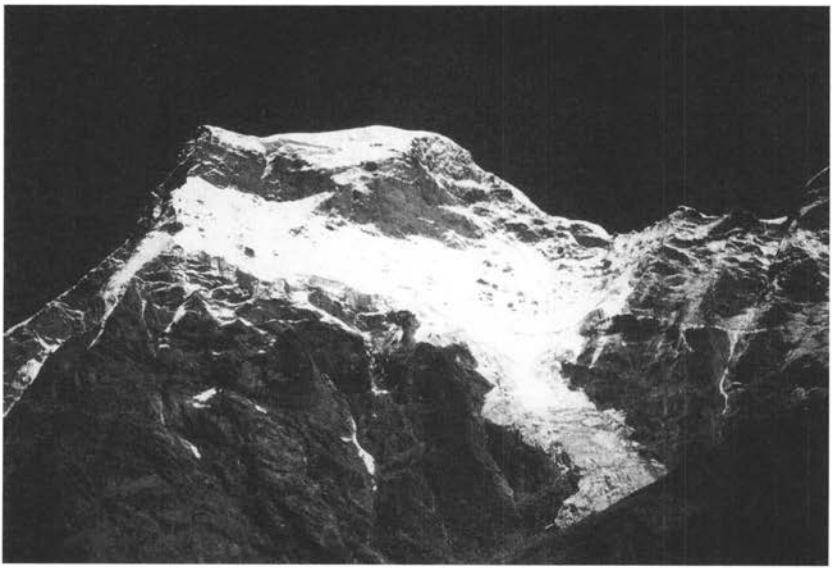
一九八五年、三面）や、それ以後に刊行された、ジラー・マップと呼ばれている全ネパールの郡別地図（十二万五千分の一、デヴァナガリ）によってであった。

登山許可に関しては、一九七九年以後、ネパール政府によるヒマラヤ登山諸規則が再整備され、順次登山許可峰の数も追加されて、最近は非常に事務的に登山許可が得られるようになり、従来入域が禁止されていたムスタンやトルボ地方にさえも、多少の条件付きではあるがトレッキングが許可されるようになった。

しかし、このカンティ・ヒマール山群が位置するムグおよび西部トルボ地方の山々への登山やトレッキングは、数回の申請にもかかわらず、未だに正式な許可は得られないのが現状である。しかしそれがまた、ネパール・ヒマラヤへの扉が開かれてから五十年になろうとする現在まで、この山が近接写真さえ一枚もないという、全く未知なままの状態で残されてきた所以でもある。

以上のような経緯を経て、私たちは、一九九七年を第一次とし、二〇〇〇年までの四次にわたる計画で、トルボ地方から、ネパール最北西部のナラカンカール山群に至る、全長約三〇〇キロにわたる、《知られざるネパール＝中国国境山脈》の踏査を計画した。そして、今夏（一九九九年）までに、三次にわたり、東のトルボからチャンラ・ヒマールまで、ほぼ三分の二の地域を踏破することができた。すなわち、一九九七年四月から六月にかけては、カンティ・ヒマール主峰への北および北西からの接近と、ムグ・コーラ左岸の国境周辺の踏査。一九九八年八月から十一月にかけて、カンティ・ヒマールの南面からの接近ルートと、ムグ北方の峠、ナムジャ・ラ周辺の山群、およびムグから西へ峠越えして、ゴラク・ヒマール南面の長い未知の谷（タンケ・コーラ）をたどり、フムラ・カルナリ河に出て、シミコットを経由して、南北に広大な山域を有するチャングラ・ヒマール山群の西を歩き、その北端のチャングラ（六五六二メートル）の南西支峰に登頂。第三次の本年（一九九九年）は、六月から八月にかけて、東部のトルボ北方の国境山脈から、前年のカンティ・ヒマール南面を結ぶ地方を踏査して、数多いトルボの北方の峠の地理的な位置と、その峠から北面チベット側の地形の確認、その間の全く知られていなかった国境山脈の山々の詳細を明らかにすることができた。来年度（二〇〇〇年）の計画は、第四次として、フムラ・カルナリのシミコットを基点として、チャング・ラから西にのびるチャンディ・ヒマール、最北西のナラカンカール・ヒマールまでの山域に入り、国境山脈周辺の一連の踏査を行う予定である。

この西部ネパール・ヒマラヤの山々が、従来の登山家たちの興味を疎外してきた原因には、大きな三つの要因があったと思われる。第一には、西ネパールには高い山がないこと、第二に



カンティ・ヒマール主峰 6859 m 南面を見る
South Face of Kanti Himal (Highest Peak)

入山が非常に不便であり、したがって登山期間と費用が大幅に増加すること、第三に、許可の取得が、新しい山に関しては禁止区域や制限地域が多くて非常に厄介であったこと、があげられる。

第一については、間違いなく事実であって、なんとか七〇〇〇㍍を超えるという山は、七一三二㍍のアピと、七〇三一㍍のサイパルとその衛星峰を加えても、全部で三座しかない。ヒマラヤへ行くからには八〇〇〇㍍峰でなければ、七〇〇〇㍍以上の高所登山でなければ、と考える人たちには論外の地域ではある。しかし今回、私たちが得た、チャングラ南西峰の頂上からのパノラマ写真を見て、あらためて驚いたことがある。そこに写しだされた数知れぬ六〇〇〇㍍峰のピークの連なりのなかで、名前を挙げることができるピークが、わずか五指にも満たない、ということだった。一九五三年に、カトマンズから最西部のピトラガールまでの西ネパール大横断をなし遂げたH・ティッヒーの本のタイトル、《無名峰の聳える国》という言葉をまざまざと実感させる大眺望であった。わずかにカンジロバ、サイパル、アピ周辺を除けば、そのほとんどの山々は、まだ一度も探られもせず、写真に撮られたこともなく、まだわれわれには全く未知のまま残されているのである。一九八三年以来、ネパール観光省が発行している『ネパールヒマラヤ・インヴェントリー』という小冊子がある。これには、ネパール領内の六〇〇〇㍍を

超える全ピーク、一三〇九峰を標高順に羅列してあるが、私たちの会では、これを綿密に調査し、山名、標高、経緯度の文字や数字の誤りと思われるものを修正し、重複しているものを削除、洩れているものを補充するなどの作業を行って、結局一三〇二峰とし、その属する山域名などにも検討を加えた上、コンピューター入力によって検索を容易にした。その中で、西ネパールに属する、東経八三度以西の二四〇峰についてみると、山名の付いたピークは、わずかに三二峰に過ぎず、しかもそれは、ほとんどが六〇～七〇年代に登山隊が集中して入山したカンジロバや、アピ山群のものであって、他の二百余のピークは全く無名であることがわかる。

第二の問題についていえば、一九八〇年代以降、西ネパールの交通事情は、急速に変化してきている。現在では、ネパール南部の陸上交通路は、カトマンズから西部インド国境まで、全天候型、全舗装の国道が通じているし、その途中の主要地点から北上する道路も徐々に延びつつある。また、国内航空路も、レギュラーフライトこそ多いといえないが、奥地への貨物の空路輸送が、モンスーン中でさえも頻繁に行われているため、昔のように、数週間ものキャラバンを必要とすることも少なくなった。それに伴い、現地での食糧事情も、追々好転してきており、費用の方はともかくとして、登山に必要な日数は大幅に縮小できるようになった。隊の規模に応じて工夫を凝らせば、入山方法についてはいくつものヴァリエーションも考えられる。しかし、概していえば、大部隊の行動には不利な面が多いとはいえると思う。

第三の問題点については、最近のネパール政府の方針は、特別な問題がある地域でないかぎり、登山隊やトレッカーの受け入れには積極的になってきている。一九九八、九九年には、《ヴィジット・ネパール》の一環として、登山隊の訪れの少ない西ネパールに限り、二つの七〇〇〇㍍と、その他の一峰以外の許可峰については、ロイヤリティが無料となった。われわれの第二次、第三次隊は、この恩恵をありがたく享受した。政府の西部地域開発に対する方針は当分のあいだ変わらないと考えてよいと思われる。

現在のヒマラヤは、かつての《ヒマラヤ遠征》などという大風呂敷をひろげる時代ではなくなってきている。他人のリードやトレールに頼ってでも八〇〇〇㍍を好ましいと考える人は、それだけの趣向に見合う登山をやればいいし、より困難な大登攀の対象としても、ヒマラヤでは不足を感じることはないだろう。自由な発想に基づいてさまざまな登山や、トレッキングを行う場として現在のヒマラヤがある、と考える時代になりつつある。特に西ネパールの山々については、中・東部のネパール・ヒマラヤとは少し趣が違って、西につながるガルワルやラホール、スピティなど、北部インドの山々と風土的なつながりが感

じられる。今後はおそらく、小パーティが、自由に好きなところにベースを置き、周囲に好ましいピークがあれば、数日間をその登攀にあてて楽しむ、といったワンダリング的な登山のゲレンデとなることが望ましいと思う。当分の間は、周囲の山々はどれをとっても未踏の山であるだろうし、多くの六〇〇〇㍍峰は、高所の登山に不可欠な順化の問題がいくらか軽減される代わりに、案外手ごわく、かなりの登攀技術が必要とされるだろう。のんびりと登れるような雪山がないわけではないが、その多くは鋭い針峰である。

ここで、私たちが踏査を続けている西ネパールの国境山脈について、現在公式に用いられている新しい各山群の呼称とその範囲などについて、多少の説明を加えておきたい（折込地図参照）。先に述べた通り、戦前に作成されたインド測量局の地図での西ネパールの北部の国境山脈の表示は、山の位置やその地形、名称ともに、きわめて不正確なもので、とても山岳同定の基礎資料として使用することはほとんど不可能なものであった。現在ネパール政府で公式に使用されている西ネパール内の国境山脈の属する山域名は、東から西へ以下の通りである。

1. ゴータム・ヒマール

ムスタン・ヒマールの南西にあるアルニコチュリから北西に続く国境上の峠、サナ・バンジャン（ツァルカの東から北東にターナ・コーラを詰めたところ）から、ダフェ・サイル峰南東のラル・バンジャンまで。すなわち、トルボ北方に一〇カ所あるチベットへの峠の周辺の山々がほとんどこの山群に含まれるが、スケールの大きな山はほとんどない。

2. パルチュン・ハムガ・ヒマール

先述のラル・バンジャンから、トルボ最奥の村ポエの北方の六二三六㍍峰まで。ここには、この山群中、唯一の名称を持つダフェ・サイル（六一〇三㍍）が含まれる。トルボ西部のシェー・ゴンパに越える山稜からは、北方の道しるべのように見える、マッターホーンに似た山容の顕著なピークであるが、この鋭い岩峰は、実はチベット領内に張り出した尾根上の六五二九㍍峰であって、国境上のダフェ・サイルとは重なって見えているということが、今年の調査で分かった。

3. カンティ・ヒマール

前項のピーク六二三六㍍より、直線距離五〇㌔北西のナムジャ・ラ（峠、四九八六㍍）までの非常に広い範囲にわたる。カンティ・ヒマール主峰は、東の最高点が六八五九㍍、西の頂上が六八一〇㍍である。主峰の北面直下は北東に流れる氷河が食い込み、主峰の北西〇・五㌔に北西峰（六四三九㍍）があり、その北東稜が、この氷河を囲む。この稜線の北はチベット領が大きくネパール側に食い込んだ、広い氷雪原である。ここから流下する幅広い氷河は、コジ・ラからの氷河と合流して、北のチベット高原に流れている。私たちが一九九

七年に登頂した、コジ・ラ南の六三二八㍍峰は、この氷雪原の北岸に位置する。カンティ・ヒマールには、他に、ネパール側のチャンディ・コーラ源頭に、チャンディの名称がある六六二三㍍峰、コジ・コーラの北の源頭からナムジャ・ラ方面にかけて、四座ほどの六五〇〇㍍前後のピークが存在する。

4. ゴラク・ヒマール

ムグ・コーラ源頭のナムジャ・ラより西北西にのびる国境山脈は、東経八二度一〇分付近から北向きに転じる。ナムジャ・ラからその転向点付近の六一三九㍍峰までを範囲とする。ナムジャ・ラから、西北西一二㌔にカング・ラ（峠、五三五八㍍）があり、この間にいくつかの六〇〇〇㍍峰があり、峠の西北西七・五㌔にゴモ・ディンディン（六二五四㍍）があり、さらに西六㌔に、アサイヤ・トウッパ（六二六五㍍）がある。この二つのピークは、一九〇七年、スウェン・ヘディンがツアンポー河の水源として探索した、クビ・ツァンポーの源頭にあたり、アサイヤ・トウッパはヘディンの《アブシ峰》である。『トランスヒマラヤ』や、『南チベット』のスケッチや写真で、それらの北面の山姿はすでにわれわれに馴染み深い。この山群のピークは、標高は低いがいずれも峻険で、北面は氷河や雪が多く、南面のネパール側は、タンケ・コーラの各支流の奥に険しい岩壁を落としている。

5. チャングラ・ヒマール

前項の国境ラインの屈曲点六一三九㍍峰から、北北西三〇㌔にあるチャング・ラ（峠、五二九三㍍）まで、ドザム・コーラの左岸の国境山脈である。最高峰は、先のゴラク・ヒマールの北方一〇㌔にある六七二一㍍峰で、一九八三年春に、日本の女子登山隊の挑戦をうけたことがあるが、いまだ未踏峰である。この山群の南半分は広大な面積を占めているので、国境周辺のネパール領内にも数多い六〇〇〇㍍級のピークがひしめきあっている。ヘディンの踏査で示されているムクチュン・シモ、ランタチェン、ガヴェティン、ドンドン、チェマユンドン・プーなどのピークは、いずれもこの山群南部のピークに同定することができた。

また、国境の東方チベット領内にも六五〇〇㍍前後のピークが多く見られ、非常に興味深い山域である。ドザム・コーラの最奥にチャング・ラ（峠）がある。現在、チャングラ（六五六三㍍）として許可峰リストにある山は、先述の最高峰ではなく、峠から五キロばかり手前の東の国境上にある。昨年（一九九八年）十月、私たちが訪れた山である。

6. チャンディ・ヒマール

範囲は、チャング・ラから西北西に伸びる国境上、ネパール全土でもっとも高緯度に位置するラプチェ・ラ（峠、五〇一八㍍）まで、南限はフムラ・カルナリ河の本流までである。古いインド測量局の地図での北の国境ラインは、現在の地

図のそれに比して、緯度にして約一〇分近く南に位置し、タクー・ヒマールという名称の山系が国境とされていた。一九七九年の中国との第二次国境協定によって、その間の広大な土地が地図上ではネパール領として拡がったことになる。

前項のチャング・ラ（峠）の位置も、旧地図では同じように約一〇分ほど南にあり、ドザム・コーラが約半分の長さしかない。峠の手前約五キロの東の国境稜線のピークが、ちょうど現在の最高峰の位置に当たることから考えると、この六七二一メートルのピークが本来のチャングラ峰であるのかも知れない。西ネパールでは、インド測量局が一九六〇年前後から新しい測量を開始し、中国側も時を同じくして、ネ＝中国境画定のための測量を始めた。一九六一年に、第一次の国境協定が結ばれたときには、まだこの地域では未測量の部分が多かったに違いない。このインド測量局の地図（一インチ＝一マイル）は、戦前のものとは比較にならないほど信頼性が高いが、シートによっては、やや粗雑な部分もあり、特にドザム・コーラのチャングラ周辺の国境部分には誤りが多い。第一次のネ＝中協定付図は、七九年の第二次の付属地図のような精密なものではなかったらしい（次項のナラカンカール・ヒマール参照）。

この山群には、国境上に十二座、南のネパール領内に六座の六〇〇〇メートル峰が存在するものの、六三〇〇メートルを超えるものはなく、全体に土地の標高が高くて谷が浅いので山が目立たない。国境の北面は、ヘディンのたどった、西行してマナサロワール湖にそそぐタゲ・ツァンポーである。チャングラ峰からの眺望では、南面は標高の高い雪原が多い地形で、その向こうにグルラマンダータ（納木那尼、七六九四メートル）の巨大な山容が望まれた。

### 7. ナラカンカール・ヒマール

先のラプチェ・ラ（峠）の西から、国境は南に方向を転じ、北緯三〇度〇九分でフムラ・カルナリ河を越える。その間の国境上の山群が、現在ナラカンカール・ヒマールと呼ばれ、その最高峰は、そのほぼ中間に位置する六四二二メートル峰である。現在同名の登山許可峰は約一〇キロ北にある六〇六二メートル峰である。この山群は、現地ではタクプー・ヒマールと呼ばれている。ナラカンカールという名称は、一九二五～六年に測量されたインド測量局の地図に、ネパールの北西隅に同名の七三三五メートルという、実在しない高峰が書き込まれた。一九三六年のハイムとガンサーの地図でもそれを踏襲しているし、戦後発売されていたGSGSやAMSの地図でもそのまま記載されていた。さらには、一九六三年にこの山を探索した北海道大学隊の裏話によれば、彼らがネパール外務省で垣間見た、六一年のネ＝中国境協定の付図もこれに従っていたらしい。この幻の七〇〇〇メートルの山は、結局南方からの観測で、グルラ

マンダータを見間違えて地図に記載されたことが原因ということに落ち着いている。主峰の北に六三六九㍍、六三九五㍍、南に六二一九㍍のピークがあり、最近トレッカーの出入りの多くなったタクラコット（中国名／プラン）の町の東に連なる国境の山々がこれである。

8．グランス・ヒマール

この山域は、今のところ私たちの計画にはない。簡単に概説すれば、セティ河の源流になるサイパル山群とウライ・レク、ヨカ・パハール山群、チャムリア河源流のアピを主峰とする山群、その北面のティンカール以北の国境山脈であるリプ・レクなどの総称。西ネパールでは、七〇〇〇㍍を有する唯一の山域であって、六五〇〇㍍以上の有名な山岳も数座数えられる。しかし、チャムリア側は、かつて賑わいを見せたことがあるが、ウライ・レクやヨカ・パハールには、まだ未踏の峻険なピークがいくつもあって、まだまだ魅力を失っていない。リプ・レクは、現在インド軍が強引に駐留していることで、ネ＝イ間で紛争があり、当分は入域禁止が続くと思われる。

（註1）『山岳』第六十七年（一九七二）、「カンジロバ山群未知の部分」（阿部和行）。同折込パノラマ写真には、北西から東にかけての国境部分がオミットされている。欠けている部分は、吉沢一郎古稀記念文集『カラコラム』中の「カンジロバのことども」の筆者のスケッチ参照。

（吉永　定雄）

# 行動報告——カンティ・ヒマール主峰とチャングラ南西峰

## はじめに

一九九七年春および一九九八年秋に、西ネパールのカンティ・ヒマール（六八五九㍍）の北面と南面のルートを踏査するために私たちは入山した。ネパール政府観光省は、まだこのピークを解禁峰としては登山許可を出していない。私たちの計画の最初の段階は、まずこの山の位置を見つけ出し、その接近路を探索することから始まった。ムグ・コーラの東方に一つの高峰が存在することは、七一年のツォカルポ・カン（六五五六㍍）の頂上からのパノラマ写真で、北西W3度に唯一、頂上に雲がかかっているその山を見ることができたが、その標高や付近の地形的なことは全く不明であった。

七二年、カンデ・ヒウンチュリ（六六二七㍍）を初登頂した東京山旅倶楽部登山隊から提供していただいていた、北方の国境方面への写真からも、この山の南壁をおぼろげながら見ることはできたがそれ以上には詳しく調べる資料も方法もなかった。

一九九六年になって、永年、吉永と温めつづけていたこの山への登山準備を、いよいよ再開しようとしたが、その接近路と登頂ルートを考えると、南面からのルートは容易ではないだろうと考えた。そんなある日、東京山旅倶楽部の報告書で、ジュムラ北方のグルチ・ラから撮影した桑畑茂氏の一枚の望遠写真が、このカンティ・ヒマールの南壁をみごとにとらえていることを発見した。その後、同氏からさらにいい写真を提供していただいたものの、とりあえず最初は、接近ルートを南側にとることはあきらめ、西側または北側からの偵察を始めることを決めた。

## 登山活動（一）一九九七年春

九七年春に、私たちはパトラシ・ヒマールの許可を取得して、スルケットからロシア製のヘリコプターでララ湖北麓のガムガデイ村に飛び、四月十八日よりキャラバンを開始してムグ・コーラを溯った。途中、ルムサ村、シム・コーラ出合、タラ・コーラ出合と泊まり、四日後の四月二十一日、最奥の村、人口六百人のムグ村に着いた。そこから約一時間上流の、旧村跡のあるプラノムグに移り、左岸のコジ・コーラに入る。二十四日に四〇〇〇㍍に高所順応用のＴＢＣを設け、三日後にそこを撤収して、二十七日にコジ・コーラ上流四六五〇㍍にＢＣを設けた。

インド製一インチ一マイル地図上にある小さな湖の下である。この谷はチベット側へ抜ける間道として地図には記載されているが、現在はあまり利用されていないようである。踏跡は、最奥のアイスフォールの右岸寄りを捲き、広い鞍部であるコジ・ラ（五四九五㍍）の手前で消えていた。峠からは、反対側のチベット側へ、緩くて幅広い氷河が北東に下っており、南から北に向かって流下する本流の氷河に吸収されている。本流の氷河は、カンティ・ヒマール（チベット名はロンライカンリ峰）の北面から西に大きく入り込み、その源流は広大な氷雪原となっている。

五月一日、峠上の雪原にＢＣを設営。峠の上からは、まだカンティ・ヒマール主峰を望むことはできない。実は、アイスフォールの手前で左岸から入る支谷の奥、六二七五㍍と六一五一㍍のピークのコルから、主峰の北西稜の一部が僅かに顔を覗かせていたのであるが、それが主峰の一部であることは、このピークの全貌がわかった後で、はじめて気がついたことである。主峰の全貌を見るためには、まず峠の南東にある六三二八㍍ピークに登ることが先決だ、と考えて、国境沿いに、このピークの北稜西側の約四〇度の雪壁から稜上に出るルートを取り、五月二

日、五八五〇㍍付近まで達したが、ここから雪稜はクラストしていて、ところどころ青氷が出てきた。翌日は、この雪稜にフィックストロープ四〇〇㍍を張るだけで時間切れとなり、峠のテントに戻った。

この日、二名が、峠の北側六一五九㍍へ向かう。国境沿いに雪面を登り、初めてカンティ・ヒマール北面が、南の山越しに姿をあらわしてきた。六一五九㍍峰の頂上は、GPS測定値六一三五㍍29度50分345秒N、82度42分628秒E。北には、チベット領内の六六四七㍍が眼前に、北西方向には、コジ・コーラの右岸からナムジャ・ラに至る国境稜線周辺にある六二七五㍍、六四一九㍍、六三一〇㍍、六四三九㍍などが並び、南西には、コジ・コーラ左岸の六〇三〇㍍、六〇二二㍍、六二七三㍍、六二三六㍍、西には遠く、ムグ・ヒマールの山々まで見えるという豪華な眺望を得ることができた。

翌四日は休養日とし、五月五日、コルのテントを三時五十分に発ち、南東のピークに向かう。一昨日の最終到達点から上は、氷化したナイフリッジと頂上直下の青氷に難渋しながら、四時間を費やして十二時三十分頂上に達した。頂上の南は先述の氷河に急激に落ち込み、眼前にカンティ・ヒマールの北面が望めるはずであったが、運悪くガスのために眺望が遮られた。一昨日に、好天に恵まれて北のピークから大方の概念をつかみ得たので、一応ここでの偵察活動を終えることにした。

結果をまとめると、この山群の主峰への接近ルートをもとめて、私たちはまず北面のコジ・コーラに入った。ところが、探している山の姿はどこからも見えない。出発前に、トポグラフィカル・サーベイの知人を介して、インド製の一インチ一マイル地図のコピーをいただいて、谷の奥にあるコジ・ラまで足をのばした。ただ、このインド地図は、国境外のチベット側の地形は全く空白であり、地図上では、どのようにルートをとればいいのかを、実際に目で確かめたかったのである。結局は、峠上から北の六一五九㍍峰と、南の六三二八㍍峰の二つの無名峰に達し、初めてカンティ・ヒマール、29度45分57秒N 82度45分06秒Eを望見することができたわけであるが、北側から西面に回り込むアプローチは極端に長く、しかも、部分的にチベット側に入らなくては近づけず、北面は全くチベット側になる、という理由で、その後の活動を断念した。また、このプレモンスーンの季節は、コル周辺からの氷河は積雪が多く、ヒドゥンクレバスと、左右からの雪崩の危険があまりにも多くて、時期としては適切ではないことも分かった。ネパール側からの他のルートとなると、南面のタクラ・コーラから入り、西壁か南壁、もしくは東側の国境稜線上に出て、東稜から頂上に至るルートを探るしかないだろう、という結論を得た。ムグに下ったあと交易ルートをたどって北のナムジャ・ラに向かい、峠周辺の山々を偵察したあと、ララ湖を経由してジュムラへ戻った。



カンティ・ヒマール主峰南面の懸垂氷河を見上げる
Hanging Glaciers of Kanti Himal (South Face)

## 登山活動（II）一九九八年秋

翌年の九八年秋、今度はカンデ・ヒウンチュリの許可（この年九八年と九九年はネパール観光年ということで、西ネパールの十九座が登山料無料という特典があった）を取得した上、さらに、チャングラ峰の許可も同時に取得して入山した。

スルケットから、昨年同様にロシア製のヘリコプターで、今回は、昨年より一日半上流のマングリ村まで飛ぶ。ここからは隊を二分し、四名が、キャラバン二日目のチャンディ・コーラ出合から、東へこの谷に入った。他は、昨年通りムグ村に入り、プラノムグにBCを置いた。まず、勝手の知ったコジ・コーラで、四〇〇〇㍍台の高所順応をするため、昨年春のBC付近に上がって順応。その他、ナムジャ・ラまでの往復、コジチャウル・コーラの遡行、タンキャ・コーラの源流から、西側の未知の谷、タンケ・コーラに越えられる峠（約五一〇〇㍍）の探索など、約一カ月間、順応を兼ねて周辺で活動した。

一方、カンティ・ヒマール南面偵察隊四名は、チャンディ・コーラに入って三日後の九月十一日、ゴラ・ラ五一八二㍍を東に越え、十二日タクラ・コーラに入る。川床のブッシュを刈り、全身ダニに噛まれつつ、渡渉なども交えて四九〇〇㍍地点にBCを設けた。この谷は、当初悪いゴルジュの谷を予想していたが、上部はよく開け、南方にはパトラシ・ヒマールやカンデ・

ヒウンチュリの美しい眺めを楽しめた。GPSおよび地図上の位置は次の通りである。

GPS29度42分869秒―945秒N　82度43分950秒―989秒E　四七五六～四九〇七㍍（高度計　四八五〇㍍）

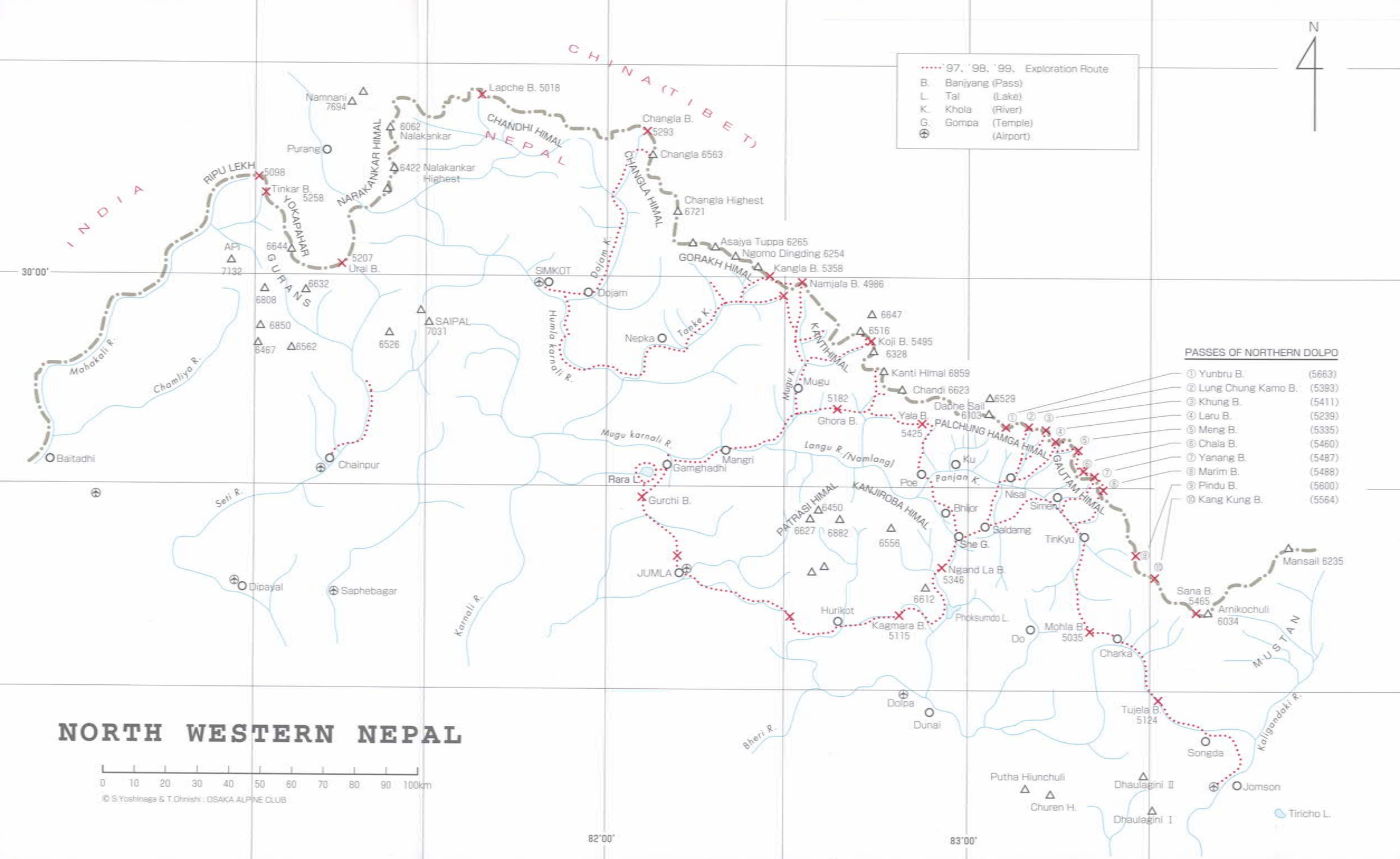
地図上29度42分45秒N　82度44分10秒E　高度四八〇〇㍍

十六日、広河原からモレーン上に出て、五〇七五㍍（29度43分30秒N　82度44分50秒E）にキャンプを出した。南壁が目の前に約二〇〇〇㍍の障壁となって屹立し、下部岩壁の上にはハンギンググレーシャーの氷の壁が幾重にも遮っていて、とても我々の技術では登れないと判断した。右手の国境稜線に出るべく、二日間、最低鞍部へのルートを試登してみたが、これも逆層の岩壁に阻まれてしまった。右の岩稜背後のコルに出て、国境東側も見るが、同じような壁がつづき、結局、東の稜線に出るルートは見出せなかった。しかたなく、西側の五八九五㍍の小ピークの左右の氷河を登り、西の国境稜線に立って、主峰の西壁を偵察。しかしこれも南壁と同様、圧倒的な岩壁が続き、簡単には登れそうもない。登れるとしても、かなりの長期作戦でルートを開拓しなければならないだろう。短期速攻で登るには、我々の技量ではとても無理なルートだと思われた。

十日間の試登、偵察活動を終えて、二十七日BCを撤収。十月一日、ゴラ・ラを再び西に越えてプラノムグにいる仲間たちと合流した。

第二ステージの最大の目的は、このムグ・コーラの西隣りから南西に下る谷、タンケ・コーラ周辺の山々を探ることと、チャングラ峰（六五六三㍍、30度18分11秒N　82度07分44秒E）への接近と、同峰を短期速攻で登山をすることであった。翌日、プラノムグで、ソデグロヅルとは異なり、アネハヅルと思われる雁行する鶴の一群が、北から南に飛び去るのを見る。住吉仙也は、P29以来、二十八年ぶりの感慨にふけり、同時に私たちも胸に迫る感動を味わった。

十月四日、タンキャ・コーラに入り、事前に調査した最奥の五一〇〇㍍のコルからタンケ・コーラに下るパーティーと、ナムジャ・ラ（四九八六㍍）から国境沿いにカング・ラに接近して、九十年昔、スウェン・ヘディンが測量したゴモ・ディンディン峰（六二五四㍍）と鋭峰アブシ峰（六二六五㍍）などのゴラク・ヒマール山群の偵察を行うパーティーに分かれた。前者は、昔ムグ村の人たちが越えていたと思われる峠を容易に越えることができ、ナムジャ・ラの東西、ルンレイ・ヒマール（註2）とゴラク・ヒマール東部の山々を探ることができた。後者は、これらの山とゴモディンディン峰までの山々を探る。両パーティーは、タンケ・コーラのチェンガール・コーラ出合で合流し、一部の者でこの支流の谷にも入り、アブシ峰の東面、南面を偵察


NORTH WESTERN NEPAL
'97、'98、'99、Exploration Route
B. Banjyang (Pass)
L. Tal (Lake)
K. Khola (River)
G. Gompa (Temple)
(Airport)
N
INDIA
CHINA (TIBET)
NEPAL
RIPU LEKH 5098
Tinkar B. 5258
YOKAPAHAR
NARAKANKAR HIMAL
CHANDHI HIMAL
CHANGLA HIMAL
GORAKH HIMAL
KANTI HIMAL
PALCHUNG HAMGA HIMAL
GAUTAM HIMAL
PATRASI HIMAL
KANJIROBA HIMAL
GURANS
SAIPAL 7031
Lapche B. 5018
Namnani 7694
6062 Nalakankar
6422 Nalakankar Highest
Purang
Changla B. 5293
Changla 6563
Changla Highest 6721
Asaiya Tuppa 6265
Ngomo Dingding 6254
Kangla B. 5358
Namjala B. 4986
6644
5207 Urai B.
API 7132
6808
6632
6850
6467
6562
6526
SIMKOT
Dojam
Dojam K.
Humla karnali R.
Nepka
Tanke K.
6647
6516
Koji B. 5495
6328
Kanti Himal 6859
Chandi 6623
6529
Daphe Sail 6103
Mugu
Mugu K.
5182
Ghora B.
Yala B. 5425
Mugu karnali R.
Langu R./Namlang
Mangri
Gamghadhi
Rara L.
Gurchi B.
Ku
Poe
Panjan K.
Nisal
Simen
Bhijor
Saldang
TinKyu
She G.
6450
6627
6882
6556
JUMLA
Ngand La B. 5346
6612
Hurikot
Kagmara B. 5115
Phoksumdo L.
Do
Mohla B. 5035
Charka
Mansail 6235
Sana B. 5465
Arnikochuli 6034
MUSTAN
Tujela B. 5124
Songda
Kaligandaki R.
Jomson
Tiricho L.
Putha Hiunchuli
Churen H.
Dhaulagini II
Dhaulagini I
Dolpa
Dunai
Bheri R.
Karnali R.
Seti R.
Chamliya R.
Mohakali R.
Baitadhi
Chainpur
Dipayal
Saphebagar
PASSES OF NORTHERN DOLPO
① Yunbru B. (5663)
② Lung Chung Kamo B. (5393)
③ Khung B. (5411)
④ Laru B. (5239)
⑤ Meng B. (5335)
⑥ Chala B. (5460)
⑦ Yanang B. (5487)
⑧ Marim B. (5488)
⑨ Pindu B. (5600)
⑩ Kang Kung B. (5564)
30°00'
82°00'
83°00'
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100km
© S.Yoshinaga & T.Ohnishi : OSAKA ALPINE CLUB

する。

タンケ・コーラを全員で下り、最奥の村ネプカでは、上流から突然に現われた異人が村人を驚かせ、ピプラン村を経てフムラ・カルナリ河の本流沿いの街道に出た。さらに、サルキガード、リプネ、ラリ村などを通り、十月二十日、チャングラ峰（六五六八㍍）をめざして、ドザムコーラに入った。二十四日、ラチャマ・コーラ出合（三九九六㍍）に、積雪とポーター待機のためにTBCを設けた。二十五日、ニン・コーラ出合（四一〇六㍍）からチョワ・コーラ四二〇〇㍍に入り、BCを設けた。休養後の二十八日、チャング・ラ（峠、五二九三㍍）手前の五〇二三㍍　30度19分15秒N　82度05分20秒EにABCを、翌二十九日五三四〇㍍にC2を設けた。

チャングラ主峰と、北側六一九〇㍍ピークとのコルにルートを見出すために偵察活動をするも、コル上部の雪庇の崩壊による雪崩で、このルートは放棄した。翌日の三十一日、主峰の南西側の国境上のピーク六一六二㍍　30度17分32秒N　82度07分05秒Eから西に延びる尾根の小ピーク（五五八〇㍍）にルートを伸ばし、西稜から国境上の六一六二㍍ピークに立った。ここから南西稜経由で主峰の登頂を目指そうとしたが時間切れとなり、最終到達点のこのピーク、チャングラ南西峰で今回の登山活動を終結とした。

下山はシミコットに出て、空路ネパールガンジ経由でカトマンズ、と航空路を最大限に利用して帰路についた。

（註2）このルンレイ・ヒマールという呼称は、ヘディンの『南チベット』の日誌にも出てくる名前であるが、現在の中国側のカンティ・ヒマールに対する名称ロンライ・カンリ（これは北京語音）はこれとあい通じる名称であって、単にナムジャ・ラの東の一角の山だけを指すものではないように思われる。

（大西　保）

〈記録〉

**隊の名称**　大阪山の会西北ネパール登山隊'97'98

**活動期間**　一九九七年四月二日～五月二十二日
一九九八年八月二十四日～十一月八日

**目　的**　カンティ・ヒマール主峰（六五八九㍍）と西北ネパールの地域研究

**隊の構成**　総隊長＝吉永定雄、隊長＝大西保
隊員〈九七年度〉谷口守・柳原武彦・大津二三子、〈九八年度〉水谷弘治・住吉仙也・藤本勇・谷口守・柳原武彦・木本哲・水谷徳子・井上田鶴子・佐藤朋子・藤本光子

**報　告**　大阪山の会URL　http://www.showa-p.co.jp/oac
Osaka Alpine Club CD-ROM No.2, No.3

# 厳冬期の東カンツァーリ峰（六一六七メートル）初登頂

増山茂

## ココシリ（可可西里）

ココシリを紹介する数少ない文献の一つである「岳人」一九九五年三月号に掲載された松本徑夫氏による「青い高原―ココシリの学術探検行」というレポートによれば、「ココシリとは崑崙山脈から分かれた南支脈の総称である。ココシリ山脈……小規模な東西方向の高まりが雁行状に発達して長大な山脈を形つくる。そのなかには、カンツァーリ、東カンツァーリ、マーランシャンなどの六〇〇〇メートル級の雪山群がそれぞれ独立して聳えており、これらは試登すらされていない」とある。

カンツァーリ、東カンツァーリは、高原の強盗団と恐れられたカムや、世界最高所でヤクや羊を追う遊牧民が長年ランドマークとして眺め暮らしてきた秀峰であるのだが、ヘディンが百年前チベット潜入の際にコメントをなしたのみで以後顧みられることはなかった山である（編者註）。

以下は、この知られざる山、東カンツァーリ峰を厳冬期に初登頂した記録である。

## 初登頂

一九九九年一月十三日午前十時、東カンツァーリ峰登山隊第一次アタック隊四名（増山、村口、山主、広島）は頂上に到達した。マイナス三〇度の寒さ、一五～二〇メートル／秒の強風をついての苦闘の末の登頂であった。

東カンツァーリ峰の頂上からは、北東に新青峰の峰々が、西

にはヘディンがココシリの灯台とよんだ秀麗な双耳峰西カンツァーリが独立した雄姿をみせる。北には新疆との境をなす崑崙の山々が連なり、南には冬のマイナス三〇度にも凍らず赤茶けた波を打ち寄せるシジンウランホの湖面が輝く。

## ココシリの地誌

ココシリはチベット・チャンタン高原の北部、チベット自治区、青海省、新疆ウイグル自治区の境界を含む平均高度四八〇〇㍍の高原地帯である。揚子江の源流域のさらにまた奥に位置する。モンゴル語で「美しい少女」という意味だともいい、「青い草原」であるともいう。チベット語では「無人の荒野」という意味であるというから、北から見るか南から見るかでこの地域の性格はずいぶん違うものだ。崑崙山脈とタングラ山脈に挟まれた、いまだに手つかずの原始が残る地域である。ここはチャンタン高原の中でももっとも人工物から離れたところにある。例えば夏期にここに到ろうとすれば、車であろうが徒歩であろうが、ラサとゴルムドを結ぶ青蔵公路、佗陀河沿（トトホーエン）近くから分け入るとして十日間はみておく必要がある。氷河からの無数の小さな流れが行く手を阻むからである。この極寒の時期に我々がここにいるのはまさにその障害を避けるためである。マイナス二〇～三〇度の寒気は大地も渓流もすべて凍りづけにする。夏には大きく迂回を余儀なくさせる湖は平らな最短距離ルートを提供してくれる。

この極寒の季節にもココシリには野生動物があふれている。ヘディンが百年前に見た二万頭の群の再現とはゆかぬが、日本語（中国語表記・発音／チベット発音）で記すと、チベットガゼル（黄羊・ホワンヤン／コワ）、チルー（藏羚・ツァンリン／ゾ）、チベットノロバ（野驢・イエリュウ／キャン）、ワイルドヤク（野猛牛・イエマオニュウ／ヤク）、そしてこれらを狙うオオカミ（狼・ラン／パワ）などが草原を闊歩する。そもそも我々はこのココシリの原始自然環境を調査する動物学者、生態学者、植物学者、医学者などからなる中日合同の学術考察隊（隊長＝大泰司紀之）なのである。案内役は治多県西部活動委員会の面々。一九九二年に創設されたこの西部活動委員会の任務はココシリの野生動物を調査保護すること、もっと正確に言えばチルーの密猟者を取り締まることにある。

ゴルムド（二八〇〇㍍）から雪の青蔵公路を南下すること二〇〇㌔、車は標高四七〇〇㍍の崑崙山口に至る。ココシリの入口でもある。崑崙山口からさらに青蔵公路を約二〇㌔南下すると、高さ二五㍍もある監視用の鉄塔、風力発電装置と太陽光発電装置を備えた近代的なココシリ保護ステーションが見えてくる。一九九六年八月に完成したこのセンターが西部活動委員会の前線砦である。

（図1）ココシリの奥へは、この保護ステーションあたりか

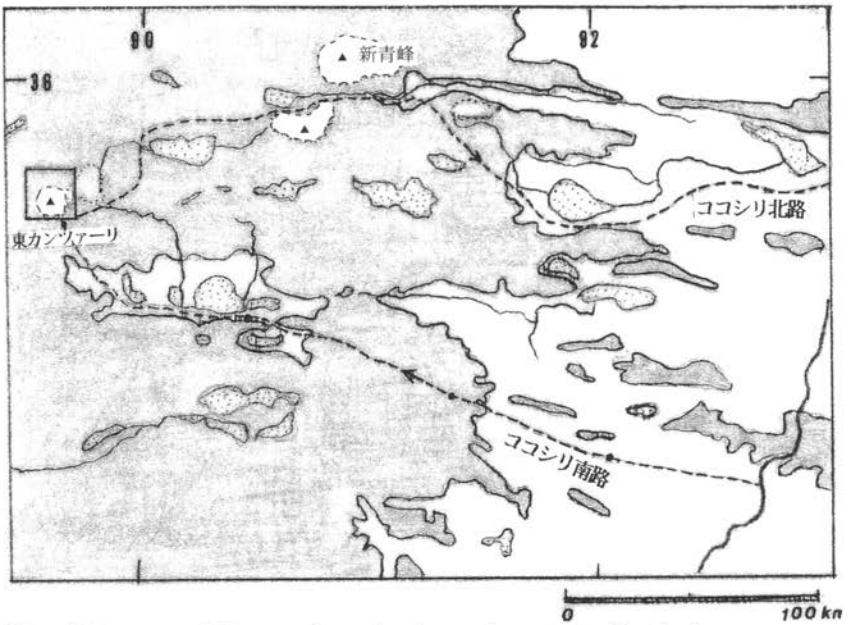



図1　東カンツァーリ峰へのアプローチ　Approach routes to Kanthari

ら西に踏み入り、庫賽湖・卓乃湖南岸を経てココシリ湖の北を抜けて新青峰に至るココシリ北路が標準的である。一八九六年のヘディン、一九九二年の日本ヒマラヤ協会隊、一九九四年の九州大学隊もここをトレースしている。東カンツァーリ峰に至るにはさらに西行し太陽湖と馬蘭山の間を抜け勒斜武担湖の北岸を抜けてゆくことになる。我々は帰路にこれを使った。

今回我々が西部活動委員会と相談して選んだのは、侘陀河沿（トトホーエン）の手前八四道班あたりから原野に踏み入り西北西に向かうことになるココシリ南路である。北路に比べ野生動物の密度が濃いのだという。苟仁錯の湿地帯（冬は凍っている）の北にキャラバンC1（四八〇〇㍍）、多索崗日の麓にC2（五〇〇〇㍍）、漢台山の南を抜けて不凍湖、西金烏蘭湖（シジンウランホ）の南岸にC3（四八〇〇㍍）、そして青蔵公路を離れて四日目に東カンツァーリ峰の南面のBC予定地（五二〇〇㍍）に到着する。西部活動委員会の面々は満足な地図もなく、玩具の如き磁石を使って、マイナス二〇度、強風、砂嵐の中、道なき高原を迷うことなく進むのである。その動物的とも言うべき感覚には脱帽である。とまれ、各種の野生動物の調査は十分その目的を果たしたし、イヌワシ（金鷲・ティンティヤ／チャプラ）にも歓迎してもらった。極寒強風の四九〇〇㍍の乾いた大地にヤク五十頭を引き連れた遊牧民集団を発見できたのは彼ら西部活動委員会の皆さんのおかげであった。

## 東カンツァーリ峰

東カンツァーリ峰はたかだか標高六一六七㍍の山にすぎない。周りの大地は四八〇〇～五〇〇〇㍍もあるから、登山としては大したものであるはずがない。しかしここ東カンツァーリ峰に登山を目的にやってきた者はほとんどいない。一八九〇年のボンヴァロ、一八九六年、一九〇〇年のヘディンがこの付近をトレースしているが登山に興味があったわけではない。冒頭に九州大学隊から引用したように、試登されたこともなかったのである。まして、厳冬期にこの凍てついた大地に足を踏み入れるもの好きがいるはずもない。登山のための資料など、どこを訪ねても得られない。ヘディンが唯一の教科書？

今回の隊でこの山に初めて目を付けたのは山田和也である。この秘境ココシリを映像に残そうとする企画を進めている山田はヘディン伝説をもつ未踏峰をここに「発見」したのである。

東カンツァーリ峰の北東に位置する新青峰は日本ヒマラヤ協会隊により一九八八年の失敗の後、一九九二年に登られている。しかしこの隊もここまでは入ってはいない。新疆ウイグル自治区からはＮＨＫの取材班が北から迫ってはいるがピークをとらえてはいない。一九九四年九州大学隊が北（？）から東カンツァーリ峰主峰と北峰からの氷河を五五〇〇㍍までつめ、登路の偵察をしたとの記述はあるが、詳しい報告はない。

昨年（一九九八年）、山田は北面氷河上を偵察する。しかし、今になってわかったことではあるが、北面から頂上に至るには氷河と山稜を一〇㌔以上も辿らねばならぬのである。このときの写真が数葉あるが、かなり手前で撮ったものらしくピーク周辺ははっきりしない。九州大学隊がたぶん北からと思われる写真を残しているのだが、とても我々が目にする山と同一のものとは思えないほどであった。一九九一年の中国の科学調査隊の撮った写真も二枚ある。しかし、実のところこの二枚がどの方向から撮られたものか、いやこの山が本当に東カンツァーリ峰であるのかどうかについて、日本では決着がつかなかったのだ。今回は距離が短くなる東面か南面からアプローチしよう、というのが出発前に我々の持っていた唯一のタクティクスらしきものであった。

資料がまるでないというのは面白いもので、山を眺めただけで、この氷河のアイスフォール帯を抜けようじゃないか、この稜線が安全だ、この雪壁が美しい、とどの隊員にも意見を言う権利が与えられるのである。五十年前のヒマラヤ登山もかくやという夜のディスカッションであった。

以下、日誌風に登山活動を記す。

一九九九年一月六日

ゴルムド（二八〇〇㍍）を出発後五日目にしてようやく東カ

ンツァーリ峰南面のBC予定地（五二〇〇㍍）に到着。四台のジープやランドクルーザー、二台の大型トラックによるかなりタフな行程であった。チベットノウサギ（高原兎・カオユエントウ）が寒い中穴から這い出してきて歓迎してくれる。

ココシリの冬はとてつもなく寒い。みなエベレスト最終キャンプにいるような恰好をしているのだが、それでも寒い。また乾いた強風が細かい砂を車の中に吹き寄せるため、空咳が誘発され、無惨なマスク姿の者も多い。さて、動物学者、植物学者、医学者などを含む学術考察隊は明日からは登山隊に衣替えである。

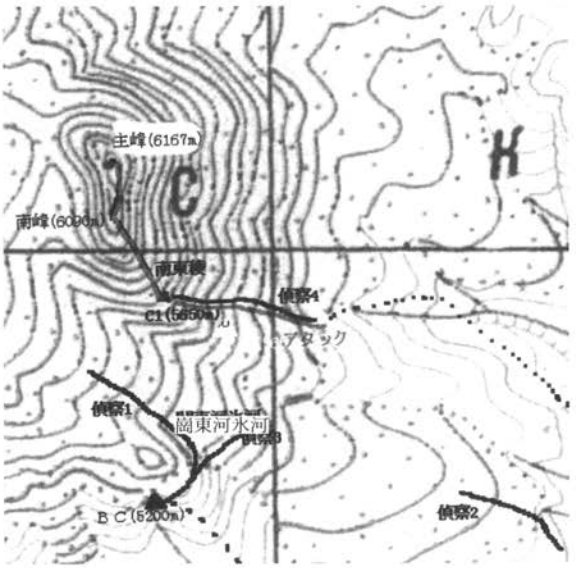


図2　偵察ルートと登頂ルート
Attempt routes on East Kanthari

一月七、八、九日は偵察を行う（図2）。

東カンツァーリ峰はチベット自治区と青海省の境界付近にある独立した山群である。ちょうど境界線上にある北峰（六一一八㍍）、やや青海省側にある主峰（六一六七㍍）、そのすぐ南にある南峰（六〇九〇㍍）からなる。雪が優しく被さり女性的でふくよかな印象を与える。しかし、この独立峰はこの程度の標高の山にしては大きな、北峰と主峰の間から落ちる一〇数㌔にもわたる氷河、東面にも南峰から流れ下る七㌔ほどの立派な氷河を持っている。

偵察1　この南峰から流れ下る岡東河氷河の右岸沿いにアイスフォール帯を抜けて南稜に達するルートを途中まで辿る。厳冬期でもあり氷河は安定している。青い氷が美しい。南稜に達することは不可能ではないように思える。

偵察2　この氷河の末端を車で迂回し反対側までたどり着こうと試みる。

偵察3　岡東河氷河をトラバースし南東稜に取り付く可能性の検討を行う。トラバースは可能ではあるがかなりの時間を要すると考えられた。

偵察4　氷河の末端を車で完全に迂回し東面に出て、南東稜のコルに北側の雪壁より取り付いてみる。コル直下の首の部分に雪崩の危険を心配していたのだが行ってみると大丈夫そうである。腰までクレバスにはまった者もいたが、赤布でマークする。比較的安全なルートである。このコルは一部岩稜が露出するほど風が強く通り抜けるところなのだが、岩稜の陰にうまく風を避けられるテントサイトを発見する。このコルからは岡東河氷河の上部を詳しく観察することができたが、下からアイスフォール帯を抜けても南稜に到達するためには多くのクレバスが避けられないことが判明。難しい。

以上のように南峰より真南に落ちる氷河、岡東河氷河の遡行、岡東河氷河のトラバースの可能性を全員で検討。最終的には、車で東面に移動し、南東稜のコルに北側の雪壁から迫り、ここにC1（五六〇〇㍍）を設け、南東稜から南峰を経て頂上へという平凡だが一番安全なルートを選ぶことに決定。新雪に注意が必要。

一九九九年一月十日

BC。マイナス三十一℃、雪、その後晴れ。風弱し。増山、村口、山主、広島、山田、金沢で前進キャンプ（C1）まで荷上げ。テント二張り、三日分の滞在に必要な物は全て上げる。伊藤は調子が万全ではなくBCに留まる。雪は落ち着いている。今日は風も弱い。

偵察によれば技術上の大きな問題はなさそうであったが、スノーバー四本、アイススクリュー四本、フィックスロープ一〇〇㍍、メインロープ二本を携行することにする。

問題は寒さと風であると考えられた。BCでも朝にはマイナス三〇℃を割り込み、昼間でもマイナス二〇℃以上にはならない。頂上ではマイナス四〇℃も考えられる。しかし、もっと問題になるのは風である。東カンツァーリ峰はココシリの高地平原に聳える単独峰であるため太陽が上がってくると上昇気流が発生し強烈な風となって襲いかかる。日中（十一時すぎから十八時ころまで）は強風が避けられないことはこれまでの観察の結果明らかであった。十一時前には頂上に到達し安全地帯まで降りていたいものだ。朝の寒冷は厳しいがこれには目をつぶって、未明の出発とする必要がある。

一月十一日

BC。マイナス二八℃、晴れ。BCにて休養。

通常であれば、登山隊のBCにはリエゾンが一名、あとはドライバーがいるくらいのものだが、今回はそんなものでは済まない。リエゾン役としては、中国科学院の呉健勝氏、青海省外事部の許世文氏。先にあげた西部活動委員会からドライバーに加え数人の案内役。科学調査の相手方の一つ青海省高原生物研究所の方々、青海省の農業部の方々、同観光局の方。何者か最後まで判別がつかない方もいらっしゃった。これら諸氏との意



ココシリを行くキャラバン隊
Five days march toward the mountain

志の疎通はなかなか難しいものがあって、通訳の増田祐子さんには昼となく夜となくお座敷がかかってんてこ舞いであった。ただ学術隊隊長である温厚な紳士の大泰司紀之さんは流暢な中国語使いであり、緊張する場をよくとりなしていただいた。北大に留学中のウイグル人生物学者マルムト・ハリクさんの仕事も学問的な領域にだけ留まるわけにはゆかなかったようだ。

とにかく寒い。寒いと体が縮こまったままになる。近代的な素材によるエベレスト最終キャンプ装備だけじゃ足りなくて、ゴルムドで二百元で買ったヤクのセーターを下着に着けていることもあって、皆パンダみたいに着膨れしている。最初の一歩がなかなか出ないのだ。頭の回転も遅くなってしまうのか、みなロボットみたいにのっそりとしている。一旦個人用テントに入り横になるとなかなか出てこられない。この隊は、なんと石炭ストーブを運んできており（ということは石炭も！）、食堂用の中国製家型テントで燃やすのであるが、マイナス三〇℃の環境で暖をとるのは並大抵の技術ではない。チベット人スタッフの技術的援助を要するが、暖かくなるとストーブの周りから離れられなくなる。

水問題は肝要である。崑崙山口手前で汲んだミネラル水をビニール袋に入れて凍らせ、プラパールに詰めトラックに山と積んで運んできたのだが、キャラバン中にもうなくなってしまった。毎日氷河の氷を砕きに出かけねばならない。これはのっそ

りした体には大仕事である。中国、日本と二つのカマドを用意した食事の準備も大変である。両者とも全く同じメニューを用意しているのだが、不公平である、量が足りない、味付けがおかしい、など夕食のたびに何かが起こる。不満の捌け口は食糧担当の広島大樹となる。灯りは石油ランプ。良いホヤはいつもすぐなくなる。いつもどこかで問題が起きており、マネージャー役の伊藤滋は悪い体調をおして解決に飛び回っている。

実は、ここまでの行動には高度馴化の面ではいくらか無理がある。隊員の半分は十二月初旬に青蔵公路に入り四五〇〇㍍程度の馴化は終えてはいるが、一部の隊員は十二月二十七日に日本を出発、同二十九日ゴルムド（二八〇〇㍍）着。一月二日四七〇〇㍍のココシリに突入、一月六日五二〇〇㍍のBCに入っている。今までこの地域に入った隊の報告書を読むと、高度障害でトラブルを起こさなかった隊は一つとてない。この日程ならさもあらん。我が隊でも同様であり、短時間のうちに標高五〇〇〇㍍以上の高度での生活に突入してしまったので、日本人隊員は勿論、中国人スタッフにも高度障害が頻発した。

医療用酸素は大きなボンベで持参したのだが、これを小分けすることができるという装置が故障。大ボンベから例のゴム引き酸素枕にレギュレーターもなく移し替えねばならない。こんなもの二十分しかもたないのだ。最後には大ボンベから直接微量の酸素を流す技術を身につけた。元栓のひねり具合で、ああこれは二㍑／分だな、とわかるようになるのである。

一月十二日

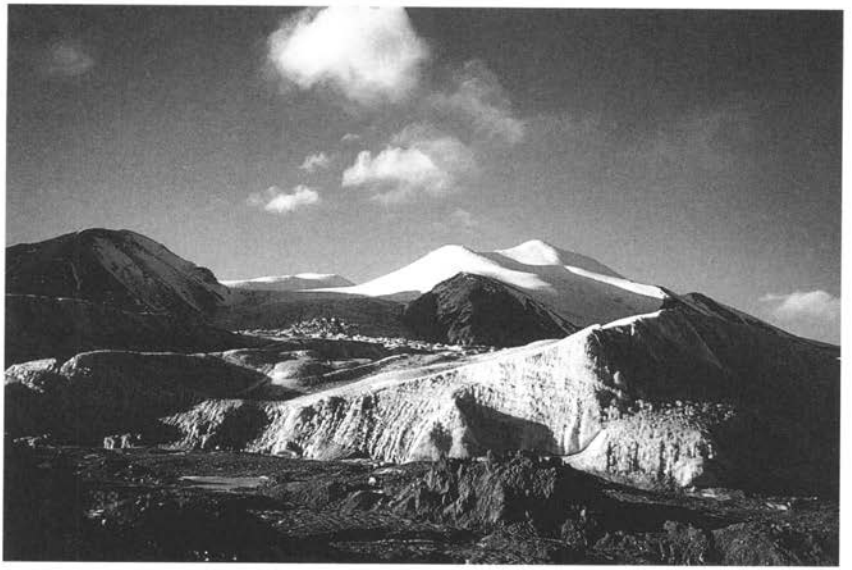
BC。マイナス二四℃、晴れ。C1へ向けて出発（増山、村口、山主、広島、山田、金沢）。暖かく感じる。風も弱い。凍りついた湖が陽を跳ね返し冷たい空気を輝かせる。遠く新青峰が美しく立つ。全員順調にC1入り。風を避けダンロップ四人用二張りを張る。村口徳行、山主文彦は南峰下部まで偵察。

今回のルートの偵察や工作はこの二人の経験豊かなクライマーによるところが大きい。村口は昨年（一九九八年）世界最高峰を含め八〇〇〇㍍峰の頂上を二つ踏んでいる。あと一回は八三〇〇㍍に達した。山主は昨年百日間以上を五〇〇〇㍍以上で過ごしている。また彼は北極など寒冷極地のベテランである。彼らによれば雪は安定している。ただし、その彼らが、風は強く寒い、という。

一月十三日

C1（五六五〇㍍）。マイナス二八℃、晴れ。午前六時、第一次アタック隊C1出発（増山、村口、山主、広島）。（北京時間をとっている中国ではこの時期西域では夜明けは九時頃となる）これなら強風に捕まる前に頂上に立てるはずだ。満天の星、薄い三日月がかかっている。風は予想通り弱い。マイナス二八度。緊張しているせいか暖かく感じる。幸先よし。

南峰までは広い尾根の上りである。氷の上にクランポンがよ

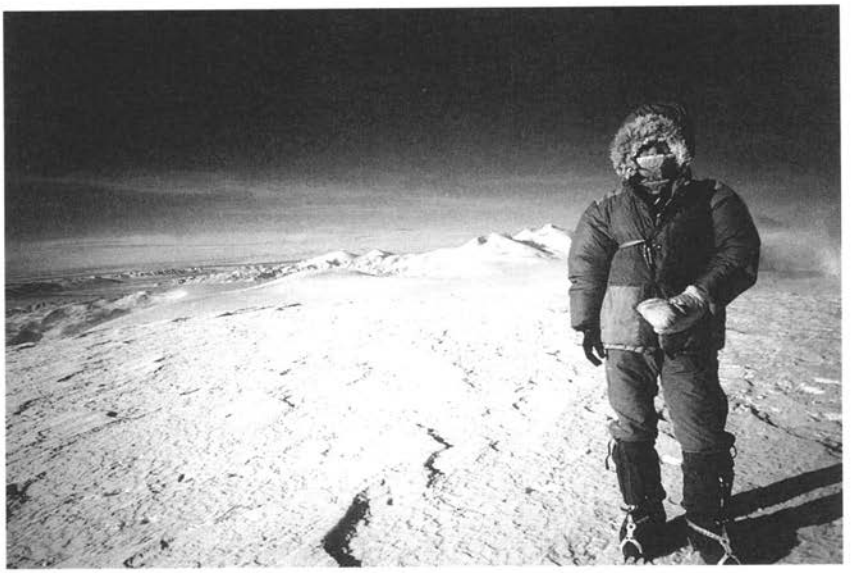


東カンツァーリ峰
Peaks of East Kanthari

く効くクラストした雪がついている。ただ吹きだまりに足を踏み込むと足首まで足を取られ、とたんに苦労する。ほぼ闇夜、ヘッドランプだけでは楽なルートを見出すのが難しく時間を取られる。南峰直下あたりから風が出てくる。まだ明けもしないのに！　いつもと違って風が舞っているようだ。当初西（左側）から当たっていた風が南峰あたりから右の頬を打つようになる。気温も下がってきたような気がする。鼻部、頬部の軽い凍傷は避けられないか。こころなしか暁の空には笠雲のような雲が浮いているように見える。

南峰直下には偵察で確認していたようにクレバスが何本か入っている。注意して通過する。南峰八時着（増山、山主）。村口、広島は撮影の関係もあり先行している。帰路南峰での下降点を間違えないようにマーキングする。

南峰から一旦コルに下りてから主峰につづくなだらかな雪の稜線を行く。吹きさらしの風はさらに強くなる。ルートに危険はなさそうであるが、突風に体が浮き上がる。顔面や手指の感覚がおかしくなる。晴れてはいるが吹き飛ばされる雪煙で先行する二人は見えない。ただただ前進する。頂上下の雪壁の急登部で村口、広島が下りてくる。先行した二人だが頂上の寒さに耐え切れなかったようだ。特に広島の体は冷え切っているようで、やや反応が鈍い。そのまま下山し、安全なところまで下るように指示する。残りの三人で頂上へと雪壁を登る。



強風の頂上に立つ
Stood on the summit against strong wind

十時、二〇メートル／秒の烈風が吹き荒れる頂上に冷え切って到着。晴れ。北峰から北面へと落ちる氷河が雲の中に隠れて見えない以外は、三六〇度の眺望を得る。

私のコンパクトカメラは胸に抱いて暖めておいたのだが作動しない。山主のニコンは大丈夫。村口のプロ用ビデオカメラはさすがに動いており、東に新青峰の峰々を、西には秀麗な双耳峰西カンツァーリを、北には崑崙の山々をなめていく。南には輝くシジンウランホの湖面を刻み込んだココシリ平原が広がっている。

ゆっくり眺望を楽しみ妄想をたくましくする間もなく凍えた体は下山を促す。ほうほうの態で下る。ところが、いつもとは違って、午後になると風は落ち着いてくる。なんたることだ。

C1帰着十三時三十分。寒冷と強風は広島の計八本の指を犯した。C1で診てみると両側第2から第5指までDIP関節以遠が凍り付き変色している。即座に温浴をおこなう。同日中に広島はBCへ下山させることとする。増山が付き添って下りる。

凍傷。今回の隊はインマルサット電話とパソコンを携帯していた。BCに帰った増山は緊急措置を行うとともに、日本の医師金田正樹さんに現場で可能な措置をEメールで問い合わせた。金田さんは即座に反応、的確な指示を与えてくれた。また凍傷を負った隊員は予定を早めて日本へ戻らせることにした。成田空港から金田さんの病院に直行した隊員の指は治療よろしきを

得て切断を免れそうである。

一月十四日

C1。第二次アタック隊の山田、金沢は十一時、六〇九〇㍍の南峰まで到着。しかし強風のため以降の行動を打ち切る。伊藤C1に入る。山田、金沢、伊藤、村口、山主でC1を撤収、BCへと下りる。

さらば東カンツァーリ峰。わずか六〇〇〇㍍ちょいの山ではあったが、未踏峰挑戦の楽しみを十分に味わせてもらった。この知られざる地域を経験できたこともすばらしかった。

中国での登山というとヒマラヤ寄りのほんのわずかな地域に興味は偏っているように思える。精緻な記録が積み重ねられており、経験豊かなシステムと献身的なサポーターに心身共に支えられるヒマラヤの高峰もいいけれど、すこし視野を広く保つと体力と金力に乏しい中高年登山者にだって「探検」が楽しめますよ、という一例報告。

（編者註）：地学的観点から見ると一九七六年の青蔵高原科学考察隊は氷帽氷河の一つとしてカンツァーリ峰に注目しており、また一九九〇年代には新生代（特に第四紀）の火山活動地域としてココシリは研究対象になっている。

〈記録〉

**隊の名称**　一九九八―九九中日科学合同可可西里、東カンツァーリ峰（六一六七㍍）登山隊

**活動期間**　一九九八年十二月二十七日～一九九九年一月二十二日

**活動地**　チベット青海高原（ココシリ高原）にある独立峰

**ルート**　南東稜から南峰を経て頂上へ

**注記**　初登頂

**隊の構成**　隊長＝増山茂（50）・取材隊隊長＝山田和也（44）・登攀隊長＝村口徳行（42）・学術隊隊長＝大泰司紀之（58）、隊員＝マルムト・ハリク（39）・伊藤滋（38）・金沢裕司（32）・山主文彦（37）・広島大樹（27）・増田祐子（29）・黄栄福（58）、連絡官＝呉健勝・許世文

**連絡先**　増山茂（千葉市稲毛区黒砂2―1―5　電話・ファックス　043―246―5171　Eメール　masuyama@med.m.chiba-u.ac.jp）

# 東南チベットの空白部

## ——岡日嘎布（カンリガルポ）山群を探る　一九九九年五月

中村保

### はじめに

登山家のなかで、中国チベット自治区にある氷河で、最も標高が低い氷河を知っている人はいるだろうか。あるいは、最も幅が広く、最大の面積をもつ氷河を知っている人はいるだろうか。

ヒマラヤやチベットの山に相当精通している人でも、たぶん正確には答えられないであろう。

それらの氷河は、これから紹介する山群に存在する。

前者は阿扎（アザ）氷河で舌端は海抜二四四〇メートルまで下っている。後者は拉古（ラグー）氷河で広く緩やかなパタゴニヤの氷河を連想させる。

しかも、これらの氷河を囲繞（いじょう）する美しい氷雪の六〇〇〇メートル峰が全て手つかずで残されている。

私が最初にこの山群に近づいたのは一九九五年のことだった。このことは概要を拙書『ヒマラヤの東』（山と溪谷、一九九六年）で紹介した。

そして今年、僅かな日数のトレッキングではあったが、好天に恵まれ、高峰と氷河が集中する山群の中心部を登山家として初めて写真に収めることができた。

当初の山旅の主目的はイラワジ川源流（中国名／独龍江）の探査をメインテーマとし、ミャンマーの北側に接する東南チベットの察隅（ザユー）から雲南省へ横断山脈の核心部を通過することであった。

しかし、現地で突然入域許可がキャンセルされ、やむを得ず

計画を岡日嘎布山群のみに絞り、ついでに陸路ラサまで足を延ばしたという経緯があったということを付記しておこう。

いずれにしても、東南チベットのこの地域は登山の観点からは世界で最も知られていないところで、文字通り「空白部」という言葉がぴったりする辺境である。旅を重ねるごとに新しい発見と感動を与えられ、山稜の彼方の、いまだ見ぬ峡谷や氷雪の峰々への夢を駆りたててくれる、そんな吸引力をもって私を魅了する土地である。

## 一、地理的概要と探査の歴史

### ㈠ヒマラヤか横断山脈か

市販されている地図の上で、岡日嘎布山群の六〇〇〇㍍峰の存在を知っている人はいるだろうか。おそらくいないと思う。地図については後述するが、中国で作成されている地図においても、この山群の表記は少なく、いずれの山系に属するのかを判断することはむずかしい。

岡日嘎布山群はチベット自治区林芝地区の波密県南部、墨脱県と察隅県の北部および昌都地区八宿県南部にまたがる全長二八〇㌔の山脈であり、北西から東南の方向に連なっている。山脈はツァンポー・ブラマプトラ川の三つの支流に取り囲まれている。北側は怕隆藏布がゴルジュをつくり、南と東は察隅曲（ロヒト川）が沙馬の少し上で二つに分かれ、北東に桑曲、北西に貢日嘎布曲が山脈を分ける役割を果たしている。氷河の発達と高峰は東南部に集中している。

中国科学院は一九七三、七六、八〇年にこの山群の調査を行った（1）。目的は然烏の南に位置する前述の二つの主要な氷河、阿扎氷河および拉古氷河の観測である。

山群の南側はブラマプトラ川の支流、ディハン川上流部が二〇〇〇～三〇〇〇㍍のミシミ丘陵と呼ばれる山地を形成し、脊稜は四〇〇〇㍍に達するが、気象的な障害にはなっていない。したがって、青蔵高原の南縁にあたる岡日嘎布はインド洋から吹いてくる湿潤な南西季節風を直接受け、モンスーン季には雨が多く、春と冬には大量の降雪をみる。

分水嶺の北東側は乾燥したチベット（西蔵）高原であり、北西は怕隆藏布渓谷となって樹林帯を流れ下るが、南側は谷が深く浸食されている。降雪のため、峡谷内の村落は少なくとも一年のうち三カ月は完全に外界と遮断される。阿扎・拉古両氷河の周辺には二〇〇平方㌔にわたり六十一条の氷河があり、山群全体の氷河面積は、一部推定を含むが、一六八平方㌔に達し、波密以南の山塊の約一六％を占める。この数値は青蔵高原のなかで氷河のカバー率が最も大きいことを示している。

阿扎氷河の氷雪の供給源は山群の最高峰、若尼峰（六六一〇㍍）の北面である。巨大な氷瀑が広い分水嶺の鞍部（四六〇〇㍍）に下り、ここで二つに分流して南氷河と北氷河に分かれ

る。北氷河は緩やかに下って四二八〇メートルのところで終わるが、南氷河は七〇〇メートルの大氷瀑となって谷を下り、小さい氷河と合流し、森林帯を下る。末端は二四四〇メートル、全長は一四キロに達する。

この山群は青蔵高原の諸山系のなかでは、その位置の定義付けが一番しにくいところである。この問題はヒマラヤの東端をどこで区切るかに関係してくる。いくつかの考察を繙いてまとめてみよう。

A. ヒマラヤの探検と登山の歴史の大家、ケニス・メイスンはヒマラヤの西の限界をインダス川に、東をヤル・ツァンポー川においた(2)。すなわちアッサム・ヒマラヤの東端をナムチャバルワとしている。これは特に根拠のある地理的な定義ではない。ツァンポー大屈曲部の東は情報が少なく、調査不十分なので、取り上げなかっただけである。

B. 植物採集家（プラントハンター）のF・キングドン・ウォードはツァンポー川の先に延びる山系、岡日嘎布山群と横断山脈をグレート・ヒマラヤの延長としてとらえている。気候、地形、植生、動物、地質の多面的な観察を総合的に分析している(3)。その結果、ウォードは自分の旅の体験から、ヤル・ツァンポー大屈曲部の北側も含め、東への延長部分の山脈をシノ・ヒマラヤと呼んでいる。したがって、彼の定義では岡日嘎布山群はシノ・ヒマラヤに入る。

しかし、ウォードの見解についてインドの地質学者、D・N・ワディアは反対している。

C. 中国科学院の見方は、ナムチャバルワをヒマラヤの東端としている。しかし、これをもって岡日嘎布山群が横断山脈に属すると考えるのも無理があるとする。理由は、横断山脈は、南北に流れる三つの大河（揚子江、メコン川、サルウィン川）に平行して南北に連なる特徴が岡日嘎布山群には合致しないからである。地質構造的には岡日嘎布山群は念青唐古拉（ニンチェンタングラ）山に比較的近いことも判断のよりどころにしている。

以上のように、二つの見方に分かれたが、私としては中国科学院の定義をとって、岡日嘎布山群は長大な三つの山系、ヒマラヤ、念青唐古拉山、横断山脈の間に位置するひとつの山系であると位置づけたい。

### (二)探検略史

チベットの探検史を語るとき、英領時代のインド測量局の密偵として派遣されたパンディットと呼ばれたインド人探検家たちの役割は特筆に値する。東南チベットでも同様で、外国人として初めて岡日嘎布山群を横断し、記録(4)を残したのは、パンディットのひとり、A・Kことキシュン・シンである。一八七八年四月二十四日にダージリンを発ち、一八八二年十一月十二日に戻った。四年半以上を費やし、四五〇〇キロにおよぶ長途の旅であった。禁断の都ラサを経て遠く敦煌、青海地方から



然烏湖と崗日嘎布山群東部の前衛峰、北から南を望む
Rawu Lake and Kangri Garpo Range, a view from north to south.

四川に入り、打箭炉（ターチェンルー）、巴塘（パタン）から横断山脈の深いゴルジュの国を通過して察隅に出た。A・Kは察隅から最短コースのアッサム経由で帰ろうとしたが、途中ミシミ丘陵のアボール族による殺害の危険が大きいので、北方へ出るルートを選ばざるを得なかった。結果として崗日嘎布山群東部の交易路を辿って南から分水嶺の峠、アタ・カン・ラ（四六一〇㍍、中国名／瓦勒拉（ワレラ）山口）を越えて北に抜け、さらに西に向かってシガツェを通ってダージリンに帰着した。

A・Kの報告は、実に記録性の高いもので、当時の測量局長官がA・Kのことを「正確、誠実、勇敢、極めて有能」と評価している。

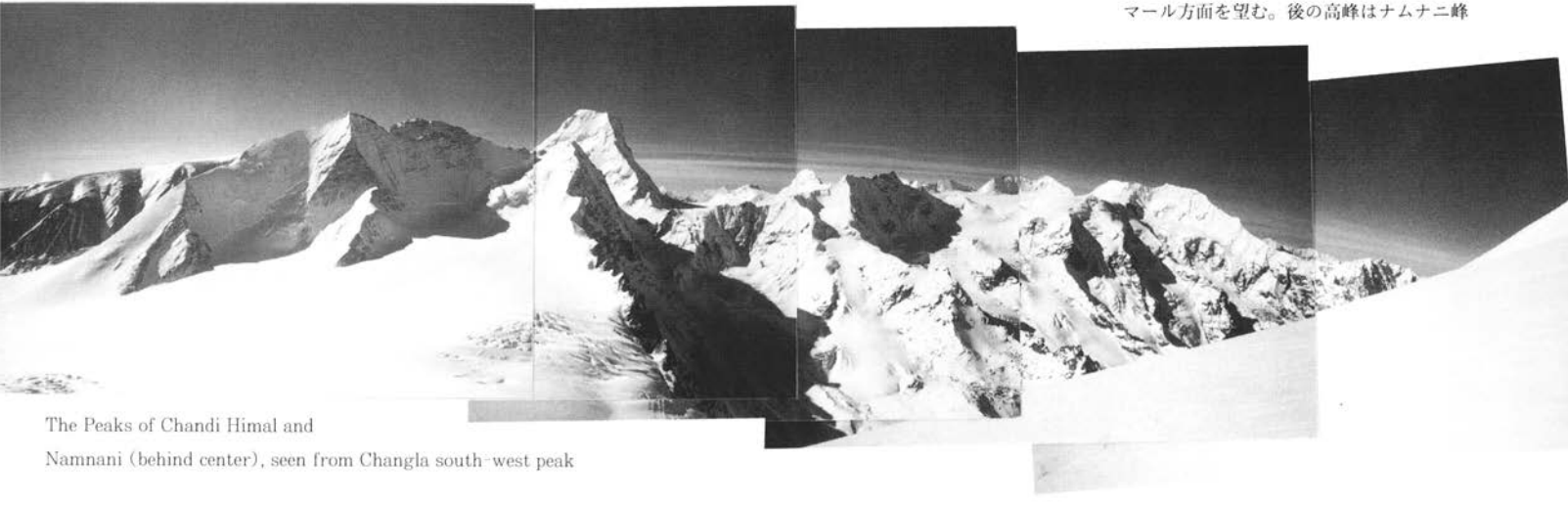
英国人に訓練されたパンディットの仕事がいかに優れていたかを実証するため、アタ・カン・ラから然烏までの距離をチェックしてみた。A・Kは歩測によって全行程の距離を記録しているので、これと旧ソ連作成（一九八六年）の十万分の一の地形図上の距離を比較したところ、A・Kは四三㌔、旧ソ連製の地図の上では四四㌔であった。A・Kが通った崗日嘎布横断ルートを白人がトレースしたのは半世紀後のことである。A・Kは山脈の分水嶺アタ・カン・ラを越えたとき、この山脈が障害になってヤル・ツァンポーがイラワジ川に通じることは不可能であると判断した。このことがツァンポー大屈部の「ミッシング・リンク」の謎を解くヒントになった。

# 海外登山の記録



コジ・ラ北方の峰よりカンティ・ヒマール山群南部を望む。
中央左が主峰
The Highest peak of Kanti Himal, seen from the peak near Koji La

チャング・ラ南西支峰より西方のチャンディ・ヒマール方面を望む。後の高峰はナムナニ峰



The Peaks of Chandi Himal and
Namnani (behind center), seen from Changla south-west peak



崗日嘎布山群東部，アタ・カン・ラの南の秀峰5,780 m，北から南を望む
Alluring snow peak 5,780 m in the south of Ata Kang La, in Kangri Garpo, a view from north to south



新青峰を望む
Shin Qing Hong (6,860 m) seen from East Kanthari

一九三三年、ウォードがロナルド・コールバックとともに同じ道を辿って、氷河や山系についての貴重な踏査を行った(5)。そのウォードが察隅からケニス・メイスンに書き送った手紙のなかで、A・Kの報告と路線測量の正確さを賞賛し、過去五〇年の間に村々の戸数も名前も、行程も、渓谷のたたずまいも変わっていないことに驚いている。しかし、その正確さは拉古(ラグー)の村までで、その北の行程の記述には誤りが多くて役に立たないという指摘を、後日別のところでしていることも付記しておこう。細かい点はさておき、半世紀以上を経ても、人口や村の戸数は増えてはいても、住人のチベット族の生活様式には大きな変化はないと思う。

先蹤者の足跡の話に戻ろう。A・Kのあと察隅に入った外国人はF・M・ベイリーである。彼は白人として初めて四川から東南チベットを経て、ブラマプトラ川の支流、ロヒト川（中国名／察隅曲）を下ってインドのアッサムに出た。A・Kが断念したルートである。その時、ベイリーは、ロヒト川の東の支流（桑曲(サンチュ)）を遡って崗日嘎布山群の東端のゾ・ラを越えてチベット高原に入り、シュグデン・ゴンパまで足を延ばしており、そこで、十九年前に訪れたA・Kをよく覚えていたラマ僧に会う。サルウィン川（怒江）峡谷の要衝、門工(メンゴン)での一九一一年のベイリーとウォードの一日違いのニアミスとともに、東南チベット探検史のなかの逸話の一つである。

一九三三年、K・ウォードはアッサムからミシミ丘陵を通過してロヒト川渓谷沿いに察隅地方に入り、A・Kの足跡を辿った。七月にアタ・カン・ラを越えた。このとき阿扎(アザ)の村から山群の最高峰、チョンボ峰（中国名／若尼峰）を望み、標高を六七〇〇㍍(メートル)と推定している。

一九三五年、R・コールバックはJ・ハンバリー・トレイシーを伴ってサルウィン川上流部の未踏の地の探査をしている(6)。彼らは北ビルマから察隅に入り、レパの谷から古玉(ゴチュン)に抜け、崗日嘎布山群の東部を踏査し、シュグデン・ゴンパを訪れている。その後、二手に分かれ、コールバックは崗日嘎布曲を遡り山群西端の峠を越えて波密(ポミ)に行く。トレイシーは然烏から怕隆蔵布を下って波密でコールバックと落ち合い、二人はサルウィン川上流を目ざして北に向かって旅を続けた。

コールバックとトレイシーの後、再び長い空白があった。前述の通り、一九七三年に中国科学院の氷河調査隊が新中国になってから初めて訪れた。しかし、外国人が正式の許可をとって入ったという話は寡聞にして知らない。昨年の夏に、高山の花の写真家、吉田外司夫氏が然烏からアタ・カン・ラの北側の氷河末端付近まで行き、今年は私が北阿扎氷河を見おろす地点まで入った以外は私の知る限り、外国人はまだアクセスしていない。分水嶺のアタ・カン・ラは一九三五年にコールバックが北から南に越えたあと、今日まで外国人は誰も通過していない。四川、

雲南とラサを結ぶ幹線道路である川蔵公路から一投足のところにありながら、知られざる山群として残されている。小さなパイオニアワークを志す者を引きつけてやまない中国南西辺境を象徴しているといいたい。

**脚注文献**


（1）『西蔵冰川』中国科学院青蔵高原綜合科学考察隊、科学出版社、北京、一九八六年

（2）『ヒマラヤ』ケニス・メイスン、田辺主計、望月達夫訳、白水社、一九五七年

（3）F. Kingdon-Ward : The Himalaya East of the Tsangpo, Geogr. J. Nov. 1934

（4）"Exploration in Great Tibet and Mongolia", by A-K, 1879-1882 made in connection with the Trigonometrical Branch, Survey of India, Dehra Dun, 1884.

（5）F. Kingdon-Ward "*A Plant Hunter in Tibet*" Jonathan Cape, London, 1934.

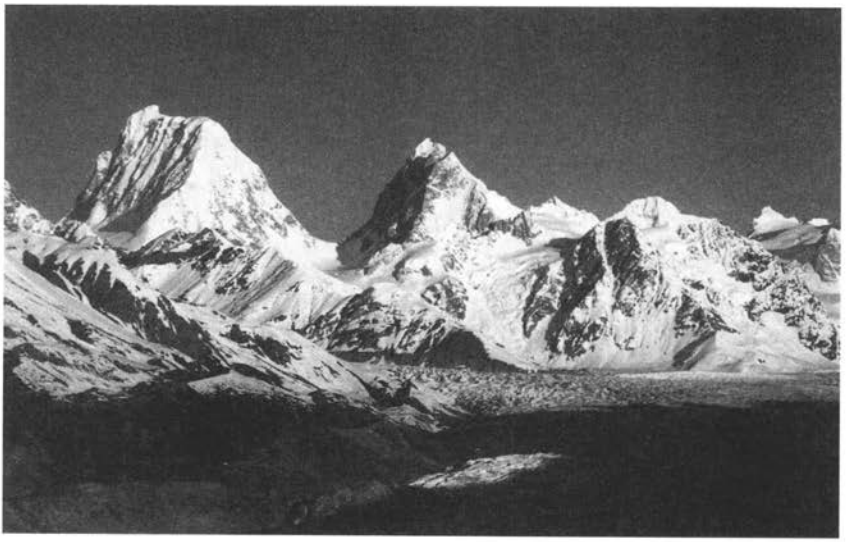
（6）R. Kaulback "*Saluween*" Hodder and Stoughton, London, 1938.


## 二、紀行と考察・一九九九年五月

### ㈠東チベット高原を行く

横断山脈研究会の仲間の永井剛さん（六十六歳）と二人合わせて百三十歳の熟年コンビで五月十二日関西空港を出発し、直行便で昆明に入る。翌日、開設したばかりの便で空路中甸へ。その日のうちに徳欽へ入った。つい数年前までは雲南西北の辺境の町であった徳欽は、今では梅里雪山とシャングリラを売りものに観光地化が急速に進んでいる。五月十五日、徳欽を出発、滇蔵（雲南・西蔵）公路を東チベットの玄関口芒康（マルカム）へ。現地の同行者は昆明における私の代理人兼通訳の陸偉東さん、徳欽のチベット族のガイド陳さんと運転手の呂さん。

五月十五日、晴。芒康発、川蔵（四川・西蔵）公路を西へ。メコンとの分水嶺の拉烏山峠の手前で、ダムヨンの北のドゥンリガルポ（六〇九〇㍍）の天を突く城砦のような岩と氷のピークを写真に収める。土埃に悩まされる。木材を運搬する人民解放軍のトラックの行列はだいぶ少なくなった。昨年の大洪水が教訓となって森林の伐採が禁止されたからだろう。公路は竹卡（チュカ）で瀾滄江（ランツァンジャン）（メコン川）を渡り、一番高い峠、東達拉（トンダラ）（五〇〇八㍍）を越えて、怒江（ヌジャン）（サルウイン川）の支流、玉曲（ウィチュー）へ下り、ツァワロン地方に入る。左貢（三七七〇㍍）で遅い昼食。天気は崩れてきて小雨となる。さらに、緩やかに玉曲が流れる開け



崗日嘎布山群東部、拉古氷河をとりまく6,000 m峰、拉古の村から西に望む
6,000 m snow and rock peaks surrounding Lhagu Glacier, a view from Lhagu village to the west, Kangri Garpo Range.

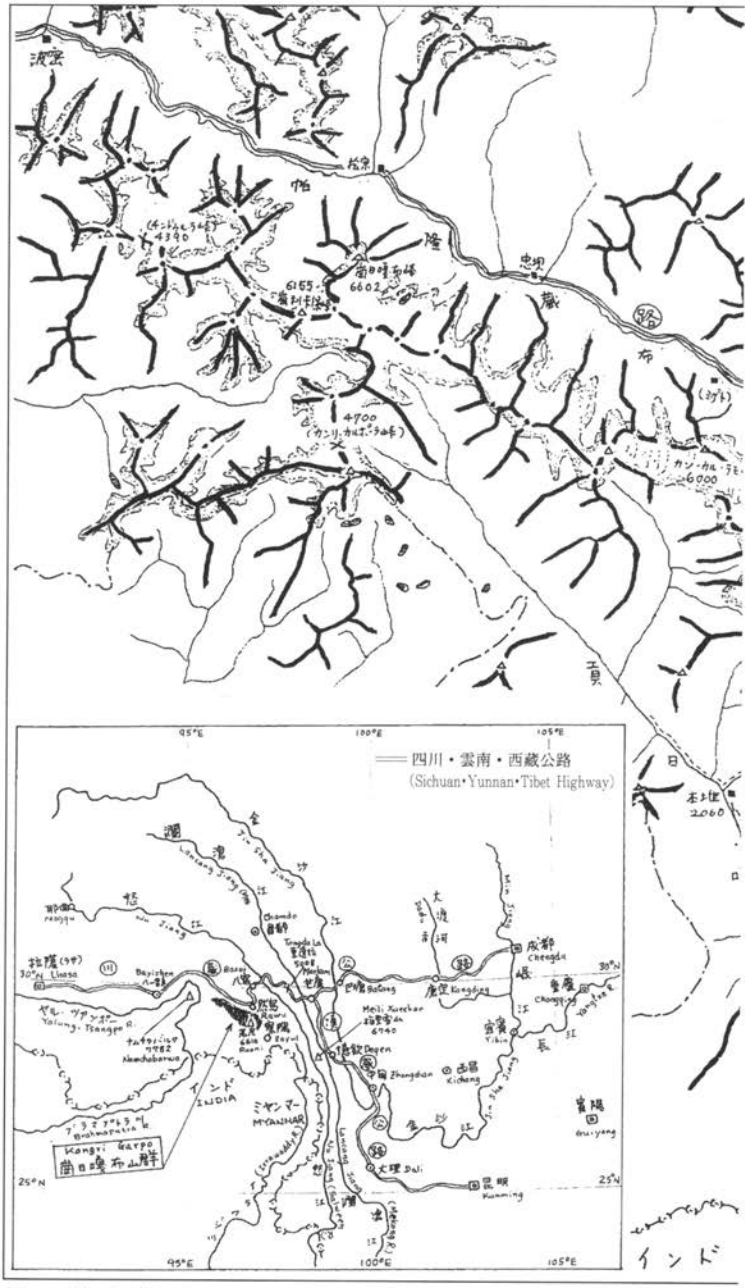
た谷の左岸を進む。まだごく一部だが道路の舗装工事が行われている。一定の間隔で現れる村落とラマ僧院はツァワロンの豊かさを感じさせる。午後七時少し前に那達（四〇七五メートル）着、ここに泊まる。

五月十七日、快晴。午前七時、摂氏零度。那達は昌都とラサへの分岐点。那達高原の北に昌都空港ができており、週二回成都から定期便が飛んでいる。那達を七時半出発。八時に業拉山峠（四六一八メートル）に到着。長大な伯舒拉嶺を展望したあと、車は一気に怒江橋（二七三〇メートル）へ下る。荒々しい山腹に描かれた八十八折のジグザグ道は、自然を切り刻んだ痛ましい傷跡のように見える。怒江は不毛で乾燥した峡谷を流れ、川床から見上げる岩の峨々たる山稜はあくまで高い。数百メートル上の急な山腹のわずかな畑のそばにチベット族の小さな土造りの家がへばりついている。住人は下に降りてくることがあるのだろうか。私にとって、このあたりは川蔵公路のなかで最も鮮烈な景観のひとつである。

十時すぎに怒江橋を通過。ゴルジュ状に両岸が狭まったところに架かっている。人民解放軍武装警察のチェック・ポイントになっているので緊張する。

はたして、橋の手前で訊問をうける。ガイドの陳さんが機転を利かせて、少し先の八宿まで行くところだと答えたので通してくれた。もし本当のことを言えばトラブルになっただろう。


●---- A・K, キングドン・ウォードのルート
●( ) 内の名称は 1930 年代の呼称
●山名・標高は『西蔵氷川』による
0 6 12 18 24 30 km
N
怒江
サルウィン川
休登寺
(3287メートル)
拉古氷河
巴学
(ゾ.54度) 4800
宮打拉
5560
(ガンガッシン)
3250
宮玉
(ラ.サール峠)
4550
(ゾ.ラ.54度)
4260
5950
6003
(ゾ.ラ.ラ.ロ)
4200
2840
(レバ)
阿龙
(アダ)
(メドクロン)
4610
4286
6610
3400
2400
(アダ.ロン.ラ.ポ)
4610


四川・雲南・西蔵公路
(Sichuan・Yunnan・Tibet Highway)
Kongri Garpo
崗日嘎布山群
インド
INDIA
ミヤンマー
MYANMAR
Lhasa
Chengdu
Kunming
Dali
Kangding
Yibin
Kichang
Guiyang
Zhongdian
Deqen
Bayizhen
Rawu
Zayul
Nanchabarwa
Brahmaputra R.
Yalung・Tsangpo R.
Lancang Jiang
Min Jiang
Yangtze R.
Chongqing
95°E
100°E
105°E
30°N
25°N

崗日嘎布山群概略図

公路は怒江橋で左岸の狭い支流沿いに八宿へ向かう。

K・ウォードは一九三三年にこのあたりまで来ている。道路工事が各所で行われ、四年前のような悪路はない。両岸の地層は不気味なほどの赤褐色を呈している。

八宿（三二四〇㍍）で昼食。こぎれいな町になっている。午後三時、怒江をヤル・ツァンポーの支流の分水嶺の峠（四三九〇㍍）を北から南に越える。景観は荒蕪地から樹林帯に変わる。右岸の谷の奥に念青唐古拉山脈東端の秀麗な氷雪の六〇〇〇㍍峰が顔を出す。道は清流に沿って下り、やがてゴルジュの左岸を通って然烏湖に出る。目的地の入口である。午後四時を少し回ったところで、まだ陽は高いので拉古村に直行する。公路は湖畔の広河原の前で二つに分かれる。左は近くの然烏の村を通ってラサへ、右は徳母拉峠（四七〇〇㍍）を越えて察隅へ通じる。

分岐点で陳さんは然烏の村に寄って拉古への道を訊きに行くというが、私は反対し車を左折させ先を急ぐことにした。拉古までの道筋は花の写真家、吉田外司夫氏から情報を得ていたし、旧ソ連製の十万分の一の地形図もあるので、ここから先は私が水先案内となる。

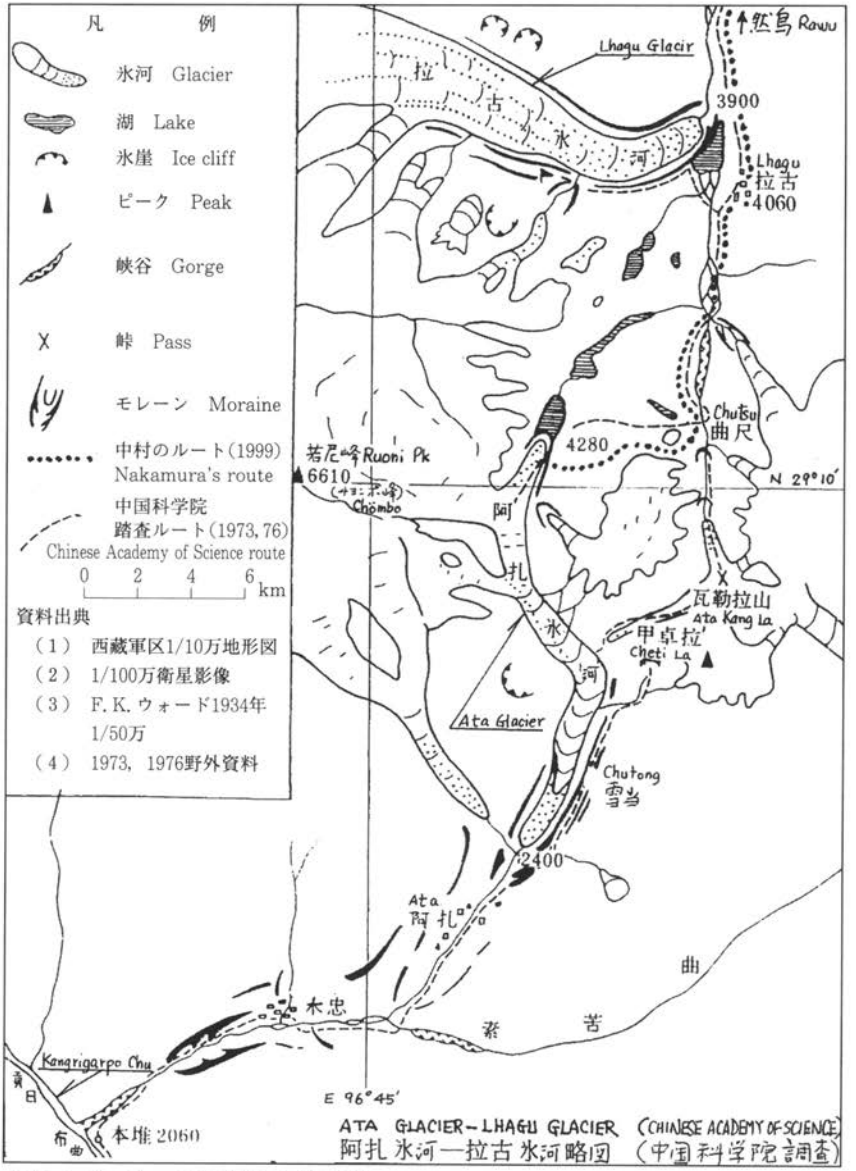
一時曇っていた空は晴れてきた。トルコ石色の青い然烏湖の南に雪の峰々が連らなっている。その懐に入って行くと思うと心が踊り、気持ちが高揚する。永井さんもうれしそうだ。

車道は然烏湖の東岸を南南東に辿る。湖面上に然烏の北側の山々が映える。K・ウォードの一九三三年の五十万分の一の地図では、三つの湖はほとんどつながっているが、現在は沈泥が埋めて作った広い河原が間にあり、網の目のように流れが下っている。五時ごろ、康沙村のシュグデン・ゴンパ僧院の少し先で、徳母拉への道から分かれて河原に入り、湖岸に沿ってつけられているジープ道をフォローする。昨年の七月中旬に来た吉田氏は雨季の増水のため、ランドクルーザーでも河原の道を辿ることはできず、分岐点の少し先のサロという村で人夫を雇ってキャラバンを始めている。七月は河原がところどころ水没していて、徒渉に苦労している。

我々は少しでも行程をかせぐために、草と砂泥の上に残る車の轍を追って試行錯誤をしながら進む。時折、水没したところでタイヤが埋まり苦労し、ヤルツェ（ウォードの地図ではＹａｔｓａ）付近では道を失ってしまうなど、ハラハラもしたが、陳さん、呂さんの息の合った行動のお陰で、前進することができた。

ほとんど標高差のない河原を北上した後、遠くから見えていた拉古氷河のエンド・モレーンを右に見て、車道は谷の右岸を登り、拉古氷河と拉古湖を同時に望める尾根の一角に出る。

感動の一瞬である。マイナーかもしれないが、まだ世界の登山界に知られていない山々を前にして至福のひと時を味わう。永井さん、陳さん、呂さんと握手してよろこび合う。想像して




東南チベット—崗日嘎布山群東部

いたより大きな拉古氷河が逆光に鈍く反射している。明るい緑青色の拉古湖の先に村落が点在し、谷の奥には雪山が我々を待っている。道は湖岸の山腹を行く。七時半、拉古の村（四〇六〇㍍）に着く。車はここまでである。拉古には大麦畑が広がっており、集落が三つに散らばっている。

我々は一番手前の民家の人と交渉して泊めてもらう。家は低い平屋で、泥と石で造られていて、家畜も同居している。なかは真っ暗闇で、目が慣れるまでしばし待って、手さぐりで居間に入る。天井の低い四十帖ぐらいの広さで、小さな窓が明かり取りになっている。炊事場と薪のストーブ以外は板の間で、不潔感はない。電気はない。

### (二)拉古氷河のほとり

夜は八時までは明るい。まずバター茶をいただいてから夕食。翌日からのキャラバンの段取りの交渉を陳さんにしてもらう。外国人を初めて迎えるにしてはテキパキことが運んで、馬八頭、馬方四人、翌朝八時半出発で話がまとまった。この構成で費用は三日間で一八〇〇元、民家での宿泊代は一泊五人で一〇〇元である。

夜遅くまで主人と集まってきた男たちから山と氷河、トレッキングの可能なルートや雪の状況などについて聴取する。

我々が目標としているアタ・カン・ラはまだ雪が深くて、馬は登れないことが分かった。この峠が開かれるのは七月～十月の四カ月間であることを確認する結果となった。A・Kもウォードも南から越えたとき、七月まで待ったことを考えると、強引にキャラバンを峠まで進めるのは無理と判断せざるを得なかった。

「アタ・カン・ラ」と言っても、初めは通じなかった。現在は瓦勒拉(ワレラ)山口（峠）と呼ばれ、中国科学院の地図にもそう表記されている。探検記に出てくる地名と現在の中国名との違いはいつも悩まされるところである。また、土地の人の話も全てを信用することは危険である。日本語（あるいは英語）―中国語―チベット語（あるいは他の少数民族の言葉）の通訳の過程で意志の疎通を欠くことはままあるし、彼らが知らないか、不確かなことでも、悪意からではないが出まかせに答えることもある。自分が持っている地図や資料と突き合わせて検証することが不可欠である。結局、アタ・カン・ラはあきらめて、できるだけ谷の奥まで入り、分水嶺に近づけるようキャラバンを進めるということで馬方に納得してもらう。

山群の最高峰について聞くが要領を得ない。拉古氷河については、昔はもっと大きかったと、語り継がれてきたらしい。これは、氷蝕のあとから見てとれる。末端付近の両岸の山腹が高さ五〇～一〇〇㍍ぐらいの幅で削り取られた岩の層が剥き出しになって帯状に続いている。昔の氷河は現在より厚く、湖に落ちこむ舌端の氷崖の高さは数十㍍あったろう。昔、氷崖が崩れ

て湖に落ちるときの音が拉古村まで届いたという話を聞いたと誰かが言う。

『西蔵氷川』に拉古村の伝説が記されている。

何世代か前の人たちは「拉古氷河は今のように大きくはなかった。また、拉古湖もなかった。現在の拉古氷河のところには村や畠があった。その後氷河が前進してきて畠や村を氷の中に埋めてしまった」という言い伝えを残している。

アルプスでも氷河期に氷河が前進して村落を埋めてしまったケースもあるので、拉古氷河の下に村が埋まっている可能性を否定できない。

アタ・カン・ラを越えて察隅との交易は今も行われており、物資調達のため往来するが、察隅側から来るほうが多いようだ。拉古の谷は牧畜には適しているが、松茸は採れない。日々の現金収入は冬虫夏草だけである。一匹二元で売れる。今はシーズンで、女性は朝早くから、特製の小さな鎌を持って山に入る。女性のほうが働き者のようだ。現在の拉古村の戸数は七十戸、五百人が住んでいる。ウォードが記録した十戸の数倍にもなっている。増加した人口を養うだけの土地の潜在能力があるのだろう。

終わりに、私の一番の関心事であるこの山群への登山家の近年のアクセスについて訊く。彼らの答えは、中国人の女性が写真を撮りに入って来たが、それ以外、中国人も外国人も旅行者は来ていないと。昨年の吉田氏が通過したことは気がついていないらしい。外国人について念を押したが、少なくとも自分たちは知らないという。

登山や踏査の目的をもって入って来た外国人は一九三五年のR・コールバック以後、我々が初めてだろう。

ここで一旦現地の情報から離れて、私自身が集めて持参した資料、特に地図および山群の名称や標高のことに話題を移す。

「中国人民解放軍総参謀部測絵局」の十万分の一の地図があれば、不確かなことはほとんど氷解するが、岡日嘎布山群についてはまだコピーを手に入れていない。したがって今回は旧ソ連製の十万分の一の等高線入りの地形図に頼らざるを得ない。旧ソ連の地図は地形は正確だが、難点は、山頂の標高が中国の地図よりおおむね高めで不正確であり、道路の表記が古い。行動には十分役にたつが、山の高さを公表するのに使えないのが情報提供者としては問題である。

山群の最高峰を例にとって比較してみると次の通りである。

中国科学院『西蔵氷川』（若尼峰）六六一〇メートル（中国）
旧ソ連／十万分の一（山名なし）六八〇五メートル（ソ連）
〃／五十万分の一（〃）六九七〇メートル（〃）
TPC／五十万分の一（〃）六三三五メートル（米国）
AMS／百万分の一（チェティ）六四六二メートル（〃）
ウォード／五十万分の一（チョンボ）六七〇〇メートル（英国）

コールバック／　（山名なし）　六四五〇メートル（〃）

私の報告に使う最高峰の標高は中国科学院の数値であるが、他のほとんどのピークについては『西蔵冰川』には載っていないので、実際の標高よりは高い、と思いながらも旧ソ連やTPCの地図から引用せざるを得ない。

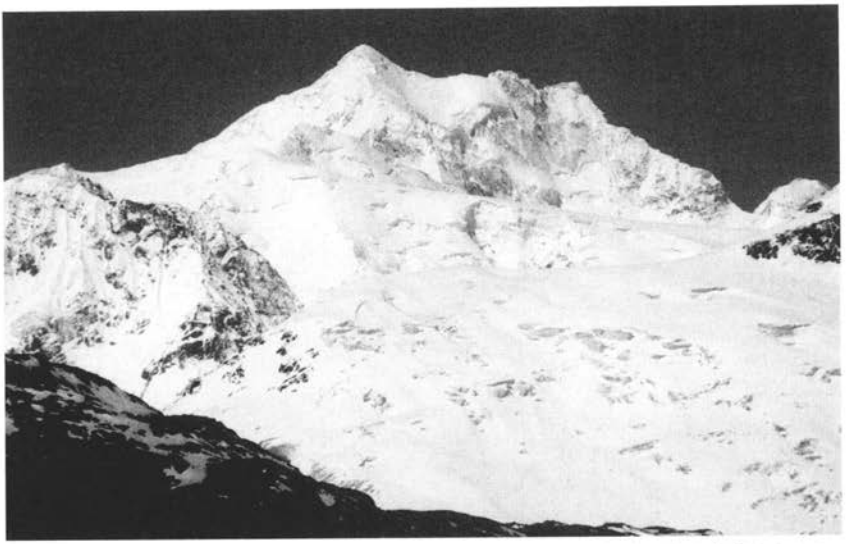
名称についても、コメントしておく必要がある。まず山群については、現在の中国の山系図と『西蔵冰川』では崗日嘎布と統一されているので、これを公式的に使う。が、この名称の由来は分からない。A・Kはこの山群をネチン・ガンラ雪山（Neching Gángra snow range）と記録し、アメリカのAMSの地図にはニモ・チョモ（Nyimo Chomo）と記されている。ウォードもコールバックも山群の名称のことを書いていないが、両者とも、山群の西の端にカンリ・ガルポ（Kangri Garpo）という名の峠の存在にはふれている。この峠はAMSの地図には載っている。このあたりのチベット人は雪山をカンリ・ガルポ、すなわち「白い雪の山」と普通名詞的に呼ぶこともある。カ（ka）またはカン（kang）は「雪」、ガルポあるいはガルポ（Garpo）は「白」、そして特定の山を指すとき、リ（ri）を付ける。したがって崗日嘎布はチベット語の白い雪山の意味である。

### ㈢最高峰の若尼峰（ルオニ）はいずこ

五月十八日、快晴。拉古氷河の氷塊が湖に落ちる夢をみる。音も耳の奥に谺（こだま）したようだ。ゆうべの話がよほど印象深かったのだろう。寝袋から顔を出すと、窓の輪郭が見える。六時半だ。起き上がって外をのぞくと、拉古氷河を取りまく山々が、青ずんだ薄明の空に、月世界の光景のように浮かび上がっている。三十分もすればモルゲンロートが始まりそうだ。まだ高度順化ができていないため、頭痛がするが、ひとり起きて写真を撮りに外に出る。

六時半、摂氏零度。谷の右岸の山裾を一〇〇メートルほど登って拉古氷河に狙いをつける。七時ごろ、山頂がモルゲンロートに染まり始めるが、期待したほどの鮮やかな色にならない。季節のせいだろうか。陽光が徐々に氷河を下り、蒼穹に氷雪の高峰が輝く。拉古氷河は大きい。A・Kは小さな氷河と記録したが、天気が悪くてよく見えなかったのか、あるいは誤植か、どちらかであろう。ウォードも大きさを強調していないし、長さについても数キロという曖昧な表現にとどめている。おそらく全容を俯瞰する機会がなかったのだろう。十万分の一の地図上で測ってみると、長さは約三〇キロ、幅は末端は一・三キロ、下段の中央で五キロ、上段の中ほども雪原状に広がって五キロぐらいある。拉古湖に映える雪峰と氷河は絵になる風景である。

写真を撮りに登ったあたりで、初めて若尼峰の頂上部分が南西の方角に姿を現す。しかし、手前の大きな山稜に遮ぎられて大部分は見えない。長大な山群の最高峰がわずか一七、八キロま



岡日嘎布山群の最高峰、若尼峰（6,610 m、チョンボ峰）の北東面、厚く氷雪をまとう
Northeastern side of the highest peak, Ruoni Feng (Chömbo peak) 6,610 m of Kangri Garpo Range, heavily snow clad.

で近づかないとその山頂を望めないのは珍しいことだ。

八時半、約束どおり馬が来る。車から馬に荷物を積み替えて九時に出発する。永井さんと私は馬に乗るが、私が馬の背をまたいだ途端に馬があばれ出し、振り落とされてしまう。八頭ともラバでなく馬である。拉古の馬は気が荒い。キャラバン中、永井さんも陸さんも落馬しているが、幸い誰も怪我はなかった。

道は谷の右岸の段丘の大麦畑の間を行く。植生は貧しく、背が低く棘のある灌木が多い。大きな樹木はない。

さぞ我々が珍しいのだろう、放牧や冬虫夏草採りに行く村人がぞろぞろついてくる。皆屈託がなくていい表情をしている。カンバは端正な顔立ちをしている。娘さんたちは美人が多い。

起伏の多い段丘を進み、東側から流れ下る小さな川を三つ越えると広河原となる。

谷の両側に五五〇〇㍍前後の雪のピークが姿を見せ、東側から中規模の氷河が下っている。素晴らしいトレッキング・コースである。

我々は河原の草地帯を南に向かう。あまりにも気持ちよい雰囲気なので馬から降りて歩く。

放牧のための仮小屋のあるコーギン（四〇九五㍍）と呼ばれるところに着く。広い河原の南西に、山群の最高峰、若尼峰（六六一〇㍍）の北東面が姿を現す。若尼峰のプロファイルを写真に収めることが、このトレッキングのハイライトだっただ

けに心が弾む。確認のために、GPSで自分の現在位置を測定し、旧ソ連の十万分の一の地形図の上に正確にプロットし、磁石で方向を正しくセットする。そして、地図上の最高点（六八〇五㍍）と、眼前に見える部厚く氷雪を纏った重量感のあるピークがピッタリ同じ方角にあることが分かったので、このピークが最高峰だと判断をした。が、私自身山容を知らないので一沫の不安は残った。ひょっとして、ピークの先にさらに高い頂上が隠れていて見えないのではないかと。

幸いこれは杞憂であった。帰国後、『西蔵氷川』に載っている不鮮明ではあるが若尼峰のモノクロ写真によって同定されたからである。

広河原が終わって、流れが小さなゴルジュ帯に入る手前のタヘリという場所で昼食をとる。

南へ向かう交易路はゴルジュ帯を避けて左岸の支尾根を高捲きする。A・Kのころは道は右を通っていたようだ。直線距離が二㌔ほどで高捲きは終わり、アタ・カン・ラの北氷河の端まで続く広河原が現れる。河原の手前、左岸を少し上ったところが曲尺（チュッ）（四一八五㍍）と呼ばれる放牧や薬草採りのベースになっているところである。距離的には若尼峰にだいぶ近づいたが、低い支尾根が邪魔し曲尺からは見えない。灌木の枝を束ねた人の背丈ほどの柵が風よけのためにめぐらされている。中に石の窯があり、山側を少し登ったところに水場もある。旅行者の休憩や夜営にも使われているだろう。われわれは午後三時に曲尺に着き、BCを設営する。

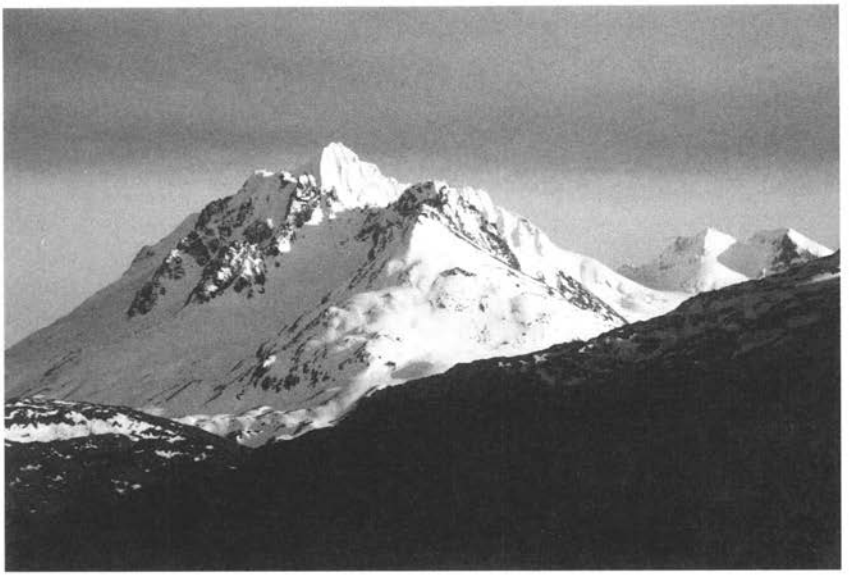
日差しは強烈で、紫外線がみるみる肌を焼く。日陰がないので暑くても逃げ場がない。テントは三張り、馬方たちは柵を背に細い丸太の支柱を組み上げてシートを上に張って屋根を作っている。彼らはこの支柱をきちっとまとめて、後で使う者のために特定の場所に置いていた。彼らにとっては公共財で、その使い方もルールがあるようだ。生活規範が守られているのは嬉しい。夕食は陳さんが腕をふるう。と言っても、いつもと同じメニューで、雲南ハムとジャガイモなど野菜の煮込みと米の飯である。それに辛い味噌やザーサイがつく定番料理である。それでも今回は炊飯用に圧力鍋を持ってきてくれたので助かる。

焚火を囲んで馬方たちの話を聞く。天気は昨日から晴れ始めた。明日も今日のような好天が続くだろうと言い、われわれもそう信じていた。

が、翌朝は囲りの山は雲の中だった。天候の不安定なところである。アタ・カン・ラは十月に入ると、年によっては大雪が降り通れなくなることがよくあるという。察隅から峠を越えて来るのは八月が多く、彼らは通行許可証なしにやって来る。商人が多く、巡礼もときどき通るようだ。

### ㈣北阿扎氷河へ——登路を探る

曲尺のBCから南に延びる広い谷の先に五七八〇㍍の秀峰が



崗日嘎布山群東部。拉古の西側の麗峰 5, 699 m
Beautiful snow peak in the west of Lhagu village, Kangri Garpo Range

正面に見える。頂上の肩の下から純白に波打つ氷河がアタ・カン・ラの方向に下っている。峠そのものは谷の右岸の尾根に遮られて見えない。曲尺から峠まで直線距離で八キロほどである。

峠付近は白銀の世界で、馬方たちが言うように馬が通れる状態ではない。アタ・カン・ラに登ることをあきらめる代わりに、BCから西へ、支尾根を越えて北阿扎氷河を俯瞰し、南阿扎氷河と分流する鞍部を望めるところまで登ることにする。この鞍部とアタ・カン・ラは五五九三メートルの美しい雪の鋭峰をはさんで山群を南北に隔てる分水嶺上にあり、若尼峰に続いている。

五月十九日、曇。七時半、摂氏四度。夜中に小雪が降ったようだ。馬方の天気予報はあえなくはずれる。昨日の安定した天気のことを思ってわが目を疑った。八時半、馬で出発。五五九三メートル峰からの支尾根を越えると平坦地に出る。夏場はヤクの放牧地だろう。ふたたび岩まじりの支尾根に取りついてジグザグに登り、雪が現れてきたところで馬を返す。

陸さんは体調がよくないので下る。陸さんは今年五十歳、三年前に私と梅里雪山巡礼路を一周したときは十三日間、あの上り下りの多い山道を馬に乗らずに歩き通すほどタフであったが、歳のせいかなと嘆く。馬の引き返し点（四二二五メートル）からいくつかのザラメ雪の雪渓を右斜め上にトラバースし、十時半に尾根のコブ（四三一〇メートル）に出る。眼下に北阿扎氷河が広がる。

阿扎氷河はウォードと中国科学院が観察したように、七〇

○メートルにおよぶ氷瀑の規模、樹林帯のなかを下る景観、末端の標高の低さなどの、氷河としての特異性は南阿扎氷河にある。しかし、北氷河も大量の降雪によって発達した岡日嘎布山群東部の氷河の特徴を備えている。

阿扎氷河が南北に分かれる雪原のように広大な幅一キロ、長さ二キロの鞍部から北氷河は一キロの幅で四キロ弱下っている。傾斜は極めて緩い。末端は土手状に茶褐色のモレーンが取りかこみ、環状の内側に氷が融けてできた二つの楕円形のプールがある。いずれつながってひとつの湖になるか、下の湖につながるであろう。右側のプールは一面氷で蓋われている。

これらの状態を中国科学院の考察隊は氷河の後退現象の表われと説明している。モレーンの下は谷に沿って氷河湖が形成され、左岸に近いところは、懸垂氷河から落ちてくる氷雪によって湖面が蓋われている。灰色がかった乳白色の氷河湖は幅七〇〇メートル、長さ一・五キロほどはある。西側は五五〇〇メートルクラスの峨々たる山稜で、数条の懸垂氷河が湖まで達している。末端に近い部分、特に右岸に近い氷河の表面には茶褐色の砂礫が氷河が流れる方向に薄く堆積している。私にとっては奇観である。

あいにく天気は回復せず、小雪がちらついたり、時折青空を見せたり不安定である。若尼峰の中腹から上部が見えるかと期待したが、雲のため所在が分からない。

しかしここまで来たので、若尼峰への登攀ルートを検討しておきたい。我々がいる現在位置から北阿扎氷河のほとりに下ることは容易である。末端付近の右岸のモレーンをしばらく登り、氷河に移る。雪崩の跡はないので、氷河の中央に出て鞍部までの緩やかな登行は何の障害もないだろう。鞍部から上は手前の尾根に遮ぎられて見えないが、北西から南東に流れ下る阿扎氷河の氷瀑を上部雪原に達する前に登り、いずれかのところで若尼峰から北東に延びる尾根に取りつくことになるだろう。が、これは想像である。

部厚い氷雪の鎧甲を纏っているのでルート選定にあたっては雪崩を最も警戒しなければならないことは言うまでもない。北側からアクセスをして若尼峰を狙うとすれば北阿扎氷河からのルート以外は考えにくい。南からはアプローチがはるかに大変であり、地図上の地形で判断する限り、より困難であろう。

少しでも晴れるのを期待して、氷河を見おろす鞍部に三時間とどまったが、小雪が降りはじめ視界はさらに悪くなって来たので下ることにする。陳さんとひとりの馬方は冬虫夏草探しに余念がなかったが、見つけたのは三匹だけだった。往路を戻って午後三時半に曲尺のBCに帰着する。まがりなりにも若尼峰への登頂ルートの偵察ができたことで満足する。天気回復の兆しは見えない。風が強く、時折霰が強く降る。風邪を引いてしまったらしい。拉古から上がってきていた十名ほどの冬虫夏草採りの娘さんの一団が集まる。湯を沸かしてツァンパを食べる。

陽気でおおらかな娘さんたちである。すぐ慣れて写真にもこだわらない。チベット族のカンバも、場所によって性格が異なるのだろうか。

永井さんが菓子を配る。嬉しそうだ。冬虫夏草の収穫を聞くとゼロから十匹までで、そうたくさんは見つけられないらしい。平均五匹とすれば十元になる。一日の収入としては結構な額ではある。

**㈤撤収――シュグデン・ゴンパ**

五月二十日、雪。六時半、摂氏五度。夜半に霰から雪に変わったようだ。牡丹雪が重くテントに積もっている。夜が明けると細かい雪に変わる。ここでゆっくり停滞して天気の回復を待つ気分的な余裕がないので撤収を決める。雪の降りしきる中を、九時半にキャラバン出発。しばらくは馬に乗っていたが、途中寒さに堪えきれず馬から下りて歩く。コーギンを過ぎたところで雨に変わる。午後一時半前に拉古村着。昼食をとり、キャラバンの費用を陳さんが清算する。馬方たちと陳さんの真剣そのものの交渉が三十分ほど続いた。このときは、なぜか女性と小さい女の子も集まってきた。皆、造形的にいい顔をしている。

午後三時、旧知のように親しみを覚える大勢の村人に送られて拉古を出発する。わずか三日であったが、一日は快晴に恵まれ満足度七〇点のトレッキングであった。途中シュグデン・ゴンパ（休登寺）に立ち寄る。河原から一〇〇㍍ほど登った丘の上にある。然烏湖と南に雪の山々を望む格好の場所にある。四年ぶりだが、老ラマは私のことを覚えてくれていた。入口には漢字とチベット語で書かれた宗教活動の免許証が新しく架けられている。少しずつ修復が進められているが、往時のような規模に戻ることはないだろう。現在の平屋の寺と宿坊の背後に部厚い土壁の廃墟が点在している。一九三三年のウォードの写真には大きなゴンパ（僧院）が写っている。いつごろから荒廃が始まったのか、老ラマに聞いても分からないが、新中国になりチベット侵攻が始まったころからだろう。そして文革によって徹底的に破壊された。A・Kの時代に百五十人いたラマ僧は現在は一割にも満たない。若い修業僧がひとり宿坊の薄暗い一室で、バターの灯明の下でお経をめくり、無心に読経をしている姿を見ると、興味本位の旅行者が不作法に踏み込んではいけない雰囲気を感じる。激動の時代を経てもチベット仏教は深く静かに生き続けていくだろう。ガイドの陳さんもダンディな運転手の呂さんも敬虔なチベット仏教徒で、こと宗教的な作法に関しては厳格に守っている。

午後五時半、然烏（三八四〇㍍）に帰着する。然烏には数軒の宿泊所があるが、吉田氏のアドバイスに従って人民解放軍の招待所に泊まる。正解だった。清潔で若い兵士が丁寧に世話をしてくれた。

然烏は小さい村落だが、川蔵公路の交通の要衝であり、解放

軍辺防警察が管轄する道路工事の兵站基地にもなっている。だから外国人に対するチェックも厳しいだろうと普通は考えるが、不可解なことに、公安は現れないし、解放軍の将官や兵士の態度は好意的で何のチェックもしない。通行許可証のことも訊かない。然烏はエアポケットのような場所である。

五月二十一日、曇。七時、気温摂氏七度。八時すこしまえに察隅への公路を徳母拉峠へ向かう。が、天気は悪く、六〇〇〇㍍峰の頂は見えない。それでも、しばらく登ると、広い谷の雪景色の上を流れる雲の切れ間に五八〇〇㍍前後の個性のあるピークが姿を現す。芸術写真にはよいシャッター・チャンスかもしれないが記録写真には不十分だ。十時半徳母拉着、雪が相当積もっていて色とりどりのラテがはためく。当初の計画では徳母拉を越えて、察隅からイラワジ川源流を目指していたので、ここから戻るのは後髪を引かれる思いであったが、ガスの中を然烏にとって返す。我々の旅は陸路を辿ってラサまで続いたが、岡日嘎布山群東部の探査は然烏に戻ったところで終了した。

ラサへの途上、林芝で公安に捕まるなどハプニングがあり、また、ラサでは東南チベットへの入域が困難になりつつある状況を詳しく聴取したが、帰国までの日程だけを記して、これらの話は別の機会に譲りたい。

五月二十一日　然烏―波密

〃　二十二日　波密―通麦（トンマイ）―八一鎮（林芝）

〃　二十三日　八一鎮（林芝）―工布江達（ゴンブジャンタ）

〃　二十四日　工布江達―ガンデン寺―ラサ

〃　二十六日　ラサ―成都（空路）

〃　二十九日―三十日　成都―昆明（成昆鉄道）

六月　二日　昆明―関西―羽田（空路）

雲南省の中旬からラサまでのパジェロでの走行距離は一八〇〇㌔強であった。

△記録▽

**日　時**　一九九九年五月十二日～五月三十日

**メンバー**　中村　保（64）、永井　剛（66）

**地　域**　カンリガルポ山群の踏査

# 北極圏の巨大な壁

## ——メイト・ポーラールーパー　バフィン島登攀隊

名越實

私たち広島の八名は一九九八年七、八月の二カ月、カナダ北極圏にあるバフィン島のアウユイットゥク国立公園保護区内の岩峰フリーガ（一九九〇㍍）にて登攀活動を行った。

遠征のことの起こりは二十六年前の『岩と雪』三十一号に載ったダグ・スコットのレポートで、そのときから「いつかは行ってやる」と想いつづけていたが、ついにそれを決定づけたのが同百六十八号のユージン・フィッシャーのニュースと写真であった。

翌一九九六年から情報集めを始め、近年遠征に行かれた隊の方々とコンタクトをとり、いろいろ教えていただくうちにどうもヒマラヤあたりと違って、具体的なものが見えてこないのに気がついた。

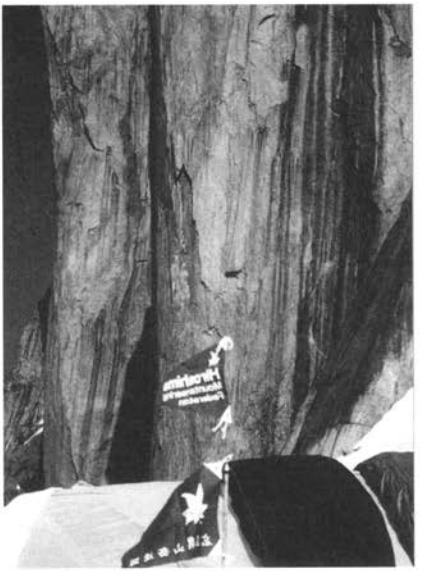
八人の仲間の中には会社を辞めてまで参加する者もいるというのに、こんないつものような行き当たりばったりな計画ではまずいかなと思い、次の夏偵察に出かけた。日程の関係で、一番気になっていたサムフォード・フィヨルドまでは足をのばせず、アウユイットゥクの一部を回ってきただけであったが、遠征が見えてきたという意味では私にとって大きな成果であった。

持ち帰った写真から目標を鰹節のような六〇〇㍍のかぶった壁をもつフリーガⅠ、Ⅱ峰に決め、隊員それぞれの思いと日程の制約などから、カプセルスタイルとポーラースタイルのパーティーに分けることにした。八人のメンバーのうち三人は休暇を一月しかとれず、日数を最大限有効に使うため前後（登攀準備と後始末）を外して登攀期間に絞ったショートステイの方式

（要するに「おいしいとこどり」）とした。この考え方は悪くなかったのだが五人を一パーティーにしたため結果的に不完全燃焼の者もでてしまった。

## 活動概要

七月十六日から登攀活動を始め、ショートステイ組が来るまでⅠ峰は山本、宮重、Ⅱ峰は名越、井上、新山のパーティー編成で、好天が続いたこともあってほぼ日替わりでトップに立った。七月二十四日にショートステイの三名（両傘、木原、溝手）が到着すると名越はⅠ峰にまわり、新しく三名がⅡ峰組に入った。以下に登攀の様子を記す。



BCからのフリーガ峰（左Ⅰ峰、右Ⅱ峰）
The walls of Friga Ⅰ & Ⅱ

Ⅰ峰は九六年にワリー・バーカーらが正面を初登攀していた（くそったれ！）ので、我々はその右（西壁）にルートをとった。下部は左上する悪い凹角（A3＋）が3ピッチ（六〇㍍ロープで）続き、苦戦を強いられたが、凹角を抜けるとまあまあのクラックラインを継続できて楽しい人工（A1～A4のエイド）登攀だった。

基部から二〇〇㍍のフィクス後Go-Up（ラッシュ）し、カプセルスタイル（尺取り虫のようにキャンプを上げていく）で伸ばしてゆく。11ピッチ目のブランクセクション（手がかりのないところ）を突破してヘッドウォールのクラックシステムに手をかけて「勝ったな」と思ったところで二度目の嵐（暴風雨）にみまわれた。ノーマルフライのポーターレッジが床上浸水状態（当然シュラフまでビショビショ）となり八月十三日、あと一〇〇㍍（3～4ピッチ？）を残して敗退を決定。降り続く霙と雨の中凄絶な退却となり、今回一番の全力投球を強いられてしまった。

完登は逃したものの（それはひとえに自分たちの力が及ばなかっただけで）クライミングは十分に堪能したし、実に楽しかった（僕は五十歳の誕生日を壁に吊したテント〝天空の城〟で祝ってもらって最高だった）。

Ⅱ峰は正面のチムニーからブランクセクションを右上して、剱の形をした大ハングの上にでてクラックラインをたどるル

トを想定し、ほぼその通りのルートで完登できた。

荷物置き場にちょうど良いえぐれた取り付きからチムニーを上り、途中から右に振って正面壁に出てクラックシステムをたどる。三人（名越、井上、新山）それぞれ二回ずつリードして二〇〇㍍のフィクスを張ったところで、七月二十四日ショートステイの三名が到着。その後は△両粂、新山▽と△木原、溝手、井上▽の二組が交代でリードするローテーションをとった。ショートステイ組がいつでも参加し脱退できるためもあって（ふつうこんな壁ではやらないけど）Ⅱ峰はフィックスをべた張りするポーラ方式とした（極地で極地法はええんでないかい？）ので、その日の開拓組は毎日BCからの出勤となった。その都度ユマーリングのアルバイトはあるが、非番や沈殿の日はゆっくり休養できるという利点もあった。

ルート中にはブランクセクションが2ピッチくらいあったが、両粂の奮闘で何とかショートステイの滞在中に完登することができた。

しかし我々の計画段階でのコンセンサス「バフィンの壁と自然を思いっきり楽しもうぜ！」というものからすれば、不満足な結果になったメンバーもあったようだ。それはひとえにリードする機会の不均衡にあった。実働十一日のうち半分以上の六日を両粂、残り五日を木原、溝手、井上の三人で分け合ったことになる。その貴重なリードの日が二日とも途中から大雨となり一カ月休んできたのに計四時間しかリード出来なかった溝手のような例もでてきたのである。なぜ五人が公平にリードの機会を得られるようなローテーションにならなかったかは五人に聞くしかないが、もし公平にしたら時間切れ敗退になっていただろうことは間違いない。

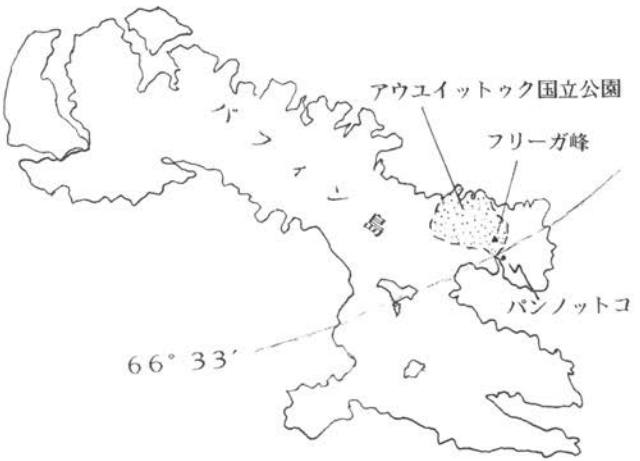
やはり短期間で遠征を充実したものにしようとすれば、小パーティーに分けて（少々きついかもしれないが）それぞれが存分に活動できる編成にするべきであったのだろう（まあ自分たちでそう決めたのだから言ってくるところはないのだが……）。

一応Ⅱ峰は完登でしかも初登攀となったものの、一番「バフィンの壁を楽しんだ」のは、登攀リーダーの両粂であった。本人は助っ人よろしく「完登」の使命感に燃えていたのかもしれないが、たぶん完登などドーでもよかったであろう後の三人には気の毒であった。

遠征についての詳しいテクニカルレポートは、私が先日まとめた報告書『大空の女神』を見ていただければいいと思うが、以下に少しバフィン情報を記す。

## バフィン情報

基本的にこのエリアではヒマラヤ等と違って、すべてを自分たちで処理するしかない。ポーター（輸送）もレスキューも行政のフォローもない。そのくせゴミ処理などの責務はしっかり




（編者註）：イヌイット語の発音は表記が難しい。Auyuittuq（ow-you-ee-tuk）国立公園
Pangnirtung（pang-near-tung）と“Nunavat Handbook 1998”にはある

義務づけられている（当たり前だけど）。

まず**輸送**：それも島内での輸送が大問題である。

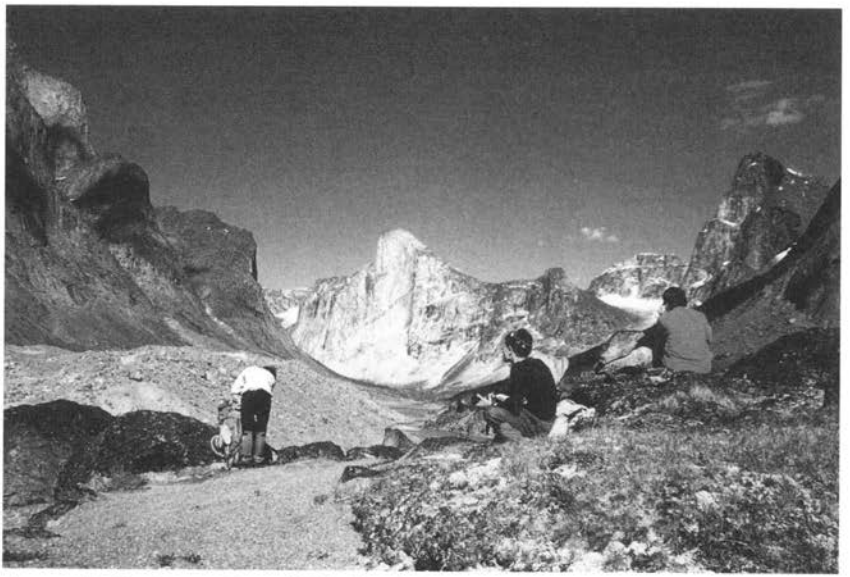
アウユイットゥク公園を中心とするパンノットコ（白人？はパンニョートンともいうが）エリアでは今のところいい輸送手段はない（編者註）。

①六月の中旬まではスキードゥ（スノーモービル）が使えるので、パンノットコにあるイヌイット（エスキモー）のエージェントに頼んで二〜三カ月前に荷を送ってBCまで運んでおいてもらう。当然送り返しは雪の積もる十月以降となろう。

②イカリットにあるヘリコプターを予約して、高い「呼び寄せ料＋運搬料（三千八百カナダドル＋千カナダドル／時間）」を払ってBC入りする。この場合は事前に公園事務所の「航空機使用許可」を取得しておかないと公園内でヘリは使えない（飛んでくれない）。

③パンノットコの村中に呼びかけてポーターを募り、ヒマラヤのようにキャラバンを組む。ただし急に「荷を負える人」は集まらない（イヌイットに背負う習慣はない）ので、前もってエージェントにでも人集めを頼んでおいた方がいい。

④極力荷を少なくして自分たちでトリプルぼっかでもする。ただフリーのルートを登るだけなら今回アガードのタグ・スコット・ルートを登りにきたアメリカの二人（ジェフ・ボウマンとポーラテック社のジョン・ハーリン）のように一回でも運べる。



ウィーゼル谷のキャラバン。世界有数の巨大な壁トールが見えてきた
Weasel Valley and the Big Wall of Tyr

**燃料**　島内では一般にガスはない。ケロシン、ナフサ、ホワイトガソリンが入手可能。どうしても（合法的に）ガスカートリッジを運びたければ、前年の八月頃（に開通する）船便で送っておくしかないだろう。

**食糧**　うまいα米、純和食（海産物等）以外は日本のスーパーの品揃えと変わらない。ただしパンノットコにアルコール類はいっさいないので要注意（?）。

　なお、低温、非高所の極北ではよく食べるのでヒマラヤの倍くらいの量を計画したほうがいいと思う。

**装備**　基本的にはヨセミテ装備でよいが、特に雨風対策が必要。ポーターレッジのフライはエクスペディション（ゴアなら水滴に悩まされなくて最高）仕様の浸透しない物でないと役に立たない。

　カムはキャメロットの全サイズ、特に#3以下エイリアンの最小（青）までをよく使った。ナッツはカムと入れ替えて使ったりしたが、極小サイズはハーケンの使えないところで威力を発揮した。

　各種フックとバードビークも有用であった。

　ハーケン類は薄刃の短小サイズにのみ出番があった。

**キャラバン**　主要なトレッキングルートのウイーゼル谷でも踏み跡程度で、整備はしない方針みたい（で好ましいが）。

　サミット湖までに五十回ほどの徒渉（時に腰まで）があるの

で、水捌けのよいトレッキングシューズやステッキなど沢歩きの身支度が必要。

山に入ると下部は（非常に悪い）モレーンのゴーロ、上部はところどころ雪の乗った氷河歩きとなるが、キングパレード氷河はなぜか積雪が多く股まで潜るのでわかんじき（？）がほしい。

**天候**　七月中は白夜なのでオーバーワークに気をつけたい。

低地では冷たい雨が降るのでカッパが必要。山に入ると日本アルプスの春山くらいで、雪、みぞれ、雨、風と、天気は良くないし四～五日に一回嵐（ポータレッジが少し浮き上がる程度の風と土砂降りの雨。まあ暴風雨）が来る。

気温は山中で平均七月＝四度、八月＝二度位か？　朝方には（雨の時以外）零下になる。もし五月頃に入山すれば日本アルプスの三月の登攀となる。

**岩質**　先カンブリア紀の花崗岩で非常に堅い。ジャンピングする場合穴三つでキリは丸くなる。

氷河に削られてほとんどの壁は上部が九〇度以上になっている。クラックはおおむねきれいだが、パイ状になったところはやっかい。クラックのないところは（ヨセミテより荒めの）スラブか、剥がれやすい薄いフレークの張り付いたブランクセクションとなる。

## ◇記録◇

**日　時**　一九九八年七～八月

**ルート**　フリーガⅠ峰西壁の新ルート　壁の四分の三にて敗退（11P、五〇〇㍍、A4、5・9）

ルート名：（未完ながら）「大空のシーユー」

フリーガⅡ峰正面　初登攀（16P、五六〇㍍、A3＋、5・10a）ルート名「剱の舞」

**隊の名称**　メイト・ポーラールーパー（極地のしゃく取り虫仲間）

**隊の構成**　隊長＝名越實、登攀リーダー＝山本茂樹、両粂輝正、食糧＝宮重栄作、医療＝井上直子、環境＝新山まゆみ、会計＝木原めぐみ、輸送＝溝手康史

**報告書**　「大地の女神　バフィン島一九九八」

連絡先＝〒731―3361　広島市安佐北区安佐町あさひが丘452　名越　實

Eメール：nagoshi@orange.ocn.ne.jp

電話、ファックス：082―838―0754

〔註：本登山は日本山岳会海外登山基金一九九八年度助成金を受けて実施された〕

# 海外登山基金の十年

## 「山岳」編集委員会

本会の海外登山基金は、一九八八年に実施された三国友好登山隊の剰余金七〇〇〇万円を基に、一九八九年に創設された。

この基金の構想は、一九五六年のマナスル登山成功後の反省材料に端を発している。

一九七〇年のエベレスト登山隊長、松方三郎氏は、とくに熱心で英国がエベレスト初登頂に成功した際に誕生した「エベレスト財団」のような組織をつくって、若い人たちによる海外登山を支援できればと、その構想実現のために着手した直後に急逝され、志なかばで挫折せざるを得なかった。

一九八八年、三国友好登山の際には、当時の副会長で、この登山隊の今西総隊長を補佐して、事務局長を担当した大塚博美現会長は、その時の悔しさをバネに、今西氏にもはかり、議定書作成の段階から、その点を念頭において経費の節約のための自助努力を行い、且つ為替の変動による予想外の差益も追風となり、計画成功の副産物として基金が誕生したのである。

本会としては、このような理念をもとに、「海外登山基金」を創設し、その果実をもとに、海外登山の育成のために助成金を交付する一方、その基金を増やす努力を行うことを確認し、この基金を管理運営するための海外登山基金委員会を発足させた。（「山」五三二号および五四二号参照）

この委員会は、委員長（副会長）、委員にもう一人の副会長、総務、財務、高所登山担当（事務局）の各理事ならびに学識経験者をもって構成されることになった。

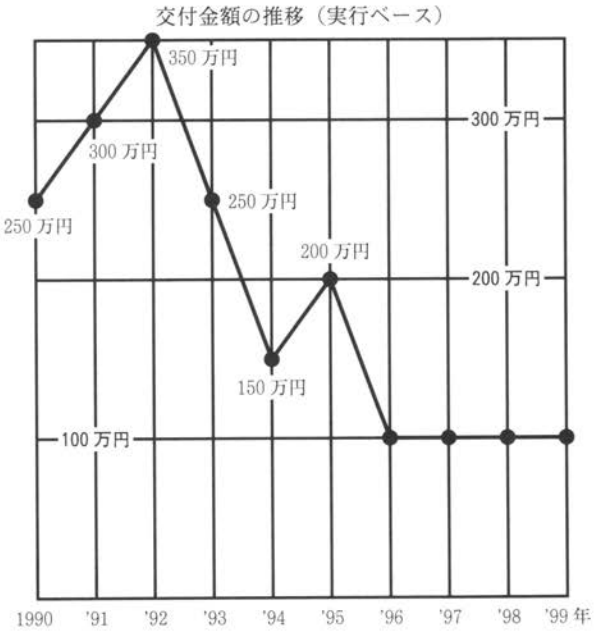
こうして毎年九月には募集を「山」誌上に広告し、応募された計画を慎重に審査して、交付をつづけてきた。

平成二年度以降の十年間に、二十九隊に助成を行ってきたが、その交付金の総額は、一八七〇万円に達している。しかし、担当者が二年毎に交代していくため、「山」誌上への報告も次第に断片化して、最近では「理事会報告」に載るだけで、交付された助成金の成果のフォロー等も出来にくくなり、ややもすれば、創設の主旨を知らない会員もでてきているので、この機会に十年間に交付を受けた登山隊を一覧掲載し、次の十年の指針にするため、本稿をまとめることにした。

(1) 歴代の海外登山基金委員（任期二年）

《一九八九～九一年》

村木潤次郎（委員長）、藤平正夫（副会長）、松田雄一（総務）、西村政晃（財務）、重広恒夫（高所登山）、今西寿雄、大塚博美、宮下秀樹、原真、橋本清、鹿野勝彦、江本嘉伸




《一九九二～九三年》

藤平（委員長）、松田（副会長）、小倉茂暉（総務）、大倉昌身（財務）、重広（高所登山）、今西、大塚、宮下、原、橋本、鹿野、江本、村木

《一九九四～九五年》

鴫原啓祐（委員長）、中村純二（副会長）、小倉（総務）、大倉（財務）、渡辺雄二（高所登山）、村木、橋本、鹿野、重広、伊丹紹泰、三谷統一郎、村井龍一

《一九九六～九七年》

宮下（委員長）、中村（副会長）、大屋梯二（総務）、吉永英明（財務）、渡辺（高所登山）、重広、伊丹、三谷、増山茂、神長幹雄、山本宗彦、村井

《一九九八～九九年》

大森薫雄（委員長）、竹内哲夫（副会長）、大屋（総務）、吉永（財務）、伊丹（高所登山）、増山、神長、山本、中村進、本郷三好、貫田宗男

(2) 海外登山基金額の推移

基金発足時、七〇〇〇万円であった基金は、その後一九九二年三月には大西家よりの寄付を加えて七一〇〇万円になり、一九九三年度末には登山特別基金の合体により八九一一万円になり、更に一九九七年度末には青年部K2登山隊の寄付剰余金を繰入れて九三五〇万円に増え、今日に至っている。

(3) 交付金額の変遷（上表の通り）

発足当初の公定歩合は五・二五%であったが、一九九三年に一・七五%となり、交付金額を減らさざるを得なくなった。さらに金利は下り続け、一九九五年からは〇・五%となって現在に至っている。このため交付金の不足額は一般会計より補填して運用している。

# 交付金の支給された登山隊一覧

## 1990 年-1

主　体：日本山岳会東海支部（日中友好天山山脈雪蓮峰登山隊）
山　名：雪蓮峰
成　果：8 月 12 日全員登頂・初登頂
隊　員：徳島和男（隊長）、藤田元弘、酒井秀紀、鈴木幹夫、服部恭典、井上俊逸、西川悦生、河竹康之、小尻浩、加藤卓男、高橋玲司、北浦健次
支給額：150 万円
報　告：「山」541、「山」545、「山」549（記録）、「山岳」86、「日中友好雪蓮峰登山隊 1990（1 次～4 次）」
その他：東海支部 30 周年記念事業



## 1990 年-2

主　体：日本山岳会青年部／高所登山委員会（日本山岳会第一次パミール登山隊）
山　名：パミール・キャンプ
成　果：7 月 27 日 4 名コルジェネフスカヤ、8 月 6 日 6 名レーニン
隊　員：大谷亮（隊長）、熊崎和宏、高市豊義、佐野哲也、広瀬学、滝沢守生
支給額：100 万円
報　告：「山」541、「山」545、「山」549、「山岳」86



## 1991 年-1

主　体：日本山岳会（ナムチャバルワ日中合同登山隊）
山　名：ナムチャバルワ
日　時：9 月15日～11月30日
経　過：大西隊員雪崩遭難、7 460 m に達する。
隊　員：《登山隊》重広恒夫（隊長）、高見和成、木本哲、大西宏、山本篤、広瀬学＋中国隊員
支給額：150 万円
報　告：「山岳」87



## 1991 年-2

主　体：日本山岳会京都支部（京都支部ティリチミール登山隊）
山　名：ティリチミール
成　果：8月15日2名登頂
隊　員：須藤建志（隊長）、宮川清明、松田謙介、堀江良明、小田佳子、船尾修、百海琢司＋パキスタン隊員
支給額：50万円
報　告：「山岳」87



## 1991 年-3

主　体：明治大学山岳部（明大チョモランマ登山隊）
山　名：チョモランマ・カンシュンリッジ
日　時：3月18日～
経　過：5月4日6400 mに達する。
隊　員：平野真市（隊長）、坂本文男、長谷川良典、斉藤伸、松村定樹、中沢暢美、佐野哲也、広瀬学、青田浩、（学術班）小畤尚、岡沢修一、下川和夫、高橋伸幸
支給額：100万円
報　告：「山岳」86



## 1991 年-4

主　体：早稲田大学山岳部（早大カラコルム登山隊）
山　名：トリボール
成　果：8月30日2名トリボール登頂、モムヒルサール試登
隊　員：大貫敏史（隊長）、三好雅彦、橋本守功、中間英敏、井沢正彦、遠藤淳、小林浩、土沢信明
支給額：50万円
報　告：「山岳」87



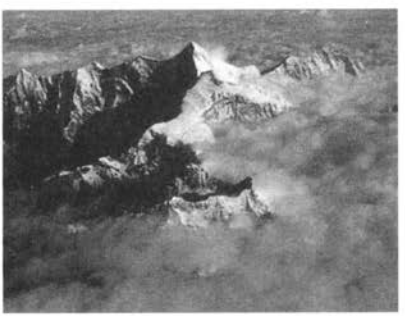
## 1992年-1

主　体：日本山岳会科学委員会／マッキンレー気象調査①（第三次マッキンレー気象観測機設置登山隊 1992）
山　名：マッキンレー
日　時：6月6日～7月1日
成　果：機器設置・登頂
隊　員：大蔵喜福（隊長）、千葉信一郎、中村真、田中清隆、ハロルド・ソロモン
支給額：50万円
報　告：「山岳」87



## 1992年-2

主　体：日本山岳会（1992年日本・中国ナムチャバルワ第二次合同登山隊）
山　名：ナムチャバルワ
成　果：10月30日11名登頂・初登頂
隊　員：重広恒夫（隊長）、山本一夫、三谷統一郎、青田浩、山本篤、佐藤正倫＋中国側隊員
支給額：150万円
報　告：「山岳」88



## 1992年-3

主　体：アンタークティックウォーク隊（アンタークティックウォーク南極点探検隊）
地　域：南極
成　果：1992年11月21日～93年1月18日パトリオットヒルより南極点到達
隊　員：吉川謙二（隊長）、松原尚之、佐野哲也＋支援隊
支給額：100万円
報　告：「山岳」88



## 1992 年-4

主　体：広島山の会（広島山の会四姑娘山南壁登山隊）
山　名：四姑娘山
成　果：7月24・25日全員登頂・南壁初登攀
隊　員：吉村千春（隊長）、小寺敬止、両粂輝正、内山龍司、山本茂樹、斉田功、森山亮
支給額：50万円
報　告：「山岳」88



## 1993 年-1

主　体：日本山岳会科学委員会・青年部・学生部／マッキンレー気象調査②（第四次日本山岳会気象観測機器設置登山隊）
山　名：マッキンレー
成　果：データ回収・機器設置6月19日全員登頂
隊　員：大蔵喜福（隊長）、絹川祥夫、棚橋靖、長谷川厚志、佐藤大輔、宮沢豊、荒井俊彦、宇都宮寛史、倉島広一、野口健
支給額：50万円
報　告：「山岳」89



## 1993 年-2

主　体：日本山岳会東海支部（日本山岳会東海支部日中友好皇冠峰登山隊1993）
山　名：皇冠峰
成　果：7月22日～29日全員登頂・初登頂
隊　員：徳島和男（隊長）、酒井秀紀、阿部哲也、亀田正人、中島正徳、鈴木幹夫、山崎彰人、夏目正憲、宮坂仁、有富保之、中川邦仁、笹森達也、松岡清司、長谷川哲也
支給額：50万円
報　告：「山岳」89、「日中友好皇冠峰登山隊1993報告書」



## 1993年-3

主　体：広島山岳会（日印合同、広島山岳会ヒマラヤ登山隊1993）
山　名：アクタシ［サルトロカンリⅡ峰改め］
成　果：8月5日、6日7名登頂・南西壁より初登頂
隊　員：名越實（隊長）、岡本良治、吉岡好英、横山正雄、溝手康史、山本宣夫＋インド隊員
支給額：70万円
報　告：「山岳」89



## 1993年-4

主　体：信州大学学士山岳会（1993年信州大学学士山岳会カラコルム登山隊）
山　名：バインターブラック
日　時：1993年5月31日～
経　過：7月28日悪天により5880mで断念（「山岳年鑑'94」より）
隊　員：吉田秀樹（隊長）、中嶋岳志、岩羽孝之、豊田浩太郎、河西貴史
支給額：80万円



## 1994年-1

主　体：日本山岳会科学委員会／マッキンレー気象調査③（第五次マッキンレー気象観測機器設置登山隊）
山　名：マッキンレー
成　果：データ回収・機器設置6月25日登頂
隊　員：中村真（隊長）、柳沢義光、宮城龍一郎、高橋繁樹、互井健悟、玉崎聡、新井慎二、加賀谷忠史
支給額：50万円
報　告：「山岳」89



## 1994 年-2

主　体：富山岳連（富山県山岳連盟ガッシャーブルム遠征隊）
山　名：ガッシャーブルムⅠ峰北面
成　果：8月12日3名登頂
隊　員：佐伯尚幸（隊長）、中島真、谷口守、佐伯成司、松田靖彦、黒崎泰信、稲葉英樹、丸山政寿、川村泰臣、佐竹剛彦、高田賢一
支給額：50万円
報　告：「山岳」90



## 1994 年-3

主　体：慶応義塾大学山岳部（トランゴ登攀チーム）
山　名：グレート・トランゴタワー東峰
日　時：8月～10月
経　過：東壁5300 mで断念
隊　員：渡辺朋幸（隊長）、谷口龍二、森上和哲、浜田豪、千葉明夫
支給額：50万
報　告：「山岳」90
その他：BCで盗難にあう。



## 1994 年-4

主　体：山学同志会
山　名：メンルンツェとカウリサンカール
日　時：9月7日～10月30日
経　過：BCに到達できず断念
隊　員：坂下直枝（隊長）、他4人
支給額：100万円（返却）



## 1995年-1

主　体：日本山岳会（マカルー登山隊1995）
山　名：マカルー東稜
成　果：5月21、22日8名登頂・初登攀
隊　員：重広恒夫（隊長）、山本宗彦、渡辺雄二、馬場博行、山本篤、小野岳、田辺治、松原尚之、谷川太郎、岡本憲、竹内洋岳、荒井俊彦＋中国隊員
支給額：100万円
報　告：「山岳」90、HJ.52（1996）
その他：日本山岳会90周年記念登山



## 1995年-2

主　体：日本大学（エベレスト/チョモランマ登山隊1995）
山　名：チョモランマ北東稜
成　果：5月11日隊員2名シェルパ4名登頂・初登攀
隊　員：神崎忠男（隊長）、池田錦重、古野淳、忍田剛、井本重喜、家口寛、野本修、田端宏好、田村幸英、原田智紀、原田義隆、鈴木武樹、大前義孝＋学術隊員
支給額：50万
報　告：「山岳」90、HJ.52（1996）



## 1995年-3

主　体：山岳同人B・S・R（1995西蔵・日本友好GⅡ峰登山隊）
山　名：ガッシャーブルムⅡ峰
日　時：1995年6月5日～8月20日
経　過：チベット隊員8名登頂、日本隊は大雪のため7700mまで
隊　員：大宮求（隊長）、佐藤隆弘、川島正志、窪田佳生、須賀田香理＋中国隊員
支給額：50万円
報　告：報告書「1995西蔵・日本友好GⅡ峰登山隊」



## 1996 年-1

主　体：日本山岳会青年部(K 2 登山隊 1996)
山　名：K 2 南南東リブ
成　果：8 月 12 日、14 日 12 名登頂
隊　員：山本篤（隊長)、松原尚之、谷川太郎、稲葉英樹、松本伸夫、赤坂謙三、亀山哲、岡本憲、長久保浩司、村田文祥、椎名厚史、安島伸一、吉田裕一、竹内洋岳、朱宮丈晴、佐野崇、高橋和弘、豊嶋匡明
支給額：70 万円
報　告：「山岳」92、HJ. 54 (1998)



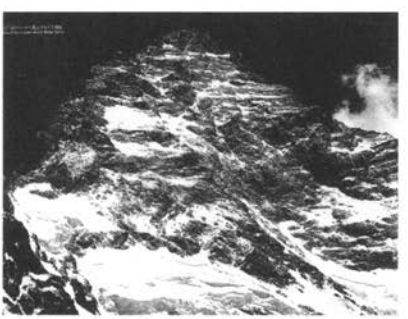
## 1996 年-2

主　体：日本山岳会東海支部（ウルタルⅡ峰登山隊 1996)
山　名：ウルタルⅡ峰
日　時：1996 年 6 月 25 日～7 月 19 日
成　果：南西壁より初登頂
隊　員：山崎彰人（隊長)、松岡清司
支給額：30 万円
報　告：「山岳」91
その他：山崎隊長 ABC にて死亡

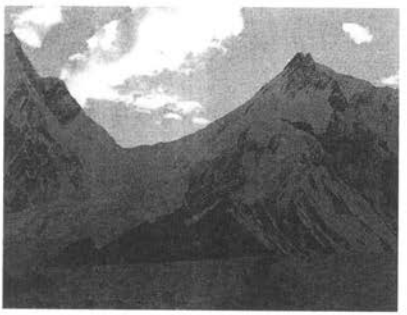


## 1997 年-1

主　体：日本山岳会東海支部（K 2 学術登山隊 1997)
山　名：K 2 西稜から西壁
成　果：7 月 19 日 3 名、28 日 4 名とシェルパ 4 名登頂
隊　員：田辺治（隊長)、滝根正幹、中島明、山田良二、小林正巳、三好学、鈴木幹夫、中川邦仁＋高所シェルパ 10 人
支給額：70 万円
報　告：「山岳」93



## 1997年-2



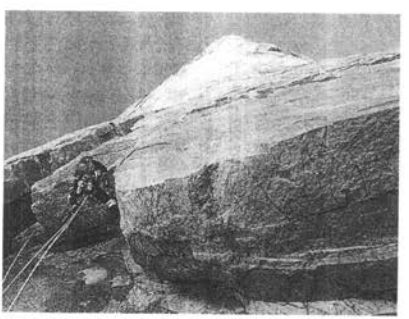
主　体：神奈川ヒマラヤンクラブ（神奈川ヒマラヤ登山隊1997）
山　名：スキルブルム
成　果：8月17日7名登頂
日　時：1997年7月11日～
隊　員：広島三朗（隊長）、原田達也、永澤茂、中込清次郎、菊田佳子、土森譲、小田茂夫、尾上弘司、鎌田実、初鹿裕康、松田謙介、古関正雄、両角繁、谷口浩平、有本朋子、柴田直衛
支給額：30万円
報　告：「スキルブルム7360・夢は白き氷河の果てに」（1998）、HJ. 54（1998）
その他：BC帰着後セラック崩壊により6名死亡

## 1998年-1



主　体：日本山岳会青年部（カンチェンジュンガ登山隊1998）
山　名：カンチェンジュンガ北壁
経　過：5月15日5名登頂、下山時に椎名、赤坂両隊員衰弱死
隊　員：谷川太郎（隊長）、赤坂謙三、奥田仁一、田辺治、山本茂久、長久保浩司、広瀬健太、椎名厚史、大橋隆平、中村和貞
支給額：70万円
報　告：「山岳」93

## 1998年-2



主　体：広島岳連（メイト・ポーラールーパーバフィン島登攀隊）
山　域：バフィン島
日　時：1998年6月30日～
成　果：フリーガⅠ（新ルート）、Ⅱ（初登）
隊　員：名越實（隊長）、山本茂樹、両粂輝正、宮重栄作、井上直子、新山まゆみ、木原めぐみ、溝手康史
支給額：30万円
報　告：「山岳」94（本号掲載）

## 1999 年-1

主　体：日本山岳会（ガンカープンズム登山隊 1999）
山　名：ガンカープンズム
経　過：ガンガープンズムの登山計画は 3 月 10 日に延期となる（「山」647）
隊　員：伊丹紹泰（隊長）他 9 名
支給額：50 万円（辞退）
（写真はリャンカンカンリ峰）



## 1999 年-2

主　体：立教大学山岳部・山友会（ガッシャーブルムⅡ峰登山隊）
山　名：ガッシャーブルムⅡ峰（中国側）
日　時：1999 年 6 月 1 日～8 月 30 日
経　過：悪天と雪崩により 6 750 m にて断念
隊　員：鰺坂青青（総隊長）、牛窪光政（隊長）、大木哲郎、神保修麻、古市進、鈴木良二、シェルパ 5 名
支給額：70 万円



## 1999 年-3

主　体：札幌山岳連盟（マナスル冬季登山隊）
山　名：冬季マナスル峰
日　時：1999 年 11 月 20 日～
隊　員（予定）：江崎幸一（隊長）、中村喜吉、工藤寛、阿波徹、井上剛、高橋留智亜、大坂卓也、八京渡、越智勝治、井島健一
支給額：30 万円



# 図書紹介

## 金子民雄 著

## 『タクラマカン周遊』

山と溪谷社　一九九九年一月刊
A5判　三三六ページ　二千六百円

シルクロードに興味をもつ者なら、中央アジアの歴史や探検を研究しておられる著者の名前はよく御存じであろう。本書は一九九二年秋、中国新疆ウイグル自治区ウルムチ市で開かれた「二十世紀の中央アジア研究とスヴェン・ヘディンの遺産」シンポジウムに参加した著者が会議終了後、エクスカーションとしてタリム盆地を周遊したときの紀行文である。

この周遊のメンバーは会議に参加した内の希望者で中国、スウェーデン、アメリカ人等、ジープ九台の大部隊であった。ルートはウルムチ～コルラ～アクスー～ホータン河を遡りホータンへ。さらに西域南道をニヤ～チェルチェン～チャルクリック～ミーランからコルラへと戻る十八日間余りのものであった。

このルートはかつて玄奘三蔵らの求法僧や、近代では探検家たちが通ったところでもあり、シルクロードにあこがれる者ならぜひ行きたいところである。著者の紀行文はさすがにこの地を歩いた探検家の動向と業績に詳しく、行く先々でそれを紹介してくれる。読む者が名前しか知らない探検家でも、その土地、その場所の探検家たちのエピソードはおおいに探検時代へと想いを馳せさせてくれる。

なかでも楽しく読んだのはミーラン遺跡の見学で、この地とスタインのかかわりや彼の発見した有翼天使像のあった寺院が今も残っていることや、一九九一年にまた二体の有翼天使像が発見されたこと等である。同行した中国の研究者が仏塔のところで「有翼の天使像はこの足下にあるんですよと、靴で軽くとんとんと踏んでみせた」のくだりには著者がうらやましくなってしまった。

今やロプノールもホータン河もツアーでも行けるようになってしまった。とはいえ、あこがれの地を理解するには、ガイドブックのほかに歴代の史誌類、古代の僧侶や官員の記録から始まって、近代の探検記をひもとくのが最良であり、より想像力を高められる。そしてその地へ行ったときこれだけは見てみたいというものが浮かんでくるし、より豊かな旅への一歩となる。その意味でも本書は良き一冊となろう。

現在この地方の変貌ぶりはすさまじく、著者もそのことに随

所でふれている。評者の実見でもウルムチ～トルファン間の高速道路、トルファンからクチャまで通じていた南疆鉄道は今年五月カシュガルまで全線開通した。交通網や石油景気の恩恵にあずかる者も多いし、部分的ながら豊かさがみえる。パミール高原のカラクリ湖にはキルギス族の子供がカタコトの日本語で水晶や帽子を売っていた。余談だが少し大きな町ならキャバレーも珍しくない。こうなると七十年代末から八十年代初期の外国人に開放されたころの新疆が懐かしくなる。著者もいうように西域への感傷的な旅行の時代は去ったようである。

「中央アジア研究とヘディンのシンポジウム」に参加した著者自身が、このような会議が中国で開かれるようになったことに驚きつつも、その流れをかみしめている。かつて中国は戦前の外国探検隊を文化財の盗賊団と非難したし、またそれは事実であった。書中に中国で第四次探検を行ったヘディンとスタイン側のいきさつが出ているので、ここで探検時代の終りころに現れた中国との共同調査のさきがけについて若干ふれたい。

一九二六年十一月第四次中央アジア探検のため北京にきたヘディンは、思わぬ中国側の抵抗にあった。そして中国政府と中国学術団体協議会（二七年春成立）と交渉、両国共同の中国スウェーデン西北科学考査団（二七年五月～三三年）が組織された。この調査隊は両者対等の立場で双方協約が守られ、成果も大きく、報告書も出版されて評価も高かった。今も中国では外国との共同調査の手本のように語られている。このときに中国側の隊員として活躍したのが徐旭生や黄文弼で、中国人自身による西域研究の基礎をつくった人々である。

二八年三月には南京で政府機構である中国古物保管委員会ができ外国人の単独考古発掘と文物の国外持ち出しが禁止された。これに制約されたのが米国中央アジア科学考察団（三〇年五～十月）で、目的は米自然史博物館の集蔵品蒐集であった。この隊も中米共同隊として一応の成果をあげた。

スタインの第四次探検（三〇年八月～）のとき、三〇年四月に南京政府許可の消息が伝わると政界、学会に抗議の声が強まり、国民政府は六月に古物保存法十四条を発布した。これによってスタインは外交部だけの許可では活動できず、古物保管委員会、教育部、内務部の発掘許可が必要となった。これには中国側の参加が不可欠であったが、スタインは交渉せずに探検に向かった。これに中国国内の各学術団体が抗議運動を起こした。これが発端となり政府は新疆省府へスタインの活動中止を命じたのである。これが中国で語られているいきさつである。

中国はまさに変わろうとしていたのであった。

（渡辺義一郎）

# 水野　勉著
# 『外国人と日本の山』（「山書研究42」）

日本山書の会　一九九八年十一月刊
A5判　一七〇ページ

著者は日本山書の会代表として、山岳図書、文献、資料の蒐集家、研究家として活躍されている一人である。

この本は、著者が山の資料を求め、外国人が日本の山について著した本を読み、豆本『外国人と日本の山、人と本』を一九八五年にまとめたものを、その後の資料に基づき、訂正加筆されて発表されたものである。

日本にアルピニズムが導入される以前の明治初期には、地質・鉱山の調査、地形測量などの用務で来日中の外国人による山岳地域、または未開発地域への探検などが行われ、また学校の教師や宣教師などが仕事の合間に山歩きや登山を行い、それらの報告書、紀行文や旅行案内書として、日本の山が紹介されていた。

その中でも有名なのは、ウォルター・ウェストンの『日本アルプスの登山と探検』やアーネスト・サトウの『中部および北部日本旅行案内』などであり、その他に日本の山を歩いた外国人としてガウランド、アトキンソン、チェンバレン、ライン、ライマン、ミルンなどが知られているが、彼らの著書については一般に有名なものは少なく、あまり十分な紹介がされていなかった。

近年になり、山崎安治氏の『日本登山史』や安川茂雄氏の『近代日本登山史』などで、明治初期の外国人登山者のことが紹介され、その後、黒岩健、川村宏、三井嘉雄、安江安宣、田畑真一、庄田元男、水野勉氏らの調査研究、文献資料の邦訳などによって、明治初期の外国人登山者の活動が明らかになってきた。

この本では、日本の登山史研究という立場ではなく、著者が多くの資料文献の間を散歩しながら、今まで不確定な部分が多かった外国人と日本の山とのかかわりを文献学的に紹介したもので、日本登山史研究の一助になる貴重な資料である。

著者は最初にライマンとマクシモーヴィチを取り上げている。ライマンについては、小林義正氏の『山と書物』に「初期山岳関係主要図書目録」の「洋書の部」（日本関係）に掲げられている本はあるが、これは地質の報告書であって、山や探検に関する文献としては不適当であり、別に北海道の山岳地帯の探検報告というべきものがあることを見出し、「開拓使顧問ホラシ・ケプロン報文」（一八七九年）にライマンの旅行記があり、山岳地帯の紀行が報告として載っている。この紀行を外国人の日

本における登山活動の最初の文献とするのが適当であろうと、著者は記している。

マクシモーヴィチについては、登山史の中で扱うのは不適当であるが、幕末の一八六〇～一八六四年に日本に滞在して、低いとはいえ、いくつかの山々へ入って、植物採集をしており、日本の自然に深くふれた外国人として取り上げたいと著者は記している。カール・ヨハン・マクシモーヴィチ（ドイツ名）は、ロシア人でロシア語ではカール・イワノヴィチ・マクシモーヴィチである。彼は植物学者で一八五三年からアムール河地方の植物調査をし、一八六〇年から日本での植物調査を実施している。彼は新しい植物種を発見し、学名に命名者としてマクシモーヴィチの名前のついた植物は多くある。主なものとして、アサノハカエデ、チョウセンカラコギカエデ、メグスリノキ、ミヤママタタビ、マタタビ、イチリンソウ、シシウド、スズメノウリなどがある。また、ウダイカンバの英名は Moximowicz's Birch となっていたり、コオニユリの英名が Maximowicz's Lily となっているなど、植物学者としてのマクシモーヴィチは世界的に著名である。日本固有の植物も彼によって世界に知られるようになり、日本の山野を探検した一人とし登山史に入れてもよいという著者の意見には賛成である。著者はマクシモーヴィチの旅行記のコピーをロシアの図書館から取り寄せるなどして、彼の日本での行動を調べようとしており、研究熱心なのには感心する。マクシモーヴィチは一八七〇年からペテルブルグ植物園長になっており、植物学関係の資料から探究すれば、何か資料が得られるのではないだろうか。

次に、ガウランド、アトキンソン、ミルンが紹介されている。ここでの話題は「日本アルプス」という名称である。ガウランドが日本アルプスの命名者であることは広く知られているが、これを否定もできないが、肯定もできないという論議が出ていることに対し、著者は、いくつかの証拠を示してくれる。

最初に "Japanese Alps" という呼称が出たのは Satow, E.M. and Hawes, A.G.S. (ed.)—A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan. 1881 であり、この本の中で、「日本アルプス」と呼んでもいいだろうとしたのは、立山から乗鞍岳まで連なる山脈である。そして、この文章を書いたのは編集者のアーネスト・サトウであるが、この情報を提供したのがウィリアム・ガウランドだとされたことによって、日本アルプスという呼称を初めて使ったのがガウランドであると推定された。

次に、日本アルプスの名が出るのは、ディクソンの "The Land of the Morning" 1882 である。さらに、日本アルプスという呼称の記事は、「アルパイン・ジャーナル」第十七巻（一八九五年）に載っている。これはウェストンの本の登山に関する報告に寄せた、ガウランドの発言である。ここではガウラン

ド自身が「日本アルプス」という言葉を使ったといっているのである。さらに、ウェストンが日本山岳会の『山岳』第十三年第二号（一九一九年）に、「日本アルプスという言葉の語源」という記事を書いていることである。これによると、ウェストンはこの件について、ガウランドとサトウと話し合っている。この中でガウランドの記憶は薄れて、はっきりしないが、サトウによると日本アルプスという言葉は、ガウランドによって最初に使われたと確信していると答えた。

前述のディクソンの著書『朝の国』には、珍しい図版が載っている。立山頂上から眺めた槍ヶ岳のスケッチで、これはたぶん、外国人による最初の槍ヶ岳の絵であろう。と著者が記述しているが、そのスケッチを図版として再現して欲しかった。

つづく章には、志賀重昂が剽窃したとされるガルトンの『旅行術』、サトウの『中部および北部日本旅行案内』についての考察、「日本アジア協会」「ドイツ東アジア文化研究協会」そして「ロンドン日本協会」という在日本外国人の研究成果を載せた機関誌が相当に興味深い資料であることを語っている。

最も長い章はウェストンの『日本アルプスの登山と探検』発行前後――ウェストンの手紙から――である。出版元との微妙なやりとりが面白い。

終章は「ウェストン以後」であるが、もうこの頃になると日本人の登山が本格化して外国人の影は薄くなる。この頃の本の中では『INAKA』が資料的価値もさることながら、本作りの贅沢さに意味があるという。ちなみに『INAKA』は山岳会の図書室に六冊だけある。

（高遠　宏）

---

## 西丸震哉　著
## 『机上登山』

博品社　一九九八年四月刊
四六判　二五四ページ　千八百円

お馴染みの西丸さんの本であるが、私は寡聞にして「机上登山」の定義も知らず、手にとるまで奇想天外なる空想登山小説かあるいは流行の物騒なバーチャル登山の本かなと思っていた。著者に対して誠に申し訳ない。手に取ると表紙には実在の地勢図の断片が印刷されていたので、実証可能な具体性のある内容ではないかとうかがえて、身を引き締めて読むことにした。もっとも読み進むうちに、地形図を基としたルートファインディングや探索シミュレーションのバーチャル登山のソフトもあながち荒唐無稽でもないとも思えてきた。

「まえがき」に「机上登山」とは「著者の造語で、机上の空

論とは違い、実行に移せば、珠玉の山行が絶対に期待できるプラン」との意味を書かれている。著者によると昭和三十年代にすでに秋田県の虎毛山に地形図を使って想像の山行を記録したそうで、今回はこれの現代版だとのことである。内容のイメージが掴めると考えられる。

さて目次を開いてみる。北は択捉島、北海道の知床岳から南はトカラの横当島、沖縄の西表島と日本全国二十カ所が挙げられている。すべてに地形図の縮小コピーによるルートが示されているが、著者と共に地図上でも机上登山の気分に浸りたいならば、全幅の地形図を用意されたが良かろう。

さて、内容紹介の手だてとして、私もお相伴して机上登山にいざ出発。まずは択捉島へ。著者と返るべき択捉島に敬意を表して二十万分の一地勢図と五万分の一地形図を十枚買ってくる。もちろん日本の国土地理院発行の平成版である。まだ空中写真は撮れないらしく、衛星画像による修正とある。本文を読みながら地図を広げる。蛍光ペンで探索ルートを印していく。時折私ならこう行きたいという比較もする。私は万事几帳面なのである。

択捉島中央部北岸の留別港に船を着けて上陸する。このあたりが島の中心と思われるからだ。初日は車で内陸の瀬石温泉に行き温泉のそばにテントを張る。翌日は留別港に戻り、留別川をゴムボートで遡る。いよいよ足を使って支流をさらに遡り♨記号のところを泊地とする。つぎにハイマツの密林をもぐって下流の沢にトラバースして、沢に下りて対岸の枝沢を突き上げる。コルを越えて眼下の沼に下りる。もう人跡未到のヒグマの世界である……。

本の中で著者と一緒に探索するうちに、段々と著者の好みと行動様式が見えてくる。平面的な地図上から実態を推測して探索ルートを設定する仕方など経験豊富な著者の「机上登山」行動から勉強するところは多い。また著者の人生観、自然観やうんちくに富む自然考察、社会批評がちりばめられていて納得させられる。折り目に酒が登場するところも大方の共感を呼ぶであろう。読み進むうちに著者の好みが圧倒的に秘そやかな湿原、池、沼にあることがわかる。山頂のように実態でも地図上でも目立つところは目標が立てやすく行動もしやすく、ルートの設定も面白味が少ないが、地図上では豆粒ほどの秘そやかな池塘を見つけだしルートを設定するのは難しい。湿原や池塘のような森の抜けたところは見通しが立たず、計画ルートどおりに実際に到達することは簡単でない。その危惧を読者も共有して地図を傍らに読み進むことが「机上登山」の面白さであろう。

本文では必然的に湿原の数が多い北の多雪地の無雪期の探索が多くなる。スキーがお好きなようだから積雪期のスキー行も二、三計画されている。なかでも著者が発見して名付けた尾瀬の「岩塔盆地と原」は自身の思い入れが大きいようで、ルート

計画そのものより、実際に経験されたという浮遊霊だか地縛霊だかの、私にとっては科学的には不可解と考えられる現象のことが具体的な話として展開されている。この種の霊現象の話についてはその他の場所においても述べられているので、著者の関心の深さが読み取れる。畢竟、無人境といえども人跡未到ではなく、過去分けいった人がらみの因縁があって、人の心底をゆさぶるゆがみを持つ時空なのであろうか。薄ら寒い思いを禁じえない。

それに対して南洋の横当島探索については、著者の気持ちも明解な洞窟探検のような知的好奇心によるところが多いように思われた。この今は休止している火山島の噴火口がベラボウに深い桶みたいらしく、山頂標高四九五㍍に対し火口底標高二三四㍍であり、この底へ降り立って、上を眺めたらどんな感じなのか。はたして感動するものかどうか確かめることが主眼と思われる。そして最後の西表島ではイリオモテヤマネコに遭遇することにわずかな希望を託して海陸を徘徊する。遭遇できなくても目につくものはすべて興味の対象になる。観光客の行くところはひとつも見ないで終わるであろうが、西表島の真髄には触れることができるはずだ。かくして「机上登山」のページを閉じる。

著者は「まえがき」で自身の今後の生涯を〝直感〟で想定されている。また本文で「一定時間生きていたけれど、あるのに見なかった、楽しめるのに楽しまなかった、それを気付きもしないでノホホンとすごしてしまっていた、なんていうのは悲しい。」と書かれている。本書を書かれた動機も「気が付かなければ悲しいということも気付かず平気でいる」ことをよしとせず、自身の実行に不可能なことがあるにせよ、気付いて計画をしておこうという著者自身の今後の「登山計画」が本書「机上登山」であると考えられ、その実現がなされることを祈るとともに読者においても実行されんことを願う次第である。

（柳下　棟生）

---

天野礼子　著

## 『川よ』

日本放送協会出版　一九九九年三月刊
A5判　三三九ページ　千六百円

著者は一九五三年（昭和二十八年）京都市生まれ、今西錦司博士に傾倒し、また十九歳で釣りを始め、アマゴ釣りに熱中する。そして今西博士が主宰する〝ノータリン・クラブ〟のメンバーで釣り文筆家の山本素石に可愛がられ、また同時期に釣り好きの作家開高健に師事する。

素石さんは、日本の河川がダム建設やコンクリートの護岸工事で汚染される前の美しい渓谷やきれいな中流を知っている文筆家であり、また開高健も軽妙でありながら日本の近代文明に対する痛烈な批判を発表し続けた人である。この二人に知遇を得た著者は「いま、おそらく女で本物の〝川〟を知っている一番若い人間であると思う」と自負している。

素石、開高等とともに山里を歩き、そこに横たわるダムをみて、また山里で川とともに暮らしてきた人々とふれあったことが、川について深く考えさせるきっかけとなったという。そして一九八八年に〝長良川〟という宿題を与えられた、と思い込む。一九九五年に河口堰が運用されるまで反対運動に取り組み、長良川のために九冊の本を書いた。環境問題では、著者のように長期にわたって、ひとつの課題に取組む人たちは、たくさんいる。問題に突き当たり、ときに行きづまり深く考えるようになって、本物に近づいてくるのだと思う。

本書の『川よ』は、北は北海道の釧路川から、南は屋久島の安房川まで、日本各地の有名な川だけでなく山里や都会の小川など、バラエティー豊かに二十の川をとりあげている。著者は「この本には私の、川を歩いた人生そのものが詰まっている」という。内容は日本の河川行政に対する告発が中心テーマのひとつである。例えば、川に生活を依存してきた人たち、川をよく知っている川漁師などに、その川の変遷を語らせるほか、山里からの若者の流出とダムが出来るまでの山村の変容、逆に都会から山村に移り住み、悪戦苦闘する人たちの人間模様など、それぞれの川の物語がある。

著者は、題名の「川よ」の後に何を続けるかを読者に問いかけ、それは自由な発想にまかせる、としているが、巻末に「海で生まれた雨つぶは、森で集まり川となる」で始まる「川よ、よみがえれ」と題する詩を載せたことで著者の意図は明瞭である。山好きとしては、ダムが出来てからのその上流部、本当の源流への影響と変容にもっとふれて欲しかったが、それは無理な注文か。

内容を全部紹介するわけにもいかないが、いくつかを抜粋してみよう。冒頭の四万十川は、地方自治も首長をはじめ地方官僚に見識がないと碌なことにならないという話である。カヌーイストの野田知佑が語る「俺たちが、いい川だ、いい川だ、といったら、地元の役場から電話があって、皆さんのお陰で有名になって、きれいになったから見にきてくれと、行ってみると俺が大好きだった（河岸の）竹林が切られて、（そこに）川見台とかいうちゃちなバンガローとコンクリート敷きの河原が出現していた。腹が煮えくり返って、川を見て気を落ちつけようと思ったら〝最後の清流、四万十川〟と書いたでかい看板が五〇〇メートルおきに立っていて、そいつが邪魔で、川をみるどころじゃない」という話である。土地の川漁師によると、例の一億円の

「ふるさと創世金」で行政がやったことだという。そして「初めて見る人には清流にみえようが、川は確実に汚れ始めちょる。ゴリもアユも少のうなったが、もっと心配なのは青のりや、最盛期の十分の一もあるかな」。この惨状は橋本高知県知事が就任してから、やや改善がみられる、という。

坂東太郎と呼ばれる利根川の話、源流部に近い水上町だけで五つのダムがある。町に税金が年間八億円入る。地方の首長にとって財政の余裕は魅力的だ。本書から離れるが、上高地を流れる梓川の下流は安曇村、稲核ダムなど二つのダムの税金で、ひところは安曇村の住民は村民税ゼロだった、という。ダムは上流、下流のそれぞれに悪影響を与えるが、地方の首長にとって税収は魅力の存在なのであろう。利根川の話に戻れば、首都圏の水不足は、人為的に作られた面もあり、利根川上流にダムはもう要らない、という。そして一九七一年（昭和四十六年）から運用を開始した利根川河口堰、学者、識者が揃って影響は軽微と答申したが、堰に溜まった汚泥は環境ホルモンを含め危険な化学物質がいっぱいという。このことは長良川の河口堰にもつながっていようか。

武蔵野台地を流れる多摩川の支流、たった二十㌔の野川の話。都市開発が進むにつれて生活雑水やゴミが捨てられ、どぶ川となっていったが、目覚めた一部の住民の運動で、昔の清流が取り戻され、川遊びをする子供たちの声も聞こえるように復活した心暖まる物語。同じようにどぶ川となって、いまは暗渠となってしまった隣町の仙川とは対象的だ。

京都の奥、京大演習林の始まる美山町、そこを流れる美山川（正しくは由良川）の近くで細々と民宿を営む哲人、通称「もりしげ」夫妻の物語。今西に傾倒する京都出身、山里に憧れ美山の奥に移り住んだが商いは下手、現実は厳しく苦しい。最初はわがまま亭主に仕方なく従っていた奥さんも同じく京育ちだが、ともすればまた逃げ出しそうになる亭主を戒め、逆に励ます始末、いざとなると京女は凄い。最終章の夫婦と猫のいる風景は、ドラマの一場面を見るようで見事。女性ならではの観察は鋭く、野人を自認している著者ではあるが、やはり都会人のセンスが光っているように思う。

釣りをする著者は、乱獲するだけで環境に無関心な大部分の釣り人も告発するが、その告発は甘い。源流部に釣り人が捨てるゴミだけでなく、釣り糸、鉤を放置する危険も告発してほしかった。また引き味がよいからと、琵琶湖をはじめいくつかの湖にブラックバスを放流した行為ほどひどくはないとしても、本来ヤマメがいるべき川にアマゴを放流する話などに疑問は残る。

そのほか、吉野川河口堰反対運動家のバイタリティーあふれる話など、興味ある記述は多いが、環境問題では、やはり青森県の白神山地を流れる赤石川にまつわる話題にひかれた。ブナ

の原生林と清流を守るために、青秋林道を凍結する運動に十五年以上にわたって中心的な活動をした根深誠さんのお話が中心だ。その粘り強い運動が実り、青秋林道は凍結され、白神山地の青森県側のブナ林は守られたが、役所は世界遺産への登録と並行して中心部は入山禁止、バッファーゾーンの林道は県道に昇格、その舗装工事で道沿いに土砂を放棄、川は破壊変貌するなど、役所のやることは批判さるべき点が多い。しかもかつて一緒に林道凍結に動いた一人は、藤里町に箱モノを造る、など運動達成後の分裂、運動達成後の処理の難しさ、は考えさせられる。根深さんは「里人が山菜とりやイワナとりにも入れないのはおかしい」といい、著者も賛成しているが、里人の中には天才的な沢歩きの達人だが、イワナは乱獲、山菜は根っこから引き抜く、という非常識な輩もいることだし、方法は難しい問題があるとしても、かぎられた山の人たちだけに入山は許されるべきではなかろうか。

本書への注文だが、それぞれの川の概念図があれば、より理解を深める助けとなろう。また本書を通読して、行政が百年来の河川法を大改訂してダム政策を見直す切っかけとなったのは長良川に対する世間の関心で、河口堰が運用を開始した一九九五年（平成七年）がターニング・ポイントになったことが理解できる。林野庁が知床の原生林間伐を強行して世論の猛反発を招いて、それから森林保護政策が大きく変わったときに似ている。河川法改訂は著者等の運動も力になったことは否定しないが、本当の原因は、政治家で建設族の大ボスだった人が亡くなったこと、その重石が取れて時が流れ、ダムの悪い面も知っていて、政治家にふりまわされることに批判的で、環境問題にも敏感な若手官僚が、役所の責任ある地位に就き始めたこと、高度成長経済が一段落したことが一番の大きい要因であろう。著者は河川法が改正され「間に合った」というが、一九九九年は歴史の流れが本来あるべき姿にようやくフィードバックを始めたばかりで、もう少し時が経たないと「間に合った」かどうか解らない、というのが評者の感想である。

（関塚　貞亨）

---

川喜田二郎　著

『川喜田二郎著作集』全十三巻、別巻一巻

中央公論社　一九九八年八月完結

各A5判　各平均五八〇ページ各九千五百円

まず全巻の書名と各内容の主なものを紹介しておく。

一巻『登山と探検』「ネパール王国探検記」「鳥葬の国」「私の登山と探検」

二巻『地域の生態史』「大興安嶺の自然史」「大山原野の居住様式」「文化生態史的地理学」「ヒマラヤの植生と作物帯」
三巻『野外科学の思想と方法』「野外科学の運動」「「知」の探検学」「フィールド・ワークから総合へ」
四巻『発想法の科学』「衆知をあつめる法」「KJ法の人間学」「KJ法と学際」
五巻『KJ法』「渾屯をして語らしめる」（KJ法の総てである—筆者注）
六巻『KJ法と未来学』「KJ法普及の問題点」「KJ法と文明の未来」「チームワーク」
七巻『組織開発論』「パーティ学」「創造性と組織開発」「参画社会をもとめて」
八巻『移動大学の実験』「大学と創造性教育」「移動大学の展開」「ひろばの創造」
九巻『国際技術協力と地球環境』「海外協力の哲学」「ヒマラヤ山村への技術協力」「地域開発と環境保全」「人と環境の共生」
十巻『ヒマラヤの文化生態学』「ヒマラヤとの触れあい」「マガール族とその隣人たち」「文化の垂直分布」「ヒマラヤの宗教」「ヒマラヤ・チベット・日本」
十一巻『チベット文明研究』「あるボティヤの村」「ネパールヒマラヤの生態学的観察」「チベットの文化生態学」「結婚・葬儀・信仰」「世界の中のチベット文明」
十二巻『アジア文明論』「素朴と文明」「ユーラシア諸文明の生態史」「日本文化探検」「グローバル化のなかの日本」
十三巻『創造と伝統』「可能性の探検—地球学の構想」「現代文明の提言」「創造と伝統」
別　巻「私の人生論」「年譜」「著作目録」「総索引」

以上十四冊が九八年までに発刊された川喜田二郎先生の著作の総てである（しかしまだ、今後増巻されるかも知れない）。

二十世紀後半からの諸学績の集大成でもあるが、ジャンル別に分けてこれらを味読するのであれば、初巻の「私の登山と探検」から始めたい。三重県の津市に生まれた少年が、京都の小学校・中学校での植物採集で山野を跋渉、いつの間にか地図読みのマスターとなった。それは山岳部員の必要条件であり、登山に対する危機に対応する超能力となって山登りの夢、人生の夢を広げていった。そのことから魅力的リーダー・今西錦司先輩に出逢ったことで幾多の探検に同道。登山家として探検家としての王道を歩んでいったことを別巻の「私の人生論」とあわせて読むことで分る。

そして本会のマナスル登山の科学班の一員として抜擢され、中尾佐助氏と共にアンナプルナ山群、マナスル山群を周回して「ネパール王国探検記」を、また自ら隊長として河口慧海のルートといわれるカンジロバヒマール、ムクトヒマールへの秘境ヒ

マラヤ探検で、『鳥葬の国』を記した。いずれもベストセラーとなり、これで川喜田二郎の名は、ネパール・ヒマラヤと後のチベットが切っても切れないものとなった。

二巻は地理学者としての研究・業績である。今西錦司と共にした「大興安嶺の自然史」、北部東亜大陸の地政学的一考察、土地生産力のカロリー計算による量的表現は人文地理学として極めて興味の深いところである。今日「環境」という言葉は極めて安易に用いられているが、ここでは西田幾多郎の所説「主体が環境を限定する、人間が環境を作り環境が人間を作る」により、今日的課題を今西理論も踏まえて考究している。以後ヒマラヤの植生にはじまる、人文地理学の入門書である。

十巻、十一巻、十二巻は、地理学者から文化人類学者としての氏のユニークな研究分野であり、人類学の岩田慶治氏は、「地理学の領域では、従来社会・文化の構造に踏みこんだ研究はなかったし、人類学の分野ではこれほど環境ないし、場の生態学的基盤に注目した研究はなかったであろう」と述べている。十一巻で〝チベット文明〟を確立させ、中国文明と明らかに異なることを立証した。文明論を素朴論に対比した氏の見解は興味深い。初期に大陸型探検から入った登山家として、島国日本しか知らない若者が、山岳極地の困難性の局所のみを捉えて、危機に瀕する登山行為をしていることからすると、大陸を探検ではなく旅をしたという氏の謙譲な姿勢は、来たるべき若者には警告の言葉であろう。

「可能性の探検」は、今日の地球学の構想を先取りしたものであって、あらゆる課題に対して未来を予測しつつ、問題を身近なものによせてくれている。例えば人口増について。宗教は、技術は、人間は、いかにして活かされるか、等々である。よって、身近な探検、旅、ワンダラーは放浪といえるのだろうか。心の行方からデータの取材の発想をした、氏独自の科学が始まった。そして、それは知識としてとどまることなく、技術（技法、スキル）として、人間同志を結びつけていくことになる。創造の世界としてのＫＪ法の体系と展開につながるのである。

三巻の科学の発想から六巻に至る著作体系は、書斎科学にとどまらず、野外科学の実践者として、行動科学の体系を「ＫＪ法」という名で遺したものである。カードでの創造的世界の緻密な行動科学体系が存在した。自ら問題を意識し、それを解決、課題を設定、その達成にあたる。もしくは、チーム力を高め、組織力を向上させる等、規定化された考えから踏みはずせない、創造性に乏しいこと等におけるそれからの発想を育てあげていく。今日の情報化社会の中に生きる人間個々の切実な願いを解決させる手法として完成されている。ＫＪ法の活用は文化的活動の一歩である発想法からはじまり、体系のすべてとその将来までをも表している。

七巻から九巻は、知の探検を、ＫＪ法を持った氏が〝文化技

術〟をもとにいかに実社会へ応用展開をして来たかの記録である。今日の成熟した企業社会のなかで、企業における人間の科学組織はいかに、息苦しく、活性度において問題、課題をかかえているか。人間チームのあり方、パーティの組み方にはじまり、参画社会の活性を生かすことに発して、中世からつながる知の殿堂としての大学の本質的機能を呼び戻し、社会の指導的立場はもとより、高等教育の場としての再考を促がした移動大学の実践記録である。また二十一世紀への最大課題である人口増に対しての格差是正は、国際技術協力である。それへの体験的モデルは二十世紀後半の貴重なマイルストーンとなろう。

川喜田二郎先生の著作はすべて平易で優しい。柔軟で繊細な文体はその専門テーマにかかわらずひきこまれる。これは優れて柔軟な先生の知能はもとより、すべてが自分の足で考え、自分の手で実践されて書かれたものだからである。

そして西田哲学を信奉しているだけに常に人に優しい心と愛情に満ち満ちている。「知ることは愛すること」「愛することとは知ること」と「知愛合一」の境地がどこまでもついてまわる。よってどのジャンルに捉われずに読んでいても、他の領域にわけ入ることができるであろう。少年時代からの親友でもある梅棹忠夫氏は「わたしは一緒に登山を楽しみ、長じて幾度かの探検行をともにした。彼は私が生涯を通じてめぐりあった人のなかで最も秀れている人物のひとりであると私は確信している」と述べている。

二十一世紀はもう目前である。幾多の課題をいかにのりこえるべきか、当著作集は一つ一つが提案の礎にもなるであろう。

（千葉　重美）

---

## 法政大学山岳部　編
## 『山想　第九号』

法政大学山岳部　一九九八年十一月刊
菊判　五二八ページ

「山想・九号」には一九八九年四月から九八年三月まで、九年間の活動が収められている。現役の学生たちと、OBの山想会々員らの記録がびっしりと書き込まれている。加えて、大学山岳部の横の繋がり強化を象徴しているともいえる七大学の山岳部指導者による座談会特集《山岳部の未来をみつめて》が組まれているのも貴重だ。

部報の発刊はひとつの節目を作る作業である。大学山岳部の部報として「山想」が果たしてきた役割は、長くて重い。「山想」という部報が一九二四年の創部以降、九冊を数えた重さは、そのまま法政大学の山岳部に所属した人々とOBの、八十年ち

かい活動の重さである。その歴史の一番新しいところに、次へのステップとなる力強い節目を作ったといえよう。グループや個人によるその活動報告を読み進むのは、興味深くも楽しく、その元気さが筆者にとっては羨ましい。

「山想・九号」の九年間、法政大学山岳部では遭難事故が一件もなかった。山想会の村井会長は序文の中で「今回の発刊で最も嬉しいことは掲載内容に遭難の報告が皆無でありまして、今後とも安全な登山を基本にした活動を」と述べているが、事故と遭難の繰り返しに無力感さえ覚える者にとっては〝無事故の秘密〟を読みとりたい思いである。

部報の中身は、言うまでもなく「部」そのものの消長と深くかかわっている。正確には「部とOBたち」の消長というべきか。学生部員やOBが元気であれば、記録、文章にもパワフルでユニークな魅力があふれる。

《特筆する国内山行》という括りでの松原尚之さんや荒井俊彦さんの報告はたいへん読みごたえがある。文章も読ませる。積雪期の剱岳や甲斐駒ヶ岳での登山がそれだが、松原さんらが、それと前後して海外の高峰へと展開するこの十年の足取りを辿るのも興味深い。山登りにおいて、記録を残す、書くということの大切さ。あらためて言うまでもないが、若い年代に欠けていると痛感することがおおいだけに、感性豊かで、記録としても優れている山行にふれるのは楽しい。

山岳部としての海外での活動記録がある。一九九五年の「チョー・オユー全員登頂」は法政単独の八〇〇〇㍍峰登頂。「ヨセミテの暑い夏」はチョー・オユーに先立つ異例のロッククライミング合宿。国内での積雪期合宿も六つが詳しく取り上げられている。

日本山岳会のマカルー（一九九五年）、K2（一九九六年）など八〇〇〇㍍峰登山隊への参加や、個人参加の幾つかの海外遠征にもかなりのページが割かれている。いずれの登山でも他大学や山岳会、個人との交流がある。仲間、パートナーとしてさまざまな人たちとザイルを結び、大学の枠を超えて繋がりが広がっている現状が読みとれる。単独のクラブでの繋がりだけでは、技術、経験の上でも、人数的にも限度がある現状への打開策でもあろう。

《特集　大学山岳部の未来をみつめて》の柱は七大学山岳部の指導者座談会である。成蹊、早稲田、学習院、東京農大、関大、明治、法政。七大学のコーチ、監督が集まって一九九八年二月に開かれた。

大学山岳部の現状を、大ざっぱなアンケートや数字で捉えるのでなく、顔を付き合わせて話し合い〝実態の本質〟に迫ろうという趣旨。「山想・九号」に内容を発表することを前提に行われた。山想会の五十嶋副会長は開会の挨拶の中で「次代の山岳部に大いなる期待を提言する材料を提供したいと考えた」と、

〝機関誌・山想〟が過去の記録集積だけにとらわれない意義を強調している。座談会に参加していない大学にはもちろん、大学山岳部の実態を知りたい人々に大いに参考になる企画である。

ある人は能弁に、ある人はやや控えめに、それぞれの山岳部の現状を語っている。元気のいい部とそうでない部の違いといってもよいか。部員数が少ない。どうすれば確保できるか。山行日数、合宿と個人山行の関係、現役とOBやコーチ会との関わり、遭難対策、社会人山岳会との比較などなど。共通の課題、悩みに事欠かない。座談会はページ数を多くとる割には内容に乏しいことがままあるが、この座談会の四〇ページは充実している。よく準備され、よく整理されている。

――目にとまった幾つかの発言。

（部員数について）……人数不足もそうなんだけど、学年が空いたりすることのほうが活動に支障をきたしてしまう。代がちゃんとつながって一年から四年までいるクラブであってほしい。

……途中でいきなり辞めちゃったりして、活動を計画的にやるのが難しくなる。年度目標というのが立てられないですね。

……上級生だけの部であれば、それなりに高いレベルの登山が出来るかもしれないけれど、一年生のレベルを引き上げるのがクラブの年間を通じての活動の意義であるような気がする。

（大学山岳部の良さ、将来）……学校山岳部というのは八十年とか百年の単位で受け継がれ、新陳代謝があって、なおかつ伝統が残っていくというのは紛れもない事実で、それは、これからも続くと思う。

……現状維持でいいとは思わないが、何か新しいことをしなければという考え方は、ちょっと危ないんじゃないか。今の状況を最低限として維持していく方向に努力する時期じゃないかなと保守的に思っている。

……長い期間山に入れる時間を確保できるというのは山の中でのいろんな変化を目のあたりに実感できるわけで、仕事をやりながら登山している人には経験できないこと。

……少ない人数を活かすような発想の転換は必要です。山岳部の草創期、自由にやっている時代にヒントがありそうな気がする。人数がいないと嘆くより原点に戻った方がいいんじゃないか。（いずれの発言も一部要約）。

以上、いくつか拾ってご紹介した。座談会の締めくくりに司会者の松原さんは「私は皆さんよりももっと楽観的に考える方なので、大学山岳部の特色とかアイデンティティをきちんと持ち、独創的な登山をしていけば、大学山岳部の将来に明るい希望がもてる。希望を持っている」と話している。精読をお奨めしたい。

さて、部報に欠かせない《年報》は、終わりの部分に昭和八年度から十二年度までの間で、なぜか欠落していた山行記録を〈追録〉として収載している。繋がりがおかしいと感じていた

部分につき、編集用として保存されていた当時の原稿と当該号（第五・六号併合）を照らし合わせた結果、欠落が分かったので掲載したという。記録の連続性を保つという意味で必要な作業であり、その時代の山行が生き返り記録として長く残るという意味で、伝統ある「山想」ならではの行き届いた措置だと思う。

（成川　隆顕）

---

日本山岳会東海支部　編

## 『東海山岳　第八号』

日本山岳会東海支部　一九九九年六月刊
A5判　四二三ページ　三千円

本書は一九九六年に発行された第七号以後の三年間に行われた優れた海外登山の記録や研究、論考、さらに国内登攀、紀行、山の絵画など全四百二十三ページに及ぶ報告である。

一九六四年十月に第一号が発行された東海山岳の歴史を述べた序の後には、K2やウルタルⅡ峰、さらに、環太平洋の山々の鮮やかなカラー写真が掲載され、まず外国の登山（隊）の紹介から始まる。

第一の環太平洋一周環境調査登山は一九九五年六月、カムチャツカ半島最高峰クリェチュフスカヤ（四七五〇メートル）の登山からスタートし、一九九七年、インドネシア、ロンボク島のリンジャニ（三七二六メートル）の登山まで、太平洋沿岸の代表的な山々を三十座以上登り、環境調査を行ったものである。そのユニークな発想と、二年間に及ぶ壮大な活動が、篠崎純一氏の淡々とした文体で報告されている。

さらに、登山を行いながらサンプリングした山頂の雪や地元民の爪を基に、中井信之氏が地球環境の汚染度について「酸性雨（雪）調査と爪の同位体分析の結果が出そろい、それらの図表を見比べた時、二つの調査結果があまりにも一致していることに驚き感動した」と、専門的な立場から分析しているが、その驚きとは何だったのか、後半の研究、論考でのレポートを含め興味深い報告となっている。

第二は、難攻不落を誇ってきたウルタルⅡ峰初登頂の記録だ。初登頂した松岡清司氏の若者らしい、端的で、飾らない表現が非常なリアリティを生み、迫力ある報告となっている。特に、連続八夜のキャンプ、ビバークをしながらのアタックは読む者を興奮させて行く。山頂からの下りは厳しいルートに加え食料も底を突き、悪戦苦闘の連続となったが無事下山した。しかし、生還した喜びも束の間、隊長でパートナーの山崎彰人氏が原因不明の腹痛で死亡してしまう。最後に痛ましい悲劇と遭遇したが、二人の若い登山家が自らの力だけで勇猛果敢にアルパイン・

スタイルで挑んだ初登頂の記録として一読に値する。

次は、西壁新ルートからのK2登頂の記録が隊長の田辺治氏によって報告されている。この登山は支部長の尾上昇氏を総隊長に、東海支部が総力を挙げて挑んだ登山である。形式は十名のシェルパを使った極地法だが、バリエーション・ルートから隊員七名、シェルパ四名、計十一名も山頂に立ち、事故もなく確実に結果を出している。東海支部の実力の一端を示した記録である。

海外登山の最後は、ザンスカールにある六五四六㍍のクーラ峰初登頂の模様が総隊長の鈴木常夫氏によって報告されている。

一九八八年以来、東海支部は中高年の高所登山を意欲的に実行してきているが、この登山は支部主催第五次中高年高所登山として立案され、三十九歳から六十四歳までの十二名に、高所ポーター四名を加えた隊構成になっている。一般的には六十歳の体力は二十歳の人の半分に低下する。老化は筋肉のパワー、持久力、反射神経、さらに、心肺機能の低下にまで及び、高所登山を難しくする。だが、登山隊はこうした肉体的な減退を客観的に検査し、無理せず、慎重にタクティクスを組んで行く。

本当の夢は大人になってからだ、という人もいるが、見果てぬ地域の未踏の山に夢を抱き、駆り立てられる中高年登山隊の爽やかな記録である。これからヒマラヤを目指す中高年登山者には大いに参考となろう。

海外の登山（個人）の項では、中山秀樹氏他による西部カラコルムに屹立するディランやインド、ラダク地方東南部にあるトウジェ峰の記録、日本山岳会青年部カンチェンジュンガ登山隊に参加した田辺治氏の手記、そして、五十歳から八〇〇〇㍍峰を六座登頂した石川富康氏のガッシャーブルムⅡ峰登頂の手記などが報告されている。

研究、論考には「環太平洋一周登山の環境調査報告」、「中高年登山の諸問題」、「山登りのためのトレーニング」等七項目あるが、その中の一つ、桑原富彦氏の「地図を楽しむ」には、三角点とは何か、地図の記号や符号にはどんな意味があるのか、など基本的なことから、地図の作り方までが丁寧に解説されている。登山者においては、一度は目を通しておかねばなるまい。

その次は、国内登攀、紀行、絵画、追悼となる。内容は厳冬期の剱岳八ッ峰の登攀、ヨーロッパ・アルプスの旅、オートルート見聞録等の記録に続き、亡くなられた山崎彰人氏、徳島和男氏、松岡清司氏、梅村洋一氏、以上四氏への追悼の言葉が寄せられている。そして、最後は東海支部年表（一九九六年四月～一九九八年三月）で終わっている。

本書に掲載した記録は殆ど自発的に寄稿されたものというが、どの記録も東海岳人の熱き開拓精神に富んだ報告となっている。

（中村　進）

Peter Steel

## ERIC SHIPTON Everest and Beyond

Constable, London, 1998
240×155. 290pp. £19

エリック・シプトン（1907～1977）は疑いなく、一九五三年のヒラリー、テンジンによるエベレスト初登頂の基礎を築いた最大の功績者であり、内外からシプトンが登頂隊の隊長となると信じられていた。事実シプトンは、一度は隊長に指名されながら、数週間後に解任され、ジョン・ハントに登頂隊長としての名声を取って代わられた。この悲劇の主人公の死後二十年にして、初めて発行された伝記である。シプトンには自叙伝（日本語訳『未踏の山河』）があるが、この伝記は、自叙伝に書かれなかったことをはじめ、従来知られていなかった点に光を当て、特に今まで謎とされていた隊長解任の詳しい事情や彼の女性との交流関係などを多くの人々とのインタービューや提供を受けたシプトンの手紙などに基づいて書いている。

シプトンは天性の山岳探検家であり、地図の空白を求めて、カラコラムやパタゴニアを踏査し、"Blank on the Map"（日本語訳『地図の空白部』）の著書があるが、この伝記は正に〝シプトンの空白〟に関する伝記である。シプトン隊長の解任の原因は、翌年のエベレスト登攀隊員の高度馴化などを目的とした一九五二年のチョー・ユー遠征隊の内紛にあった。隊長であるシプトンは、すでに中国共産党の支配下となっていたチベットの国境を越えて、登頂を求めることは、カシュガルの総領事としての経験から〝もし外交問題となって、ネパール政府の翌年のエベレスト登攀の許可が取り消される〟ことを心配し、本来の目的ではないチョー・ユー登頂を考えなかった。これに対して、数人の隊員は、あくまでもチョー・ユー登頂を目指し、チベット側に登路を求めることを主張し、結局シプトンはチベット側の氷河に天幕は出さないが、尾根に登路をとることに妥協したが、あまり成果は得られなかった。シプトン、エバンス、ヒラリー、ローの四人が、足を延ばして、東ネパールのバルン氷河を踏査している間に、先に帰国した隊員たちは、ヒマラヤ委員会に手紙を送り、シプトンは優柔不断で、ぐずぐずしていて、リーダーシップに疑問があることを表明した。これが解任の発端である。本書は、この経過と、ヒマラヤ委員会、シプトン、ハントの対応を、日を追って述べているが、この問題は今日でも課題であるかも知れない。

伝記の著者ピーター・スチールは、英国生まれの医師で、現在はカナダに移住している。一九七一年の国際エベレスト登山隊に医師として参加し、"Doctor on Everest"（日本語訳『エ

ベレスト南壁　一九七一国際隊の悲劇』丹部節雄訳）、“Medical care for Mountain Climbers”、“Two and Two Halves to Bhutan”（シプトン序文）などの著書がある。シプトンとの係わりは、少年時代、シプトンが校長をしていた登山学校のコースに参加し、前記の国際エベレスト登山隊に参加を求められたときは、シプトンに相談している。またブータン政府より医療のため招待されたとき、王立地学協会の図書室にたびたび通い、シプトンに何回も会って親しくなった。

シプトンの死の四年後に、伝記を書くため三十人の人に面接したが、個人的理由もあり筆を折った。そしてシプトンの伝記はもう出ないとの噂もあったが、本書の刊行は、シプトンのファンにとって、喜ばしいことであり、また驚かせたことである。死後二十年経って、著者は再び取り上げ、新たに三十人の人たちと面接し、シプトンと親しかった人たちとの往復書簡の提供を受けたが、このなかにはシプトンと親しかった女性との手紙も含まれている。

シプトンはセイロン（現在のスリランカ）の紅茶農園主を両親として生まれたが、三歳のときに父を失った。母親は、シプトンの姉と共に、セイロンや南インドを回り、これによりシプトンは自然に対する親しみを感じるようになった。少年時代にウィンパーの『赤道大アンデス旅行記』を読み、登山への関心を深め、十七歳のころから、アルプスの山々にガイドを連れて登り、二十歳を過ぎて、ケニヤの農園に就職した。当時ケニヤは英国の植民地で、ヨーロッパ人にとって、憧れの地であった。農園から見えるケニヤ峰（バティアン）のシプトンの登山についての現地新聞記事が縁となって、ほとんど登山の経験のなかった十歳年長の未知のティルマンから手紙がきて、一緒に登山したいとの希望があった。シプトンはティルマンとキリマンジャロのキボ山（五八九五㍍）などに登り、ティルマンが、登山の経験はないが、天性があることを見ぬき以後長く登山の盟友となったのである。さらにティルマンと共にケニヤ山の双峰バティアンとネリオンを縦走し、これをアルパイン・ジャーナル、ジオグラフィカル・ジャーナルに投稿したところ、スマイスの目に止まり、スマイスのカメット遠征の誘いを受け、シプトンはスマイスと共にカメット（七七五六㍍）の登頂に成功した。これは七五〇〇㍍を超えるヒマラヤの初登頂であった。その後四回の英国のエベレスト遠征隊に参加し、二回はスマイスと共に、最高キャンプからの頂上攻撃を行っている。また一九三五年には翌年のエベレスト登頂隊のための偵察隊の隊長となり、リントレンとプモリのコルから、ウエスタン・クウムを見下し、南面が不可能とは見えないと報告している。戦後ネパール政府が鎖国を解くや、隊長として一九五一年エベレスト南面偵察のためクーンブ氷河に入り、サウスコルへの登路を開拓し、このルートにより、一九五三年のハント隊は登頂に成功した。一九五一

年の隊にシプトンはニュージーランド山岳会からの要請により、ヒラリー等の隊員としての参加を一度断った後、再考して受け入れ、その後ヒラリーをエベレスト登攀隊員として強く推薦した。ハントは隊長任命後、ヒラリーを隊員候補より除いていたが、エバンス、グレゴリーの推薦により隊員に加えられた。

シプトンは、ハント隊のエベレスト登頂後は、八〇〇〇メートル級の未踏峰が数多くあったに拘わらず、それらに目もくれず、家庭の事情もあったが、雌伏数年、一回乞われて大学探検部の隊長としてカラコラムの踏査に赴いた他は、毎年地図の空白の残されたパタゴニアとフェゴ島の未踏の地域の探検と登山を六回にわたって行っている。また彼は戦時中、戦後の二回中国新疆ウイグル地区のカシュガルの総領事を勤め、戦後雲南省昆明の領事としても赴任している。カシュガル滞在中は、ティルマンを呼び寄せ、いくつかの山々の試登を行った。一九六五年にはアルパインクラブの会長もしている。

本書にはスイスの一九五二年のエベレスト隊に、英国がシプトンを英国側の隊長として合同エベレスト登攀隊の申し入れたが断られた経過や、フランス山岳会からの合同登山の申し入れを断った経緯などについても触れている。

シプトンは多数の著書があり、ほとんどは深田久彌氏や吉沢一郎氏、諏訪多栄蔵氏らにより訳され、日本山岳会の図書室にも所蔵されている。自伝『未踏の山河』（大賀二郎、倉知敬訳）をはじめ一読をおすすめしたい。

それにつけてもシプトンの伝記を読んで改めて、大英帝国の植民地によって、多数の英国登山家が育成されたが、戦後シプトンの育ったセイロン、インド、ケニヤは独立国となっていることも、思いをはせさせられる。

本書は私に改めて、シプトンの人生観、登山観を通じて、私の人生をふり返る機会となった。尚、本書は一九九八年度のボードマン・タスカー賞を受賞したことを書き添えたい。

（大島　輝夫）

---

M. Tenderini, M. Shandrick

## THE DUKE OF THE ABRUZZI

### An Explorer's Life

The Mountaineers, Seattle, 1997

235×155. 216 pp. $24.95

数多くの名クライマーを生んできたイタリアの、もう一人の英雄の生涯をたどった貴重な書である。

ヒマラヤに関心を持つ者で、K2に「アブルッチ稜」があることを知らない人はいないだろう。アブルッチとは、イタリア

の登山、探検家の名だ。

登攀史でのアブルッチ公の役割として知られているのは、一九〇九年、自ら隊長となってK2に大規模の登山隊を組織、平均斜度四五度の南東稜六二五〇㍍まで登ったことである。公にちなんで、この稜線は「アブルッチ稜」と呼ばれるようになった。しかし、アブルッチ公がどんな登山家だったのか、肝心なことはこれまで日本ではあまり知られていなかったように思う。母国イタリアでは、いくつもの本が出され、一部は英語に訳されてもいるが、本書のような評伝ははじめてであろう。

アブルッチ公とは、正確にはルイジ・アメデオ・ディ・サヴォアーアオスタ。イタリア国王ヴィットリア・エマヌエーレⅡ世の孫の通称だ。もっぱらK2への挑戦で知られているが、アフリカ、北極など地球の秘境に足跡を残した探検家であり、第一次世界大戦ではイタリア海軍のアドリア海同盟艦隊の司令官をつとめた軍人であり、平和な時には、スポーツカーやヨットを乗りこなす行動者であった。

この本はふたりの作者によって書かれている。互いに会ったことのない、イタリアに住む女性作家であり、ジャーナリスト、登山家であるミレーラ・テンデリーニと、カナダのバンクーバーに住むアウトドアライターのマイケル・シャンドリックが各章ごとに自分の持分を書き、現代の魔法の伝達法、Eメールとファクシミリで事実や文体の食い違いを調整し、それぞれの章の最終原稿を作り上げた。

前書きを、イタリアの著名なクライマーであり、探検家であるワルテル・ボナッティが引き受けている。ボナッティは、一九五四年、K2に初登頂したイタリア隊のメンバーであり、登攀の最前線を退いてからは、世界各地を探検ルポして歩いたライターでもある（本巻別掲「ワルテル・ボナッティ・インタビュー」参照）。

ボナッティはこの中で、「彼こそ私が常に自分の目標のためにインスピレーションを引き出してきた、過去最も偉大な探検家である」とし、「この書は、凍りついた北極地域やミステリアスな川の偉大な探検者の功績を詳しく伝えている。しかし、何よりも、本書の各ページからは自分の原則に厳しく、その行動に裏打ちされ、自然の壮大さに鼓舞された純粋な理想主義者の肖像が、浮かび上がってくる」と書いた。そして「しかしながら、その優れた資質も、評価の仕方を知らない並みの人間たちにはおとしめられてしまうことがよくある」と続ける。アブルッチ公の人生がボナッティの心をとらえたひとつの理由は、その生涯が必ずしも正当に評価されなかったことへの独特の同情があるからだろう。フンザ人ポーターと二人での八〇〇〇㍍でのビバークを批判されたK2登山でのボナッティの苦い体験を重ねあわせるかのような叙述である。

ルイジ・アメデオ・ディ・サヴォアーアオスタは、一八七三

年一月二十九日、スペインのマドリードで、スペインの王であったアメデオの三男として生まれた。複雑な状況下での探検家の誕生だった。一八六八年ブルボン家の女王、イザベラ二世がスペインに共和制をめざす「栄光の革命」で退位したあと、ヨーロッパの王室の指導者たちは妥協としてスペインの新たな王に外国の皇太子を即位させることを決め、イタリア統一の英雄であったイタリア王、アメデオの父、ヴィットリオ・エマニュエル二世は一八七一年、息子をスペインに送ったのである。

異邦人の血をスペイン人は歓迎しなかった。二度もアメデオは暗殺の危機にさらされ、一八七三年二月十一日、二年すわった王座から退位、ひそかにマドリードを離れ、ポルトガル王となっていたアメデオの姉夫婦のいるリスボンに脱出した。ルイジ誕生後わずか十四日のことだった。

やがて一家はモンブランと、山の町クールメイユールに近いサヴォイ家の故郷、タリンに落ち着いたが、ルイジが三歳半に達したとき、母が病死した。三十一歳のアメデオは幼い三人の息子たちを次々に海軍の幼年学校に入れ、教育の場とした。ルイジ自身は六歳半で王室海軍アカデミーに入っている。

サヴォイ家の人々は山歩きを好んだが、中でもエマニュエル二世の兄弟の、ジェノア公の美しい皇女、マルガリータ・ディ・サヴォイアはちょっとした探検家だった。彼女は病床にあったルイジの母から三人の息子のことを託され、彼女の死後、親身になって子供たちの世話をみた。とりわけ幼いルイジにとって大きかったのは、山登りの楽しみを教わったことだった。

ルイジをはじめて本格的な山に連れて行ったのは、気象学の専門家としても名高い修道士のフランチェスコ・デンザで、彼は夏の間、ルイジと兄たちに自然の中で気象学、地理学、地質学を教え、その中からルイジは山登りの楽しさと厳しさを学んでいった。

当時イタリアにはデンザのように登山を通じて若者たちを育てようとする動きが高まっていた。エマニュエル二世の蔵相をつとめ、地質学者ですぐれた登山家でもあったクィンチーノ・セッラが、その動きの中核にいた。セッラは一八六三年、イタリア山岳会を創立しており、おいのヴィットリオ・セッラは、のちにアブルッチ公の数々の探検にカメラマンとして同行し、コンコルディアからのK2の威容など貴重な写真を後世に残した。

アブルッチ公は、海軍の指揮官でもあった。彼の生涯を理解するためには、山々だけでなく、海との関わりを知る必要があることを本書は教えてくれる。彼は生涯何度も長い航海をした。その最初が一八八九年、木造帆船の「アメリゴ・ベスプッチ号」での航海で、一八九〇年、父アメデオが死んだことを船上で知らされた。ルイジに「アブルッチ公」の称号が授けられるのは、この直後で、彼はまだ十七歳だった。

山に関していえば、ナンガ・パルバットで死んだあのマンメリーとの出会いも大きかった。九二年には西部アルプスのプンタ・レバンナに登ったルイジは、九四年にはマンメリーと共にマッターホルンのツムット稜の登攀をなしとげ、英国山岳会のメンバーとなっている。

九五年、「クリストファー・コロンブス号」で世界一周したアブルッチ公は、九七年には、彼が組織した最初の探検、セント・エライアス山（五四八九㍍）の初登頂に成功し、一気に登山家、探検家として名を世界に知られるようになった。

折から北極点一番乗り競争が続いていた。アブルッチ公は、九九年には北極点探検隊を組織し、四月二十五日、ウンベルト・カグニらが北緯八六度三四分に到達、ノルウェーのナンセンの到達点を三七㌔㍍越える新記録を作った。

一九〇九年のK2への挑戦の前にはアフリカ探検を開始し、一九〇六年「月の山」ルエンゾリ登頂を果たしている。

この頃知り合った美しいアメリカ女性、カトリーヌ・エルキンとの恋は、当時さまざまなメディアにゴシップとして書きたてられたらしい。いろいろな事情で二人はついに結婚することはなかったが、「侯爵とアメリカのプリンセス」の一章は、アブルッチ公の人間味を知るために興味深い。晩年を過ごしたソマリランドの家には現地妻がいた、とされるが、アブルッチ公は終生独身だった。

かわりに、アブルッチ公の探検、登山の周辺には常に優秀な仲間たちがいた。とりわけ医師で記録者として知られるフィリップ・デ・フィリッピ、前述のカメラマン、ヴィットリオ・セッラ、北極点に向かったウンベルト・カグニらは、彼の人生を語る時、忘れてはならない存在である。

アブルッチ公は、一九三三年三月十八日、ソマリランドの我が家で死んだ。六十歳だった。

王室出身の探検家として数奇な運命を歩んだアブルッチ公の生涯を追ったこの評伝、できれば日本語訳して多くの人々に読んでもらいたい、と思う。

（江本　嘉伸）

---

George B. Schaller

## Wildlife of the Tibetan Steppe

The University of Chicago Press, 1998
235×155. 374pp. $55

今から十八年前の「山岳」のこの欄でG・B・シャラーの〝Stones of Silence〟(1980) という本を紹介したことがある。その本を書いた後、一九八〇年から八五年まで中国四川省の山中でジャイアントパンダの調査と保護活動を行った。そしてこ

の時の話を纏めた二冊の本 "The giant pandas of Wolong" (1985) と "The Last Panda" (1993) は、それぞれ邦訳されているので読まれた方も多いと思う。

一九八〇年から中国政府は政策を転換して対外開放を進め、長らく鎖されていた少数民族の多い内奥部や辺境の山岳地帯の門戸を開いた。これを機に私たち登山者は各山域のめぼしい山の登山申請をし、およそ十年間で登り尽くしてしまった感がある。中国内奥に憧れを抱いていたのは何も登山者ばかりではなく、各分野の研究者たちも空白のまま残されていた研究領域に多数の学術調査隊を送り込んだ。ただし調査研究プロジェクトには登山隊以上の多大な資金が必要で、中国側との合同調査の形をとりながら息の長い関係を保つ必要がある。短期や一回きりの名ばかりの調査では広大無辺の未知の解明はできない。

シャラーは中国での調査が可能になる前の、ヒマラヤやカラコラムやラダックで野生ヒツジやユキヒョウの調査を行っている時点で、その地域の延長上にあるチベットでの調査を視野に入れていた。ジャイアントパンダの定着調査を続ける一方で、一九八四年と八五年に青海省のアムネマチン山麓や秦嶺山脈、新疆ウイグル自治区のタシクルガン地域などで二〜三カ月の移動調査を始めていた。今回の本の主対象地域はチベット自治区の北西部のチャンタン高原であるが、この地域とその周辺部をランドクルーザー二台と大型トラック一台で縦横に走り回り、季節を変え場所を変えて十年間で十七回に及ぶ調査を繰り返している。さらにモンゴルのゴビ地帯、ステップ地帯とアルタイの山中において、チャンタンとの対応種の比較のために六回の調査を行っている。本書はこの一連の調査の中からチャンタンに絞った報告である。なお、本書発刊の前年には変型判の美しい写真を中心に据えた概説書 "Tibet's Hidden Wilderness" が出版されている。

チベットは広大な土地であるのに、政治・宗教中心のラサや幹線道路の通る南東チベットで話が止まってしまうことが多い。地理的・生態環境的に区分すれば、「森林チベット」「草原チベット」「荒漠チベット」の三つに大きく分けられる。この中の荒漠チベット＝チャンタン（北の平原）については、かつて「植物被覆は貧困であり、殆ど裸岩と岩屑の連続であり、鹹性地域の鹽類は白色を以て覆ひ、貧困な遊牧と狩猟が営まれ非生産的無居住地域に近い状態である」と表現された（河出書房・世界地理・第五巻支那Ⅲ・一九四一年）。面積的にはチベット自治区の三分の一を占め、標高も平均で四五〇〇メートルに達し、縁辺部を除いて無人の大地である。この大地を地理的に解明したのはロボロフスキーやヘディンであり、デージーやローリングやリトルデールであるが、地図化されたことで人間たちにとっての意義が何か変ったわけではない。

動物学者であるシャラーの興味は、人間の影響の及んでいな

い、現在の地球上では稀有な大地チャンタンを、自然保護区として確保すべきだということにある。シャラー以前にチャンタンの自然をテーマとして研究調査した人は誰もいない。探検家たちの断片的なナチュラルヒストリーに関する記述が残されているだけである。

チャンタンの大型哺乳動物はチルー（チベッタン・アンテロープ）、チベッタン・ガゼル、チベッタン・アルガリ、ブルーシープ（バーラル）、野生ヤク、キャン（野生ロバ）の六種で、彼らがこの大地の主役である。いずれも草食有蹄獣で、東アフリカのサバンナの草食動物相にも対応する。中型のレイヨウ類であるチルーは季節移動をし、広大なチャンタン高原の環境を広く使っている。

チャンタンの生態条件の最も基本的な調査項目は、有蹄獣が食べる植物の生態と生理である。すでに中国の植物学者によってチベットの植生概要は調べられているが（『西蔵植物志』五巻、『西蔵植被』（1986））、分類と分布域が知られているにすぎない。チャンタンは植物生態区分では「荒漠地区」に分類され、行政的区分を越えて、カラコラムの北側からコンロン山脈のチベット境界域と同類である。この乾燥・寒冷地域には高さが十センチにも満たない小半灌木と、多年生草本、一年生草本しかなく、水分条件の恵まれた場所以外はそれらが疎らに生えるだけであり、種数も全部で二十種を越えない。シャラーはこれらを、①イネ科草本、②非イネ科草本、③小半灌木の三タイプに分けて六種の草食獣の食性傾向を分析した。すなわち、彼らは好む植物のある所で生活を営んでおり、山上から谷間への移動や季節的移動、雌雄の行動の違いなどになって現れる。最も食性が偏っているのはキャンで、イネ科の *Stipa* 属の草ばかりを食べる。

草食獣を食べる捕食動物にはオオカミ、キツネ、チベットヒグマ、リンクス、ユキヒョウなどがいる。彼らの糞などから食性を調べてみると有蹄獣の割合は少なく、数の多いマーモットやナキウサギを主に食べていた。ただしマーモットは冬眠するので冬はナキウサギの割合が増える。有蹄獣の最大の捕食者であるオオカミは、チルーの季節移動に合せて移動をする。オオカミ *Canis lupus* は広大なチャンタンに一種のみが生息するのに対し、ナキウサギは九種が知られている。このことは、ナキウサギが種分化を繰り返すほどチャンタンに古い時代から棲みついていたことを示すであろうし、オオカミは新しい侵入者であることを示している。

チャンタンの野生動物についての知識を蓄積しているのはチベット人遊牧民である。彼らの生活域は「草原チベット」であるが、かなりひんぱんに狩猟も行っている。すでに生活域の周辺に獲物は少なくなり、長期の狩猟の旅にも出掛ける。このチベット遊牧民についてもほとんど我々は知識を持っていないが、一九八七年末から十六カ月にわたって彼らの生活に密着して遊

牧民の生活史を綴った、M・ゴールドスタインとC・ビオールの“Nomads of Western Tibet”(1990)は興味深い。シャラーはこの本を援用しながら、遊牧民による金になる狩猟の問題を取り上げている。同様に野生動物にとっての脅威は、家畜の増加である。限られた食草を場所を変え、種類を変え、季節を変えて分けあってきたチャンタンでは、辺境地域の開発と経済的発展の象徴としての家畜の増加が、生活域の縮小と個体数の減少をもたらすことになり共存は難しい。

チャンタンの保護区化のために、シャラーは終章で幾つかの具体的提言をしている。そこを非生産的無居住地と捉えた段階では、地球上にこの場所にしかない生態系の存在する事が見落とされていた。チルーやチベッタン・ガゼルはもとより、野生ヤクやキャンはもはやチャンタン周辺にしか棲まず、数をどんどん減らしている。不毛の土地を開発して人間が利用するのではなく、自然地域をそのまま未来永劫に残す事が今や必要である。そのためには中央政府の強力な法的規制と地方機関の管理体制作りを急がねばならず、世界自然遺産に指定するなど国際的なバックアップ体制を整える必要もある。「チャンタン保護区」の大きさは三三万四〇〇〇平方㌔(ドイツ一国の面積に相当)で、グリーンランドのアイスキャップの保護区の大きさに次ぐ。中国政府は一九九二年十一月に「チャンタン保護区」の設定を発表している。

(児玉　茂)

---

## Harish Kapadia
## Meeting the Mountains

Indus Pubilshing, New Delhi, 1998
223×148. 398pp. Rp.500

昨年の一月、日本山岳会のルームを訪問されたハリシュ・カパディア氏に私は初めてお目にかかった。氏はいま非常に脂ののった時代にいるのかもしれない。何しろこの八年の内にインドヒマラヤの本を四冊も出している。長年の蓄積がこれらの本となっているわけだが、一九六三年以来三十五年間のヒマラヤでの登山、トレッキング、踏査は五十六回、延べ日数一七〇〇日にも及んでいるそうである。

一九八九年のヒマラヤンクラブ六十周年に合わせて作られた“Exploring the Hidden Himalaya”(1990)は、自身で撮影した鮮明な写真を配してインドヒマラヤの全ての山域の主な山を紹介した(『山岳』第八十五年、図書紹介)。一九九三年に出版された“High Himalaya Unknown Valleys”は、いうなれば前著の具体的な登山・踏査記録集でヒマラヤン・ジャーナルに載せた文も含んでいる(『山』六三六にこの二冊の本の第二版、

第三版の紹介)。一九九六年には“Spiti: Adventures in the Trans-Himalaya”を出した。緑濃いクマオンの谷と並んで乾燥したスピティの谷の景観に惹かれるという(『山』六一七に紹介)。

今度の本は、前著に続いてクマオン、ガルワール、シッキム、ネパール、キンナウル、クルとスピティ、ラダックと東カラコラムの単元に分けられ彼自身のその後の登山やトレッキングや踏査の記録を載せていて、いずれの章も手短に纏められている。また各単元の前には要約的な全体説明が今回もあって編集人らしいところだ。ここでは記録よりも同行した友人、C・ボニントン、S・ヴェナブルズらとインド人の親しい仲間のことや、いつも同行を依頼しているクマオンの村人との交流などに興味をひかれる。年齢の関係もあってか、頂上よりも鞍部に達することに関心が向き登り方にも変化があるようだ。

“High Himalaya Unknown Valleys”の序章に自伝風の紹介が載せられていて彼の人となりを知ることができるが、今度の本にはヒマラヤンクラブ(HC)とヒマラヤン・ジャーナル(HJ)との係わりのことが章を改めて書かれている。

私も何冊かインド人の登山記/報告書を持っているが、一九六〇年代、七〇年代のインド登山というのは、ヒマラヤ地域に展開する国境警備隊(ITBP)や軍に属する登山者が山岳戦の訓練を兼ねて登山をしているという印象がどうしても強い。多少の融通もあるとはいえ、インナーラインという入域制限区域が設定されていて、外国人が登山する場合はIMFに申請しなければならないなど、団体ならばいざ知らず個人ベースの登山を望む者には今でもやっかいな準備を強いられる。

HCは一九二八年にインドに在住するイギリス人の山好きが作った、登山やスポーツや研究のためのクラブだが、運営に当ったイギリス人の去った一九五九年以後は、機関誌のHJも含めて存亡の危機が何度か訪れ停滞した。だがこの時期こそはヒマラヤ登山の黄金期であり、インド人のヒマラヤ登山も活発に行われていた。この停滞期にHCの運営に携わったのはイギリス留学経験者だが、ヒマラヤ登山の実践者といえばほとんどが軍人だった。カパディアが請われてHJの編集者に加わり、ヒマラヤ登山により深くかかわったのは一九七八年からだが、彼は珍しくも全く個人ベースのヒマラヤ登山者だった。

戦前のHJとは違って、目新しい登山記録はHJには載らなくなり、インドヒマラヤ中心のローカルな雑誌の地位に甘んじていた。しかしこの十数年について見ると、戦前に踏査されずに残された地域が主にカパディアによって踏査、解明されHJに発表されて、登り尽くされた感のあるヒマラヤに新しいフィールドが開けたように思えた。そして時代もまた大遠征隊から、ごく小人数のアルパインスタイルの登山へと移り、インドヒマラヤの七〇〇〇メートル峰、六〇〇〇メートル峰が改めて注目されるように

なってきた。一九七〇年代半ばにJ・タスカー、P・ボードマンは正にガルワールで新しい時代を拓く登山を行ったし、一九八〇年代には次世代に属するS・ヴェナブルズやD・レンショーという若者が、入域しやすくなったキシトワールで注目すべき登山を行い、そして一九八五年にヴェナブルズはV・サウンダースとともにカパディアの仲間たちと組んで解禁されたインド・カラコラムのリモ峰に果敢に挑んだ。

カパディアが欧米人並のメンタリティーを持った人だということもあるが、気の合った仲間と小回りの利く登山を常に標榜していたことが、アルパインスタイルの登山者とも相通じる所があったのだろう。一九九二年にも長らく閉ざされていたクマオンのパンチチュリ峰にボニントン、ヴェナブルズ、レンショー、サウンダースらスーパーアルピニズムの旗手たちとの登山を楽しみ（この登山ではヴェナブルズは滑落事故を起こしたが、カパディアの活躍で救出された）、いつの間にかインドヒマラヤが現代登山の中心地として戻ってきた。

誰に対しても情報を提供し、協力を惜しまない姿勢は多くの知己を生むことになる。またHJ編集者として各国の登山者との交流も浅からぬものがある。そういった人々との交流を記したLife is Meetingという終章があり、HAJの稲田さん、尾形さんとの出会いも紹介されている。巻末に各章の登山サマリーと文献、インドヒマラヤ登山のレギュレーションやインナーラインの状況、インドヒマラヤの地域別状況、インドヒマラヤの峰一〇一の解説、そして前著にも付いている自身のヒマラヤ登山・トレッキング・踏査のリストと索引が載せてある。

現在のヒマラヤの登山状況を知り、考える上で参考になる一冊である。

（児玉　茂）

---

陳　佩周　著

## 『台灣山岳傳奇』

聯経出版　民国八十五年（一九九六年）刊
A5判　百八十ページ　台湾二百元

編集者から「これから台湾の山に登ろうかという人に格好な読物と思うので是非紹介を」と首題の本が送られて来た。

もともと図書紹介など私の柄ではないが、中国語の勉強にもなろうかと引き受けた次第、多少の誤訳、思い違いはご容赦を願いたい。

北から南まで、季節の移り変りと共に、バラエティーに富んだ山行のできる日本に比べて、三〇〇〇m峰が二百あるとはいっても所詮九州程の南の島、いざ本に書くとなると皆似たり寄ったりの内容、体裁になってしまう。私が台湾にいた八五～八六

年代は、周知の登山熱が最高潮した時期で、山の本も数多く出版されたが、どれも大同小異のガイド本で、そう言っては失礼だが、いずれ夜店の特価本になるような本が多かった。その中で、良書と思えたのは『台湾百岳全集』で、五百ページの大判・美本であるが、その記録の正確さと、豊富な地図・写真による解説は「居ながらにして山に在る」という感じで、正にガイド本の典範とも言える本である。現在すでに絶版であるが、この一冊だけはリュックの底に入れ持ち帰った。その後の台湾山岳書の動向については不勉強で全く知るところはないが、仄聞したところでは、山の写真、花、鳥と副次的な趣味本が結構出版されていて、量的な情報は多くなっているという。

前置きはこのくらいにして、先ずこの本の作者である陳女史についてちょっと紹介しておこう。

彼女は台湾の有力紙『联合報』の記者を七年勤め、現在はフリーの記者。著作に『台湾禽獣列伝』『空軍中隊物語』『マヤ・南米紀行』他がある。数年前、联合報ではその郷土版に『台湾の高山』なる連載コラムがあり、評判のよい記事であったのに目をつけた彼女が、これに肉付けをしたのが本書という訳である。おそらく従前のコラム記事にも彼女が関わっていたのであろう。面白いことに彼女の登山歴は唯一度、本書のため取材に玉山の測候所を訪ねたのが初めてで、登頂の感想は「二度と山登りはごめん」だそうである。

本書は五章から成っている。

一、物語風台湾登山史（六十四ページ）
イ、日本統治時代
ロ、終戦～現在・台湾人の登山

二、名山点描（四十七ページ）
玉山・雪山・南湖大山・大武山・奇来山・大覇尖山・秀姑巒山・合歓山・阿里山

三、登山家列伝（二十四ページ）
草創期の登山家、蔡景璋・邢天正・林文安・丁同三、各氏のプロフィール他。

四、原住民と山（二十ページ）
玉山の守護者、プノン族
ポーターから登山家へ
ツオー族の移住史

五、国立公園
玉山・雪覇・大魯閣

こうして目次を見ると作者の意図するところがよく判る。各章の扉には古くて珍しい人物写真や山影が載っているが、全編に一葉の地図もなく、ガイド本ではなく読み本であるということだ。一般読者にも興味のありそうな山のトピックを取り上げて、そこに専門家の感想・意見を加えるという新聞記者らしい手法である。内容は憶測や伝聞を一切抜き、真面目な取材実録

である。二百ページに足らぬ小冊子のこと、突込み不足の記述が多いが、山・登山を鏡において、そこに映った人間像、事件、政治の影といった諸々を折り交ぜて、一応そつのない短篇集に仕上げてある。

以下、印象に残った内容の二、三を紹介する。

山岳史の中ではＪＡＣ名誉会員でもある蔡禮楽氏（中華山協・名誉理事長）が、数ページにわたって「追憶の台湾山岳史」を語っている。台湾人無縁参与といわれた日本統治時代から関所重重難登山の初期国民党時代の圧政にも耐え、何度か消えかかる登山界の灯を、ようやく現代に伝承した当事者の言は正に貴重である。

今度は微笑えましい記事を一つ――。

「小女子・首度登上新高山」と題する林蔡娩女史（八五）のインタビュー記事である。昭和五年、同女史を含む台北第三高女の女生徒十二名の玉山初登頂は、全校生徒のうち特に脚力強靱なる者が選抜され、教師三名、ポーター十名、警察官三名、写真・映像技師各一名、計三十名という大部隊であった。ズボンは女子の着用禁止で全員スカートのため、頂上真下では吹き上げる強風に難渋したという。

最後に日本統治時代の阿里山の森林開発に付いて簡単に触れておく。阿里山は一座の山名ではなく、玉山の支脈上の十八座全体の呼称で往時は陽光を見ることもない鬱蒼たる原始林に覆われていた。当時の材積は六百余万立方㍍、樹齢三、四千年の所謂「神木」も各所にあった。それが現在では日統時代からの森林開発により裸山になり、玉山国立公園制定の際も阿里山は区域外とされた、とある。

以上、私自身の興味のある部分を拾い読みしただけで、果たしてこれで紹介をしたことになるのかどうか心配ではあるが、嘘のない記述だけに一読をおすすめしてもよいと考える。

（木村　俊博）

## 会報「山」図書紹介一覧―一九九八年度―

●四月号（六三五号）

石川溥著『ネパール』アジア読本（河出書房新社）

フリッチョフ・ナンセン著／太田昌秀訳『フラム号　北極海横断記―北の果て―』（ニュートンプレス）

山と溪谷社編『日本のクラシックルート』（山と溪谷社）

本多勝一著『リーダーは何をしていたか』（朝日新聞社）

広瀬誠著『越中の文学と風土』（桂書房）

川見博美著『雪の尾根　読書の山』（私家版）

森下博三著『氷層の山』（新樹社）

●五月号（六三六号）

小野有五著『アルプス・花と氷河の散歩道』（東京書籍）

高橋清輝著『女子高生・汗と涙の初登頂―立川女子高校山岳部未踏峰コングールⅣ峰への挑戦―』（大日本図書）

山と地図のフォーラム編著『パソコンで楽しむ山と地図』（実業之日本社）

Soli Mehta & Harish Kapadia 著『Exploring the Hidden Himalaya』Second revised and updated edition (Indus Publishing Co. New Delhi)

Harish Kapadia 著『High Himaraya Unknown Valleys』(Indus Publishing Co. New Delhi)

中田修著『南極のスコット』（清水書院）

●六月号（六三七号）

荒賀憲雄著『落日の山』（ナカニシヤ出版）

本多勝一著『五五歳のときに登った山山』（朝日新聞社）

本多勝一著『六〇歳の記念に登った山山』（悠々社）

小浜浩三著『妻と二人の山歩き―五十歳からの初めての山』（光人社）

『日本の名山』シリーズ全二十巻・別巻四巻（既刊十八冊）（博品社）

●七月号（六三八号）

白旗史朗著『ROCKY MOUNTAINS』（山と溪谷社）

能海寛著『能海寛遺稿』（五月書房）

●八月号（六三九号）

五十嵐篤雄著『飯豊道』（恒文社）

ジェフ・ロウ著／手塚勲訳・船尾修監修『アイス・ワールド』（山と溪谷社）

土岐田正勝・岸昌一・神田より子・斉藤壽胤著『鳥海山』（鳥海山大物忌神社）

新妻喜永著『東京付近のんびりゆったり山歩記』（実業之日本社）

●九月号（六四〇号）

日本山岳会富山支部編『山岳―創立50周年記念誌―』（日本山岳会富山支部）

ティム・マッカートニー・スネイプ著／海津正彦訳『エヴェレストへの長い道―海抜ゼロから頂上へ』（山と溪谷社）

Nicholas and Nina Shoumatoff 編『Around the Roof of the World』(Michigan, USA)

村西博次編著『和仏山岳用語研究』（京都山の会出版局発行・ナカニシヤ出版発売）

横山厚夫著『ある日の山　ある日の峠』（白山書房）

根深誠著『北の山里に生きる―みちのくの自然と人生―』（実業之日本社）

平山善吉著『エベレスト遙かなり』（悠々社）

●十月号（六四一号）

丸山直樹著『死者は還らず』（山と溪谷社）

ニコラス・B・クリンチ著／薬師義美・吉永定雄訳『ヒドンピーク初登頂　カラコルムの秘峰８０６８ｍ』（ナカニシヤ出版）

浅野孝一著『樹林の山旅　関東・甲信・南会津の山歩き』（実業之日本社）

シドニー・ウィグノール著／三浦彌子訳『ヒマラヤのスパイ』（文藝春秋）

黒石恒著・画集『旅の回顧』（私家版）

Daniel Anker 著『EIGER Die Vertikale Arena』（AS Verlag & Buchkonzept, Zurich）

平林克敏著『熱き心　登山と企業から学んだ私の人生哲学』（ぱるす出版）

●十一月号（六四二号）

田部井淳子編『エヴェレストの女たち』（山と溪谷社）

渡辺正臣著『富士さんに魅せられて七十年』（私家版）

原田真知子編『山のスケッチブック　仲間達へ　原田達也遺作集』（原田達也遺作編集委員会）

西丸震哉著『机上登山』（博品社）

松本徑夫・武石干雄・佐藤眞一・佐藤三千代・甲斐素純共著『九重の自然と歴史』（葦書房）

日本山岳会東海支部編『山は知っている―環太平洋一周環境調査登山の記録―』（マック出版）

●十二月号（六四三号）

富山県山岳連盟編『太刀の峰高く―創立五十周年記念会誌―』（富山県山岳連盟）

江本嘉伸・遠藤正男・戸高雅史共著『A LINE　地平線の旅人』（求龍堂）

渡辺義一郎編訳『中国歴代西域紀行選』（ベースボール・マガジン社）

●三月号（六四六号）

昭和山岳会編『より高くを求めて』（昭和山岳会・六十周年記念誌委員会）

尾崎隆著『幻の山・カカボラジ―冒険家族・ミャンマーの最高峰初登頂―』（山と溪谷社）

山崎祐子・野村みつる編『丹沢　山のものがたり』（秦野市）

トモ・チェセン著／近藤等訳『孤独の山―ローツェ南壁単独登攀への軌跡』（山と溪谷社）

根深誠著『シェルパ　ヒマラヤの栄光と死』（山と溪谷社）

法政大学山岳部『山想』第九号（法政大学山岳部山想会）

# 追悼

## 村田 数之亮 氏（一九〇〇～一九九九）

「ぼくは前世紀の生まれだよ」が口ぐせだった村田数之亮先生が一月二十日に亡くなられた。村田先生は、戦前の一時期関大山岳部の部長をされていた。当時学生だった古い先輩に連れられて、京都下鴨のお宅に何度かお訪ねしたことがある。九十歳を過ぎてもなおお元気で、小さな中庭のあるしゃれた造りの家に住まわれていた。書斎には本がうず高く積まれ、「もう一冊本を書くつもりでね」と、机上には情報カードの束がいくつもあった。

日本山岳会へは一九三四（昭和九）年に入会。会員番号一五四九で、数少ない千番代の会員だった。紹介者は画家の茨木猪之吉で、見せていただいた画伯のスケッチ帖は肉筆画でうまっていた。ギリシャ美術の専門家で、絵画には造詣が深くいろんな絵画作品が手もとにあった。阪大を退官する時記念に手に入れたという坂本直行の油彩も所蔵されていた。

会報「山」には必ず目を通されていて、私がときおり書いた文章や短歌のこともよく覚えていてくださり、「君、なかなかよく書けていたよ」と太い葉巻をくゆらせながら目を細められた。山行記録をまとめた冊子やOB会報をお送りすると、すかさず感想をしたためた葉書をいただいた。私が山の話をすると、「焼けぼっくいに火を点けたのは君だよ」と四まわりも年下の私に向かって微笑まれた。九十歳になるまで北山を自分の裏庭のように歩かれていた。もう山を歩けなくなった、と淋しそうだったが、山への想いが蘇ったのだろう。関大時代はとくに心に残っているようで、昭和初期の頃のことを次のように回想されている。

「……ようやく稜線に出ると唐松小舎がある。北アルプス連峰から黒部の谷の一部が見わたせる。帰りのスキーは素敵だった。尾根の雑木はほとんど雪でうまり快適に飛ばす。リュックを背負って休みつつ転びつつ黒菱小舎にもどる。楽しいスキー行だった。我々にはスキーは登山の一用具で、技術より安定、頑張りを目指していた……」

「部員たちと楽しく山とスキーをやれるという自分本位の興味が多く、好きなことばかりをしている部長だった。関大山岳部は山と人と交流し得たところだから、黒菱小舎の合宿や北アルプス、京都北山が懐しい。私の生涯でも楽しい一節であった」と。

一九三五（昭和十）年、関西の学生合同隊が冬の漢拏山に遠征した時、隊員だった先輩の一人が、先生からたくさんの餞別をいただいて感激した、と述懐していた。

その後ドイツに留学され、彼の地で勉学のかたわら、アルプス登山とスキーを存分に楽しまれたようだ。

先生の著書でベストセラーのシュリーマン自叙伝『古代への情熱』は岩波文庫に収められ、初版以来今なお版を重ねている。文庫になる前は戦前、『先史時代への熱情』の書名で京都の星野書店から出ていた。同じ頃出た『ギリシヤの瓶絵』とともに古書店で見つけ、持参すると、「よく見つけたね、ぼくの手もとにもないよ」と感心された。

書棚には山の本や極地本がつまっていた。その中から、「君にはこれをあげます」と抜き取ってくださったのが『霧の山稜』だった。変色していたが初版の特製本で、私が加藤泰三ファンであるのを知っていられたかのようだった。絵の好きな私にと選んでくださったのだろうが、私の欲しかったものだけに嬉しかった。また、二本のピッケルの一本を、「古くて使えないだろうが……」と言って私にくださった。これは先生の形見となった。

華々しい記録も山に関する著作も残されなかったが、本当に山が好きで山を楽しまれた先生だった。私たちの実生活には直接なじみの薄い西洋考古学とギリシャ美術を学ばれ、学者として生き抜かれた村田先生が、その一方で心から山を愛し、終生山を想い続けられたその姿勢を、心の財産として大切にしていこうと考えている。

白寿を目前に天寿を全うされ旅立たれた村田数之亮先生のご冥福を心からお祈りします。

略　歴

一九〇〇（明治三十三）年　京都府舞鶴市に生まれる
一九二五（大正十四）年　東京帝国大学西洋史学科卒業
一九二八（昭和三）年　京都帝国大学大学院入学
一九三三（昭和八）年　関西大学文学部講師。山岳部長に就任
一九三四（昭和九）年　日本山岳会入会。紹介者茨木猪之吉・額田敏
一九三六（昭和十一）年　渡欧。ドイツ、ギリシャ滞在中、アルプス登山とスキーを楽しむ
一九三九（昭和十四）年　帰国
一九四〇（昭和十五）年　京都帝国大学文学部講師
一九四九（昭和二十四）年　大阪大学文学部教授
一九六四（昭和三十九）年　大阪大学を退官。大阪大学名誉教授となる
一九六五（昭和四十）年　甲南大学教授
一九七一（昭和四十六）年　勲三等瑞宝章を受ける

一九七四（昭和四十九）年　甲南大学を退職
一九八四（昭和五十九）年　日本山岳会永年会員
一九九九年一月二十日逝去、享年九十八歳

主な著・訳書

『エーゲ文明の研究』、『ギリシャ美術』、『エーゲ美術』、『英雄伝説を掘る』、『私のギリシャ』、『古代への情熱――シュリーマン自叙伝――』、『神・墓・学者――考古学の物語――』

（宇都木愼一）

## 田口二郎氏（一九一三～一九九八）

病篤しと松丸秀夫、伊藤文三両氏がお見舞いにかけつけた。昏睡の二郎さんが突然安曇節を歌い「村山はどうした」の声に枕頭にいた二人は驚いた。あだやおろそかには書けない『山岳』の追悼だが、長女マヤさんが探しだした「略歴・主事項」と題した一九八七年の自筆の走り書きをもとに、甲南の後輩である福田泰次氏の手記を拝借し、今はの際の二郎さんの問いに応えてその生涯を追想したい。

当時鉄屋には珍しい東京帝大出、インド銑鉄業界を代表する国際人だった八郎氏を父に、日本女子大一期生で歌人のたかの様を母に、その二男として東京の順天堂医院で一九一三年に生まれた。鎌倉で育った彼は小学生の後半に阪神へ移り住み、冷飯草履をつっかけた漁師の子供たちと魚崎尋常小学校での野生味あふれる生活に一変した。一方、家庭では週末に一家をあげての六甲ハイキング、冬は神鍋や氷ノ山へスキーにと、後年彼がいう「木暮理太郎が嫌った伝統登山と全く異なるいでたちの若者」の一人として、神戸の貿易商から入手したチロルの革半ズボンに山靴のスタイルで山登りが始まった。

甲南高校へ進むや地の利を生かしてロックガーデンの虜となり、伊藤愿氏、兄一郎氏などと北穂滝谷尾根、前穂三峰岩壁初登攀の記録を残した。滝谷を総なめして第一～四尾根の名をつけて意気軒昂の時、「甲南の若造は何とつまらん名をつけたものだ。ユーモアがない」との山岳会の大御所浦松佐美太郎氏のひと言が頭にきた。一九三一年の夏、浦松徳沢に現るの報が上高地に走った。アルプス仕込みのお手並み拝見と、おっとり刀で駆けつけた彼等は浦松氏のパリッとしたみなりにど肝をぬかれ、「穂高の岩場を舐めるなよ」とたしなめられて青菜に塩となった話は上高地の語り草になった。

山に明け暮れながらも河上肇に傾倒していた彼は、一九三四年に甲南山岳部員が一斉検挙された「白亜城事件」を惹起した共産青年同盟甲南班の黒幕だったともいう。若者が所謂危険思

想に傾斜した世情の中、京大の滝川事件が波及した一九三三年、彼は東大の高校代表会議の甲南代表として学生運動の渦中にあった。本富士署、千住署の豚箱生活、脇村義太郎教授の演習仲間とは、山友達と共に終生の友となったと後年述懐した。六甲の森から雪線を超えようと、世界にもまれな大雪に恵まれる故国を修行の場としていた彼、その陰には思想問題の葛藤もあったが青春に悔いなしとした学生時代であった。

一九三七年春、日本鋼管にいた彼は兄一郎のロンドン大学留学を機に父と共に米国経由で渡欧した。図らずもベルリンで発病し、父の帰国後もひとり入院生活を続ける内、早くも彼らしく十八歳の看護婦ベァーテとの間に森鴎外の舞姫の世界が開かれようとしたが、ロンドン大学留学で幕切れとなった。

一九三七年冬からスイスの山を登りまくり、一九三八年夏田口兄弟のグロースシュレックホルン北東壁の初登攀はタグチルートの名を残している。一九三八年秋、ミュンヘン協定調印の直後、久しぶりにパリでめぐりあった藤島敏男氏と民主々義の全面降伏をどう語ったのか気になる。しかし田口兄弟はドイツ留学中の東大の山仲間高木正孝氏と共に憑かれたような山への挑戦が続く。

一九三九年九月三日、第二次大戦勃発で欧州には夜の灯が消えた。帰英の道を閉ざされた彼は日本大使館嘱託としてベルンに留まる。戦乱の中もチロルのＦＩＳスキー大会に出場した彼は兄一郎を失って傷心の一九四一年は太平洋戦争勃発で暮れた。一九四二年、学生時代からの知り合いの笠信太郎氏とベルリンで会い、翌年朝日新聞に入社しチューリッヒに事務所を設けた。仕事のかたわらブライトホルンのヤング尾根、メンヒの北壁等に登っていたが、一九四四年、敗色濃いドイツから笠、高木、笹本駿二氏がスイスに逃げ込んできた。そこはさすがの田口、待望の相棒来ると高木とヴァリスのダン・ブランシュ等でグレィドの高い登攀を続け、最後の大物ヴェッターホルンの北壁に成功したのは日本の敗戦直前のことだった。

このあたりになると彼を裏表に頭をよぎるのが松本清張の『球型の荒野』だ。第一次大戦中捕虜としての福岡暮らし以来、笠氏と親交のあったスイス在住の反ナチの親日ドイツ人フリドリッヒ・ハックが仲介した、米国ＯＳＳ（ＣＩＡの前身）欧州総局長アレン・ダレスと笠、藤村海軍中佐（在外武官）との和平交渉がそれだ。一九四四年四月二十五日以降数回の会談の末、米国のＯＫのサインを得た。笠氏は緒方竹虎内閣顧問と、藤村氏は米内海相と電報をやりとりしていたが、六月二十日、本国からのＮＯの返答はソ連への仲介依頼が既に進捗していたからだという。笠氏との親密な関係から彼の介入は必至と思われるが、ことスイス時代の話は何となくはぐらかされて確認できなかった。ノルマンディー上陸五十周年にあたり、朝日の「チューリッヒ・本社間国際電話」の田口特派員との会話の記事を五十

年ぶりに初めて見たという彼の心境も、こちらで推し量るしかなかった。

折からエルナさんと知り合っていた彼は敗戦国民の身となり彼女の国スイスとの外交関係も断たれ、帰国の途は閉ざされてしまった。国際法によりスウェーデン領事から生活保護を受けて暮らすこと二年、その間にスウェーデンが発行した難民パスで八年ぶりにロンドンと、ナチスに一泡ふかせたパルチザン勇戦の共産国ユーゴを視察したのも彼ならではの行動力だ。

インド洋通過は英国が許さない、北米通過も駄目。そこを粘り強く帰国ルートを模索していた笠氏の苦心の末、スイスを離れる時がきた。しかし二郎は果たしてエルナが日本に住めるかと悩んだ末、彼自身で確認するまでと彼女を残して一九四七年十二月、スイスから北伊のジェノヴアに向かった。スウェーデン領事の旅費支給によるギリシャの貨物船で地中海、大西洋、パナマ、サンフランシスコ、マニラ、香港経由あしかけ三月の船旅の末、一九四八年二月、十一年ぶりに祖国に辿りつけたのも笠氏のお陰と感謝し続けた彼は、朝日新聞欧米部へ復帰した。敗戦の荒廃の中、何よりの喜びはエルナの居住に見通しがついて呼びよせ、一九四九年五月に無事来日、めでたく結婚式をあげ得たことだろう。そして秋、朝日から岸本商店への転職が思いもかけないマナスルへの道となった。欧州が重苦しい開戦の暗雲に閉ざされた時から戦後の混乱のまっただ中、歴史の波をものともせずわが道を貫き通した彼の人生に大きな転機がきた。

京大ＦＦ（自然史研究会）から日本山岳会へのマナスル登山計画の委譲を自著『東西登山史考』で「死せる大島、生ける今西を走らす」の名言を残した田口は、高木と共に希有の山歴をもつマナスルに不可欠の人材として当然の登場となった。一九五一年ラナ政権から王政復古したものの政情不安定のネパールが外国登山隊に門戸を開放して間もない時に一九五二年の踏査隊を立ちあげ、一九五三年には登攀隊長としてプラトゥへの登路を発見し期待にたがわぬ活躍をした。印度に強い人脈を持つ父八郎氏はネパールの元老カィザー将軍とも面識があった。表敬訪問を受けた将軍は遠い昔の八郎氏の招宴を話題にした。将軍から山で不足するに違いないとスコッチ二箱を贈られ相好をくずした三田隊長の顔を思い出す。おりから反印度・国民感情の高揚を図るエリート青年が我々にまとわりついていた。その一人、見るからに利発な青年が明治維新・明治憲法をネパールにおきかえた質問をなげかけてきた。田口流の適切な比喩と巧みな話術で欧州民主々義の老舗スイス、ＧＨＱ新憲法下の日本の民主々義、日ネ国情の類似と相違等を教えこまれた彼こそ当時マヘンドラ皇太子の側近ロク・ダルシャンだ。後にマヘンドラ国王の侍従として新憲法の制定について佐藤達夫氏に師事した。佐藤氏の著書『ネパールの伊藤博文』をみても春秋の筆法からすれば田口あってのネパール憲法となる。

幼年時に眺めた鎌倉の杉並木、六甲の緑、飛騨の雪山に育った彼は、アルプスの峰越しに大戦を眺め暮らし、戦後ヒマラヤに黄金時代来るやその現場を駆け抜いた唯一の人である。『現代の冒険』、『ヒマラヤ冒険物語』は著者ボニントンの心をも思量し得た随一の訳著だ。晩年、心筋梗塞と脳梗塞による視界狭窄を悩みながらも、衰えを知らない知識欲と山を見る目の確かさが待望の著書『東西登山史考』となった。生まれ育った深山幽谷の「山への土着的愛情」に共感をもった著者を、平井吉夫氏は山を素材に独自の史観に貫かれた優れた比較文化史へと昇華したという。

由緒ある出自と深い教養に培われた知識人、山に旅に又こよなく愛した酒席での人生を達観した二郎さんの語り口を今も忘れられない。得がたい人を失った。今はもう再生産できない規格外れの達人と生を共にし得たことを喜びとし、昔のカトマンヅを我々の香格里拉（シャングリラ）とした二郎さんとの訣別としたい。

（村山雅美）

田口二郎氏年譜　［本稿は一九八七年に田口氏が記したメモをもとに、諸資料を援用して作成］

一九一三年二月二日　東京で生まれる。小学校は鎌倉師範付属に三年まで、その後阪神に移り魚崎小学校に転校。中学は七年制甲南高校尋常科、高校は同高等科。高校では山に明け暮れる一方、河上肇などに傾倒

一九三三年　東京帝大経済学部入学。五月、京大「滝川事件」が東大に波及、学生運動になり、甲南代表として高代会議に出席。本富士署と千住署に拘留される。この時の友とは七十歳になっても会合あり。青春に悔いなし。一方、スキー山岳部に入り、山の友、脇村義太郎教授演習の友、江戸川アパートの友と交友。マルクス主義の本を読む

一九三五年　日本山岳会入会。会員番号一五九〇。紹介者藤島敏男・松方三郎

一九三六年　大学卒業。日本鋼管に入社

一九三七年五月　父と兄に同行、アメリカ、イギリス、北欧へ。ベルリンで高熱を出し、欧州に残る。ロンドン大学で英語、経済学を聴講

一九三七／三八年冬　パリに藤島敏男氏を訪う

一九三八年夏　兄一郎とともにヴェッターホルン、ノルレンからメンヒ、アイガーのミッテレルギ稜、フィアエーゼル稜からダン・ブランシュ、エンゲルヘルナーのミッテルグルッペとグロースヅィメリシュトックの縦走、トイフェルスヨッホからキングシュピッツェ、ビーチュホルンを北稜から

登りバルトシーデル谷へ、グロースシュレックホルンの北東壁を初登攀、グロースシュレックホルンを南稜から登りアンダーソン稜を下る

一九三九年春　インスブルック、グリンデルヴァルト、フィンスターアールホルンからグリムゼル峠のスキー縦走

一九三九年夏　兄一郎と、ロートホルン稜からツィナーロートホルン、ツムット稜からマッターホルン、ダン・デラン、モンテ・ローザのイタリア側東壁を狙うも悪天候のため撤退。九月、第二次大戦始まり、ベルンに留まり駐スイス日本大使館の手伝い

一九四一年春　チロルにFISスキー大会。同年夏、兄一郎をスイスで失う

一九四三年　朝日新聞社入社、チューリッヒ事務所を設ける。同年夏、オーバーガーベルホルンのアルベンス稜、ブライトホルンのヤング稜、アイガーのヘルンリ稜、ヴァイスホルンのシャリ稜

一九四四年夏　メンヒのラウパー・ルートを第三登、ユングフラウの東稜とヴェッターホルンの西稜を高木正孝と登る

一九四五年夏　ダン・ブランシュのフェルペクル稜とヴェッターホルンの北壁を高木と登る

一九四八年　帰国、朝日新聞欧米部へ

一九四九年　エルナと結婚。同年秋、朝日新聞を辞め岸本商店へ

一九五二年秋　今西錦司氏らとネパールにマナスル踏査。これに先立ち同年夏、日本鋼管の槇田氏とインドへ出張した際にマナスルに関する資料を収集して帰国

一九五三年　マナスル第一次登山隊に参加

一九七五年　エルナとグリンデルヴァルトを訪ね、ザミ・ブラヴァントと再会

一九七八年　大倉商事（岸本商店と六四年合併）を退社。日本鋼管の子会社・伊藤宗二商店社長に就任

一九八一～八四年　日本山岳会副会長

一九八五年　日本山岳会名誉会員に

一九八七年　脳梗塞により右側上半部が見えなくなる。C・ボニントン『現代の冒険』を岩波書店から上梓

一九九五年　『東西登山史考』を岩波書店から上梓

一九九八年九月二十三日　死去

（平井吉夫）

# 青木　昇氏（一九〇五～一九九八）

青木昇さんは一九九八年十月十四日、九十二歳で亡くなった。私は、青木さんを古くから知っている数少ない会員の一人だと思うが、特に個人的につき合いが深かったという訳ではなく、どちらかというと戦前の山岳会での仕事を通じての思い出が多い。

私が日本山岳会に入会したのは一九四〇（昭和十五）年、青木さんは一九三七（昭和十二）年で私より三年早い（会員番号一七二二）。紹介者村尾金二・中村テル）。入会して間もない一九四〇年には会報編集のメンバーになられ、翌年二月の社団法人日本山岳会の創立総会で幹事に選任された。私もその翌年、幹事となり、青木さんとは会の仕事で度々顔を会わせる間柄だった。会報の編集は九四号（昭和十五年五・六月号）から一〇〇号（同十二月号）までを、交野武一、望月達夫、中村謙、田辺主計、吉田竹志、吉阪隆正といった人たちと担当した。一〇〇号記念号は、表紙にアート紙を使い、本文二〇頁の立派なもので、裏表紙内側には虎ノ門ルームの様子を紹介する写真とスケッチ（茨木猪之吉画伯による）が載っている。今では、虎ノ門時代のルームの雰囲気を伝える貴重な資料となった。その写真には、編集会議の折であろうか、前記の顔触れと青木さんが写っている。

会報にはご自身も度々寄稿しておられ、八四号にはスキーのテムポ・シュヴングの理論を書いている。当時スキーの専門家でない人で、あれだけ書く人はあまりいなく、青木さんという人はなかなかの理論家だという印象を受けた。

山岳会で青木さんと一緒にした仕事に『高山深谷』の編集がある。『山岳』とならんで山岳会の草創期からその発行に並々ならぬエネルギーが注がれた山岳写真集『高山深谷』は、明治四十三年に第一輯が発行され、昭和十六年の第十輯が最後となった。写真の選定をはじめとして、何回も集まって編集作業をした。その中には青木さんの作品も載っている。編集メンバーだった塚本閤治、塚本繁松、鳥山梯成、早川義郎、藤島敏男、逸見真雄、山口稔一、横山直助の各氏はすでに亡くなり、青木さんも亡くなって、残っているのは私だけになってしまった。

青木さんは一九〇五（明治三十八）年生まれで、旧制麻布中学から早稲田大学商学部に進み、早稲田では英語会（ＥＳＳ）の設立、日米学生弁論戦などで活躍した。日本石油㈱に入社して日石山岳会を設立、休暇は山に熱中した。その後、主婦と生活社に移られ、専務取締役を最後に七十歳で退社、退職後は「山と海の見える所」を求めて、奥さんと熱海のマンションに転居、ゴルフと山を楽しむ生活に入った。その山も、「自然と

の融合には単独行がよい」と単独が多かったようで、晩年になってからはもちろん、青木さんの山登りについては私はあまりよく知らない。

ただ、青木さんの会報への最後のものと思われる寄稿が、「見果てぬ夢、パミールの高地」と題して、第六〇二号に載っている。中学時代からパミールに憧れ、村尾金二氏と夢の実現に努力したが果たせなかった無念の思いを綴っており、青木さんの山に寄せた一途な思いが窺える。

青木さんのような世代で、大学山岳部の出身ではなくて日本山岳会の会員になり、間もなく会報に原稿を出すとか、役員になったという人は割と珍しいと思うのだが、青木さんはそうした熱心な会員であり、会の常連の一人だった。一九九六年には名誉会員になっている。

お嬢さんの辻陽子さんのお話によると、青木さんは、三年前に奥さんを亡くされてからも、〝自分の生活は自分で〟との信念を貫いて熱海に留まり、いよいよあと一週間で熱海を引き上げてお嬢さんの所へという時に、朝食に向かうために車椅子に乗った状態で亡くなっていたという。亡くなる一年ほど前に認められたメモには「願はくは我／晩秋の佳き日／深きブナ林／しじみの中に／逝きたきものを」「良く死ぬことは易しいが／良く老いることは並大抵のことでは無い＝アンドレ・ジイド」「美しく老いて／天寿を完とう／致したきものである」とあった。

青木さんは思いどおりに、晩秋に、美しく老いて、天寿を全うされた。

（織内信彦）

## 安江安宣氏（一九一四〜一九九八）

安江安宣。これはなんと読むのだろう。ヤスエはわかるが、名が読めない。わたしたちはみんなアンセンと呼んでいた。わたしの研究室にかれから「安江です」と電話がかかってきた。秘書が「安江アンセン先生ですか？」と聞いたところ、のちにかれが「なれなれしい口のききかたをする」と不満をもらしていたそうだ。なれなれしいもなにも、ありはしない。だれもアンセン以外の読みかたをしらないのだから。ほんとうはヤスノブと読むのだそうだ。

かれは一九一四年のうまれで、わたしの出身中学校の京都府立一中の先輩にあたる。京都一中山岳部には『嶺』という部報があった。活版ずりの堂々たる雑誌で、新入生のわたしは、中学校というものはたいしたところだと感嘆したものである。その第二号に「エルモの火に就きて」という長編の論文がのって

いた。各種の文献を引用しつつ、それがいわゆるセント・エルモの火であることを論じた重厚な学術論文であった。その筆者が安江安宣だったのである。

そのとき、かれはまだ中学校に在学中だったはずである。しばらくして、わたしは「あれが安江さんだ」と山岳部の上級生からおしえられたことがあった。かれはまったく老成した顔つきで、下級生のわたしなどから見れば、まるでおじさんのようにおもえた。その後、かれは京都高等蚕糸学校に進学した。

わたしが旧制三高に在学中に、かれは高等蚕糸学校を卒業して京都大学農学部農林生物学科の昆虫学教室に進学した。高等蚕糸学校はなるほど昆虫学の学校であるから、この進学は当然のコースであったのだ。このころ、わたしはすでに、安江さんとしたしい関係になっていたのだが、それは、たぶん、今西錦司先生のお宅などで、たびたびあう機会があったからであろう。

安江さんは大学在学中に、ずいぶんひろく日本の山をあるいていたようである。それは主として、専門の昆虫学の研究と関係があったのであろう。ところが、一九四〇年には、南海の孤島、硫黄島にいくという。三高山岳部からは川喜田二郎をつれていった。硫黄島は北、中、南の三島からなり、南硫黄島はまったくの無人島で、周囲を絶壁にかこまれた九百十数メートルの岩峰である。川喜田の回想によると、けっきょくこの島には上陸できなかった。そのかわりに北硫黄島の、これも八〇四メートルの岩峰に登頂したという。

大学をでてから、安江さんはしばらく東京大学のデンケンすなわち伝染病研究所の助手をしていたことがある。昆虫学者がなぜ伝研に就職したのかは、わたしは知らない。数年のちにかれは岡山大学に職をえて、そちらにうつった。そのあいだに全国の山で観察した昆虫の分布と変異に関する論文をつぎつぎと発表した。

わかいころから、かれは外国のふたつの山群に注意を集中していたようである。ひとつは中国の黄河源流にそびえるアムネ・マチン連峰である。これは、あるいはエベレストよりたかいのではないかと言われていた山である。もうひとつは、ニューギニアの中央山地のカルステンツを中心とするナッソウ山脈である。このふたつの山群に関する考証がぞくぞくと印刷されてわたしの手もとにきたのをおぼえている。かれは幼少のころ、インドネシアでそだったので、南の島じまの山にはつよい関心をもっていたのである。

一九六三年、京都大学から西イリアンのスカルノ・ピークすなわちカルステンツに遠征隊がでることになった。わたしはかれがまだ、ニューギニアに関心をもちつづけているかどうかわからなかったが、念のために、かれに行く気があるかを電話で問いあわせた。かれは大声で「いくぞーッ」とどなった。遠征隊は加藤泰安を隊長に、安江さんはその学術隊長として、ぶじ

スカルノ・ピークに登頂した。この遠征隊の正式報告書は、一九七七年になってから朝日新聞社から刊行されたが、そのまえに、同行の朝日新聞記者、本多勝一と藤木高嶺による『ニューギニア高地人』が出版されて、おおくの読者をえた。

安江さんは、その後は岡山大学の教授として停年までそこにいたが、全国の山やまをあるき、とくに昆虫と陸封マス科魚類の分布と変異について詳細な研究をおこなっていたようである。大学退官後は東京にうつり、しずかな晩年をおくっていると聞いていたが、突然の訃報に接しておどろいた。それもわたしたちが知ったのは、新聞の訃報欄ではなくて、社会面の記事からだった。記事によると、「自宅で焼死、ストーブから引火か」とあった。碩学のいたましい最期である。八十四歳であった。

（梅棹忠夫）

## 安江安宣さんの思い出

安江さんと初めて知り合ったのは、一九八五年である。すなわち、彼の晩年になってからであるが、関心を持っていたテーマが、ぼくと共通していたことから、安江さんはぼくにとっては、なつかしい、忘れがたい人である。

安江安宣という名を知ったのは、一九五〇年代のことである。朋文堂から発行されていた雑誌『山小屋』の戦争中のバックナンバーに、ニューギニアの文献に関する記事が載っていて、その中に「カルステンツ峰登山小史」という文献があり、その筆者が安江安宣さんだった。安という字が二つあるので、記憶に残った。また、文献好きなぼくにとって、この記事も大変印象に残った。

その後、丸善発行の雑誌『学鐙』五十七巻七号（一九六〇年七月）に、「J・F・ロック著　アムネ・マチン山脈とその付近」という記事が載り、その筆者が安江さんであった。この記事も、ぼくにとっては、嬉しい文章であった。ちょうど、同じ年の五月、ぼくが自分の所属する山岳部の機関誌『山脈』七号に「アムネ・マチンについて――ジョセフ・ロックの報告をめぐって――」という記事を発表した直後だったので、ぼくは安江さんの文章を興味深く読んだ。同じ文献を同じ頃、二人が偶然に読んで、その感想を同じ頃発表したのであった。たぶん、ロックの著書が、この頃輸入されて、二人が入手したのであろう。この記事によって、安江さんに親近感を持ったのであった。しかも、このロックの著書を詳細に紹介していて、教えられるところが大きかった。

次に安江さんの文章に出会ったのは、ずっと後の一九八五年になってからであった。日本山岳会の会報『山』四八五号（一九八五年十一月）に載った「祖母山とウェストン――個人史の一側面」という記事である。

その頃、日本においてウェストン研究がようやく始まろうと

していた。口火を切ったのは島田巽氏である。ウェストンの『日本アルプスの登山と探検』の原著が復刻されることになったとき、島田氏はその解題を受け持ち、そこに略年譜を付けることになる。そのとき、聖職歴について協力したのが日本聖公会の垣内茂氏である。一九七五年のことである。その後、一九八二年になって、垣内氏は島田氏がまとめた略年譜に誤りを発見した。その誤りの発見に協力したのが川村宏氏である。川村氏は上高地の嘉門次小屋の百年史をまとめる過程で、ウェストンの研究に手を初めたのである。そして、一九八五年七月には『神戸の歴史』に「近代登山の父　W・ウェストンと神戸」という緻密な調査結果を発表している。かくして、島田氏は『山』四七九号（一九八五年五月）に「ウェストン初来日の日」を発表する。

一方、松本の三井嘉雄氏は、一九八三年に『黎明の北アルプス』を発表して以来、独自にウェストン研究を始めていた。そして、川村宏氏の教示を受けて、英国地理学会に所蔵されているウェストンの登山日記及び手紙のコピーを日本にもたらした。これが日本におけるウェストン研究に拍車をかけた。一九八五年十一月から、ぼくがこのウェストンの手紙の翻訳を『山書月報』に連載を始めた。

また、京都の前田司氏が一九八五年三月に、「日本アルプスの発見――日本近代登山史におけるウェストン――」という論文を『一九世紀日本の情報と社会変動』（京大人文科学研究所）に発表している。

こういう雰囲気の中に、安江さんの前記の文章が発表されたのである。まさに百花繚乱であった。もちろん、安江さんは前記の人々とは別に独自に調査を進めていたのだが、このようなウェストン研究があちこちで偶然に始められていた時期の雰囲気の中で行なわれたのも事実である。そして、安江さんは、この「祖母山とウェストン」を発表する以前、一九八五年四月には、「Bibliography of the Results of the Rev. Walter Weston (1861-1940), the first honorary member of the Japanese Alpine Club : A Preliminary List」をまとめていた。この「ウェストン著作目録」は未発表のままであった。

ぼくは安江さんの「祖母山とウェストン」を読んで、その緻密な調査ぶりに感嘆し、すぐに手紙を差し上げた。その手紙の正確な内容は忘れてしまったが、それに対する安江さんの返事の手紙によると、たぶん、ウェストン第三回訪日の日のことで、疑問を申し上げたのだと思う。安江さんは、ぼくの疑問に対して丁寧で詳細な説明をしてくれた。そして、その疑問にも答えて発表されたのが、『山』四九一号（一九八六年五月）掲載の「ウェストンの来日第一報など」であった。

このようにして、ウェストン研究の輪が広がり、やがて、一九八七年、島田巽氏を中心として安江安宣、川村宏、三井嘉雄

の三氏によって、ウェストンの年譜が作成されることになった。このときも、安江さんの詳細な調査成果を記したカードが基礎になったといわれている。そして、主として川村氏がまとめた「W・ウェストン年譜」が『山岳』第八十二年（一九八七年）に発表された。この年譜は詳細なもので、一回では掲載しきれず、『山岳』第八十三年～八十五年（一九八八～一九九〇年）と四回にわたって連載された。

その間、一九八八年三月二十一日に横浜アンデレ教会で「横浜ウェストン記念祭」が行われた。ここで式の後に、安江さんの「街中のウェストン」という講演が行われ、更にシンポジウムが行われた。この日、ぼくは初めて安江さんとお目にかかった。このときに、安江さんは、前にまとめた未定稿の「ウェストン著作目録」を増補した目録を参加者に配った。しかし、安江さんにとっては、これも中間報告であった。ぼくも、この内容の誤りやら洩れなどについて申し上げたが、安江さんは更に調査をつづけ、その八月には最終版ともいうべき目録を完成させた。そして、それは『山岳』第八十三年に「W・ウェストン年譜　その2」の付録として掲載された。安江さんのすごいところは、目録を作成するばかりでなく、それらのウェストンの著作のコピーを入手していたことである。凡て内容をチェックしての目録作成だったのである。ぼくもそのうちのいくつかを頂いているが、そのエネルギッシュな調査には頭が下がる思いである。

一九九二年四月にスコットランドからV・ハミルトン女史が、明治期の近代日本の登山について調査のために来日したときには、日本山岳会において、ウェストン研究にたずさわる人々が中心となって、歓迎会を開いたが、そのときも安江さんが歓迎委員長となってハミルトン女史を歓迎したのである。

ウェストン研究でもすぐれた功績を挙げたばかりでなく、安江さんは他の外国人の登山活動についても調査をしている。その代表的な成果は、ジョルジュ・アペールの槍ヶ岳紀行の発見である。それは『学鐙』八十三巻十二号（一九八六年）に「ジョルジュ・アペールと槍ヶ岳」として発表されたが、それまでアペールの槍ヶ岳登山については全く誰もふれなかったし、その文献についても知らなかったのである。膨大な資料の中から、この文献を捜し出す苦労は、やってみたことのない者には想像もできないくらい、大変なアルバイトである。あまり得意ではないフランス語文献を、高齢の安江さんがなされたことは驚くばかりである。ぼくはこのアペールの槍ヶ岳紀行を教えて頂いたことへの感謝として、全文を翻訳して『山岳』第八十九年（一九九四年）に発表した。これで安江さんに対するお礼が些少ながらできたと今でも思っている。

安江さんに対する親しみはこれだけではない。ぼくが一九八五年に出した『外国人と日本の山』という豆本をちゃんと入手

して読んでいたこと、また、一九八三年に小部数で出した『登山家素描』を読んでいて、ぼくが今西錦司氏を好きなことを知っていて、今西氏関係の珍しい文献をコピーして送って頂いたりした。今西氏から安江さんへ宛てた手紙のコピーまで頂いた。確かに、安江さんは今西氏の弟子ともいうべき人で、今西氏をたいへん尊敬していたようである。『今西錦司全集』第九巻付録には、安江さんは今西氏から受け取った手紙を何通か紹介しているが、たぶん、今西氏の手紙はすべて保存していたのであろう。

安江さんを失って、ぼくはじつにさびしい。あのエネルギッシュな、探索好きな先輩はもういないのである。

（水野　勉）

略　歴

一九一四（大正三）年　大阪市に生まれる
一九三八（昭和十三）年　京都高等蚕糸学校養蚕科卒業
一九四一（昭和十六）年　京都帝国大学農学部農林生物学科卒業。東京帝国大学伝染病研究所技手
日本山岳会入会。会員番号一九六九。紹介者は西堀栄三郎・今西錦司
一九四六（昭和二十一）年　京都帝国大学農学部助手
一九四九（昭和二十四）年　岡山農業専門学校教授
一九五一（昭和二十六）年　岡山大学助教授
一九六二（昭和三十七）年「ニジュウヤホシテントウ類の生理生態学的研究」で農学博士の学位を受ける
一九六八（昭和四十三）年　岡山大学農業生物研究所教授
一九八〇（昭和五十五）年　岡山大学教授停年退職、名誉教授
一九九八（平成十）年十二月十一日　タバコからの火災により死亡

## 佐藤一栄（いちえい）氏（一九二四〜一九九七）

佐藤さんは新潟市湊町の出身で、父初太郎氏と母ノセさんとの間に、五人の兄弟、三人の姉妹の長男として生まれた。

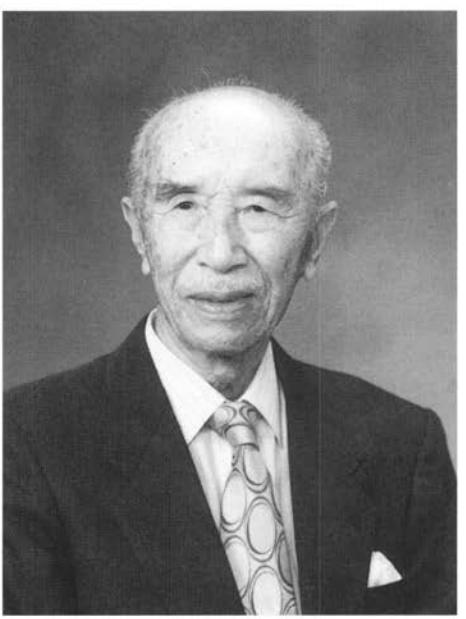
太平洋戦争が勃発した一九四一（昭和十六）年十二月、徴用で東京に移り、中島飛行機会社に勤めてエンジンの部品製造に従事した。その間余暇を見付けては、丹沢・奥多摩や谷川岳のマチガ沢・一ノ倉沢・幽ノ沢等に足繁く通った。

一九四四（昭和十九）年十二月召集、新発田連隊で訓練を受け陸軍の重機関銃手として日中戦争に従軍し、上海から南京へと転戦したが、武運に恵まれ一九四六（昭和二十一）年三月新潟に復員して、家業のクリーニング店を手伝うことになった。

# 追　悼
OBITUARY



名誉会員
田　口　二　郎氏
TAGUCHI Jirō (Hon. Mem.)
(1913～1998)



名誉会員
青　木　　昇氏
AOKI Noboru (Hon. Mem.)
(1905～1998)



安 江 安 宣氏
YASUE Yasunobu
(1914～1998)



村 田 数之亮氏
MURATA Kazunosuke
(1900～1999)



新 井 清氏
ARAI Kiyoshi
(1913～1998)



佐 藤 一 栄氏
SATŌ Yichiei
(1924～1997)



鈴　木　敏　雄氏
SUZUKI Toshio
(1930～1998)



中　島　　寛氏
NAKAJIMA Hiroshi
(1938～1998)



大　内　幸　雄氏
ŌUCHI Yukio
(1929～1999)



久　野　英一郎氏
HISANO Eiichirō
(1926～1998)



◀三　和　裕　佶氏
MIWA Yūkichi
(1946～1999)



▲根　津　皖　一氏
NEZU Kiyokazu
(1939～1998)



椎　名　厚　史氏▶
SIINA Atsushi
(1970～1998)



◀佐　野　　崇氏
SANO Takashi
(1971～1998)

赤　坂　謙　三氏▶
AKASAKA kenzō
(1968～1998)



戦争が終わると佐藤さんの山へ寄せる情熱が再び燃え始めた。一九四七（昭和二十二）年八月ＪＡＣ越後支部主催の守門岳登山講習会に参加したとき、藤島源太郎氏（初代越後支部長、会員番号一〇三三）と初めて出会い、互いに感応し合って、その翌月越後支部に入会し会員番号二七六一を受けた（紹介者藤島玄・北村嘉助）。こうして佐藤さんは越後の山の魅力に目覚め、藤島氏を始めとして越後の岳人達との交遊の輪を広げ深めていった。その数多い山行歴から当時の主要なもの（年号は昭和）を選んで次に示す。

御神楽岳　二十二年十月五日～八日
　広谷川―水晶尾根―頂上―打出沢―室谷。同行者四人。
御神楽岳　二十三年四月五日～七日
　広谷川―ム沢中央稜―頂上―御神楽沢。同行者一人。
早出川　二十三年五月二十二日～二十八日
　村松―田川内―本流―今早出沢―倉谷沢―室谷。同行者一人。
飯豊連峰　二十四年五月八日～十三日
　赤谷―掛留沢―赤津山―門内岳―北股岳―大日岳―飯豊本山―奥川―弥平四郎。同行者一人。
万太郎谷　二十四年八月十三日～十五日
　土樽―万太郎谷―一ノ倉岳―谷川岳―西黒尾根。同行者四人。
鉾立沢　二十五年六月五日～七日
　大石―西俣川―大熊小屋―鉾立沢―杁差岳―大熊尾根―大石。同行者三人。
鬼ヶ面山　二十五年八月十五日～十八日
　五味沢―平石川左俣沢―浅草岳―只見沢―鬼ヶ面山滝沢―南岳―マンモス尾根―六十里越―大白川。同行者一人。
胎内川　二十六年八月十四日～十九日
　夏井―鹿ノ俣川―天狗ノ休み場―本流―東俣沢本源沢―二ッ峰―門内岳―北股岳―湯ノ平―赤谷。同行者四人。
杁差岳　二十七年六月十二日～十五日
　大石―東俣川大沢―杁差岳―西俣川―大石。同行者三人。
杁差岳　二十九年二月十八日～二十三日
　大石―ハッテン―中峰尾根―頂上―沼川鉱山―大石。同行者四人。
岩井又沢　三十年八月十四日～十九日
　村上―三面―岩井又沢―中俣沢―西朝日岳―相模山―黒倉沢―三面―村上。同行者四人。
大日沢　三十二年八月十五日～十八日
　東赤谷―湯ノ平―中峰―洗濯沢―飯豊川本流―大日沢―大日岳―オンベ松尾根―実川。同行者四人。
川内山塊　三十三年四月三日～六日
　村松―木六山―七郎平山―銀次郎山―銀太郎山―五剣谷岳

—青里岳—矢筈岳—魚止山—倉谷沢—室谷。同行者一人。

ほかに妙高山の正面岩壁を初登攀し、本尊岩や麒麟山などの岩場にもすべて足跡を残すなど、「岩登りの佐藤」として名を馳せた。

新潟国体山岳競技（一九六四年六月飯豊連峰で実施）や、新潟県境全縦走踏査（一九六六年越後支部創立二十周年記念事業として実施）においては、藤島氏を献身的に補佐した。一九六七（昭和四十二）年から二年間新潟県山岳協会の第四代会長を務めた。また一九八二（昭和五十七）年から十三年間第三代越後支部長の任にあった。

ここで実弟の幸司氏からきいた、佐藤さんの若いころの逸話を一つ紹介しよう。

自分の部屋の一隅に山の道具を飾り、夜になると二階家の裏からロープでリュック・サックを下すのが私の役目で、汽車の発車時間が過ぎてから「兄さん山に行ったよ」と親に伝え、その都度叱られた。小説家気取りで温泉に十日間も泊まり込み、何か書いていることもあった。一ヶ月の半分は家を出て山三昧に耽っていた。何回か共にした山行において、観天望気や道の選択判断等についての、動物のように鋭い勘にはいつも敬服していた、と。

佐藤さんは山への開拓者魂を堅持し、尽きせぬ情熱を燃やし続けたロマンティストであった。第三代会長を務めた峡彩山岳会からは、多くの俊秀を育て師匠として敬愛された。それに越後・会津・佐渡などの山名・川名・地名の研究にも精励し造詣が深かった。

しかし青春を共に送った山仲間が次々と世を去り、後年はひとり小佐渡山脈を好んで歩いていたという。一方奥様に先立たれてからも生業を続けて、随分苦労があったらしい。一九九七（平成九）年十二月末、腎臓癌で七十三歳の生涯を閉じた。まだ早過ぎる死であった。もっと長生きをして後進の育成指導に当たってもらうと同時に、書き残した記録・紀行・随想・研究等をまとめた形で刊行してほしかった。

（筑木　力）

## 新井　清氏（一九一三〜一九九八）

奈良大学名誉教授・理学博士新井清先生死去との悲しい知らせを奥様から頂いたのは、一九九八年の師走に入った七日夕方だった。十二月七日午後五時八分、心不全のため京都市内の病院で永遠の眠りにつかれたとのことであった。一九一三（大正二）年十二月十一日生まれ、四日後には誕生日を迎える享年八十四歳だった。

冬枯れの稟としたこの時季の京都は、観光客もやや足絶えてもの寂しい。相国寺は臨済宗相国寺派の大本山で京都五山の一つ。並びいる京都市内の寺院にあって壮厳なる数ある塔頭を有する禅寺である。この由緒ある山内の林光院で葬儀・告別式は十日午後一時より営まれ日本山岳会から鄭重なる弔電を頂いた。新井家は代々神道とのことだが、ご長女がこの林光院ご住職に嫁いでおられ、葬儀・告別式は仏式にて行われた。

思えば新井先生に初めてお会いしたのは四十年以上も前の昭和三十年頃、当時先生は京都工芸繊維大学の化学の教官で山岳部長であった。もともと組織嫌いな私はこの大学に入学しすぐに山岳部に入ったわけではなく、勝手気ままに社会人達と山登りをしていた。私の下宿の隣の部屋は他大学の学生で、そこによく遊びに来る百々君（故人）という学生がいて、それが偶然同じ大学の山岳部員と判った。いつしか山の話となり山岳部長が新井先生といい、御嶽山の通だと聞かされた。勧めもあり面識することになるのだが今考えてみると、なぜ先生が当時山岳部員でもない私に会われたのだろう。一つは先生はとても学生に親しみと寛容をもっておられた人柄であること、もう一つは多分絵のご趣味であったのではないか。私は画学生であり、先生は有名な川端画学校に在籍されていたことのご縁ではなかろうか。思えば時期は定かならずも絵が取り持つ縁で私は三回生頃よりいつしか山岳部員になりすまし、親しくご指導して頂くことになる。先生の絵は実に上手く南画風の味のあるタッチとユーモラスさに溢れている。いま私の手元の一冊『世界画報―ふるさとの富士特集号』（一九七八―一）を繙くに、「日本全国郷土富士巡礼（文と絵・新井清）」に遺憾なくその多才ぶりを伺い知ることができる。その一文に「人は老いて世の無情を痛感すると、心のより処を輪廻思想に求めて四国遍路や西国巡礼の旅に出る。筆者は還暦を迎えた年に、若き日の山への情熱の炎が再びほむら立つのを覚え郷土富士巡礼の旅に出た。四国遍路は同行二人と編笠に書付けて独り旅立つという。お大師様と一緒の意味とか。わたくしはアッシュのクロス・ヘッドの杖を小脇にルックザックを背にして日本列島を巡った。曾遊の山々も巡礼行に加え改めて登ったのである」。読みすすむにつれ数々の名文が伺える。マルセップの北見富士でヒグマに逢い危うく命拾いした体験を、「向井君、クマの餌になりかけたァ」と持前の大きな地声で研究室を響かせておられた。その状況がこう書かれている。「河原でお茶を沸かしビスケットを食べていると対岸から犬の様な動物がチョロチョロ出て来て倒木に両手を置いてこちらを見た。仔羆だと腰を浮かしたとたん、前面のフキがザァーと音をたてて母羆がおどり出た。とっさに杖をかまえて立上がった羆と睨みあう。目尻が開くのと頭髪が逆立つのが危急の中ではっきりわかった。羆は唸りながら飛びかかろうとするが仔羆がまとわりついている。……母羆はじりじり後退

して仔雉を後肢にはさむや四つ足になって藪の中へ飛び込んだ」。そしてその場面が透明感のある水彩面で緊迫感とともにユーモラスに描かれている。なお郷土富士巡礼のおわりには、北は利尻島の利尻富士から南は薩摩の開聞岳まで日本列島の郷土富士を巡歴し日本人の富士に寄せる敬心と郷土愛がひしひしと感じられた、同時にまた自然を守る心の無さも痛感したとある。

新井清氏は「御嶽」にその情熱を傾けた。信仰登山の歴史深い孤高の山に近代アルピニズムの要素を持ち込もうとされた。これを実践的に行ったのが京都工芸繊維大学山岳部の部長時代であった。この当時が先生にとって最も華やかな時代ではなかったろうか。

部長指導のもとに御嶽継母岳地獄谷の一九五七年十二月A・Bルンゼ登攀記録（「白地獄谷初登攀」京都工芸繊維大学山岳部報『山彦』六号）。三浦山頂より継母岳、剣ヶ峰、摩利支天山を経て継子岳に至る御嶽の全連峰の一九五五年十二月積雪期完全初縦走を指導された（「関西学生山岳連盟報告」復刊一号）。

しかし、いいことは永くは続かない。私が大学を卒業した四年後の一九六二年暮れ、いわゆる三八豪雪の中、部員が中央アルプスにて大きな遭難事故を起こす。山岳部長として厳しい体験であり、大学当局の批判、世間の風当たり、遭難死した遺族への心痛と、数々の難問の中で腐心の極みであった。そしてこの事件の痛恨と悔やみは最後まで先生をして心を癒すことがないままに終わってしまった。

後年、把之沢の中西屋は由緒あるしっとりとした旅館で情緒派の先生にはことのほか愛されておられたが、それが近年廃業されたのを嘆き悲しみながら、「もう私の知る御嶽はいまや無い。スキー場開発で荒れた山肌は見たくも無し」。私が「それも時代の流れです。いいじゃないですか。今度八十歳になられたら、御嶽の濁河温泉で……」。「バカモノッ、わしの気持がわからんのか」とそんな会話も思い出す。それでも私は密かに米寿のお祝いを、この山域でやろうと楽しみにしていたのだが、あと三年を待たずに果たせぬ望みとなってしまった。

新井先生は日本歴史に深い造詣を持ち奈良大学にあっては古代染色の化学的研究に没頭されていて、歴史を語りだすと一日中でもその語りは止まらない。郷土富士七十七座を巡礼完結後、更には万葉の山々を尋ねる旅にと出られる。その徘徊の様を流麗なる文章で綴った単行本『万葉の山をゆく（大和編）』（ナカニシヤ出版）を一九八二年四月刊行された。その巻頭にこんな文章が載っている。「来し方をふり返ると、親しかった山仲間の半ばは、すでにこの世を去っていた。残った友達はピッケルの替りにクラブを振っていた。……。わたくしにとって、〝老いらくの山行〟は楽しく、〝青垣山隠(ごも)れる倭(やまと)し美(うるは)し〟の思いは胸中に満ちている。この書がゆかりとなって、〝山の辺の道〟とともに〝山の上(え)の道〟を辿る読

者があれば、……望外の幸せである」とある。先生は御本を出版されると、いつも私に自署名入りでお送り下さった。この本には次のサインがなされていた。「湖国春色来天地　弥生廿七日宵　清山人」。清山人とは新井先生の雅号である。老若男女の句友達との吉野夏紀行で青根ヶ峰の女人結界でこんな句を詠まれている。「歩を返へす　女人結界　ホトトギス　清山人」。常に体制に一見識を失わない新しい思想の持ち主であった。それがヒマラヤグリーンクラブの遠藤京子氏のような優れた女流登山家につながっていると思う。

数々の思い出のエピソードの一つ。

あるとき、山岳部合宿の終わりに、山麓の温泉宿を山岳部長（新井先生）が犒いの意味で奮発してくれた。先生もいっしょに泊まり温泉に入ったが、どうしたはずみか、湯上がり後部員の一人が先生のパンツと取り違えてはいてしまった。自分のパンツを先生がはいているのに気づき、「先生、それ自分のですが。実はそのパンツ縦走中二十日間はいたままでした」。先生、ナニッと言ったまま人前もはばからず、パッと脱いで放り投げた。翌朝、まだ前がムズムズしとるゾ、が先生の朝の挨拶だった。この白と黄色のパンツ騒動、先生は怒るでもなく山岳部長災難の笑い話とされていた。

ご冥福をお祈りします。

なお、「　」内は原文のまま、……箇所は中略部を示す。

略歴譜

一九一三年十二月十一日　京都市上京区に生まれる
一九二三年　京都西郊の愛宕山に登り、登山を始める
一九二七年　北アルプス燕岳・槍ヶ岳など縦走、以後日本アルプスの諸峰に登山
一九三三年　木曽川源流支谷を四季を通して綿密に探る
一九五〇年　日本山岳会に入会。会員番号三七八二（紹介者西岡一雄）
一九六二年　「イタニグサ寒天質の化学的研究」論文で理学博士（京都大学）の学位を受ける
一九六九年　奈良大学にて古代染色の化学的研究を行う
一九七三年　郷土富士巡礼を行い全国七十七座に登る
一九七八年　万葉の山々を訪ね続ける
一九九八年十二月七日逝去。享年八十四歳

主な著書

『御嶽とその周辺』一九五九年（朋文堂）
『御嶽・山岳地図』一九六八年（昭文社）
『万葉の山をゆく』一九八二年（ナカニシヤ出版）
『奈良案内地図帳』一九八一年（昭文社）

（向井裕彦）

# 中島　寛氏（一九三八～一九九八）

一九九八年十月六日深夜、中島寛さんはガンとの闘病も虚しく、亡くなられた。同年四月末の検査で肺の罹病が判明してから、思いがけぬ急な変転だった。その間、覚悟の上で、最後の山となった有明山に登り、自筆稿をまとめ山行歴を整理して著作集『一期一会の　山、人、本』編纂の準備を進めるなど、闘病の傍ら冷静に登山家としての最期のしめくくりをされて逝ったのであった。

中島さんは一九五七年一橋大学入学と共に山岳部に入ってから本格的な登山を始め、以後生涯にわたって常に山に係わる幅広い活動を続けられて来た。それは、エベレストを始め世界各地の山々でその時々の最先端を行く登攀を実践するというものから、人生を貫く趣味として心から山登りを楽しむというものに及ぶ多彩な登山活動であった。又、先人の登山探検の歴史や文化に尽きぬ興味を抱き広く読書渉猟して、いわば登山文化の本質的価値を追求して止まぬ研究や思索、そしてそれらの著述に至る息の長い知的活動の継続でもあった。或いは、そうした行動への衝動や好奇心の追求から積極的に培って来た、様々な層の多くの人々との交友関係の積み重ねや、往々にして周囲を率先して導くリーダー、論客としての活躍もあった。

そうした登山に係わる総合的な活動は、しかしながら基調として、学生時代も社会人としても、正面から取り組んだいわば生業たるものの傍ら、それでは燃え切らぬ余力を投じて人一倍の努力の結果成し遂げて来た特異な産物であった。学問や学生運動、エコノミストや企業経営者としての業績など、それはそれで別に語るべき高い評価がある中での、いうなれば第二の人生を貫く、オールラウンドなアマチュア登山家としての活躍だった。

中島さんの一橋山岳部時代は、戦前の大学山岳部の中で同部（当時は東京商大一橋山岳部）が第一線の活動を劃した全盛期の伝統を受け継いで、戦後何とか往年に値するレベルに到達しようと盛り上って来た頃であり、その渦中で皆をリードし最先端に立って活躍し、積雪期剱岳ヴァリエーションルート登攀など何度かの合宿にその抜群の力を発揮し、戦後の同部を代表する第一人者ともいうべき存在となった。卒業直後、同部の派遣のアンデス遠征隊員に選ばれ、ペルー・アンデスのプカヒルカ北峰初登、ボリビア・プヤ山群のアカマニ峰初登など、幾つかの登攀と共に、未踏地域の探査、開発途上国経済の現地調査も体験し、登山の枠を越えた海外エクスペディションというも

のの全体に目を開いたのであった。

社会人となった後も、冬期登攀を中心に登山活動を続ける一方、一橋山岳部ＯＢ会である針葉樹会の中枢としてその運営に腐心し、同会のヒンズークシュ遠征隊派遣の実現から、折から多発した山岳部員の遭難救助に常に身を挺して当たるなど、当時の会の屋台骨を文字通り支え、登山家としての出自の母体たる針葉樹会に対して限りない愛情と献身を尽くすという、とても余人には及ばぬ正道を当然のように貫き通した。

やがて、その存在は針葉樹会の枠におさまらず、同じ様な道を日本山岳会を舞台に展開することになった。一九六九年、七〇年のエベレスト南西壁登攀プロジェクトを、その企画の実質的な推進役の中心となって遂行した業績を、何よりも特筆すべきであろうと思うが、その前後にも、理事（『山岳』編集担当、一九六七―七二年）や評議員（一九八七―八八年）を歴任し、近年は百年史編纂委員の中核となって構想を取り纏めるなど、会の運営に多大の貢献をし、尚その手腕を嘱望されていた矢先であった。

日本山岳会における中島さんを語る時、それはどうしてもエベレストにぶつかってしまう。七〇年のエベレスト遠征の本質的な意義は、マナスルの時とは全く異って、世界登山史の潮流の中で当時の至上の課題とも云うべき南西壁をどう攻略すべきか、ということであって、その企画の構想から準備、タクティクスに至るすべてはそこに集中して然る可きであり、その他の夾雑物はすべて排除する所からそれは始まる。そのことを最も強く認識し、そのためにはどのように展開すべきか的確に組み立て実践していくための、最も高い能力を具備している者が居たとしたら、彼以外に誰か居ただろうか。自由な意志の集合であり高い理念を掲げる日本山岳会が、旧弊やリスクは顧みず、彼を隊長にしてすべてをまかせ、真の目的を見据えた試みに賭けてみたら、どんなにか素晴らしかっただろう。天候や実力不足で或いはやはり成功しなかったかも知れぬが、重要なのはそれに至るプロセスなのであって、本質の追求が完徹する中で、世界の中の日本山岳会の重みや、その後の会の存在意義といったものは、相当変わったものになって来たのではないか。

筆者の勝手な想像に過ぎないが、中島さんの生涯は、エベレストの展開で、丸で変わってしまったと思う。彼は職を抛ってエベレスト遠征に参加したのであるが、それはやろうとすることを見て、それに値する程度に応じて必要なら全人格を注ぎ込んでしまうという、妥協できない真剣さからであり、結果としてそれは挫折してしまった。そして、エベレストがなかったところまで意識としては戻り、本来そういう境遇であった、いわば社会人としての生き方をこれ又徹底的に貫き、成功者という

べき生涯を過ごした。そうでなければ、登山という文化的活動を生き甲斐として真っ先に置いて人生を送る意欲と覚悟を、その時は強く持っていたのであり、その道でも多分大成し、あの人は満足する人生を送ったことだろう。今、日本山岳会は貴重な人材を失ったのであるが、本当はエベレストの時、既に失っていたのだ。

その後も、前述の様に、彼は尚、登山家としての精神は生涯変わることなく、仕事の余裕を捻出しては余力のすべてを冬期登攀を始め多彩な登山活動に費し、海外駐在の多かった仕事の環境を利用するなどして、カナダ、ブラジル、ボリビア、ネパール等、世界各地の山々に登り、各国の岳人を仲間に引き込んだ。山へ向かう飛行場でたいがい離陸直前まで仕事の電話にかじりついていたというエピソードなどが、その徹底振りを物語っているし、日常的にマラソンを繰り返し走る内に、山も走って登るのが良いという境地に至るすさまじさであった。

そのエベレスト以降の活動については、いろいろな媒体に書かれた紀行、随想、論評などをまとめ、去る九九年四月、遺族により刊行された著作集『一期一会の　山、人、本』に詳しい。又、同時に、懇意の間柄であった日本山岳会会員の方々の寄稿も含む、針葉樹会編纂の『針葉樹会報――中島寛追悼特集』（第八十八号）も刊行されている。

略　歴

一九三八（昭和十三）年　三月生まれる
一九五六（昭和三十一）年　浦和高校卒業
一九五七（昭和三十二）年　一橋大学経済学部入学、山岳部に入部
一九六一（昭和三十六）年　一橋大学卒業
一九六二（昭和三十七）年　一月日立金属工業㈱入社、勤労部勤務
一九七一（昭和四十六）年　一月日本長期信用銀行入行、調査部勤務（日本山岳会エベレスト遠征参加に際し、前年日立金属退社）
一九八一（昭和五十六）年　七月同行サンパウロ駐在員事務所長としてブラジル赴任
一九八四（昭和五十九）年　七月同行ニューヨーク支店副支店長就任
一九八九（平成一）年　六月同行香港支店長就任。翌年一月、同行取締役就任
一九九二（平成四）年　三月宝幸水産㈱入社、六月代表取締役社長就任
一九九八（平成十）年　六月同社社長退任、取締役相談役となる。同月国立がんセンター中央病院に入院、以後自宅療養、東京衛生病院入院。十月六日深夜、肺がん

のため逝去

山　歴

一九五七（昭和三十二）年より一九六〇年にわたり一橋大学一橋山岳部に所属、剱岳を中心にした積雪期登攀他に活躍する

一九六一（昭和三十六）年　四～十一月一橋大学ペルー及びボリビア・アンデス遠征に参加、プカヒルカ北峰（プランカ山群）、アカマニ峰（アポロバンバ山群ププヤ山域）の初登を含め、七峰に登る

一九六三（昭和三十八）年　日本山岳会入会。会員番号五五七〇。紹介者は吉沢一郎・折井健一

一九六七（昭和四十二）年　日本山岳会理事に就任、『山岳』編集を担当する（一九七二年まで）

一九六九（昭和四十四）年　八月～十一月日本山岳会エベレスト第二次偵察隊に参加、南西壁八〇五〇㍍地点まで登攀

一九七〇（昭和四十五）年　三～六月日本山岳会エベレスト遠征・南西壁隊に参加、七五〇〇㍍までで断念

一九七一（昭和四十六年）　一月北岳バットレス第四尾根登攀、以後継続的に厳冬期登攀を中心とした登山活動を生涯にわたって続ける。槍ヶ岳北鎌尾根（79／1）、鹿島槍鎌尾根（93／1）、白山釈迦尾根（97／1）など記録多数あり

一九八〇（昭和五十五）年　九月カナディアン・ロッキー、アッシニボイン北稜及びエディス・キャベル東稜登攀。以後海外駐在も利用した海外登山は多岐にわたり、ブラジルのトレス・エスタドス（82／10）、ボリビアのワイナポトシ（83／6）、ネパールトレッキング（90・92）、他がある

一九八七（昭和六十二）年　日本山岳会常任評議員に就任（一九八八年まで）。

その後、九〇年代には、日本山岳会百年史編纂委員を勤め、編纂の大綱を構想としてまとめ、資料蒐集・編集を進めて来たが、道半ばとなった

（倉知　敬）

---

## 鈴木敏雄氏（一九三〇～一九九八）

日本山岳会入会一九六四年、会員番号五七一七番。下越（かえつ）山岳会員。

〝七十年も生きれば十分さ〟…何を言ってんですか、平均寿

命から見てもまだまだこれからですよ。…それに、勝手な言い分だけど鈴木さん、私は貴方に相談も出来、いろいろ教えていただけると思ったから今の仕事（山岳協会）を受ける（騙される）決心をしたんですよ。…だから弱音を吐かないで下さいよ。〃エヘヘヘ〃。

これが鈴木さんと交わした最後の言葉でした。その後、私も季節がら忙しくなり、二週間ほど経ってお見舞いに行くと、病室に名札がありませんでした。鈴木さんはどうされました？お帰りになりました。あぁ退院されたんですね。…いいえ。先程からの小さな胸騒ぎが大きな現実となってしまった。

まさか私が鈴木さんの湯灌の手伝いをしようとは夢にも思っていなかった。無念さと虚脱感に我を忘れた時が過ぎる。

鈴木さんは一九五五年に下越山岳会に入会されたが、以前にも登山経験はかなりあった様で、翌年、蒜場山一周登山を皮切りに、飯豊連峰を始めその前衛の山々と、その沢々に大きな足跡を残し、その記録は下越山岳会会報二一号～二九号に詳しく発表されている。

鈴木さんの越後人らしい忍耐力と不屈の精神が行間に溢れ、パイオニアとしての息吹が感じられる。〃藪は道なり、沢も又道なり〃、故藤島玄越後支部長の教えを守り続けた一人である。

鈴木さんがパイオニアとしての本領を如何なく発揮されたのは、一九六二年前後で、特に内の倉川の完全遡行記録がある。多量の積雪が雪崩となって磨き上げた両岸と、積雪が生み出す急流に削り取られたV字谷を攀じ、泳いだ遡行記録は、当時の我々にも驚嘆の目で捕えられ、その後の山歩きの目標となった。この頃が鈴木さんの現役としての絶頂期であった。

鈴木敏雄さんは一九六四年、当時の日本山岳会越後支部長であった藤島玄氏と、佐久間惇一両氏の紹介で日本山岳会に入会される。入会当初から支部長の片腕として支部組織の拡大と、充実の為に活躍された。

鈴木さんは会津との交流には事のほか精力的に活動されていた。一九六七年会津では、会津地区山岳連絡協議会の設立の為に、越後支部長の藤島氏のアドバイスを乞う事となり、その時、藤島支部長と共に会津を訪れたのが、会津との交流の始まりであった。

飯豊連峰を仲立ちに、越後岳人と会津岳人との交流も年を追うごとに深まり、一九七〇年、故今西錦司氏の六〇〇回記念登山でも、会津との人脈を十分に生かし、まとめ役をかっておられた。やがて誰言うとはなしに、「鈴木敏雄会津の神」などと異名をとる事になる。

現在の越後と会津との交流の基を作られた人である。今も越後支部には数多くの会津岳人が名を連ねている。

鈴木敏雄さんは越後支部での活躍は言うに及ばず、新潟県山岳協会でも、鈴木さんの持つ几帳面さと、心配りで名理事長と

して、二代の協会長の元、八期十六年の長期に亘り理事長の要職を務められたのは、多くの人脈と県内各地を知り尽くしていたからと頷ける。

この様な人望が認められて一九九五年、新潟県山岳協会長に推される。斬新な考えと、リーダーシップに大きな期待を背負ってスタートした。しかし就任一年余で発病され、入院生活を余儀なくされた。闘病生活も二ヶ月ほどで健康を取り戻し、会務に復帰されたが、激務の続く協会長の任には少なからず不安を感じたのか、協会長の任を後輩に託された。

退任後は心強い相談役として、協会発展のために尽力される傍ら、豊かな人脈をかって県内外の山岳団体の友好関係促進に磨きをかけておられた。

そんなかかわりの中で、奈良県の奈良山岳会との交歓登山会が、一九九七年の晩秋、奈良県南部の山岳を会場にして行われ、私や鈴木さんはハイキング組で、大普賢岳、大台ヶ原等を楽しんだ。鈴木さんの軽やかな身のこなしで山を楽しむ姿に安堵し、打上げ会では奈良岳連会長の山口健次郎氏と楽しそうに語らう時、鈴木さんにとってこの上ない至福の時であったろうか。帰宅後も奥様にすばらしい山であった、楽しかった、健康にも自信がついたと話しておられた。

しかし一九九八（平成十）年春再入院される。病院医局勤務当時からの名医と、あらゆる薬石の効もなくご親族、友人、多くの岳友の願いも空しく同年六月静かに生涯を閉じられた。

越後支部としても、又、新潟県山岳協会にとってもその痛手は計り知れず、また一人の良き先駆者を失った。

鈴木敏雄さん安らかにお眠り下さい。　合掌。

略　歴

一九三〇年　新潟県小須戸町に生まれる
一九五五年　東京農大卒業。同年新潟県庁入庁。同年下越山岳会入会
一九六四年　日本山岳会入会、越後支部に所属
一九七三年　新潟県山岳協会理事長就任（八期十六年）
一九八四年　㈳日本ネパール協会新潟県支部設立発起人の一人
一九九五年　新潟県山岳協会会長就任（九七年まで）
一九九八年六月六日　逝去。享年六十九歳

（井出秀雄）

## 久野　英一郎　氏（一九二六～一九九八）

**二度目のサンチャゴ**

大学出の初任給が一万円をチョットオーバーした一九六三

（昭和三十八）年当時、日本の登山界は輸入品の装備であるラフマのリュックサック、モンクレの羽毛服が専門店にちらほら並び登山者の羨望の的になっていた。政府は国民車構想を打ち出し国民誰しも頑張れば小型車ながらマイカーの購入が射程範囲に入りつつある夢の時代の到来を告げつつあった。東京―大阪間を三時間で結ぶ夢の超特急・新幹線が一九六四年秋のオリンピックを目標に急ピッチで工事が進んでいた。そして一九六五年の四月には国民誰でも旅券取得が可能になり外貨が一渡航に限り五百米ドルを買える様になった。しかし一ドルは三百六十円であった。今考えると信じられないほど日本全体が貧乏な時代であった。

そんな時代に久野英一郎氏は登山者であれば一度は夢に見る海外遠征を計画された。しかし印―パ戦争の影響からヒマラヤへの門戸は閉ざされ、登山の対象はヒマラヤ以外の山にシフトせざるを得なかった。最初はニュージーランドのマウントクックを目標に計画されたがいかんせん時代が時代のため日本人の遠征記録や経験者が少なく、渡航方法を含めた情報入手は困難を極めた。顔の広かった久野氏は神戸大学山岳部の勧めもあって目標をセントラルチリーアンデスに向けられ、季節も前人未踏の早春に決められた。

さて現実問題となると先立つ金はもちろん、サラリーマンにとって長期の休暇取得は夢又夢の時代だった。当時は正当な権利である有給休暇をたった一日とるにしても随分勇気のいることであった。久野さんは当時竹中工務店の中間管理者として重要なポストにおられ、久野さんの立場では長期に会社を休んで外国の山登りに行くなど、まさに鹹を覚悟での決断であったに違い無かったと思う。許した会社も偉いと思うがそこまで頑張った久野氏のゆるぎ無い信念と情熱が会社の厚き壁を破ったものと思う。

久野さんがあの立場で出来るのだから我々も諦めたらアカンと心に言い聞かせて毎日を過ごしたものである。久野さんは何時も口癖の様に、遠征は日本を出発すれば半分終わったも同じやと言われ、今の苦労は何としても乗り越えよと励まされた。と同時に久野さんは金の無い、当時若かった隊員の為に、可能な限りコネを駆使し私財を投じて東奔西走、渡航の船の手配やら、我々若い隊員の会社に足を運ばれ会社トップに、社員の遠征参加への理解と長期休暇に対して配慮をしてくれるよう頼んでくれた。

こうして全日本山岳連盟セントラルチリーアンデス登山隊の隊員全員が苦労に苦労を重ねてチリーの首都サンチャゴに集結したのは一九六五年十月の早春であった。

当時日本山岳会の会員であられた山岳画家の山川勇一郎氏はサンチャゴにすんでおられた。山川氏は、日本大使館に金山大

使を訪れたお客さんの似顔絵書きをされたり、サンチャゴの町に出て、一般大衆の人達の似顔絵書きをされていた。そんな訳で山川さんのファンは政府の御偉方から一般大衆まで相当幅広かった。山川画伯は画描きさんとは言え過去にヒマラヤまで行かれた超一流の登山家であられ、我々の大先輩である。山川画伯は氷河に移り変わる茜色の朝焼け夕焼けを是非ともキャンパスに描きたいという並々ならない創作意欲を持っておられた。久野氏にベースキャンプまでの参加を懇請された。そんな訳で山川画伯はベースキャンプで絵の創作活動をされるようになった。

私が上のテントで夕飯を食べていた時、ベースから山川画伯がテントに帰還していないので直ちに下山せよとの伝令があった。下山して全員で捜索する。三日目、かすかな踏み跡を発見、辿っていくとクレバスに直径五〇㌢程の穴が開いていた。山川氏を救い上げ人工呼吸を続けたが意識は戻らなかった。周囲は素晴らしい氷河の景色で、さすがは画描きさんの選定ポイントだと感心した。

サンチャゴでは故山川氏の葬儀が Parroquia Vera Vruz (J. V Lastarria 124 Santiago) 教会で執り行われるよう手配が進んでいた。我々登山隊も葬儀に参列したがなんとも奇妙であった。山川氏はクリスチャンか仏教徒か解らないのに本格的なカソリック教徒の葬儀だった。しかしサンチャゴの人達のお別れの人は絶え間なく教会から墓地まで長い列が続いていた。そして我々登山隊が初登攀した無名の山をチリー山岳連盟と協議しセロヤマカワと命名した。

久野氏は隊長として山川勇一郎氏の遭難と葬儀を体験された。その時から自分が隊長の時に事故を起こしたことへの責任に悩み続けておられた。

時代が変わり完全週休二日制が定着し、毎日仕事をしている人は仕事しか知らない仕事中毒者とも呼ばれ、軽蔑の眼で見られるような時代になった。又高速道路が日本全国に張りめぐらされて自家用車は家族最低一台保有されるようになって来た。おりからのアウトドア・ブームで今まで専門店しか販売されなかった高級登山用品はスーパーマーケットやホームセンターに山と積まれ販売されるようになって来た。新幹線には新型車両が投入され東京―大阪二時間半を可能にした。又、厳しかった外貨管理も緩み、国民総外国旅行の時代になりクレジットカードで外国で買い物が出来るようになった。我々登山隊が帰国してから三十年が経過していた。

三十周年を記念して再度チリーに行く話が持ち上がったのは、久野さんが肺癌を手術され脳に癌が転移してガンマーナイフ手術をされた直後であった。片道二日もかけて一九九六年の年末にサンチャゴに到着したときは相当疲れておられた様であった。

それでもサンチャゴ到着と同時に山川画伯が遭難されたセロヤマカワの登山口まで行って献花しご冥福を祈られた。また、山川氏が埋葬されている墓地（Cemeterio General, Crematorio）に三十年ぶりにお参りに行かれた。

墓地はチリー在住の日本人によって手入れが行き届いていて生花も絶えないようであった。墓参りが終わった時、事故の責任に悩みぬかれ三十年ぶりに現地にきて墓参りしたので気が晴れたとおっしゃっていた。その時、私は日ごろ豪快な笑いで何ごとにも動じない久野さんに繊細で面倒見の良い人柄を改めて垣間見た。

二度目のサンチャゴから帰国後、脳に転移した癌は極度に悪化を辿り、久野さんの岳友の一人である執刀医の大西ドクターの手厚い治療と大勢の岳友の懸命な祈りにもかかわらず、一九九八年一月十日山川氏のおられる世界に出立され、久野氏はついに帰らぬ人となった。

故久野英一郎氏のご冥福を心からお祈り致します。

（久野英一郎氏は一九六五年日本山岳会入会。会員番号五八七九。紹介者は水野祥太郎・陸田峠郎）

（松本憲庚）

---

## 大内幸雄氏（一九二九～一九九九）

森を慈しみ、支部会員に「自然の素晴らしさと偉大さ」を説き続けてきたクリスチャンの大内幸雄さんが、一九九九年六月三日永眠された。三月二十一日緊急入院されてから、約三ヶ月半後のことである。

登山に興味を持つようになったのは何時のことか知る由もないが、営林署に勤務していた父親の影響が少なからずあったのではないかと思われる。一九二九年、岐阜県中津川市に生まれた大内さんは、一九四八年に岐阜大学農学部の前身である岐阜農林専門学校を卒業した後、中津高校教諭を経て一九五四年に岐阜大学に転勤し、一九九二年の退官まで農学部で林業経営学を担当してきた。

山行を共にした折、大内さんがよく話していたことを思い出す。「これまでは単に山や森林を学問や研究の場としてのみ捉えてきたが、そういう自然観に一大転機を与えたのが、今西錦司さんとの出会いであった」と。

岐阜大学学長に就任した今西さんと意気投合した大内さんは、同好の士を募り大学の教職員からなる山岳会「岐大御嶽会」の創設と運営に奔走した。御嶽会の発足と前後して、一九七三年

にＪＡＣに入会（会員番号七五一五。紹介者藤井洋・今西錦司）し、岐大御嶽会、京大学士山岳会、大垣山岳協会および東海支部の有志らと共にＪＡＣ岐阜支部の設立に尽力された。

支部にあっては副支部長、自然保護委員として支部運営を助ける一方、国内の山行はもとより、アルプス、チベット、台湾、韓国その他の国外の山々にも目を向け、生活の場としての山や森の活用の仕方を模索する日々を、ホビーにまで昇華させて楽しんでいた。山行では、森や樹木の講義で同行者の知識を試すのみならず、ウィスキーの水割りに合う旨い水は何処の谷川の水か？といった蘊蓄まで披瀝する多才な山男であった。

岐阜大学を退官後、自然学研究所を主宰して軌道に乗せ、後輩を養成しつつ、さらに今西イズムを深化させた自然学を構築しようとしていた矢先の急逝であった。こよなく山と酒を愛した大内さんとの山行のエピソードは尽きないが、別の機会に譲りたい。

最後に、「私たちは、自然と向き合ったとき、自然が世代を超えて生命を引き継ぎ、長い時間をかけて緩やかに変化していることに気づかないことが多い。このことを本当に理解できるのは、自然を相手に日常的に仕事を続けている人たちだけかも知れない。自然を利用し、多くのものを得ようとするならば、自然の移ろいの時を待ち、時に合わせる心を持たなくてはならないだろう」との大内さんの持論を紹介して、追悼の言葉とする。ご冥福をお祈りする。

（西條好廸）

## 根津皖一（きよかず）氏（一九三九～一九九八）

根津皖一君が巻機山で遭難したという電話が入ったのが事故当日の十一月十五日の夜であった。この時、私にはこの事故なるものが理解できなかった。とりあえず、この日の内に十日町のお宅に急ぎ伺った。翌早朝、仲間と共に巻機山の登山口まで車を走らせたところ、新潟県警ヘリが飛来し、沢の中に倒れている根津君を発見した。すぐに浦佐の大和病院に運ばれたが、すでにこときれていた。私はこの事故に対して云うべき言葉を失っています。私達は学生時代、そして、ここ十年にわたり君と共に過ごした国内の山々をはじめ、アラスカ、ヒマラヤの山々で元気で登山した日々が強烈な思いとして残っているからです。

おもえば根津君との最初の出会いは、一九五八（昭和三十三）年に君が日本大学体育会山岳部に入部した時から始まります。クラブ入会の切っ掛けは、当時十日町にいた日本雪氷学会会員の高橋喜平さんの薦めで、私達の大学とクラブを選び入ってきたと聞きました。あの当時の山岳部は部員が八十名以上いた大

世帯でした。その中で何故か、毎回のように丸亀の山崎さんと君と私の一緒の山行が大半でした。しかし、学生生活は冬の穂高の遭難で十分な登山活動ができなかったが、この遭難が私たちの山への関わりと、夢を大きく育ててくれた様な気がします。

毎日の行動のあとテントに入ると、君があの朴訥な重い新潟弁で語った。なぜ自分が日大山岳部を選んだかと言う事や、君の父上から譲り受けた山内のピッケルの由来など、いまは懐かしい思い出となってしまいました。それからお互いに社会にでて、だいぶたった五十歳を目前にした穂高・涸沢への山行で、私達の仲間の誰となくヒマラヤに行こうと言い出したことが、その後の私達のヒマラヤ登山となりました。

この頃、君の十日町での生活は家業の織物業の合い間に、子供達をつれハイキング、海や川に魚釣り、春は山菜とり、夏は芝生・花・野菜・杉林の手入れにゴルフと忙しい日を送り、冬は屋根の雪下ろしとスキーを楽しんでいた様ですね。しかし、私達の剣沢小屋での集まりには一日で早月尾根を越え登ってきたり、穂高・涸沢での集会は常念岳を越え、北尾根から前穂を越えて下山するなど健脚ぶりを示していましたね。

それからの十年間、仕事をやりくりして挑戦したアラスカのマッキンレー峰の登山に始まり、ヒマラヤの八千㍍峰の登山、チベット高原台地からのチョー・オュー峰の登頂、そして三年後のネパールのダウラギリⅠ峰の登頂と、昨年のカラコルム・ガッシャーブルムⅡ峰の登頂で、君はこの三つの頂きを強靱な体力と旺盛な登攀意欲で踏んだ幸せ者でした。これらの登山中に君が聞かせてくれた話では、君の父上のピッケルの話に代わり、君の丈夫で元気なお母さんの事、寛容で懐の深い奥さんの話、子供達の学校や就職の話、越後の静かな谷の沢登りや、春の山スキーの話など、越後の四季折々の話がほとんどでしたね。それらの話を聞くと君がいかに家族から愛され、愛する土地と自然に恵まれた幸せ者であるかを知り、君の羨ましい家族像を感じました。

私達は今度のガッシャーブルムⅡ峰の登山を最後に八千㍍峰はこれで打ち止めにしようと話合った事もありました。そんな矢先の事故です。君はまだ此の世に登りたかった山があった様ですね。私があれだけ云ってもエベレストだけは登りたかったと聞いています。君にとってあの高みとはどの様な意味をもっていたのですか。「山高きが故に貴し」と言うことか、君にとって人生とは、登山とは、家族とはどの様な意味をもっていたのでしょうか。君は家業と家族のことを思い、越後の山々と自然を言葉にするとき、君の目と言葉は生き生きと輝いて見えました。最近では地元の登山クラブに入り、若い人達と付き合うことを楽しみにしていたようですね。そんな事を思うと、今日の君との別れは、私にとって納得できません。私達はあの八千㍍の頂で、蒼天を仰ぎ見たとき、私達の中に自然と宇宙の深さを

感じたはずです。そして帰る家庭の暖かさを感じたはずです。君もそのバランスのうえで登山を楽しんでおり、そこに君の人生への生きがいがあったはずです。そんなことを思うと私にはやりきれないものを感じます。

山での死は、君もよく知っていたはずです。どの様に頑張っても、自然が自然であるかぎり事故はなくならないであろう事。どの様に注意深く行動しても、生に対し死は突然理由もなく訪れる事も知っていたはずです。君にとって今回の巻機山登山では、たんに雪の上で足を滑らせた事だったかもしれません。巻機山は君にとって、これまでに数十回となく登り、親しみ知り尽くした山だったにちがいありません。これからも君が元気でいたなら、度々この山を訪れたでしょう。君の帰ってきた月曜日の巻機山麓からみた越後の山々は今年最後の見頃の紅葉に彩られ美しかった。……こんな越後の山々に抱かれて旅立った君は幸せかも知れない。といま思いはじめています。　合　掌

略　歴

一九三九（昭和十四）年十二月二十八日　八王子市において根津準一郎の長男として出生、十日町小学校、中学校、高等学校を出て、父準一郎氏の感化を受け中学校より登山を始める

一九五八（昭和三十八）年十月　日本大学工学部工業経営学科入学。日本大学体育会山岳部入会。季節をとわず北アルプス、南アルプスに親しんだ。特に、冬山登山後のスキー合宿では頚城山塊の妙高山、火打山、焼山、薬師岳、地蔵岳、佐渡山を先頭で登りスキー登山を楽しんだ

一九六二（昭和三十七）年三月　日本大学工学部工業経営学科卒業。同四月江戸屋織物に就職

一九六四（昭和三十九）年　根準紋織㈱に就職。八〇年同社代表取締役に就任

一九八八（昭和六十三）年五月　アラスカ・マッキンレー峰（六一九四m）登頂

一九九一（平成三）年六月　日本山岳会入会（会員番号一〇九七〇、紹介者池田錦重・松田雄一）

一九九一（平成三）年十月　チョー・オュー峰（八二〇一m）登頂

一九九四（平成六）年十月　ダウラギリⅠ峰（八一六七m）登頂

一九九八（平成十）年八月　ガッシャーブルムⅡ峰（八〇三五m）登頂

一九九八（平成十）年十一月　越後・巻機山スクビ沢で逝去。享年五十九歳

（池田錦重）

## 三和裕佶（ゆうきち）氏（一九四六～一九九九）

「三和さんが層雲峡で滑落した！」。一月三十一日午後四時頃、大雪山層雲峡ロープウエー事業所から植田惇慈会員が電話で三和裕佶氏の滑落死を知らせてきた。唐突で我が耳を疑ったが、現地で行動を共にしていた仲間からも続々と連絡が入り、現実のものとなってしまった。あの慎重な三和氏がなぜ。五日前に元気な姿で逢っていただけに信じられない椿事である。

三和氏と初めて逢ったのは一九七〇年代の後半だったと思う。当時、私は丸善札幌支店に勤務していて、洋書売場から呼出しがあり、受付に行ってみると三和氏であった。海外で発行している先鋭的な山岳雑誌を購読したいという相談で、その時はアメリカで発行している「CLIMBING」だったか、イギリスの「MOUNTAIN」だったか忘れたが、いずれかを予約して帰られた。滝川市に熱心な登山者が居るものだと感心し、心強く思った。

その甲斐あってか、後に輝かしい登攀記録を次々と樹立していった。三和氏が厳冬の層雲峡銀河ノ滝に、初めてアイスハンマーとショートピッケルを両手に、今でいうダブルアックスで挑んだのは二十八歳の時であった。そして三十七歳の一九八四年から八八年にかけて、層雲峡渓谷に懸かる四つの氷瀑の初登攀に成功している。その記録である「大雪山層雲峡四つの氷瀑登攀」を、日本山岳会北海道支部三十周年記念誌『北海道山岳』に掲載する原稿を昨年暮れに手渡され、この日、私はワープロ入力に没頭していた。それが遺稿になってしまうとは、なんとむごいことであろうか。

三和氏が日本山岳会に入会してから山に同行する機会が多くなった。一九九六年九月に南アルプスの北岳に仲間たちと集中登山を行った時は、彼はバットレスに登り満足していた。下山後、集結した大樺沢でテントを張り、遅くまで海外で活躍した話をしてくれた。翌年三月、私が登ってみたかった札幌近郊の八剣山三峰北壁を、彼に頼んでザイルで引っ張り上げてもらおうと二人で出掛けた。基部まで積雪を伝い、氷結した脆い岩層をトップで緻密に登ってもらったが、気温が上昇すると浮き石がボロボロと崩れ、ホールドが得られず途中で断念した。その無念さを晴らすように、彼は「厳冬期にまた再挑戦する目標ができたよ」とにこやかに慰めてくれた。その年の六月に北海道支部の同好会活動として、初めて小樽赤岩山で岩登りを実施し、三和氏の指導で「三つの岩塔」に九人の会員が集まった。翌九八年十月にも赤岩山「三叉路」で再び行われた。

最後の一週間は別れを惜しむかのごとく逢っていた。一月二

十五日夜は支部委員会が開催され、三和氏は七月に開催する支部三十周年記念登山で、トムラウシ山から大雪山への縦走リーダーをお願いし、また自然保護委員として高山植物盗掘防止運動の担い手として活躍を期待されていた。それらを席上で熱っぽく論議したが尽きず、帰途、ＪＲ札幌駅舎内の飲み屋で遅くまで話し合った。その翌日、まだ酔いが醒めやらぬ時刻に、編集中の『北海道山岳』掲載の写真を持参され、校正も手伝ってくれた。虫の知らせだったのか、それが永遠の別れになってしまった。

主要略歴

一九四六年三月　北海道滝川市で生まれる
一九六五年四月　国鉄滝川機関区に就職、滝川山岳会に入会
一九七四年七月　カフカズ山脈シヘリダ北壁新ルート開拓
一九七七年五月　アラスカ、ランゲル山塊ボナ遠征
一九八〇年四月　利尻山仙法志稜から北壁登攀
一九八〇年十月　北海道山岳連盟の中国ミニヤ・コンガ偵察隊に参加
一九八四年六月　芦別岳北壁カンテ、アルファルンゼ左股奥壁富士鉄ルート、第一稜、本峰西壁を継続登攀
一九八六年二月　層雲峡銀河ノ滝から黒岳北壁北稜継続登攀
一九八八年二月　層雲峡残月峰対面に懸かる氷瀑バニシング・ムーン登攀
一九九一年七月　アメリカンロッキー　グランドティタン登頂
一九九二年五月　日本山岳会入会。会員番号一一一七五番。紹介者中島英彦・小須田喜夫
一九九九年一月三十一日　層雲峡七賢峰ノ滝で札幌山岳連盟主催の氷壁研修会に講師として参加、研修終了後、トップロープの支点回収中にバランスを崩し滑落、病院に運ばれたが間もなく死亡

著書に『とっておき北海道の山』東京新聞出版局　一九九五年発行、共著に『日本登山大系①』白水社　一九八〇年刊などがある。

（高澤光雄）

## 椎名厚史氏（一九七〇～一九九八）

小学生の時、故・長谷川恒男のジュニア・アルピニストスクールで山登りの魅力を知った椎名厚史は、中学校を卒業する時には、山岳部のあることを条件に高校を選んだほどだった。大学は早稲田に進学し、山岳部に迷うことなく入部する。そして大学を卒業した後も就職はせず、アルバイトをしながらヒマラヤ

登山を繰り返す生活を送っていた。

九五年のムスターグ・アタ山群未踏峰を皮切りに、九六年K2、九七年ダウラギリ、そして九八年のカンチェンジュンガと、すべて日本山岳会青年部を母体とするヒマラヤ登山に四年連続で参加していた唯一の人間が椎名だった。

ちょっと太めに見える椎名だが、裸になれば筋肉質だし、心肺機能は抜群だった。彼にとって初めての八千m峰登山であった世界第二の高峰K2でも一次アタック隊に選ばれ見事登頂に成功。翌年のダウラギリ登山では、副隊長の棚橋とともに、多くを隊の先端で行動した。そしてカンチェンジュンガでは、もはや彼はまぎれもなく最強の隊員の一人だった。彼が一次アタック隊で頂上に立つことを疑うメンバーはいなかったという。そんな彼があのようにあっけなく、カンチェンジュンガの雪の中で永遠の眠りにつくなんて、誰が想像しただろうか。

九六年のK2登山に続き、椎名とは九七年のダウラギリ登山もともにした。ダウラギリ隊の隊長であった私が、K2に一緒に行ったメンバーの中からあえて椎名に声をかけたのは、彼の登山の実力は当然のこととして、もう一つちょっとしたきっかけがあった。

毎年十一月に行なわれている日本山岳会学生部主催のマラソン大会に、青年部からも一チーム出すよう、私は青年部担当理事の宇田川さんから厳命を受けていた。それでK2に行ったメンバーなどを中心に青年部の仲間の幾人かに当たってみたのだが、一様に「えーっ、マラソン大会ですかあ……」という消極的な返事しか返ってこない。青年部の委員と言っても、ふだん真面目に走っている者などほとんどいないから、マラソン大会など誰も出たがらない。それが椎名一人だけは例外で、「はい、わかりました」と元気よく即答してくれたのだ。その返事を聞いた時、単純な私は椎名をダウラギリに誘おうと決めた。

マラソン大会でも椎名は皇居一周をきちんと一八分台で走り、彼のがんばりもあって、その年（九六年）青年部チームは五位に入ることができたのだった。

ランニングだけではなく、当時彼が住んでいた東伏見の早大山岳部合宿所から市ヶ谷のJACルームまで、彼はシャツを汗だくにしながら、よく自転車で通ってきていたものだ。そうした椎名の真面目な姿勢はトレーニングのみならず、その他の遠征準備などにもかいま見えた。彼のノートには目指す山の細かなルート概要とイラストが、子供っぽい彼の字で、しかしたいへん几帳面にびっしりと書き込まれていて、それを見ておおいに感心させられたこともあった。

そんな椎名の生真面目とも言える性格は、時に他人に対して厳しさとしてぶつけられた。例えば私など年上の人間に対してでも、納得のいかないことは理詰めに議論をふっかけてくる。「うるせえなあ」と思うことがないわけではなかったが、私の

ようないいかげんな人間には、仲間に椎名のような存在がいることはありがたいことでもあるのだった。根は素直でとても純粋である。だからこそ彼は多くの良い仲間を得ることができたのだろう。

椎名にとっておそらくは人生最大の試練であった、大学時代の剱岳での仲間の遭難事故のことは、私たち日本山岳会の仲間うちでは、彼はほとんど話さなかった。自分がリーダーとして山に入り、その中で後輩ら三人の尊い命が失われてしまったことを、当時二十歳台前半の、あの真面目な椎名がどれほどつらく重たく受けとめたかを、私は決して想像することはできない。椎名が亡くなった後に彼のお母さんから伺ったのだが、剱岳の事故の後しばらく、彼は病院の精神科に通っていたそうだ。亡くなった三人の仲間の写真を遠征に必ず携行し、K2でもカンチェンジュンガでもその頂で彼らの写真とともに椎名はカメラにおさまっていた。彼らの分まで自分が登ろう。そんな気持ちがあったのだろうか。

でも、私が知っている椎名厚史は、そういった暗い影を引きずっているようには見えなかった。大学の遭難事故とは直接関係のない日本山岳会で、彼も解放された気分で登山を楽しむことができたのかもしれない。私たちがともに過ごした時間は——山も、外国の町も、東京での準備も、富士山でのトレーニングも、あるいは市ヶ谷での居酒屋も、本当に楽しく充実したものだった。椎名は私にとってもこの数年間、最も身近なところにいた友人だった。彼の死は、今でもなんだか実感をともなわない。椎名、また一緒に酒飲んだり、ヒマラヤへ行ったりしたかったなあ。

（椎名厚史氏は一九九五年入会。会員番号一二一三三。紹介者は村木潤次郎・山本篤）

（松原尚之）

## 赤坂謙三氏（一九六八〜一九九八）

一九九八年五月二十二日、千葉大学山岳部同期の赤坂謙三君がカンチェンジュンガ登頂後帰らぬ人となった。今回赤坂君に追悼の言葉を捧げるにあたり、正直に言えば想い出をどのように整理するか、また何を書き残しておくべきか？まだ混沌とした状態である。ただ、私達が山登りに熱中し始めたのは十数年前。当時と現在では、大学山岳部や海外登山に対する学生の意識や一般的認識が徐々に変化してきたのではないかと思う。そこでこの機会に、当時我々が登山に何を感じ何を求めていたのか回想してみたい。

赤坂君と私が千葉大学山岳部に入部したのは一九八八年（昭

和六十三年）の四月上旬であった。新入生が部活動を見学する「サークルの日」というのがあり、赤坂君と私はその当日山岳部の部室で顔を会わせた。お互いに学生寮生であり、バック一つで田舎から上京してきたばかり。寮の先輩方からあれこれと舎弟のように扱われていた頃であった。その当日、先に部室に居た彼は他の部を覗きに行く気は全くなく、千葉大の園芸学部よりも山岳部に来ましたといわんばかりであったのを覚えている。時代的にはバブル期の直前。学生生活が、華やかでチャラチャラとした軽薄さの代名詞になりつつあった時代である。そんな中、山岳部で寮生の我々は、夢はあれどもお金はなくファッションや流行にも縁遠い時代遅れの新入生をしていた。一月の寮費は水道・光熱費込みで七千円、夕食代は三百五十円。手持ちのお金がいつもなく、寮費を常に滞納し、割のいいバイトの情報ばかり交換していたように思う。

そんな頃、山岳部O・Bの口癖は、「山岳部なんだから、山登りと勉強だけやっとけば他にする事はないだろ」であった。これは意外にも良く順守した。実際のところ、我々は他のことに手を染めるほど経済的に豊かではなかったのである。赤坂君とは、山登り（合宿）の時、装備購入のためのバイトから合宿後千葉で酒を飲むまで一緒に過ごした。初めての合宿は一九八八年四月二十八日入山の白馬であった。当然お金がなく個人装備すら購入がままならない。二人ともクロロファイバーの下着、靴下、手袋だけ自分で買って、あとは全部先輩からの借り物で間に合わせた。交通費を安くあげるため、深夜一一時新宿発の急行アルプスの自由席を求めて一年生は七時にホームに集合したりした。

合宿に参加した同期は五人。一週間の行程で、テント生活をはじめ、歩行訓練・ピッケルストップ・アイゼン歩行・本峰アタックをこなした。体力を自負し意地を張り合った五人であったが、後半は汗とともに気力すらも抜けていくようであった。合宿中、遠く八方尾根のスキー場からユーミンの曲が流れてきたのを覚えている。黙々と雪の斜面にプラスチックブーツを蹴り込みながら、そんな文化とは一線を画し、「下界」と呼んで見下すような連帯感が我々に芽生え始めていた。

記憶に残る想い出は下山日の一九八八年五月五日である。その日は日本・中国・ネパールによるエベレスト三国交差縦走のアタック日であった。山岳部一同、白馬の旅館のテレビで遠くエベレストからのライブ中継を見ていた。未だ見たことのない白と群青色だけのヒマラヤの光景、トップクライマーの力強さが強烈なリアリティを持って伝わって来た。一一時過ぎ、サミットが一歩一歩近づき、山田昇さんがピークから鯉のぼりを振った。振り返ればあの瞬間が赤坂君はじめ自分達の中に「青春を賭けるもの」を刻んだように思う。我々がその瞬間登山という

ものにシビレタのは、森の緑や、鳥の声や、沢の紅葉と言った山の魅力ではない。精神と登山の何かがシンクロした。それはあの時ヒマラヤから送られてきた、群青色の空、氷のリッジ、登攀具とアイゼンがチャリチャリ・キスキス鳴る音、トランシーバがひろう交信のノイズであった。

合宿をこなして秋が近づく頃、次の春合宿はネパールでという話が出始めた。一年生からは赤坂君と私の名前が挙がっていた。しかし一年生の我々にとって「ヒマラヤ」という言葉は神秘的であると同時にあまりにも重圧であった。「日本の冬山も満足に登れないんだし、今回は参加を見合わせよう」と二人で話し合い、その旨を主将の酒井先輩に電話したことがある。先輩は不在らしく電話は繋がらなかった。そのうちに監督（吉永英明氏）は一年生に限り、参加費の全額を立て替えてくれるとまで言ってくれた。ヒマラヤへの道は夢に向かって一直線というわけではなかった。野望が半分、あとの半分は見えない何かに背中を押されたお陰と言えるかもしれない。ヒマラヤ行きの不安のせいか彼と私は、秋の北鎌合宿辺りからどちらともなくトレーニングを開始した。寝る前に学生寮から稲毛海岸まで走って行き、帰りには浅間神社の階段でお互いを背負って上り下りするのである。夜遅く眠っている相手を起こすのはお互いに多少気が引けたが、トレーニングを拒む事は一度もなかった。懐かしい限りは当時の二人の体重であり、赤坂五六㌔、亀山五四㌔であった。

しかし、装備の方は相変らず購入がままならなかった。十月に入り、冬用シュラフを買うために、深夜パン工場にバイトに行く事にした。日給一万円の魅力と一日通う毎に購入できるシュラフのグレードが上がる興奮で学校もサボった。一週間後津田沼のヨシキスポーツに行った。店長に実状を話すと、エルキャピタンの最高級シュラフを仕入れ価格六万八千円で売ってくれた。次はピッケルである。当然二人とも資金がない。山岳部にはピッケル（シモンのムスタング）が一本。これは長さが六〇㌢だったので赤坂君が借りる事になった。その状況もこの店長に話すと「これ、俺の使ってるピッケルだから北鎌に持って行きなよ」とその場で手渡してくれた。そのピッケル、シモンのセキネルエクストリーム五三㌢にはまだ真新しい値札が付いていた。

時として赤坂君と思い出し、語り草になっていたのはこんな周囲の心遣いである。山岳部監督は、普段はヤクザのような対応なのに事務所に顔を出す度に「駄目なんだよ。日頃からいいもの食っとかなきゃ」と食事代を出してくれた。O・Bは総会の終わりに装備費やレーションをカンパしてくれた。山に登るということは完全に「自分のため」である。しかし、周囲には「頂上を目指す若者を俺たちがあくまでサポートしてやる」と

いう気概に満ち溢れた方々が居てくれた。そして皆が嘴の黄色い山岳部員の成長のために、進んで縁の下の役を担ってくれた。赤坂君や私達が、言わば早熟とも言える海外登山の経験を学生時代に持てたのは、千葉大学学士山岳会の持つ座右の銘「O・B になったら現役に口は出さない、代わりにお金か汗を出してやる」の恩恵につきる。

赤坂君と行った海外登山は、最初の八九年ピサンピークに続き、九二年ナヤカンガ、九三年パルドール、九六年K2（JAC）まで続いた。山行の失敗であるからあまり口にして来なかったが、赤坂君と私は三回一緒にビバークしている。最初は一年の冬偵察の北鎌尾根、次はピサンピークの下山中、三度目はナヤカンガのアタック失敗後である。吹雪の中で一夜は長い。定期的に体中を痙攣させつつ寝つくことも出来ず夜を過ごす。そしてやっと朝が来ると雪を払いつつ動き出す。辛くて苦しくて嫌な経験ばかりであるが、彼との山行で思い出すのはそんな光景ばかりである。

そんな時期が過ぎ、先輩と後輩が一人ずつ入れ替わっていった。四年のナヤカンガ以降の合宿では後輩をネパールに連れて行く立場になった。ヒマラヤに行くと言ってもそのニュアンスは「海外登山」から「トレッキング」に変容してきたように思う。

四年生を卒業した後、彼は就職し私は大学院に進学した。赤坂君は、思うように合宿に行けなくなった私や同期の代わりに現役の面倒を一手に引きうけ、率先して合宿に参加してくれた。いま振り返れば、大学に居る院生が合宿に行くのを渋り、社会人にサポートを頼むというのは大きな間違いである。彼にとって非常に大きな負担であったのは間違いない。しかし、その不満は彼の気持ちの中に留め続けていたのだろう。決して一度も彼から聞く事はなかった。

しかし赤坂君も九四年頃からは仕事と登山の両立、将来の人生設計など深く考えているようであった。当時卒業後に大学に残る部員が多く、同期では赤坂君以外四人が大学院に進学し、後輩でもほとんどが修士課程に入ったためかもしれない。博士課程になって北大に移った私と札幌のことや研究環境のことをあれこれ話すこともあった。彼には再度大学に戻ることを考えている時期もあったように思う。「山登りは好きである。しかしいつまで続けるのか？」この疑問は彼だけではなくいつまでも我々の胸に残っていた。我々のとった選択肢は二つであった。一つは、山というものを研究の対象に置き換えたり、趣味として楽しい登山を行うというもの。あとのもう一つは自分が限界を感じるまでピークを極め続けるというものである。前者を選んだのが私や他の同期であり、赤坂君は後の方を選んだ。

彼はK2遠征の後、エベレストにも挑戦したいと洩らしていたと聞く。今年は、かつて山田昇さんが「男ならここまで来て見ろ」とばかりに十代の私達に鯉のぼりを振ってくれた年から十一年。登山が教えてくれた経験を想い出として社会に出て行き、没頭していた夢が少しずつ覚めてしまったのが私を含む多くの山岳部員。それとは一線を画し、あの感動を忘れず、夢覚めぬまま白銀のピークに向かって登り続けたのが赤坂君であったように思う。

（赤坂謙三氏は一九九六年入会。会員番号一二一七四。紹介者は吉永英明・村井龍一）

（亀山　哲）

## 佐野　崇氏（一九七一〜一九九八）

『山岳』に佐野崇君の追悼文を掲載してくださるという有り難いお話を頂いた。若輩で日本山岳会に貢献度が少ない彼ではある。遭難さえしなければ間違いなく日本山岳会に貢献していく逸材であった。

同志社大学山岳会（OB会）は、過去において海外の未踏の山や学術登山を実施してきた。その姿勢は後輩に引き継がれ、良い意味では伝統を築きあげてきたが、他方部外での活動は余りにも閉鎖的であったように思う。その点をK2登山隊報告書の佐野君の文章に窺えるものがある。「同志社山岳会はこれまで他の山岳会の隊に参加して遠征にいくことは殆どなかったが、単一で未踏峰を中心に数隊の遠征隊を出している」。

一九九五年十一月に日本山岳会学生部指導委員会主催で「全国大学山岳部監督会議」が催された。関東圏以外の場合、余程関心があるか何か関わっている者でなければ「わざわざ」出かける事はない。関西大学の宇都木氏他数名が関西からの出席であった。遭難後の部再建に取り組んできただけに「たまたま」の機会を利用して参加をした次第であるが、初めてお会いした伊丹氏から「わざわざ」ということで手土産を頂いた。

佐野君がK2隊に参加する機会が生まれたのは実はこの会議に出席したことが大きな要因になっている。帰京後、会場入口でK2登山に参加する学生達が快活に行動していたのが心に残っていた。しかし、クラブ再建中では全く別世界のことでしかなかったが、可能性がある者はと考えた時、佐野君の存在が浮かんだ。

佐野君は九三年八月の遭難当時、部の主将であり、半年後にクラブを再開するに当たり、責任を取って主将を降り、二回生のリーダーを補佐する役に回ってもらった。それ以来、部の運営が正常に戻るまで、いつまでも縁の下で支えてもらうことに

なった。

九五年三月で山岳部を卒業したが、その後も大学に残っていた。山岳部の合宿や指導を優先させて、それ以外は自身の技術を磨くために内緒で社会人山岳会に属して山に登っていた。また、文登研で知り合った他大学山岳部との親交も大切にしていた。登山経験は少ないが、体力、技術、山への強い姿勢は誰にも負けない。他人の中に入っても遠慮気味に（あれでも遠慮している）うまくうちとける天性がある。K2隊に参加して荷揚げだけに終始しても文句も言わずに頑張れるだろう。これまでの辛い役目を果たしてきた姿を見てきただけに、せめてその努力に対するプレゼントでもあった。OB会の承諾も取らず、伊丹氏に電話を掛けると快く受けて下さり、運良くその夜が計画書の最終締め切りであるという。

K2隊に参加が決まり、富士山トレーニングや東京での準備作業、そこで知り合った隊員の方々とのエピソードは彼の性格を物語っている。高所登山の経験のない佐野君が登頂できたのは、山本隊長の配慮であり感謝している。

K2隊帰国後も佐野君は学生の指導に余念がなく、後輩の卒業記念に硫黄尾根から槍ヶ岳までの縦走、またK2隊の稲葉、村田両氏と共にヨセミテでビッグウォールを経験させてもらっている。同志社の枠を越えて自分の山登りを実現していく姿が見られた。そんな彼に一つだけお願いをしたのは久しく海外登山のなかった同志社で、クラブ再建に努力してきた部員達とチベットの未踏の山をやろうという計画の実現であった。

ヨセミテから帰国後、チベット計画は進み、七月末に登山許可が届いた。学生の夏合宿の指導に二週間参加して、休む間もなく八月末偵察に出かけて行った。そして彼は「未踏峰はおもしろい。同志社の山登りを楽しみたい」との手紙を寄越してきた。

九八年二月これまで順調に進んできた部がおかしくなった。コーチ陣がチベット登山に目を向けている間に部のもろさが出てしまった。春合宿を中止してでも正常化に誰もが尽力した。このままではチベット計画が中止になるかも知れない。それでも構わないが焦りは誰の胸にもあった。

九八年三月十四日夜、佐野君は追いコンの途中誰にも気づかれず抜けだし、鹿島槍ヶ岳東尾根に出発した。相手は九三年遭難事故当時の一年生（その後社会人山岳会に所属）で、彼の卒業山行でもあった。これも縁だろう。

遭難を起こした主将としての責任は、その後のクラブ再建に賭けた彼の努力に如実に示されている。チベット登山を終えれば、やっとその責任からも解放してやり、大きく飛躍をしてくれることを期待していただけに残念でならない。

K2隊でご指導をしていただいた赤坂、椎名両氏はその後カンチェで力尽きて仕舞われた。いつまでも元気で活躍すること

の難しさをつくづく感じさせられる。
故人のご冥福をお祈り致します。

主な山歴

一九九一年　四月　同志社大学商学部入学
　　九月　同志社大学体育会山岳部入部。九三年四月同部主将
一九九五年　三月　同志社大学山岳部卒業。コーチングスタッフ。
　　六月　剱岳剱尾根
　　十月　屏風岩東壁雲稜ルート
一九九六年　二月　鹿島槍ヶ岳天狗尾根
　　五月　日本山岳会入会。会員番号一二二六三。紹介者山本篤・宇田川芳伸
　　八月　日本山岳会青年部K2登山隊に参加、登頂
一九九七年　一月　南アルプス甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁中央稜
　　三月　硫黄尾根から槍ヶ岳
　　四月　丸山中央山稜から剱岳
　　六月　ヨセミテ登攀
　　八月　同志社大学チベット・ヤルツァンポ河源流域学術登山隊偵察隊長
一九九八年　三月　鹿島槍ヶ岳東尾根二ノ沢の頭付近で遭難。享年二十六歳。

（吹田佳晴）

## 会報「山」訃報・追悼文一覧

**一九九八年十一月号（六四二号）**

追悼　田口二郎会員を偲びて（渡辺兵力）
追悼　川崎泰男会員逝く（木村俊博）

**一九九八年十二月号（六四三号）**

追悼　人生六十年、駆け抜けた男―畏友中島　寛のこと―
（石　弘光）

# 支部だより

## 北海道支部

北海道支部は、三十年前の昭和四十四年（一九六九年）七月二十日再発足した。今年は、三十周年記念事業の実施年であり、昨年から今年前半にかけての支部活動は、記念事業の成功に向け集中してきたので、その状況を記して支部活動報告とする。

九八年支部総会で記念事業実施を決定し、実行委員長に向井成司会員を選任。九九年総会で記念事業の内容、記念誌発行、記念山行、記念祝賀会とそれぞれの予算が提案され全会一致で承認、具体的な実施計画を策定した。実施要項は「山」五月号「JAC支部だより」欄に掲載され、全国各支部に通知するとともに参加を呼びかけた。

事業の実施結果から報告すると、記念誌「北海道山岳」は好評を博しており、山行、祝賀会とも以下のように、極めて盛会のうちに終わることができた。

記念誌「北海道山岳」発行　八〇〇部印刷し、支部会員、本部、全国各支部に贈呈。

記念山行（七月三、四日）　大雪山黒岳（一九八四㍍）、二十二人（うち本州四人）参加。トムラウシ山（二一四一㍍）、二十八人（うち本州八人）参加。十勝岳（二〇七七㍍）、二十七人（うち本州六人）参加。三山合計七十七人と多数の参加者があった。

それぞれの宿やテントで盛大なお天気祭りを執り行った効果もあり、山行当日はガスってはいたが大雨にならず、ガスの切れ間から雄大な山岳風景が見られ、三コースとも頂上を極めて無事下山した。大雪山縦走隊は石室に宿泊し、昨日の天気がウソのような晴天に恵まれ、ご機嫌の縦走を楽しんだ。

記念祝賀会（七月二十日）　札幌市内「りんゆう観光ホール」、快晴の祝賀会日和。本部からは大塚博美会長、小倉茂暉副会長、坂本正智理事の出席を得たほか、越後、青森各支部長らも遠路出席。道内からは道岳連会長その他当支部所縁の来賓を迎え、会員も九十人が出席。会員による海外登山講演があった後、大塚会長など来賓から挨拶をいただき、盛大な祝宴に移った。坂本理事ほかのスピーチ、新妻徹支部長などの演じるアトラクション、出席者全員によるコーラスなどで会場は盛り上がり、予定の時間を大幅に延長して小倉副会長の乾杯で終了した。

なお、会場に設営した売店の販売益金の一部を、本年十一月札幌山岳連盟派遣の厳冬期マナスル登山隊、明春北海道山岳連盟派遣のエベレスト登山隊（支部会員参加）にそれぞれ寄付することとした。

さて、本部百周年には北海道も三十五周年の節目。本部記念事

業に連動させて、支部としての海外登山を含む事業や、北海道四支部制の実現により、全体の活性化を図っていく構想である。

（長谷川雄助）

## ■岩手支部

月一回の行事を企画しており、定着してきている。JACの全国レベルの行事に参加することを支部会員に望んでいるがまだその点の成果は上がっていない。

平成十年度委員会・総会。四月五日に盛岡市上田公民館で開催した。出席者は委員会十名、委任五名。総会の出席者二十一名、委任四十二名であった。決算の承認および事業計画、予算を議決し、さらに支部監事と委員を選出した。新委員によって中谷支部長、菊池副支部長、事務担当松田、会計担当諏訪が選出された。

四月二十五日、「岩手支部通信」第十号発行。

四月二十九日、月例山行。笠通山、砥森山　春の花々を眺め、多種の山菜を学習した楽しい山行であった。幹事藤井、十名参加。

五月十七日、月例山行。なめとこ山、宮沢賢治ゆかりの山。幹事諏訪、遠別山岳会九名を含めて十八名の参加。

六月一日、「岩手支部通信」第十一号発行。

六月二十日、春の例会と委員会。ひめかゆうほっと館（胆沢町）七、八月の行事や中国天山山行計画と調査等を審議。自炊の予定であったが近藤シズ、菊池夫人、小野寺夫人の心づくしの料理で和やかな懇親会であった。

六月二十一日、春の例会山行。三界山、秋田県側の焼石岳登山道から別れて終始藪を辿った。幹事は小野寺、菊池、近藤で十三名参加。

七月十一日、月例山行。八幡平安比温泉・茶臼岳周回コース、昔の八幡平を偲ばせる山行であった。幹事中谷、立花、十名参加。

七月十七～二十三日、天山踏査行　菊池修身副支部長、佐藤英夫支部委員（北京在住）、支部として海外登山実施が話題になっており、その調査山行である。ウルムチ在住の当支部の石村夫妻の多大な協力もあった。

八月二十一～二十四日、夏の例会と山行。八方池・唐松岳・五竜岳・鹿島槍ヶ岳・扇沢。天候に恵まれて後立山を楽しく歩いた。リーダー諏訪・サブ松田、十六名参加。

九月十九～二十日、全国支部懇談会　秋田男鹿真山・本山。五名参加。

十月十日、秋の例会、沢内村沢内バーデン。

十月十一日、秋の例会山行は兎平コースから真昼岳に登ったが三角点が確認できなかった。幹事中谷・松田、十七名参加。

十一月三日、月例山行。川井村岩神山　兜明神岳から岩神山と晩秋の山を堪能した。幹事岩舘、十五名参加。

十二月八日、支部忘年会、盛岡シティホテル「小天地」。幹事諏訪・松田、二十二名参加。

平成十一年二月十～十一日、月例山行。歩くスキーを楽しむ会

として区界少年自然の家に宿泊して実施した。夜の小西喜助会員の講話は感銘深いものであった。翌日は自然の家の職員の方たちにもお世話になった。幹事岩舘、六名参加。

三月三十一日、会計監査　藤岡幹事、椚田幹事外事務局三名出席。

（中谷　充）

## ■秋田支部

平成十年度の当支部は、秋に行われた全国支部懇談会秋田集会の主管が最大の事業であり、支部内の結束力をさらに強める絶好の機会にもなった。本会および東北各県支部からの心あたたまるご支援をいただき、百六十余名の会員が全国から男鹿市に集い、奇習・なまはげと対面し、普段は踏み入る事のできない自衛隊基地内の本山一等三角点を踏査するなど、海と山の幸を心ゆくまで楽しんでいただいた事は、当支部会員の大きな誇りとしているところである。

支部山行については、七月五日、青森県新郷村のキリスト伝説がある戸来岳に、五十一名の会員と会員の知人友人が登頂。一等三角点に触れ、はるか十和田湖の姿をのぞみ、山頂は他のグループも加わり大賑わいであった。

九月六日、男鹿三山のお山がけ。全国支部懇談会の下見を兼ねて十四名が参加。十日余り後に迫った大事業の成功を祈った。

十一月八日、八塩山。台湾に遠征した元気組の留守役に回った会員十名が参加。小春日和の山頂で午餐を楽しんだ。

毎年行っている隣国への交流登山は、十月二十九日から十日間の日程で台湾五岳の一峰である秀姑巒山（三八六〇メートル）などを登頂。天候に恵まれ、七名の参加者は大感激、元気に所期の目的を果たした。

本会総会に先立って開催された支部総会は、二十八名が出席、事業・決算・予算案などを審議、終了後は懇親会を行った。

東北地区集会は全国支部懇談会と兼ねたため地元開催となった。また、本会の年次晩餐会には七名が参加し、懇親山行の矢平山と愛鷹山にわかれて登り懇親を深めた。

支部会報「秋田山岳」は三回発行し通算四十一号となった。来年は支部創立四十周年を迎えるため、記念事業の一つとして四十号での合本を計画している。

その他として、本会の各会議、県内山岳団体等との会議、事業などに積極的に参加し、地域の山岳界発展のため、それぞれ支部会員が貢献していることは例年どおりである。

なお、年度途中、当支部会員であり自然保護委員でもある宮田会員が、全国支部懇談会直前に急逝された。その衝撃はあまりにも大きく今後の支部運営への影響は必至だが、一致団結して支部発展に努めて参りたい。

本年度末登録会員は七十一名である。

（鈴木要三）

## 山形支部

支部役員の大幅改選に伴い、事務局が山形から庄内に移動した。活動方針は前年度と大きく異なることはないが、役員会で話し合われ、会員に配布した今年度の活動方針は、以下の通り。

①支部会員各自の山行を基本に据え、その延長線上に支部の山行行事を位置付ける。そして、支部行事が会員相互にとって横の繋がり、内面的には山行幅の拡大と会員相互の親睦を深める場となればと考える。

②支部の現状（会員数七十名、平均年齢六〇・六歳）並びに今日の自然環境を考慮したとき、登山行為を中心としながらも、登山の背景を成す自然保護さらには登山行為と一脈通じる未知への憧憬、知的好奇心を充たすものも含めた幅広い活動を目指したい。幸い支部会員は多様な個性の持ち主で構成され、活動そのものも広範囲に及んでいる。従って、相互の力を出し合うことで、山形ならではのユニークな企画、活動が可能になると考える。

③支部の盛衰は魅力ある山行並びに会員数と相関関係にあるといえる。支部の交友関係の拡大をはかると共に、山行を通して若手会員を増やすことも支部発展課題の一つと考える。

創立五十年になんなんとする長い歴史をもつ支部を受け継ぎ、さらに新しいものを創り上げていくことは容易なことではない。しかし、会員の日頃の活動を踏まえた貴重な意見の交換と行事への参加こそが、今後の支部活動の方向性を自ずと定めていくものである。

平成十年度の支部行事は十二で、参加人数は延べ百三十九名であった。この中に支部行事として定着している樹氷原を滑る会と支部年次晩餐会がある。樹氷原を滑る会は、蔵王温泉一泊で十五名が参加。ユートピアゲレンデ上方から樹氷の中を地蔵岳に登る班とゲレンデ班を編成し山とスキーを楽しんだ。

今年度はこれまでの実績を踏まえて、鳥海山スキー登山と海外登山検討会を新たに加えた。鳥海山は天候の比較的安定する三月に滝の小屋をベースにして計画。一方、海外登山は地域と山の選定、偵察、そして二〇〇一年実施を目指すことにして今年度から検討に入る。なお、今年度の支部年次晩餐会は新庄地区で予定している。また、活動方針②に掲げたユニークな企画を会報や講演等の形で実施に移す計画である。

（木村喜代志）

## 宮城支部

宮城支部の九九年度現在の会員数は、七十二名（会友二名を含む）、うち女性は九名、平均年齢は五九・二歳である。

この数字からも分かるとおり、当支部においても会員の高齢化は確実に進展している。しかし、支部行事への参加熱意は盛んで、概ね月一回の支部行事は活気に満ちている。

昭和三十三年五月に設立された当支部も昨年度で四十周年を迎

えた。記念の年となった昨年度は、仙台市のランドマークとして親しまれている太白山（三二〇・七㍍）の山名由来に縁の深い、隣国韓国の太白山（一五六六・七㍍）および小白山（一四三九・五㍍）への記念山行を実施した。

また両山登頂後、韓国山岳会の御厚意により、ソウルの韓国山岳文化会館で開催中であった韓国山岳会設立五十三周年記念パーティーに招かれ、文会長を始めとする会員諸兄と親しく懇談する機会を得た。

なお、記念山行を含めた昨年度の支部行事は次のとおりである。

四月　支部総会　半田山　参加二十四名
五月　春山山行　虎毛山　参加十四名（若葉会山行と合同で実施）
六月　自然保護山行　青麻山　参加十二名
八月　夏山山行　赤崩山　参加八名。ビールパーティー　参加二十二名（佐々木まさ子会員深田百名山完登祝賀）
九月　支部設立四十周年記念山行。韓国太白山・小白山　参加十三名
十月　臨時山行　水引入道山　参加十六名
十一月　臨時山行　オボコンベ　参加二十八名。秋山山行　日山参加十六名
十二月　支部年次晩餐会　参加三十名
一月　元旦登山　泉ヶ岳　参加十名。新年会　参加二十七名。冬山山行　水引入道山　参加十名
二月　スキー山行　山形蔵王　参加八名
三月　早春山行　刈田岳　参加八名

以上の支部行事に加え、最近特に好評な行事？を紹介したい。

その行事とは、本部の年次晩餐会の翌日、ＪＲの週末乗り放題券を活用し、鉄道を乗り継ぎつつ、車窓から山々を眺めるという小旅行のことである。ただし、この行事は、車中では勿論、仙台到着後も改めて席を設定し、引き続きアルコールに親しむことをその参加条件とする過酷（喜悦）極まりない旅であることを付け加えたい。何れにせよ、通常の支部行事に加え、こうしたレクリエーション？の実施によって、昨今、支部会員相互の絆は一層強くなっているように思える。

最後に、本年度は二年に一度の支部役員改選の年に当たり、四月開催の総会において、次のとおり新役員が選出された。なお、今回の新役員の任期は種々の事情により一年間となっている。

支部長▼柴崎徹　副支部長▼千田早苗
総務・財務▼千石信夫、林田健治　会計▼飯塚とみ子　集会▼佐藤昭次郎、高橋功、中里政信、佐々木郁男　編集出版▼三宅泰、大橋克也　海外高所登山医療▼西郡光昭　指導遭難岳連▼太田正、高橋二義　自然保護▼鈴木晃三、熊谷正志　女性懇談会▼高野笑美　会計監事▼木皿謙、熊谷藤子

（林田健治）

## 福島支部

平成十年度事業は五十周年記念誌の刊行が今年度にずれ込んだため、恒例行事の一部を割愛して実施した。

記念誌「やまなみ」は本部会長（村木潤次郎氏・当時）始め東北各支部長、福島県山岳連盟会長、旧会員、会員随想の他、支部年表、在籍会員名簿を加えて作成した。会員の原稿が六十九名と全会員の六三%に止まったことにいささか不満も残るが、本部斎藤惇生会長はじめ関係者からの玉稿を頂き、五十周年に相応しい記念誌を完成させることができた。以下恒例の実施事業を列記して報告に代えたい。

一、定時総会　平成十年五月二十四日、福島市「はりまや」にて開催。事業・決算報告ほか新年度事業計画・予算案を審議、二十三名出席。

二、支部創立五十周年記念誌「やまなみ」出版記念会　九月十二日、福島市「フロンテア」にて開催。本部小倉副会長、五十嵐越後支部長・庄司宮城支部長代理の来賓を迎え、佐久間支部長以下会員総数五十名の参加を得た。

三、秋山小集会　十月二十五日、伊達郡「霊山八〇五㍍」。阿部明義会員（霊山町在住）設営により実施。十六名参加。

四、新年会、平成十一年二月十三日、福島市「はりまや」にて開催。二十三名出席。

五、安達太良スキーツアー　二月二十八日、出発地奥岳スキー場に参加者十三名（二名他支部）集合するも気象状況から山上部は強風猛吹雪と判断し行動を中止。

六、西吾妻山スキーツアー　三月二十八日、冬型の気圧配置寒気南下中、グランデコスキー場出発〜西大巓〜二十日平〜グランデコスキー場到着の周回コースを登降、十名参加。

七、役員会等の開催

一、役員会（記念事業実行委員会を含む）　三回開催

二、記念誌編集委員会　二回開催

八、本部・東北地区行事への参加

一、全国支部懇談会（東北ブロック集会）　平成十年九月十九〜二十日、男鹿市にて開催。佐久間支部長以下十二名参加

二、支部長会議（二回）佐久間支部長出席

三、事務局担当者会議（一回）野地克也会員出席

四、年次晩餐会（同年十二月五日）九名出席

九、その他

一、福島高等学校山岳部OB会によるキルギス共和国天山山脈無名峰（五〇四二㍍）遠征隊（十五名）は、平成十年八月十四日初登頂に成功した。この隊には二階堂匡一朗隊長以下八名の支部会員が参加して登頂成功の原動力となった。

二、五十周年記念誌「やまなみ」追記

体裁：B5判・縦組・写真八頁・本文一四八頁

内容：特別寄稿・支部会員随想・回想の五十年・追悼記・年表・在籍会員名簿

## 越後支部

（安藤　治）

越後支部の創立は一九四六年（昭和二十一年）であるから、五十二年の歳月を経て今日に至っている。

初代藤島支部長から現在の支部長で四代目になる。藤島支部長が常に唱えてきたのは、会員数二百名を堅持すること。高頭祭以外の行事は行っていない。昨年発行した支部会員名簿によると、会員総数は二百七十四名で、その他県外本部他支部所属の会友十二名となっている。最年長の笠原藤七さん（九十六歳）はいまだに矍鑠としておられ、一九九六年名誉会員に推薦されている。

支部通常総会は新潟県内の山麓で行い翌日、記念登山をすることが恒例になっている。

一九九九年度総会は五月八日北魚沼郡広神村、神湯とふれあいの里で行い、翌日九日鳥屋が峰（六八一・一メートル）に登り親睦を深めた。出席者三十五名、委任状百四十一名、合計百七十六名。

新潟県山岳協会会長他各委員会の長、役員は殆んど支部会員で県山協の行事（海外登山、各種講習会、研修会）に積極的に参加することを伝統としている。

・第四十二回高頭祭

高頭仁兵衛翁の高徳を偲び、翁が十三歳のとき弥彦山に登られ、海洋と島嶼と平野と山岳の比類ない大麗観に接し、いたく感激されたという山頂に昭和二十五年五月、元文展審査員羽下修三先生の制作、青銅版による翁の上半身を浮彫にした寿像を建設、昭和二十九年七月第一回高頭祭を行って以来恒例となっている。今年は第四十二回にあたり、弥彦神社祭礼に合わせ七月二十五日に執り行うことになった。大塚博美会長と小倉厚元理事を長島駅で迎え、室賀副支部長他二名、田辺事務局長と私も含め七人、乗用車二台で深沢にある高頭家の墓参を済ませ、時間に余裕があり国上山山麓に晩年良寛和尚が住んだといわれる五合庵を訪ね、弥彦山大平園地高頭翁寿像碑に向かう。

午後三時三十分、第四十二回高頭祭を厳粛に執り行う。黙祷、献花、献盃、玉串奉献終わって直会、出席会員三十二名。午後五時、弥彦山山頂御神廟前で神官による安全登山祈願祭も執り行う。

記念講演「植村直己の足跡について」講師、日本山岳会・大塚博美会長。一般登山者百五十名程集まった。赤い夕陽が小佐渡に沈みかける頃、百五十本の松明に火を灯し下山、弥彦神社拝殿に午後八時全員参拝の後、弥彦村ボーイスカウトの鼓笛隊を先頭にメインストリートを松明行進、駅前で解散、体育館で親睦会、大塚会長は最後までお付き合いくださった。

「越後山岳」第十号編集委員決まる。高頭仁兵衛、藤島玄、特集号として　平成十二年（月刊行予定）。

（五十嵐篤雄）

## 信濃支部

一九九九年三月現在、信濃支部会員数百六十七名を擁し、三十年前の二倍に増えている。このうち最近二年間の支部行事に一回以上参加したことのある会員は百名を越え、支部報に原稿を寄せる会員とあわせると、百二十名に達するので、何らかの形で支部活動に関与する会員は七割以上となり、会員の支部意識は充分にあると判断している。

信濃支部にとって最大の行事は、今年で五十三回の実績をもつウェストン祭である。これについては関係各方面のご支援により毎年六月上旬に行われてきたところであるが、信濃支部内部には年々派手になっていくこの祭りに対しての批判もあり、これまでの伝統行事の実績を踏まえて、必要な見直しを行っていく時期にきていると思う。今年は六月五日から六日まで、一般参加者も含めて、四百名ほどの参加者を得て例年通り行った。最高齢者は坂倉登喜子さんで、多くの回数を参加いただいており、今年もお元気で、徳本峠を越えられ、翌日にはウェストン碑前でエーデルワイスクラブの方々と美しい歌声をお聞かせくださった。

信濃支部の山行は夏山、秋山、春山と二月のスキー山行である。参加者が多いのは中高年向きの秋山山行で、春山山行も一九九九年三月には、従来行っていた三千メートル級の北アルプスから少々標高を下げて実施するなど、支部会員の実状に合わせて対応するようにしている。一九七〇年代までは、特に北アルプスの雪山において、地の利もあり、信濃支部は高いレベルの登山をしていたが、最近では会員の高齢化により、積雪期登山や岩登りを行うことが難しくなり、登山の技術力は衰えている。一方、比較的危険の少ない低山を中心にした個人の山行はかなり活発に行われており、今後の支部活動の方向を示唆しているものと思われる。幸い信州にはまだあまり人の入らない山域もありそうなので、気の合った仲間同志で、あるいは単独で、そうした山を探索するのも良いし、経験と地の利を武器にして、頭を働かせれば、面白い山行が可能になるであろう。こうした状況から、信濃支部としては、個人山行への支援を進めることが必要であり、具体的にどうするかをこれから検討していかなければならないと考えている。

最後に海外山行にも触れなければなるまい。一九七三年のアンナプルナ隊以来、信濃支部では表だって海外登山隊を編成していこうという意欲はまだでてこない。トレッキングに出かける会員はいるので、海外志向が無いわけではないと思う。海外山行計画が出ることを期待し、有志によるものであれ、積極的に応援していきたい。

（山浦源太郎）

## 東海支部

平成十年度の東海支部は、前年のK2遠征、実年隊のインド・クーラ峰（チャルン峰）初登頂などの後をうけ、一服休みという

こともあり、表面的には派手な動きはなかった。その反面、内部的には充実した年でもあった。

青年部が、小川繁、滝根正幹支部員らの努力で定期的な集会や山行を行うようになった。青年部では単に支部内部だけでなく、東海地方の登山界の活性化を図る目的で、愛知、三重両県の若い登山愛好家にも呼び掛け、「カンチェンジュンガ遠征」（講師・田辺治）「ガッシャブルムⅡ峰遠征」（石川富康）と二つの報告会を行い、好評を得た。今後も支部員に限らず優れた登山があれば積極的に報告会などを行い、当地方の若い登山家に刺激を与えたいと考えている。さらに青年部では、スケールの大きなルートで技術を磨くべく、本年七月青年部主催の登山隊をカナダに送り、アシニボインの北壁と北稜を登攀した。次年度以後も継続的にカナディアンロッキーの登山を計画している。

橋村一豊支部員が委員長となった自然保護委員会は、山岳地の自然保護を語るにはまず本物の自然を知ることが大切と、京都の芦生の森を勉強の場として、四季にわたって九回に及び現地踏査を行った。東海支部員だけでも延べ八十八名が参加した。この研究会には、現地京都支部の自然保護委員の方々から種々教えを受け、親交を深めることができた。

その成果を元に、芦生の森の生き字引である井栗登氏を招き、フォーラム「自然保護と芦生の森」を開催し、自然保護への理解を深めた。

レートビギナーを対象とする中高年層の安全な登山をサポートする支部友会は、長坂博委員長を中心に熱心な会員の努力で年々盛んとなり、平成十年度から自主運営を始めるまでに至った。独立後の支部友会は東海支部報とは別に支部友会だより（B5判・四ページ）を発刊し、山行、集会などのインフォメーションを行っている。これらの山行や集会には支部員の参加も自由である。

この七年前に発足した支部友委員会は当初、従来からの支部員が指導に当たってきたわけであるが、今では委員の多くが支部友会出身の支部員である。活動は一つ星、二つ星、三つ星に分けた月三回の山行が主体で、自分の実力、好みにあった山行に参加している。そして夏は夏山山行として二泊三日の針ノ木～爺ケ岳の縦走、立山三山、剱岳の三計画が予定されたが、立山、剱隊は台風の接近で中止された。

そのほか集会は、「地図の楽しみ」（桑原富彦）、「環太平洋一周環境調査登山」（篠崎純一、小川務）、「山での救急法」（赤沢硯夫）、「楽しい山岳写真の撮影」（与呉日出夫）、手作り忘年会（支部友委員会委員）などが行われ、毎回七十名収容の支部ルームがほとんど満席、あるいは立ち見が出るほどである。

十一月十四、十五日には、本部の学生部指導委員会主催の大学山岳部監督会議を東海支部が主管し、愛知県鳳来町の山びこの丘で行った。全国十七大学の学生、十八大学の監督、コーチ、支部関係者、講師の計六十三名が参加した。会議は遭難防止をテーマに基調講演「ナイロンザイル事件の教訓」（石岡繁雄）、「最新確保論」（柳沢昭夫）、「最新雪崩論」（飯田肇）の講義と確保の実技

を行った。

十一月二十八、二十九日の両日、東海支部恒例となった伊吹山播隆祭が稲葉省吾支部員の努力で第四回目を迎えた。今回は本部会員五名など東海支部員以外の参加も増え、伊吹山播隆祭も次第に認知されていくことは喜ばしい。シンポジウムは、愛知県扶桑町の勝村公、元富山支部長の石坂久忠、関ヶ原歴史資料館の藤井宏三各氏の研究発表があった。前日の山行は、伊吹山登山、伊吹山南尾根の廃寺探訪の二班に分けて行われた。

本年に入り、カナダ登山を初め、実年隊によるインド・ウムドンカンリ峰、ラハン峰、若手によるチベット・シシャパンマ峰が次々と出発している。

（中世古隆司）

## 山梨支部

平成十一年度の支部総会が四月三日に、小倉副会長を迎えて行われ、盛会裏に終わることができた。参加者二十一名。

五月二十二日から二十三日にかけて、支部主催の木暮碑前祭が行われ、二十三日の興因寺山登山を楽しんで散会した。

山梨県では県から県山岳連盟に毎年山岳レインジャーの委託があり、次いで県山岳連盟より所属する各山岳会のレインジャー推薦の要請がある。山梨支部も当然協力している訳で今年度は六月十九、二十日にかけての鳳凰三山を皮切りに、毎月一回、櫛形山（これは支部山行も含む）、白根三山、甲斐駒と仙丈、八ヶ岳と、十月十六、十七日まで続く。必ずしも決まったものではないが、支部員の要請があれば、レインジャー以外の支部員も同行し、支部山行の形をとっている。

また、毎年増富温泉で行われている、木暮祭が今年で四十回を迎え、須玉町に協力をして盛大な木暮祭を実施した。

（田村英也）

## 静岡支部

去る五月十一日午後六時三十分より、静岡市黒金町の静岡労政会館に於いて、平成十一年度静岡支部通常総会を開催した。

水野公男の開会の辞に続き、大石惇静岡支部長が大要次の様な挨拶を行った。「来年（二〇〇〇年）二月二十六日は、静岡支部創立五十年の日に当り、支部として創立五十周年の記念式典を始め、『創立五十周年記念誌』の発行、海外遠征登山として、台湾玉山と雪山と、韓国雪岳山の二案を計画している。支部会員の協力を得て成功させたい」。

本総会は、支部会員百二十名（団体一・個人百十九名）に対して、出席者三十四名、委任状六十一の計九十五名であり、支部規約第五条により、会員総数の過半数に達し、総会は成立。

議長に大石惇支部長を選出し、第一号議案の報告事項に入る。

平成十年度事業報告では、東西に細長い支部の状況から、九月

例会を東部富士市で、十月例会を西部掛川市で開催した。本年度はPR不足から、西部掛川市では十名で出席者が少なかった。

次いで会計報告がされ、支部費の徴収を行わなくても、黒字決算であるとの報告がされ、報告事項はそれぞれ承認を得て議事に入る。

第二号議案の平成十一年度事業計画（案）は昨年に続き、本年も九月例会は富士市、十月例会は掛川市で開催予定、例会案内のPRを会員に徹底する様心掛ける。

平成十一年度予算（案）は、本年度より科目を実態に合わせ、処理しやすく変更する事とした。それぞれ承認される。

第三号議案の支部創立五十周年記念式典および「創立五十周年記念誌」発行について、特に記念誌の内容に提言があり、その点についてこれから十分検討しながら進める事で承認を得た。

海外遠征の玉山・雪山、韓国の雪岳山計画は、二案とも時期など検討する事で承認さる。

第四号議案平成十一年・十二年度役員選出については、会計監査の一名が老齢で体調不良の理由で、辞退の申し出があり、総務委員から交代者を出すことで、役員選出は決定。支部長大石惇、副支部長水野公男、会計近藤浩之、総務安間荘、他、集会、企画、会報等各氏を選出。水野の閉会の辞で午後八時二十分、通常総会を終了し、懇親会となる。

なお、大石惇支部長は、勤務先静岡大学農学部、学部創立五十年記念事業として、今回第三次の総隊長として、メンバー八名が七月二十一日から一ヶ月間、カザフスタン・キルギスタンを含む新疆西・南部の砂漠地で果樹の分布、栽培利用、農産品加工、牧畜等の調査で出発し、成果を挙げ帰国した。

（水野公男）

## ■岐阜支部

平成十年度末の岐阜支部会員数は、百七十四名（会員九十八名、会友七十六名）である。

平成十年度岐阜支部総会を、平成十年四月二十五日丹生川村平湯峠近くの民宿「牧」で会員三十二名が出席して開催した。高木碕男支部長から「平成十一年秋に当岐阜支部が主管になって、第十六回日本山岳会全国支部懇談会を開催する予定であり、その準備委員長を決め、今年度から準備に取りかかっていただきたい」と、挨拶があった。議事に入り役員改選では、支部懇談会の準備委員長に高木泰夫氏を選任するなど、いずれも原案どおり可決して、平成十年度事業を推進した。主な事業は次のとおりである。

四月　春季懇親山行　総会の翌日、平湯峠から、三十三名が輝（てうし）山（やま）（二〇六三㍍）へ登った。登りはじめ三十分ほどは送電線の巡視路を登ったが、後は道はなく藪をかきわけ三時間ほど苦闘して頂上へ立った。頂上へ登った十一時ごろ、乗鞍岳、穂高岳、笠ヶ岳などを覆っていたガスが見るみるうちにとれて、眼前にドーンとその容姿を現し歓声を上げた。

海外登山　高木碕男隊長以下九名は、四月二十八日から五月十一日にかけて、中国チベット自治区からチョモランマ・ベースキャンプ（北稜ルート）を探訪し、第一キャンプ直下のロンブック氷河の出合い、標高五五〇〇㍍地点まで登り、ネパールを経由し帰国した。そして、中国登山協会副首席洛桑達瓦（ロウーサンダワ）氏（日本山岳会名誉会員）、ネパール山岳会会長ソナム・ギャルツェン・シェルパ（Sonam Gyalchhen Sherpa）氏ら両国の山岳関係者と懇親し、友好と親善を深めた。

五月　春季現地小集会　日永岳（一一一五㍍）へ美山町仲越から十四名が登った。

六月　白神山地遠征　六月四日から七日にかけて白神山地の白神岳（一二三一㍍）へ、会員二十名が、岩崎村黒崎から白神岳登山道を約四時間かけて登った。

九月　海外登山　高木碕男隊長以下十一名は、九月二十三日から二十六日にかけて韓国の雪岳山（ソラクサン）（大青峰（テチョンボン）・一七〇八㍍）へ五色（オセク）温泉（オンチョン）登山口から約五時間かけて登った。下りは、千仏洞渓谷（チョンブルドンケゴク）（雪岳谷）を下山した。

十一月　秋季現地小集会　鈴鹿山脈の雨乞岳（一一三八㍍）へ、武平峠から十九名が登った。

第二十五回山岳講演会　長良川スポーツプラザにおいて、元岐阜県警山岳警備隊飛騨方面隊長として、最前線で活躍された今井主憲（かずのり）警部を講師に招いて、「救助現場からみた山岳遭難の実態」をテーマに、講演会を開催した。会員と一般の同好者も交えて百人余が聴講し盛会であった。

十二月　第二回山岳写真展　十二月一日から二十五日まで、岐阜市長良のギャラリー「パウゼ」において、山岳写真展を開催した。

一月　ホテル「グランドヴェール岐山」において、新春懇親会を会員四十一人が参加して開催した。

この間、委員会を九回開催。また、支部機関誌「岐阜山岳」第四十一号、第四十二号を発行した。

（清水芳彦）

## 京都支部

京都支部は一九八六年三月に発足して十三年、本年七月現在支部会員は、二百八十三人と多くを数えるようになり、多士済々である。酒井支部長は、本年度初の挨拶で、京都支部が目指すものとして次のことを述べた。

第一に、行動の指針として、チャレンジャー（挑戦者）であること。挑戦者とは、理想を高くもって、常に努力を惜しまない人であり、安易に妥協することを排する心意気の持ち主である。第二に、行動の様式として「京都らしさ」の追求。他に追随を許さない個性あふれる様式を追求する。どこにでも見られるものではなくて、「さすがは京都支部」と他から一目も二目もおかれるようなユニークな行動の様式を創り出す。第三に、行動の準則とし

ての「和」の重視、他に対する寛容性である。登山は多様性を本質とする。主体としての登山者が種々様々、変異に富み、対象としての山岳が高低、大小、難易、いろいろでそれぞれが独自性を主張する。いろいろな山登りがあり得ることを認めなければならない。その際、私たちは常に山に対して謙虚でありたいし、同時に他の登山者に対しても謙虚でありたいと思う。人それぞれに、山の登り方があり、楽しみ方、味わい方をもつ。そのことを認めよう。

我々は、「京都らしさ」を追求するために「山城三十山」「城丹、城江国境を歩く」シリーズに続くテーマとして、本年は、歴史山行、展望の山をシリーズ化し定例山行に取り入れ活動する。

四月は、第十四回支部総会及び鈴木幹雄氏による「K2西稜から未踏の西壁」講演会と歴史山行「賤ヶ岳から山本山」。

五月は、スケッチ山行「富士山を描く」、展望の山「西方ヶ岳から蟻螺ヶ岳」と雪上技術講習会「富士山」。

六月は、岩登り講習会「金比羅」と森林の勉強会「朽木・朝日の森」。

七月は、展望の山「鈴鹿・静ヶ岳をめぐる三つの池探訪」、岐阜支部合同山行「十石山」（乗鞍山塊）と大文字山ビアパーティー。

八月は、沢登り「比良・奥の深谷」。

九月は、展望の山「鈴鹿・御池岳奥ノ平南峰から土倉岳」とお月見山行「鉢盛山」。

十月は、スケッチ山行「鈴鹿・鎌ヶ岳」。

十一月は、展望の山「武生・日野山」。

二〇〇〇年のスタートは恒例の新年会。

二月は、わかん山行「朽木・白倉山」と展望の山「淡路・諭鶴羽山」。

三月は、関西支部合同スキー登山と展望の山「金勝アルプス」。

以上が定例山行で、他に支部員その他の講演を山水会として予定している。また支部員の山行報告や山への思いを綴る「支部だより」を昨年より担当者を一新し年四回発行している。

最後に、十五周年に向かって京都支部らしい「陰謀」を策している。

（山田和男）

## 石川支部

石川支部は、会員五十五名を有し四季を通じて活動している。例年の主な行事として五月の北陸三支部持ち回りの合同登山と懇親会。六月には「いで湯山行」と称し、一泊二日の温泉付き登山。八月には上高地の山岳研究所に一泊し、当日は上高地周辺の散策を行い、翌日元気のある会員は、焼岳に登り中尾に降りる。十月には、紅葉山行を行っている。その山行の際にきのこを採り、山行後きのこ鍋を楽しむ。十二月になると山祭りで一年のお互いの山行を振り返り、それを肴に夜の更ける（夜の明ける?）まで酒を飲み交わす。冬には県内のスキー場で日帰りでスキーを楽しむ。

会員には、スキーの指導員が何人かいて、技術的な指導を受けられるので人気がある。石川支部の行事としては以上だが、個人山行はなかなか盛んで、海外トレッキングに行く者や、他の山岳会の海外遠征に参加する者などもいる。

しかしどこの山岳会も同じだと思うが、石川支部も会員の高齢化が進み、会員名簿の勤務先欄の空白が年を経る毎に増えてきた。このことにより支部の行事を行うに当たり、かつてのように合宿をするなど望むべくもなく、おのずから制限されてきている。このまま若い新人が入会せずにあと十年もしたらどうなるか心配だ。たとえ若い新人が入会したとしても、指導する者が当支部では若い人でも五十歳弱なので、新人を育てることはなかなか困難が伴うと思われる。そのようなわけで石川支部としては、あまりハードな山行はできず、支部行事として和気藹々と楽しい山行ができるよう工夫している。

今後他の支部の行事などを参考にし、石川支部のあり方や行事などを考えていきたい。

また、平成十三年の第十八回全国支部懇談会は、石川支部主管で開催される。当支部では実行委員会を設立し、その準備を始めた。懇親会会場および宿泊は加賀温泉郷で、登山は富士写ヶ岳（九四一・九㍍）で行う予定。

（織田伸治）

## 山陰支部

朝九時三十分。茶房「モンテローザ」のカーテンを開けると、そこには今日も伯耆大山（一七一一㍍）が裾野を広げて聳えている。その姿はまさに伯耆富士である。やがてさわやかな空気の中に、伯耆大山の伏流水になじんだコーヒーの香りが漂いはじめる。コーヒーの誘惑に背を向けてホールに向かう、暗闇の中から絵のささやきが聞こえてくる。電灯のスイッチを入れると、そのささやきはピタッと止まり、何事もなかったように灯かりの中にすまし顔の絵がある。さあ、今日も伯耆国山岳美術館の開館です。どんな山の便りの訪れがあるのか楽しみです。

伯耆国山岳美術館は、平成五年十二月、私と松下順一会員と二人で創設した、私設の山の小さな美術館です。中国道落合ＪＣＴから米子道に入り四十分、溝口ＩＣで降り伯耆大山に向かうこと三分、最初の集落バイパスのカーブをぬけると、赤のシンボルカラーに塗られた木製の広告塔が目に入る。そこが伯耆国山岳美術館である。全国から年間約四千人の入館者をお迎えすると共に、茶房「モンテローザ」では山の情報、絵画情報、写真情報、別荘情報交換の場所として多くの人々をお迎えしている。

メインホールでは日本山岳会よりお預りしている、足立源一郎「槍ヶ岳の朝」など五点のほか、山里寿男先生の「伯耆大山・縦走路」、吉岡淳一先生（日本山岳会山陰支部）の伯耆大山崩落の象徴「槍ヶ峰・道標」、鳥取県洋画壇の重鎮八橋誠滋先生の「季

節風」などはぜひご覧いただきたい作品。ただし企画展などにより展示していない場合もある。二階ミニホールでは平均一ケ月くらいのサイクルで写真展や趣味展などを無料でご覧いただける。八月二十九日からは、大阪府八尾市の中部博之先生（関西支部）の油絵小品展を開催。

創立からまもなく百年を迎える日本山岳会、今年五十年を迎えた山陰支部、その歴史の功績は大であり、次の時代を考える時「伯耆国山岳美術館」も日本山岳会に関係する団体として、会員の皆様と一緒に考えて行きたい。（伯耆国山岳美術館問合せ先・月曜日は休館）鳥取県日野郡溝口町九四三　電話〇八五九―六三―〇三九六　FAX〇八五九―六二―一七一〇）

〈山陰支部五十周年記念事業概要〉

○　記念式典　ネパール・カトマンズ市内のホテルで開催。

○　海外登山　メラピーク（六四六一メートル）へ登山隊七名を派遣。その他の会員は登山隊を支援しながら、行程別に三隊を編成して可能なかぎりカトマンズに集結する。

○　出版事業「鳥取県境の山々」（仮称）
「美しき伯耆の滝たち」
「山陰支部五十周年記念誌」

○　記念展　期日、内容については研究中。

（吉川明秀）

## 福井支部

平成十年度は四月十五日、支部例会場（宮本宅）での総会から歩き出す。参加者は二十七名、恒例の懇親会はなごやかに、かつ過去の山行での思い出話に花が咲く。山登りの仲間は古いつきあいから始まる。

恒例の北陸三県現地集会は五月二十三～二十四日、福井県池田町冠温泉、冠荘で二十八名の参加者全員の親睦から始まる。宴会場から、いろりのある板の間に移ってからの酒宴は刻のたつのを忘れる。翌日は雨の中冠山に登る。

六月の環境月間には二十一日、嶺南の赤坂山に登る。十三名の参加者があり、NHKのテレビ取材も同行、雨の中での清掃登山となった。

八月恒例の夏休み親子白山登山には、会員二十名の協力を得て、親子百二十名を室堂で一泊、頂上に案内、年を重ねるに従って、自然の楽しみ方や、頂上でのご来迎の景観に感動するなど、親子のふれあいによる、きずなの深まる度合が感じられるなど成果が出て来たように思う。

九月、秋田支部主管の全国支部懇談会に四名が参加し、男鹿半島の人と風土に接して感動。そのあと秋田の山々に登る。

支部の例会山行は以下の通り。

四月十～十二日　岩木山。八甲田大岳　山スキー（参加　四名）
五月十日　岩ごもり山（山集落からの新ルート）（参加　七名）

七月十～十四日　北海道の山　大千軒岳、狩場岳、駒ヶ岳（参加　四名）
九月六日　赤兎山沢登りたんどう谷（参加　八名）
九月十九～二十三日　東北の山　鳥海山、乳頭山、秋田駒ヶ岳、焼石岳、栗駒岳（参加　四名）
十月二十五日　経ヶ岳　清掃登山　ＮＨＫテレビ取材（参加　十名）
十一月八日　大御影山（参加　八名）
一月二十三～二十四日　冬山　西方岳　ＮＨＫテレビ取材、新年会、スキー研修・今庄三六五スキー場（参加　十名）
二月七日　取立山　山スキー（参加　八名）
三月二十一～二十二日　長野県　飯縄山　斑尾山　山スキー（参加　三名）

福井支部も高齢化をたどり、アクティブな山行の計画、実行はできないが、女性会員も山行には積極的に参加している。各支部会員ができる範囲で参加し、少しでも中高年の山登り志向者に対し、緑の中での空気のおいしさ、動物たちとの共生、自然保護と共に環境保全に働きかけをしてもらいたいと思っている。

（宮本数男）

## ■広島支部

昨年の十一月一日に、支部誕生の産声を上げ、少しずつではあるが、成長している広島支部である。

平成十年三月二十日、第一回目の総会をホテル「チューリッヒ」で行い二十九名の参加を得た。

十月三十～十一月一日、支部設立一周年記念として、設立会場である比婆山県民の森とそれを囲む山々で、楽しく有意義な二日間を過ごした。

第一部は、開会式と中国新聞社写真部部長であり、会員でもある紺野昇氏によるスライド映写と、西中国山地の山々に暮らす月の輪グマや小動物たちの異変と、人間のかかわり方および棲み分けの大切さについてのお話。

第二部は、会員差し入れで三倉岳の麓で取れた松茸と当地比婆の牛肉をふんだんに使ったすき焼きパーティーで親睦を深め、文化と美食で心もお腹も一杯になった。翌日は、二チームに分けて、秋晴れの下でそれぞれ楽しい山行を満喫した。

十二月五日、年次晩餐会、広島からの出席者は少なかったが、泉尾支部長に持参していただいた支部報創刊号（百部）全てが、『とっておきの山』コーナーで捌け、他支部の方々のおみやげになった。これからも定期的に発行し、先輩支部の支部報に負けない内容にしたいと考えている。

三月二十日、ホテル「センチュリー21」にて昨年の二月、大山北壁で亡くなった高見和成氏を偲ぶ会が行われた。全国から、高見氏を偲び、百名を越える多くのＪＡＣ会員や岳友に集まって頂いた。

五月八日、支部総会をホテル「八丁堀シャンテ」で二十名を集め行われた。

泉尾忠初代支部長から平位剛新支部長にバトンタッチされ、委員も五名から十四名に増えた。

今後の活発な支部活動が期待される。

（吉村千春）

## 福岡支部

平成九年は福岡支部創立四十周年に当たったので、記念行事として平成九年に「中国雲南の山旅」平成十年に、「納木那尼峰登山隊」と「カイラスと納木那尼峰ベース・キャンプを訪ねるトレッキング」を行った。

中国雲南の山旅は平成九年十一月六～十八日の間、福岡・上海・昆明・大理・麗江・中甸・徳欽へと旅をした。玉龍、哈巴両雪山を望み、金沙江の大曲点を見、少数民族の人達に接した。最奥の徳欽では二泊したが、連日大雪で待望の梅里雪山の頂は見ることはできなかった。降雪の中当地にある京都大学による日中合同の遭難碑にビールと煙草を供え全員合掌した（参加者十一名）。

平成十年度の総会は四月二十六日開催、総会終了後納木那尼峯登山隊の壮行会を行った。

納木那尼峰登山隊は五月六日福岡を出発、二十二日から登山活動開始。キャンプ三つを設置し六月六日隊員一名、シェルパ二名が、中日合同隊、スイス隊に次いで三隊目の登頂であった。登頂後チベット高原を走破し六月二十八日帰国した（隊員四名）。トレッキング隊も五月二十～六月十日の間予定通りの行動をし無事帰国した。

平成十一年一月二十三日、定例の〝新年の集い〟には四十名の参加があった。自然保護に関しては平成十年九月二十三日〝絶滅から救おう高山植物保護と盗掘防止を考える〟シンポジウムに山本博会員が参加、十一月十四日京都芦生の森での自然保護全国集会に井上晋会員が参加した。

平成十一年度の総会は四月に行い、支部とっておきの山、対馬への山行。一月の新年の集い、支部報の年二～三回発刊を決めている。

（深田泰三）

## 東九州支部

東九州支部は二〇〇〇年（平成十二年）に支部創立四十周年を迎える。記念行事について数年前からあれこれ思案を重ねていたが、本部や各支部の協力を得て、全国支部懇談会を東九州・大分の地で開くことになった。

記念の講演会や展示会などは大分市での開催となろうが、山行は今のところ九重（くじゅう）山群を考えている。時期は秋九月で、この年報が会員の手許に届くころにはプログラムも煮詰まっ

ているだろうが、この機会に簡略に山群の紹介をしておきたい。

山群は「九州の屋根」といわれる。九州の最高峰は南海の屋久島にあるが、本島では山群の中岳が最も高く、久住山、大船山など、一七〇〇㍍級の山々が群がっているからである。もちろん、高度の面からは物足りないかもしれないが、樹林の少ない岩と草付きの峰々が競い立っている姿はアルペン的な様相で、満足いただけるかと思う。

こうした山群のたたずまいについて、深田久弥氏は『日本百名山』のなかで、あえて一つの山峰としては取り上げず、「九重共和国」と表現した。まるっこいトロイデ式の休火山が肩を寄せ合っている姿を、的確に語っていると思う。同時に氏は、南北に広がる広大な草原を称えて、やわらかな山と高原が山群の特色であると述べている。女性的で、しかも南国の明るさに満ちた山々こそ、九重である。

山群の名物の一つがミヤマキリシマツツジやコケモモの群落である。花時の六月上・中旬が山開きで、その前後は九州を中心に各地から一日だけで数万人が訪れるし、夏休みはまた児童・生徒・学生たちの登山やキャンプで大にぎわいする。

全国支部懇談会もできれば花時に開きたいと思ったが、人と梅雨の雨の多さを避け、夏も終わって静けさを取り戻した九月中旬がいかがだろうかと考えている。全国からたくさんの登山人を「九州の屋根」に迎えたいものである。山群に関する文献はきわめて多く、現在もたくさんの刊行物がある。支部事務局に連絡いただければ紹介したい。

なお、山群には古くから「九重」「久住」という二つの漢字表記がある。登山や観光が盛んになって、これが混乱をもたらした時期があるが、登山界では総称が九重山群、最高峰（と思われていた山）を久住山とすることで大方の同意を得ているし、国立公園としては「阿蘇くじゅう」と表記している。

また、本年度の支部行事としては「今西祭・九州学問の旅」を九州各支部とともに開催する。岐阜、富山、越後、京都などの各支部長はじめ、全国から延べ約七十人、支部からも約三十人が参加して、大分の高崎山から宮崎の幸島、都井岬へと、故・今西錦司先生をしのんで旅をし、語り合った。

（梅木秀徳）

## ■熊本支部

いま熊本支部では月例会として毎月、熊本県境を歩いている。平成十年度の支部総会に提案し、平成十四年の支部設立四十五周年に向けて昨年秋から始めたものである。九州で最長の四百三十六㌔㍍の県境線を六十八区間に分け、今日まで延べ九十二人で三十区間、百九十五㌔㍍を歩いた。今年は熊本県の国体開催年に当たり、工藤副支部長はじめ多くの会員が役員として準備と運営に奔走している。従って県境線の核心部となる九州中央山地と、県南部の球磨山地については来年以後に持ち越されることになるだろう。

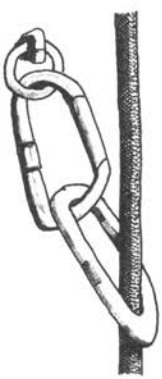
以下、昨年度からの支部の主要な行事について報告する。

平成十年八月三十日、夏季例会（ビールパーティー）は熊本市厚生年金会館に二十名が集まり、恒例の神谷副支部長のビデオ作品発表もあり盛会だった。九月、秋田支部主管の全国支部懇談会には、門脇愛子さんと加藤稜子さんが参加した。十月三十一日から二日間、県境の山第一回月例会は、十四名の参加を得て大分県九重町の八丁原ビューホテルに泊まり吉武山（九二七㍍）と亀石山（九四三㍍）に登った。十月二十四、二十五日は京都市北区の洛雲荘に五十六名が出席して今西祭'98を開催。本田支部長が参加して魚谷山、貴船山に登った。十一月三日、恒例の宮崎ウェストン祭には、熊本支部から五名が参加した。同日、九重山の法華院では「顕彰碑五輪塔建立三十周年記念祭」が行われ本田支部長が出席した。九重山を九州の山のメッカとして先覚者（工藤元平、弘蔵孟夫、梅本昌雄、加藤数功、立石敏雄、福原喜代男）六氏を顕彰するもので発起人は松本福岡支部長と東九州支部の加藤英彦氏。十二月五日、日本山岳会年次晩餐会は皇太子妃もご出席になり盛会だった。なお開宴に先立ち「各支部とっておきの一山」展も開催されたが、当支部から五家荘の「上福根山」を紹介。説明役の廣永会員から山の花の写真のプレゼントもあり好評だった。

十二月十三日、県境の山十二月例会は十七名が参加して、筑肥山地の男岳、女岳、姫御前岳三山と、陣床峠、鹿牟田峠を歩いた。

明けて平成十一年一月九日、新年晩餐会は熊本厚生年金会館に二十三名が参集し盛会。一月十七日、干支の山は九名が阿蘇東外輪山の「卯の鼻」（七七四㍍）に登った。一月三十一日、県境の山一月例会は九名が参加して筑肥山地の星原山（七九三㍍）と、星原峠、冬野越を歩いた。二月二十一日、県境の山二月例会は六名が参加、折からの降雪のなか筑肥山地の休鹿山（八六六㍍）と国見山（一〇一八㍍）に登った。三月二十一日、県境の山三月例会は七名が参加、雨の中を穴川峠からハナグロ山（一〇八六㍍）に登った。帰路は兵戸峠へ廻る。

（本田誠也）



# 会務報告

一九九八年（平成十年）六月～一九九九年（平成十一年）五月

**一九九八年度役員・評議員・支部長**

会　　長　斎藤惇生
副 会 長　小倉茂暉・大森薫雄・竹内哲夫
常務理事　吉永英明・田邊　壽・伊丹紹泰・熊崎和宏・絹川祥夫
理　　事　宇田川芳伸・大蔵喜福・宮崎紘一・村井　葵・飯田　進・坂本正智・勝山康雄・増山　茂・森　武昭・鰺坂青青
監　　事　石橋正美・神崎忠男
常任評議員　平山善吉・穴田雪江・長尾悌夫・中川　武・平野眞一・中村太郎
評 議 員　大森弘一郎・山口俊輔・大倉昌身・吉田　宏・長坂　博・若林啓之助・村木潤次郎・中村純二・芳賀孝郎・山本健一郎・宮下秀樹・岩間弘雄・魚本定良・中谷　充
支 部 長　新妻　徹（北海道）・松島静吾（青森）・中谷　充（岩手）・岡田光行（秋田）・梅津　博（山形）・柴崎　徹（宮城）・佐久間高雄（福島）・五十嵐篤雄（越後）・山浦源太郎（信濃）・古屋学而（山梨）・大石　惇（静岡）・中世古隆司（東海）・高木碕男（岐阜）・酒井敏明（京都）・木戸繁良（富山）・津田文夫（石川）・中村　義（福井）・阿部和行（関西）・吉川暢一（山陰）・泉尾忠志（広島）・松本徑夫（福岡）・梅木秀徳（東九州）・本田誠也（熊本）・大谷　優（宮崎）

**◇六月理事会**　一九九八年六月十日　本会会議室
出席者　二十五名
▽審議事項
一、青年部カンチェンジュンガ登山隊一九九八について　承認
事故の経過、事故処理、負傷者の現況（会報「山」六三七号参照）
二、秩父宮記念山岳賞について　承認
三、新篇「日本山嶽志」について　承認
四、学生部ブータン・ヒマラヤ登山隊一九九八について　承認
五、支部長交替、東海支部五月三十日の総会で尾上昇→中世古隆司に交替　承認
六、シンポジウム「絶滅から救おう―高山植物―保護と盗掘防止を考える」開催、主催―自然保護委員会、北海道高山植物盗掘防止ネットワーク　承認
七、東京都写真美術館開催の写真展「山を愛する写真家たち（仮称）」展に対し後援名儀使用依頼　承認
八、W・ウエストン関連の写真撮影と掲載許可について　承認
九、全国体育指導委員会連合機関誌に関連団体として住所録掲載許可について　承認
十、科学技術庁主催「火山ガス災害防止（仮称）シンポジウム」後援依頼　承認
十一、六月の新入会員　二十三名
▽報告事項
一、ウエストン祭で徳本峠越え参加者が四百名を越え、盛会だった
二、ネパール・トレッキング申込者八十名
三、ポカラ山岳博物館募金状況
四、委員会報告、海外委員会、医療委員会、パソコン導入検討委員会、山研運営委員会
会報「山」六三九号参照

**◇七月理事会**　一九九八年七月八日　本会会議室

出席者　二十五名

▽審議事項

一、日中合同学生登山の件　本年度ブータン・ヒマラヤ登山計画が進行中なので来年度計画として検討　継続審議

二、ネパール・トレッキング実行委員会設置について　承認

三、事務局は十月から第二、第四土曜日を休日とする。第一、第三、第五土曜日の閉室を十八時とするなど事務局の土曜日の取り扱いについて　承認

四、ガンガー・プンスム（七五七〇・四メートル）偵察計画について　承認

五、図書管理委員会のあり方について小委員会を設置する　承認

六、名儀後援・撮影・転載等承認案件五件について　五件とも承認

七、国連環境計画（UNEP）国際環境情報源照会システムへの新規登録について自然保護委員会に対応を委任　承認

八、七月の新入会員　十一名

▽報告事項

一、ヒマラヤ保全協会から十月のトレッキング参加要請があったが、本会も十一月にネパール・トレッキング計画があるため見送りとする

二、集会・95同期会企画で「富士の古道を歩く」を五月三十～三十一日に実施し盛会であった

三、評議員会、名誉会員を囲む会開催

四、秩父宮記念山岳賞について

五、第九次マッキンリー気象観測機器設置登山隊報告

六、学生部ブータン・ヒマラヤ登山隊一九九八について

七、第一回同好会、同期会連絡会議

八、中高年対策に関する行事「夏山を満喫するために」の報告

九、上高地山岳研究所の小型水力発電設置計画について

十、青年部カンチェンジュンガ登山隊一九九八、故赤坂謙三、椎名厚史君の報告、追悼会が七月十一日にスクワール麹町で開かれた

十一、事務局ＯＡコンピューターを明年（一九九九年）一月に納入を予定、現機種と並行使用、二〇〇〇年四月から専用とする

十二、全国支部懇談会を九月十九～二十日に秋田支部主幹で、男鹿市で開催

会報「山」六四〇号参照

◇**八月理事会**　休会

◇**九月理事会**　一九九九年九月九日　本会会議室

出席者　二十六名

▽審議事項

一、事務局職員補充について　経過報告

二、学生部ブータン遠征隊資金貸付等について　承認

三、新編「日本山岳志」について、版元はナカニシヤ出版、旧「日本山嶽志」をもとに、創立百周年記念事業の一環として現代にふさわしいものとする　承認

四、㈱日・豪・ニュージーランド協会による企画の名儀後援依頼　見送り

五、ＪＲ東日本発行月刊誌に上高地におけるＷ・ウエストンの写真掲載許可願い　承認

六、ヒマラヤン・ガイド・アマダブラム登山隊に個人参加する続　素美代会員に推薦状交付願い　承認

七、ポカラ山岳博物館募金について、今後の対応　継続審議

八、秩父宮記念山岳賞について、小田稔審査委員長の選任など　承認

九、九月の新入会員　三十三名

▽報告事項

一、アルパータ峰プロジェクトについて

二、上高地山岳研究所「自然エネルギー展」の会期延長と「ミニ水力発電計画」について
三、ボナッティ氏の来日について
四、火山ガス災害に関するシンポジウムについて
五、JACネパール・トレッキング、申し込み者一一五名（残席一〇名）
六、ホームページ・オープンについて、その他
会報「山」六四二号参照

◇**十月理事会**　一九九八年十月七日　本会会議室
出席者　二十三名
▽審議事項
一、事務局職員「深田由貴子さん」を採用、十月一日から勤務　承認
二、秩父宮記念山岳賞審査委員として新たに石坂昭二郎会員に委嘱、選考日程は審査結果を十月十五日運営委員会に報告、会長に提出し、十一月理事会で審議する　承認
三、アメリカ山岳会元会長ニコラス・クリンチ氏歓迎会の件　承認
四、ポカラ国際山岳博物館連絡協議会について　承認
五、ネパール・トレッキング実行委員会について　承認
六、ガンカー・プンスム偵察隊について　承認
七、十月の新入会員は十六名
▽報告事項
一、秋田支部主幹の全国支部懇談会は、参加者百六十七名で盛会だった
二、アルパータ峰プロジェクトの打ち合わせで来日中のカナダ山岳会会長M・モーティマー氏歓迎夕食会を十月二十日開催
三、十月三十一日開催のカナダ山岳会年次総会・晩餐会に斎藤会長、熊崎理事夫妻が出席
四、W・ボナッティ夫妻は十月五日に帰国
五、九月二十三日の「高山植物～保護と盗掘防止を考える」シンポジウムは参加者四百三十名
六、自然保護全国集会は十一月十四～十五日、京都府美山町立自然文化村で開催
七、十月十七～十八日、集会委員会主催のきのこ山行、二岐山・小白森山
八、九月十九日「火山ガス災害シンポジウム」科学技術庁主催に協力、一九五〇年以来の「ガス事故報告書」一部が本会に寄贈された
九、十一月二十八日にシンポジウム「科学的にとらえた中高年登山」を開催
十、その他、総務、学生部指導、青年部、資料、データーバンク研究会など各委員会から報告
会報「山」六四三号参照

◇**十一月理事会**　一九九八十一月十一日　本会会議室
出席者　二十三名
議事に先立ち、学生部ブータン・ヒマラヤ登山隊の蛭田隊長から、七日に全員無事帰国の報告と支援に対するお礼の挨拶があった
▽審議事項
一、名誉会員三名推薦の件（十二月五日の晩餐会で名誉会員章を授与、氏名など詳細はトピックスで後述）　了承
二、永年会員一九四八年一月十二日入会の十六名に永年会員章を授与（トピックスで後述）　承認
三、秩父宮記念山岳賞の件（トピックスで後述）　承認
四、ポカラ山岳博物館募金の件　承認
五、ガンガー・プンスム峰偵察について　承認
六、武田久吉メモリアルホール建設に伴う本会所蔵資料の寄託先変更について

七、許可願い三件　承認
八、財務状況、監査について　承認
九、十一月の新入会員は十四名　承認
▽報告事項
山研、図書管理小委、海外、学生部、自然保護、医療、総務、集会各委員会の活動状況を報告
会報「山」六四四号参照

**◇十二月理事会**　一九九八年十二月九日　本会会議室
出席者　二十三名
議事に先立ち、事務局経理担当で新任の高瀬公江さんが紹介された
▽審議事項
一、ガンガー・プンスム登山隊実行委員会について、大森薫雄委員長ほか委員十九名委嘱　承認
二、アルパーター登頂七十五周年記念合同イベント実行委員会について、斎藤惇生委員長、大森薫雄実行委員長、伊丹紹泰、増山茂実行副委員長、事務局長（実行委員兼任）熊崎和宏ほか実行委員八名、吉田宏顧問など委嘱　承認
三、山研「ミニ水力発電計画」実行委員会について、小倉茂暉実行委員長ほか常任委員三名、委員十三名ほか、神奈川工科大学との共同研究　承認
四、図書の推薦について　承認
五、十二月の新入会員　十一名
▽報告事項
年次晩餐会、支部長会議、国際山岳博物館募金、ネパールトレッキング、科学委員会主催の中高年シンポジウム、財務委員会の予算提出要請など
会報「山」六四五号参照

**◇一九九九年一月理事会**　一九九九年一月十三日　本会会議室
出席者　二十五名
議事に先立ち二十七年間事務局経理担当として勤務、一月三日付けで定年退職した杉山都子氏に退職金が手渡され、理事会一同が永年の功績に謝意を表した
▽審議事項
一、カンガー・プンスム峰登山隊の件　了承
二、上高地山研ミニ水力発電の件　了承
三、「チョモランマ登山隊報告書」転載願いの件　承認
四、一月の新入会員　十九名
▽報告事項
海外登山基金の申請状況、山岳保険の更新、秩父宮記念山岳賞、ポカラ山岳博物館募金状況、財務、学生部、海外委員会の活動報告など
会報「山」六四六号参照

**◇二月理事会**　一九九九年二月十日　本会会議室
出席者　二十四名
▽審議事項
一、ガンカー・プンスム登山隊の件　承認
二、青森支部「白神山地ブナ植林事業」について、百周年記念行事の一環として実施する方向で検討　承認
三、文化庁へ「早池峰の高山植物」保全の要望について　承認
四、ネパールヒマラヤ登山隊推薦状交付について　承認
五、写真複写の依頼について　承認
六、二月の新入会員は十二名
▽報告事項

一、山研ミニ水力発電計画について
二、学生部日中合同登山について
三、海外登山基金の三件決定について
四、評議員会開催について
五、総務、財務、医療、指導、会報、図書管理各委員会の活動報告
六、ワルテル・ボナッティ氏より丁重な礼状が届いた

会報「山」六四七号参照

**◇三月理事会**　一九九九年三月十日　本会会議室

出席者　二十六名

▽審議事項

一、カンガー・プンスム峰登山中止について　承認
二、新年度事業計画と収支予算について　承認
三、上高地山研の利用料金について　承認
四、その他、備品貸出しなど四件　承認
五、三月の新入会員　二十三名

▽報告事項

一、図書管理委員会は年度末に解消し、来年度から財務の中に小委員会を設け管理して行く
二、支部事務局会議二月二十七～二十八日に開催、岐阜支部主管の一〇〇周年記念事業の「新日本山岳志」の編集担当者は高澤光雄（北海道）、鴫谷節夫（北海道）、下山壽（青森）、菊池修身（岩手）、佐々木民秀（秋田）、木村喜代志（山形）、田村良一（山形）、林田健治（宮城）、八巻和男（福島）、五十嵐篤雄（越後）、小林俊樹（信濃）、山村正光（山梨）、安間荘（静岡）、西山秀夫（東海）、高木泰夫（岐阜）、大槻雅弘（京都）、佐伯郁夫（富山）、太田義一（石川）、宮本数男（福井）、柏木宏信（関西）、徳田章人（山陰）、松本徑夫（福岡）、深田泰三（福岡）、梅木秀徳（東九州）、本田誠也（熊本）、大谷優（宮崎）、種村重明（広島）、大森久雄（首都圏）、平井吉夫（首都圏）の二十九名が決まり、五月二十九日第一回編集会議を開催する
三、アルバータ・プロジェクト実行委員会について
四、「社団法人日本山岳会」「JACマーク」の商標登録を更新した
五、海外登山基金について
六、その他、山研、自然保護、会報、総務各委員会報告

会報「山」六四八号参照

**◇三月臨時理事会**　一九九九年三月二十五日　本会会議室

出席者　二十三名

▽審議事項

一、登山隊派遣の件

ガンガー・プンスム峰は中国登山協会より延期の要請があり、その北方三キロにあるリャンカン・カンリ峰に登山許可したい、との申し出に対し、国境近くでブータン政府から抗議の可能性があるため、山岳会隊としないで個人・有志の隊とする

伊丹理事より今回の登山隊派遣に混乱をきたした責任をとり理事辞任と五月の改選期まで、海外は増山理事、高所は山本委員長にお願いしたい、と申し出があった　承認

**◇四月理事会**　一九九九年四月十四日　本会会議室

出席者　二十五名

▽審議事項

一、平成十年度事業報告及び収支決算について　承認
二、秩父宮記念スポーツ博物館より資料貸し出し更新など三件　承認
三、山研のウエストン特別展のため、貸し出し資料追加　承認

四、北海道支部三十周年記念事業のため会章に三十周年等を加えたものを使用したい、との申し出があった　承認
五、山研利用料金を利用者の増加を図るために改定する　承認
六、改選される評議員九名の推薦について　承認
七、四月の新入会員　五十六名
▽報告事項
アルパータ実行委員会、総務、財務、山研、科学、医療、総務の各委員会の活動報告
会報「山」六四九号参照
◇**四月臨時理事会**　四月二十二日　本会会議室
出席者　二十一名
▽審議事項
一、新役員、監事、評議員について
▽報告事項
一、ポカラ国際山岳博物館について
◇**五月理事会**　一九九九年五月十二日　本会会議室
出席者　二十二名
議事に先立ち、斎藤会長より在任の二年間について感謝の挨拶があった
▽審議事項
一、平成十一年度通常総会議案について　承認
二、資料貸出しの件　承認
三、アルパイン・フォトビデオクラブが夏山前の写真展およびギリシャ・アテネで写真展を開催するので後援の要請があった　承認
五月の新入会員　二十二名
▽報告事項
一、アルパータ実行委員会、総務、医療、山研、自然保護、財務、資料各委員会活動報告
二、青年部、会員有志による「日本リャンカン・カンリ登山隊」は五月九日、十日に初登頂に成功した
会報「山」六五〇号参照
◇**平成十一年度通常総会**　一九九九年五月十五日　九段会館
出席者　百四十一名
▽議案
一、平成十年度事業報告及び収支決算、財産目録承認の件
二、平成十一年度事業計画案及び収支予算案承認の件
三、平成十一年度役員及び評議員改選の件
次のとおり決定
会　長　大塚博美（新任）
副会長　小倉茂暉・大森薫雄・竹内哲夫（以上再任）
理　事　宮崎紘一（学生部指導・再任）・村井　葵（会報編集・再任）・坂本正（担当）　智（山研・再任）・勝山康雄（集会・再任）・増山　茂（医療・海外・再任）・森　武昭（科学研究・再任）・鰺坂青青（フィルムビデオ・資料・再任）・河西瑛一郎（自然保護・新任）・村井龍一（財務・新任）・高遠宏（山岳・百年史・新任）・宮下啓三（図書・新任）・西村政晃（総務・新任）・高原三平（総務・新任）・坂井広志（高所・新任）・山本篤（青年部・新任）・松原尚之（指導・遭難対策・新任）
監　事　神崎忠男（再任）・中村　保（新任）
評議員　若林啓之助・平山善吉・中村純二・芳賀孝郎・山本健一郎・宮下秀樹・岩間弘雄・中川　武・平野眞市・魚本定良・中谷　充（以上十一名再任）・田邊　壽・山本久子・平林克敏・斎藤惇生・尾上　昇・吉永英

明・宇田川芳伸・絹川祥夫・古市　進（以上九名新任）

▽五月二十六日に開かれた臨時理事会で常務理事は次のとおり委嘱

常務理事　村井龍一・宮崎紘一・西村政晃・森　武昭

▽常任評議員は五月十五日の評議員会で互選、次の五氏に委嘱

常任評議員　平山善吉・中川　武・平野眞市・田邊　壽・吉永英明

四、平成十一年度除籍者の件

五、その他

会報「山」六五〇号参照　以上五議室承認

▽会務報告

平成十年度末会員数

名誉会員　三十五名（内永年会員十七名）

永年会員　四十八名

終身会員　百二十五名

通常会員　五千五百十二名

夫婦会員　百四十五名

計　五千八百六十五名（前年度末会員数五千七百三十七名）

新入会員　二百三十五名

復活会員　十名

物故会員　四十九名

退会者　六十一名

除籍者　三十八名

**◇登山の指導と奨励に必要な集会、研修会、講演会及び展覧会の開催**（一九九八年度）

（A）**集会**

▽六月四日～五日　上高地

ウエストン祭と「新入会員のための焼岳登山」（山研）

▽六月十二日　ルーム

中高年登山講座（集会）

▽六月十二日　奥秩父小川山

小川山集会（学生）

▽六月十八日　ルーム

マレーシア山岳会会長歓迎会（海外）

▽六月十八日　ルーム

チベット連続講座1（海外）

▽六月二十一日　法政大学体育館

中高年登山講座（集会）

▽六月二十三日～二十四日　白神山地

白神現地調査　植林等（自然保護）

▽六月二十六日　ルーム

委員会・同好会・同期会連絡会議（総務）

▽六月三十日　ルーム

チベット連続講座2（海外）

▽七月九日　ルーム

チベット連続講座3（海外）

▽七月十一日　池袋かんぽプラザ

日本ヒマラヤ協会登山隊壮行会（高所）

▽七月十一日　ルーム

カンチェンジュンガ　登山隊遭難報告・追悼会（青年）

▽七月十六日　ルーム

「夏山気象入門」講座（科学）

▽七月十七日　ルーム
チベット連続講座4（海外）
▽七月二十二日　ルーム
ボナッティ夫妻招聘委員会（海外）
▽八月三日～十月十八日　上高地山研
上高地山研「自然エネルギー展」（科学・資料・山研）
▽八月五日　ルーム
名誉会員を囲む会（総務）
▽九月一日　ルーム
ボナッティ夫妻招聘委員会（海外）
▽九月十八日　国際文化会館
ボナッティ夫妻歓迎会（海外）
▽九月十九日～二十日　秋田・男鹿
全国支部懇談会（総務）
▽九月二十五日　岸記念体育館
原田達也委員を忍ぶ会（海外）
九月二十六日～二十七日　上高地
山研プチ・オータム・コンサート（山研）
▽十月二日　イタリア大使館
ボナッティ夫妻・イタリア大使夫妻と昼食会（海外）
▽十月二日　ルーム
ボナッティ夫妻他来室（海外・高所）
▽十月三日～四日　木曽上松町
自然観察山行　赤沢自然休養林（自然保護）
▽十月五日　陣場山
陣馬山撮影会（フィルムビデオ）
▽十月十二日～十四日　青森営林局
白神現地調査・打合せ（自然保護）
▽十月十三日　代々木オリンピックセンター
カンチェンジュンガ登山隊遭難検討会（青年）
▽十月十三日～十一月十七日
ガンカー・プンスム偵察（高所）
▽十月十六日　ルーム
第六回山を語る（図書）
▽十月十七日～十八日　小白森山・二岐山キノコ山行（集会）
▽十月十八日　ルーム
カナダ山岳会会長モティマー氏来日（海外）
▽十月二十一日　ルーム
アルバータ・プロジェクト二〇〇〇年打合せ（海外）
▽十月二十三日～二十五日　文部省登山研修所
岩登り技術研修会（指導・遭難対策・青年・学生）
▽十月二十四日　陣場山
陣馬山撮影会（フィルム・ビデオ）
▽十月三十日～十一月四日
カナダ山岳会年次総会・晩餐会出席（海外）
▽十月三十一日　ルーム
全国山岳博物館連絡会議（資料）
▽十一月七日　ルーム
秋期新入会員オリエンテーション（総務）
▽十一月八日　皇居外苑

マラソン大会（学生）
▽十一月十日　うすけぼし
元アメリカ山岳会会長クリンチ氏来日歓迎会（海外）
▽十一月十四日～十五日　美山町
自然保護全国集会　自然観察山行　芦生の森（自然保護）
▽十一月十四日～十五日　奥三河、山びこの丘
大学山岳部監督会議（学生）
▽十一月十九日　ルーム
上高地山研ミニ水力発電実行委員会発足（科学・山研）
▽十一月二十六日　ルーム
ブータン登山隊報告会（学生）
▽十一月二十六日　ルーム
第二十七回山岳史懇談会（図書）
▽十一月二十九日　品川プリンスホテル　昭和山岳会六十周年チョモランマ登頂報告・祝賀会（高所）
▽十一月三十日　ルーム
ガンカー・プンスム偵察隊報告会（高所）
▽十二月五日　新高輪プリンスホテル
支部長会議（総務）
▽十二月五日　新高輪プリンスホテル
年次晩餐会（総務）
▽十二月十一日　ルーム
第七回山を語る（図書）
▽十二月十七日　ルーム
雪崩研究会（学生）
▽一月九日～十日　富士学園
総務委員会ウインターセミナー（総務）
▽一月十五日～十七日　白馬八方尾根
スキー懇親会（集会）
▽一月十五日～十七日　梅池高原
雪崩ビーコンゾンデ講習会（学生）
▽一月二十日～二十一日　青森支部
白神現地調査　打合せ（自然保護）
▽一月二十二日　ルーム
「クロスピーク登頂」報告会（海外）
▽一月二十三日　クリオール
青年部OB・現役懇親新年会（青年）
▽一月三十日～二月一日　赤岳鉱泉周辺
アイスクライミング研修会（指導・遭難対策・青年・学生）
▽二月六日・芳蘭亭
中国登山協会代表団歓迎夕食会（高所・海外）
▽二月十一日　ホテル・シーサイド江戸川
中国登山協会代表団サヨナラパーティ（高所）
▽二月二十七日～二十八日　九段会館・本会
全国支部事務局担当者会議（総務）
▽三月十三日～十四日　忍野村
自然観察山行　忍野ハリモミ原生林（自然保護）
▽三月二十七日　ルーム
春期新入会員オリエンテーション（総務）
▽四月十四日　ルーム

山岳図書を語る夕べ（図書）
▽四月二十七日　ルーム
新フィールド・マナー・ノート発刊（自然保護）
▽五月十五日　九段会館
支部長会議（総務）
▽五月十五日　九段会館
通常総会（総務）
▽五月二十一日～二十三日　鏡山・一切経山
若葉会山行（集会）
▽五月二十二日～二十三日　山梨県金山平
第三十八会木暮理太郎翁碑前懇親会（山梨支部）

**（B）研究会・講演会**

▽五月二十五日～二十六日　涸沢
国際山岳救助・医療・技術研究セミナー（医療）
▽六月二十四日　ルーム
中国登山研究会（高所）
▽六月三十日　ルーム
中国登山研究会（高所）
▽十一月二十日　ルーム
高所での酸素使用をめぐるセミナー（医療）
▽十一月二十七日　ルーム
「ヒマラヤ登山を語る」山田二郎元会長講演会（高所・青年）
▽一月二十九日　ルーム
医療委員会研究会（医療）
▽二月十六日　ルーム
「ガンカー・プンスム登山のタクティクスについて」研究会（高所）
▽二月二十日　ルーム
「ヒマラヤと高度障害について」村井葵氏講演会（高所・青年）
▽二月二十四日　ルーム
「数値図の見方」田代博・小堀昇両氏講演会（科学）

**（C）シンポジウム**

▽五月二十三日～二十四日　松本
第十八回日本登山医学シンポジウム（医療）
▽九月十九日　法政大学
火山ガスシンポジウム（科学）
▽九月二十三日　東京全電通ホール
高山植物の保護と盗堀防止を考える（自然保護）
▽十一月二十八日　明治大学
科学的にとらえた中高年登山シンポジウム（科学）
▽三月十三日～十四日　山梨県忍野村
自然保護シンポジウム「富士山の自然を考える」（自然保護）

**◇登山施設の運用、その他登山のための適切な事業**

▽上高地山岳研究所の運用
▽受入資料保管
▽各博物館、美術館との提携強化
▽海外遠征の記録、会合、行事等の記録、フィルムのビデオテープ化による保存

**◇山岳遭難の予防とその対策に関する企画及び指導**

**◇自然保護運動の推進**

▽自然保護委員会による自然保護指導者のための「山の自然学講座」（都内と

現地約二十日）

▽自然保護委員会会報「木ノ芽草の芽」隔月刊行

▽ネパールシバプリにおけるラリグラス植林

**◇機関紙等の発行**

▽山岳第九三年（一九九八年）の発行

▽会報六三五～六四六号の発行

**◇国内及び外国山岳団体との情報交換**

▽国内関係団体（日山協・都岳連・日本ネパール協会・日本ヒマラヤ協会・HAT－J、その他）との密接な連絡

▽海外登山団体との機関紙の交換及び情報誌の購入

**◇海外登山等**

▽五月二十八日～六月二十日　第9次マッキンリー気象観測機器の設置　（科学）

▽三月十五日～　カンチェンジュンガ登山隊　（青年）

▽十月三日～十一月七日　ブータンヒマラヤ登山隊（学生）

▽十一月十七日～ガンカー・プンスム偵察隊　（高所）

▽十一月二十日～二十八日　ネパール観光年記念JACネパール・トレッキング

**◇表彰事業**

▽第一回秩父宮記念山岳賞の授賞（十二月五日）

▽三枝礼子「ネパール語辞典」の編著

▽薬師義美「新版ヒマラヤ文献目録」の作成とヒマラヤ関係の著者の翻訳書の刊行

**◇その他目的を達成するために必要な事業**

▽新刊図書目録資料調達

▽山岳図書の整備

▽ネパール・ボカラの国際山岳博物館建設資金募金

（註）一九九八年六月から一九九九年五月までの各月の理事会報告のうち、審議事項の最後に記載している「新入会員　…名」とあるのは、その月の入会申込者を理事会が承認した人数で、実際の当該月の正式入会者ではありません。

当会では承認された申込者が入会金・当該年度の会費を払込んだ月を正式入会としております。例えば一九九九年二月と三月の理事会で承認された新入会員は、四月に始まる新年度に入会金・会費を払込みますので、正式入会は当会に入会金・会費が入金した四月か五月にずれこみます。

会務報告の最終項に記載している一九九八年六月から一九九九年五月までの「新入会員」名簿は、当会への正式入会の月で掲載しておりますので、理事会承認にかかわらず一九九九年二月と三月の入会者はありません。また会務報告のなかの平成十一年度通常総会で「一九九八年度新入会員は二百三十五名」となっておりますが、これは一九九八年四月から一九九九年三月までの十二ヵ月間の加入者数です。本号（「山岳」第九十四年）会務報告は、一九九八年六月から一九九九年五月までを対象としておりますので、本号の会務報告にある各月理事会承認人数の合計は二百四十名、名簿記載の新入会員は二百四十四名です。

（担当　渡部温子）

# SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

**Volume 94 No.152** **Issued December 1999**

**CONTENTS**

Adventure from the Vertical World to the Horizontal World
—Interview with Mr. Walter Bonatti ……EMOTO Yoshinobu……( 7 )
Juji Tanabe, His Mountaineering and English Literature
……ISOJIMA Kazuaki……(23)
Miscellany on the Compilation of "Nepārugo Jiten"……SAIGUSA Reiko……(78)
Compilation of "Catalogue of the Himalayan Literature"
……YAKUSHI Yoshimi……(90)
Exploring the Least Known Mountains
—Two Seasons in North-Western Nepal Himalaya
……YOSHINAGA Sadao, OHNISHI Tamotsu……(101)
The First Ascent of East Kanthari ……MASUYAMA Shigeru……(114)
Untrodden Mountains in Southeast Tibet
—Kangri Garpo Range, May 1999 ……NAKAMURA Tamotsu……(125)
The Big Walls in the Arctic ……NAGOSHI Minoru……(145)
Japanese Climbing Activities in Abroad
—The Results of the JAC Mountaineering Fund since 1990 …Editors……(151)

Book Reviews……(163)
In Memoriam……(195)
Reports from Branches ……(236)
Club's Notes ……(255)
Catalogue of Japanese Mountain Books in 1998……(A77)

Mountain Moor Land of Northen Honshu,
with special reference to Tashiro Dake ……KOIWA Shimizu……(A59)
Large Scale Reformation in Kamikochi, Natural Conservation Area in Chubu Sangaku National Park ……IWATA Shuji……(A41)
Gankarpunzum and the First Ascent of Liankang Kangri
……ITAMI Tsuguyasu and others……(A39)

English summary ……(A19)

**The Japanese Alpine Club**

(Founded 1905)

Address : 5-4 Yonban-cho Chiyoda-ku, Tokyo 102-0081

Office Bearers and Committee

1999 (May 1999-April 2000)

*President* : OHTSUKA Hiroyoshi

*Vice Presidents* : OGURA Shigeki
OHMORI Shigeo
TAKEUCHI Tetsuo

*Honorary Secretary* : NISHIMURA Masaaki

*Honorary Editor* : TAKATOH Hiroshi

*Honorary Librarian* : MURAI Ryuichi

*Honorary Treasurer* : MURAI Ryuichi

*Auditor* : KANZAKI Tadao, NAKAMURA Tamotsu

*Committee*

AJISAKA Seisei
KASAI Eiichiroh
KATSUYAMA Yasuo
MASUYAMA Shigeru
MATSUBARA Masayuki
MIYASHITA Keizoh
MIYAZAKI Kohichi
MORI Takeaki
MURAI Aoi
SAKAI Hiroshi
SAKAMOTO Masachi
TAKAHARA Sanpei
YAMAMOTO Atsushi

*Council*

FURUICHI Susumu
HAGA Takaroh
HIRABAYASHI Katsutoshi
HIRANO Shinichi
HIRAYAMA Zenkichi
IWAMA Hiroo
KINUGAWA Yoshio
MIYASHITA Hideki
NAKAGAWA Takeshi
NAKAMURA Junji
NAKAYA Mitsuru
ONOE Noboru
SAITOH Atsuo
TANABE Hisashi
UDAGAWA Yoshinobu
UWOMOTO Sadayoshi
WAKABAYASHI Keinosuke
YAMAMOTO Hisako
YAMAMOTO Kenichiroh
YOSHINAGA Hideaki

*Chairmen of Branches*

*Hokkaido* : NIIZUMA Tohru
*Aomori* : MATSUSHIMA Seigo
*Iwate* : NAKAYA Mitsuru
*Akita* : SATOH Kaneji
*Yamagata* : KIMURA Kiyoshi
*Miyagi* : SHIBAZAKI Tohru
*Fukushima* : SAKUMA Takao
*Echigo* : IGARASHI Tokuo
*Shinano* : YAMAURA Gentaroh
*Yamanashi* : FURUYA Gakuji
*Shizuoka* : OHISHI Atsushi
*Tohkai* : NAKASEKO Takashi
*Gifu* : TAKAGI Sakio
*Kyoto* : SAKAI Toshiaki
*Toyama* : KIDO Shigeyoshi
*Ishikawa* : TSUDA Fumio
*Fukui* : NAKAMURA Tadashi
*Kansai* : ABE Kazuyuki
*Hiroshima* : HIRAI Takeshi
*San-in* : KIKKAWA Yohichi
*Fukuoka* : MATSUMOTO Yukio
*Higashi Kyushu* : UMEKI Hidenori
*Kumamoto* : HONDA Seiya
*Miyazaki* : OHTANI Masaru

## "Adventure from the vertical world to the horizontal world" —interview with Mr. Walter Bonatti—

**EMOTO Yoshinobu**

The Japanese Alpine Club invited the famous Italian climber Mr. Walter Bonatti and his wife, famous actress Rossana Podesta at the end of September 1998.

At this occasion, I, journalist and member of the JAC interviewed Mr. Bonatti. This is the digest of the interview.

Mr. Bonatti quitted alpinism after the adventurous solo climbing of the north face of the Matterhorn when he was 35 years old. The interview began with the question why he shifted his adventure from the vertical world to the horizontal world.

Mr. Bonatti told that he had very curious spitrit since childhood, and at first, this spirit took him to alpinism, but after many difficult climbings in the Alps and the Himalayas, he realised he couldn't continue his strict alpinism as before, then decided to shift to horizontal adventure field.

"Alpinism gave me so many good things, and I thought the same valuable things in other field. It's true, repeating same act in the same field is also valuable, but in my case, I chose a completely new field".

From 1954 to 1960 Mr. Bonatti had worked as an alpine guide in the Alps. "The job of a mountain guide concerns with the guest's life. After several years work as a guide I realised that I could not continue this job anymore".

As to the alpinist professionalism he told that he couldn't advise anything to young climbers because it is a very subjective matter.

"I can't advise anything on this matter, but only one thing I can say. I don't like those who talk about idealism and act quite opposite way"

When I asked him if he critisized Mr. Leinhold Messner, Mr. Bonatti answered saying "Messner belongs to a quite diffrent world from the one to which I do".

Previously Mr. Bonatti admired Mr. Messner as his successer. In his book "I GIORNI GRANDI" (1971), he wrote "to Leinhold Messner, the great and the last hope of classic mountaineering"

Now he seemed to have changed his estimation on Messner. "Messner began to take other way. He annouced the abominable snowman search expedition in the Himalayas through the media and did the search for several years and finally announced that snow men were a kind of bear. People knew such a thing long before. He is not an alpinist any more but has become a businessman".

When Mr. Bonatti decided to quit alpinism, the editor of the famous Italian magazine "Epocha" proposed him to travel all over the world, especially wild countries and

areas, and report with photographs in the magazine. He was very glad at the idea, because he thougth the job of reporter had something common to that of a alpine mountain guide, as a reporter guides readers to the unknown world.

Mr. Bonatti traveled many places including Northern-Canada, Africa, Fareast Asia, Siberia and Newzealand. The most impressive area for him, he said, was the South American continent. This continent has very clear contrast in its nature, he told, and he deeply respect native peoples of the continent, especially natives of the Amazon basin area. "They were of course in very modest life, but had the basic human dignity."

The days in Siberia were also very nice exprience for Mr. Bonatti. It was still Khrushchev's era. Bonatti could visit Oimyakon, the coldest point (once record −76 °C) on the Earth, and stayed there with reindeer keepers.

Mr. Bonatti contributed series of reports on the adventurous life in the "Epocha" and published several books.

## Miscellany on the compilation of *"Nepārugo Jiten"* —On the occasion of receiving The Japanese Alpine Club Prince Chichibu Memorial Mountain Award

**SAIGUSA Reiko**

Before I first went to Nepal thirty years ago, I had the imagination of a pure Himalayan snow-clad country. No sooner had I arrived there than I was struck by the beauty and charm of Nepal. I expressed my love for the country through learning the Nepali language to the best of my capacity, and through translation of some Nepali stories and journals into Japanese. Eventually I began preparing myself to compile this book, "*Nepārugo Jiten* (Nepali-Japanese Dictionary)".

Originally I had a plan to make this dictionary with fifteen thousand entry words, but in the course of compilation it turned to be a twenty-six thousand entries. It took me eight years to see it in print. Entries are spelled in Devanagari script and are arranged in the order of the Devanagari system. The pronounciations were provided in the Roman transliteration of the Devanagari. The definitions are based on "*Nepali Brihat Shabdakos** (Comprehensive Dictionary of Nepali)".

I had to face some problems in the process of compiling the dictionary, the principal problem being the finding the exact translations of some of Nepali words in the Japanese language. As a result I had to put in more than one example, especially in the cases where there is no one-to-one correspondence. Sometimes I made an effort to

add information which enables a user to get insight into the Nepali culture and life style.

For the words which I could not easily make out, I had to consult the more knowledgeable Nepali scholars. For such consultation I went to Nepal fourteen times in the total period of eigtht years of dictionary making. Sometimes I received advice through telephone and correspondence in order to resolve my doubts.

I was very happy when this book was published, because it became the first Nepali-Japanese dictionary. I believe this publication will serve to do a positive help for the Japanese people who love Nepal like me.

I do not claim complete accuracy of perfection in the compilation of this dictionary. If there are errors I would be happy to correct them in the future.

---

* "nepāl bṛhat śabdakoś" by the Royal Nepal Academy (1983)

## Compilation of "Catalogue of the Himalayan Literature" —On the occasion of receiving The Japanesc Alpine Club Prince Chichibu Memorial Mountain Award

YAKUSHI Yoshimi

My mountaineering activites started in 1951 when I entered the high school. Just at that time the climbing of the Himalayas and the Karakorum Range was in its Golden Age; the French successful expedition to Annapurna in 1950, the first ascent of Mt. Everest by the British in 1953, the Italian K2 expedition of 1954, the first ascent of Manaslu by the Japanese in 1956, and so on. The reports and books of the expeditions were published successively, and I read the Japanese versions of them carefully. Climbing the nortern part of the Japanese Alps, I had an eager desire to scale the Himalayan mountains some day. My birth place of Toyama Prefecture is situated at the northern foot of the Japanese Alps. I was born and brought up there watching the mountains; Asahi-dake (2,418 m), Shirouma-dake (2,933 m), Tsurugi-dake (2,993 m), Tateyama (3,015 m), and others of about 3,000 meters heights.

### 1. Encounter with the Geographical Journal of the Royal Geographical Society

In the articles on the expeditions and explorations in the Himalayas, Tibet and Central Asia, we can see so many quotations from the Geographical Journal, so called "GJ" of the Royal Geographical Society in London. The complete set of the "GJs" from volume 1 (1893) was purchased by the geographical laboratory of the Kyoto University when I was studying there. Needless to say, the Alpine Journal of

the Alpine Club in London provided with the first-rate materials on the mountaineering, and the Himalayan Journal of the Himalayan Club in India gives us the useful information on the Himalayas. To my regret, I had no copies of the prewar issues of them with me.

At that time there was no complete set of "GJs" at any institute or university in Japan. Therefore, looking on a heap of numerous issues, I thought that it was a nice chance for me to check up on all the articles in them, and I planed to microfilm the important reports on the Himalayas and Tibet before binding them. Some 4,000 pages were photocopied in a few months. Then I made a list of relevant articles and printed privately a booklet in January 1959, and revised and enlarged it in June 1960. That is:

"Index of Selected Reports on the Himalayas, Tibet, and Central Asia to the Geographical Journal: Vol.1 (1893) – Vol.125 (1959)" (Limited 100 copies and 52 pages)

Secondly I compiled "Contents and Index to the Himalayan Journal: Vol.1 (1929) to Vol.21 (1958)" together with late Mr. Eizô Suwata, specialist of the Himalayan research in Osaka. It had 72 pages and also 200 copies were privately printed in August 1960. Those Indices were distributed among the Himalayan research workers. They expressed their thanks to me, and I received many letters with books, reports and information from the authorities of those days; Mr. Marcel Kurz, Prof. Günter Oskar Dyhrenfurth, Schweizerischen Stiftung für Alpine Forschungen, and others.

## 2. "Kyûzan-sambô" (Fukata Library)

In October of 1959 I visited late Mr. Kyûya Fukata, a famous mountain-writer in Tokyo. He organized the expedition to the Jugal Himal (Lengpo Gang) of Nepal in 1958, and was writing a series of "High-peaks in the Himalayas" for "Gakujin" (Alpinists), a leading monthly mountaineering magazine in Japan. Then the articles were collected into five volumes through 1964 to 1966. Its complete edition of three volumes were published by the Hakusuisha in 1973 after his death.

Anyway, to my great joy, he showed me his hospitality as an old friend, though I was a youngster and it was the first meeting with him. We conversed lively, about Himalayan expeditions and literatures on the Himalayas. Since then I called on him whenever I went to Tokyo. His collection of many books and periodicals on the Himalayas and Tibet increased in number every time I visited, and his study and reception room became narrower and its floor seemed to be broken down before long. When he had gone out to climb a mountain, his wife built a small library, so-called "Kyûzan-sambô" for him in the corner of his garden (kyû=nine, zan=mountain, sambô=mountain-hut). After his death the books in European languages in his library were bought by and stored in the National Diet Library in Tokyo.

Late Mr. Eizō Suwata was one of the Himalayan researchers and editor at the Kansai Branch of "Gakujin", and a collaborator of Fukata. He owned a booklet of "Himalaja Bibliographie (1801－1933)" (München, 1934) edited by Willy Merkl. It consists of only 48 pages and contains about 800 items of books, accounts in journals and maps. On the basis of them he wrote an introductory description of the Himalayan literature in the magazine "Tanken" (Exploration) in the prewar days of 1942－44. But his papers were unfinished because the magazine was discontinued. His personal library was purchased by and stored in the Tateyama Mountain Museum of Toyama Prefecture after his death.

Having access to Fukata and Suwata, I felt certian that the literature published in book-forms are better materials than the articles presented in the journals. Of course, there were many mountaineers in the world who didn't write their own books but contributed their climbing reports only to magazines and journals. After I made two indices, it was easy for me to decide to compile a list of the books on mountaineering and exploration in the Himalayas, including Tibet and Central Asia. And in early sixties I began making out a list of the books by tracing back numbers of many geographical journals and mountaineering magazines. At the end of May of 1962 another attempt was made in the "Kyūzan-sambō" to render the data cards as perfectly as possible. The Fukata Library kept almost all the basic literature on the field, and I stayed at the Library to survey all the materials in it and to supplement the cards. Moreover, I was able to increase new cards with the help of Mrs. Fukata. By 1964 the cards had amounted to some 1,600 sheets, and I had earnestly been advised by Mr. Fukata to settle all the card lists into a bibliography in book form.

### 3. "Catalogue of the Himalayan Literature" (1st edition, privately)

Soon after, however, the work was suspended by two expeditions. At that time I was planning to climb a virgin peak in Nepal with my comrades, but the Government of Nepal prohibited all of the mountaineering activities in 1964. So I orgaized a reconnaissance exploration to Tilitso Himal (7,134 m) in the Annapurna range, and then trekked into the Khumbu Himal and the Langtang Himal areas for six months of 1965－66. Tilitso Himal was found on the map and was named by myself with the agreement of the Chief of Thakalis at Tukuche. The Nepalese authorities reopened the mountains for the expeditions in 1969, and at once I carried out the expedition to Gurja Himal (7,193 m) in the Dhaulagiri range in autumn of the same year. Fortunately we succedded in the first ascent of it. But we were refused to attempt the 1st object of Tilitso Himal because of the Nepalese domestic affairs. I thought it was the trouble of Tibetan Khampa guerrillas in Central Nepal. After the release Tilitso was scaled firstly by the French in 1978, and secondly by our expedition in spring of 1979.

Anyway, preparation and settlement of two-times attempts could hardly afford me further card lists, and in 1969 and 1972 I wrote and published still two more books on those expeditions.

In March of 1971, I had the sudden news of Mr. Fukata's death during his mountaineering. I was very sorry and regretted that I had not put his advice into practice in his life time. The activity started afresh, and the cards undisposed for years were arranged and added to.

With all speed, the work was completed privately into a Catalogue at the end of 1972 after the unfruitful negotiations with a few publishers about the issue of the Catalogue. It took me ten months to arrange the cards and ten more months to type them on my own typewriter. And I was able to offered the Catalogue to late Mr. Fukata. It had 343 pages containing some 1,900 books in European laguages and 250 in Japanese. The whole items were gathered to my taste and consisted of the books on the Himalaya, together with on Tibet and Central Asia, mainly mountaineering and exploration. To my regret, none in Russian or Chinese was contained because of my little knowledge of them. I am not a librarian but a high school teacher, so the Catalogue was compiled in my own way.

### 4. 2nd and revised edition in 1984

500 copies of the 1st edition left me in about six months with the help of my friends. This was of much avail to men of intelligence, and its items was quoted on occasion, as there was not such a catalogue in the field. On the other hand, I felt gloomy about errors and misprints included in it, and about information of addenda and correction from my friends or intellectuals at home and abroad. Moreover, the new publications increased correlatively with an active movement towards the Himalayan expeditions since the beginning of 1970's. However, the private publishing was a very hard work for me. One reason was the typewriting by myself. My fingers got the arthritis. Another was the distribution of the Bibliography. So I announced to discontinue making new cards and not to have the idea of 2nd edition.

In February of 1980, one of my friends came to my house and suggested earnestly that I should edit and make the reprint or revised edition, for some publisher desired to bring out it. My friend offered me the 2nd edition again and again. Then I took action. The 2nd and revised edition came out in 1984 after some three years, continuous work. Owing to the economic and technical problems, I changed the publisher to the Hakusuisha Publishing in Tokyo on the halfway of its compilation. Mr. K. Fujiwara, the president of the company, is my old friend and agreed to publish it after careful consideration. So I especially was much obliged to him for his kindness and good offices.

The contents follow correspondingly those of the first edition. The items contained

in this edition amount to 4,607: 3,752 books in European languages and 855 in Japanese. That is nearly double of number and has 759 pages. The lists of the book-titles as well as General Index were designed afresh. I used about 20,000 sheets of small cards to prepare the Indices since I had not a personal computer. The work took me for three months. And 1,000 copies were printed at first, and then 200 copies in addition within a few years. There was a great demand for the book in spite of the high price at ¥19,000.

### 5. "Not in Yakushi" and the new & 3rd edition revised and enlarged

Ten years had swiftly passed since the publication of the second edition. During the course of the time I have had a few people pass way, who provided me with useful information. And from the beginning of the 1980's the opening of the inmost areas in China, such as Sinkiang, Tibet, Sichuan and Yunnan, enabled travellers and mountaineers to issue their reports or narratives one after another and, consequently, they have rapidly added to my own data-cards. Moreover, every remark "Not in Yakushi", seen in the book catalogues from Europe and USA, has bothered me, somehow.

Under these situations, twenty years after the first edition, and ten after the second, I had 4,000 sheets of new cards in my hands and decided to make the 3rd edition largely revised and enlarged, and the publisher Hakusuisha understood my strong will. In November of 1994 the new edition has come out, and it has 1,320 pages and is two kilograms in weight. The price is ¥58,000 (27% discount for overseas consumer). A friend of mine told me reasonably that it was suitable for a pillow of afternoon nap. 700 copies were printed, but 300 copies are stored in the warehouse of the company.

The contents follow those of the second, excluding the books on the religious doctorine of Tibetan buddhism and others. The items contained in this present volume amount to 9,398 in all: 7,601 in European languages, and 1,797 in Japanese. The total number is double the second edition. However, I have never looked at many items of them. And besides, it must added with regret that "No Entry" of some 140 items has been made in the process of editing. I used 40,000 sheets of small cards for editing the Indices this time.

With the help of Mr. S. Tamura, 83 books in Russian, limited to the fields of exploration and mountainerring, are added to the present work as an appendix. He is at home in Russian language and the literature, and deep gratitude has to be expressed for it to him.

### 6. At the end

After publishing the 3rd edition, further information and data have reached me and numerous corrections could be found in it. So the edition of "Addenda &

Corrigenda" was typed and issued privately on my word processor in October of 1995. Its booklet has new 977 books in European languages and 140 books in Japanese. After that the new cards are increasing in number by 400 or 500 sheets every year, and I keep more than 2,000 cards at present. However, I have not a plan to make the 4th edition now. If it is possible for me to issue it in 2004, it will be too thick volume..... So, separates into two volumes, one in European languages and another in Japanese?..... or CD-Rom for the computer? Most important, which of the publishers?

I heartily appreciate the kindness of the following who have given so much new and wide information until now.

Late Mr. Kyûya Fukata, late Mr. Ichirô Yoshizawa, late Mr. Eizô Suwata, and others in Japan. The above three were the authorities in the field on studies of the Himalayan mountaineering in Japan. As I stated above, the libraries of Fukata and Suwata were stored in the public library and museum. As for Yoshizawa's library, the books and journals in Japanese (some 2,200 items) were presented to the American Alpine Club through his intimate friend Mr. Nick Clinch, and the books (some 1,000) & magazines (600) in European languages to the library of Yama-to-Keikoku-sha, leading publisher of mountaineering books and magazines in Tokyo.

Late Mr. Louis Baume (Bloxham, England)

Late Mr. Anders Bolinder (Ronco, Switzerland)

Late Mr. Mario Mingardi (Bologna, Italy)

Late Mr. Jack Baines (Anglesey, North Wales, UK)

Mr. Nicholas Clinch (Palo Alto, California, USA)

Mr. John Boyle (Santa Fe, New Mexico, USA)

Prof. Fosco Maraini (Firenze, Italy)

Prof. Dr. Jürgen Aschoff (Ulm, Germany)

Dr. Reinhard Furtner (Wien, Austria)

Mr. Hans-Dieter Greul & Mrs. Aree Greul (Frankfurt, Germany)

Servei General d'Informatió de Muntanya (Sabadell, Spain)

In November of 1997 I received the Silver Prize of the 1st Yûshôdô Gesner Award (Section of Bibliography & Index) in Tokyo for my "Catalogue". Conrad Gesner was a medical doctor and bibliographer of Zürich in the sixteenth century. And moreover, I was awarded the Japanese Alpine Club Prince Chichibu Memorial Mountain Award for the "Catalogue" by the Club in December of 1998. Those Awards are the ideal perfection of my hobby or pleasure, and are due to the wise decision and the possible assistance of the Hakusuisha Publishing Co., Ltd., and to late Mr. Fukata, late Mr. Suwata, and many other cooperators. Therefore I must express my gratitude to all of them.

<Aug. 5, 1999>

## Exploring the Least Known Mountains
## Two seasons in North-Western Nepal Himalaya

YOSHINAGA Sadao

More than twenty-five years had passed since we were captivated by a remarkable high mountain range, 40 km far away to the north, seen from the top of Tso Karpo Kang (6,556 m) in the northeastern corner of Kanjiroba Himal in 1971. Name of these mountains was quite unknown at the time., We only had a vague idea that they must be on the Nepali=Tibetan border and in the easternmost part of the Mugu district. On old maps by Survey of India, from 1930's afterward, the name Kubi Kangri was given to these mountain ranges, probably from the data of Sven Hedin's expedition in 1907. How to access to these mountains has long been the center of our interest thereafter.

In the middle of 1980's, while still seeking after so little information, we learned that the name Kanti Himal was given to this border range and the highest peak of the range has a height of 6,859 m, according to the new maps issued in 1985 by the Topographical Survey Branch, Survey Department of H.M.G. A few scholars, geologists, botanists and anthropologists, had visited this area in 50's and 60's, though just along the main trade route. Their travel data, however, were not enough to give us on the topographical feature of the mountain range. Also some climbing expeditions in 60's and 70's to northside of Kabjiroba Himal, passed through 35 km south of these ranges. But most of them rarely paid any attention to these border ranges, because of scant visibility from their route, along the river bottom of notorious Langu Khola.

Until the end of 1996, our first plan was fixed to send a expedition to Kanti Himal from the north or the northwest in the spring of 1997. While this plan was steadily proceeding, the point of the expedition was more and more expanded, not only to investigate on the way to Kanti Himal, but to carry out a series of exploratory researches to all mountain ranges on the border in whole Northwestern Nepal. It covers more over 300 km, from Dolpo to Narakankar Himal, most part of which had neither been explored, nor taken any closer photo-shot same as Kanti Himal.

Thus, the expedition in 1997 became the first of four, and was followd by the second, in the autumm of 1998, which sent to southside of Kanti Himal, Gorakh Himal and Changla Himal. The third expedition, to northern Dolpo this summer (1999), made careful researches on the complicated northern passes of Doplo toward north (Tibet), and the fourth expedition, to further west Chandhi Himal and Narakankar Himal, is expected to be sent in the summer of 2000.

1997 SPRING: Searching for Kanti Himal (6,859 m) from Northwest.

On 18th April, our entire expedition arrived at Gamgadhi, northeastern foot of beautiful Rara Lake; from Pokhara to Gamgadhi via Surkhet by a chartered large-size Rusian helicopter at one time. After four days march-in-trek, we arrived at Mugu, last village on the trade route along Mugu Khola. On 24th April, we went up to eastern tributary, Koji Khola, and placed TBC at 4,000 m, and settled Base Camp (4,650 m) on 27th, at the upperstream of the khola. This valley seems to be one of the old trade routes, now unfrequented, between Mugu and Changtang (Tibet), over Nepalese=Tibetan border at Koji La (5,495 m).

On 1st May, we placed our advanced camp on Koji La. First work we had to do was to find out our target, namely main peak of Kanti Himal, as soon as possible. Since nobody knew what she was like, when or where we could get her figure first, stirred up our feelings. Two days were spent for making route on snow and ice ridge of unnamed peak (6,328 m), just south of the col on 3rd May, another two of us climbed up to the snow peak (6,159 m) north from the col. When they were nearing the summit, a gigantic figure of tall trapezoid shapely peak, towering up with snow and ice on the summit, slowly came into their sight beyond the peak we were now making route. Soon they stood on the top and obtained clean view of white splendour of the whole range of Kanti Himal from south to northwest, and to northeast, light brown grandeur of Tibetan hight plateau.

On 5th, three members started early in the morning to scale the southern peak (6,328 m). At 8.30 am, they reached the upper end of the fixed rope (5,850 m), placed on the day before, continued to climb up knife edged ridge and got over steep of blue ice just bellow the summit. They reached the top, pointed just like a spearhead at 12.30 pm. Closer southern view to the north face of Kanti Himal was unfortunately disturbed by strong wind with floating mist.

As a result, we concluded that there would be no feasible way to get near the foot of the main peak from Koji La, unless we could cross the boundary and more or less step into glaciers of Tibetan side. After some survey works to the whole range, we descended to Mugu. Trekking northward to Namja La (4,986 m) along the trade route was very pleasant one in ful bloom of primulas (*P. denticulata*). We started return journey to Kathmandu, on 14th Jume, via Gamgadhi, Rara Lake and Jumla.

1998 AUTUMN: Reconnaissance on the Southside of Kanti Himal (6,859 m), Gorakh Himal and the Attempt to Changla Himal (6,563 m)

In September 1998, we returned Mugu Khola to reconnoiter the southern side of Kanti Himal main peak (6,859 m). On the half way to Mugu from Mangri, to where Rusian Helicopter had brought us by two fights from Surkhet on 6th September, our

entire expedition was devided into two groups, one group, consists of 4 members with the aim of rconnoitering the south face of Kanti main peak. They crossed Ghora La (5,182 m) on 11th, and entered to the eastern valley just south of main peak. Then, on 15th,they settled BC at 4,900 m, after fighting against thick bushes and being suffered from biting insects.

Another group settled BC at Purano Mugu on 11th September, and spent three weeks there; visiting Namja La along the trade route; tracing unknown valleys to observe the border mountains of northern part of Kanti Himal. Other important task given to them was to find out a feasible pass between Mugu Khola and Tanke Khola, over which entire expedition to pass toward west three weeks later.

Meanwhile, the party to the main peak pitched advanced camp at 5,075 m on 16th. Awful south face of 1,800 m high was standing in front of them. The south face is composed of lower half of rock precipice, and above half of overwhelming hanging glaciers with numorous huge ice cliffs defending against intruders. Among the south face, it seemed to be impossible to find the feasible way to the summit. They tried to seek for alternative route to east ridge and west face. Their hard works for a week, however, ended in vain. Only fruit of their activites was they got through west glaciers to stand on the western col of the Tibetan border. From there they completed the reconnaissance to the west face and northwest ridge of the Kanti main peak.

On 3rd October, entire expedition assembled at Purano Mugu. The second stage began without any halt. Here, expedition was again devided two. One group traced along the boudary between Namja La (4,986 m) and Kang La (5,358 m) and reconoitered the eastern part of Gorakh Himal. Another party proceeded to Tanke Khola over the col (c 5,100 m) which they had previously found out. Two parties gathered again at the confluence of Chengar Khola, and down to the main trade route to Simikot. Climbing team of four enterd Dojam Khola on 20th, and settled BC (4,200 m) on 26th at the confluence of Chowa Khola, 6km south of Chang La (5,293 m).

Two camps were placed on the glacier sided moraines at 5,023 m and 5,340 m. Only one week was left for them to find route and to climb. The route through north col to the summit was abandoned, because of the danger from avalanches, and they advanced to the west ridge of southwest peak, from where the main peak might be accessible. On 31st October, they stood on the top of Changla southwest peak (6,162 m), and learned that it would take a few more days to continue the climb to the Changla main summit.

Next day, they hurried down to BC, and started tiresome return trek to Simikot, with a feeling of isolation in dreary winter condition of surrounding Changla mountains.

## The First Ascent of East Kanthari (6167 m)

**MASUYAMA Shigeru**

### Kokosiri Plateau and Mt. East Kanthari

"Kokosiri" is an area covering borders between Tibet, Qinghai and Xinjian. "Kokosiri" means "a beautiful girl" or "Green fields" in Mongolian words. In contrast, it is said to imply "nomen's field" in Tibetan. Which is correct?

This area can be one of the most remote place in Central Asia. It would take more than two weeks from the nearest village on foot, if you try to reach there in summer season you must cross numerous small streams which originated from glaciers and became headstream of Yangtze River. In midwinter, frozen ground and lakes make it possible to access there relatively easily. That is why we are now here despite of violent cold.

From the top of East Kanthari (6,167 m), we could enjoy the 360° view. In the east, the independent Shin-Qing-Hong (6,860 m), in the west twin towered West Kanthari, which had been named "the beacon of Kokosiri" by Sven Hedin.

When you turned your eyes to the north, you would find the keel mountains "Kunlun" which bound Tibet from Xinjian. To the south, you could get the whole view of Kokosiri 4,800 m to 5,000 m plateau with twinkling surfaces of numerous lakes, some of which are not frozen in spite of as severe low temperature as −30°C such as Sijinuranho (4,800 m).

Even in a severely cold season, we were welcome by a plenty of wild animals such as Tibetan Gazelles, Tibetan Antelope, Tibetan Wild Ass, Wild Yak and Wolves, though we could not encounter twenty thousands herd of Tibetan Antepole (Chiru), Hedin had experienced 100 years ago. We are members of China-Japan jointed Scientific Research Expedition by botanists, ecologists, naturalists and medical scientists, which investigate wild beings, plants, animals and humans in Kokosiri in winter. Addition, touring guides are members of Western Activity Committee (WAC) of Chita Prefecture of Qinghai Province. WAC was founded in 1992 to make research and prevent wild animals in Kokosiri, in more correct words, to control Chiru poachers. In '90, herds of Chiru began to be killed by poachers because its soft, light and thin wool fascinated foreign wool agents. As long as Chiru is a national protected species as well as Panda, hunting Chiru has been strictly inhibited, then secret Chiru poachers began to appear in the early '90 and has expanded its area in the midst of '90.

## East Kanthari

East Kanthari is only 6,167 m high above sea level. As the altitude of the surrouding Kokosiri plateau is 4,800 m to 5,000 m, climbing this mountain may not be difficult if you are well acclimatized. However, once you plan to this mountain, you will find no information on this mountain other than Hedin's, because there have no people to visit here for climbing and nor visitors have come here in a severely cold season. This mountain region has been kept as a sanctuary for us climbers as well as wild animals.

It was K. Yamada, our film leader, who found beauty of this mountain. He has been producing to visualize Kokosiri, the forgotten end of Tibet-Qinghai Plateau where has been a sanctuary for Tibetan Antelope, Gazelle, wild Ass, Yak and wolves. He happened to find this Hedin's legend virgin peak. He tried to reconnoiter the north side of the mountain the last year (1998). From our present point of view, the north route requires as long way of glacier and ridge as 10 km. Too long. His photo pictures did not catch a precise view of the peak, either.

We got also two pictures which were taken by 1991 Chinese Scientific Research Party. Another picture we studied was one by Kyushu University's expedition. However, in Japan, we could not tell from which directions these pictures were taken, nor anyone could surely confirm these pictures were really those of Mt. East Kanthari. The only climbing plan we could make in Japan was to attack the mountain from the east or south side.

An unexplored moutain except by Hedin to be attacked sounds pretty, doesn't it? Just as an early Himalayan days, every member eager to insist his own route. Someone emphasized the crystal beauty of icefall region of the main glacier, someone insisted an importance of the security of the ridge route, and others did not stop arguing the difficult snow wall route.

January 6, 1999

five days 800 km tough jeep caravan from Golmud (2,800 m) finally ended at the southern foot of East Kanthari and established Base Camp (5,200 m). Though it was crazily cold, bitterly windy and dry.

January 7

At BC. Fine, −28°C. Reconnaissance of ascending glacier route. East Kanthari had unexpectedly beautiful, great and long glacier originated from the south peak. Severely low temperature as −30°C seemed to assure its ice fall stability and allow us the route to the south ridge of east Kanthari through the glacier. Blue lucid ice facsinated us to choose the route.

January 8

BC. Fine, −30°C. Strong wind during daytime. Reconnaissance of glacier route to be traversed to the south-east, ridge it might be possible, but it would take a log time.

Next was the north snow face to be reached to the south-east ridge. This route was seen very smart and beautiful from the lake side of Sijinuranho, while steep and narrow neck just below the top faded a suspicious shadow of avalanche.

Reconnaisance revealed that snow on the ice of the wall stable, though we needed to be careful of crevasses. The route was thought relatively safe.

The col of the south-east ridge was strongly windy spot, while at shadow space of the bared rocky parts we could find a calm windy tent space.

From here we could get the upper view of the main glacier, where a lot of crevasses above icefall were identified to be avoidable if we tried to the south ridge.

January 9

At BC. −29°C. Snow. In general, it would be dry in winter here in Kokosiri,though there seemed a weekly cyclic change in weather. Snow falling is not always bad weather. Snow makes strong wind milder, too. But, it remains cold. The temperature does not go up higher than −20°C even in the daytime.

Possibilities of climbing routes via Southern Glacier, ascending or traversing the main glacier were precisely discussed among all members. The final plan decided was the shortest ridge route from the col of south-east ridge where the attack camp would be settled. From this camp we would trace south east ridge of the south peak and forward to the main peak via the south.

January 10

At BC. −31°C. Snow in the morning, fine in the afternoon. Mild wind. All needed equipment's and foods for 6 peoples to stay for three days to the attack camp at 5,650 m. Four snow bars, four ice screws, 100 m rope for fixing and return to BC, while technical problems seemed scared. Serious difficulty would be raised by severe cold with strong wind. We might have to expect −40°C at the top. In addition, strong wind was observed inevitable in the daytime. Because the East Kanthari stands solely in the Kokosiri plateau, daytime sunshine induced ascending airflow was accelerated here. From 11:00 to 18:00 snow smoke at the top by strong wind have been observed daily. We have to start early in the morning despite of its severe cold.

January 12

BC to AC. −24°C. Warm! Fine. Masuyama and five members depature to the

attack camp (AC).

Reflected sunshine by unfrozen lakes on Kokosiri, solely beautiful Sin Qing Hong helped us hustling to AC.

Muraguchi and Yamanushi more climbed up for reconnaissancing the foot of the south peak, reported, "Snow is stable, but wind is bitter!"

January 13

At AC. −28°C. Fine. At 6:00, the first attack team by S. Masuyama, N. Muraguchi, F. Yamanushi, D. Hiroshima departed. Not cold. No wind as expected. Sky full of stars. Thin crescent moon.

Endless wide snow ridge lead us to the south peak. Crampons fit well crusted snow on ice. But once caught by drifting snow ascending speed became slower. Moonless night. A small head lamp had not enough power to find best route.

Just below the south peak, I felt wind on my cheek. Never expected before-break wind. Freshening up. Western wind seemed to turn to eastern after the south peak. The temperature became lowered? Cloud cap were seen in the breaking sky. Shall we turn back?

The South peak at 8:00 by Masuyama and Yamanushi. Muraguchi and Hiroshima had gone ahead for films. Making marks for descending points on the south summit. Burst wind could made us off balance. Sensory feeling on the face and fingers began to disappear. Forwarded two men were not identified, then we had no way other than to continue going forward.

At the bottom of the last steep snow wall to the top, we noticed Muraguchi and Hiroshima descending. Hiroshima seemed too cold to respond promptly. He needed to descend to a safe zone. The rest three continued to ascent the final wall.

At 10:00 am, we arrived at the top, a wide snow peak, with 20 m/sec strong wind.

We imaged that we would enjoy the top sky and looked back upon 100 years after Hedin and 1,000 years of Tibetan history at the top of the unclimbed peak. But it was for 1,000 seconds that we could stay there because of cold and strong wind. They compelled us to go down, then we reached the south peak to find no wind at the main peak!

At 13:30, returning back to AC. Severe cold and strong wind injured Hiroshima's right fingers. Distal portions of DIP joints of borth 2nd to 5th fingers became frostbitten. Hiroshima was directed to go down to BC immediately by a support of Masuyama.

At BC, Masuyama will send an emergent e-mail asking for the best field first aid treatment for Hiroshima's case using satellite communication. Masuyama's freinds in many countries will respond and help him, then Hiroshima's fingers will be alive.

## Untrodden Mountains in Southeast Tibet
## —Kangri Garpo Range, May 1999—

**NAKAMURA Tamotsu**

Presumably most of the mountaineers, even though they are Himalayan experts, would be unable to give a correct answer to the question which glacier flows down to the lowest altitude in Tibet, and which glacier has the largest surface with the largest width also in Tibet. The former is Ata Glacier (south) which reaches 2,440 m above sea level and the latter is Lhagu Glacier that would remind us of glaciers in Patagonia and Alaska. The both glaciers locate in Kangri Garpo range in Southeast Tibet. In particular, Lagu Glacier is surrounded by many of fascinating lofty snow peaks of over 6,000 m.

It was in 1995 that the writer made the first access to Kangri Garpo when he had an attempt to go into Zayul district having been strictry closed to foreigners, and in May 1999 he had again tried to search the heart of the unknown mountain massif that was "blank on map" for foreigners. The trekking was in a very short period, but the outcome which is introduced here-under has been to entire satisfaction owing to the finest weather.

### 1. Geography and history of explorations

Kangri Garpo is a sizeable mountains stretching 280 km from northwest to southeast. The range is encircled with three tributaries of Tsangpo-Brahmaputra river. The northern side is eroded where Parlung Tsangpo is forming a narrow and precipitous gorge in the valley. To the south and east of the range, Lohit river (Chinese name: Zayul Qu) play an important role. The river is separated to two tributaries, Kangrigarpo Qu (river) to northwest and Sang Qu to northeast. The confluence is in a bit upper point of Samai in Zayul valley.

Chinese Academy of Science carried out a series of survey of this mountain range in 1973, 76 and 80. For the purpose two major glaciers, Ata and Lhagu, being located to the south of Rawu were selected. In the south of the range, the rivers of Upper Dihang, a tributary of Brahmaputra are flowing in low level of 2,000−3,000 m, and the main ridges are not higher than 4,000 m that cannot produce a barrier effect. Therefore, Kangri Garpo which constitutes the southernmost rim of Qinhai-Tibet plateau receives directly humid southwest seasonal wind from the Indian Ocean. This causes much precipitation in monsoon season and heavy snowfall in winter and spring.

The north of the watershed has a complicated topography. The eastern end is a high plateau while to the west the valley of Parlung Tsangpo becomes a deep gorge

with forest. In the south the valleys are deeply eroded. For at least three months the villages are isolated completely from outside world in a year because of heavy snow.

In the area surrounding Ata and Lhagu glaciers 61 glaciers are observed over 200 $km^2$. The area of all the glaciers in Kangri Garpo amounts to 1,683 $km^2$. This indicates that Kangri Garpo is such mountain massif that the ratio to be covered by glaciers is the largest in Tibet. In Kangri Garpo range the glaciers are concentrated to the eastern part of the range.

Kangri Garpo exists between Tsangpo Great Bend, the eastern end of Himalaya and Baxoila Ling, the western end of Hengduan Mountains. Kenneth Mason hardly described about the mountain range of the east of Himalaya, while F. Kingdon-Ward specified this mountain region in question as Sino Himalaya. To the contrary, however, Chinese Academy of Sciences maintains that Kangri Garpo is to be defined as an independent mountain range with a observation on the geological structure having similarity to that of Nyaingentanglha mountains, and the writer follows the same opinion.

The first foreigner who traversed the mountain range and brought back the velated information was a Pandit Kishen Singh, called A-K. When A-K left Zayul in July 1882 bound for Lhasa, four years had already passed after his departure from Darjiling in 1878 with a secret mission towards the remotest Tibetan Plateau. The Pandit proceeded northwestward up the valley of Kangrigarpo river to the great range of Kangri Garpo which he crossed at Ata Kang La pass (4,610 m) and then once more came on to the elevated highland of Tibet, where he noticed an impassable barrier to the oft-asserted flow of Tsangpo river into Irrawaddy river. This provided him with a significant hint to solve a problem of the missing link of Tsangpo Great Bend, In 1911 F.M. Bailey got to Shugden Gompa near Rawu Lake passing around the eastern corner of the range from Zayul on his way from Sichuan/Deep gorge country to Assam. In February 1933, Kingdon-Ward set off Sadiya of Assam with Ronald Kaulback and other friend. From Rima of Zayul they traced A-K's foot-step to Ata Kang La pass. Kingdon-Ward continued his trip northwards to Shugden Gompa and futher went to the north for exploring the upper Salween. The other two returned from the pass and travelled to North Burma on their way back. In this journey Kingdon-Ward made a preliminary survey of the two major glaciers of Ata and Lhagu, and also the highest peak, Chömbo 6,610 m (Chinese name: Rouni Feng) as well.

In 1935 Ronald Kaulback left for the quest of on discovered region in the upper Salween basin being accompanied by J. Hanbury-Tracy. They chose an approach through North Burma to Lohit river. After they entered to Lepa Chu valley and explored the eastern part of Kangri Garpo. Kaulback travelled along Kangrigarpo

river and Tracy went down along Parlung Tsangpo. They again joined at Bomi. As far as the writer knows, there is no record of foreigners to have visited Kangri Garpo after 1936 as the area have remained closed till today except a Japanese nature photographer went to the point near end-moraine of the glacier flowing down to north from Ata Kang La pass in July 1998.

## 2. Travel to Kangri Garpo, May 1999

The partner is his colleague, Mr. T. Nagai, 66 years old. The writer is 64 years old. There were two main objectives, the first one was to traverse the heart of Hengduan Mountains from Zayul to Yunnan, and the 2nd was to make a trekking in Kangri Garpo.

To great disappointment, however, the first plan that had been incubated for three years was turned down because the prior permit was suddenly cancelled.

The following mention is a summary of the travel to Kangri Garpo laid down briefly in a form of the itinerary including some observation and highlight. Figure in bracket shows an altitude in meter. Line shows means of the transport (ie: ═ by air, —— by car, and ---- by horse or on foot respectively)

May 12: Tokyo/Osaka═Kunming, Yunnan (1,870)

May 13: Kunming═Zhongdian, Diqin Pref. (3,280)——Jin Sha Jiang (2,000)——Baimang Xueshan Pass (4,293)——Deqen (3,250)

May 14: At Deqen the schedue had to be changed as the permit to Zayul was cancelled.

May 15: Cloudy. Deqen——Mekong river (2,150)——Hongla Shan pass, Mekong-Yangtze Divide (4,200)——Markam (3,880)

May 16: Fine, cloudy and rain. Markam——Lawg Shan pass (4,330)——Mekong river (2,650)——Tongda La pass (5,008)——Zogang (3,770)——Banda (4,075)

From Lawu Shan pass a sheer ice and rock peak of Dungri Garpo (6,090) was seen towering and glittering in the morning sunshine. The mountain is on Mekong-Wi Chu Divide. Tongda La pass is the highest one in Sichuan-Tibet highway (Chengdu-Lhasa). From Zogang, a centre of the upper Tsawarong the road is along the left bank of Wi Chu, a tributary of Nu Jiang (Salween River).

May 17: Fine. Banda——Yiela pass (4,618)——Nu Jiang Bridge (2,730)——Baxoi (3,240)——Pass (4,390)——Rawu (3,840)—Lhagu (4,060)

The 88 zig-zag turns from the pass of 4,618 m directly down to the river bank of Nu Jiang is one of the highlights of the highway. Arid and desolate landscape of the deeply eroded valley is so impressive as to be imprinted in mind. From Rawu the party drove to Lhagu village along the eastern bank of Rawu Lake, then in the river bed and futher along the eastern bank of Lhagu Lake.

The Lhagu Lake is held up by the Lhagu glacier from the west, but the stream break out along its foot. and enters a broader valley, at the far end of which is Rawu Lake.

The party was stationed overnight at a Tibetan farmar's house built chiefly of mud and stone with flat and low roof of one storey, where the necessary information was collected and the caravan was arranged for.

Lhagu village has 70 houses with 500 inhabitants. Kingdon-Ward described it was a small village of only 10 houses.

May 18: Completely fine. Trekking started.

Lhagu village----Kogin (4,095)----Chutsu (4,185) Base camp

In the early morning an unknown profile of the mountains in the west was gradually unveiled. Magnificent snow peaks and ridges are seen through wide gap of Lhagu Glacier and reflected in Lhagu Lake. They are really striking objects. The glacier ends in a partly blue ice cliff owing to the undercutting of the lake stream. In 1933 Kingdon-Ward witnessed a large splinter of ice broke off and fell down into the torrent. But today the height of ice-cliff is only some 10 m because of retreat of the glacier.

The original trekking plan was to ascend up to Ata Kang La pass (4,610, Chinese name: Walela Shan) which is on the watershed of Kangri Grapo. However the pass was impassable by horese as being covered with deep snow. The pass is opened only for July to mid October. The party was forced to change their plan to make an approach to North Ata Glacier in a hope to find, if possible, a viable climbing route to Rouni Feng, the highest peak of Kangri Garpo.

The caravan was organized at Lhagu village. Two foreign trekkers, one Chinese interpreter, one Tibetan guide and one Tibetan driver. Four Tibetan muleteers and eight horses were in all. The caravan set out fowards the south along the right bank of the valley and went through small up and down hill side of pasture and berley fields. It is a wonderful trekking course. In the both side of the valley various shapes of glaciers come into sight, one is a hanging glacier and the other is a flat type.

Rouni peak appeared in full view in the southwest at Kogin, a good place to put animals out to grass. The peak was identified as the highest one on Russian topographical map of 1:100,000 by using G.P.S. meter and compass. The foot path that the party followed is a trade road to Zayul from Rawu crossing Ata Kang La pass. Southwards of Kogin the valley forms a small gorge. Therefore the path goes on the left bank along small ridge to avoid that gorge of about 2 km long. Where the gorge terminates, the valley becomes again widely opened riverbed. The name of place near on outlet of the gorge is Chutsu where Base camp was set up. There is an encloser made of shrubs 1.5 m high that is a temporary shelter for the villagers

coming from Lhagu for pasturage or gathering Chinese caterpillar fungus (Traditional medicine) and also for travellers and pilgrims as well. At Kang La pass is about 8 km away to the south from Chutsu in a straight line.

May 19: Cloudy, hail, and snow. Chutsu B.C.----Lookout point over North Ata Glacier (4,310)----Chutsu, B.C.

Having crossed a flat saddle of the ridge behind B.C. to west, the party ascended to a spur on the other ridge of further west traveling snow patches.

The place reached is very suitable lookout point to be able to have an overall view of North Ata Glacier. The main supply source of snow to Ata Glacier is the northern side of Rouni peak. A mighty ice-falls descends from the gigantic snow plateau to the saddle of 4,600 m and then the two glaciers flowing down to north and south. The south glacier of 14 km length has the most outstanding feature of the glaciers in Kangri Garpo with 700 m huge ice-fall and unique landscape of the glacier streaming down through primeval forest. In other hand the north glacier flows down 4 km from the wide saddle of 1 km by 2 km. The width is about 2 km and the inclination is very gentle as an altitude of the glacier end is 4,280 m. The end-moraines form two small lakes that indicates the glacier is retreating. The small lakes are partly covered by floating ice.

The preliminary reconnaissance to scale Ruoni peak was made at the lookout point. With the result, one of the possible route to be taken would be:-

(1) To reach the saddle through the north glacier.

(2) To ascend the ice-fall to a certain point.

(3) To climb the northeast ridge to the summit before reaching the plateau.

As the weather was unstable and even got worse, the party came back to B.C. early afternoon. A group of Tibetan girls visited B.C. on their way back from gathering chinese caterpillar fungus. They sell each one in 2 RMB (a quarter US Dollar). They are cheerful and friendly.

May 20: Snow then rain. Chutsu----Lhagu——Shugden Gompa——Rawu

At the weather did not snow a sign of improvement, it was decided to return to Rauw where the trekking of Kangri Garpo finished. At Shugden Gompa which A-K visited in 1882, the old Lama remembered the writer who had came four years ago.

## Gankarpunzum and the first ascent of Liankang Kangri

**ITAMI Tsuguyasu and others (arrenged by editor)**

When we attended at the 40th Celebration of Chinese Mountaineering Association (CMA) on May 1998 at Peking, we inquired the possibility to permit about the mountaineering on the frontier between China and Bhutan. We receive a good reply.

We seted about planning the expedition to Gankarpunzum (7,570 m), the highest-peak of Bhutan in next year, and sent a reconnaissance party to the mountain in mid-October this year. We settled the members of the reconnaissance; T. Itami, S. Nakamura and A. Yamamoto, and two news reporters for the Yomiuri.

Previously to our attmpt, mountaineerings on the frontier between China and Bhutan, succeed both Khula Kangri (7,538 m) by Kobe University's party in 1986 and Chomolari (7,326 m) by the China-Japan Joint party in 1996.

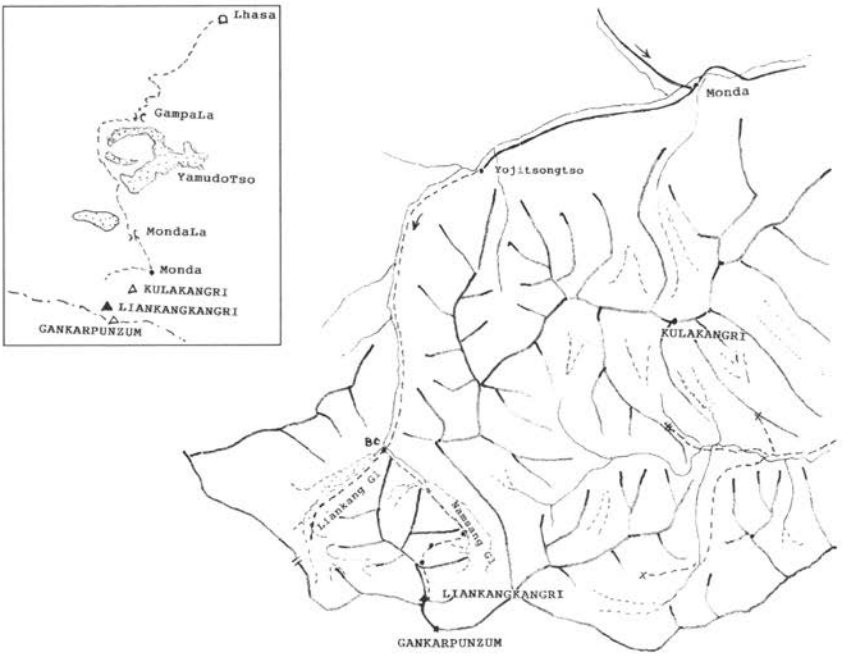
The approach march to the mountain surpassed expectation, ten hours ride from Lhasa by Landcruiser. Through beside the big lake Yamudo Tso, ride across the Monda La pass, and arrived at Yojitsongtso the last village, 4,500 m above sea level. We gathered informations from all souces availavble in this village, after that we went on horseback into the old valley trail which have used by traders from Tibet to Bhutan. We seted up the Base camp on the confluence of Namsang glaciated valley and Liankang Glacier, named Sumdo 4,750 m. In the begining we entered to Namsang Glacier and made a camp on the left bank of the glacier. On the other hand we reconnoitred to Liankang Glacier, there are no secure route to the upper part of the glacier. We advanced to climb up Namsang Glacier to see upper side of the valley and the summit of Gankarpunzum. We could find two possible routes to the summit, northeast ridge via Liankang Kangri or direct up against the east face of Gankarpunzum. Still more reconnoitred to the south side of Khula Kangri Massif, getting for the general view of the possible route of Gankarpunzum. We standed by three days on hills, at least we succeed to take a shot, and return to Lhasa on 12th November.

After return home, we formed a plan to the mountaineering expedition to Gankarpunzum by selected JAC members. In February this year JAC received a notice from CMA, climbing permit for Gankarpunzum was postponed. The notice cofused the expedition comittee but we decided to send a younger members party to Liankang Kangri, also CMA proposed that mountain as substitusion.

We established Base camp at same place peviously, on 21st April 1999. From camp 1 we made a route toward some seraced slope, ward off the crevasses zone to camp 2, and pitched the camp 3 below the 6,921 m pinnacle. 9th May K. Suzuki and four men

stood on the summit of Liankang Kangri 7,534 m, and next day A. Yamamoto and four men climbed too. From the summit of Liankang Kangri, we could see the long knife-edged ridge stretched toward the summit of Gankarpunzum, it loked very serious snow condition especially below the summit.

Members of the expedition: T. Itami (Leader), S. Nakamura, A. Yamamoto, K. Suzuki, H. Kadoya, H. Kobayashi, H. Takeuchi, K. Takahashi, Y. Kato, J. Takahashi, T. Sato




Reconnaissance and Climbing Routes for Gankarpunzum and Liankang Kangri

# 人工改変のすすむ上高地の自然

岩　田　修　二

上高地を歩くと最近やたら目につくのが土木工事である。大規模な自然の改変がおこなわれている．その現状を明らかにし，工事の目的や効果を検討し，このまま建設が進むと，上高地の自然がどうなるのかを予測し，代替案を提案する．

## 1.　はじめに

ふるくから上高地は日本の登山者に深く愛されてきた．穂高の岩峰をバックに，梓川の広い河原と澄んだ流れ，ケショウヤナギのやわらかな緑が魅力的な景観をかたちづくっている．すでに大正時代のはじめには，上高地での自然破壊を糾弾し，俗化を嘆く記事が書かれているが（辻村，1912；小島，1913），その後，上高地は，地域全体が特別天然記念物に指定され，国立公園の中でもっとも規制が厳しい特別保護地区に指定された．人工改変の進んだ日本の国立公園のなかでは上高地は昔ながらの自然や景観がかろうじて残されている．

いうまでもなく上高地の魅力のひとつは，自然のままの梓川と，発達した河辺林である．広い河原を自由に蛇行して流れる清流と河辺林は，本州のほかの河川では河川改修によって失われてしまった景観である．ところが，最近では，上高地を訪れるたびに大規模な土木工事が本流沿いや支谷のあちこちでおこなわれているのを目にするようになった．このような状態が続けば，上高地の自然や景観は台無しになってしまうのではないかと危惧される（岩田，1997）．

そこで，筆者の属す上高地自然史研究会では1991年から，このような問題について調査を継続してきた．この報告では，われわれの調査に基づいて，上高地でどのような河川改修や砂防工事がおこなわれてきたかを明らかにし，それらの工事について，建設側の主張する目的や効果を検証し，このまま土木工事が進んだ場合，上高地の自然がどのように変化するのかを予測したい．そして，上高地の自然や景観を保全するためにはどうすればよいかを考える．

## 2.　上高地の河川改修・砂防工事の実態

### 建設の歴史

登山道からはずれて梓川沿いに河原を渡渉を繰り返しながら遡ってみると，登山道からは気がつかない場所に，多くの構造物が設置され，工事跡が放置されているのを見ることができる．河原と森林との境界には両岸の多くの場所に護岸・堤防が造られ，河原

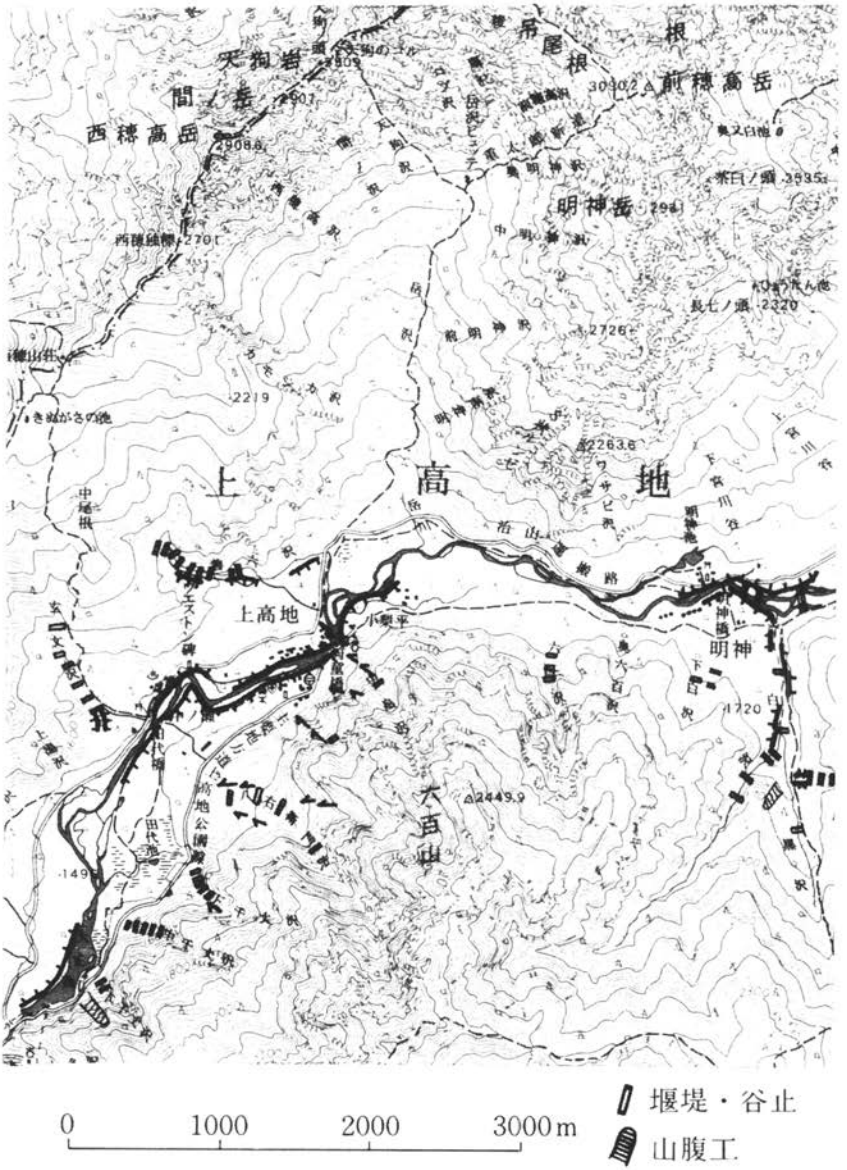
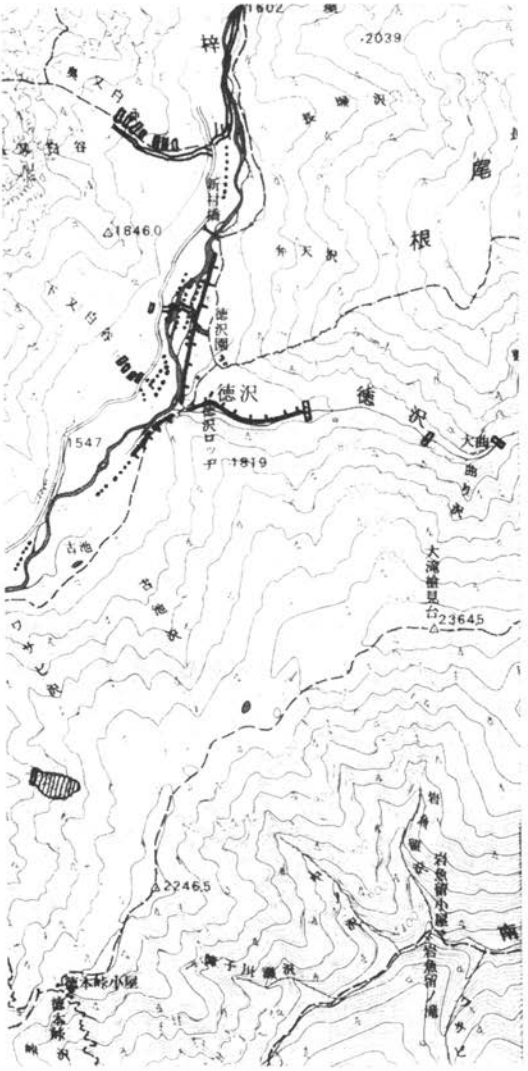



図1　1999年夏までに設置された砂防堰堤・護岸などの構造物と河床の人工改変．基図は，国土地理院5万分の1地形図「上高地」を用いた安曇村全図




の中では流路をブルドザーが掘り込んで直線化し，掘り上げた土砂が堤防状に積み上げられている．放置された資材置き場の鋼材や鋼管，砂利採取の穴ぼこなどもある．支沢にはいると，登山道からは見えないところに多くの砂防堰堤が造られ，三面張りの流路工が設置されているのがわかる．これまでに上高地に設置された人工構造物と，実施された人工的な改変は驚くほど多い（図1）．

松本営林署の工事実績を示した地図や，古い空中写真によると，上高地での工事は1948年からはじまった．河童橋やその下流，小梨平，徳沢，横尾の旅館や山小屋などを浸水から守るための小規模な蛇篭護岸の建設が1960年代前半までにおこなわれた．1956年には上高地に高さ45 mの多目的ダムを造る計画が持ちあがったが，当時山岳会副会長の松方三郎の奔走によって中止された（小林，1984；松丸，1990）．

1960年代から70年代にかけて，集中豪雨による土石流や河童橋付近の浸水が数回発生した．焼岳からの土石流は大正池を埋め立て，霞沢岳からの土石流は中ノ湯と上高地をつなぐ県道を不通にし，多数の観光客が上高地に閉じこめられた．河童橋付近の浸水の原因は，支沢や上流部からの梓川本流への土砂流入による河床の上昇が原因である

と考えられた．このため，1960年代後半から支沢に砂防ダムや床固め，流路工などが建設され始めた．1969年8月には北アルプス全体に集中豪雨があり，上高地では3,000人の観光客が閉じこめられ駐車場に浸水しただけであったが，北隣の高瀬川では葛温泉が流失するという大きな災害が発生した．このころ検討された上高地の砂防工事の基本計画には，本流の横尾上流や横尾谷，一ノ俣谷，二ノ俣谷に高さ15 mの砂防ダムを建設すべきであるという提言（渡辺，1970）もあった．支谷の砂防堰堤や土石流用スリットダム（図2）は毎年数を増やし，その結果，土石流による県道の不通は1979年を最後に起こっていない[注]．焼岳と霞沢岳からの土石流の防止には砂防工事の効果があったと言えよう．

しかし，河童橋付近における梓川本流の河床は上昇し続け，地元観光業者は危機感を募らせ各方面に砂防工事・防災対策の実施を働きかけた．マスコミも「自然が荒らす上高地」（朝日新聞，1979年8月23日）などの見出しで大きく報道した．上高地の防災について参議院災害対策特別委員会でも取り上げられ，1982年から各種の調査がおこなわれた（環境庁自然保護局，1983，1984；建設省河川局，1984）．これらの調査によって砂防計画の基本方針が決まり，支沢に砂防ダムをさらに建設すること，本流については帯工の建設，護岸の嵩上げや新設などが決まった．その結果，1980年代後半以後，これまで砂防堰堤のなかった支沢の奥又白谷（図3），下又白谷，六百沢，下白沢にも堰堤が設けられ，梓川本流では明神上流の河原を横切る帯工が建設された．この帯工はこれまでに例のない大規模な工事であったし，上高地の自然にとって大きな影響をあたえることが懸念される．そこで，つぎに明神の帯工工事についてくわしく見よう．

### 明神の帯工群

帯工（bed gindle）とは，河床の砂礫の移動を固定し，河床の侵食を防止する床固め



図2　霞沢岳八右衛門沢の土石流防止用のスリットダム

工のうち，落差のほとんどないもののことである．明神に設置されたものは，景観に配慮して，普通は存在する両岸側の袖（河床から高い部分）もなく，全体が河床の下に埋め込まれているので，平常時は見えないようになっている（図4）．明神の白沢との合流点の上流側と下流側に合計3基設置された（図5）．もっとも上流側の5号帯工は1989年1月に完成し，1991年まで設置にともなう影響調査がおこなわれた．その後，6号，7号帯工はそれぞれ1994年と95年に完成した．下流側にさらに6基の建設計画がありもっとも下流側のものは落差1mの堰堤に近いものになるとのことである．これらの施設は環境に配慮した工事として砂防・土木業界では高く評価されているらしい（森，1990；松浦，1997）．

多数の帯工の設置場所が，なぜこの場所に決められたのかについての理由は明らかにされていない．梓川本流を管理する建設省は，河童橋付近の河床の上昇は，上流の河道内の砂礫の再移動によると考えており，明神から徳沢までの河床に連続的に帯工を設置することを提案している（建設省河川局，1984）．今回の建設がなぜ明神なのかについては，明神の白沢出合は，すぐ上流部が狭窄部になっているので侵食されていると述べられている（森，1990）が，森の報告中に図示された1975～82年と，1987～90年（図4中に示されている）の河床変動にはそのような傾向は見られない．白沢からの土砂の流入と明神橋（吊り橋）の狭窄部の影響でむしろ堆積傾向にある．決め手になったのは，建設省土木研究所でおこなわれた1：100の模型水路実験の結果であると砂防工事事務



**図3** 奥又白谷に建設された砂防堰堤．建設直後すぐ砂礫で埋まった．1999年8月

所で聞いたが，その報告書を見ることはできなかった．

建設された帯工は，1995年7月の豪雨後には河床から露出したが（図6），その後すぐまた砂礫に覆われ，それ以後，見ることはできない．帯工が設置された場所はあきらかに堆積傾向にある．

### 帯工設置にともなう生態系への影響

明神での帯工の建設は上高地の河童橋から上流では例のない大規模な土木工事であっ

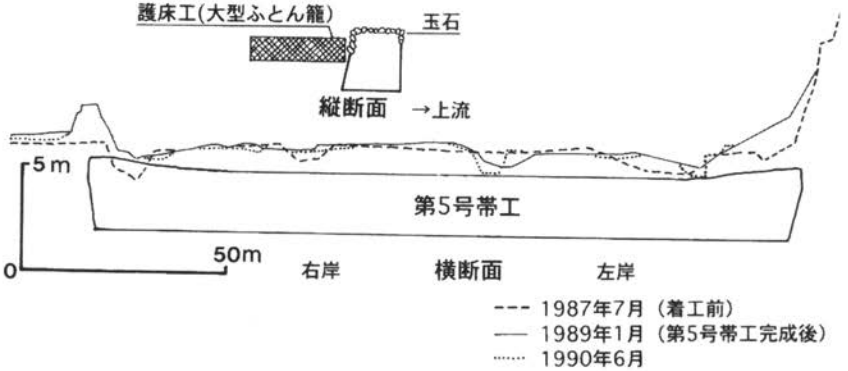



図4　明神付近に建設された第5号帯工と施工前後の河床変動．高さと距離のスケールが異なることに注意．森（1990）による

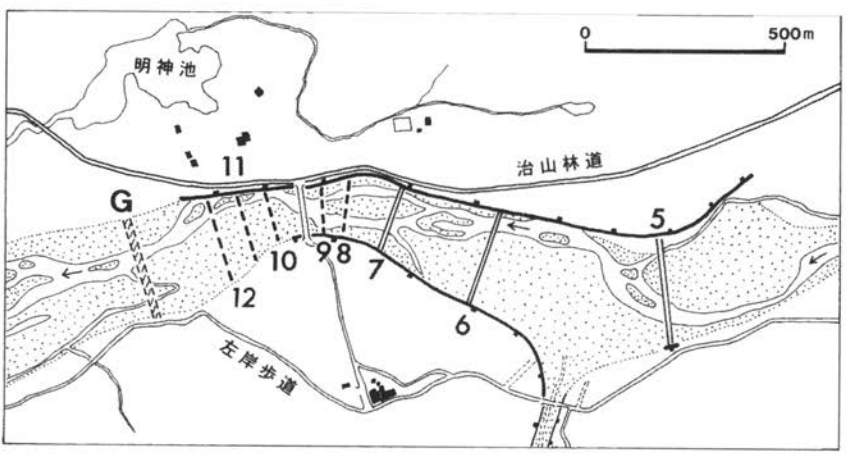



図5　明神付近で建設された帯工（床固めの一種）と計画中の帯工・堰堤の配置図（既設は実線・計画中は破線）．5〜12が帯工，Gは落差1mの堰堤．帯工のうち5〜7号は完成した．建設された帯工は河床に完全に埋設されるため普段は存在が見えない．点を打った部分が河原．松本砂防工事事務所の資料による

た．河原を大型のクレーン車やショベルカーが走り回り，流路が付け替えられ，河道が掘削され，掘りあげられた土砂が河原に長期間積み上げられた（図7）．この工事によって河原の若いケショウヤナギ群落や草本群落は消滅し，河道内の水棲昆虫やイワナに大きな影響がでたことは容易に推定できる．はっきりした直接的な影響があきらかになっているのは，次の2点である．①食草の群落が消滅したため高山蝶のクモマツマキチョウが生息しなくなった（昆野，1996）．これは不注意な工事による自然破壊である．②1997年から明神橋の下流すぐの左岸側で林内に土砂が流入し，森林内の植生が破壊され始めた．上高地自然史研究会では測量して変化を追っているが，原因は，工事によって大規模に土砂を移動させたために下流に運搬される土砂量が増加したこと，工事のために河道が左岸側に固定されたことと考えている．河川による森林の破壊そのものは，上高地では普通のことであるが，人為が引き金になったことが問題である．

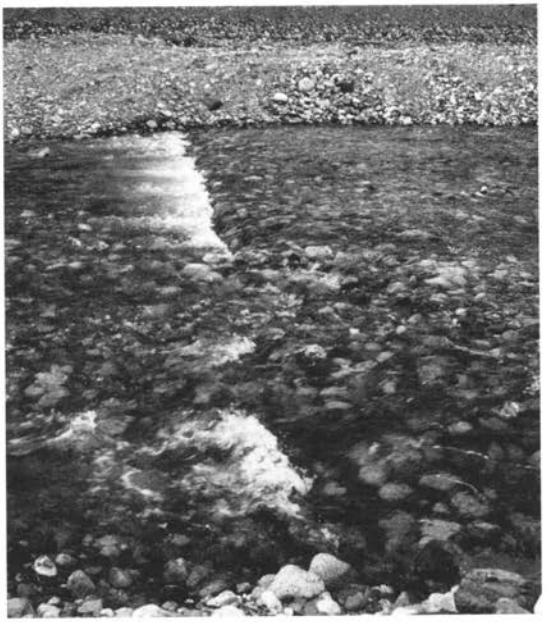


図6　普段は存在が見えない帯工が増水後には姿を現した．明神の第5号帯工．1995年8月



図7　明神の白沢出合で，大規模に河原を掘り起こして進められる第6号帯工の建設工事．1994年5月14日

### 支沢の砂防ダム群とその影響

河童橋から上流部の支沢は林野庁の中信森林管理署（かつての松本営林署）が管理し

ている．1980年代後半以後砂防施設が建設されたのは，すでに述べたように奥又白谷，下又白谷，六百沢，下白沢である．背後に急な岩壁を持つ奥又白谷では，本流への土砂流入を抑えるために7基の堰堤が次つぎに建設された．下又白谷では右岸の治山林道を土石流から守るために，六百沢と下白沢では左岸の歩道（登山道）を土石流から守るために，それぞれ1〜数基の小規模な堰堤が建設された．これらの堰堤は建設された直後に土砂でいっぱいになってしまった．満杯になった砂防堰堤も砂礫の堆積場所を提供するので，流下する土砂を緩和する効果があり無意味ではない．しかし，これらの堰堤は袖（両端の高い部分）付きの普通のタイプの堰堤であり，洪水流や土石流は中央部を流れるように設計されている．これは流路を固定する効果があり，後で述べるように，長期的にみると逆効果になるおそれがある．そして，工事にともなう環境破壊はここでもおこっている．工事は年度に分けて小部分ずつこま切れに進められ，そのたびに工事用取り付け道路や資材・土砂置き場がつくられ，森林も含めた植生が破壊される．六百沢では，放置された工事用の取り付け道路から土石流が発生し森林を破壊した．

### その他の土木工事

筆者が初めて上高地に行った1963年頃は，徳沢や横尾の山小屋への物資輸送は，左岸側の登山道を使ってリヤカーでおこなわれていたように記憶している．しかし，現在では自動車での輸送が不可欠になっており，車両を通すための土木工事がおこなわれている．

**徳沢仮設橋の変遷**　徳沢と横尾の山小屋に物資を運ぶために，徳沢と新村橋との間に

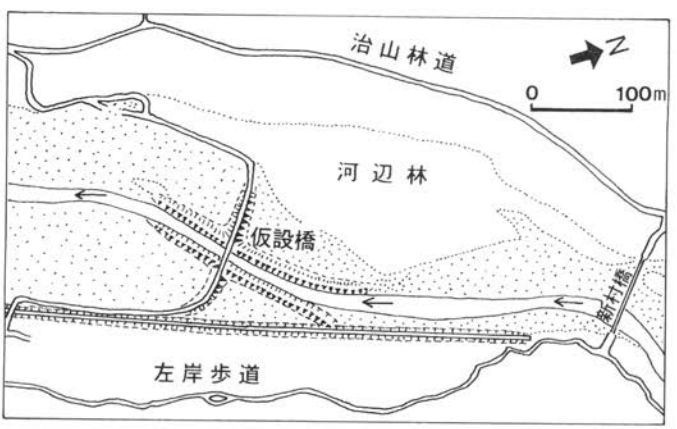



**図8**　徳沢と新村橋との間にある仮設橋の平面図．上流側と下流側に袖状に長く砂礫の堤防が作られている．1996年8月．徳沢と横尾の山小屋への物資運搬や，徳沢の公衆便所の維持に不可欠な存在になっているが，出水時にしばしば流失し，そのたびごとに，砂礫の集積がおこなわれ，掛け替えられ，そのつど河原の自然は破壊される．現地でのマッピングによる．基図は建設省松本砂防工事事務所の地形図1：1000

自動車の通れる仮設橋が設けられている．河原の砂礫をショベルカーで積み上げて堤防状の取り付け道路を造り，そこに鋼製の橋梁を渡したものである（図 8）．空中写真判読によると仮設橋が設置されたのは 1974～77 年の間であるが，その後，この仮設橋は，大きな出水のたびに流出し，再建されることになる．空中写真によると，1983 年秋：取り付け道路の流出，1988 年秋：取り付け道路の流出，掛け替え，1994 年夏：取り付け道路の流失，などが明らかになっている．仮設橋の問題点は，①流路が絞られることによる下流への影響，②取り付け道路流失時の下流への土砂の堆積，③仮設橋保護のための土砂堤防建設時の河床の自然破壊，④掛け替えの工事による河床の自然破壊，⑤仮設橋不通時の左岸歩道の車両の通行，などである．徳沢―新村橋間の梓川本流の河床はもはや自然の状態を残していないと言えよう．

**横尾への工事用道路**　1998 年に徳沢から横尾へ歩いた時驚いたのは，梓川本流の河原・河道に建設された仮設道路をトラックやコンクリートミキサー車が走っていたことである．この道路は，奥又白谷の治山林道の終点から横尾まで砂礫を積み上げて造られたものである．そのとき横尾の山小屋では風呂場の改築工事をおこなっており，おもにその工事関係車両が通行していた．この道路は横尾小屋の工事が終了した後も撤去されず，1999 年夏には横尾の吊り橋建設工事に使用されていた．一見，無植生のように見える河原にもケショウヤナギの幼樹や草本群落が生育し，河道内には水棲昆虫やイワナが生息している．この仮設道路によって梓川の河原の生態系は回復不能な打撃を受けるであろう．そしてもし，大きな出水が起これば，道路に積み上げられた土砂は下流に運搬され堆積し，梓川の河床をいっそう上昇させるにちがいない．

そのほかにも，登山道の補修，護岸の改修，旅館やホテルの改築工事の時には不必要だと思われる取り付け道路や広すぎる周辺部の改変が見られる．ショベルカーが梓川の流路に入って流路の浚渫と堤防づくりをおこなっているのもしばしば見受ける．土木工事にとって梓川の河原と河道はまったくの無法地帯になってしまった．

## 4.　工事は必要か

### 上高地の自然の特徴

これまで述べてきた上高地，なかでも河童橋から上流部分での土木工事の必要性やその結果どのようなことが起こるのかなどについて検討するためには，まず上高地の自然の特徴，その成り立ちや，現在の生態系の維持機構などについて把握しておく必要がある．

### 広い河原・沖積錐と砂礫移動

急な山地に取り囲まれ勾配の急な日本の山地河川では，巨大な礫が河床にゴロゴロしているのが普通である．これらの巨礫は，勾配の急な支沢から土石流や洪水流によってもたらされたものである．ところが，梓川本流の徳沢から大正池までの区間は，日本のほかの河川とは異なった性格を持っている．河原には巨大な礫はなく，50 cm 以下の大

きさのそろった礫が分布する．島津（1995）による河床勾配，礫の粒径，礫の形態などの調査結果を図9に示す．梓川の源流から大正池の下流部までの区間は大まかに4つの区間に区分できる．源流から徳沢までは，河床勾配は急で，礫径が大きい．急な支沢から礫が流入するからである．徳沢から明神までは勾配は緩く礫径も小さく礫は除じょに丸くなる．河床では堆積と侵食を繰り返しながら，砂礫が下流に活発に移動していると考えられる．明神から大正池までは，河床勾配と礫径は，徳沢—明神間と同じような傾向にあるが砂礫は堆積傾向にある．大正池の下流では傾斜・粒径とも急激に大きくなり角礫が増える．梓川は急峻なゴルジュになり，ふたたび支沢からの礫の流入が始まるからである．

このような徳沢—大正池間の特異な状態は，支沢の出口に沖積錐（小規模な急傾斜の扇状地）が分布し，そこに砂礫の大部分が堆積するからであると考えられる．広い谷底の上高地には多くの沖積錐が存在する（図10）．これら沖積錐のくわしい研究が進められ，土石流の堆積プロセス，発生頻度，本流への砂礫の供給量などが明らかにされた（島津・藤牧，1996；島津，1997，1998；杉本，1997；石田，1998；高岡，1998）．

その結果をまとめると次のようになる．沖積錐が形成されていることからも支沢からの土砂流出量は多いと推定できるが，ほとんどの場合，発生した土石流は梓川に到達せず，沖積錐上に堆積してしまう．その原因は沖積錐上で土石流が広がることや，流路が固定されずシフトすることによる．本流に達するのは流水の掃流運搬によって運ばれる

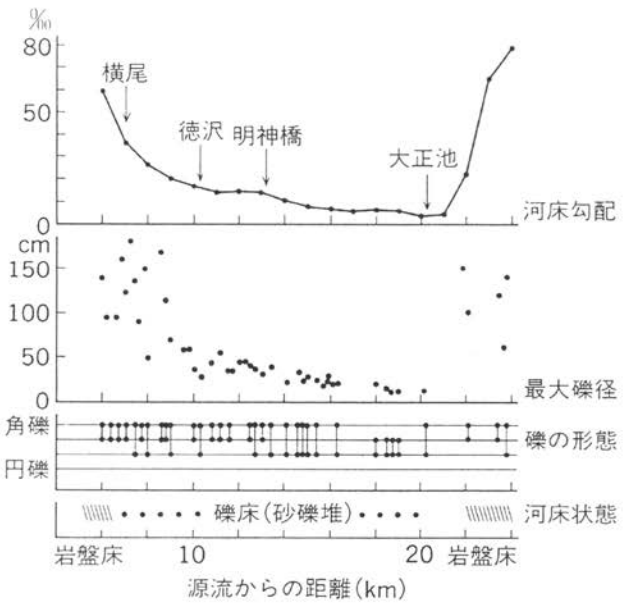



**図9** 梓川上流部における河床勾配，最大礫径，礫の形態，河床状態の河の流下方向への変化（島津，1995による）．

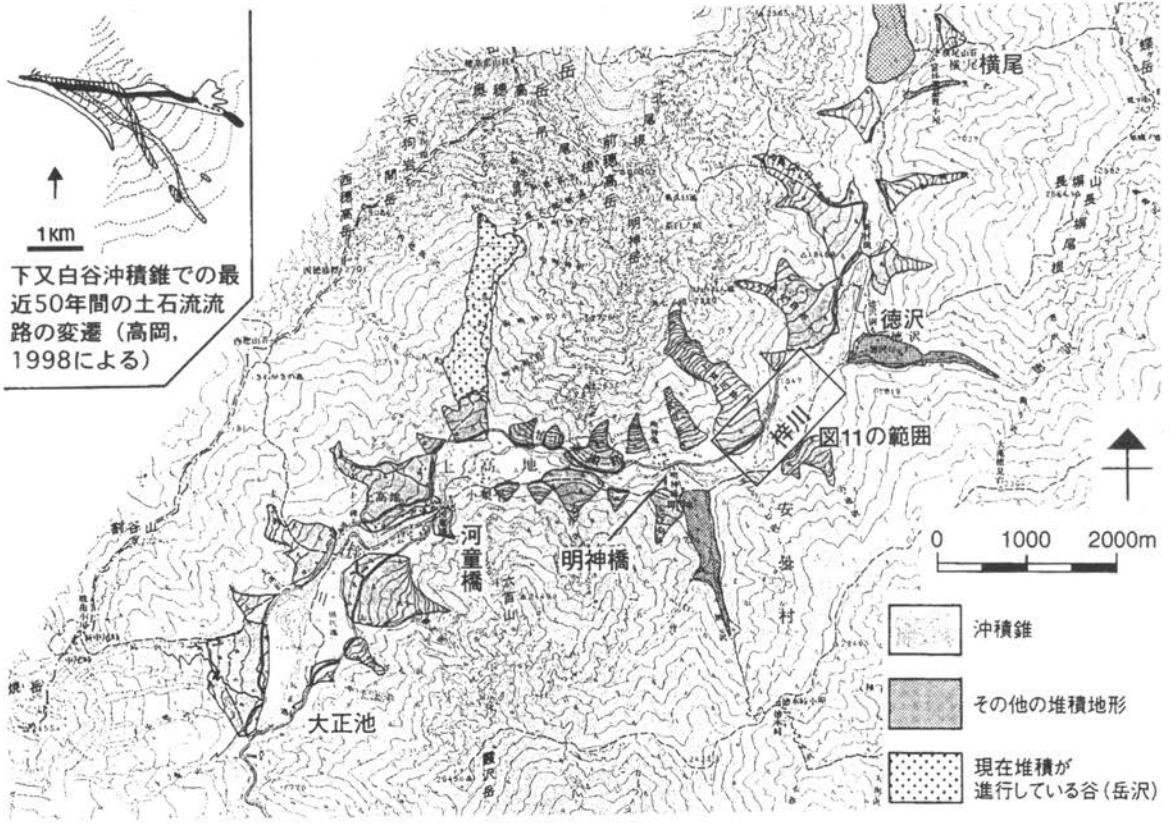



図10　上高地の沖積錐の分布。上高地では、梓川と合流する支沢の出口に沖積錐が発達している。これらの沖積錐は土石流が堆積して形成された。支流からの砂礫は大部分がいったん沖積錐上に堆積する。白沢・徳沢・横尾谷の出口の堆積地形は洪水によって運ばれてきた砂礫の堆積である（原図は島津による）

細粒の土砂のみである．本流にまったく土砂を供給していない支流も多い．このように徳沢―大正池間の梓川本流区間では支沢からの砂礫の供給はすくない．しかし，梓川本流は上流からの砂礫で常にゆっくりした堆積傾向にあり，谷幅が広い部分では谷底の横断形は中央部がわずかにふくらんで高く，網状の流路が維持されてきた．梓川は増水のたびに蛇行し，側方に流路をシフトさせてきた．

### 河辺林の維持機構

このような広い河原にはケショウヤナギ（*Chosenia arbutifolia*）の幼木群落や年老いた孤立樹が点在し，河原の両側にはモザイク状の多様な河辺林が発達する．なかでも明神と徳沢との間の河辺林は典型的なものである（図11）．これらの河辺林の研究はさかんに進められている（石川，1995；岩船，1995 a，b；進，1995；濱田ほか，1996，1998；吉川，1996；岩船ほか，1998；進ほか，1999）．河辺林の複雑なモザイクが成立する理由は，河床微地形・地下水位・堆積物特性などが場所によって異なり，しかもそれらが出水ごとに変化すること，このような河床の立地条件のちがいによって侵入できる植物種が異なり，定着後に受ける川の作用のちがいによって異なる遷移系列を持つ群落が入り交じるからである．

ケショウヤナギに代表される河辺林の維持機構は次のようにまとめられる．梓川の河原では，増水すると河原いっぱいに水が流れるが（岩田・山本，1996），それ以外の時にはひどく乾燥する．したがって，河原に散布された草本や樹木の種子は発芽しても生育できない．しかし，ケショウヤナギは発芽後急速に根を延ばすので乾燥をしのぎ，年数回の増水にも耐え，その後の成長も急速である（石川・朝比奈，1997）．したがってケショウヤナギの群落が河原に散在することになり，そのうちの一部は，数年に一度の洪水にも耐えて，やがて島状の高木群落になり河辺林を構成する．ヤナギの高木林は河原に種子を供給するが，やがてはハルニレ林に遷移する．そこには針葉樹が入り込み，やがて極相林に変わってしまう．いっぽう，河原の両側に広がる成熟した河辺林は十数年に一度の増水時に起こる流路変更によって破壊され，河原に戻ることがある．そしてその新しい河原にヤナギ類の幼樹が育つのである．つまり，ケショウヤナギ群落の更新・維持のためには，網状流路をもった広い河原と，成熟した母樹林との両方が必要なのである．

北海道十勝川流域と上高地周辺にしかないケショウヤナギは，氷河期からの残存種である．このことから上高地梓川の環境は氷河期が終わった後ずっと維持されてきたと言える．ひとことで言うと，河床のゆっくりした上昇と河道変化にともなって植物群落の遷移がおこり，その変化の中で河辺林の景観が保たれてきたのである．

### 最近の河床上昇の原因

上に述べたように，上高地の梓川の河床がゆっくり上昇するのは自然の姿である．ところが，最近の河童橋付近の河床上昇は，ゆっくりした上昇ではなく明らかに急速に進んでいる．地元では，最近山が荒れてきたからとか，森林が更新の時期にあたっている

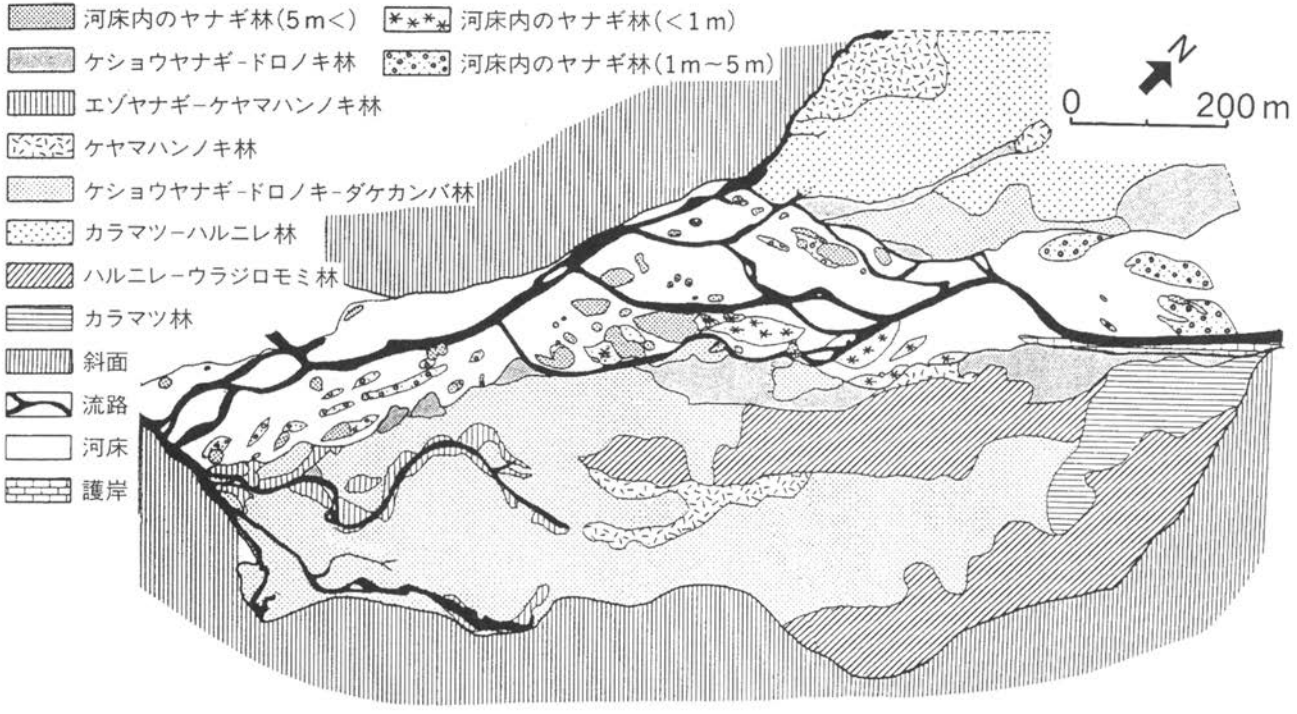



図11　明神—徳沢間の調査地の相観植生図．位置は図10に示した．1996年6月の状態．進　望による空中写真判読と現地調査による

からという説もあるが（たとえば朝日新聞「上高地五十年目の危機」1984年8月28日），われわれの空中写真による調査ではそのような事実は認められない．考えられる理由は，これまで増水時には谷底いっぱいに広がり薄く広く土砂を堆積させてきた梓川が堤防・護岸によって固定されたために狭い範囲に堆積するようになったからにほかならない．つまり，河道の固定化で天井川化したからである．最近の河床上昇や砂礫の堆積は人為による．

### 砂防工事の結果起こること

このように見てくると砂防工事の結果起こることがはっきりしてくる．

**支沢の砂防ダム**　計画通り砂防ダムが機能すれば本流に達する土砂は減少する．しかし，いっぽう，沖積錐上の流路が砂防ダムによって固定されると，これまで沖積錐上に広がったりシフトしたりして沖積錐上に堆積していた土砂が土石流として直接本流に達してしまう恐れもある．その場合，梓川本流に巨礫がゴロゴロすることになる．

**帯工**　河床の上昇を止めるためという理由で本流の帯工や堰堤の建設を進めると，河道や河原の微地形が平準化され，河床の環境は均質なものになる．増水時には河原の植物はダメージを受ける可能性が増えるいっぽう，多くの植物種が河原に侵入できるようになりヤナギ類，とくにケショウヤナギの発芽・生長に可能な場所が減少するにちがいない．

**護岸**　河原と河辺林との境に護岸や堤防が建設されると，河辺林は川による攪乱を受けなくなるので安定し，遷移がどんどん進み極相林になってしまう．ヤナギ類の種子を生産する母樹林も失われてしまい，結果的に河辺林は消滅する．このことは建設省松本砂防工事事務所（1995）でもすでに指摘されている．

支沢の砂防ダム建設や帯工による河道の固定がさらに進めば，供給される土砂の減少と河道の固定によって，明神の上流では，川が河道を掘りこんで段丘ができるかもしれない．その場合，河原は消滅し，河辺林の景観は完全に失われてしまうだろう．いっぽう，河童橋周辺での河床の上昇は止まらないであろう．

### 上高地の砂防は有効か

一般論として砂防が必要で有効な場所は，急峻な地形の地域，植物の生育が可能な地域，人口稠密地域であると言えよう．砂防の一般的方法は砂防ダムによって渓床の緩傾斜化をはかり，床固めで侵食抑制し，その間に植林によって山地斜面の安定化をはかるものである．この意味では上高地の上流域では砂防が有効でない．なぜならば，槍・穂高連峰の高山帯では植林は不可能であり斜面を安定化することができないからダムは埋積し続け，全山がダムで埋まることになるからである．それに，上高地の地形変化はおだやかで，人口密度が極端に小さく，環境庁の管理下にある自然環境・景観の変更が許されない特別保護地区である．しかも，焼岳の火山泥流の堰き止めによって上高地はすでに天然の砂防ダムであり，下流に影響を及ぼさない．上高地で砂防をおこなうことは効果がなく景観の破壊をもたらすだけである．

さしあたって 必要なことは次のようなことであろう.

（1） すべての工事を凍結すること,

（2） 工事実施に関する情報公開, たとえば, 工事の理由の学術的根拠, アセスメントの実施と結果の説明をおこなうこと.

## 5. 代替案

土木工事を中止した場合, 防災対策をどうするのかと, 現在, 使われている山小屋などへのアクセスをどうするのかが問題になる. 代替案を提案しよう.

### 防災対策

（1） 洪水時などに観光客や登山者の安全を守るために予報・警告システムを完備し, 避難誘導訓練をおこない, 資材・食料の備蓄などを実施する. そして, 観光客や登山者に対する「上高地は 100 パーセント安全ではない」という啓蒙活動をおこなう.

（2） 学術的調査・研究にもとづく災害の将来予測の精度を高める. 災害の危険度のゾーニングを示した災害危険度地図（図 12）を作製し, 危険個所を把握する.

（3） 災害危険度地図にもとづいて土地利用計画を根本的に見直す. 危険個所の施設を移転したり, 施設の基礎の嵩上げ工事をおこなったりする.

（4） 天井川化を防ぐため河童橋付近の護岸・堤防を撤去する.

### 仮設橋・仮設道路対策

（1） 現在の仮設橋を撤去し, 横尾・徳沢の山小屋への車両乗り入れをやめるのが望ましいが, それができなければ, 新村橋を掛け替えて 4 トン車の通過可能な吊り橋にすることが次善の策であろう. 車両はすべて右岸側の治山林道からこの吊り橋に直接アクセスすることにすれば, 徳沢から下流側の左岸登山道を歩行者専用にできる.

（2） 工事用の仮設道路の建設は認めない. 大型の重機の使用はおこなわない. 工事は稜線上の山小屋と同じように必要ならヘリコプターを使っておこなう. そのためにコストがかかるが, 公共事業の場合は, 貴重な自然を守るためにより多くの経費がかかっても国民の理解は得られるであろう. 民間事業者の場合も, 特別保護地区でほかの場所と同じように営利事業ができると考えるのは間違いである. 山小屋がホテルになる必要はない.

すぐに実施できるとは思えないが, 長期的には次の点が重要である.

（1） 現在のような環境庁・建設省・林野庁の三者がおこなう縦割り行政をやめ, 一本化した合理的な保護・管理をおこなうべきである. 徳沢上流の仮設橋がほんとうに必要なら, 川と河原に影響が少ない吊り橋などの恒久的な橋にすべきであるが, そうならないのは, この橋と取り付け道路が, 環境庁・森林管理署・地元村のいずれにとっても正式の道路ではなく, 管理主体が明らかでないからであるといわれている. これは縦割り行政による自然破壊の典型例である.

図12　上高地の災害危険度地図（部分），ウェストン碑から新村橋にかけての部分が示してある。危険度を4段階に分け危険度が大きい方から，D＝危険度大，大損害の可能性がある。C＝危険度中，軽微な被害が想定される。B＝危険度小，A＝ほぼ安全の4つに分けてある。岩田（1992）による。災害危険度地図とは，地形変化の将来予測をもとにして，危険な場所を示した地図のことで，災害時の避難計画，施設配置計画や土地利用計画の策定に必要なものである。くわしくは岩田（1992）をみられたい

（2） 上高地を利用する人数を厳しく制限すること．大規模な設備や長期滞在型の施設を避け，河童橋から上流への車両乗り入れを完全にやめることが必要であろう．山小屋の経営の縮小も考慮すべきである．このためには環境庁と登山者が考え方を大きく変える必要がある．環境庁は，国立公園の第一の目的は利用することではなく，国民的財産である自然を残すことであるという立場に転換する必要があるし，登山者は山の施設に便利さを求めてはならないのである．上高地を特別保護地区に指定する理由は貴重な自然を保護するためでなければならない．利用という面では，自然のままの博物館として教育と研究の場を提供することに限定すべきであろう．国立公園とはいえ特別保護地区の目的は都市近郊の公園緑地とは根本的に違う．山地の侵食にともなって景観が変化してゆくのは山岳の宿命である．守るべきものは，その変化する自然そのものである．それを理解せずに，現在の施設と現在の景観を守ろうとして結局は自然を破壊しつつあるのが上高地の現状である．

注） 本稿脱稿後，1999年9月釜トンネル上高地側出口の支沢から土石流が発生し，県道が通行できなくなり，観光客が一時上高地に閉じこめられた．1979年以来20年ぶりのことであった．

＜引用文献＞

石川愼吾，1995：ケショウヤナギ群落の生態．上高地自然史研究会（編）：上高地梓川の河床地形変化とケショウヤナギ群落の生態学的研究，上高地自然史研究会，18-22

石川愼吾・朝比奈正子，1997：上高地梓川の河床に生育するヤナギ科植物の実生の生長特性．上高地自然史研究会（編）：上高地梓川の河辺植物群落の動態に関する研究，上高地自然史研究会，32-36

石田　武，1998：六百沢沖積錐の地形と土砂移動プロセスと地形特性．上高地自然史研究会（編）：上高地梓川の地形変化，土砂移動，水環境と植生の動態に関する研究，上高地自然史研究会，6-11

岩田修二，1992：上高地の地形変化と環境保全．地形，**13**：283-296

岩田修二，1997：山とつきあう　自然環境とのつきあい方1，岩波書店，136 p.

岩田修二・山本信雄，1991：長野県上高地における現在の地形変化と地形災害危険度地図の作成．文部省科学研究費補助金報告書，51 p.

岩田修二・山本信雄，1996：1995年7月の豪雨による明神―徳沢間調査地の河床変化．上高地自然史研究会（編）：上高地の河床地形変化と河辺林の動態に関する研究，上高地自然史研究会，10-13

岩船昌起，1995 a：河床の微地形・河床物質と先駆植物の生育環境．上高地自然史研究会（編）：上高地梓川の河床地形変化とケショウヤナギ群落の生態学的研究，上高地自然史研究会，23-34

岩船昌起，1995 b：上高地，横尾谷の谷底平野における地形形成作用の規模・頻度に対応した先駆相森林群落の動態．季刊地理学，**47**：163-181

岩船昌起・真崎　庸・岩田修二，1998：上高地小梨平付近の梓川河床における微地形環境と先駆植物の定着．鹿児島女子大学研究紀要，**20**（1）：1-27

環境庁自然保護局，1983：上高地地域保全整備計画調査報告書，495 p.

環境庁自然保護局，1984：上高地地域保全整備計画調査報告書，206 p.
建設省松本砂防工事事務所，1995：上高地梓川河畔林保全に関する基礎調査
建設省河川局，1984：上高地地域保全整備計画調査　砂防計画調査，32 p.＋写真 14 p.
小島烏水，1913：上高地の風景を保護せられたし．信濃毎日新聞，大正 2 年 8 月 3 日，4 日付け．再録：近藤信行編：山岳紀行文集　日本アルプス，岩波書店，373-380
小林俊樹（編），1984：日本山岳会信濃支部三十五年，621 p.
昆野安彦，1996：上高地の砂防・護岸工事と生態系への影響―クモマツマキチョウとの関係で．山と渓谷，729 号（1996. 4）：187-190
島津　弘，1995：長野県西部，梓川における土砂移動過程．金沢大学文学部地理学報告，7 号，53-60
島津　弘，1997：上高地・右岸ワサビ沢沖積錐の微地形特性と土砂移動．上高地自然史研究会（編）：上高地梓川の河辺植物群落の動態に関する研究，上高地自然史研究会，15-22
島津　弘，1998：古池沢沖積錐の地形と土砂移動プロセス．上高地自然史研究会（編）：上高地梓川の地形変化，土砂移動，水環境と植生の動態に関する研究，上高地自然史研究会，12-21
島津　弘・藤牧康子，1996：上高地・梓川の支流における堆積地形の特性．上高地自然史研究会（編）：上高地の河床地形と河辺林の動態に関する研究，上高地自然史研究会，1-9
進　望，1995：梓川の流路変化と植生．上高地自然史研究会（編）：上高地梓川の河床地形変化とケショウヤナギ群落の生態学的研究，上高地自然史研究会，7-17
進　望・石川愼吾・岩田修二，1999：上高地・梓川における河畔林のモザイク構造とその形成過程．日本生態学会誌，**49**：71-81
杉本宏之，1997：上高地の沖積錐における地形変化と植生変化．上高地自然史研究会（編）：上高地梓川の河辺植物群落の動態に関する研究，上高地自然史研究会，1-14
高岡貞夫，1998：上高地下又白谷の沖積錐における土石流による攪乱と森林群落．上高地自然史研究会（編）：上高地梓川の地形変化，土砂移動，水環境と植生の動態に関する研究，上高地自然史研究会，22-30
辻村伊助，1912：神河内と常念山脈．山岳，7 年 3 号．再録：ハイランド，平凡社，1998 年刊
濱田三賀・三宅　尚・石川愼吾，1996：土壌花粉分析による上高地梓川河辺林の動態の解析．上高地自然史研究会（編）：上高地梓川の河床地形変化と河辺林の動態に関する研究，上高地自然史研究会，38-49
濱田三賀・三宅　尚・石川愼吾，1998：土壌花粉分析による明神付近の梓川右岸における河辺林の動態解析．上高地自然史研究会（編）：上高地梓川の地形変化，土砂移動，水環境と植生の動態に関する研究，上高地自然史研究会，69-82
松浦隆幸，1997：土木の風景：長野県安曇村梓川の改修．日経コンストラクション，190 号（1997. 8. 22），62-67
松丸秀夫，1990：自然保護随想　上高地ダム．山，540 号，p. 6
森　俊勇，1990：環境を配慮した砂防工事（上高地）．第 22 回砂防学会シンポジウム実行委員会（編）：第22回砂防学会シンポジウム講演集　環境と砂防，53-76
吉川正人，1996：梓川河床に生育する先駆性樹種の根系形態．上高地自然史研究会（編）：上高地の河床地形変化と河辺林の動態に関する研究，上高地自然史研究会，23-29
渡辺武夫，1970：治山事業への助言：上高地地区．長野営林局・松本営林署（編）：上高地・美ヶ原地区国有林の保全対策基礎調査報告書，（財）水利科学研究所，146-157

# はかなさゆえに美しい山上湿原と池塘

## —白神・田代岳高層湿原自然環境調査報告—

小　岩　清　水

著者によると、東北、北海道の湿原は、尾瀬に代表されるような周辺の水が集中する多湿で広大な谷地地形は少なく、苗場山の湿原のように雪解け水に支えられて発達した山上湿原が多い。尾瀬の泥炭層は6m以上あるのに、山上湿原は1～1.5mで、極めて壊れやすい。

山上湿原の特徴は凸レンズ状に緩やかに盛り上がっている。凸レンズがいくつも連続しているような湿原もある。これらの湿原は1960年代までは人跡もまれで、神秘的な美しさを保っていたが、頂上近くまで自動車道が出来た八幡平などは急速に破壊が進んだ。例えば八幡沼周辺はキャンプによる破壊で、沼の北側湿原の25%が裸地化してしまっている。1994年夏の調査によると、気温25℃の時、湿原は30℃で安定しているが、裸地では50℃まで上昇して被いをしない限り、湿原植物類の復元は難しい状態となっている。

この白神・田代岳の調査報告は、いまだに人跡が少なく登山者による破壊を免れているが、温暖化による影響か、泥炭層の乾燥が進み、チシマザサが増えているという。以下は1998年3月と8月に詳しい調査を行い、過去のデータとの比較など学術的にも優れた報告書となっている。　（山岳編集委員会）

### 1.　はじめに

ここに報告する秋田・田代岳山上台地に形成されている高層湿原は、世界遺産指定で知られブナ天然林で覆われた白神山地の最東端をなす標高1,177mの田代岳9合目、標高1,000mに展開している火山台地面に成立している顕著な高層湿原であり、緩やかな北向き斜面に1mもしくは1.5mのよく発達した「塘」によって、雄大な階段状地形と池が約161も重なり合うように分布し、その全体的池塘の分布密度や人為的な荒廃にさらされていない景観は、観光登山によって破壊が進行している日本の山上湿原の中では、特筆すべき原始自然条件を保っていることで、日本有数の貴重な自然財産であると位置づけられる。




図1　田代岳位置図

また、今回の調査によれば、湿原池塘群の発達域

と現在は乾燥傾向を強めてチシマザサ群落や低木群落あるいはダケカンバ疎林となっている部分も数100年を遡るならば、数多くの池塘の分布域であった可能性が極めて高いと考えられる。その場合は現在より少なく見積もった場合でも336程の池塘が加わり、現在の池塘数と合わせると約500池塘にも及ぶ小池に彩られ高い塘をもった高層湿原であったと判断できる。1998年3月20日発表の「田代岳高層湿原自然環境調査報告書」で把握できたこの湿原について、再度より広範囲な調査を1998年8月に実施したので、田代岳高層湿原自然環境調査報告書として報告する。

## 2. 湿原にかかわる田代岳と湿原台地の地形環境

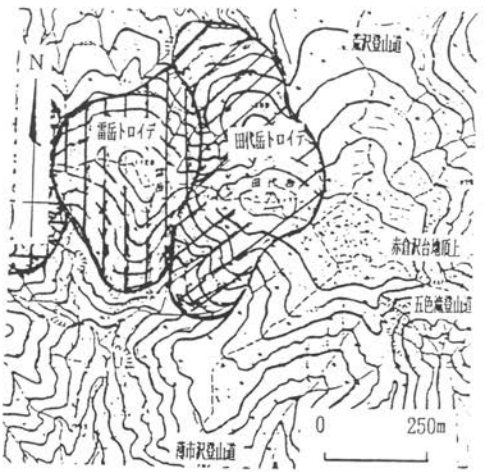



図2　田代岳と湿原台地地形環境図

図2の地形環境図は2万5千分ノ1地形図を基本として田代岳トロイデと赤倉沢アスピーテの範囲を示している。現在の地形の原形とは、田代岳トロイデの基盤となる赤倉沢アスピーテが先ず存在していて、その高さは東で標高1,100m程度、西に3km付近で標高750m前後の緩やかな斜面であったと考えられ、その実態は現在の荒沢登山道や大広手登山道が印されている北斜面の傾斜面とほぼ同様であったと考えてよい。

したがって、現在の田代岳山体は1,177mの最高所となっているが規模は直径1km、高さ80m程度の小さなトロイデが標高1,100mの広大な赤倉沢アスピーテの上面に重なっているだけとなる。田代岳1,177m・雷岳1,128m・茶臼岳1,085m・烏帽子岳1,133mの4ピークはそれぞれの小トロイデの連なったものと考えられる。

湿原の形成は赤倉沢アスピーテの緩斜面に集中しているが、田代岳トロイデの頂上北東側には40cm程度の薄い泥炭層があり、この泥炭層域に小さな池塘が階段状に分布した痕跡があり、現在判断できる池塘痕跡でみると11～12の池塘が最近（100年～50年前）まで残存していた可能性が高い。現在では自然池なのか人工的池なのか判断できない直径1m以内の1池が認められるのみである。**図7**は空中写真上に現れている湿原と池塘を2万5千分ノ1地形図に記入したものである。報告（I）1998. 3月の段階では田代岳トロイデとその基盤としての赤倉沢側に頂上を持つアスピーテの裾合い域の緩斜面に池塘が集中していることに触れたが、1998. 8月の調査によれば、この裾合いの池塘群には泥炭層に依存して高層化している純粋な湿原池塘と泥炭層に依存せず湿原

泥炭層をのせる安山岩質基盤に依存している池と、それらの中間的半池塘とでも位置づけるべきものがあることが解った。

調査は荒沢登山道で①木道を中心にして　②山ノ神湿原とそれに至る道　③薄市沢側登山道　④五色滝側登山道に沿って実施したが、これは湿原の外周域であり池塘群の調査としては適切なものであるが、気候変動によって池塘群が消滅したと考えられる湿原斜面の中央部の泥炭層確認等は出来なかった。また、登山道と木道からの測定をしたが、少し離れると、池の水深や水温測定は出来ず、湿原池塘基本台帳の完全な作成は出来ていない。したがって、過去の池塘痕跡は空中写真の判読によるものである。この中でA印は湿原泥炭層とその泥炭層に支えられている高層湿原池塘群範囲、B印は安山岩質基盤に依存している池塘、C印は中間的半池塘としての性格をもつ池を示している。図3にBタイプの安山岩質基盤に依存している池を示すが、これはアスピーテとトロイデとの裾合いの最低所に位置する神ノ田の一つで、面積的には田代岳湿原域で最大の水位見池であり、池の底部は安山岩塊や礫が埋めているし、岩塊の一部は水面上に突き出していて、この突き出している範囲を目安として山麓農業者の水位判断に使われ農業神の示す水位見池神ノ田として信仰の対象となってきたものである。

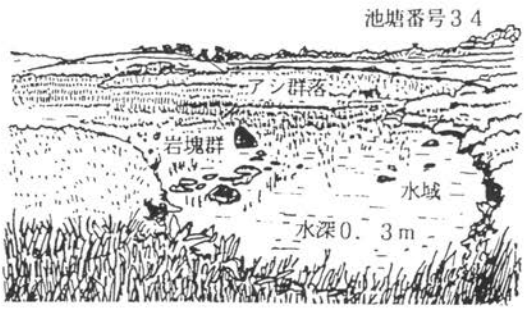



図3　神ノ田：水位見池スケッチ図

この池は底部に泥炭層を持たないが、周囲は泥炭層が囲み、それによって貯水が保たれているから塘はもっていることになり、浅い窪地に雨水や周囲の泥炭層から滲みだした水が溜まり、池となり周囲を泥炭層に囲まれ、新生湿原に移行する初期段階にあったものと判断される。現段階では排水溝が池の北西端にあり、この侵蝕効果によって池の水深は30～40 cm と浅くなり、南側などの水深が15 cm 程度の範囲ではアシ原が拡大しているし、これらの植物遺体の堆積による低層湿原が発達しつつある。

ここに示す図4～図6は図3の水位見池の西と東に直線状に並んでいて裾合いの低所に集中する水によって涵養された池であったものが、斜面から流入する泥土で埋積され、あるいは繁茂するアシによる低層湿原化しつつ、早稲種見池と中稲種見池は塘を発達させて高層化し、晩稲種見池は斜面地形に支配されていて、砂泥埋積で泥炭質の塘は未発達の状況にあり、この状況から高層化する前に周辺の低木林が進出しダケカンバの林にと移行していく過程にあると思われる。この様に田代岳湿原と総称される湿原池塘群の中には、形成原因や経過に差異が生じていて、その場所は赤倉沢アスピーテと田代岳トロイデの裾合い分水界域にある4つの池群である。池の規模としてはいずれも大きく、水位見池や早稲種見池は長径50 m にも及ぶために一見するとこの湿原を代表する大池

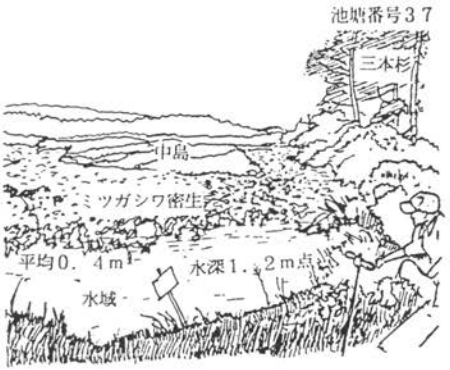



図４　神ノ田：早稲種見池スケッチ図

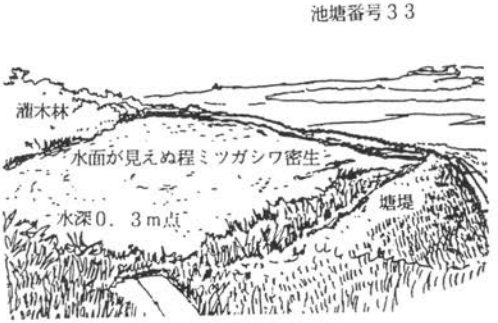



図５　神ノ田：中稲種見池スケッチ図

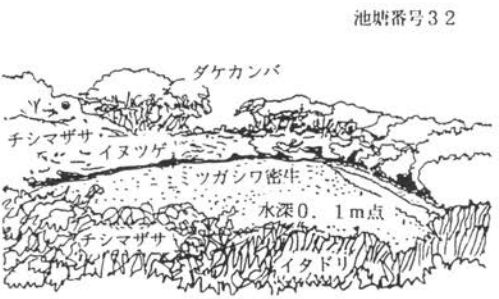



図６　神ノ田：晩稲種見池スケッチ図

塘と受け取られているが、田代岳湿原の高層湿原を代表する景観とは、これらの分水界の池ではなくて、水位見池や早稲種見池の北側から北西～北東に展開している161に及ぶ数多くの小池塘群なのであり、裾合い分水界の大池は、これから高層化する過程にある初期か高層化しつつある中期の景観であるが、現在の気候環境では、高層湿原としての発達よりも、水抜け現象や排水溝の侵蝕拡大、全体的乾燥化作用などによって発達が停滞、あるいは後退する傾向を深めていると思われる。

### 3. 湿原池塘

#### 1998年8月の基本台帳

次ページの図7に示すのは1998年8月現在の田代岳湿原池塘基本台帳である。1996年以来空中写真を用いて可能な限り現状把握を正確にすることに努めた結果1998年8月9日現在で水域を持つ池塘は161であるとして、この田代岳高層湿原池塘基本台帳を作成した。雨後の一時的池と灌木やササに隠されているもの以外はほぼ把握している。第1報では把握出来なかった場所についても、許されるルート範囲で把握につとめているので、精度的にも現段階では、これ以上の分布図は得られていないものである。（ただし現在では踏込むことが出来ない傾斜面中央部については田代岳

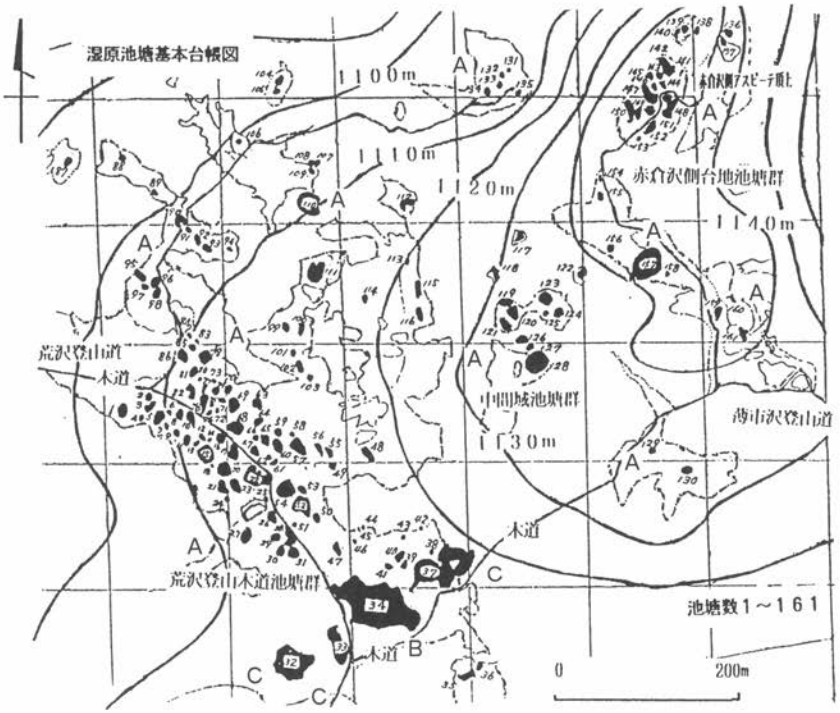



図7　湿原池塘基本台帳図

頂上域からの俯瞰と空中写真による位置判断とした）

しかし現実的には田代岳高層湿原池塘の正確な把握については、この図に示す等高線間隔5mでは不十分であり荒沢登山道の木道を挟んで展開する池塘集中域では、池塘数の約85%までが5mの等高線範囲に収まってしまい、実際の全体平均傾斜角度に対する塘の高低変化などを表現していない。かなりの池塘は平均傾斜角度以上に塘そのものの発達に支配され、非常に複雑な方向性や形状を示している。このように極めて多様で複雑な塘や方向性からは、この湿原が泥炭層の発達過程での部分的堆積量に支配されていることを示しているので、分水界にある神ノ田池群を除けば、古い小湖水のようなものを母体として発生したものではなく、雨水や融雪水に涵養された高層湿原としての自然史を最初から辿ってきたことを物語っている。

次に池塘が著しく集中している部分に注目するならば、赤倉沢側のアスピーテ頂上台地（標高1,140m）と荒沢登山道の木道域（標高1,110m～1,115m）の2地域となっている。湿原斜面中央部（標高1,130m～1,135m）にも過去には少なくとも15池塘程度はまとまった集中域があったと判断されるが、現在では8～9の池塘がチシマザサと低木林やダケカンバの疎林に囲まれている。このように現在でも顕著な池塘集中域と

なっている湿潤な範囲は緩やかなアスピーテ斜面の中でも距離 100 m で 5 m の高度差（5％勾配）以下の部分に限られ 10% 勾配の斜面では現段階での池塘発達はほとんど認められなくなるという傾斜角度と池塘形成の間の相関性が存在している。

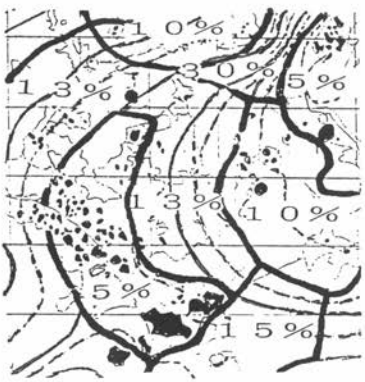



図 8　傾斜勾配と池塘相関図

同時に頂上台地の西下に位置する山ノ神小池塘域のように、池塘範囲は傾斜が 10% 勾配程度に収まっていても、上部斜面が急傾斜の場合には池塘形成は不活発で縮小方向に向かっている例も鮮明に出現していて、田代岳高層湿原では 5 % 勾配以下の斜面では池塘群が現在でも活発に発達し 10% 勾配斜面までは池塘が保たれているが、13% 勾配斜面になると過去に存在していた池塘が消滅し、チシマザサの繁茂域や低木林域に移行している事が明かとなっている。

この様な実態は雨水や融雪水が湿原表面をどのように動いているかもさることながら、泥炭層内部に浸透した水の移動と直接的に関わりを持っていると考えられる。しかし現実には田代岳高層湿原における泥炭層内部の浸透水の動向についての調査は実施出来ていないが尾瀬ケ原の調査で得られた 24 時間で 10 cm（「尾瀬ケ原の自然史」坂口　豊著：中公新書—1989. 6）を参考とすれば、おおまかに見て赤倉沢側の頂上台地域から荒沢登山木道域までの 500 m を泥炭層中の浸透水が流下するのには 13 年を必要とすることになる。この場合、尾瀬ケ原の湿原の平面性と田代岳高層湿原の傾斜の差異による流下速度を勘案し、田代岳高層湿原が急で仮に 10 倍としても、500 m を移動するのに 1 年以上を必要とするわけであり、木道域池塘と次の池塘の最も接近している 0. 5 m ですら 10 日～1 日を費やしていることになる。

24 時間で 10 cm 程度が移動速度であるとして、泥炭層深度が平均して 1. 5 m 程度に過ぎないとすれば、最近の高温推移と降水量の短期集中傾向の気候条件の下で地表流失量が大となり浸透量が減少し、泥炭層全体の昇温による水分の蒸発量が増していき、距離と傾斜勾配が大になればなるほど、泥炭層は途中で乾燥していくことになる。したがって、かっては頂上台地から西に傾斜する斜面全体が、一様に湿潤であった田代岳高層湿原は、現在では部分的に湿潤域が分断され、池塘群は周辺の浸透水によって涵養されているだけであって、斜面全体としての発達は停滞し、場所によっては湿原から後退している段階にある可能性が高い。このような観点に立つと①赤倉沢側頂上台地（標高 1, 140 m）　②湿原斜面中央部（標高 1, 130 m）　③荒沢登山道木道域（標高 1, 110 m）と等間隔に分布する池塘群の位置関係が良く説明出来ることになる。

さらに、図 9 に示すように現地の観察や観察結果に基ずき空中写真から判読できる現在は水を失った池塘痕跡の分布を展望すると、①～③の池塘群それぞれの中間域に、小池塘群が数多く分布していた可能性が極めて濃厚に現れていることなどからも先の泥炭

層の浅い部分が昇温効果にさらされ乾燥し、そこがチシマザサや灌木林に遷移していっているものと考えることが出来る。この地域では当然傾斜勾配の大きさによって緩斜面よりも保水力も低下していることになる。

## 4. 湿原集水域区分と池塘分布

図9は田代岳湿原域における微地形に注目して池塘群と集水域の関連について区分図を作成したものである。集水範囲（1）は赤倉沢側頂上台地で集水面積的には大きなわけではないが、その地形の平坦性があって池塘群が保たれている。集水範囲（2）は木道に沿う最も見事な池塘集中域であるが、それを支えるのは17単位：42,500 m² に及ぶ湿原域最大の集水面積である事が解る。集水範囲（3）（4）（5）は集水面積が狭小であることが小池塘を散在させる原因であり、集水範囲（6）の湿原が池塘及び湿原範囲も小さく狭いのは集水面積的には（2）に次ぐものあっても集水域の傾斜が最も大きな勾配を持っていて水の持続的供給能力が低い事に原因するものと判断される。結果的には集水範囲が大きく、斜面傾斜勾配が最も緩やかな集水範囲（2）に現在の池塘数約161の中で82池塘が分布し、これは全体の約51%に達し他の集水範囲と比較して圧倒的に水集中と保水力が保たれている。さらにこの集水範囲（2）の中を注目すると全域に平均的に池塘が分布するのではなくて、82の池塘中で木道を挟んで幅100 mの5%勾配斜面に79池塘が集中しているから、集中の度合いは96%におよんでいる事になる。なお、田代岳湿原全体49×2,500 m² の範囲からみると木道付近の池塘集中域は7×2,500 m² であり比率は14%である。

このように湿原を調査していくと、池塘が濃密に集中している木道域は幾つもの自然条件が複合し、同じ湿原域においても他の場所には全く形成されていない環境が備わっ

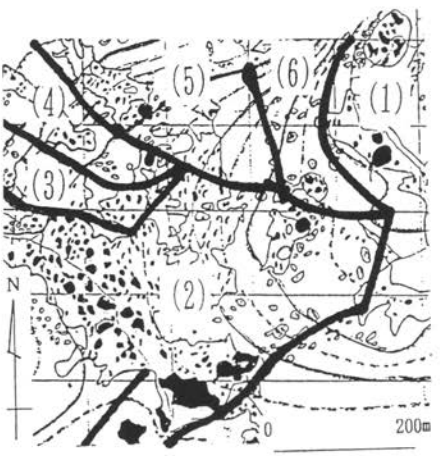



図9　湿原集水域区分と池塘の関連図

| 集水範囲 | 面積単位 (50×50 m) | 面積 115,000 m² | 現池塘数 161 | 全体比 % |
|---|---|---|---|---|
| (1) | 8 | 20,000 | 21 | 13 |
| (2) | 17 | 42,500 | 82 | 51 |
| (3) | 3 | 7,500 | 10 | 6 |
| (4) | 3 | 7,500 | 7 | 4 |
| (5) | 5 | 12,500 | 9 | 6 |
| (6) | 10 | 25,000 | 13 | 8 |
| その他（田代岳山頂～薄市沢側池塘） | | | 19 | 12 |

ていてはじめて見事な高層湿原にと発達したことが浮かび上がってくる。それは高層湿原の基盤となっている中層湿原泥炭層が斜面から供給される水で保たれ、その上に構成される高層湿原泥炭層が雨水や融雪水で発達していく時に妨げになっていないことである。湿原基盤となる低層湿原泥炭層や中層湿原泥炭層が供給水を失い、乾燥化すると地表の温度が浸透し季節から数ケ月の差を置いて高温蓄積層になり、結局は上層に形成される高層湿原泥炭層の持つ水分を吸収したり、蒸発させたりして乾燥を進めるのである。

## 5. 池塘発達の方向性

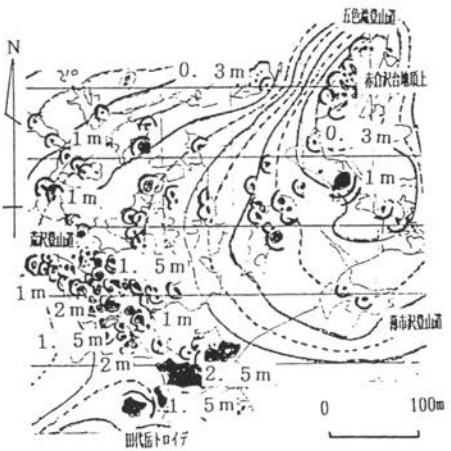



図10　池塘の発達方向図

田代岳高層湿原に発達している池塘は、それぞれがその地点ごとにバラバラに成立しているのではなくて、傾斜方向や傾斜勾配により「塘」形成の支配を受けている。その状態は図10に示すが「塘」の発達方向は傾斜方向に一致しており、それは泥炭層中を移動する水の方向や雨水蓄積、融雪水蓄積によって最多湿潤条件に支配され最も安定的に水供給を受けることのできる部分となりミズゴケやモウセンゴケなどの繁茂帯となって塘高を高めていくからであろう。

さらに塘の中には単純な形状ではなく、大きな塘堤を基盤として、その上に2つ3つと新しい塘を重ねているものもみられるが、古い時代には現在の池塘よりもはるかに大きな池塘が発達したことを示し、それから現在にかけては緩慢にではあっても湿原の内容が縮小傾向になり、大きな塘と、それに重なる小さな塘との移行期はかなり大きな気候変動があったと考えられる。構造的な解明には塘断面の切断を伴う調査が必要で、現在はその可能性はない。図中の塘に付されている数値は、木道付近のものの実測あるいは写真による読取りが出来る範囲での塘高で、勾配が大きな部分に塘の雄大な発達域が集中しているのは、それだけ泥炭層内部の水や湿原表面を流れる雨水や融雪水が集中していて、他の部分が乾燥する条件においても、より湿潤の度合いが高いからであると判断されるが、一方では、この田代岳高層湿原の位置する標高1,100m付近が東北北域においても、有数の豪雪地域で平均的に3～4mの積雪・多雪年には5～6m・豪雪年には7mを上回ること（自然保護員の北林忠氏によれば荒沢登山道口の駐車場（標高650m）でも3～4mの積雪深度となる＞＜田代岳一帯の積雪状況は把握出来ていないので＞八幡平における積雪状態から判断した）と、積雪期間が11月から5月下旬までに及ぶこと、最も積雪深度が大きくなる期間が2月中旬から4月中旬ま

で2ケ月にも及び、この場合には湿原では少なくとも4mもの積雪層が傾斜勾配に応じて斜面を匍行しているわけで、場所によっては柔軟な泥炭層表面の変形に積雪層匍行圧が影響を与えている可能性も無視できない。この場合の積雪層の垂直的重量は積雪密度0.3として1,200 kg/m$^2$にもおよんでいる。

## 6. 湿原域の植生分布

図11は湿原域に侵入し疎林を形成しているダケカンバの分布を示すものである。ダケカンバの湿原侵入は尾瀬ケ原の例（尾瀬ケ原の自然史：坂口豊著に収録されている宝月欣二他1954）では泥炭層を満たしている水位が湿原表面から約1m低下する段階で開始されるし、灌木林は80 cmで、ヌマガヤは7〜8 cmとなっている。

これとは別に北海道雨竜沼湿原でのチシマザサの湿原侵入では15〜18 cm（小岩1993測定）の水位低下で侵入が顕著になっている。このような他の湿原における調査結果を田代岳高層湿原の植物分布図に対応させると、この湿原は赤倉沢側頂上台地（標高1,140 m）から湿原斜面中央部（標高1,130 m）付近までの高度差10 mまでの範囲がかなり乾燥し泥炭層の上部が乾燥傾向を深めていると判断される。この一帯の泥炭層深度値については道に沿っての僅かな測定値しか得ていないが、台地面で75〜100 cm・測定値の最大値は180 cmであり、赤倉沢側台地の池塘の中に一つだけ水深だけで186 cmとなり、この部分に限れば泥炭層深度が200 cmを上回ると判断出来る場所もあるが、このような部分的な範囲を除けば、100〜150 cmが全体的平均値となるようである。このように薄い泥炭層に依存した湿原においてチシマザサ帯では泥炭層の上部20 cm程度、灌木帯では80 cm、ダケカンバ帯では100 cmの深さまで水分の枯渇現象が進行し、湿原面の植生分布に鮮明に現れていると判断してもほぼ誤りはないであろう。

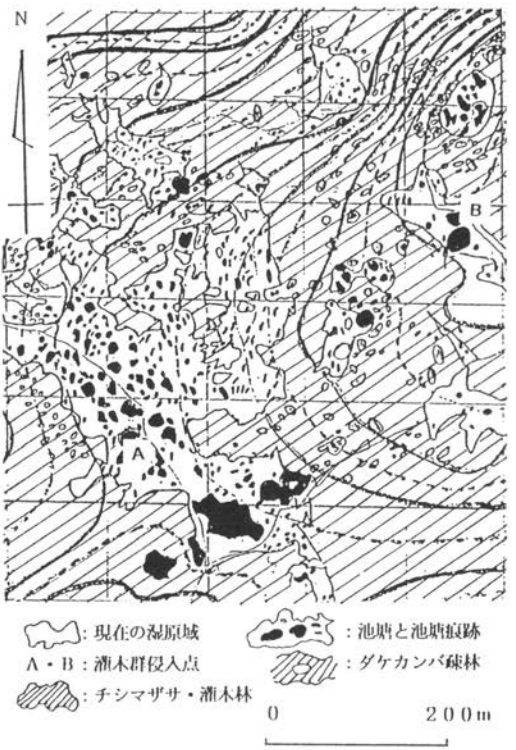



図11　植生分布図

田代岳高層湿原は木道域から神ノ田域にかけて、あるいは赤倉沢側頂上台地の限られた部分に、見事な湿原と雄大に発達した塘を持つ池塘が集中し、それらが相互に関連しあいながら瑞々しい湿原景観を作り出してきたし、現在もその機能を失っていないかに見えるが、泥炭層の内部を推測するならば深さにして 150 cm の 3 分ノ 1 から 2 分ノ 1 が乾燥傾向を深め、泥炭層の薄い部分では既に湿潤な状況にはない環境となり、かっての全体的湿原環境から現在ではモザイク模様の乾湿域が形成され、年毎に乾燥域が拡大していると考えるべき状態に置かれている。今後の田代岳高層湿原の環境推移を考えていく場合には、細かに分断されているそれぞれを独自の水配分機能として測定し、より細かな対応をしていく必要があり、全体を一括的に把握する場合には湿原環境調査としては適合性が無い結果を導き出してしまうおそれがある。全体的な水配分機能を既に失っているということは、いままさに美しい池塘景観を展開している木道周辺の高層湿原域も気候変化の影響により、湿原持続面での限界的で厳しい自然環境にさらされているのである。

## 7. 田代岳高層湿原小氷期池塘分布

図 12 に示すのは、現段階で現地で確認し、それに基づいて空中写真を判読し、かっての池塘の痕跡を加えて作成した田代岳高層湿原の最近における池塘最大発達期の再現表現図である。(江戸時代の小氷期頃の発達した湿原環境を想定)

現在の池塘水域が約 161 地点であるのに対して、過去の池塘痕跡域は約 336 地点に及んでいる。この実態をみると気候が寒冷であった時代の、この湿原は現在は池塘水域を失い湿性草原となっている範囲にも数多くの水域をちりばめていたのは誤りないことであろうし、現在ではチシマザサや灌木帯として帯状・島状に池塘域を取り巻いている範囲もより古い湿原拡大期の痕跡と考えられ、湿原は長期的に縮小してきたと考えてよいであろう。江戸の小氷期から現在まで約 300 年間で 336 地点で池塘が消滅してきたとすれば、一年に一つ以上の池塘水域が消滅してきた事になるし、その傾向が持続しているとすればこの湿原は 200 年程度で消滅する結果となる。

赤倉沢側頂上台地と木道域には (A・B に示す 2 ケ所) 最近になって急激な水抜けが進行したと考え得る池塘があり、その池塘範囲に直接的に灌木群が侵入繁茂していて、池塘の跡に湿生草原を経由せずに灌木群に移行する例として注目に値する。

灌木群はミネカエデ・マルバマンサク・シャクナゲ・アカミノイヌツゲ・ダケカンバ・ナナカマド・エゾユズリハ・オオカメノキ・トウダンツツジ・チシマザサ・イタドリ等で濃密な藪を形成し、その外観は池塘窪地に嵌め込まれた蓋のような特異景観となっている。このような長径 5 m×短径 4 m×深さ 60 cm もの大きさの池塘が突然に水抜けし泥炭層内部の保水機構が短時間に崩壊し乾燥していくのかは現在解明できていない。

## 8. 湿原の温度環境

湿原自然条件把握としては、広範囲な湿原の温度がどのように分布しているか調査が必要である。しかし 500 m×500 m もの山地傾斜面で池塘・湿原・チシマザサ・灌木林・

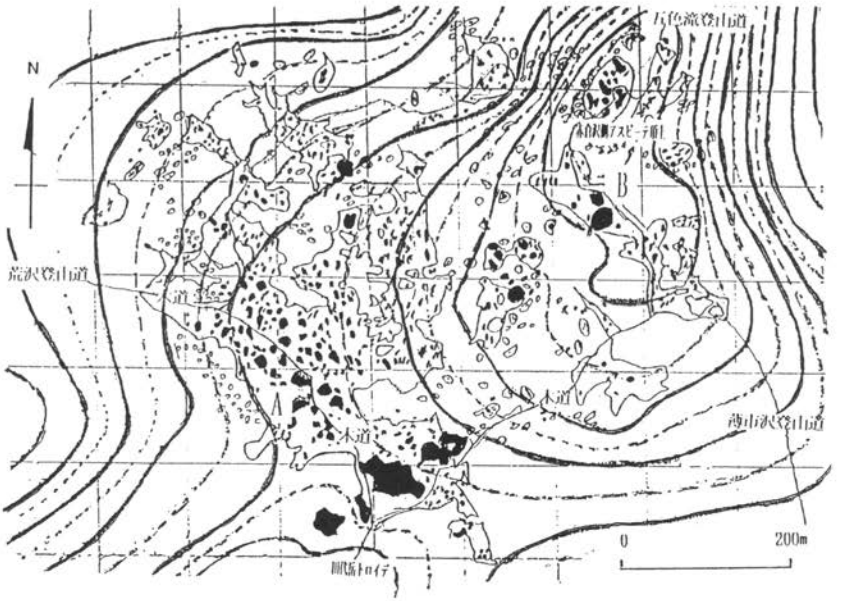



図 12　田代岳高層湿原・小氷期池塘分布図

ダケカンバ疎林がモザイク状に入組み、そのうえに自然保護区として立入る事が制限される条件での個人的調査においては、何らかのポイント調査によって複雑な現実を単純化して僅かでも実測数値を獲得し、それを基礎として全体を考察するしか方法がない。

1998 年 8 月 8 日と 9 日に気温・池塘水温・湿原泥炭層表面温度の移動測定を実施したので、これを基本として以下のような考察を行った。

湿原の池塘水の多くは調査域（1）（2）（3）の数値に示されるように 0.3〜0.4 m という浅い池に蓄えられている。田代岳高層湿原域の池塘の中で現在までに把握できた 0.5 m を上回るものは、神ノ田の早稲見池の南岸で顕著な杉樹の立つ位置に部分的に 1.2 m の深みがあり、その他では赤倉沢側頂上台地湿原池塘群の最も東寄りの長径 8 m 程の池の中央部に周囲の 0.5 m の底とは異質な深みがあり 1.86 m に達する池の中の穴となっている。この様な深みを持つ池塘が他にもあるかどうかは登山道や木道から湿原内部に踏込まなければ調査出来ないので把握できないが、単なる湿原の高層化に伴うものではなくて、あるいは湿原形成前の基盤に成立していた小さな高山湖があって、泥炭堆積によって埋積される過程で古い水域の一部が残存しているものである可能性が高い。

このように測定していくと、この湿原の 161 にも及び池塘に蓄えられた水が、無秩序に存在しているのではなく夏の半ばに水温 18.5°C から 22°C 程度の範囲に収まっているものであることが理解される。同時に、その水温は気温に対して 10°C も高温となり熱蓄積の効果も果たしているのである。

図13　調査域（1）赤倉沢側頂上台地の池塘群

＜8月9日：13時～14時45分：気温16℃±1＞

| 池塘番号 | 池塘規模(長径×短径：m) | 池塘深 m | 池水表面温度 ℃ | 池水底面温度 ℃ | 泥炭層深度 m |
|---|---|---|---|---|---|
| 142 | 8×3.5 | 1.86 | 19.3 | 14.9 | 1.86＋ |
| 143 | 2×0.7 | 0.2 | 20.9 | 18.9 | 1＋ |
| 144 | 1×0.5 | 0.2 | 20.8 | 17.6 | 1＋ |
| 145 | 2.5×2 | 0.8 | 20.5 | 16.5 | 1＋ |
| 146 | 2×1.5 | 0.4 | 20.6 | 17.6 | 1＋ |
| 147 | 8×2 | 0.5 | 20.8 | 18.0 | 1＋ |
| 148 | 9×3.5 | 0.3 | 21.4 | 18.5 | 1＋ |
| 149 | 5×4 | 0.05 | — | — | 1＋ |
| 150 | 4.5×3.5 | 0.25 | 20.6 | 19.5 | 1＋ |
| 151 | 7×2.5 | 0.15 | 23.8 | 23.4 | 1＋ |
| 152 | 7×2 | 0.2 | 21.5 | 20.8 | 1＋ |
| 153 | 1×0.8 | 0.05 | 23.9 | 23.9 | 1＋ |
| 平均 | 4.7×2.2 | 0.41 | 21.1 | 18.9 | 1＋ |

図14　調査域（2）山ノ神小湿原池塘域

＜8月8日：11時25分～12時20分：気温12℃±1＞

| 池塘番号 | 池塘規模(長径×短径：m) | 池塘深 m | 池水表面温度 ℃ | 池塘底面温度 ℃ | 泥炭層深度 m |
|---|---|---|---|---|---|
| 86 | 4×4 | 0.6 | — | — | 1＋ |
| 90 | 4×4 | 0.6 | 18.8 | — | 1＋ |
| 131 | 1.5×0.6 | 0.2 | 19.1 | 19.1 | 1＋ |
| 132 | 2×1 | 0.3 | 18.2 | 18.2 | 1＋ |
| 133 | 2.2×1 | 0.3 | 18.5 | 18.5 | 1＋ |
| 134 | 2.5×2.5 | 0.4 | 17.9 | — | 1＋ |
| 平均 | 3.2×2.2 | 0.4 | 18.5 | — | 1＋ |

図15　調査域（3）荒沢登山道木道池塘域参考資料

＜この測定値は1997年8月21日10時～11時に実施したものである：気温20℃±1＞

| 池塘番号　池塘規模(長径×短径：m) | 池塘深 m | 池水表面温度 ℃ | 池塘底面温度 ℃ | 泥炭層深度 m |
|---|---|---|---|---|
| 1～78までの中の20池塘の平均 | 0.3 | 22.0 | 21.0 | 0.9～1＋ |

次ぎに池塘の水深と温度上昇の関係を見ると、①水深が 15 cm 程度までの池は面積的な規模とは無関係に表面から底までが一様に水温が上がり気温 14.4°C の条件でも 24 °C となる　②水深 50 cm の池塘水は 20°C　③水深が 1 m になっても 20°C になっているが　④水深が 1.2 m や 1.9 m に及ぶものではその深度 1 m 位置で 16.9°C～14.9°C と夏であっても昇温効果があまりみられず、これらの水温は泥炭層の中を移動している浸透水の温度の側からの支配を受けていると考えられる。田代岳高層湿原で泥炭層表層の温度を測定すると多くの場合表面から 15 cm 程度の位置に一定の不変温度層が検知されるが、その数値はここでみる深い水域の 16°C の温度に極めて良く追従している。

この事は 161 に及ぶ池塘の水が例え 24°C と、その日の気温よりも 10°C も昇温していても、湿原全体の泥炭層を高温状態にしていくものではないことが解ってくる。湿原を構成する厚い泥炭層の内部には、その泥炭層が湿潤な状態であるかぎり、現在の気候温暖化条件にあっても、相当の低温を維持する機能を失っていないと判断できる。その泥炭層内部の 16°C 程度の水の正体とは冬の積雪期間のもたらすもので、10 月～6 月まで 9 ケ月もの寒冷な条件支配的で夏の 3 ケ月の昇温はせいぜい 20 cm 程度の泥炭層表層に影響しているに過ぎないと考えてよい。

そうなると多少の温暖化では湿原の温度による破壊が発生していないことになるが、現実は湿原は確実に壊れていっている。それはやはり冬の期間の短縮が降雪量の不足、そして積雪期間の短縮となって湿原にマイナスの作用をもたらしているからで、この池塘域にしても過去の寒冷期には不変温度層の位置が 16 cm よりも浅い位置にあり、夏の期間の池塘水温の高さも低く押さえられていたものと考えられる。

池塘水温の上昇は水深 50 cm 程度の池の底層の温度を上げて泥炭層の腐敗を促進しているが、その現実は池底層が発生した腐敗ガスによって剥離浮上し、浮かび上がることで更に熱蓄積をし、腐敗の速度を劇的に進行させるという形で行われている。腐敗が極めて緩慢であり、それと雨水や雪解水の貧栄養水分の供給によって保たれている湿原が、泥炭層の腐敗分解という経過の中で富栄養化が進行し、乾燥化とあいまってイヌツゲやチシマザサの侵入を受けて、やがて灌木帯・ダケカンバ林にと移行するのは泥炭層表層の僅か数 cm の温度の変化によるものなのである。その意味では、人間による踏付けや構造物による破壊が軽微にとどまっている田代岳高層湿原池塘群も、この変化からは逃れる事が出来ず、特にイヌツゲの先駆的侵入は相当の面積におよんでいる。

田代岳高層湿原域では、チシマザサの侵入が先駆的なのではなくて、イヌツゲが先駆植物となりその後を追う様にしてチシマザサ帯が前進しているようで、水抜けして底の泥炭層がむき出しになり、これが直射日光にさらされて分解をし、土壌づくりが始まると、周辺の灌木帯を構成する樹木・草の種が一斉に侵入した島状の灌木帯が短期間に形成されている。これは木道部分 A と赤倉沢側頂上台地 B の 2 ケ所に模式的な島状繁茂として確認できている。

図16　泥炭層表面温度の測定表　8月8日測定値<気温 12°C±1>
8月9日の測定値<気温 16°C>

| 測定場所→ | 山ノ神 | 山ノ神 | 山ノ神 | 山ノ神 | 山ノ神 | 山ノ神 | 山ノ神 | 山ノ神 | 赤倉台地 | 赤倉台地 | 平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 測定深度↓ | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥笹原 | 山道⑦ | 山道⑧ | 湿原面⑨ | 湿原面⑩ | 温度°C |
| 0 cm | 17.0 | 21.0 | 21.3 | 19.5 | 21.5 | 14.0 | 17.8 | 19.9 | 20.3 | 18.3 | 19.6 |
| 1 cm | 16.9 | 19.7 | 20.8 | 18.7 | 21.3 | 14.5 | 17.7 | 20.2 | 21.0 | 18.3 | 19.4 |
| 3 cm | 16.9 | 19.4 | 18.8 | 18.1 | 18.8 | 14.5 | 17.2 | 19.5 | 20.5 | 17.3 | 18.5 |
| 5 cm | — | — | 18.0 | 17.5 | 17.9 | 14.5 | 16.9 | 17.9 | 20.2 | 16.5 | 17.8 |
| 10 cm | 15.6 | 18.1 | 16.7 | 16.7 | 17.2 | 14.5 | 16.8 | 17.3 | 18.9 | 15.7 | 17.0 |
| 15 cm | — | 17.4 | 16.5 | 16.4 | 16.8 | — | — | 17.2 | 16.9 | — | 16.9 |

湿原泥炭層がどのような熱環境にあるのかは殆ど解っていない。ここでは湿原泥炭層の表面・1 cm・3 cm・5 cm・10 cm・15 cm と 6 点の測定を実施した。場所は湿原の範囲としては最も低い標高 1,100 m の山ノ神小湿原と、それに至る山道と湿原域での最も高い標高 1,140 m 位置にある赤倉沢側頂上台地の湿原池塘群と側の台地面泥炭層域である。特異点としては山ノ神小湿原のササ斜面を参考値として加えた。**図 16** 測定表をみると、泥炭層表面から 3 cm の範囲では地点毎の変動が大きいが、5 cm になると 17 °C 付近にまとまり 15 cm の位置では、16°C ～17°C の範囲に収まっていくのが解る。この位置が、田代岳高層湿原泥炭層下現在の夏の不変温度層である。不変温度層の位置は湿原全体を支配しており、単に田代岳高層湿原にとどまらず、八幡平や八甲田山域という東北北域の湿原全体に普遍的に見られるが、夏の期間の温度作用と冬の積雪期間温度のもたらす年間温度の平均値に対応し、その夏の条件によって変化している数値であり、温度の安定を作り出しているのは、泥炭層内部を緩慢に移動しながら、湿潤度を保つ浸透水であると考えられる。

**図 17** のグラフは 1997 年 8 月と 98 年 8 月を比較したものである。

基本となる気温条件が 5.6°C と大きな差があるにも拘らず、泥炭層 15 cm 深度では 1 °C の差に接近し、20 cm 深度では 1 °C 以内に収まっていく。したがって、泥炭層 15 cm の位置に存在している不変温度層は 1998 年 8 月の測定時のみではなくて、1997 年にも存在していたことがわかるし、測定時の気温が約 6 °C もの差があっても 8 月という期間でみると 1 °C 以内に収まるほどよく安定しているのが不変温度層である。

**図 18** は 1997 年と 1998 年の 8 月の気候図を比較したものである。この比較によると 1997 年と 1998 年の気温は調査日の温度は約 6 °C と大きいが平均気温を平年差でみると、1998 年 8 月が 1 °C 低温に推移した事になる。また 1998 年の東北域では天候が不安定で雨が多かったが、これは日照時間が平年値より 40% の減少と、70% 増の降水量として現れている。1998 年調査時と 1997 年調査時との泥炭層表層部の温度差は雨が多かったこと、さらに雨をもたらす天候状態が持続し日照不足が原因であったが、その様な条件があっても泥炭層中の不変温度層は安定していて、泥炭層の表層の 10 cm 程度

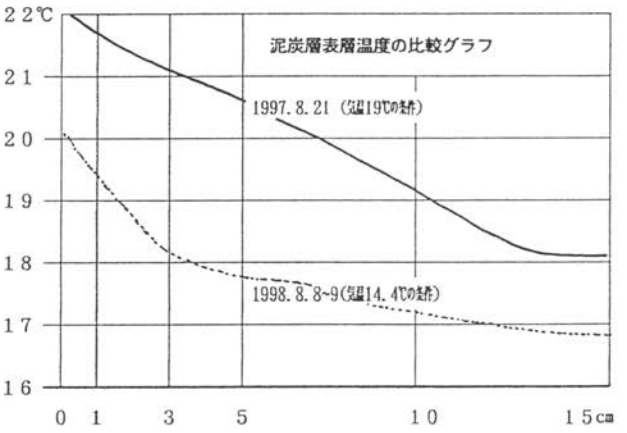



図17　1997年8月21日と1998年8月8～9日の測定値比較

よりも深い範囲はやはり月単位の気候変化ではなくて、年単位かあるいはもっと長期的な変化に対応している事が明かである。

しかし、これほどの長期条件での変化をしている湿原も、現実的には多湿な環境から乾燥化に移行しているのはイヌツゲ・チシマザサ・灌木帯が湿原に進出していることや池塘痕跡より判読される497もの池塘数が現在では161の池塘にと数の減少が進行してきたことで、過去の寒冷環境から温暖環境にと推移してきている現状を把握することが出来る。この池塘の変化は現在判読可能な池塘痕跡数からは最盛期池塘数の33%しか残存していないことになる。

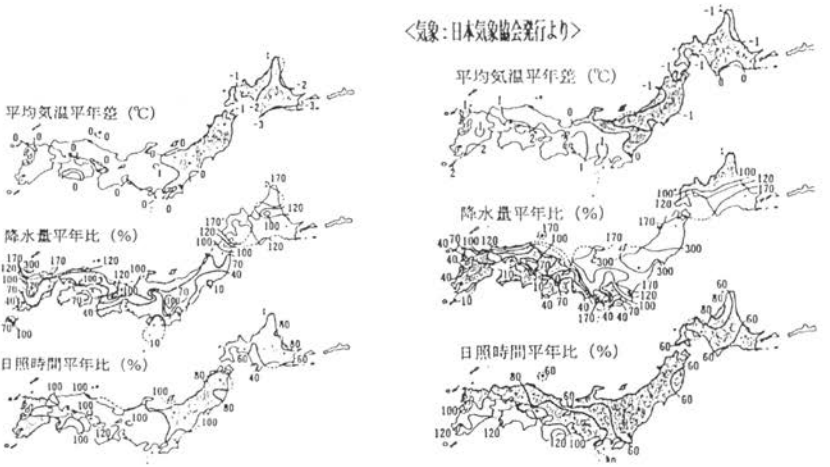



図18　1997年8月と1998年8月の気候比較図

## 9. 1998年の調査から得られたもの

秋田・田代岳高層湿原調査によって得られたものは項目別に示すと以下のようなものである。

1. **地形環境** ①：田代岳と総称される山体は赤倉沢側に中心を持つアスピーテ（楯状火山）の緩やかに西に傾く斜面の1,100 m～800 mにかけて、その後に噴出した田代岳・雷岳・烏帽子岳・茶臼岳の小さなトロイデ（鐘状火山）が重なったものであり、これらのトロイデの山体は高さにして100 m以内に過ぎず、基盤となるアスピーテが支えている。烏帽子・茶臼の名は八幡平や秋田駒ケ岳のトロイデ山体につけられているものと同様であり、田代岳の名は東直下に田代湿原を見下ろすことで農業神の憑代としての命名であると思われる。

   **地形環境** ②：田代岳湿原の池塘の発達状態を調査するとA：泥炭層に支えられている池塘・B：アスピーテ山体に直接支えられ、泥炭堆積の無い池・C：泥炭層によらない池だったものが泥炭堆積によって低層湿原化の過程に移っているものと3形式があり、神ノ田の水位見池はB形式で晩稲見池・中稲見池・早稲見池は本来はB形式であったものからC形式に移行しているものであり、それ以外の池塘は現在、泥炭層の保水力に支えられている。

2. **高層湿原池塘分布の実態** ①：現在の湿原域で池塘群が最も密集しているのは荒沢登山道の木道に沿う範囲標高1,110～1,115 mと赤倉沢側頂上台地面標高1,140 mの2地域である。この中間高度の標高1,130 m～1,135 mの付近にも池塘群があるが、現在の気候環境下においては水補給が不十分となり消滅傾向を深めているようである。

②：斜面の傾斜勾配と池塘の関わりをみると、湿原の活性化は5％勾配において最も充実し、10％勾配では池塘が不活発となり、13％勾配付近では池塘が消滅傾向を深めている。勾配が15％を越えると池塘は存在しない。

③：現在水域を確認出来る池塘は161であるが、現在の湿生草原（池塘を伴わない湿原）を注意して観察すると最近になって水を失って草原化を強めている小さな窪地（池塘痕跡）が数多く存在している。現場での観察で得た特色を空中写真を用いて調査した結果、池塘痕跡数は湿原全体で336におよんだ。この数値を現在の池塘数161と合わせると、それほど遠くない過去において、497もの池塘が湿原を彩っていた可能性のあることに気付く。

3. **湿原域の植生分布** ①：湿原域の植生分布図を作成すると（A）池塘を伴う湿原（B）池塘を伴わない湿原（C）チシマザサと灌木林（D）ダケカンバ疎林と4大別することができる。これを現在までに得られた資料から判断するならば、Bでは泥炭層表面が約10 cmが乾燥状況にあり、Cではチシマザサの単独分布ならば15～20 cmまでの泥炭層が水を失っているし、灌木帯にまで変化した場合は80 cm付近まで泥炭層乾燥が進行した状態さらにダケカンバの疎林の形成は1 m層までの泥炭が乾燥してしまったことをものがたる。そのような見方からすれば田代岳高層湿原は既に湿原としての範囲は全体面積の3分ノ1以下に縮小している可能性がある。

4. **湿原集水域区分と池塘** ①：斜面は一様に見えても実際は傾斜方向が微妙に変化し

ており、この傾斜によって斜面集水域は大きな差を示している。最も池塘の密集している荒沢登山道木道域では、湿原全体の約 50% の範囲を集水域として持っているのに対して、10% 以下の湿原域では池塘そのものが消滅し過去の痕跡がみられる。

集水域が 13% に過ぎないのに狭い範囲に池塘を密集させている赤倉沢側頂上台地の場合は、ほとんど傾斜のない窪地という水を失わない条件を伴っている。

5. **池塘発達の方向性** ①：池塘発達の方向性は大局的には斜面の傾斜に支配されているし、泥炭層の中を移動する浸透水の動向と一致しているようである。田代岳湿原の場合は赤倉沢側頂上台地を中心にして西北方向に塘を発達させているが、部分的には塘の盛上がりの干渉により僅かに偏在するものも認められる。なお、田代岳トロイデの側では当然、東北に塘を発達させているものもある。

6. **湿原の温度環境** ①：湿原の温度環境には池塘水の温度・泥炭層表面から 15 cm 深度までの温度と気温の関わりが調査されたが、池の浅いものは池水全体が昇温し日照が得られなくても気温よりかなり高い水温となるが、水深が 1 m 程度になると底層水は 16°C 程度に安定し余り変化しなくなる。今回の池塘水温の最も高かったのは 23°C であったが、池の水深は 15 cm であった。最低水温は頂上台地の池塘群中の深度 186 cm の池塘の 1 m 部分で 15°C であった。

②：泥炭層の測定をしてみると、地表の天候状態に左右される範囲は泥炭層表面から 5 cm の範囲で、深度が 15 cm にもなると殆ど変化しない不変温度層が成立している。田代岳高層湿原の場合 15 cm の位置にある不変温度層の温度は 16〜17°C の範囲に収まっている。

## 10. 総合的なまとめ

1998 年以前の調査結果では、破壊の進行している八幡平湿原との比較に重点があり、その立場からは田代岳高層湿原と池塘群は瑞々しい環境を保っていると結論づけたが、調査が 3 回目になり実測資料が増加し、調査範囲も拡大するとこのような美しい湿原と雄大な池塘を発達させている湿原でも、自然条件の変動に直接的な影響を受け、既に新生の池塘に期待することが出来ず、かっての池塘が痕跡化しチシマザサの侵入や灌木の侵入から、ダケカンバの林にまで至っている事が明かになってきた。

それは直接的人為的な破壊や影響ではないが、今後の自然を考えるときに湿原そのものを踏み荒らしたり、植物を盗掘しているわけではないから自分には責任がないと判断する事は出来ないし、登山しない人々もまた責任から逃れられない。それは現在進行中の気候変動は、人間活動が便利さ快適さを求めて化石高エネルギー資源を短期間に大量に消費した結果に影響されていると考えられているからである。

この田代岳高層湿原を調査していると、外見的には全く自然の儘で美しく、将来的にも微動だにしないと思われる状態の背後に、紙一重で迫っている荒廃の加速力を感じる。全てが整然と存在しているかのような湿原の周辺の乾燥域に先駆してくるイヌツゲ、既に湿原域の中央を南北に分断しているチシマザサ・池塘の水抜けが始まると間髪を入れず侵入する灌木群、そのような経過の中で泥炭層が 1 m 程度の深さまで乾燥すると先

駆した植物に君臨するダケカンバ、かつて500余りの池塘が輝いていた田代岳高層湿原はいまでは161の池塘が過去の残照として消えるときを待っていると表現しても、言い過ぎとはならない。

誰もが大切にし誰もが守っていると確信してやまないこの湿原の美しさが、実は終末の状況に直面していることを今回の調査結果が雄弁にものがたっている。注意すべきことは、このような状況は日本の山々に成立している全ての山上湿原に共通しているのであって、現在では山上の平坦地に薄い泥炭層を基盤としている湿原や池塘で発達方向にあるものは絶無であろう。だからこそ人為的な踏込み破壊は極力避けなければならないし、木道も湿原にとっては異物であり、夏の晴天時には50℃を上回る異常高温域を連続的に出現させ、木道に沿って湿原乾燥を顕著なものにし、植物生態や昆虫生態に変異をもたらす事実にも留意が必要である。

山上湿原の人為的破壊について湿原面積に対する破壊面積が5～10%にも及ぶ場合には重大な影響が認められ、20%にも達すると湿原環境が崩壊を始め、30%を上回ると回復不可能な荒廃にと拡大している現状は、人間の火傷の判定基準と実によく対応していて、湿原もまた複雑な調和を持った一種の生命体であることを理解する手掛かりとなり、その一部だけを利用したり、僅かだから破壊が許されるというものではないことが理解されなければならないのである。

**主な参考資料一覧**

1) 田代岳県立自然公園学術調査報告 1974…秋田県田代町
2) 空中写真・田代岳・90-30 C-12 A～6～7…林野庁
3) 尾瀬ケ原の自然史・中公新書・1986刊…坂口 豊 著…中央公論社
4) 湿原生態系…ブルーバックス・1994刊・辻井達一他共著…講談社
5) 北海道増毛山地・雨竜沼湿原の自然調査報告 1989 小岩清水
その他

# 山岳図書目録（1998年）

「山岳図書目録について」

日本山岳会図書委員会

「山岳図書目録」を本年も継続掲載します。この種の目録は、いまのところ各種山岳・アウトドア関係の定期刊行物でも整理・記録の対象とされていないので、この「山岳」掲載のものだけがわが国でのただ一つの資料です。山の本以外に自然環境のものも拾ってありますし、昨年分でもれていたものも収録してあります。また締切り時間の都合で、一部に収録できなかったものがありますが、多種多様な本が出版されていることがわかります。どうか有効にご利用ください。

＊記載は書名、著者名、発行所、発行年月、価格、判型、総ページ数の順です。

＊判型が数字で表示されているものの単位はmm（天地×左右）、価格は原則として税なしですが、ごく一部税込みになっています。

＊記載の配列は、書名の五十音順です。

## 山岳図書目録

| 書　名 | 著者名 | 発行所 | 発行年月 | 価格 | 判型 | 総ページ数 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| アイスワールド―現代アイス・クライミングの技術と実践 | ジェフ．ロウ／著　手塚　勲／訳 | 山と溪谷社 | 98.3 | 2800 | B5 | 255p |
| 会津百名山ガイダンス | 会津百名山リストアップ委員会 | 歴史春秋社 | 98.6 | 2000 | A5 | 219p |
| 赤石・聖・荒川三山を歩く | 山下春樹／写真・文 | 山と溪谷社 | 98.7 | 1750 | A5 | 143p |
| 秋山記行―現代語訳 | 鈴木牧之／著　磯部定治／訳・解説 | 恒文社 | 98.7 | 1800 | B6 | 117p |
| 朝日連峰・鳥獣戯談 | 西澤信雄／著　岡坂恭博／イラスト | 無明舎出版 | 98.7 | 1600 | 四六判 | 231p |
| アジア辺彊遊山記 | 横山正文 | 求龍堂 | 98.8 | 2000 | A5 | 278p |
| 足利からの山旅 | 沖　允人・沖　道子 | 沖　允人・沖　道子 | 98.7 | 1500 | A5 | 210p |
| 熱き心―登山と企業から学んだ私の人生哲学 | 平林克敏 | ぱるす出版 | 98.4 | 1600 | 四六判 | 276p |
| 吾妻・安達太良・磐梯山　花ガイド | 高山の原生林を守る会 | 歴史春秋社 | 98.6 | 1524 | B6 | 133p |
| あまかざり | 林　明輝 | 愛育社 | 98.4 | 2800 | 300×300 | 378p ※写真集 |
| アマゾン河探検記 | A．R．ウォレス／著　長沢純夫・大曽根静香／訳 | 青土社 | 98.3 | 2800 | B6 | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| A LINE—地平線の旅人 | 江本嘉伸・遠藤正雄・戸高雅史 | ソニー企業 求龍堂／発売 | 98.7 | 1800 | 四六判 | 255p |
| ある日の山ある日の峠 | 横山厚夫 | 白山書房 | 98.3 | 1700 | 四六判 | 229p |
| アルプス交番勤務を命ず—元富山県警察山岳警備隊長の遭難救助30年 | 谷口凱夫 | 山と溪谷社 | 98.4 | 1600 | B6 | 254p |
| アルプス登攀記 | エドワード．ウィンパー／著　H．E．G．ティンダル／編　新島義昭／訳 | 講談社 | 98.5 | 1400 | 文庫判 | 552p |
| アンモナイトは「神の石」—巨大な化石を求めてヒマラヤを行く | 三輪一雄 | 講談社 | 98.4 | 860 | 新書判 | 217p |
| 飯豊道—山の紀行とエッセイ | 五十嵐篤雄 | 恒文社 | 98.4 | 2800 | 四六判 | 402p |
| 生きぬくことは冒険だよ | 長谷川恒男 | 集英社 | 98.3 | 533 | 文庫判 | 284p |
| 池田満寿夫陶板画富岳百八景 | 池田満寿夫 | 朝日新聞社 | 98.6 | 3800 | 310×240 | 106p |
| 伊豆・城山フリークライミングガイド200 | 國分　誠 | 國分　誠 | 98.4 | 1200 | A5 | 59p |
| いで湯を楽しむ100山—関東近辺 | 石丸哲也・岩崎元郎・打田鍐一・岡田敏夫・藤本一美 | 実業之日本社 | 98.11 | 1900 | A5 | 214p |
| 凍てる岩肌に魅せられて | 小西政継 | 中央公論社 | 98.7 | 648 | 文庫判 | 283p |
| 岩手山焼走り溶岩流—特別天然記念物 | 高橋喜平／写真・文 | 岩手日報社 | 98.8 | 1900 | 183×203 | 80p ※写真集 |
| イワナ・秘境の追跡 | 成瀬泰雄 | 三樹書房 | 98.4 | 1500 | B6 | 224p |
| 岩魚釣り歳時記 | 神田稲見 | 信濃毎日新聞社 | 98.2 | 1500 | B6 | 310p |
| 植野稔の山釣り—岩魚開眼 | 植野　稔 | 多摩綜合企画　白山書房／発売 | 98.3 | 1900 | A4 | 160p |
| 歌人の山 | 来嶋靖生 | 作品社 | 98.4 | 1800 | 四六判 | 232p |
| エヴェレストの女たち—Women on Everest | 田部井淳子／編 | 山と溪谷社 | 98.7 | 1500 | B6 | 271p |
| エヴェレストへの長い道—海抜ゼロから頂上へ | ティム．マッカートニー．スネイプ／著　海津正彦／訳 | 山と溪谷社 | 98.3 | 2400 | A5 | 316p |
| 越後佐渡の峠を歩く—峠紀行 | 羽賀一蔵 | 新潟日報事業社 | 98.4 | 1800 | A5 | 311p |
| 越後の四季 | 今井　茂 | 二条印刷 | | 3334 | 239×254 | ※写真集 |
| エベレスト—非情の最高峰 | ブロートン．コバーン／著　日経ナショナルジオグラフィック社編集部／訳 | 日経ナショナルジオグラフィック社　日経ＢＰ出版センター／発売 | 98.5 | 5000 | 302×230 | 256p |
| エベレスト遥かなり | 平山善吉 | 悠々社 | 98.5 | 3500 | A5 | 352p |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| エンデュアランス号漂流 | アルフレッド．ランシング／著　山本光伸／訳 | 新潮社 | 98.10 | 2200 | 四六判 | 372p |
| おお悲し、泣くはみちのく岩木山 | 三浦章男 | 北方新社 | 98.11 | 2000 | A5 | 304p |
| オオカミ | ジェラール．メナトリー／著　高橋正男／訳 | 東宣出版 | 98.4 | 2400 | A5 | 284p |
| 狼は帰らず―アルピニスト・森田勝の生と死 | 佐瀬　稔 | 中央公論社 | 98.11 | 838 | 文庫判 | 324p |
| 大阪周辺の山を歩く | 中庄谷直・他／写真・文 | 山と溪谷社 | 98.7 | 1750 | A5 | 143p |
| 大峰・台高 | 中庄谷直・他 | 山と溪谷社 | 98.6 | 1068 | B6 | 198p |
| 大峰・台高を歩く | 小島誠孝／写真・文 | 山と溪谷社 | 98.5 | 1750 | A5 | 143p |
| 屋上登攀者 | 藤木九三 | 岩波書店 | 98.8 | 500 | 文庫判 | 245p |
| 奥多摩・奥秩父・大菩薩 | 寺田政晴・山梨登高会 | 山と溪谷社 | 98.6 | 1748 | B6 | 335p |
| 奥多摩自然ハンドブック―都庁から見えるカモシカの棲む山々 | 自然教育研究センター／編 | 自由国民社 | 98.5 | 1300 | B6 | 182p |
| 奥秩父・奥多摩・奥武蔵を歩く | 磯貝　猛・平田謙一／写真・文 | 山と溪谷社 | 98.4 | 1748 | A5 | 159p |
| 奥日光・足尾・那須 | 岡田敏夫 | 山と溪谷社 | 98.4 | 1553 | B6 | 275p |
| 奥日光花あるき　登山・ハイキングと温泉 | 室井正松 | 幹書房 | 98.3 | 1800 | A5 | 119p |
| 奥武蔵見て歩き | 埼玉県生態系保護協会飯能名栗支部／編 | 幹書房 | 98.3 | 880 | A5 | 67p<br>※新版 |
| 尾瀬 | 花畑日尚 | 山と溪谷社 | 98.5 | 1068 | B6 | 137p |
| 尾瀬を歩く | 花畑日尚／写真 | 山と溪谷社 | | 1553 | | |
| おばあさんの山里日記 | 佐々木章／文　椎葉クニ子／語り | 葦書房 | 98.5 | 2200 | A5 | 248p |
| お百姓さんの山登り　小さなムラの誕生と消長 | 南部好志 | 日本図書刊行会 | 98.7 | 1200 | 200 | 146p |
| 思い出の木曽森林鉄道―山の暮らしを支えた60年 | 森下定一／解説 | 郷土出版社 | 98.7 | 3800 | B5 | 222p<br>※写真集 |
| 御岳山の自然 | 岐阜県自然環境保全連合／編 | 岐阜県自然環境保全連合 | 98.2 | 2000 | A4 | 50p |
| 女たちの山小屋物語 | 鷹沢のり子 | 山と溪谷社 | 98.12 | 1600 | 四六判 | 262p |
| ガイド鈴鹿の山完全82コース | 山中保一 | 風媒社 | 98.3 | 1505 | A5 | 154p |
| 加賀藩山廻役の研究 | 山口隆治 | 桂書房 | 98.1 | 4000 | A5 | 213p |
| 輝く光の中で―富士山周辺にて | 大成憲二 | 光村印刷 | 98.4 | 1800 | 145×145 | 83p<br>※写真集 |
| 岳人ポケットガイド―飯豊連峰・朝日連峰 | 高橋金雄 | 東京新聞出版局 | 98.7 | 1100 | B6 | 129p |
| 岳人ポケットガイド―鳥帽子・雲ノ平・笠ケ岳 | 新妻喜永 | 東京新聞出版局 | 98.7 | 1100 | B6 | 142p |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 岳人ポケットガイド—奥秩父 奥武蔵 | 渡辺千昭 | 東京新聞出版局 | 98.7 | 1100 | B6 | 139p |
| 岳人ポケットガイド—甲斐駒・北岳・塩見岳 | 中西俊明 | 東京新聞出版局 | 98.5 | 1100 | B6 | 135p |
| 岳人ポケットガイド—丹沢山塊 | 渡辺千昭 | 東京新聞出版局 | 98.5 | 1100 | B6 | 139p |
| 岳人ポケットガイド—燕・常念・蝶ケ岳 | 新妻喜永 | 東京新聞出版局 | 98.7 | 1100 | B6 | 142p |
| 岳人ポケットガイド—槍・穂高・上高地 | 新妻喜永 | 東京新聞出版局 | 98.5 | 1100 | B6 | 142p |
| 鹿児島県の山歩き | 吉川　満 | 葦書房 | 98.2 | 1700 | | |
| カザフ紀行—シルクロードとステップの国、中央アジアのカザフスタンを訪ねて | 鈴木牧子 | 日本図書刊行会　近代文芸社／発売 | 98.5 | 1000 | B6 | 124p |
| 火山島を行く | 吉本光郎／写真・文 | 平凡社 | 98.4 | 2800 | A5 | 235p ※写真集 |
| 渇迎の峰々 | 山内かむ志／写真　白簇史朗／監 | 山内かむ志 | 98.12 | 5000 | 240×265 | ※写真集 |
| 上高地・槍・穂高 | 岩橋崇至他 | 山と溪谷社 | 98.6 | 1068 | B6 | 233p |
| カムチャツカ—野生と火の国 | 後藤昌美 | 東方出版 | 98.7 | 3800 | 230×240 | 119p ※写真集 |
| 神室連峰 | 神室山系の自然を守る会／編 | 無明舎出版 | 98.8 | 1200 | 四六判 | 119p |
| 神室連峰の山遊び | 坂本俊亮 | 坂本俊亮 | 98. | | A5 | |
| カラコルム | 井上重治 | 文化書房博文社 | 98.7 | 1900 | 四六判 | 247p ※歌集 |
| 関越道の山88—インターチェンジから山頂まで | 打田鍒一 | 白山書房 | 98.6 | 2000 | A5 | 236p |
| 環境科学者の見たチロル | 松田松二 | 山と溪谷社 | 98.5 | 1700 | B6 | 253p |
| 関西自然史ハイキング—大阪から日帰り30コース | 地学団体研究会大阪支部／編 | 創元社 | 98.4 | 1500 | B6 | 306p |
| 関西の山—日帰り縦走 | 中庄谷直 | ナカニシヤ出版 | 98.11 | 2000 | B6 | 229p |
| 関西百名山 | 山と溪谷社大阪支局／編 | 山と溪谷社 | 98.9 | 2200 | B5 | 151p |
| 関東近辺いで湯を楽しむ100山 | 石丸哲也・岩崎元郎・打田鍒一・岡田敏夫・藤本一美 | 実業之日本社 | 98.11 | 1900 | A5 | 214p |
| 関東ぐるり一周山歩き | 上野信弥 | 白山書房 | 98.12 | 1600 | A5 | 196p |
| 関東・甲信越の火山　1　フィールドガイド日本の火山 | 高橋正樹・小林哲夫／編 | 築地書館 | 98.7 | 2000 | B6 | 166p |
| 関東・甲信越の火山　2　フィールドガイド日本の火山 | 高橋正樹・小林哲夫／編 | 築地書館 | 98.7 | 2000 | B6 | 158p |
| 関東の山あるき100選 | 津波克明 | 昭文社 | 98.7 | 1714 | A5 | 255p |
| がんばらない山歩き | 伊藤幸司 | 講談社 | 98.7 | 1700 | A5 | 233p |
| 聞こえますか森の声—水源群馬からのメッセージ | 群馬林政推進協議会／編 | 日本経済評論社 | 98.4 | 1600 | 四六判 | 252p |
| 机上登山 | 西丸震哉 | 博品社 | 98.4 | 1800 | B6 | 249p |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 北アルプス | 磯貝　猛・他 | 山と溪谷社 | 98.6 | 1165 | B6 | 227p |
| 北アルプス花ガイド―これだけは知っておきたい | 中村至伸／撮影・著 | ほおずき書籍　星雲社／発売 | 98.6 | 1000 | 140 | 152p |
| きたぐにの動物たち | 本多勝一 | 朝日新聞社 | 98.9 | 580 | 文庫判 | 331p |
| 北岳・甲斐駒・仙丈 | 中西俊明 | 山と溪谷社 | 98.4 | 971 | B6 | 131p |
| 北岳を歩く | 中西俊明／写真・文 | 山と溪谷社 | 98.4 | 1553 | A5 | 143p |
| 北と南―絲綢之路（シルクノミチ）哈納斬湖（ハナス）・巴音布魯克（パインブルク）草原トレッキング | 奈良原町子／編 | 川上　隆 | 98.3 | —— | B5 | 56p |
| 北の火の山 | 小池省二 | 中西出版 | 98.1 | 1333 | B6 | 272p |
| 北の火の山　続 | 小池省二 | 中西出版 | 98.5 | 1333 | B6 | 218p |
| 北の山里に生きる―みちのくの自然と人生 | 根深　誠 | 実業之日本社 | 98.4 | 1700 | B6 | 213p |
| きっと、また登る | 遠藤由加 | ソシム | 98.8 | 1500 | B5変 | 151p |
| 九州の山―屋久島の山 | 足利武三 | 山と溪谷社 | 98.6 | 1359 | B6 | 265p |
| 京都・滋賀近郊の山を歩く | 京都趣味登山会『京都・滋賀近郊の山を歩く』編集委員会／編 | 京都新聞社 | 98.5 | 1700 | B6 | 207p |
| 「巨匠が描く」日本の名山　2　東北編 | 鈴木　進／監　足立　朗・他／編集 | 郷土出版社 | 98.4 | 18000 | 300×300 | 211p |
| 「巨匠が描く」日本の名山　3　関東・甲信越編 | 鈴木　進／監　足立　朗・他／編集 | 郷土出版社 | 98.7 | 18000 | 300×300 | 215p |
| 「巨匠が描く」日本の名山　5　東海・北陸・近畿編 | 鈴木　進／監　足立　朗・他／編集 | 郷土出版社 | 98.11 | 18000 | 300×300 | 225p |
| 霧の山稜 | 加藤泰三 | 平凡社 | 98.8 | 1100 | HL判 | 342p |
| 串田孫一集　1　惜春賦―小説― | 串田孫一 | 筑摩書房 | 98.3 | 6500 | 菊判 | 424p |
| 串田孫一集　2　智の鳥の囀り―思索― | 串田孫一 | 筑摩書房 | 98.7 | 6500 | 菊判 | 452p |
| 串田孫一集　3　岩の沈黙―山行― | 串田孫一 | 筑摩書房 | 98.1 | 6500 | 菊判 | 518p |
| 串田孫一集　4　季節の手帖―博物― | 串田孫一 | 筑摩書房 | 98.4 | 6500 | 菊判 | 479p |
| 串田孫一集　5　微風の戯れ―随想１― | 串田孫一 | 筑摩書房 | 98.2 | 6500 | 菊判 | 429p |
| 串田孫一集　6　青く澄む憧れ―随想２― | 串田孫一 | 筑摩書房 | 98.5 | 6500 | 菊判 | 441p |
| 串田孫一集　7　向こう側の天―随想３― | 串田孫一 | 筑摩書房 | 98.8 | 6500 | 菊判 | 499p |
| 串田孫一集　8　流れ去る歳月―日記― | 串田孫一 | 筑摩書房 | 98.9 | 6500 | 菊判 | 526p |
| 九重讃歌 | 横田信宏 | 東京新聞出版局 | 98.7 | 2600 | 240×250 | 95p ※写真集 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 九重の自然と歴史 | 松本徵夫・武石千雄・佐藤眞一・佐藤三千代・甲斐素純 | 葦書房 | 98.6 | 2500 | 四六判 | 368p |
| 熊本百名山—高山から里山まで | 熊本日日新聞社 | 熊本日日新聞情報文化センター／発売 | 98.12 | 2300 | A5 | 227p |
| 雲取山の歩き方—新井信太郎と9人の仲間が選んだ26コース | 新井信太郎／編 | けやき出版 | 98.7 | 1500 | A5変 | 215p |
| 雲の去来　山、優しく厳しきもの | 北沢成美 | 日本図書刊行会　近代文芸社／発売 | 98.3 | 1400 | B6 | 149p |
| 雲ノ平・双六岳を歩く | 三宅　岳／写真・文 | 山と溪谷社 | 98.4 | 1748 | A5 | 143p |
| グレートジャーニー　4—人類400万年の旅　アラスカ編 | 関野吉晴 | 毎日新聞社 | 98.4 | 3800 | A4 | 95p |
| クロスカントリースキー・ハイキング | 桐沢雅典／著　中村成勝／写真 | 山と溪谷社 | 98.1 | 1200 | A5 | 101p |
| 群馬の自然をたずねて | 野村　哲／編・著 | 築地書館 | 98.12 | 1800 | 四六判 | 261p |
| 渓谷と山を訪ねて—東海ベストハイク | 塚本義次／編 | 七賢出版 | 98.10 | 1500 | B6 | 221p |
| K2からカイラスへ | 熊谷　樫 | 白山書房 | 98.12 | 1900 | 四六判 | 255p |
| 京阪神ベストハイク・六甲の山 | 小鯛叡一郎 | 七賢出版 | 98.8 | 1500 | | |
| 京阪神ワンデイ・ハイク | 山本武人・他 | 山と溪谷社 | 98.6 | 1553 | B6 | 327p |
| 幻想のカイラス—不思議の国チベット・ランクル紀行 | 野口信彦 | 東研出版 | 98.8 | 1714 | B6 | 133p |
| 源流を歩く—関東近辺川のロマンを求めて | ブルーガイド編集部／編 | 実業之日本社 | 98.5 | 1700 | A5 | 175p |
| 高山の植物—高山から亜高山帯に咲く390種 | 青山富士夫 | 主婦の友社 | 98.4 | 1800 | B6 | 447p |
| 心にのこる山々 | 佐藤亦三 | 文園社 | 98.4 | 1700 | 四六判 | 263p |
| 50歳の山紀行 | 角田　勉 | 上毛新聞社出版局 | 98.9 | 1200 | B6 | 196p |
| 古地図の博物誌 | 織田武雄 | 古今書院 | 98.11 | 4300 | B6 | 350p |
| 孤独の山—ローツェ南壁単独登攀への軌跡 | トモ．チェセン／著　近藤　等／訳 | 山と溪谷社 | 98.10 | 1900 | 四六判 | 221p |
| 子どもといっしょに遊べる山—東京発日帰り36コース | 二木久夫 | けやき出版 | 98.9 | 1400 | A5変 | 189p |
| 西域をゆく | 井上　靖・司馬遼太郎 | 文藝春秋社 | 98.5 | 467 | 文庫判 | 283p |
| 再発見房総の山 | 伊藤大仁 | 玄同社 | 98.10 | 1905 | A5 | 127p |
| 里山歩きの水彩画 | 来住しげ樹 | 日貿出版社 | 98.7 | 2500 | B5 | 111p |
| 里山の四季—茨城県植物園・県民の森 | 松崎睦生 | 暁印書館 | 98.3 | 1500 | A5 | 161p |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 里山の植物 | 新潟県都市緑化センター／編 | 新潟県都市緑化センター<br>考古堂書店／発売 | 98.8 | 2857 | A4 | |
| 里山を歩こう―関東周辺の里山歩き30選 | 中村哲夫 | 保健同人社 | 98.3 | 1300 | A5 | 127p |
| 山岳　第93年 | 日本山岳会／編 | 日本山岳会 | 98.12 | 3500 | A5 | 380p |
| 山岳讃歌 | 打矢　悳 | 日貿出版社 | 98.10 | 2500 | A4 | 103p<br>※水墨画集 |
| 山嶽慈心 | 山内かむ志／写真<br>白簇史朗／監 | 山内かむ志 | 98.12 | 4300 | 240×265 | ※写真集 |
| 山岳トイレ整備ガイド | 日本トイレ協会／編 | 地域交流出版 | 98.6 | 2000 | A4 | 95p |
| 山岳遍歴 | 深田久弥 | 主婦と生活社 | 98.9 | 680 | 文庫判 | 255p |
| 讃歌四季 | 山岳写真同人四季／編 | クレオ | 98.4 | 2800 | A4変 | 126p<br>※写真集 |
| 山菜図鑑 | 高木国保／編・著 | 日本文芸社 | 98.3 | 1000 | 新書判 | 215p |
| 山菜・野草ハンドブック―食用・有毒・薬用植物 | 須山正男／監 | 池田書店 | 98.2 | 950 | 170 | 214p |
| 三遠信の山歩き―三河・遠州・南信州の55コース | 小谷哲治 | 風媒社 | 98.7 | 1505 | A5 | 193p |
| 三瓶山 | 佐々木俊和 | 佐々木俊和 | 98.12 | 4500 | 255×278 | ※写真集 |
| 山名・用語事典―アルペンガイド別冊 | 山と溪谷社山岳図書編集部／編 | 山と溪谷社 | 98.8 | 1500 | B6 | 264p |
| 山野草―雑草から山菜、薬草、毒草まで450種の特徴と見分け方 | 菱山忠三郎 | 主婦の友社 | 98.4 | 1800 | B6 | 455p |
| シェルパ―ヒマラヤの栄光と死 | 根深　誠 | 山と溪谷社 | 98.9 | 1700 | A5 | 278p |
| 志賀・浅間を歩く | 古瀬恵一／写真・文 | 山と溪谷社 | | 1750 | | |
| 死者は還らず―山岳遭難の現実 | 丸山直樹 | 山と溪谷社 | 98.3 | 1500 | B6 | 221p |
| 静岡県の山50選 | 静岡新聞社出版局／編 | 静岡新聞社 | 98.4 | 1600 | A5 | 120p |
| 静岡県日帰りハイキング―伊豆から浜名湖の西まで厳選75コース | 静岡ヶ山岳会・岡本　滋 | 静岡新聞社 | 98.10 | 1600 | A5 | 159p<br>※新版 |
| 自然手帖―上 | 太田黒克彦・尾崎喜八・串田孫一・他 | 平凡社 | 98.5 | 1200 | HL判 | 329p |
| 自然手帖―下 | 太田黒克彦・尾崎喜八・串田孫一・他 | 平凡社 | 98.5 | 1200 | HL判 | 348p |
| 自然保護ハンドブック | 沼田　眞／編 | 朝倉書店 | 98.4 | 25000 | A5 | |
| 湿原の花と山 | 小荒井実 | 歴史春秋社 | 98.10 | 2095 | B5変 | 143p |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 知っておきたい女性のための安心登山術　ガイド＋基本技術 | 福島功夫 | 学習研究社 | 98.6 | 1600 | A5 | 160p |
| 自転車をお伴のチリ冒険紀行—アンデス山脈からフエゴ島まで | レジーヌ，ビアンヴニュ・ピエール，ドゥヴォー／著　青木正夫／訳 | 日本図書刊行会　近代文芸社／発売 | 98.1 | 2000 | B6 | 330p |
| 市民による里山の保全 | 重松敏則 | 信山社 | 98.9 | 2800 | | |
| 写真でみる火山の自然史 | 町田　洋・白尾元理 | 東京大学出版会 | 98.3 | 4500 | A5 | 204p |
| 就職先は森の中—インタープリターという仕事 | 川嶋　直 | 小学館 | 98.12 | 1400 | 四六判 | 223p |
| 週末は森に棲んで | 荒川じんぺい | 講談社 | 98.1 | 648 | 文庫判 | 323p |
| 樹林の山旅—関東・甲信・南会津の山歩き | 浅野孝一 | 実業之日本社 | 98.4 | 1800 | 200×150 | 213p |
| 生涯極楽スキー | 丸山庄司／編・著 | スキージャーナル | | 1333 | | |
| 書写山—遊歩ガイド | 寺林　峻／編　北村泰生／写真 | 神戸新聞総合出版センター | 98.9 | 952 | 四六判 | 125p<br>※新版 |
| 女性と中高年の山歩き—関西版 | 友保深雪 | 風媒社 | 98.5 | 1505 | A5 | 147p |
| 白神山地—森は蘇るか　セレクテッド・ドキュメンタリー | 佐藤昌明 | 緑風出版 | 98.5 | 2200 | B6 | 242p |
| 白神山地—新版 | 佐藤　勉・坂本知忠 | 現代旅行研究所 | | 2200 | | |
| 白神山地と共に歩む道—第一回白神自然文化賞受賞作品集 | 能代山本広域市町村圏組合／編 | 現代書館 | 98.12 | 2000 | B6 | 205p |
| 白神山地を守るために | 鎌田孝一 | 白水社 | 98.9 | 1700 | 四六判 | 180p |
| 白神山地をゆく—ブナ原生林の四季 | 根深　誠 | 中央公論社 | 98.5 | 933 | 文庫判 | 312p |
| 白神の意味—Shirakami field report | 八木浩司・齋藤宗勝・牧田　肇 | 自湧社 | 98.3 | 4500 | A4変 | |
| 白瀬矗—私の南極探検記 | 白瀬　矗 | 日本図書センター | 98.8 | 1800 | B6 | 298p |
| 白馬岳を歩く | 磯貝　猛／写真・文 | 山と溪谷社 | | 1553 | | |
| 新・山野の鳥 | 安西英明／解説　谷口高司／絵 | 日本野鳥の会 | 98.1 | 524 | 新書判 | 64p |
| 新・水辺の鳥 | 安西英明／解説　谷口高司／絵 | 日本野鳥の会 | 98.1 | 524 | 新書判 | 64p |
| 信州で出会いたい花50選 | 増村征夫 | 新潮社 | 97.5 | 1600 | 216×160 | 115p |
| 新編　炉辺山話 | 岡　茂雄 | 平凡社 | 98.1 | 1100 | HL判<br>※平凡社ライブラリー | 365p |
| 森林ニッポン | 足立倫行 | 新潮社 | 98.5 | 1200 | B6変 | 306p |
| 森林列島 | 水越　武／写真 | 岩波書店 | 98.1 | 6000 | A4変<br>※写真集 | 200p |
| スイス・フラワートレイルの旅 | 秋本和彦・土田勝義 | 新潮社 | 98.3 | 1600 | 220×170 | 111p |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| スウィス日記 | 辻村伊助 | 平凡社 | 98.2 | 1300 | HL判 | 479p<br>※平凡社ライブラリー |
| スキー的思考 | 笠井　潔 | 光文社 | 98.10 | 1900 | 四六判 | 301p |
| スキルブルム7360—夢は白き氷河の果てに | 神奈川ヒマラヤンクラブ／編 | 神奈川ヒマラヤンクラブ | 98.8 | 2857 | A4変 | 126p |
| すぐ役立つ　新・山の写真の撮り方 | 内田良平 | 東京新聞出版局 | 98.7 | 1600 | B6 | 157p |
| すぐ役立つ　山を楽しむユニーク登山術 | 石井光造 | 東京新聞出版局 | 98.11 | 1400 | 四六判 | 198p |
| 鈴鹿の山　完全82コース | 山中保一 | 風媒社 | 98.3 | 1505 | A5 | 154p |
| 聖なる地球のつどいかな | ゲーリー，スナイダー・山尾三省 | 山と溪谷社 | 98.8 | 1900 | 四六判 | 287p |
| 生命の川四万十川紀行 | 佐藤　旭 | 淡交社 | 98.6 | 3800 | 260×210 | 133p<br>※写真集 |
| 生命の宝庫・熱帯雨林 | 井上民二 | 日本放送出版協会 | 98.4 | 920 | 文庫判 | 213p<br>※NHKライブラリー |
| 雪線—日本アルプス写真集 | 船越好文 | 東京新聞出版局　オリオン書房事務センター／発売 | 98.9 | 4300 | A4変 | 111p<br>※改訂復刻版 |
| 説話—異界としての山 | 説話・伝承学会／編 | 翰林書房 | 97.2 | 2913 | 四六判 | 269p |
| 1997年第5回日本山岳耐久レース報告書 | 東京都山岳連盟／編 | 東京都山岳連盟 | 98.2 | 非売品 | B5 | |
| 全国地方史誌関係図書目録—1997国立国会図書館納本非流通図書 | クオリ／編 | クオリ | 98.10 | 2800 | B5 | 134p |
| 蒼山遊渓 | 西尾寿一 | ナカニシヤ出版 | 98. | 1800 | B6 | 406p |
| 続　ぎふ百山 | 岐阜新聞社・岐阜県山岳連盟／編 | 岐阜新聞社 | 98.10 | 5200 | B5 | 295p |
| 続・世界遺産　白神山地と共生思想 | 野添憲治・北川智彦／編 | 白神山地を考える能代の会 | 98.7 | 1800 | B6 | |
| 空飛ぶ山岳救助隊—ヘリ・レスキューに命を懸ける男・篠原秋彦 | 羽根田治 | 山と溪谷社 | 98.9 | 1600 | 四六判 | 253p |
| それぞれの山—東北 | 東北山岳写真家集団 | カルダイ | 98.6 | 1905 | 182×206 | ※写真集 |
| ソロ—単独登攀者・山野井泰史 | 丸山直樹 | 山と溪谷社 | 98.11 | 1500 | 四六判 | 286p |
| 台高の山と谷—ガイドエッセイ | 小島誠孝 | 山と溪谷社 | 98.7 | 1400 | A5 | 114p |
| 大雪山—'97年・山情報 | 層雲峡自然センター／編 | | 98.2 | 1200 | B5 | |
| 大雪山と丘の四季 | 高橋秀雄／撮影 | 総北海 | 98.1 | 2000 | 200×220 | ※写真集 |
| 大雪山の四季—精霊の大地から | 塩谷秀和／文・写真 | 実業之日本社 | 98.7 | 2000 | A5 | 198p |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大雪山を歩く | 伊藤健次／写真・文 | 山と溪谷社 | | 1748 | | |
| 大山・蒜山を歩く | 岡本良治／写真・文 | 山と溪谷社 | 98. 9 | 1750 | A5 | 143p |
| 大日本地誌大系　19～24・別巻 | 蘆田伊人／校訂 | 雄山閣 | 98. 4 | 46000 | A5 | ※7冊復刻 |
| タクラマカン縦断紀行 | 生島佳代子 | 連合出版 | 98. 11 | 1700 | B6 | 235p |
| 太刀の嶺高く―富山県山岳連盟創立50周年記念誌 | 富山県山岳連盟／編 | 富山県山岳連盟 | 98. 7 | —— | B5 | 171p |
| たった一人の山 | 浦松佐美太郎 | 平凡社 | 98. 3 | 900 | HL判 | 268p ※平凡社ライブラリー |
| ダッチ・オーヴンと行くロッキー山脈冒険ノート | 菊池仁志 | 雄鶏社 | 98. 5 | 1200 | A5 | 86p |
| 立山信仰と立山曼荼羅―芦峅寺衆徒の勧進活動 | 福江　充 | 岩田書院 | 98. 4 | 8200 | A5 | 389p |
| 立山・剣・白馬岳―後立山連峰 | 三枝輝雄・他 | 山と溪谷社 | 98. 6 | 1165 | B6 | 205p |
| 立山・剱岳を歩く | 鈴木昇己／技術指導 | 山と溪谷社 | | 1592 | | |
| 谷川岳を歩く | 竹内真一／写真・文 | 山と溪谷社 | 98. 4 | 1750 | A5 | 143p |
| 旅の回顧 | 黒石　恒 | 黒石　恒 | 98. 2 | —— | A5 | 59p ※画集 |
| 田淵行男―日本の写真家11 | 長野重一・飯沢耕太郎・木下直之／編 | 岩波書店 | 98. 9 | 2300 | B4変 | 71p |
| 多摩川を遡る | 中村吾郎 | 東洋書院 | 98. 1 | 1400 | B6 | 214p |
| ダライ・ラマの微笑―最新チベット事情 | 五十嵐文彦・牧野聖修 | 蝸牛社 | 98. 6 | 1500 | B6 | 183p |
| 探検 | 秋谷　豊 | 地球社 | 98. | 4000 | A5 | ※詩集 |
| 丹沢 | 渡辺千昭・山梨登高会 | 山と溪谷社 | 98. 5 | 1068 | B6 | 159p |
| 丹沢逍遥 | 植　成實 | 日本写真企画 | | 1905 | 200×225 | ※写真集 |
| 丹沢　山のものがたり | 山崎祐子・野村みつる／編 | 秦野市 | 98. 9 | 非売品 | A5 | 218p |
| 丹沢を歩く | 磯貝　猛／写真 | 山と溪谷社 | | 1553 | | |
| ダンプ、山を行く―ある山男の自画像 | 高橋和之 | 山と溪谷社 | 98. 2 | 1500 | 四六判 | 229p |
| 地球環境運動全史 | ジョン．マコーミック／著　石　弘之・他／訳 | 岩波書店 | 98. 10 | 3000 | B6 | 263p |
| 地形図探検隊 | 今尾恵介 | 自由国民社 | 98. 3 | 1600 | A5 | |
| 地図学用語辞典 | 日本国際地図学会地図用語専門部会／編 | 技報堂出版 | 98. 2 | 6600 | B6 | 515p |
| 地図の読み方―2万5000分の1 | 平塚晶人 | 小学館 | 98. 11 | 1600 | A5 | 191p |
| チベット入門 | ペマ．ギャルポ | 日中出版 | 98. 3 | 2500 | B6 | 252p ※改訂新版 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| チベット文化史 | ディビット．L．スネルグローヴ・ヒュー．E．リチャードソン／著　奥山直司／訳 | 春秋社 | 98．4 | 5500 | A5 | 437p |
| チャウチャウカンニルダ—秘境スピティ遠征の記録 | 群馬県高校教職員登山隊／編 | 群馬県高校教職員登山隊 | 98．6 | —— | B5 | 124p |
| 中央アルプス・御岳山・白山 | 垣外富士男・他 | 山と溪谷社 | 98．5 | 1165 | B6 | 183p |
| 中央アルプスを歩く | 津野祐次／写真・文 | 山と溪谷社 | | 1748 | | |
| 中央線駅から登る山—32コース・41展望の山 | 船尾　修 | けやき出版 | 98．6 | 1500 | A5変 | 221p |
| 中央線の山を歩く | 藤井寿夫 | 新ハイキング社 | 98．12 | 1600 | A5 | 284p |
| 中高年の安全登山 | 森下敏雄 | 静岡新聞社 | 98．7 | 1500 | B6 | 195p |
| 中高年のウォーキング登山入門 | 大垣晃一 | 三心堂出版社 | 98．7 | 1500 | A5 | 191p |
| 中高年のための登山医学—山のドクターがアドヴァイス | 大森薫雄 | 東京書籍 | 98．11 | 1500 | 四六判 | 243p |
| 中高年のための登山学—日本百名山をめざすII | 日本放送出版協会／編 | 日本放送出版協会 | 98．9 | 1000 | B5 | 166p |
| 中高年のための花の百名山—全国「花登山」魅力ガイド | 谷野正則／編 | 主婦と生活社 | 98．5 | 1200 | B5 | 146p |
| 中高年のための山の道具の選び方 | 吉野紳一 | 山海堂 | 98．4 | 1500 | A5 | 189p |
| 中高年の山散歩—関西・名古屋周辺 | 国際地学協会／編 | 国際地学協会 | 98．4 | 1400 | A5 | 159p |
| 中国・四国の山 | 山岳図書編集部／編 | 山と溪谷社 | 98．6 | 1553 | B6 | 307p |
| 鳥海山 | 大川清一 | カッパンプラン | 98．4 | 971 | 170×182 | ※写真集 |
| 朝天虹ヲ吐ク—志賀重昂『在札幌農学校第弐年期中日記』 | 亀井秀雄・松木博／編・著 | 北海道大学図書刊行会 | 98．6 | 7500 | A5 | 461p |
| チョ・オュー峰登頂報告書 | 泉州山岳会／編 | 泉州山岳会 | 98． | —— | A4 | |
| チヨマ ド ケーレスの生涯—ヨーロッパ最初のチベット学者 | 前田　崇／訳 | 山喜房佛書林 | 98．6 | 4500 | 四六判 | |
| 月の輪熊は山へ帰った—人とクマ、共生への道 | 米田一彦 | 大日本図書 | 98．9 | 1300 | 四六判 | 173p |
| 妻と二人の山歩き—五十歳からの初めての山 | 小浜浩三 | 光人社 | 98．3 | 1700 | B6 | 214p |
| 剱岳渇仰 | 佐伯邦夫 | 光村印刷 | 98．6 | 2200 | 200×220 | 59p ※写真集 |
| 徒然の山—日曜登山者の軌跡 | 服部　豊 | 新風舎 | 98．5 | 1200 | B6 | 111p |
| デス・ゾーン8848M—エヴェレスト大量遭難の真実 | アナトリ．ブクレーエフ・G．ウェストン．デウォルト／著　鈴木主税／訳 | 角川書店 | 98．8 | 1800 | 四六判 | 289p |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 天の刻 | 竹下光士 | 青菁社 | 98.12 | 3600 | AB変 | ※写真集 |
| 展望を楽しむ100山—関東近辺 | 岩崎元郎・他 | 有楽出版社 実業之日本社／発売 | 98.3 | 1900 | A5 | 215p |
| 冬期クライミング | 西村豊一・クライミングジャーナル編集部／編 | 白山書房 | 98.12 | 1800 | B6 | 237p |
| 東京周辺中高年の健康山歩き—岩崎元郎のおすすめ50コース | 弘済出版社／編 | 弘済出版社 | 98.5 | 1190 | 200×130 | 175p |
| 東京周辺ワンデイ・ハイク—特選1日コース | 浦池亨子・他 | 山と溪谷社 | 98.6 | 1456 | B6 | 271p |
| 東京・首都圏クルマで出かける山歩き | 野口悦男・中田真二 | 実業之日本社 | 98.9 | 1900 | A5 | 303p |
| 東京にある山里—檜原写真誌 | 平野　勝 | T.E.P けやき出版／発売 | 98.4 | 2800 | B5 | 193p ※写真集 |
| 東京付近の山—花と展望の23山域300コース | 実業之日本社／編 | 実業之日本社 | 98.11 | 3000 | A5 | 599p |
| 峠をあるく—落穂ひろい | 羽賀一蔵 | 羽賀一蔵 | 98.3 | —— | A5 | 151p |
| トゥジェ峰（6148M）初登頂—インド・ヒマラヤ・ラダック地方 | 中京山岳会／編 | 中京山岳会 | 98.11 | 1500 | A4 | 44p |
| 遠い頂—剱岳池ノ谷遭難報告と追悼集 | 岩峯登高会 | 岩峯登高会 | 98.12 | 非売品 | A5 | 280p |
| とやま民俗文化誌 | 富山民俗文化研究グループ／編 | シー・エー・ピー | 98.8 | 2200 | 四六判 | 269p |
| トレッキング桃源郷ブータン王国 | 伊藤幸男 | 北海道新聞社 | 98.2 | 2300 | A5 | 231p |
| 長野県の山—分県登山ガイド15 | 垣外富士男・津野祐次・池上　立・中山秀幸 | 山と溪谷社 | 98.9 | 1700 | A5 | 143p |
| 名古屋周辺ワンデイ・ハイク | 与呉日出夫 | 山と溪谷社 | 98.5 | 1165 | B6 | 207p |
| 夏山登山のためのトレーニングマニュアル | 石井明彦 | 枻出版社 | 98.4 | 1500 | A5 | 192p |
| 70歳、現役。山歩きリーダー　46歳から岩登り、47歳から山スキー | 喜多　亨 | 日本機関紙出版センター | 98.6 | 1400 | B6 | 300p |
| なまけものの山歩き | 三浦　洋 | 文芸社 | 98.2 | 1000 | B6 | 125p |
| ナムナニ峰登頂—ナムナニ峰登頂と3000キロ辺境の旅 | ナムナニ登山隊／編 | 日本山岳会福岡支部 | 98.8 | —— | 300 | 86p |
| ナンガ・パルバット1995—Keeping Trst with Nanga Parbat | 千葉工業大学ナンガ・パルバット登山隊1995／編 | 千葉工業大学山岳部ＯＢ会　成文堂／発売 | 98.7 | 2381 | B5 | 95p |
| 南極のスコット | 中田　修 | 清水書院 | 98.1 | 700 | B6 | 233p |
| 新潟県山岳協会創立50周年記念誌 | 新潟県山岳協会／編 | 新潟県山岳協会 | 98.1 | 非売品 | B5 | 196p |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 新潟の里山―低山ハイキングガイド | 高沢幸雄 | 新潟日報事業社 | 98.5 | 1600 | 四六判 | 187p |
| 新潟の低山藪山 | 羽田寿志 | 白山書房 | 98.8 | 1900 | B6 | 363p |
| 西丸震哉の日本百山 | 西丸震哉 | 実業之日本社 | 98.6 | 2000 | A5 | 438p |
| ニセコ―花とせせらぎの道 | 若林浩樹 | 北海道新聞社 | 98.6 | 1400 | A5 | 119p |
| 日本アルプスと上高地 | 市川健夫 | 大巧社 | 98.8 | 1200 | 新書判 | 206p |
| 日本語・モンゴル語基礎語辞典 | ダムバダルジャー, ナランツェツェグ | 大学書林 | 98.1 | 4200 | 170 | 329p |
| 日本人の冒険と探検 | 長澤和俊 | 白水社 | 98.10 | 4000 | A5変 | 456p |
| 日本人はどのように森をつくってきたのか | コンラッド, タットマン／著　熊崎実／訳 | 築地書館 | 98.8 | 2900 | A5 | 200p |
| 日本の渓谷　'97 | 白山書房編集部／編 | 白山書房 | 98.10 | 2000 | A5 | 265p |
| 日本の自然'98年版 | 朝日新聞社／編 | 朝日新聞社 | 98.10 | 4280 | B5 | 137p |
| 日本の地名　続 | 谷川健一 | 岩波書店 | 98.5 | 640 | 新書判 | 226p |
| 日本の名山　1　大雪山 | 串田孫一・今井通子・今福龍太／編 | 博品社 | 98.7 | 1600 | 四六変 | 252p |
| 日本の名山　3　月山 | 串田孫一・今井通子・今福龍太／編 | 博品社 | 98.2 | 1600 | 四六変 | 249p |
| 日本の名山　7　剣岳 | 串田孫一・今井通子・今福龍太／編 | 博品社 | 98.5 | 1600 | 四六変 | 252p |
| 日本の名山　11　御嶽山 | 串田孫一・今井通子・今福龍太／編 | 博品社 | 98.11 | 1600 | 四六変 | 252p |
| 日本の名山　18　白山 | 串田孫一・今井通子・今福龍太／編 | 博品社 | 98.3 | 1600 | 四六変 | 250p |
| 日本の名山　19　大山 | 串田孫一・今井通子・今福龍太／編 | 博品社 | 98.9 | 1600 | 四六変 | 251p |
| 日本の名山　20　阿蘇山 | 串田孫一・今井通子・今福龍太／編 | 博品社 | 98.1 | 1600 | 四六変 | 253p |
| 日本の山　1000 | 山と渓谷社／編 | 山と渓谷社 | 98.8 | 4757 | 200×210 | 766p |
| 日本百名山 | 山岳写真の会「白い峰」／著　白簱史郎／編 | 朝日新聞社 | 98.6 | 3800 | 250×260 | 189p ※写真集 |
| 日本百名山―記録写真集 | 大山恭司 | 大山恭司 | 98.5 | 非売品 | B5 | 83p |
| 日本百名山とふもとの名湯―最新らくらくコースガイド | 主婦の友社／編 | 主婦の友社 | 98.4 | 1400 | B5変 | 166p |
| 日本百名山と文化史 | 増田和彦 | 蒼洋社　おうふう／発売 | 98.10 | 1900 | B6 | 295p |
| 日本列島　名水を楽しむ旅 | 山下喜一郎 | 講談社 | 98.5 | 1900 | A4変 | 111p ※写真集 |
| ニュージーランド・ハイキング案内 | 滑田広志 | 山と渓谷社 | 98.3 | 3900 | B5 | 248p |
| 沼田市立図書館「尾瀬・森林文化関係資料目録（1998.3）」 | 沼田市立図書館／編 | 沼田市立図書館 | 98.3 | —— | A4 | 559p |
| ネパール―ヒマラヤトレッキング | 実業之日本社／編 | 実業之日本社 | 98.9 | 1760 | B6 | 279p |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ネパールの民話 | 萱村善彦・日月恭子／訳 | 竹林館 | 98.12 | 800 | 新書判 | |
| ネパールヒマラヤ写真紀行—我が山旅　国境を越えて | 藤松太一 | 藤松太一 | 98.1 | 4000 | | |
| 能海寛遺稿 | 能海　寛 | 五月書房 | 98.2 | 6000 | A5 | 255p |
| 野山の樹木観察図鑑—野生の木と林へのアプローチ | 岩瀬　徹 | 成美堂出版 | 98.6 | 1600 | A5 | 217p |
| のんびり山に陽はのぼる | 中村みつを | 山と溪谷社 | 98.5 | 1800 | A5 | 175p |
| ハイキング＋日帰り温泉—関西周辺 | 山と溪谷社大阪支局／編 | 山と溪谷社 | 98.2 | 1600 | A5 | 135p |
| ハイキング12ヶ月—東京周辺 | 石丸哲也／編 | 山と溪谷社 | 98.6 | 1262 | A5 | 135p ※改訂版 |
| ハイランド | 辻村伊助 | 平凡社 | 98.9 | 1100 | HL判 | 324p |
| 白山高山帯—白山の四季Ⅲ | 上馬康生 | 十月社 | 98.7 | 2200 | 200×228 | 95p ※写真集 |
| 長谷川恒男　虚空の登攀者 | 佐瀬　稔 | 中央公論社 | 98.5 | 838 | 文庫判 | 324p |
| パタゴニア—氷河・氷河地形・旅・町・人 | 安仁屋政武 | 古今書院 | 98.10 | 12000 | B5 | 349p |
| 八甲田・十和田フィールドガイド | 久末正明 | 泰斗舎 | 98. | 1905 | A5 | |
| 8201mの頂きに8人全員立った—チョー・オュー登山隊1996 | 札幌中央勤労者山岳会／編 | 札幌中央勤労者山岳会 | 98.1 | —— | A4 | 92p |
| 花の奥飛騨—奥飛騨から槍・穂高連峰 | 大森清孝／著・撮影 | ほおずき書籍　星雲社／発売 | 98.6 | 1000 | B6 | 99p |
| 花の低山—多摩・奥武蔵の山と丘陵21コース | 守屋龍男 | けやき出版 | 98.3 | 1800 | A5 | 150p |
| 花の山—秋田駒ヶ岳・乳頭山を歩く | 田沢湖町観光協会／編 | 田沢湖町観光協会 | 98.7 | 1200 | | |
| 花の山—八幡平の花 | 高橋秀洋／写真・文 | 熊谷印刷出版部 | 98.10 | 1429 | 182×110 | 135p |
| 早池峰・栗駒・鳥海山・焼石岳・月山を歩く | 早川輝雄・高橋金雄・町田　広・遊佐　悟／写真・文 | 山と溪谷社 | 98.5 | 1750 | A5 | 143p |
| 遥かなるサマルカンド | リュシアン．ケーレン／編 | 原書房 | 98.2 | 3800 | A5 | 344p |
| 遥かなるヌン峰 | 竹沢雄三・他／編 | 栃木県南地区山岳協議会インドヒマラヤ登山隊 | 98.1 | 非売品 | B5 | 99p |
| 遥かなる山Ⅱ—閑良屋会結成20周年記念 | 内田良平／監　閑良屋会／撮影 | 光村印刷 | 98.9 | 2800 | 240×250 | 69p ※写真集 |
| 晴れたら山へ—東京付近　花と展望の低山を歩く | 打田鍒一 | 実業之日本社 | 98.9 | 1800 | A5 | 240p |
| 磐梯・吾妻・安達太良・蔵王を歩く | 渡辺徳仁／写真・文 | 山と溪谷社 | 98.6 | 1750 | A5 | 143p |
| 板墨山話 | 堀越教之 | 穂高書店 | 98.10 | 2800 | | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 秘境の縦走路—穂高岳と後立山 | 前川整洋 | 白山書房 | 98.3 | 2000 | B6 | 214p |
| 日高山脈の四季 | 北海道新聞社／編 | 北海道新聞社 | 98.10 | 2300 | B5 | 135p ※写真集 |
| 日高路—やま花たび | 駒井千恵子／写真　三浦忠雄／文 | 北海道新聞社 | 98.5 | 1500 | A5 | 150p |
| ピッケル＆アイゼンワーク | 遠藤晴行 | 山と溪谷社 | 98.1 | 1200 | A5 | 99p |
| 櫃取湿原の四季 | 伊藤正逸／写真・文 | 岩手日報社 | 98.5 | 2140 | 180×210 | 103p ※写真集 |
| 人はなぜ山に登るのか—日本山岳人物誌 | 大森久雄・横山厚夫／編 | 平凡社 | 98.1 | 2300 | A4変 | 162p ※別冊太陽 |
| 独り山歩記—春夏秋冬 | 小林　肇 | 小林　肇 | 98.3 | 4800 | | ※写真集 |
| ヒドンピーク初登頂—カラコルムの秘峰8068メートル | ニコラス．B．クリンチ／著　薬師義美・吉永定雄／訳 | ナカニシヤ出版 | 98.4 | 3500 | 四六判 | 406p |
| ヒマラヤ空間を100倍楽しむ | 棚沢成明 | 山海堂 | 98.9 | 2500 | B6 | |
| ヒマラヤに学ぶ—未踏の大岩壁P29南西壁登山1978年の記録 | 田中文夫 | 田中文夫 | 98.3 | 非売品 | B5 | 283p |
| ヒマラヤの風に吹かれて—3隊35人の記録 | 宮原弘之／編 | ＪＲ東日本山岳会 | 98.2 | 非売品 | B5 | 218p |
| ヒマラヤ満天星 | 藤田弘基 | 平凡社 | 98.3 | 2200 | 180×230 | 82p ※写真集 |
| ヒマラヤを歩く | 熊谷　樫 | 白山書房 | 98.12 | 1800 | 四六判 | 223p |
| 百名山　山頂はいつも仲間と—「日本百名山」踏破25年湯けむりの山旅 | 西岡健二 | 日本機関誌出版センター | 98.7 | 1619 | B6 | 351p |
| 氷層の山 | 森下博三 | 新樹社 | 98.2 | 1800 | B6 | 197p |
| 比良・朽木の山を歩く | 山本武人／写真・文 | 山と溪谷社 | 98.5 | 1750 | A5 | 143p |
| 広島県の山—分県登山ガイド33 | 平田恒雄・岡本良治 | 山と溪谷社 | 98.7 | 1700 | A5 | 111p |
| 広島県百名山 | 中島篤巳 | 葦書房 | 98.10 | 1700 | 四六判 | 328p |
| ひろしま百山 | 広島県山岳連盟 | 中國新聞社 | 98.1 | 1800 | A5 | 233p |
| 秘話ある山河 | 岡田喜秋 | 平凡社 | 98.11 | 1100 | HL判 | 353p |
| ブータン—雲の国の子供たち | 高橋　洋 | 大東出版社 | 98.6 | 1700 | 菊判変 | ※写真集 |
| ブータン神秘の王国 | 西岡京治・西岡里子 | ＮＴＴ出版 | 98.11 | 1600 | B6 | 255p ※増補改題 |
| ブータンの民話と伝説 | クンサン．チョデン／著　今枝由郎・小出喜代子／訳 | 白水社 | 98.5 | 2300 | 四六判 | 234p |
| 福澤一郎の秩父山塊—池内紀のちいさな図書館 | 福沢一郎／著　池内　紀／編・解説 | 五月書房 | 98.9 | 1650 | B6 | 170p |
| 普賢岳 OFF LIMITS　立入禁止区域 | 古賀義章 | 平凡社 | 98.3 | 4200 | 250×260 | 107p ※写真集 |
| Fujisan | 荒木　光 | 光村印刷 | 98.1 | 1500 | 200×220 | 47p |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 富士山　1999 | 紅葉会／編 | 文一総合出版 | 98.12 | 3800 | 250×255 | 107p<br>※写真集 |
| 富士山周辺、駿遠の山 | 佐古清隆・平口善朗 | 山と溪谷社 | 98.5 | 1262 | B6 | 237p |
| 富士山展望百科 | 田代　博／監<br>「山と地図のフォーラム」／編 | 実業之日本社 | 98.12 | 2200 | A5 | 286p |
| 富士山とその周辺を歩く | 平田謙一／文・写真 | 山と溪谷社 | 98.7 | 1750 | A5 | 159p |
| 富士山に魅せられて七十年—素晴らしい山仲間に囲まれて | 渡辺正臣 | 渡辺フミ | 98.5 | 非売品 | A5 | 197p<br>※付録「各地にある富士山」 |
| 富士の強力—小俣彦太郎伝 | 寺林　峻 | 東京新聞出版局 | 98.7 | 1500 | 四六判 | 255p |
| 富士山の四季 | 松本　洋 | 八溝文化社 | 98.7 | 6500 | | ※写真集 |
| 富士山の精神史—なぜ富士山を三峰に描くのか | 竹谷靱負 | 青山社 | 98.8 | 2857 | A5 | 208p |
| ブナの木の下で語ろう—鼎談・21世紀をいかに生きるか | 中野孝次・井出孫六・高田　宏 | 信濃毎日新聞社 | 98.5 | 1700 | 四六判 | 232p |
| ブナの森と生きる | 北村昌美 | ＰＨＰ研究所 | 98.6 | 657 | 新書判 | 200p |
| フラム号北極海横断記 | フリッチョフ．ナンセン／著　太田昌秀／訳 | ニュートンプレス | 98.1 | 8500 | A4 | 418p |
| フリークライミングの真髄—誰も書かなかった教本 | 綿引英俊 | 東京新聞出版局 | 98.4 | 1400 | B6 | 207p |
| フリーダム—平山ユージの世界— | 飯山健治／写真 | 山と溪谷社 | 98.1 | 3800 | A4変 | 127p<br>※写真集 |
| ふるさと　吾妻山の植物 | 佐藤光雄 | 歴史春秋社 | 98.7 | 2381 | 四六判 | |
| 文明の中の辺境 | 金子民雄 | 北宋社 | 98.9 | 1900 | 四六判 | 241p |
| BERNINA　49・50—ベルニナ山岳会創立50周年記念号 | ベルニナ山岳会／編 | ベルニナ山岳会 | 98.4 | 非売品 | B5 | 224p |
| 伯耆大山 | 武並完治 | 東京新聞出版局 | 98.3 | 2600 | 250×260 | 71p |
| 伯耆大山天狗沢事故報告書　1998.2.22 | 広島山の会／編 | 広島山の会 | 98.4 | 非売品 | A4 | 29p |
| 冒険 | 植村直己 | 小学館 | 98.3 | 514 | 文庫判 | 286p<br>※小学館文庫 |
| 宝満山徹底ガイド | ふくおか自然に親しむ会／編・著 | 西日本新聞社 | 98.6 | 1800 | B6 | 196p |
| ぼくの山登りいつも雨 | 小野寺昭 | リヨン社　二見書房／発売 | 98.2 | 1500 | B6 | 254p |
| 北壁からのメッセージ | 長谷川恒男 | 中央公論社 | 98.7 | 590 | 文庫判 | 227p |
| 星野道夫の仕事　第1巻　カリブーの旅 | 星野道夫 | 朝日新聞社 | 98.9 | 4700 | 220×300 | ※写真集 |
| 北海道の火山—フィールドガイド日本の火山3 | 高橋正樹・小林哲夫／編 | 築地書館 | 98.9 | 2000 | B6 | 152p |
| 北海道の山と谷　上—北海道の山の全てが判る登山のガイドブック | 「北海道の山と谷」再刊委員会／編・著 | 北海道撮影社 | 98.12 | 2000 | A5 | 232p |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 北海道森を知る | 森林総合研究所北海道支所／編 | 北海道新聞社 | 98.4 | 1600 | B6 | 282p |
| 北極圏からの手紙 | 山内正敏 | 鉱脈社 | 98.8 | 1800 | 四六判 | 373p |
| ホワイトアウトの世界で—北極海横断・犬ぞりの旅 | 高野孝子 | 国土社 | 98.6 | 1300 | 四六判 | 197p |
| マイカー登山　関越・上信越道 | 山と溪谷社／編 | 山と溪谷社 | 98.5 | 1700 | A5 | 126p |
| マイカー登山　常磐・磐越・館山道 | 山と溪谷社／編 | 山と溪谷社 | 98.11 | 1700 | A5 | 126p |
| マイカー登山　中国道 | 山と溪谷社／編 | 山と溪谷社 | 98.7 | 1600 | A5 | 135p |
| マイカー登山　東北・山形道 | 山と溪谷社／編 | 山と溪谷社 | 98.3 | 1700 | A5 | 126p |
| マイカー登山　東名高速道 | 山と溪谷社／編 | 山と溪谷社 | 98.4 | 1700 | A5 | 126p |
| マイカー登山　北陸自動車道 | 山と溪谷社／編 | 山と溪谷社 | 98.7 | 1600 | A5 | 136p |
| マイカー登山ベストコース関西周辺 | 山と溪谷社大阪支局／編 | 山と溪谷社 | 98.4 | 1553 | A5 | 135p |
| マウンテン・ヴォイス—山が呼んでいる | 日本山岳写真集団／編・著 | 情報センター出版局 | 98.4 | 2800 | A5 | 221p |
| 松枯れ白書—松枯れの主因は大気汚染 | 松本文雄 | メタ・ブレーン | 98.4 | 1800 | A5 | 254p |
| 松本深志高等学校山岳部創部80年記念誌 | 松本深志高等学校山岳部／編 | 松中・深志山岳部ＯＢ会 | 98.7 | 非売品 | B5 | 126p |
| 弥陀ケ原散策 | 高橋敬市 | アートフォトギャラリー・ＮＡＴＵＲ | 98.1 | 1500（税込） | 170×182 | ※写真集 |
| みちくさを楽しむ山旅—関東 | 津波克明 | 昭文社 | 98.7 | 1429 | A5 | 159p |
| 道なき渓への招待—沢登り大全 | 高桑信一 | 東京新聞出版局 | 98.8 | 1400 | 四六判 | 271p |
| みちのく岩木津軽富士—山のはなしあれこれ | 三浦章男 | 北方新社 | 98.8 | 1800 | 220 | 218p |
| 三峯神社史料集　第７巻 | 横山晴夫／編・著 | 三峯神社社務所　続群書類従完成会／発売 | 98.7 | 9000 | A5 | 430p |
| 南アルプス | 村松正文・他 | 山と溪谷社 | 98.5 | 1262 | B6 | 219p |
| ミニヤコンカ初登頂—ヒマラヤの東・横断山脈の最高峰 | Ｒ.Ｌ.バードソル・他／著　山本健一郎／訳 | ナカニシヤ出版 | 98.3 | 2500 | 四六判 | 258p |
| 美濃の山　第３巻—木曽川水系の山 | 大垣山岳協会／編 | ナカニシヤ出版 | 98.11 | 2500 | 四六判 | 300p |
| 宮崎県の山歩き | 吉川　満 | 葦書房 | 98.6 | 1700 | 四六判 | 330p |
| 結び方百科—百種類以上のノットとロープワークの実用写真ガイド | デス．ボースン／著　手塚　勲／訳 | 山と溪谷社 | 98.6 | 2000 | A5 | 160p |
| MERA PEAK 登山報告書 | 東京山旅倶楽部／編 | 東京山旅倶楽部 | 98. | —— | B5 | |
| 森が消えるとき | 高田　宏 | 徳間書店 | 98.4 | 533 | 文庫判 | 285p |
| 森にあそぶ—飯山市鍋倉山の四季を追う | 望月良男・望月道子 | 自費出版館ＰＰＢＳ | 98. | 2800 | 210×257 | ※写真集 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 森に通う | 高田　宏 | 創森社 | 98.1 | 1524 | 四六判 | 252p |
| 森の神々と民俗 | 金田久璋 | 白水社 | 98.10 | 2400 | 四六判 | 301p |
| 森の散歩道—関東周辺の森歩き27選 | 保健同人社／編 | 保健同人社 | 98.4 | 1300 | A5 | 127p |
| 森の生活—ウォールデン | ヘンリー．D．ソロー／著　真崎義博／訳 | 宝島社 | 98.11 | 857 | 文庫判 | 454p |
| 森を調べる50の方法 | 日本林業技術協会／編 | 東京書籍 | 98.2 | 1300 | B6 | 239p |
| 森をつくる人々—素人山仕事かく楽しめり | 浜田久美子 | コモンズ | 98.9 | 1800 | B6 | 238p |
| 八重山ひとり旅 | たけざわまさのり | 明窓出版 | 98.8 | 1200 | B6 | 180p |
| 屋久島の環境民俗学—森の開発と神々の闘争 | 中島成久 | 明石書店 | 98.9 | 2500 | 四六判 | 215p |
| 八ガ岳・北八ガ岳 | 新妻喜永 | 山と溪谷社 | 98.5 | 1068 | B6 | 175p |
| 八ヶ岳日ノ岳ルンゼ雪崩事故報告書 | わらじの仲間／編 | わらじの仲間 | 98.9 | —— | A4 | 31p |
| 山ありて幸い—はみ出し役人の山小屋再建その後 | 加藤司郎 | 白山書房 | 98.8 | 1500 | 四六判 | 240p |
| 山ある記—大きさと厳しさ・美しさと優しさ | 池田　澄 | 林野弘済会 | 98.11 | 2400 | A4 | 140p<br>※写真集 |
| 山歩きの自然学—日本の山50座の謎を解く | 小泉武栄 | 山と溪谷社 | 98.7 | 1800 | A5 | 142p |
| 山恋い—穂苅三寿雄遺稿集 | 穂苅三寿雄 | 穂苅貞雄 | 98.3 | —— | 200 | 194p |
| 山が学校だった | 辻谷達雄 | 洋泉社 | 98.3 | 1900 | B6 | 222p |
| 山が好き人が好き—平凡な主婦が七つの教室と山の会を主宰するまで | 鈴木淑子 | 鈴木淑子　山と溪谷社／発売 | 98.7 | 1500 | B6 | 253p |
| 山形・ぼくの山物語—ある高校教師の登山随想 | 高梨直英 | 無明舎出版 | 98.8 | 1500 | 四六判 | 186p |
| 山からの絵本 | 辻まこと | 創文社 | 98.11 | 3200 | B5 | |
| 山小屋に生きる | 手塚宗求 | 春秋社 | 98.7 | 1900 | 四六判 | 229p |
| 山と峠とけものみち | 服部　豊 | けやき出版 | 98.10 | 1200 | B6 | 210p |
| 山との出会い—山の随筆集 | 富田弘平／編 | 新ハイキング社 | 98.2 | 1600 | B6 | 325p |
| 山と野原を歩く—高知の山野66 | 山と野原の会／編・著 | 高知新聞社　高知新聞企業／発売 | 98.12 | 1714 | A5 | 175p |
| 山梨百名山 | 山梨日日新聞社編集局／編 | 山梨日日新聞社 | 98.4 | 2400 | A5 | 213p |
| 山の朝霧　里の湯煙 | 池内　紀 | 山と溪谷社 | 98.9 | 1600 | 四六判 | 254p |
| 「山のアトリエ」にて | 上野憲一 | 新風舎 | 98.2 | 1100 | B6 | 86p |
| 山の贈りもの | 宮城絢子 | 新風舎 | 98.10 | 1600 | B6 | 179p |
| 山の学校からのメッセージ | 窪井新次郎 | 東洋館出版社 | 98.7 | 1200 | B6 | 286p |
| 山の考古学 | 茂木雅博／編 | 雄山閣出版 | 98.4 | 2200 | B5 | 103p<br>※季刊考古学 |
| 山の自然学 | 小泉武栄 | 岩波書店 | 98.1 | 660 | 新書判 | 232p |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 山の自然を未来まで—青少年尾瀬国際フォーラム報告書 | 日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト／編 | 日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト | 98. | —— | A4 | |
| 山のスケッチブック　仲間たちへ—原田達也遺作集 | 原田真知子／編 | 原田達也遺作集編集委員会事務局 | 98. 8 | 3000 | A5 | 181p |
| 山の精—Breathing on Mt. Kirishima | 徳森　繁 | 光琳社出版 | 98. 11 | 2000 | A5 | |
| 山の断章—adagio | 高橋良行 | 光村印刷 | 98. 3 | 1500 | 170×180 | ※写真集 |
| 山のトラブル体験マニュアル | 中井正則 | 中井正則　山と溪谷社／発売 | 98. 12 | 1200 | B6 | 215p |
| 山の俳句歳時記 | 岡田日郎／編・著 | 梅里書房 | 98. 11 | 2800 | B6 | 291p ※新訂 |
| 山の名著30選—モダンアルピニズムをリードした知性たち | 福島功夫 | 東京新聞出版局 | 98. 11 | 1400 | 四六判 | 262p |
| 山はいいなぁ元気になるよ | 山内　賢 | リヨン社　二見書房／発売 | 98. 6 | 1500 | B6 | 268p |
| 山は知っている—環太平洋一周環境調査登山の記録 | 日本山岳会東海支部／編 | マック出版 | 98. | 2400 | B5 | 189p |
| 山は晴天 | 小西政継 | 中央公論社 | 98. 4 | 686 | 文庫判 | 312p |
| 山は私の学校だった | 今井通子 | 山と溪谷社 | 98. 5 | 1500 | B6 | 261p |
| 山びとの動物誌　紀州・果無山脈の春秋 | 宇江敏勝 | 新宿書房 | 98. 6 | 2200 | B6 | 333p |
| 遊牧の世界—トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から | 松原正毅 | 中央公論社 | 98. 7 | 933 | 文庫判 | 426p |
| 悠悠山歩　花と俳句で綴る山のバラード | 神崎裕治 | 野間出版　星雲社／発売 | 98. 1 | 1600 | B6 | 378p |
| 雪の住処30年の記録 | 日本ヒマラヤ協会／編 | 日本ヒマラヤ協会 | 98. 1 | 3500 | B5 | 423p |
| 落日の山 | 荒賀憲雄 | ナカニシヤ出版 | 98. 3 | 2500 | A5 | 229p |
| 龍山人の石鎚山麓昔話 | 平井辰夫 | 創風社出版 | 98. 10 | 1800 | 200 | 172p |
| ロープウエイで行く楽楽2時間登山—花・紅葉・温泉・美味……欲ばり山歩きベスト60コース | 油井由行 | 主婦と生活社 | 98. 7 | 1300 | A5 | 143p |
| 六郷満山物語 | 中谷都志郎 | 大分合同新聞社 | 98. 10 | 2800 | A4 | 143p |
| ロッククライミング・タクティクス50 | 遠藤由加 | 山と溪谷社 | 98. 6 | 1200 | 210×140 | 101p |
| わが思索の旅—文学・音楽・山 | 宮澤　泰 | 宮澤　泰 | 98. 3 | —— | B6 | 242p |
| わが剱岳 | 畠山　高 | 東京新聞出版局 | | 2800 | 240×250 | ※写真集 |
| 和州吉野郡群山記　その踏査路と生物相 | 御勢久右衛門／編・著 | 東海大学出版会 | 98. 2 | 10000 | B5 | 282p |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| わたしたちの森林づくり | 森林クラブ／編 | 信山社サイテック　大学図書／発売 | 98.2 | 1800 | A5 | 176p<br>※新装版 |
| わたしの一名山—ICI石井スポーツとっておきの山大賞作品集 | 「わたしの一名山」事務局／編 | 双葉社 | 98.6 | 1750 | B6 | 317p |
| わたしの博物誌 | 串田孫一／文　辻まこと／画 | みすず書房 | 98.8 | 8500 | B5 | ※画文集 |
| わたしの百名山—山と酒と温泉と | 日下部雅昭 | 朝日新聞社 | 98.5 | 2500 | A5 | 315p |
| 私の南アルプス | 不破哲三 | 山と溪谷社 | 98.4 | 1700 | A5 | 245p |
| わっさかわっさか沢歩き記録集—近畿編 | 同人・わっさかわっさか沢歩き／編 | ナカニシヤ出版 | 98.9 | 2500 | 四六判 | 244p |
| 和仏山岳用語研究 | 村西博次／編・著 | 京都山の会出版局　ナカニシヤ出版／発売 | 98.4 | 3000 | B6 | ※「分類山岳用語集・和仏山岳用語集」合本 |




## トレッキングからエクスペディションまで。

ALPINE TOUR

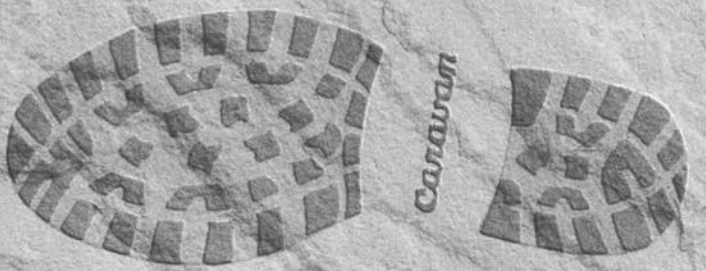
アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、USA、南極、アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地域への主催ツアーやインフォメーションを用意しております。もちろん日本国内の山旅も企画しております。トレッキングのパッケージはもとより登山隊のための航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験をもとにご相談に応じることができます。ぜひ、お問合せ下さい。

運輸大臣登録旅行業第490号　日本旅行業協会正会員

**アルパインツアーサービス株式会社**

| | | |
|---|---|---|
| 東　京 | 〒105-0003　東京都港区西新橋1-12-1（西新橋1森ビル2階） | ☎03（3503）1911 |
| 大　阪 | 〒550-0004　大阪市西区靱本町1-10-22（ポロロッカビル4階） | ☎06（6444）3033 |
| 名古屋 | 〒450-0002　名古屋市中村区名駅3-23-6（第2千福ビル8階） | ☎052（581）3211 |
| 福　岡 | 〒810-0073　福岡市中央区舞鶴1-2-8（セントラルビル5階） | ☎092（715）1557 |
| 広　島 | 広島サービスステーション（大阪支店転送電話） | ☎082（542）1660 |
| 仙　台 | 仙台サービスステーション（東京本社転送電話） | ☎022（265）4611 |
| 札　幌 | 〒060-8582　札幌市東区北9条東2丁目　北海道地区総代理店（株）りんゆう観光 | ☎011（711）7106 |

着実な一歩一歩、
それはキャラバンの歴史そのもの。




Caravan®
CAMP
LEKI
Mountain NOTES®
Grandking®
GARMONT
Jack Wolfskin
Caravan®

(株)キャラバン／東京本社:〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1-25-7
☎(03)3944-2331(代)／大阪(06)6866-0505／札幌(011)822-8664／福岡(092)414-0795

軽く、コンパクトなテントのことなら

# ARAI TENT

㈱アライテント

〒175-0092 東京都板橋区赤塚5-13-7 Tel.03（3939）6481




お求めは……
全国の専門店、アウトドアショップで

尾西食品株式会社

〒108-0073 東京都港区三田4-15-36 TEL.03-3452-4020（代）

# ソフトフィットで快適ウォーキング！

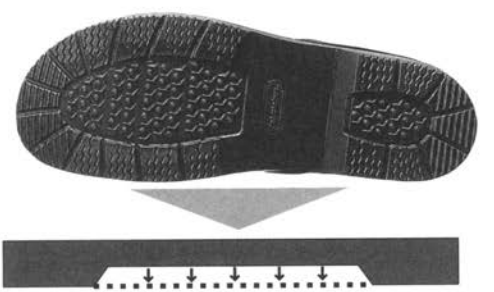


標準小売価格
15,800円

旅で、街で、長時間歩いても疲れを感じさせないウォーキングシューズ——ENTERTAINER FOR TRAVELLING（エンターテイナー フォートラベリング）。
雨の日の濡れた歩道や地下街のタイルも安心して歩ける高いノンスリップ性、足入れがスムーズなオブリークラスト、ソフトなフィット感など、「歩きやすさ」を徹底的に追及した逸品です。

ソールの中心部がへこんでいますから、体重がかかると吸盤のように底の接地面が大きくなり、ノンスリップ性が高まります。

## 吸盤構造だから高いノンスリップ性！



ENTERTAINER
FOR TRAVELLING

★カタログは80円切手1枚同封の上、下記にご請求ください。

弘進製靴（株）　ウェスト・フォワード事業部
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5丁目5の2
電話03（3226）7361（代）

M·KATAGIRI
SINCE 1914
TOKYO JAPAN

# 山と山スキーの専門店

クレッターザック
キスリング
夏冬用テント
イギリス、オーストリア・
オリジナルセーター

片桐

〒113-0034 東京都文京区湯島3-38-9
Tel 03(3831) 1 7 9 4
FAX 03(3831) 6 6 8 0

# 信頼されて70年

TAKAHASHI

山靴の店 たかはし

(月曜日定休)
A.M. 11:00～P.M. 8:00
日・祭日A.M. 12:00～P.M. 7:00

〒160-0008 東京都新宿区三栄町2-14
長谷ハウス101号
TEL 03-3351-1912

【画文集】

# 画歴の山々



## 穂高からヒマラヤへ

**増田欣子**

四六判上製
1800円

穂高涸沢から世界の屋根ヒマラヤ各地へ、そして故郷涸沢へ回帰する山岳巡礼を絵筆とペンで活写した画文集！

## 山の花めぐり

**加藤明文**
3200円

600点のカラー写真で味わう列島縦断・高山植物の山旅。「花の百名山」の田中澄江さん推薦!!

串田孫一の本

## 四季の無言歌

串田孫一

うつろう四季折々の自然を見つめる、透徹した詩人のまなざし。百六十七の断章からなる随想集！●1800円

## もう登らない山

串田孫一

もう登らない山だからこそ、自然の真の姿が見えることがある。豊潤で深遠な世界が拡がる随想。●2718円

手塚宗求の本

## 霧ケ峰花物語

**手塚宗求**［オール・カラー］
●2000円

写真＝三宅修／鈴木康夫／竹内敏…他

信州霧ケ峰高原に暮らして四十余年、自然と共に歩んできた生活の背景には、常に花があった。哀歓に富んだ掌篇とカラー写真が繰り広げる、花に彩られた山暮しの日々。

## 高原の花物語

●2718円

## 高原の野鳥物語

●2718円

## 高原の音楽譜

●1748円

## 山里の食物譜

●1700円

※最寄りの書店にご注文ください。（価格は消費税別）

●宅配（着払い）のご注文は電話かFAXまたはハガキで。（宅配料380円）

〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-10-10

☎03-3238-0181 FAX03-3238-0084 電話受付＝9:15～17:00 月～金（祝祭日を除く）

恒文社 販売局 コレクト便係 FAXの場合は、書名、冊数、氏名、住所、電話番号を明記のうえ送信ください。

# 覆刻 日本の山岳名著 第1集 - 第2集

社団法人　日本山岳会［編］

**分売いたします**

| | |
|---|---|
| ● 小島烏水「日本アルプス」全4巻 | 定価50400円 |
| ● 槇有恒「山行」 | 定価6825円 |
| ● 大島亮吉「山――研究と随想」 | 定価6300円 |
| ● 板倉勝宣「山と雪の日記」 | 定価3150円 |
| ● 藤木九三「雪・岩・アルプス」 | 定価8400円 |
| ● 武田久吉「尾瀬と鬼怒沼」 | 定価8400円 |
| ● 辻村伊助「スウィス日記」 | 定価9450円 |
| ● 辻村伊助「ハイランド」 | 定価6825円 |
| ● 小島烏水「氷河と萬年雪の山」 | 定価8400円 |
| ● 伊藤秀五郎「北の山」 | 定価7350円 |
| ● 今西錦司「山岳省察」 | 定価3150円 |
| ● 解題書「覆刻 日本の山岳名著解題」 | 定価4725円 |
| ● 谷文晁「名山圖譜」全3巻 | 定価27300円 |
| ● 播隆上人「迦多賀嶽再興記」 | 定価4515円 |
| ● 播隆上人「信州鎗嶽峯縁起」 | 定価2520円 |
| ● 松浦武四郎「石狩日誌」 | 定価5250円 |
| ● 松浦武四郎「乙酉掌記」 | 定価7350円 |
| ● 高島北海「歐洲山水奇勝」 | 定価23100円 |
| ● 野中至「富士案内」 | 定価2625円 |
| ● 河口慧海「西藏旅行記」全2巻 | 定価13650円 |
| ● 小島烏水「山水無盡藏」 | 定価3150円 |
| ● 鹿子木員信「ヒマラヤ行」 | 定価2625円 |
| ● 東京帝大山の会編「劔澤に逝ける人々」 | 定価5250円 |
| ● 吉江喬松「山岳美觀」 | 定価2625円 |
| ● 尾崎喜八「山の繪本」 | 定価9450円 |
| ● 大島亮吉「先蹤者」 | 定価9450円 |
| ● 京大白頭山遠征隊編「白頭山」 | 定価4200円 |
| ● 小島烏水「アルピニストの手記」 | 定価9975円 |
| ● 竹節作太「ナンダ・コット登攀」 | 定価6825円 |
| ● 足立源一郎「山に描く」 | 定価4725円 |
| ● ウェストン「Playground of The Far East」 | 定価9450円 |
| ● 別巻 中村清太郎「山岳礼拝」 | 定価9450円 |
| ● 解題書「新選覆刻日本の山岳名著解題」 | 定価5250円 |
| ● 日本山岳会「會報」第1～100号覆刻合本 | 定価12600円 |
| ● 日本山岳会「會報」第101～200号覆刻合本 | 定価14700円 |
| ● 特別資料 播隆上人筆「鎗ヶ嶽繪圖」 | 定価840円 |

**槍ヶ岳開山播隆**［増訂版］穂刈三寿雄・穂刈貞雄 著
A5判・上製・函入・334頁　本体3800円

**遥かなり エヴェレスト**　島田　巽 著
――マロリー追想――　四六判・並製・294頁　本体1800円

大修館書店

書店にない場合やお急ぎの方は、直接ご注文ください。Tel.03-5999-5434



# 人はなぜ山に登るのか

日本山岳人物誌

別冊太陽〈日本のこころ103〉




編：大森久雄・横山厚夫

先人たちは何を想い、何に魅入られて山を目指したのか。役行者に始まり、志賀重昂、高頭仁兵衛、小島烏水、深田久弥、辻村伊助ら、山に魅せられた80余名の山と人生を紹介。

●2,300円

**平凡社ライブラリー**

日本アルプス　登山と探検　ウォルター・ウェストン　訳：岡村　精一　●1,359円

わが山旅五十年　ウォルター・ウェストン　訳：水野　勉　●1,359円

アルピニストの手記……田部重治　●1,359円

山からの言葉……小島烏水　●951円

黒部渓谷……辻まこと　●738円

冠松次郎　●1,359円

●価格は全て税別本体価格です

〒152-8601 東京都目黒区碑文谷5-16-19 ☎03-5721-1234 振替00180-0-29639 平凡社

# 旅するあなたのサポート隊

パッケージツアー、グループ・トレッキング等は 西遊旅行 が、
格安航空券は キャラバンデスク が、皆様のお手伝いをいたします。



ランタン・リルンとシャクナゲの花(ネパール)

## 秘境の地へ
## 世界の山々へ



ブータン・チョモラリトレッキングにて



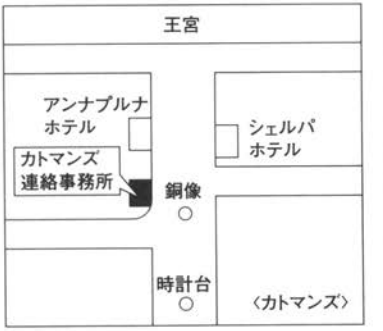




JAI・HIMAL TREKKING社長
ラビ・パウデル

ネパールではカトマンズ連絡事務所の社員が、皆様のお世話をいたします。

トレッキング部門は、JAI・HIMAL TREKKINGが、一般観光部門はSAIYU・TRAVELがそれぞれ皆様のお手伝いをいたします。スタッフは日本語も話せますので、お気軽にご利用ください。




～ 地球の果てまでお手伝い ～
ディスカウント航空券の専門相談室

**キャラバンデスク**
東京☎03-3237-8384(代)
大阪☎06-6362-6060(代)

シルクロード・秘境旅行・トレッキング・海外登山のパイオニア

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

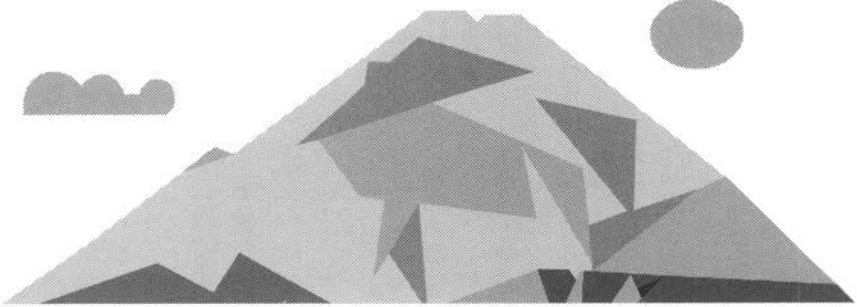
**株式会社 西遊旅行**
(さいゆうりょこう)

本　　社　〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1 岩波書店アネックス5F
☎ 03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396
キャラバンデスク東京　(格安航空券の専門デスクです)(住所同上)
☎ 03(3237)8384(代) FAX 03(3237)0638
大阪営業所　〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F
☎ 06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966
キャラバンデスク大阪　☎ 06(6362)6060(代)(住所・FAX同上)
カトマンズ連絡事務所　P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
(JAI HIMAL TREKKING) ☎ 224248, 221707 (アンナプルナホテル並び)

## 日本の主要山域をカバー

# 山と高原地図

毎年シーズン前に入念な実踏調査を実施。
信頼と安心の本格派登山地図です。



1 利尻・羅臼・斜里・阿寒
2 ニセコ・羊蹄山
3 大雪山・十勝岳・幌尻岳
4 十和田・八甲田・岩木山
5 八幡平・岩手山・秋田駒
6 栗駒・早池峰
7 蔵王・面白山・船形山
8 鳥海山
9 朝日・出羽三山
10 飯豊山
11 磐梯・吾妻・安達太良
12 那須・塩原
13 日光・奥鬼怒・奥日光
14 尾瀬
15 越後三山
16 谷川岳・苗場山・武尊山
17 志賀高原・草津
18 妙高・戸隠
19 軽井沢・浅間
20 赤城・皇海・筑波
21 西上州・妙義
22 奥武蔵・秩父
23 奥多摩
24 大菩薩連嶺
25 奥秩父1 雲取山・両神山
26 奥秩父2 金峰山・甲武信
27 高尾・陣馬
28 丹沢
29 箱根
30 伊豆
31 富士・富士五湖
32 八ヶ岳・蓼科
33 美ヶ原・霧ヶ峰
34 北アルプス総図
35 白馬岳
36 鹿島槍・黒部湖
37 剱・立山
38 上高地・槍・穂高
39 乗鞍高原
40 御嶽山
41 中央・南アルプス総図
42 木曽駒・空木岳
43 甲斐駒・北岳
44 塩見・赤石・聖岳
45 白山
46 霊仙・伊吹・藤原
47 御在所・鎌ヶ岳
48 比良山系
49 京都北山1
50 京都北山2
51 京都西山
52 北摂の山々
53 六甲・摩耶・有馬
54 葛城高原・二上山
55 金剛山・岩湧山
56 紀泉高原
57 大峰山脈
58 大台ヶ原 大杉谷・高見山
59 赤目・倶留尊高原
60 氷ノ山・鉢伏・神鍋
61 大山・蒜山高原
62 四国剣山
63 石鎚山
64 福岡の山々
65 阿蘇・九重
66 祖母・傾
67 霧島 開聞岳
68 屋久島・種子島

**定価750円（税込） お求めは全国の書店で**

エアリアマップ
昭文社
SHOBUNSHA

〒102-8238 東京都千代田区麹町3-1 ☎03(3556)8111(代)
〒532-0011 大阪市淀川区西中島6-11-23 ☎06(6303)5721(代)
《インターネットで情報発信中》 http://www.mapple.co.jp/

# 実業之日本社の山と旅の本

価格表示は本体価格で、別途消費税が必要になります。

**山は魔術師**—私の山岳写真—
田淵行男　B5判函入／4369円

**黒部の山賊**—アルプスの怪—
伊藤正一　B6判／1165円

**車窓の山旅・中央線から見える山**
山村正光　A5変型判／1903円

**展望の山旅**—山から見る山・町から見る山—
藤本一美・田代博編著　A5変型判／1903円

**続・展望の山旅**—町から見る山・山から見る山—
**続々展望の山旅**—山から見る山・町から見る山—
藤本一美・田代博編著　A5変型判／各1942円

**カメラの山旅**—山の写真とカメラハイク12カ月—
川口邦雄　A5変型判／1942円

**西丸震哉の日本百山**
西丸震哉　A5変型判／2000円

**花の山旅・みちのくの山**
一戸義孝　A5変型判／2200円

**心に残る花の山旅**—とっておきの花の山・エーデルワイス咲く山—
坂倉登喜子　A5変型判／2200円

**スケッチの山旅12カ月**
山里寿男　A5変型判／2330円

**山の写真12カ月**—四季のベストコースとカメラワーク—
中西俊明　A5判／2500円

**山の写真塾**—自然を見る撮る楽しむ「分割法」—
佐藤篤志　A5変型判／2500円

**きのこの森の歩き方**
赤沼博志　A5変型判／2000円

**樹林の山旅**—関東・甲信・南会津の山歩き—
浅野孝一　A5変型判／1800円

**花の北アルプス**—高嶺に咲く花々—
菊12取判／1500円

**自然派写真読本**
川口邦雄　A5判／2000円

**パソコンで楽しむ山と地図**—マルチメディアの山旅—
山と地図のフォーラム編著　A5判／2000円

**北の山里に生きる**—みちのくの自然と人生—
根深　誠　四六判／1700円

●ご注文は最寄りの書店へお願いします。お急ぎの場合は代金引換宅配便もご利用いただけます。
注文センターアサカ＝TEL 048-478-0203へ、直接お電話ください。
〒104-8233 東京都中央区銀座1-3-9／TEL03-3535-4441／振替00110-6-326

新世紀の山岳文化をリードする

## 東京新聞＆岳人の本

### 快楽登山のすすめ

原　真
本体1700円

「ガイドに連れられて登る山のどこが楽しい！」

### 彼ら「挑戦者」

大蔵喜福
本体1359円

飽食の時代に敢えて限界に挑むヤングクライマー列伝。

### さわやかに山へ

田部井淳子
本体1500円

世界的な女性登山家が、初心者とアルプス、ヒマラヤなどを歩き、山の楽しみのこつを伝授。

### 山岳警備隊、出動せよ！

富山県警察山岳警備隊
本体1359円

山岳警備隊の草分け富山県山岳警備隊の命懸けの救助活動の実録。

### 山の名著30選

福島功夫
本体1400円

国内外の山の名著を気鋭の登山史研究家が再評価する。

### 花と歴史の山旅

田中澄江
本体1214円

胸をおどらせて訪ね歩いた、花と歴史の山旅ガイド。

### 百名山からの眺望〈CG版〉

石垣博史
石垣修司
本体1700円

国土地理院のデータをもとに立体図化した山名ガイド。

### 中高年登山なんでも百科

福島正明
本体1500円

より安全により快適に登山を楽しもう。

### 私でも登れた百名山

高橋哲雄
本体1400円

58歳からチャレンジした記録。モデルプラン付き。

### すぐ役立つ山の雑学

岳人編集部
本体1400円

大自然の中では雑学がモノを言う。

### すぐ役立つこれで安心登山術

岩崎元郎
本体1262円

山岳ガイドによる中高年登山入門書。

### 新版　登山の医学

J・A・ウイルカーソン
本体2039円

米国で大ロングセラー「山の救急解説書」の完全翻訳。

＊価格は本体価格。別途消費税がかかります。

東京新聞出版局(中日新聞東京本社) 〒108-8010 港区港南2-3-13 ☎03(3740)2674 FAX 03(3458)0689

**全国各地の美味・珍味を満載。**

**取り寄せて味わうもよし、**

**贈り物にもよしの、**

**便利な産直ガイド。**

北海道から沖縄まで、代表的な名産と珍味を都道府県別に紹介。好物・おいしいものを取り寄せたいとき、お中元、お歳暮などの贈答用のカタログとして、旅先での買い物、お土産のガイドとして、いろいろに活用できる便利な本。

## 名産・珍味

美味探究会 編

# 全国うまいもの 1・2・3

ふるさと宅配便

1・2・3とも

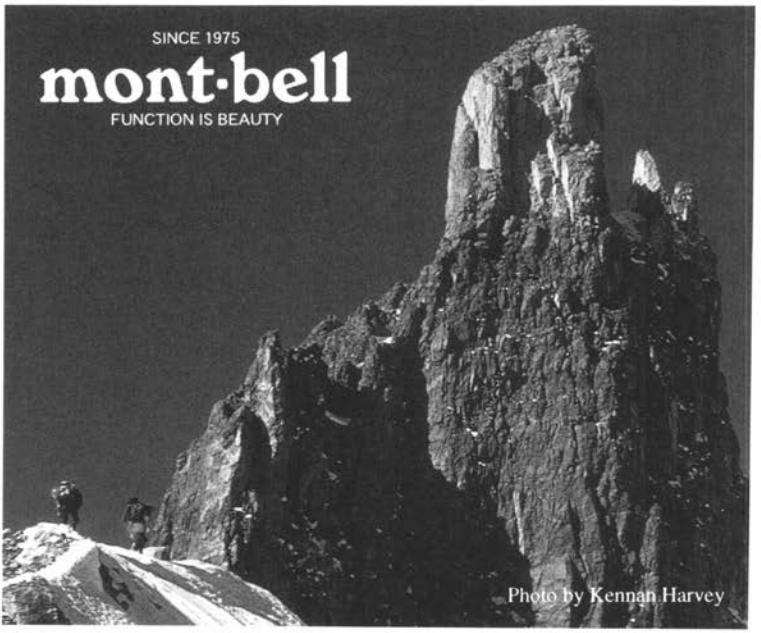
**定価(本体1,500円+税)**

**1・2・3それぞれ全国うまいもの180を厳選して紹介!**

北海道＝たらばガニ・新巻鮭／青森＝にしん飯寿司／秋田＝比内鶏きりたんぽ／岩手＝南部そば／宮城＝笹かまぼこ／山形＝香味牛肉／福島＝ウニの貝焼／新潟＝大力納豆／富山＝ホタルイカ墨作り／石川＝加賀麩／福井＝ひらめの昆布じめ／栃木＝刺身こんにゃく／群馬＝下仁田葱／茨城＝あんこう鍋／千葉＝塩ゆで落花生／埼玉＝秩父源流水／東京＝べったら漬／神奈川＝丹沢そば／山梨＝信玄煮貝／長野＝馬かった／静岡＝わさび漬／愛知＝鮮魚味醂粕漬／三重＝伊勢海老／岐阜＝鮎うるか／滋賀＝桑酒／京都＝すぐき／大阪＝水なす漬／奈良＝地ビール・倭王／和歌山＝封じ梅／兵庫＝山の芋／岡山＝浜ゆでシャコ／広島＝鯛の浜焼／鳥取＝砂丘山芋／島根＝島津屋海苔／山口＝ふぐぞうすい／香川＝鰆の魚漬／徳島＝たらいうどん／高知＝黒潮鰹たたき／愛媛＝きじ鍋／福岡＝柚乃香／佐賀＝いかしゅうまい／長崎＝焼あご／大分＝天然活き車海老／熊本＝馬刺／宮崎＝やまめの甘露煮／鹿児島＝かつおの腹皮／沖縄＝ゴーヤー　他多数

**富士書店**

東京都文京区本郷4丁目1-14
電話 03-3814-0498　FAX. 03-3814-9250



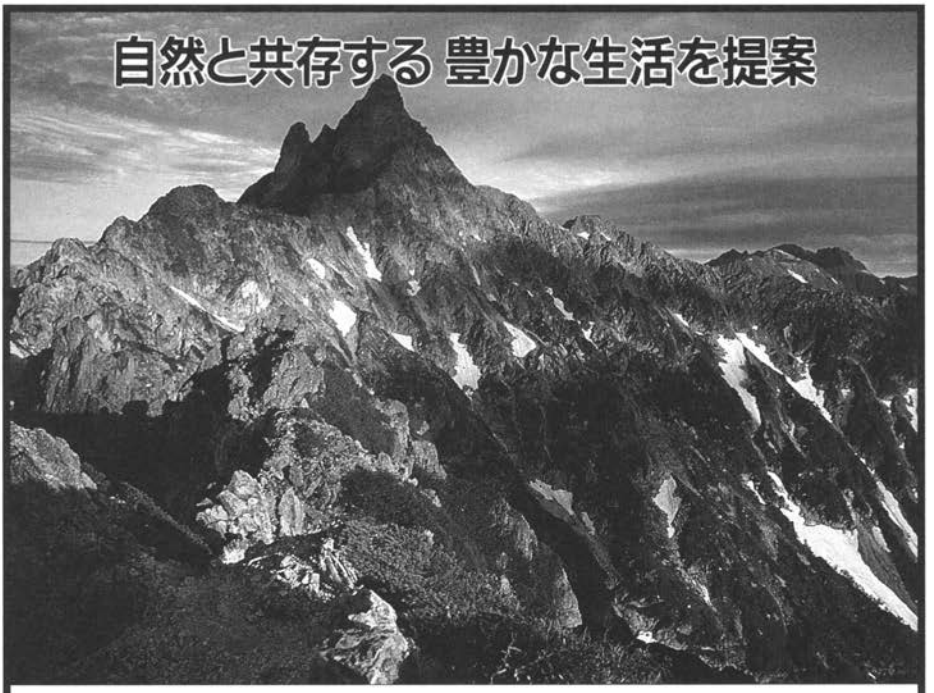

# 山を愉しむ。

登り慣れた山、いつものルート。
初めてトライする山、未知のルート。
山はいつも快適な環境でアタックできるとは限りません。
雨の降り続ける夏の宮之浦岳。
刺すような風が吹きつける厳冬の剣岳。
どんな状況下でも快適に山を楽しむこと。
そんなアルピニストの素朴な願いをかなえてくれるのが、
モンベルのアルパインクライミング・クロージング。
全てのアルピニスト達にお届けします。

● **高機能クロージング満載。「1999～2000秋冬クロージングカタログ」をお届けします。**ご希望の方は、封書に1冊500円分の切手を同封し、住所、氏名、電話番号及び"1999～2000秋冬クロージングカタログ希望"とご記入上、本社〈コシューマ・山岳94カタログ係〉までお送り下さい。

商品、カタログについてのお問い合わせはコンシューマサービスまで TEL.06-6536-5740

株式会社モンベル
大阪本社 / 〒550-0013 大阪市西区新町1-33-20 TEL:06-6531-4761 FAX:06-6531-4969
東京営業所 / 〒150-0012 東京都渋谷区広尾1-15-3 TEL:03-3445-5401 FAX:03-3445-5415




●山登りの話題と情報を満載した月刊誌

# 山と溪谷

毎月15日発売／定価820円

●ビギナーのためのビジュアルな登山誌

# ヤマケイJOY

2・5・6・8・11月発売／定価990円

「山と溪谷」一ヵ年分9840円(送料は無料、特大号値上げ分サービス)、「ヤマケイＪＯＹ」一ヵ年分4950円(送料は無料、５冊)、振替または現金書留で「山と溪谷○月号より」「ヤマケイＪＯＹ○号より」と指定のうえ住所・氏名を明記して営業部宛お送り下さい。

山と溪谷社

※定価は税込みです

〒105-8503 東京都港区芝大門1-1-33/☎03(3436)4055・FAX03(3433)4057

《ホームページアドレス》 http://www.yamakei.co.jp/

# 山の本

新　刊

田口二郎

## 山の生涯

### ―来し方行く末 上

A５判 360頁　口絵４頁

上製函入 8,500円＋税

40年ぶりの復刊

## 山で唄う歌1.

戸野　昭
朝倉　宏　編

A６ポケット判

61曲　950円＋税

（出版図書目録拝送、お申込み下さい。）

# 山の絵

足立源一郎　スケッチ
淡彩　日本の山々

あべ　みつこ　孔版
富士見八ヶ岳山麓

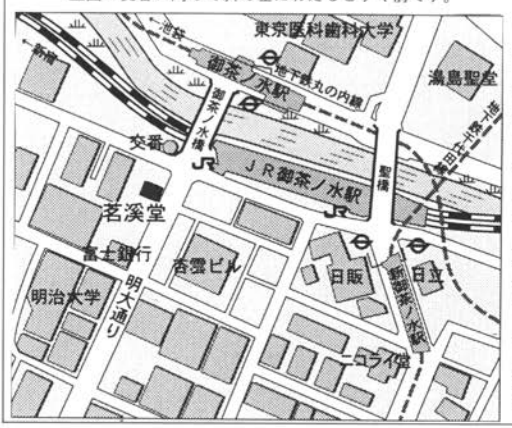
一原　有徳　凹版
メタリックな北の山

熊谷　樫　リトグラフ
山の花

松山　忠弘　水彩
北海道の山々

坂本　直行　淡彩
絵はがき　１～４集

JRお茶の水駅西口下車、駅前のスクランブル信号を
正面の交番に向って斜め左にわたるとすぐ前です。





茗渓堂

●売場ご案内
営業時間＝11a.m.－7p.m.
定休日＝日曜・祝日
山の本の売場はビルの3階です。
入口は1Fのテナントと同じです。
奥の階段をお上り下さい。

〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台2-1-11
TEL 03-3291-2811(代)
FAX 03-3295-2043
E-mail meikeido@din.or.jp
郵便振替 00180-2-24723

## 編集後記

・本誌の活字組みが、主に9ポ1段組みと、8ポ2段組みの形になって四十年以上になる。第七十九年からは、8ポ組みの部分がそれまでの22行から24行組みになり、やや活字を詰めこんだ感じになったが、それはそれとして『山岳』のイメージとしてすっかり定着してきたといえる。しかし、本会会員の高齢化もさることながら、編集子もご多分にもれず高齢化で、最近では8ポ活字の校正が何ともつらくなってきた。数ページも読むと目が疲れてきて、文字に集中できなくなる。編集者としてはもうお払い箱、とのシグナルである。そんなこともあり、ここ二〜三年、活字をもう少し大きくすべく試行錯誤を重ね、昨年から8ポ組みの部分を8・5ポ22行組みとしたのだが、如何であろうか。本誌の伝統的イメージを保ちながらも、かなり読み易い誌面になったのではないかと思うのだが。（南川）

・今年は理事改選の年だったため、新しい編集委員会の発足は五月末となった。遅いスタートに加え、私は海外出張のため編集作業の山場に日本を空けざるを得ず、にもかかわらず予定どおりに今号を作ることができたのは南川委員長はじめ編集委員の皆さんの頑張りのお陰である。今号の委員と担当は次のとおりである。

高遠　宏（担当理事）、南川金一（総括・ボナッティ・田部重治・秩父宮山岳賞・追悼・岩田論文）、関塚貞亨（会務報告・小岩論文）、児玉　茂（海外の山・書評）、大関義明（支部だより・図書目録）、永田弘太郎（海外の山・書評）、小浜浩三（海外の山・書評）、渡部温子（会務報告）。

（高遠）

山岳　第九十四年（通巻一五二号）
一九九九年十二月四日発行
価三五〇〇円
発行所　社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビューハイツ四番町
（〒一〇二―〇〇八一）
電話　〇三―三二六一―四四三三
振替口座　〇〇一三〇―一―四八二九
発行人　大塚博美
編集人　高遠　宏
印刷所　株式会社　技報堂
発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二―一
電話　〇三―三二九一―九四四二
振替口座　〇〇一八〇―二―二四七三三

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

大好きな自然を、ゆっくりと楽しみたい

# ATLAS TREK

ビギナーのための山旅から、未知の魅力を秘めた国々へ、そしてエクスペディションまで、それぞれのニーズにお応えし、新鮮でユニークな手づくりの山旅をコーディネイトします。


Manaslu


Sagalmatha


Nanda Devi


Qomolangma


Kangchenjunga


Namcha Barwa

☆世界各地、日本の名峰へのトレックツアー、各種手配旅行、登山隊、航空券等々を取扱っております。

●お問合わせ・お申込みは　運輸大臣登録旅行業第1167号

**株式会社アトラストレック**

〈東京〉03-3341-0030(代)
東京都新宿区三栄町23番地
FAX：03-3341-9200

〈大阪〉06-6946-9111(代)
大阪市中央区谷町3-4-5中央谷町ビル501号
FAX：06-6940-3799

〈北海道地区総代理店〉株式会社ノマド
011-261-2639(代)
札幌市中央区南2条西6丁目一関ビル1F・2F
北海道知事登録旅行業第2-249

ISSN 0286-7508

The Journal of

The Japanese Alpine Club

# SANGAKU

Vol. 94

1999